福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅰ

五ヶ山・小川内

― 福岡県那珂川町五ヶ山・佐賀県吉野ヶ里町小川内における文化財調査１ ―

福岡県文化財調査報告書 第215集

〔第１巻〕

２００８

福岡県教育委員会

五ヶ山ダム施工地航空写真〔福岡県五ヶ山ダム建設事務所提供〕

1　五ヶ山・網取
南畑ダム
一ノ岳城跡
（南から）

2　五ヶ山・網取
（北から）

3　五ヶ山・桑河内
（西から）

4　五ヶ山
（北から）

5　小川内
五ヶ山・東小河内
（北西から）

6　五ヶ山・東小河内
小川内
（南東から）

7　小川内
（北東から）

8　小川内大野
（東から）

9　五ヶ山・東小河内
（南から）

10　五ヶ山・大野
（北西から）

国境石（1：標石1，2：標石2，3：標石3，4：標石4）

序

福岡県では昭和53年から同54年にかけては降雨量が少なく、特に福岡都市圏では未曾有の異常渇水に見舞われました。この非常事態を受けて、渇水対策を含めた多目的ダムとして計画されたのが五ヶ山ダムです。

その後、県の実施計画調査を経て、昭和63年にダム建設事業が国に採択され、平成３年にはダム軸が決定されました。

この五ヶ山ダムの建設に伴って、福岡県那珂川町の４集落と、佐賀県東脊振村［現吉野ヶ里町］１集落の、計５集落66世帯が影響を受けることとなったため、福岡県教育委員会ではこの地域に関わる歴史や民俗・建造物・美術工芸などの文化財について、周囲の自然とともに記録保存を図るべく、平成14年度から指導委員会を設置して調査を実施してまいりました。

延べ４年間にわたる調査は地元の皆さんの御協力を得て順調に進捗し、その成果を収録したのが本書であります。

福岡県と佐賀県の66世帯の方々がこれまで暮らしてきたふるさとの姿は大きく変貌していきますが、そのふるさとでの暮らしの一端が本書に収録され、それが長く子々孫々にまで伝えられていくことは喜ばしいことであります。また、この調査結果は当該分野の研究にも寄与することと存じます。

調査に御協力いただいた皆さん、そして関係者の皆さんに衷心より感謝申し上げます。

平成20年３月31日

福岡県教育委員会教育長

森　山　　良　一

例　言

1　この報告書は、福岡県教育委員会が五ヶ山ダムの建設に先だって実施した、自然、歴史、民俗、建造物、美術工芸の各部門にわたる文化財の調査成果をまとめたものであり、五ヶ山ダム関係文化財調査報告書の１冊目に当たる。

2　この調査は、福岡県教育委員会が福岡県土木部河川開発課から執行委任を受けて平成14年度から平成19年度まで実施した。

3　五ヶ山ダムは福岡県が計画し建設事業を進めてきたが、そのダム軸は福岡県筑紫郡那珂川町大字五ヶ山に位置するものの、貯水域並びに影響範囲は五ヶ山地内のみならず佐賀県神埼郡吉野ヶ里町［旧東脊振村］大字松隈の小川内にも及ぶ。よって、文化財の調査に際しては、福岡県と佐賀県双方の推薦による委員をもって「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」を組織し、事務局は福岡県教育庁総務部文化財保護課に置いた。

4　調査対象地は、福岡県筑紫郡那珂川町大字五ヶ山地内の網取・桑河内・東小河内・大野の４集落と、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町［旧東脊振村］大字松隈の小川内集落、及びその周辺地である。

5　東脊振村は平成18年（2006）３月１日に三田川町と合併して吉野ヶ里町となった。本書では必要に応じて［旧東脊振村］又は［現吉野ヶ里町］といった表記を用いる。

6　本書に掲載した航空写真（巻頭１～６）は福岡県五ヶ山ダム建設事務所の委託により東亜航空技研（株）が平成12年６月に撮影したものについて、承諾を得て使用した。また一部の写真は大庭武雄氏、山田善寛氏、西村哲也氏の提供のものがある。ほかは調査担当者及び伊崎が撮影したものを用いている。

7　本書の図面の浄書には豊福弥生によるものがある。

8　本書に収録したのは、埋蔵文化財以外の、自然・歴史・民俗・建造物・美術工芸の各部門の調査成果である。執筆者は以下のとおりであり、各文末にも記した。

Ⅰ．序論……〔伊崎〕

Ⅱ．【自然部門】……地形・地質・鉱物、植物、動物等
〔宮島寛・東和敬・井上晋・下山正一・川野良信・柚原雅樹・永渕成樹〕

Ⅲ．【歴史部門】……歴史（史料）、地名（地誌）、文書など
〔服部英雄・吉良国光・松原孝俊・吉田洋一・本田佳奈〕

Ⅳ．【民俗部門：五ヶ山編】……村落生活、生産・生業等〔佐々木哲哉・松村利規・寺崎直利〕

Ⅴ．【建造物部門：五ヶ山編】……民家・神社・寺院等　〔山野善郎〕

Ⅵ．【民俗部門：小川内編】……村落生活、生産・生業等〔佐々木哲哉・中西裕二・谷智子〕

Ⅶ．【建造物部門：小川内編】……民家・神社・寺院等　〔佐藤正彦〕

Ⅷ．【美術工芸部門】……仏像・仏教美術（絵画）、梵鐘、絵馬等〔錦織亮介〕

Ⅸ．特論……〔佐々木哲哉〕

Ⅹ．結語……〔伊崎〕

Ⅺ．【資料編】……文書資料解題、翻刻資料等〔吉田洋一・本田佳奈〕

9　編集は関係者の支援のもとに伊崎が行った。

本文目次

〔第１巻〕

Ⅰ　序論

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査組織 …… 6

3　調査経過 …… 13

4　歴史的環境 …… 21

Ⅱ　自然部門

1　地形・地質・鉱物 …… 39

2　植物 …… 57

3　動物 …… 99

Ⅲ　歴史部門

1　中世の脊振山について …… 111

・脊振山関係中世史料集 …… 125～168

2　国境の村々・五ヶ山の歴史 …… 169

3　五ヶ山の地名と地誌 …… 193

4　小川内の地名と地誌 …… 228

5　五ヶ山・小川内　昭和点描 …… 241

〔第２巻〕

Ⅳ　民俗部門：五ヶ山編

1　五ヶ山の生活立地 …… 261

2　網取 …… 267

3　桑河内 …… 291

4　大野 …… 313

5　東小河内 …… 327

6　道十里 …… 345

Ⅴ　建造物部門：五ヶ山編

1　総説 …… 369

2　民家個別解説 …… 393

3　神社・寺院 …… 487

〔第３巻〕

Ⅵ　民俗部門：小川内編

1　小川内の生活立地 …… 495

2　小川内 …… 498

Ⅶ　建造物部門：小川内編
1　東脊振村小川内地区の概要 …… 523
2　民家 …… 532
3　宗教建築ほか …… 609

〔第４巻〕

Ⅷ　美術工芸部門
1　五ヶ山・小川内の美術工芸 …… 643
2　作品目録 …… 645
Ⅸ　特論
1　炭焼きと山林業 …… 707
Ⅹ　結語 …… 713
Ⅺ　【資料編】
1　文書資料解題 …… 721
2　翻刻資料 …… 741～804
1　大正十五年四月五日　東脊振村農会 …… 801～803
2　昭和五年度　小川内区事務報告　小川内区長 …… 795～800
3　昭和五年度　区費決算報告　小川内区 …… 793～795
4－1　昭和五年二月以降　収入及預り金控帳　小川内区 …… 791～792
4－2　昭和六年度区当座帳　小川内区長 …… 775～790
5　小川内区現在戸数控　小川内区　昭和五年～昭和八年 …… 769～774
6　区長日誌　昭和六年一月一日～昭和十年 …… 756～768
7　昭和七年度　小川内区歳出歳入決算書 …… 753～755
8　製炭農事実行組合規約 …… 751～752
9　五ヶ山区規則 …… 741～750
3　文書資料一覧 …… 805～865
1　武廣邦敏家文書 …… 806～829
2　進藤直文家文書 …… 830～843
3　大石久一家文書 …… 844～859
4　山田善寛家文書 …… 860～865
4　民俗資料一覧 …… 866～870

図版目次

〔第１巻〕

巻頭図版

巻頭１　五ヶ山ダム施工地航空写真〔福岡県五ヶ山ダム建設事務所提供〕
巻頭２　１　五ヶ山・網取　南畑ダム　一ノ岳城跡（南から）
　　２　五ヶ山・網取（北から）
巻頭３　３　五ヶ山・桑河内（西から）
　　４　五ヶ山（北から）
巻頭４　５　小川内　五ヶ山・東小河内（北西から）
　　６　五ヶ山・東小河内　小川内（南東から）
巻頭５　７　小川内（北東から）
　　８　小川内大野（東から）
巻頭６　９　五ヶ山・東小河内（南から）
　　10　五ヶ山・大野（北西から）
巻頭７　国境石（１：標石１，２：標石２，３：標石３，４：標石４）

Pho.1　脊振ダム遠景……xiv
Pho.2　南畑ダム……xiv
Pho.Ⅰ1-1　那珂川上流の清流……1
Pho.Ⅰ1-2　南畑ダム……1
Pho.Ⅰ2-1　第１回指導委員会……12
Pho.Ⅰ2-2　第４回指導委員会……12
Pho.Ⅰ3-1　小川内地区離村式・小川内小学校廃校式典……13
Pho.Ⅰ3-2　東脊振トンネル開通式……13
Pho.Ⅰ3-3　小川内公民館にて聞き取り調査……14
Pho.Ⅰ3-4　小川内調査風景……14
Pho.Ⅰ3-5～11　東小河内の水田風景……20
Pho.Ⅰ4-1-1　脊振山と小川内集落……21
Pho.Ⅰ4-1-2　脊振山上宮……21
Pho.Ⅰ4-1-3　虎頭（正面から）……22
Pho.Ⅰ4-1-4　虎頭（横から）……22
Pho.Ⅰ4-1-5　蛤水道水源付近……23
Pho.Ⅰ4-1-6　蛤水道……23
Pho.Ⅰ4-1-7　栄西禅師像……24
Pho.Ⅰ4-1-8　小川内の石垣・茶樹……24
Pho.Ⅰ4-1-9　稚児落しの滝……24
Pho.Ⅰ4-1-10　かぐめ石……24
Pho.Ⅰ4-2-1　白土城跡……30
Pho.Ⅰ4-2-2　南畑ダムと一ノ岳城跡（鉄塔左）……30
Pho.Ⅰ4-2-3　一ノ岳城石垣……30
Pho.Ⅰ4-2-4　国境石（標石４）清掃中……30
Pho.Ⅰ4-2-5　氷倉……31
Pho.Ⅰ4-2-6　肥前・筑前街道……31
Pho.Ⅰ4-2-7　国境石（標石２）……35
Pho.Ⅰ4-2-8　国境石（31・32）……35
Pho.Ⅰ4-4-1　南畑ダムと「垂乳根薬師の大銀杏」……37
Pho.Ⅰ4-4-2　大野の山茶花……37
Pho.Ⅰ4-4-3～5　「小川内の杉」……38
Pho.Ⅱ1-1-1　七曲峠からみた小川内谷（縦谷）……43
Pho.Ⅱ1-1-2　小川内谷（小川内小学校付近）……43
Pho.Ⅱ1-1-3　古い断層（白色粘土）……43
Pho.Ⅱ1-1-4　筑紫耶馬溪（横谷）……43
Pho.Ⅱ1-1-5　緩斜面をつくる古期山麓堆積物……44
Pho.Ⅱ1-1-6　低位段丘面（小川内小学校）……44

Pho.Ⅱ1-1-7　低位段丘堆積物（砂礫層）…… 44
Pho.Ⅱ1-1-8　河川争奪の跡（大野）…… 44
Pho.Ⅱ1-1-9　球状岩塊（東小河内）…… 44
Pho.Ⅱ1-2-1　大野に産する角閃岩の産状と薄片写真 …… 51
Pho.Ⅱ1-2-2　糸島花崗閃緑岩の産状と薄片写真 …… 51
Pho.Ⅱ1-2-3　早良花崗岩細粒相の産状と薄片写真 …… 52
Pho.Ⅱ1-2-4　早良花崗岩主岩相の産状と薄片写真 …… 52
Pho.Ⅱ1-2-5　調査地域にみられる断層や破砕帯 …… 53
Pho.Ⅱ1-2-6　大野金探鉱跡の様子１ …… 53
Pho.Ⅱ1-2-7　大野金探鉱跡の様子２ …… 54
Pho.Ⅱ1-2-8　小川内金探鉱跡の様子 …… 54
Pho.Ⅱ1-2-9　金探鉱跡周辺の変質花崗岩の産状及び薄片写真 …… 55
Pho.Ⅱ2-1-1　小川内集落と「小川内の杉」 …… 66
Pho.Ⅱ2-1-2　小川内のスギ …… 68
Pho.Ⅱ2-1-3　杉谷のスギ …… 68
Pho.Ⅱ2-1-4～8　「小川内の杉」（７はクローン、８はH16.10.20の台風で折れた枝）…… 69
Pho.Ⅱ2-1-9　杉谷のスギ …… 70
Pho.Ⅱ2-1-10　脊振山頂のスギ …… 70
Pho.Ⅱ2-1-11　脊振登山道のスギ …… 70
Pho.Ⅱ2-1-12～14　脊振登山道のスギ（14は両童子スギ）…… 71
Pho.Ⅱ2-1-15　脊振神社のスギ …… 72
Pho.Ⅱ2-1-16　雷山観音スギ …… 72
Pho.Ⅱ2-1-17　大山住神社のスギ …… 72
Pho.Ⅱ2-1-18～20　浮岳南方のスギ（18：２号木、19：５号木、20：３・４号木）…… 73
Pho.Ⅱ2-1-21～23　弁財天のスギ …… 74
Pho.Ⅱ2-1-24　かざまつさんのスギ …… 74
Pho.Ⅱ2-1-25・26　苣木のスギ …… 75
Pho.Ⅱ2-1-27　鹿路神社のスギ …… 75
Pho.Ⅱ2-1-28　井泉スギ …… 75
Pho.Ⅱ2-1-29　英彦山の鬼スギ …… 76
Pho.Ⅱ2-1-30　英彦山天狗スギ …… 76
Pho.Ⅱ2-1-31　若杉山太祖神社のスギ …… 76
Pho.Ⅱ2-1-32　若杉山大和の大スギ …… 76
Pho.Ⅱ2-2-1～24　陸産貝類 …… 110
Pho.Ⅲ1-1　小川内集落遠景 …… 119
Pho.Ⅲ1-2　脊振山から小川内・五ヶ山をのぞむ …… 119
Pho.Ⅲ2-2-1　一の岳城（鉄塔左）…… 173
Pho.Ⅲ2-2-2　白土（猫）城 …… 173
Pho.Ⅲ2-3-1　早良郡絵図 …… 178
Pho.Ⅲ2-3-2　脊振山・脊振ダム …… 179
Pho.Ⅲ2-3-3　五ヶ山 …… 179
Pho.Ⅲ2-3-4　脊振山と南麓 …… 183
Pho.Ⅲ2-3-5　五ヶ山・小川内 …… 183
Pho.Ⅲ2-3-6　那珂郡絵図 …… 187
Pho.Ⅲ2-3-7　立（楯）岩 …… 192
Pho.Ⅲ2-3-8　国境石の調査 …… 192
Pho.Ⅲ3-1-1　網取・山神社 …… 198
Pho.Ⅲ3-1-2　網取・山神社境内 …… 198
Pho.Ⅲ3-2-1　桑河内：聞取り調査 …… 203
Pho.Ⅲ3-2-2　桑河内風景 …… 203
Pho.Ⅲ3-3-1　東小河内：山神社 …… 210
Pho.Ⅲ3-3-2　国境石 …… 210
Pho.Ⅲ3-4-1　大野：聞取り調査 …… 218
Pho.Ⅲ3-4-2　大野での聞取り …… 218
Pho.Ⅲ4-1　小川内・宗雲商店 …… 235
Pho.Ⅲ4-2　小川内・東光寺 …… 236
Pho.Ⅲ4-3　小川内小学校旧校舎 …… 236

Pho.Ⅲ4-4　小川内・山祇神社 …… 237
Pho.Ⅲ4-5　小川内・山祇神社狛犬 …… 237
Pho.Ⅲ4-6　たたり石 …… 238
Pho.Ⅲ4-7　小川内集落（H15.10月）…… 240
Pho.Ⅲ4-8　小川内集落（H19）…… 240
Pho.Ⅲ4-9　小川内大野集落（H16.2月）…… 240
Pho.Ⅲ4-10　小川内大野集落（H19）…… 240
Pho.Ⅲ5-1　小川内での聞取り調査 …… 247
Pho.Ⅲ5-2　東小河内にて …… 247
Pho.Ⅲ5-3　小川内にて …… 251
Pho.Ⅲ5-4　雪の小川内・山祇神社 …… 251
Pho.Ⅲ5-5　肥前・筑前街道 …… 255
Pho.Ⅲ5-6　国境石 …… 255
Pho.Ⅲ5-7　五ヶ山小学校跡地 …… 258
Pho.Ⅲ5-8　五ヶ山小学校の碑 …… 258

〔第２巻〕

Pho.Ⅳ2-1　網取：荒神様の苗 …… 272
Pho.Ⅳ2-2　網取：米の保存 …… 272
Pho.Ⅳ2-3　網取：納骨堂 …… 282
Pho.Ⅳ2-4　綾部神社の風止め …… 282
Pho.Ⅳ2-5　網取：力石 …… 282
Pho.Ⅳ2-6　網取：神棚 …… 285
Pho.Ⅳ2-7　網取：山神社の竹の鳥居 …… 285
Pho.Ⅳ2-8　網取：山神社 …… 285
Pho.Ⅳ2-9　網取：船地蔵のお堂 …… 285
Pho.Ⅳ2-10　網取：船地蔵 …… 285
Pho.Ⅳ3-1　桑河内：観音堂 …… 311
Pho.Ⅳ3-2　桑河内：観音像 …… 311
Pho.Ⅳ3-3　桑河内：お茶講 …… 311
Pho.Ⅳ3-4　桑河内：お茶講 …… 311
Pho.Ⅳ3-5　桑河内：お茶講 …… 311
Pho.Ⅳ3-6　桑河内：弁財天 …… 311
Pho.Ⅳ3-7　桑河内：大師堂 …… 312
Pho.Ⅳ3-8　桑河内：大師像 …… 312
Pho.Ⅳ3-9　桑河内：地蔵 …… 312
Pho.Ⅳ4-1　大野：千度参り（日吉神社）…… 320
Pho.Ⅳ4-2　大野：千度参りで境内を回る人々（同左）…… 320
Pho.Ⅳ4-3　大野：奉納された葉を数える（同上）…… 320
Pho.Ⅳ4-4　大野：数えられ奉納された千枚の葉（同左）…… 320
Pho.Ⅳ4-5　輪越しの大綱を作製（那珂川町中ノ島公園）…… 321
Pho.Ⅳ4-6　カヤをねじり巻き付ける（同左）…… 321
Pho.Ⅳ4-7　輪型にして鳥居にかける（同上）…… 321
Pho.Ⅳ4-8　神事（那珂川町日吉神社拝殿）…… 321
Pho.Ⅳ4-9　大野：御座の際の供え物（大野集会所）…… 322
Pho.Ⅳ4-10　大野：御座（同左）…… 322
Pho.Ⅳ4-11　大野：お日待ちの供え物（大野集会所）…… 324
Pho.Ⅳ4-12　大野：お日待ちの際につくる餅（同左）…… 324
Pho.Ⅳ4-13　大野：お日待ちの酒宴（同上）…… 324
Pho.Ⅳ4-14　大野：供え物の鯛を焼いて骨酒にする（同左）…… 324
Pho.Ⅳ4-15　大野：弁財天祭の際の床の間。脊振神社の札を立て赤飯を供える（大野集会所）…… 325
Pho.Ⅳ4-16　大野：おこもり（同左）…… 325
Pho.Ⅳ5-1　東小河内：御座（東小河内集会所）…… 340
Pho.Ⅳ5-2　東小河内：座元を決める籤の準備（同左）…… 340
Pho.Ⅳ5-3　東小河内：座元を決める籤引き（同上）…… 340
Pho.Ⅳ5-4　東小河内：座元の決定（同左）…… 340
Pho.Ⅳ5-5　東小河内：集会所の床の間。米・鯛・餅を供える（東小河内集会所）…… 340

Pho.Ⅳ5-6　東小河内：歓談の様子（同左）…… 340
Pho.Ⅳ5-7　東小河内：弁財天祭り（東小河内集会所）…… 342
Pho.Ⅳ5-8　東小河内：弁財天祭りでは年祝いの人が振舞いをする（東小河内集会所）…… 342
Pho.Ⅳ5-9　東小河内：秋彼岸（東小河内納骨堂）…… 342
Pho.Ⅳ5-10　東小河内：納骨堂内で納経（同左）…… 342
Pho.Ⅳ5-11　東小河内：納骨堂内の飾り付け（同上）…… 342
Pho.Ⅳ5-12　東小河内：住職も交えて飲食（東小河内集会所）…… 342
Pho.Ⅳ6-1　南畑ダムの道十里故地 …… 349
Pho.Ⅳ6-2　道十里山神社の鳥居 …… 349
Pho.Ⅳ6-3　道十里の垂乳根の大イチョウ① …… 349
Pho.Ⅳ6-4　道十里の垂乳根の大イチョウ② …… 349
Pho.Ⅳ6-5　水没記念碑 …… 349
Pho.Ⅳ6-6　水没記念碑裏面 …… 349
Pho.Ⅳ6-7　築地松蔵・ナナエさんへ聞取り …… 349
Pho.Ⅳ6-8　築地徳實・裕さんへ聞取り …… 349
Pho.Ⅳ6-9　道十里の移設した薬師堂 …… 358
Pho.Ⅳ6-10　道十里薬師堂の内部 …… 358
Pho.Ⅳ6-11　道十里の猿田彦大神 …… 358
Pho.Ⅳ6-12　南畑ダム（昭和41年11月10日）〔大庭武雄氏所蔵写真〕 …… 359
Pho.Ⅳ6-13　南畑ダムより北方を望む（昭和41年11月10日）〔大庭武雄氏所蔵写真〕 …… 360
Pho.Ⅳ6-14　南畑ダムより南方を望む（昭和41年11月10日）〔大庭武雄氏所蔵写真〕 …… 361
Pho.Ⅳ6-15　南畑ダム建設地（昭和39年３月？）〔大庭武雄氏所蔵写真〕 …… 361
Pho.Ⅳ6-16　南畑ダム起工式〔大庭武雄氏所蔵写真〕…… 362
Pho.Ⅳ6-17　南畑ダム〔大庭武雄氏所蔵写真〕…… 362
Pho.Ⅳ6-18　山神橋〔大庭武雄氏所蔵写真〕…… 362
Pho.Ⅳ6-19～22　五ヶ山小学校サヨナラ運動会〔大庭武雄氏所蔵写真〕…… 363
Pho.Ⅳ6-23　五ヶ山小学校運動会〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 364
Pho.Ⅳ6-24　西鉄バス開通式〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 364
Pho.Ⅳ6-25　那珂川（網取）の子供たち〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 365
Pho.Ⅳ6-26　同上〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 365
Pho.Ⅳ6-27　網取集落〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 366
Pho.Ⅳ6-28　同上〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 366
Pho.Ⅳ6-29　同上〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 367
Pho.Ⅳ6-30　網取より道十里を望む〔山田善寛氏所蔵写真〕…… 367
Pho.Ⅳ6-31　桑河内集落〔築地九内氏所蔵写真〕…… 368
Pho.Ⅴ1-1　ゲ＝下屋庇（網取：鬼塚カネ家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-2　玄関軒肘木（網取：田中計家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-3　ゲの室内化により拡張した例（網取：山田勉家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-4　小屋組（東小河内：築地憲一家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-5　舞良戸（網取：田中計家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-6　透き戸（東小河内：築地山治家住宅）…… 391
Pho.Ⅴ1-7　「おてんらん」？（桑河内：築地九内家住宅、旧景） …… 391
Pho.Ⅴ1-8　神棚（網取：田中計家住宅）…… 392
Pho.Ⅴ1-9　「大くど」の飾り『海老』（桑河内：築地勝藏家住宅）…… 392
Pho.Ⅴ1-10　室外にある土製のかまど（網取：田中計家住宅）…… 392
Pho.Ⅴ1-11　ガンガン＝金属缶（桑河内：田中幸太郎家土蔵）…… 392
Pho.Ⅴ1-12　斗櫃（桑河内：田中幸太郎家土蔵）…… 392
Pho.Ⅴ1-13　将棋盤裏墨書（大野：築地弘孝家住宅）…… 392
Pho.Ⅴ1-14　棟札（東小河内：伊藤港家住宅）…… 392
Pho.Ⅴ2-1-1　洗い場（築地山治家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-2　玄関軒肘木（築地正輝家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-3　小屋裏①（築地憲一家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-4　小屋裏②（築地憲一家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-5　仏壇（伊藤博子家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-6　かまど（伊藤港家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-7　たんす①（築地憲一家住宅）…… 395
Pho.Ⅴ2-1-8　たんす②（築地憲一家住宅）…… 395

Pho.Ⅴ2-1-9　築地憲一家住宅①　外観 …… 397
Pho.Ⅴ2-1-10　築地憲一家住宅②　なかえ根太天井 …… 397
Pho.Ⅴ2-1-11　築地憲一家住宅③　ちゃのまから納戸を見る …… 397
Pho.Ⅴ2-1-12　築地憲一家住宅④　なかえから仏間を見る …… 397
Pho.Ⅴ2-1-13　築地憲一家住宅⑤　なかえ西側隅と大黒柱 …… 398
Pho.Ⅴ2-1-14　築地憲一家住宅⑥　大黒柱と上がり段 …… 398
Pho.Ⅴ2-1-15　伊藤博子家住宅①　外観 …… 400
Pho.Ⅴ2-1-16　伊藤博子家住宅②　なかえから仏間を見る …… 400
Pho.Ⅴ2-1-17　伊藤博行家住宅①　外観 …… 402
Pho.Ⅴ2-1-18　伊藤博行家住宅②　小屋裏 …… 402
Pho.Ⅴ2-1-19　築地山治家住宅①　外観 …… 404
Pho.Ⅴ2-1-20　築地山治家住宅②　附け書院 …… 404
Pho.Ⅴ2-1-21　伊藤茂志家住宅①　外観 …… 406
Pho.Ⅴ2-1-22　伊藤茂志家住宅②　敷地内通路と植物園 …… 406
Pho.Ⅴ2-1-23　伊藤政喜家住宅①　外観 …… 408
Pho.Ⅴ2-1-24　伊藤政喜家住宅②　春慶塗りの板戸 …… 408
Pho.Ⅴ2-1-25　築地正輝家住宅①　外観 …… 410
Pho.Ⅴ2-1-26　築地正輝家住宅②　なかえから仏間を見る …… 410
Pho.Ⅴ2-1-27　築地和弘家住宅①　外観 …… 412
Pho.Ⅴ2-1-28　東小河内地区集会所 …… 412
Pho.Ⅴ2-1-29　伊藤港家住宅①　外観 …… 415
Pho.Ⅴ2-1-30　伊藤港家住宅②　結納飾り …… 415
Pho.Ⅴ2-1-31　伊藤港家住宅③　なかえから仏間を見る …… 416
Pho.Ⅴ2-1-32　伊藤港家住宅④　小屋裏 …… 416
Pho.Ⅴ2-2-1　根太天井（築地幾雄家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-2　味噌部屋天井（築地蔵次家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-3　室内床高差を持つ例（築地敏恵家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-4　座敷下の納屋内部（築地敏恵家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-5　神棚（築地敏恵家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-6　荒神様（築地弘孝家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-7　ユルリ＝いろり–床下盛土跡（築地弘孝家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-8　戸棚（築地蔵次家住宅味噌蔵）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-9　釘隠し（築地敏恵家住宅）…… 419
Pho.Ⅴ2-2-10　築地弘孝家住宅①　外観 …… 420
Pho.Ⅴ2-2-11　築地弘孝家住宅②　室内 …… 420
Pho.Ⅴ2-2-12　築地徳實家住宅①　外観 …… 422
Pho.Ⅴ2-2-13　築地徳實家住宅②　石垣 …… 422
Pho.Ⅴ2-2-14　築地益穂家住宅①　外観 …… 424
Pho.Ⅴ2-2-15　大野地区集会所 …… 424
Pho.Ⅴ2-2-16　築地儀忠家住宅①　外観 …… 426
Pho.Ⅴ2-2-17　築地儀忠家住宅②　取り付け道路 …… 426
Pho.Ⅴ2-2-18　築地幾雄家住宅①　外観 …… 428
Pho.Ⅴ2-2-19　築地幾雄家住宅②　ゲの室内化により拡張した例 …… 428
Pho.Ⅴ2-2-20　築地均家住宅①　遠景 …… 430
Pho.Ⅴ2-2-21　築地均家住宅②　外観 …… 430
Pho.Ⅴ2-2-22　鬼塚和生家住宅①　外観（北より見る）…… 432
Pho.Ⅴ2-2-23　鬼塚和生家住宅②　外観（南より見る）…… 432
Pho.Ⅴ2-2-24　築地蔵次家住宅①　外観 …… 434
Pho.Ⅴ2-2-25　築地蔵次家住宅②　味噌部屋の棚 …… 434
Pho.Ⅴ2-2-26　築地敏恵家住宅①　外観 …… 436
Pho.Ⅴ2-2-27　築地敏恵家住宅②　室内床高差を持つ例 …… 436
Pho.Ⅴ2-3-1　土蔵（田中幸太郎家住宅）…… 441
Pho.Ⅴ2-3-2　土蔵内部（田中幸太郎家住宅）…… 441
Pho.Ⅴ2-3-3　神棚（田中幸太郎家住宅）…… 441
Pho.Ⅴ2-3-4　土蔵／梁と小屋組（田中幸太郎家住宅）…… 441
Pho.Ⅴ2-3-5　根太天井（鬼塚健吉家住宅）…… 441
Pho.Ⅴ2-3-6　掘りごたつ跡（田中幸太郎家住宅）…… 441

Pho.Ⅴ2-3-7　田中光義家住宅①　外観 …… 442
Pho.Ⅴ2-3-8　桑河内–景観 …… 442
Pho.Ⅴ2-3-9　鬼塚健吉家住宅①　外観 …… 444
Pho.Ⅴ2-3-10　鬼塚健吉家住宅②　なかえ・茶の間境透き戸 …… 444
Pho.Ⅴ2-3-11　田中幸太郎家住宅①　外観 …… 446
Pho.Ⅴ2-3-12　田中幸太郎家住宅②　なかえ・座敷境舞良戸 …… 446
Pho.Ⅴ2-3-13　築地九内家住宅①　現状外観 …… 448
Pho.Ⅴ2-3-14　築地九内家住宅②　改築前（1975年）家屋外観 …… 448
Pho.Ⅴ2-3-15　築地九内家住宅旧景③　小屋裏の叉首組 …… 451
Pho.Ⅴ2-3-16　築地九内家住宅旧景④　上屋梁と叉首尻 …… 451
Pho.Ⅴ2-3-17　築地九内家住宅旧景⑤　室内風景（大黒柱・テレビ）…… 451
Pho.Ⅴ2-3-18　築地九内家住宅旧景⑥　根太天井 …… 451
Pho.Ⅴ2-3-19　鬼塚カネ家住宅①　現状外観 …… 452
Pho.Ⅴ2-3-20　鬼塚カネ家住宅②　茅葺当時の外観 …… 452
Pho.Ⅴ2-3-21　築地勝藏家住宅①　外観 …… 454
Pho.Ⅴ2-3-22　築地勝藏家住宅②　小屋裏 …… 454
Pho.Ⅴ2-3-23　築地エミ子家住宅①　外観 …… 457
Pho.Ⅴ2-3-24　築地エミ子家住宅②　前庭 …… 457
Pho.Ⅴ2-3-25　田中幸徳家住宅①　外観 …… 459
Pho.Ⅴ2-3-26　桑河内地区への沿道風景① …… 459
Pho.Ⅴ2-3-27　築地辰男家住宅①　外観 …… 461
Pho.Ⅴ2-3-28　桑河内地区沿道風景② …… 461
Pho.Ⅴ2-4-1　大戸とクグリ（山田勉家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-2　ゲの室内化により拡張した例（山田勉家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-3　なかえ根太天井（田中計家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-4　外風呂外観（田中政博家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-5　外風呂：五右衛門風呂（田中政博家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-6　ところてん突き（田中政博家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-7　かまど（山田勉家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-8　春慶塗りの板戸（山田勉家住宅）…… 465
Pho.Ⅴ2-4-9　山田善寛家住宅①　外観 …… 466
Pho.Ⅴ2-4-10　網取地区集会所 …… 466
Pho.Ⅴ2-4-11　田中信之家住宅①　外観 …… 468
Pho.Ⅴ2-4-12　五ヶ山公民館 …… 468
Pho.Ⅴ2-4-13　山田和馬家住宅①　外観 …… 470
Pho.Ⅴ2-4-14　網取地区入り口バス停付近 …… 470
Pho.Ⅴ2-4-15　田中保家住宅①　外観 …… 472
Pho.Ⅴ2-4-16　木炭小屋 …… 472
Pho.Ⅴ2-4-17　田中計家住宅①　外観 …… 474
Pho.Ⅴ2-4-18　田中計家住宅②　根太天井と舞良戸 …… 474
Pho.Ⅴ2-4-19　築地哲郎家住宅①　外観 …… 477
Pho.Ⅴ2-4-20　築地哲郎家住宅②　大川より見る …… 477
Pho.Ⅴ2-4-21　田中政博家住宅①　外観 …… 479
Pho.Ⅴ2-4-22　田中政博家住宅②　かまど …… 479
Pho.Ⅴ2-4-23　山田勉家住宅①　外観 …… 481
Pho.Ⅴ2-4-24　山田勉家住宅②　小屋裏（トラス）…… 481
Pho.Ⅴ2-4-25　山田和弘家住宅①　外観 …… 485
Pho.Ⅴ2-4-26　山田和弘家住宅②　別棟 …… 485
Pho.Ⅴ3-1　大山神社①　外観 …… 488
Pho.Ⅴ3-2　大山神社②　内部 …… 488
Pho.Ⅴ3-3　大野の山神社①　覆屋外観 …… 490
Pho.Ⅴ3-4　大野の山神社②　覆屋内部 …… 490
Pho.Ⅴ3-5　大野の山神社③　覆屋の小屋組 …… 490
Pho.Ⅴ3-6　大野の山神社④　宮殿 …… 490
Pho.Ⅴ3-7　大野の山神社⑤　宮殿向拝詳細 …… 490
Pho.Ⅴ3-8　大野の山神社⑥　宮殿身舎妻面 …… 490
Pho.Ⅴ3-9　大野の山神社⑦　宮殿柱頭 …… 490

Pho.Ⅴ3-10　大野の山神社⑧　宮殿屋根 …… 490
Pho.Ⅴ3-11　観音堂①　本尊 …… 491
Pho.Ⅴ3-12　観音堂②　外観 …… 491
Pho.Ⅴ3-13　観音堂③　内部 …… 491
Pho.Ⅴ3-14　地蔵堂①　外観 …… 492
Pho.Ⅴ3-15　地蔵堂②　内部 …… 492
Pho.Ⅴ3-16　地蔵堂③　虹梁絵様 …… 492
Pho.Ⅴ3-17　旧拝殿①　外観 …… 493
Pho.Ⅴ3-18　旧拝殿②　天井見上げ（南面）…… 493

〔第３巻〕

Pho.Ⅵ1-1　福岡・佐賀県境 …… 495
Pho.Ⅵ1-2　小川内集落 …… 496
Pho.Ⅵ2-1　正月みくじ（宗雲孝吉さん宅）…… 508
Pho.Ⅵ2-2　盆棚（大石久一さん宅）…… 510
Pho.Ⅵ2-3　同前 …… 510
Pho.Ⅵ2-4　くじの準備（山祇神社）…… 513
Pho.Ⅵ2-5　くじで決まった参拝先（山祇神社）…… 513
Pho.Ⅵ2-6　くじの準備（山祇神社）…… 514
Pho.Ⅵ2-7　くじを椀に入れて振り出す（山祇神社）…… 514
Pho.Ⅵ2-8　サンボウサン …… 514
Pho.Ⅵ2-9　大祭（山祇神社境内）…… 514
Pho.Ⅵ2-10　境内でおにぎり・イワシを焼く（山祇神社境内）…… 514
Pho.Ⅵ2-11　境内北東に立てた木刀（山祇神社境内）…… 514
Pho.Ⅵ2-12　神事（山祇神社拝殿）…… 514
Pho.Ⅵ2-13　施餓鬼の精霊棚準備（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-14　精霊棚（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-15　精霊棚の供え物（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-16　棚の前で読経する住職（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-17　御詠歌（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-18　御詠歌に用いる経文・槌・すず・鉦（東光寺）…… 516
Pho.Ⅵ2-19　御詠歌に用いる経文（東光寺）…… 517
Pho.Ⅵ2-20　御詠歌の最後に詠う仏教歌（東光寺）…… 517
Pho.Ⅵ2-21　カマド脇に張られた札、右が三宝荒神：杉谷久千代さん宅）…… 519
Pho.Ⅵ2-22　小川内の葬列（西村哲也氏所蔵写真）…… 522
Pho.Ⅵ2-23　小川内の墓所墓壙（同前）…… 522
Pho.Ⅵ2-24　小川内の葬送時の休憩（同前）…… 522
Pho.Ⅶ1-1　小川内集落（東から）…… 529
Pho.Ⅶ1-2　小川内大野集落（東から）…… 529
Pho.Ⅶ2-2-1　築地アヤメ宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：玄関　5：小屋組　6：小屋）…… 621
Pho.Ⅶ2-2-2　宗雲千代美宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ・イマ　4：２階　5：小屋組
6：小屋全景　7：店舗全景　8：店舗内部）…… 621・622
Pho.Ⅶ2-2-3　杉谷信弘宅（1：全景　2：ザシキ　3：フロ　4：水場　5：小屋組　6：小屋）… 622・623
Pho.Ⅶ2-2-4　杉谷桃江宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：小屋組　5：カマヤ　6：小屋）… 623・624
Pho.Ⅶ2-2-5　大石博見宅（1：全景　2：東面　3：ザシキ　4：ナカエ5：小屋組）…… 624
Pho.Ⅶ2-2-6　宗雲マサエ宅（1：全景　2：ザシキ　3：チャノマ　4：ダイドコロ
5：２階８畳　6：小屋組）…… 624・625
Pho.Ⅶ2-2-7　西村哲也宅（1：全景　2：背面　3：ザシキ　4：ナカノマ　5：小屋組
6：持送り　7：物置　8：蔵）…… 625・626
Pho.Ⅶ2-2-8　宗雲佑太宅（1：全景　2：ザシキ　3：ネドコ　4：ナカエ　5：蔵　6：蔵小屋組）… 626・627
Pho.Ⅶ2-2-9　宗雲政美宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカザ　4：チャノマ　5：小屋組
6：小屋　7：小屋内部　8：小屋（東側）9：小屋内部）…… 627・628
Pho.Ⅶ2-2-10　杉谷五人宅（1：全景　2：ザシキ　3：オオナンド　4：小屋　5：小屋内部）…… 628・629
Pho.Ⅶ2-2-11　大石久一宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：薪小屋　5：小屋　6：小屋小屋組）… 629
Pho.Ⅶ2-2-12　大石雅子宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカザ　4：ナカエ　5：小屋組
6：持送り　7：蔵　8：蔵内部）…… 629・630
Pho.Ⅶ2-2-13　宗雲敏夫宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：階段　5：小屋組）…… 630・631

Pho.Ⅶ2-2-14　権藤敏範宅（1：全景　2：ザシキ　3：土間　4：ダイドコロ　5：縁側
6：縁側持送り　7：入口持送り　8：蔵　9：蔵１階　10：蔵２階
11：小屋）…… 631・632
Pho.Ⅶ2-2-15　進藤一枝宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：ナンド　5：小屋組
6：蔵　7：蔵２階）…… 632・633
Pho.Ⅶ2-2-16　大石登宅（1：全景　2：ザシキ　3：水場　4：小屋組　5：小屋
6：小屋１階　7：小屋２階）…… 633・634
Pho.Ⅶ2-2-17　杉谷千代子宅（1：全景　2：ザシキ　3：イマ　4：仏壇　5：入口持送り
6：土間　7：２階　8：小屋組　9：小屋　10：小屋小屋組）…… 634・635
Pho.Ⅶ2-2-18　宗雲綾子宅（1：全景　2：ザシキ　3：チャノマ　4：ナカエ　5：２階　6：屋根
7：釜屋　8：釜屋内部　9：倉庫　10：倉庫内部　11：蔵　12：蔵内部
13：隠居部屋）…… 635～637
Pho.Ⅶ2-2-19　武廣徳二宅（1：全景　2：ザシキ　3：ナカエ　4：小屋組　5：２階
6：小屋　7：小屋２階内部）…… 637・638
Pho.Ⅶ2-2-20　武廣敏幸宅（1：全景　2：ザシキ　3：玄関　4：小屋組）…… 638
Pho.Ⅶ2-2-21　武廣邦敏宅（1：正面　2：全景　3：ザシキ　4：ナカエ　5：チャノマ
6：旧ダイドコロ　7：小屋組　8：持送り　9：小屋　10：小屋内部
11：蔵　12：小屋１階　13：蔵２階）…… 638～640
Pho.Ⅶ3-1-YM　山祇神社（1：本殿全景　2：本殿側面　3：本殿正面　4：本殿向拝
5：拝殿全景　6：拝殿内部　7：拝殿向拝　8：鳥居）…… 640・641
Pho.Ⅶ3-2-TK　東光寺（1：全景　2：正面　3：内部　4：位牌壇　5：厨子）…… 641
Pho.Ⅶ3-3-YK　薬師堂（1：全景　2：内部）…… 641
Pho.Ⅶ3-3-HT　はっちゅうさん（1：全景　2：虹梁）…… 641
Pho.Ⅶ3-3-KK　子安観音堂（1：側面　2：正面　3：内部）…… 642
Pho.Ⅶ3-4-OE　小川内小学校旧校舎（1：玄関　2：側面　3：廊下　4：中学年教室
5：講堂　6：職員室）…… 642
Pho.Ⅶ2-2-5(6)　大石博見宅祈祷札 …… 552
Pho.Ⅶ2-2-18(14)　宗雲綾子宅木槌 …… 599
Pho.Ⅶ2-2-21(14)　武廣邦敏宅戸袋部材 …… 608
Pho.Ⅶ2-2-21(15)　武廣邦敏宅板戸 …… 608
Pho.Ⅶ2-2-21(16)　武廣邦敏宅棟札 …… 608
Pho.Ⅶ3-1-YM(9)　山祇神社墨書板 …… 611
Pho.Ⅶ3-2-TK(6)　東光寺石殿 …… 612
Pho.Ⅶ3-2-TK(7)　東光寺仏像調査風景 …… 613
Pho.Ⅶ3-2-TK(8)　東光寺墨書板① …… 614
Pho.Ⅶ3-2-TK(9)　東光寺墨書板② …… 614
Pho.Ⅶ3-2-TK(10)　東光寺棟札③④⑤ …… 614
Pho.Ⅶ3-3-YK(6)　薬師堂棟札 …… 616
Pho.Ⅶ3-3-HT(3)　はっちゅうさん内部 …… 616
Pho.Ⅶ3-3-KK(4)　子安観音堂棟札 …… 618
Pho.Ⅶ3-3-KK(5)　子安観音堂墨書板 …… 618
Pho.Ⅶ3-4-OE(7)　小川内小学校旧校舎 …… 620

〔第４巻〕

Pho.Ⅷ2-1～12　東小河内地区美術工芸品 …… 647・649
Pho.Ⅷ2-13～29　大野地区美術工芸品 …… 649・651・653
Pho.Ⅷ2-30～39　桑河内地区美術工芸品 …… 653・655・657
Pho.Ⅷ2-40～52　網取地区美術工芸品 …… 657・659
Pho.Ⅷ2-53～59　旧道十里地区美術工芸品 …… 661
Pho.Ⅷ2-T　東光寺全景 …… 663
Pho.Ⅷ2-60～111　小川内地区美術工芸品 …… 663～677
Pho.Ⅷ2-112～193　市ノ瀬：日吉神社の美術工芸品 …… 677～703
Pho.Ⅸ1-1　小川内の炭焼窯で炭焼き中 …… 710
Pho.Ⅸ1-2　炭焼窯 …… 711
Pho.Ⅸ1-3　炭焼窯焚口 …… 711
Pho.Ⅸ1-4　焼いた炭 …… 711
Pho.Ⅸ1-5・6　一ノ岳城跡に残る炭焼窯 …… 712

挿図目次

〔第１巻〕

Fig.1　五ヶ山ダム位置図１〔福岡県土木部河川開発課提供〕…… xvii
Fig.2　五ヶ山ダム位置図２（1/60,000）（福岡県五ヶ山ダム建設事務所パンフレットより）… xviii
Fig.3　五ヶ山ダム概要図（H15.3）（福岡県五ヶ山ダム建設事務所パンフレットより）…… xix
Fig.4　五ヶ山ダム建設地周辺図（約1/17,200）〔福岡県土木部河川開発課提供〕…… xx
Fig.5　小川内・東小河内・大野（1/7,500）…… xxi
Fig.6　小川内・東小河内（1/5,000）…… xxii
Fig.7　小川内大野・大野（1/5,000）…… xxiii
Fig.8　網取・桑河内（1/5,000）…… xxiv
Fig.Ⅰ4-2-1　五ヶ山ダム周辺遺跡等位置図（1/60,000）〈国土地理院発行地図〉…… 34
Fig.Ⅱ1-1-1　脊振山地のリニアメント …… 40
Fig.Ⅱ1-1-2　五ヶ山付近の地形概略図（500ｍ谷埋図）…… 41
Fig.Ⅱ1-1-3　五ヶ山付近地形及び第四紀地質分布図 …… 42
Fig.Ⅱ1-2-1　五ヶ山ダム湛水域周辺の地質図（川野・柚原2005）…… 45
Fig.Ⅱ1-2-2　花崗岩類の石英-斜長石-カリ長石三角図 …… 48
Fig.Ⅱ1-2-3　花崗岩類の有色鉱物-斜長石-カリ長石三角図 …… 48
Fig.Ⅱ2-1-1　河田氏のスギの道（遠山1976より）…… 59
Fig.Ⅱ2-1-2　スギの分布と年間降水量との関係並びに氷期の逃避地（塚田1980）…… 59
Fig.Ⅱ2-1-3　スギの天然分布（林1951）…… 59
Fig.Ⅱ2-1-4　脊振山系のスギ（1/200,000）〈国土地理院発行地図〉…… 62
Fig.Ⅱ2-2-1　五ヶ山の現存植生図 …… 79
Fig.Ⅲ2-1-1　五ヶ山周辺図（1/60,000）〈国土地理院発行地図〉…… 171
Fig.Ⅲ2-3-1　神埼市久保山・田中のしこ名（1/25,000）〈国土地理院発行地図〉…… 181
Fig.Ⅲ2-3-2　五ヶ山国境石拓影（1/10）…… 191

〔第２巻〕

Fig.Ⅳ1-1　那珂川町図（『郷土誌　那珂川』より）…… 262
Fig.Ⅳ1-2　五ヶ山ダム関係集落位置図（約1/17,200）〔福岡県土木部河川開発課提供〕…… 265
Fig.Ⅳ2-1　網取・桑河内集落図（1/5,000）…… 266
Fig.Ⅳ4-1　大野集落図（1/5,000）…… 315
Fig.Ⅳ5-1　東小河内・小川内集落図（1/5,000）…… 329
Fig.Ⅳ6-1　道十里集落図（1/5,000）〔福岡県「那珂川総合開発平面図」1955より〕……347
Fig.Ⅳ6-2　道十里：築地喜走宅間取り図 …… 351
Fig.Ⅳ6-3　道十里：築地喜走宅配置図 …… 351
Fig.Ⅴ1-1　五ヶ山ダム関係集落位置図（約1/17,200）…… 380
Fig.Ⅴ1-2　築地正輝家住宅 なかえ展開図（1/100）…… 386
Fig.Ⅴ1-3　伊藤港家住宅 ざしき展開図（1/100）…… 386
Fig.Ⅴ1-4　鬼塚泰介家住宅 なかえ展開図（1/100）…… 386
Fig.Ⅴ1-5　鬼塚泰介家住宅 なかえ天井伏図（1/100）…… 386
Fig.Ⅴ1-6　田中幸太郎家住宅 なかえ展開図（1/100）…… 387
Fig.Ⅴ1-7　田中幸太郎家住宅 ざしき展開図（1/100）…… 387
Fig.Ⅴ1-8　田中幸太郎家住宅 ざしき・なかえ天井伏図（1/100）…… 387
Fig.Ⅴ1-9　田中計家住宅 ざしき展開図（1/100）…… 388
Fig.Ⅴ1-10　田中計家住宅 なかえ展開図（1/100）…… 388
Fig.Ⅴ1-11　田中計家住宅 板の間展開図（1/100）…… 388
Fig.Ⅴ1-12　田中政博家住宅 玄関展開図（1/100）…… 389
Fig.Ⅴ1-13　田中政博家住宅 なかえ展開図（1/100）…… 389
Fig.Ⅴ1-14　築地憲一家住宅 タンス（1/50）…… 390
Fig.Ⅴ1-15　築地山治家住宅 戸棚（1/50）…… 390
Fig.Ⅴ1-16　建具（1/50）…… 390
Fig.Ⅴ1-17　伊藤港家棟札読下し …… 392
Fig.Ⅴ2-1-1　東小河内地区家屋等配置図 …… 393
Fig.Ⅴ2-1-2　築地憲一家住宅①　配置図（1/300）…… 397

Fig.Ⅴ2-1-3　築地憲一家住宅②　実測平面図（1/150）…… 398
Fig.Ⅴ2-1-4　築地憲一家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 398
Fig.Ⅴ2-1-5　築地憲一家住宅④　実測断面図（1/100）…… 399
Fig.Ⅴ2-1-6　築地憲一家住宅⑤　復元断面図 …… 399
Fig.Ⅴ2-1-7　伊藤博子家住宅①　配置図（1/300）…… 400
Fig.Ⅴ2-1-8　伊藤博子家住宅②　実測平面図（1/150）…… 401
Fig.Ⅴ2-1-9　伊藤博子家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 401
Fig.Ⅴ2-1-10　伊藤博行家住宅①　配置図（1/300）…… 402
Fig.Ⅴ2-1-11　伊藤博行家住宅②　１階実測平面図（1/150）…… 403
Fig.Ⅴ2-1-12　伊藤博行家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 403
Fig.Ⅴ2-1-13　築地山治家住宅①　配置図（1/400）…… 404
Fig.Ⅴ2-1-14　築地山治家住宅②　１階実測平面図（1/150）…… 405
Fig.Ⅴ2-1-15　築地山治家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 405
Fig.Ⅴ2-1-16　伊藤茂志家住宅①　配置図（1/400）…… 406
Fig.Ⅴ2-1-17　伊藤茂志家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 407
Fig.Ⅴ2-1-18　伊藤茂志家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 407
Fig.Ⅴ2-1-19　伊藤政喜家住宅①　配置図（1/300）…… 408
Fig.Ⅴ2-1-20　伊藤政喜家住宅②　実測平面図（1/150）…… 409
Fig.Ⅴ2-1-21　伊藤政喜家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 409
Fig.Ⅴ2-1-22　築地正輝家住宅①　配置図（1/300）…… 410
Fig.Ⅴ2-1-23　築地正輝家住宅②　納屋実測平面図（1/150）…… 411
Fig.Ⅴ2-1-24　築地正輝家住宅③　１階実測平面図（1/150）…… 411
Fig.Ⅴ2-1-25　築地正輝家住宅④　聴取り調査による復元図 …… 411
Fig.Ⅴ2-1-26　築地和弘家住宅①　配置図（1/300）…… 412
Fig.Ⅴ2-1-27　築地和弘家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 413
Fig.Ⅴ2-1-28　築地和弘家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 413
Fig.Ⅴ2-1-29　伊藤港家住宅①　配置図（1/300）…… 414
Fig.Ⅴ2-1-30　伊藤港家住宅②　１階実測平面図（1/150）…… 415
Fig.Ⅴ2-1-31　伊藤港家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 415
Fig.Ⅴ2-1-32　伊藤港家住宅④　実測断面図（1/100）…… 416
Fig.Ⅴ2-1-33　伊藤港家住宅⑤　復元断面図 …… 416
Fig.Ⅴ2-2-1　大野地区家屋等配置図（1）…… 417
Fig.Ⅴ2-2-2　大野地区家屋等配置図（2）…… 417
Fig.Ⅴ2-2-3　大野地区家屋等配置図（3）…… 417
Fig.Ⅴ2-2-4　築地弘孝家住宅①　配置図（1/300）…… 420
Fig.Ⅴ2-2-5　築地弘孝家住宅②　１階実測平面図（1/150）…… 421
Fig.Ⅴ2-2-6　築地弘孝家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 421
Fig.Ⅴ2-2-7　築地徳實家住宅①　配置図（1/300）…… 422
Fig.Ⅴ2-2-8　築地徳實家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 423
Fig.Ⅴ2-2-9　築地徳實家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 423
Fig.Ⅴ2-2-10　築地益穂家住宅①　配置図（1/300）…… 424
Fig.Ⅴ2-2-11　築地益穂家住宅②　現状平面図（1/150）…… 425
Fig.Ⅴ2-2-12　築地益穂家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 425
Fig.Ⅴ2-2-13　築地儀忠家住宅①　配置図（1/300）…… 426
Fig.Ⅴ2-2-14　築地儀忠家住宅②　現状平面図（1/150）…… 427
Fig.Ⅴ2-2-15　築地儀忠家住宅③　聴取り調査による復元図（第Ⅱ期）…… 427
Fig.Ⅴ2-2-16　築地儀忠家住宅④　聴取り調査による復元図（第Ⅰ期）…… 427
Fig.Ⅴ2-2-17　築地幾雄家住宅①　配置図（1/300）…… 428
Fig.Ⅴ2-2-18　築地幾雄家住宅②　実測平面図（1/150）…… 429
Fig.Ⅴ2-2-19　築地幾雄家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 429
Fig.Ⅴ2-2-20　築地均家住宅①　配置図（1/300）…… 430
Fig.Ⅴ2-2-21　築地均家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 431
Fig.Ⅴ2-2-22　築地均家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 431
Fig.Ⅴ2-2-23　鬼塚和生家住宅①　配置図（1/300）…… 432
Fig.Ⅴ2-2-24　鬼塚和生家住宅②　現状平面図（1/150）…… 433
Fig.Ⅴ2-2-25　鬼塚和生家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 433
Fig.Ⅴ2-2-26　築地蔵次家住宅①　配置図（1/300）…… 434

Fig.Ⅴ2-2-27　築地蔵次家住宅②　現状平面図（1/150）…… 435
Fig.Ⅴ2-2-28　築地蔵次家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 435
Fig.Ⅴ2-2-29　築地敏恵家住宅①　配置図（1/300）…… 436
Fig.Ⅴ2-2-30　築地敏恵家住宅②　1階実測平面図（1/150）…… 437
Fig.Ⅴ2-2-31　築地敏恵家住宅③　2階実測平面図（1/150）…… 437
Fig.Ⅴ2-2-32　築地敏恵家住宅④　床下実測平面図（1/150）…… 437
Fig.Ⅴ2-2-33　築地敏恵家住宅⑤　聴取り調査による復元図 …… 437
Fig.Ⅴ2-2-34　築地敏恵家住宅⑥　実測断面図（1/100）…… 438
Fig.Ⅴ2-3-1　桑河内地区家屋等配置図 …… 439
Fig.Ⅴ2-3-2　田中光義家住宅①　配置図（1/300）…… 442
Fig.Ⅴ2-3-3　田中光義家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 443
Fig.Ⅴ2-3-4　田中光義家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 443
Fig.Ⅴ2-3-5　鬼塚健吉家住宅①　配置図（1/300）…… 444
Fig.Ⅴ2-3-6　鬼塚健吉家住宅②　１階実測平面図（1/150）…… 445
Fig.Ⅴ2-3-7　鬼塚健吉家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 445
Fig.Ⅴ2-3-8　田中幸太郎家住宅①　配置図（1/300）…… 446
Fig.Ⅴ2-3-9　田中幸太郎家住宅②　土蔵実測平面図（1/150）…… 447
Fig.Ⅴ2-3-10　田中幸太郎家住宅③　実測平面図（1/150）…… 447
Fig.Ⅴ2-3-11　田中幸太郎家住宅④　聴取り調査による復元図 …… 447
Fig.Ⅴ2-3-12　築地九内家住宅①　配置図（1/300）…… 448
Fig.Ⅴ2-3-13　築地九内家住宅②　現状平面図（1/150）…… 449
Fig.Ⅴ2-3-14　築地九内家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 449
Fig.Ⅴ2-3-15　築地九内家住宅④　平面図（昭和50年2月実施緊急民家調査表より）…… 450
Fig.Ⅴ2-3-16　築地九内家住宅⑤　緊急民家調査（昭和50年2月実施）に基づく復元図 …… 450
Fig.Ⅴ2-3-17　築地九内家住宅⑥　屋根伏図 …… 451
Fig.Ⅴ2-3-18　鬼塚カネ家住宅①　配置図（1/300）…… 452
Fig.Ⅴ2-3-19　鬼塚カネ家住宅②　現状平面図（1/150）…… 453
Fig.Ⅴ2-3-20　鬼塚カネ家住宅③　平面図 …… 453
Fig.Ⅴ2-3-21　築地勝藏家住宅①　配置図（1/300）…… 454
Fig.Ⅴ2-3-22　築地勝藏家住宅②　実測平面図（1/150）…… 455
Fig.Ⅴ2-3-23　築地勝藏家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 455
Fig.Ⅴ2-3-24　築地勝藏家住宅④　東面立面図（1/100）…… 456
Fig.Ⅴ2-3-25　築地勝藏家住宅⑤　南面立面図（1/150）…… 456
Fig.Ⅴ2-3-26　築地笑子家住宅①　配置図（1/300）…… 457
Fig.Ⅴ2-3-27　築地笑子家住宅②　現状平面図（1/150）…… 458
Fig.Ⅴ2-3-28　築地笑子家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 458
Fig.Ⅴ2-3-29　田中幸徳家住宅①　配置図（1/300）…… 459
Fig.Ⅴ2-3-30　田中幸徳家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 460
Fig.Ⅴ2-3-31　田中幸徳家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 460
Fig.Ⅴ2-3-32　築地辰男家住宅①　配置図（1/300）…… 461
Fig.Ⅴ2-3-33　築地辰男家住宅②　現状平面図（1/150）…… 462
Fig.Ⅴ2-3-34　築地辰男家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 462
Fig.Ⅴ2-4-1　網取地区家屋等配置図 …… 463
Fig.Ⅴ2-4-2　山田善寛家住宅①　配置図（1/300）…… 466
Fig.Ⅴ2-4-3　山田善寛家住宅②　現状平面図（1/150）…… 467
Fig.Ⅴ2-4-4　山田善寛家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 467
Fig.Ⅴ2-4-5　田中信之家住宅①　配置図（1/300）…… 468
Fig.Ⅴ2-4-6　田中信之家住宅②　現状平面図（1/150）…… 469
Fig.Ⅴ2-4-7　田中信之家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 469
Fig.Ⅴ2-4-8　山田和馬家住宅①　配置図（1/300）…… 470
Fig.Ⅴ2-4-9　山田和馬家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 471
Fig.Ⅴ2-4-10　山田和馬家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 471
Fig.Ⅴ2-4-11　田中保家住宅①　配置図（1/300）…… 472
Fig.Ⅴ2-4-12　田中保家住宅②　現状平面図（1/150）…… 473
Fig.Ⅴ2-4-13　田中保家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 473
Fig.Ⅴ2-4-14　田中計家住宅①　配置図（1/300）…… 474
Fig.Ⅴ2-4-15　田中計家住宅②　１階現状平面図（1/150）…… 475

Fig.Ⅴ2-4-16　田中計家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 475
Fig.Ⅴ2-4-17　田中計家住宅④　実測断面図（1/100） …… 476
Fig.Ⅴ2-4-18　田中計家住宅⑤　東面立面図（1/100） …… 476
Fig.Ⅴ2-4-19　築地哲郎家住宅①　配置図（1/300） …… 477
Fig.Ⅴ2-4-20　築地哲郎家住宅②　１階現状平面図（1/150） …… 478
Fig.Ⅴ2-4-21　築地哲郎家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 478
Fig.Ⅴ2-4-22　田中政博家住宅①　配置図（1/300） …… 479
Fig.Ⅴ2-4-23　田中政博家住宅②　１階実測平面図（1/150） …… 480
Fig.Ⅴ2-4-24　田中政博家住宅③　聴取り調査による復元図（第Ⅱ期） …… 480
Fig.Ⅴ2-4-25　田中政博家住宅④　聴取り調査による復元図（第Ⅰ期） …… 480
Fig.Ⅴ2-4-26　山田勉家住宅①　配置図（1/300） …… 481
Fig.Ⅴ2-4-27　山田勉家住宅②　実測平面図（1/150） …… 482
Fig.Ⅴ2-4-28　山田勉家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 482
Fig.Ⅴ2-4-29　山田勉家住宅④　実測断面図（1/100） …… 483
Fig.Ⅴ2-4-30　山田勉家住宅⑤　復元断面図 …… 483
Fig.Ⅴ2-4-31　山田勉家住宅⑥　北面立面図（1/100） …… 484
Fig.Ⅴ2-4-32　山田勉家住宅⑦　西面立面図（1/100） …… 484
Fig.Ⅴ2-4-33　山田和弘家住宅①　配置図（1/300） …… 485
Fig.Ⅴ2-4-34　山田和弘家住宅②　現状平面図（1/150） …… 486
Fig.Ⅴ2-4-35　山田和弘家住宅③　聴取り調査による復元図 …… 486
Fig.Ⅴ3-1　大山神社①　配置図（1/300） …… 488
Fig.Ⅴ3-2　大山神社②　平面図（1/100） …… 488
Fig.Ⅴ3-3　大野の山神社①　配置図（1/300） …… 489
Fig.Ⅴ3-4　大野の山神社②　平面図（1/150） …… 489
Fig.Ⅴ3-5　大野の山神社③　宮殿平面図（1/50） …… 489
Fig.Ⅴ3-6　観音堂①　平面図（1/100） …… 491
Fig.Ⅴ3-7　観音堂②　断面図（1/100） …… 491
Fig.Ⅴ3-8　地蔵堂①　平面図（1/100） …… 492
Fig.Ⅴ3-9　地蔵堂②　桁行断面図（1/50） …… 492
Fig.Ⅴ3-10　旧拝殿①　実測平面図・立面図（1/100） …… 493
Fig.Ⅴ3-11　旧拝殿②　復元平面図・立面図（1/100） …… 493

〔第３巻〕

Fig.Ⅵ1-1　福岡・佐賀の県境部分図（『郷土誌　那珂川』より） …… 495
Fig.Ⅵ1-2　小川内周辺図（1/10,000） …… 497
Fig.Ⅵ2-1　小川内集落（1/5,000） …… 521
Fig.Ⅶ1-1　小川内周辺図（1/10,000） …… 524
Fig.Ⅶ1-2　小川内集落図（約1/3,000） …… 525
Fig.Ⅶ1-3　小川内大野集落図（約1/3,000） …… 525
Fig.Ⅶ1-4　小川内地区水路図（左下は小川内大野地区） …… 527
Fig.Ⅶ2-1-1　小川内集落民家屋根伏図 …… 534
Fig.Ⅶ2-1-2　小川内大野集落民家屋根伏図 …… 535
Fig.Ⅶ2-2-1　築地アヤメ宅①　見取図（1/300） …… 537
Fig.Ⅶ2-2-2　築地アヤメ宅②　主屋平面図・断面図（1/150・1/100） …… 538
Fig.Ⅶ2-2-3　宗雲千代美宅①　見取図、主屋断面図、店舗平面図（1/300・1/150・1/100） …… 541
Fig.Ⅶ2-2-4　宗雲千代美宅②　主屋平面図（1/150） …… 542
Fig.Ⅶ2-2-5　杉谷信弘宅①　見取図（1/300） …… 544
Fig.Ⅶ2-2-6　杉谷信弘宅②　主屋平面図・断面図、風呂平面図（1/150・1/100） …… 545
Fig.Ⅶ2-2-7　杉谷桃枝宅①　見取図、主屋断面図、蔵平面図・断面図　（1/300・1/150・1/100） … 547
Fig.Ⅶ2-2-8　杉谷桃枝宅②　主屋平面図（1/150） …… 548
Fig.Ⅶ2-2-9　大石博見宅①　見取図、架構図、風呂断面図（1/300・1/150） …… 550
Fig.Ⅶ2-2-10　大石博見宅②　主屋平面図・断面図（1/150・1/100） …… 551
Fig.Ⅶ2-2-11　宗雲マサエ宅①　見取図、主屋平面図（1/300・1/150） …… 554
Fig.Ⅶ2-2-12　宗雲マサエ宅②　主屋断面図（1/100） …… 555
Fig.Ⅶ2-2-13　西村哲也宅①　見取図、架構図、主屋・蔵断面図（1/300・1/100） …… 556
Fig.Ⅶ2-2-14　西村哲也宅②　主屋平面図（1/150） …… 557
Fig.Ⅶ2-2-15　宗雲佑太宅①　見取図（1/300） …… 559

Fig.Ⅶ2-2-16　宗雲佑太宅②　主屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 560
Fig.Ⅶ2-2-17　宗雲佑太宅③　蔵平面図・断面図（1/150・1/100）…… 561
Fig.Ⅶ2-2-18　宗雲政美宅①　見取図（1/300）…… 562
Fig.Ⅶ2-2-19　宗雲政美宅②　主屋平面図（1/150）…… 563
Fig.Ⅶ2-2-20　宗雲政美宅③　小屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 564
Fig.Ⅶ2-2-21　宗雲政美宅④　主屋断面図（1/100）…… 565
Fig.Ⅶ2-2-22　杉谷五人宅①　見取図（1/300）…… 566
Fig.Ⅶ2-2-23　杉谷五人宅②　主屋平面図（1/150）…… 567
Fig.Ⅶ2-2-24　杉谷五人宅③　主屋断面図、小屋平面図（1/150・1/100）…… 568
Fig.Ⅶ2-2-25　大石久一宅①　見取図（1/300）…… 569
Fig.Ⅶ2-2-26　大石久一宅②　主屋平面図・断面図、小屋断面図（1/150・1/100）…… 570
Fig.Ⅶ2-2-27　大石雅子宅①　見取図（1/300）…… 572
Fig.Ⅶ2-2-28　大石雅子宅②　主屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 573
Fig.Ⅶ2-2-29　大石雅子宅③　蔵平面図・断面図（1/150・1/100）…… 574
Fig.Ⅶ2-2-30　宗雲敏夫宅①　見取図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 576
Fig.Ⅶ2-2-31　宗雲敏夫宅②　主屋平面図（1/150）…… 577
Fig.Ⅶ2-2-32　権藤敏範宅①　見取図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 579
Fig.Ⅶ2-2-33　権藤敏範宅②　主屋平面図（1/150）…… 580
Fig.Ⅶ2-2-34　権藤敏範宅③　小屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 581
Fig.Ⅶ2-2-35　進藤一枝宅①　見取図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 582
Fig.Ⅶ2-2-36　進藤一枝宅②　主屋平面図、蔵平面図・断面図（1/150・1/100）…… 583
Fig.Ⅶ2-2-37　大石登宅①　見取図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 585
Fig.Ⅶ2-2-38　大石登宅②　主屋平面図（1/150）…… 586
Fig.Ⅶ2-2-39　大石登宅③　小屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 587
Fig.Ⅶ2-2-40　杉谷千代子宅①　見取図（1/300）…… 588
Fig.Ⅶ2-2-41　杉谷千代子宅②　主屋平面図（1/150）…… 589
Fig.Ⅶ2-2-42　杉谷千代子宅③　主屋断面図、小屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 590
Fig.Ⅶ2-2-43　宗雲綾子宅①　見取図、架構図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 592
Fig.Ⅶ2-2-44　宗雲綾子宅②　主屋平面図（1/150）…… 593
Fig.Ⅶ2-2-45　宗雲綾子宅③　主屋側面図1（1/100）…… 594
Fig.Ⅶ2-2-46　宗雲綾子宅④　主屋側面図2（1/100）…… 595
Fig.Ⅶ2-2-47　宗雲綾子宅⑤　小屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 596
Fig.Ⅶ2-2-48　宗雲綾子宅⑥　蔵・釜屋・隠居屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 597
Fig.Ⅶ2-2-49　宗雲綾子宅⑦　主屋平面図・側面図（1/300）…… 598
Fig.Ⅶ2-2-50　武廣徳二宅①　見取図、主屋断面図、小屋平面図（1/300・1/150・1/100）…… 600
Fig.Ⅶ2-2-51　武廣徳二宅②　主屋平面図（1/150）…… 601
Fig.Ⅶ2-2-52　武廣敏幸宅①　見取図、主屋断面図（1/300・1/100）…… 602
Fig.Ⅶ2-2-53　武廣敏幸宅②　主屋平面図（1/150）…… 603
Fig.Ⅶ2-2-54　武廣邦敏宅①　見取図（1/300）…… 604
Fig.Ⅶ2-2-55　武廣邦敏宅②　主屋平面図・断面図（1/150・1/100）…… 606
Fig.Ⅶ2-2-56　武廣邦敏宅③　小屋・蔵平面図・断面図（1/150・1/100）…… 607
Fig.Ⅶ3-1　山祇神社①　見取図（1/300）…… 610
Fig.Ⅶ3-2　山祇神社②　社殿平面図・鳥居（1/150・1/75）…… 611
Fig.Ⅶ3-3　東光寺①　見取図、厨子平面図（1/300・1/30）…… 612
Fig.Ⅶ3-4　東光寺②　本堂平面図、石殿平面図・断面図（1/150・1/30）…… 613
Fig.Ⅶ3-5　薬師堂　見取図、平面図・断面図（1/200・1/80）…… 615
Fig.Ⅶ3-6　はっちゅうさん　見取図、平面図・断面図（1/200・1/80）…… 617
Fig.Ⅶ3-7　子安観音堂　平面図・断面図（1/80）…… 618
Fig.Ⅶ3-8　小川内小学校　平面図（1/150）…… 619

〔第４巻〕

Fig.Ⅷ2-1　小川内・東小河内の美術工芸品資料分布図（1/5,000）…… 704
Fig.Ⅷ2-2　大野の美術工芸品資料分布図（1/5,000）…… 705
Fig.Ⅷ2-3　網取・桑河内の美術工芸品資料分布図（1/5,000）…… 706
Fig.Ⅸ1-1　炭焼窯の図 …… 708

表目次

〔第１巻〕

Tab.Ⅰ3-1　五ヶ山ダム関係文化財調査スケジュール …… 16
Tab.Ⅱ1-2-1　花崗岩類の平均モード組成（容量%）…… 48
Tab.Ⅱ2-1-1　スギＤＮＡ（Mups型）…… 67
Tab.Ⅱ2-1-2　スギＤＮＡ（RAPD型）…… 68
Tab.Ⅱ2-2-1　五ヶ山ダム予定地の重要植物選定基準 …… 79
Tab.Ⅱ2-2-2　五ヶ山ダム予定地の重要植物リスト …… 80
Tab.Ⅱ2-2-3　標本による保存植物リストの科と種数 …… 80
Tab.Ⅱ3-2-1　生息種の確認地 …… 109

〔第２巻〕

Tab.Ⅳ1-1　「明治22年町村合併調書」（『福岡県市町村合併史』より） …… 262
Tab.Ⅳ2-1　網取船地蔵奉納物一覧 …… 290
Tab.Ⅴ1-1　五ヶ山地区建築物データ一覧表１（東小河内地区）…… 382
Tab.Ⅴ1-2　五ヶ山地区建築物データ一覧表２（大野地区）…… 383
Tab.Ⅴ1-3　五ヶ山地区建築物データ一覧表３（桑河内地区）…… 384
Tab.Ⅴ1-4　五ヶ山地区建築物データ一覧表４（網取地区）…… 385

〔第３巻〕

Tab.Ⅶ2-1　小川内の調査民家一覧 …… 533

〔第４巻〕

Tab.XI1-2-1　「二､大正十五年度種籾申込ノ件」の稲の品種 …… 724
Tab.XI1-2-2　現在九州地方で作付け面積の多い粳米と糯米 …… 724
Tab.XI1-2-3　昭和５年度区費決算報告の内容分類 …… 727
Tab.XI1-2-4　昭和５年２月～12月末までの当座帳① …… 729
Tab.XI1-2-4　昭和５年２月～12月末までの当座帳② …… 730
Tab.XI1-2-5　昭和６年当時の食品・嗜好品などの価格一覧 …… 731
Tab.XI3-1　東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内　武廣邦敏家文書 …… 806～829
Tab.XI3-2　東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内　進藤直文家文書 …… 830～843
Tab.XI3-3　東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内　大石久一家文書 …… 844～859
Tab.XI3-4　那珂川町網取　山田善寛家文書 …… 860～865
Tab.XI4-1　五ヶ山ダム関係収集民具一覧①～⑤ …… 866～870

付図

五ヶ山・小川内地区しこ名分布図（1/10,000）

Fig. 1　五ヶ山ダム位置図１〔福岡県土木部河川開発課提供〕

Fig. 2　五ヶ山ダム位置図２（1/60,000）（福岡県五ヶ山ダム建設事務所パンフレットより）

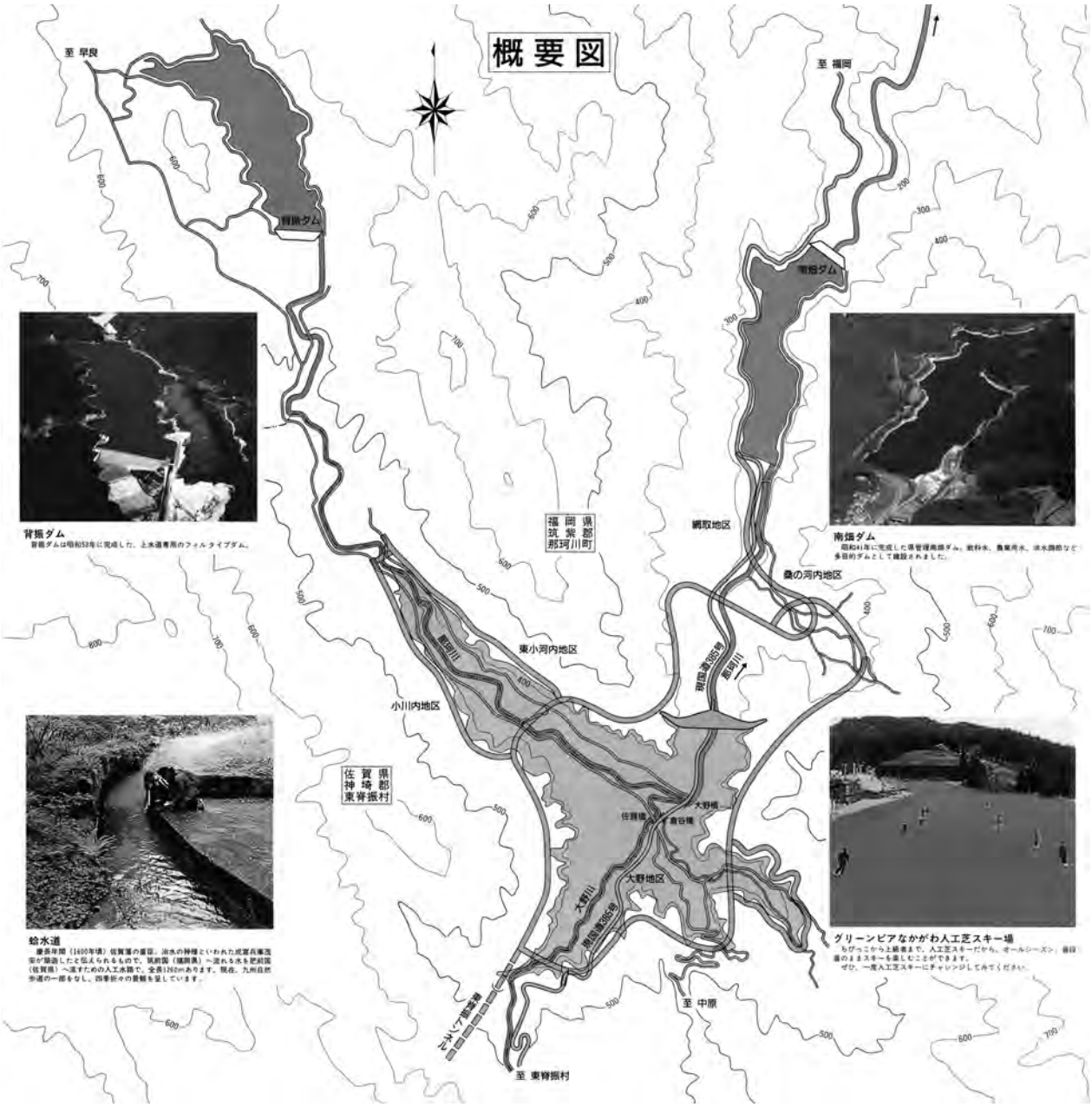


Fig. 3　五ヶ山ダム概要図（H15.3）（福岡県五ヶ山ダム建設事務所パンフレットより）

Pho. 1　脊振ダム遠景

Pho. 2　南畑ダム

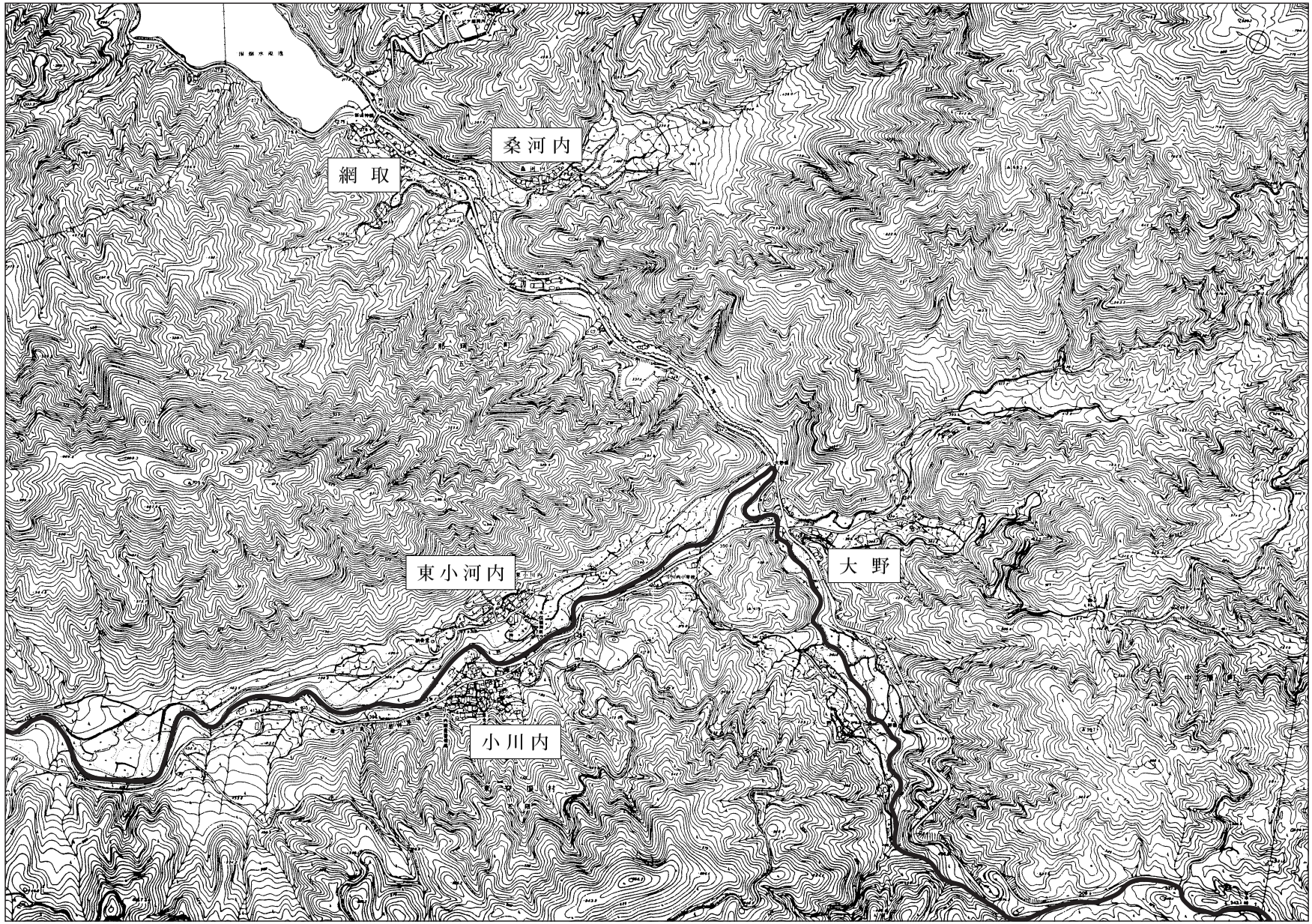


Fig. 4　五ヶ山ダム建設地周辺図（約1/17,200）〔福岡県土木部河川開発課提供〕

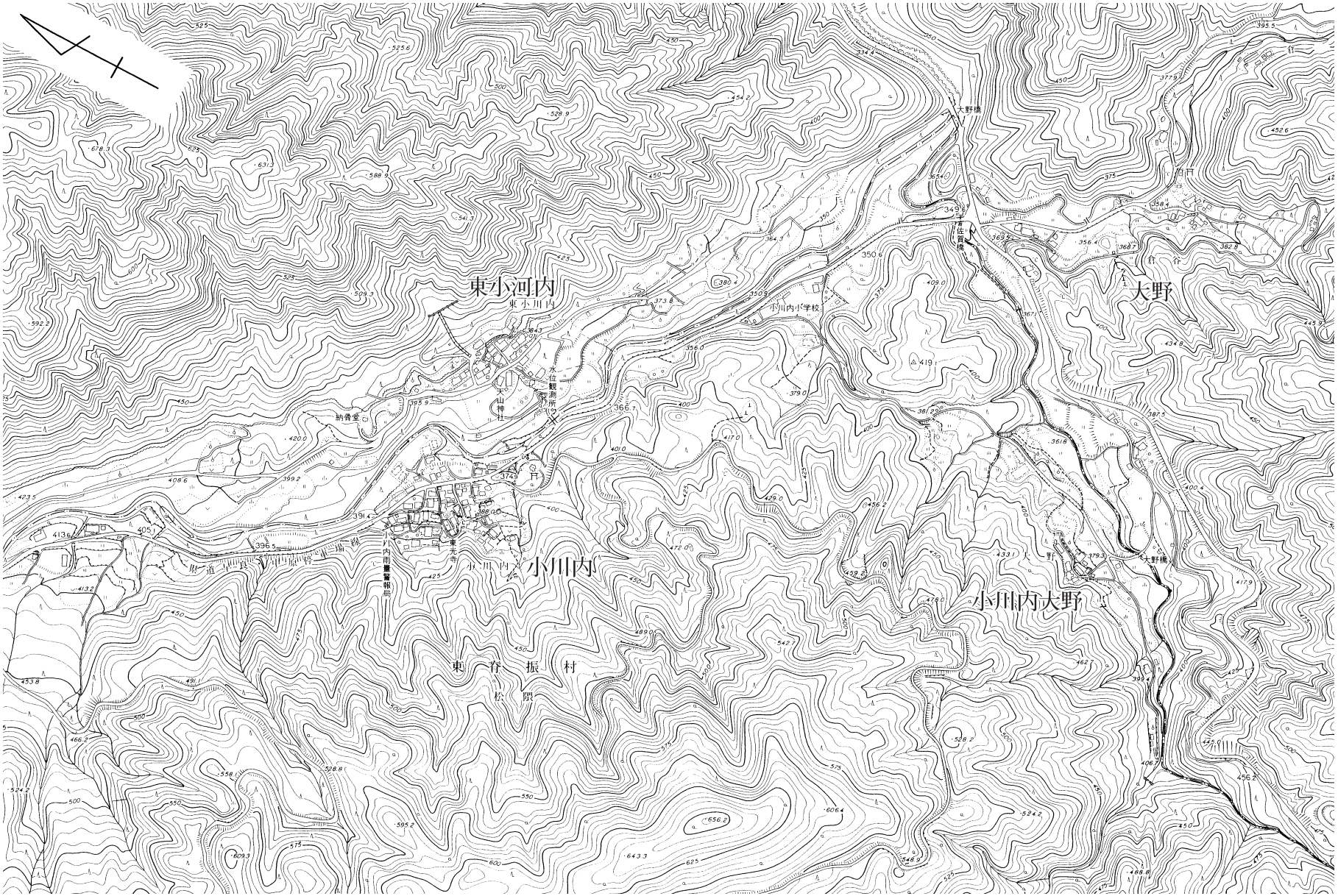


Fig. 5　小川内・東小河内・大野（1/7,500）

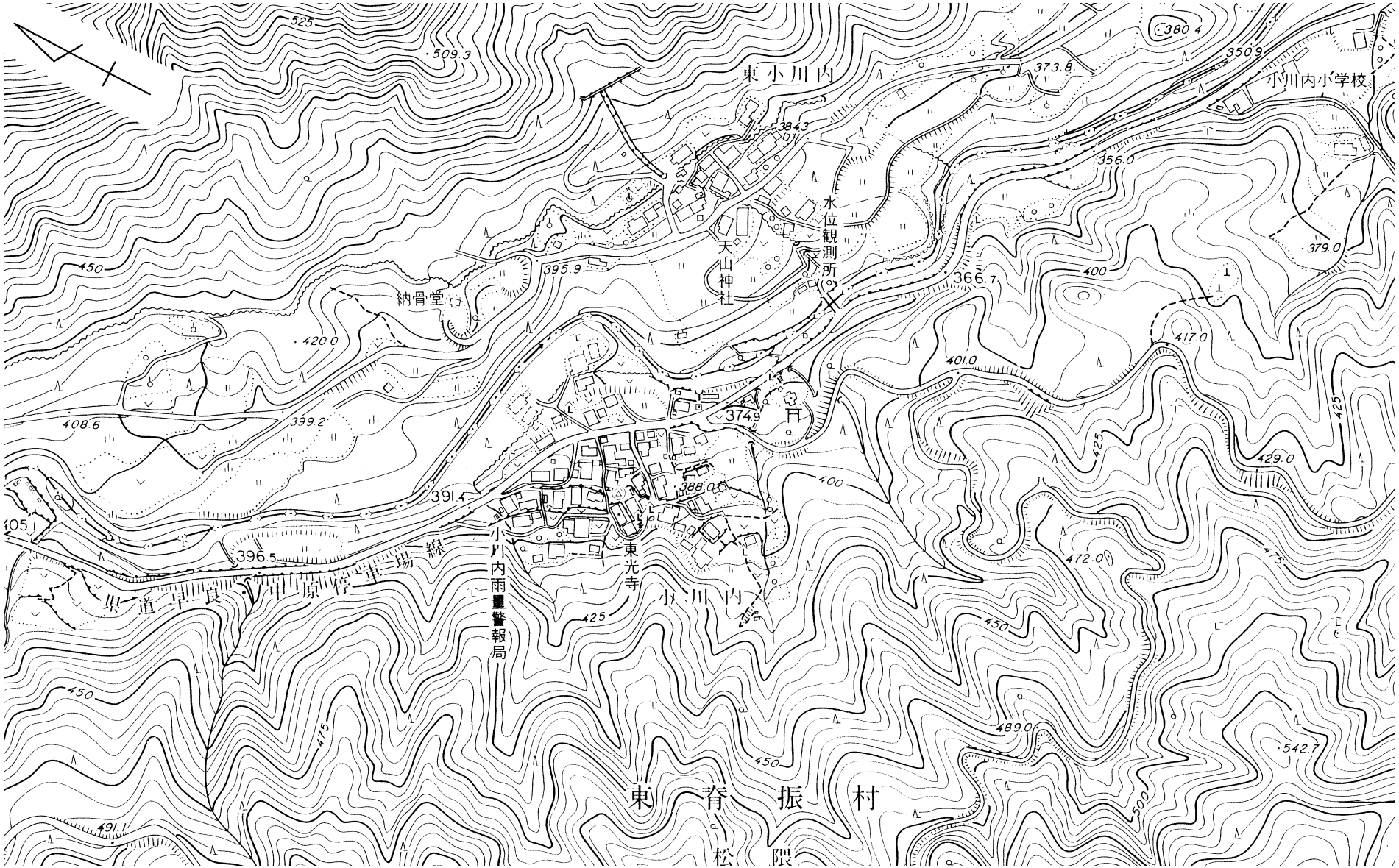


Fig. 6　小川内・東小河内（1/5,000）

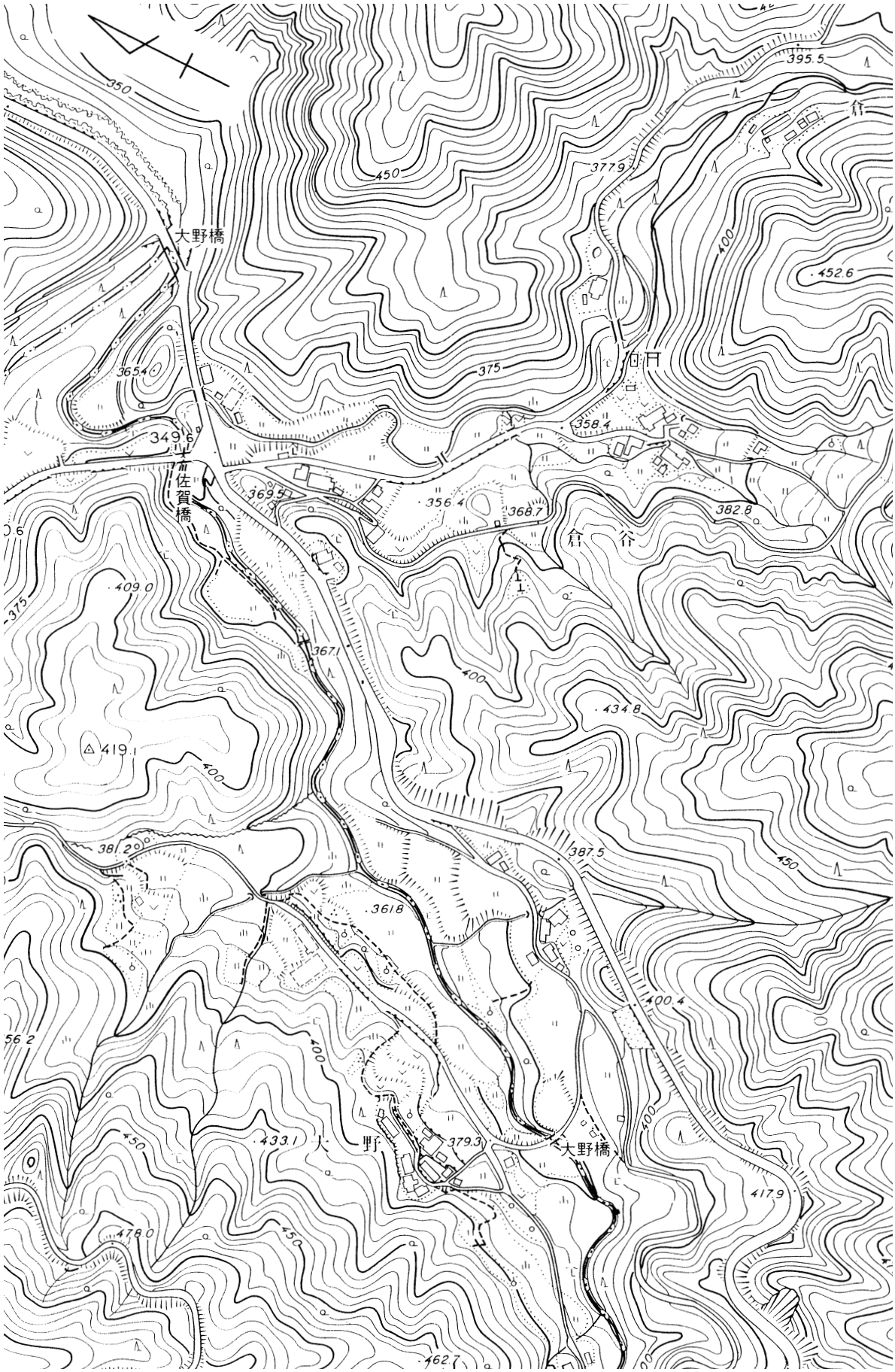


Fig. 7　小川内大野・大野（1/5,000）

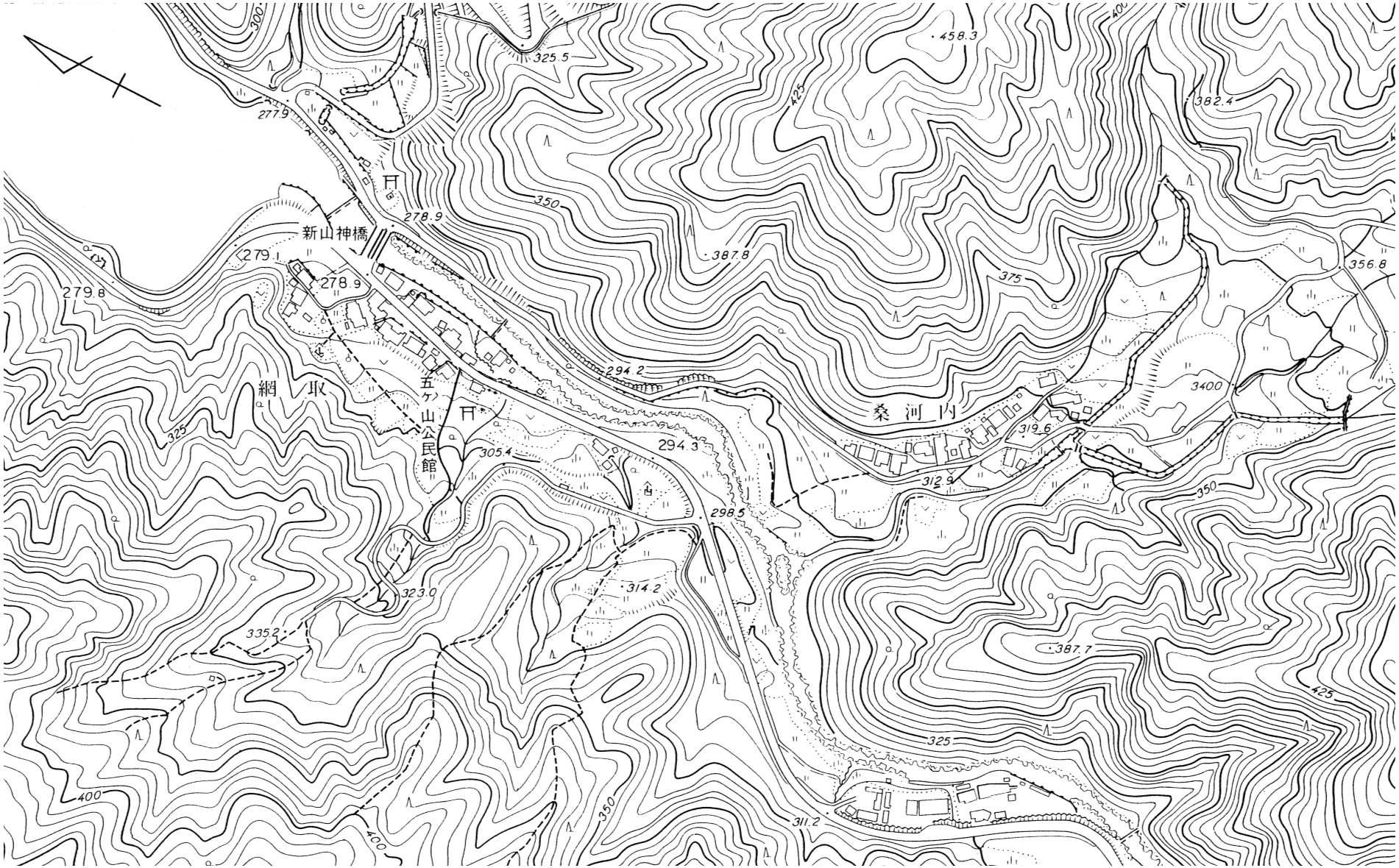


Fig. 8　網取・桑河内（1/5,000）

Ⅰ　序　論

1　調査に至る経過

水に関して

昭和28年（1953）６月25日、この日の朝から降り始めた雨はやがて豪雨となり、その１日の雨量が300㎜を超えた所もあって、結果的に西日本一帯は極めて甚大な被害を被った。いわゆる「西日本大水害」であり、福岡においても筑後川の氾濫が著名であるが、那珂川も同様であり、県内各地で大きな被害を受けた。今でも「28年水害」として語り草になっている。

これを契機に、以前から福岡市の水源確保の候補地であった那珂川町南畑（みなみはた）に多目的ダムを建設する那珂川総合開発事業が立案され、県は那珂川（なかがわ）上流での南畑ダムの建設に着手した。南畑ダムは昭和35年（1960）に着工、同41年（1966）３月に完成した。

この南畑ダム建設に至るまでの間における那珂川水系での洪水被害は、明治38年、大正10年、昭和３・10・12・16・20・24・25・26・28年と多発しており、治水・利水が大きな懸案事項となっていた。南畑ダムの建設途中の昭和38年（1963）にも水害があり、完成後の同48年（1973）、同55年（1980）、同60年（1985）においても那珂川流域では洪水被害が発生している。

一方、昭和53年（1978）から同54年（1979）にかけては例年になく雨が少なく、昭和53年５月～54年３月には福岡市を中心とした都市圏は287日間にわたって給水制限が実施されるという、未曾有の異常渇水に見舞われた。それ以前にも干害は明治27年、昭和６・14・17・33・34・35年に起こっており（註１）、那珂川を含めた河川等を利用しての渇水対策も求められていたのであった。

福岡市は、昭和47年（1972）に政令指定都市となったが、それ以降の近郊も含めた人口はずっと増え続けている。その福岡都市圏の人口増加に対して、もともと水の供給が不足気味であったところにこの昭和53年の異常大渇水に見舞われたのであり、とにもかくにも早急なる対策が要望されることとなった。この非常事態を受けて、洪水調節、既得用水の安定供給、異常渇水時の緊急水の補給等を担う多目的ダムとして計画されたのが五ヶ山ダムである（註２）。

ちなみに、福岡市は明治22年（1889）の発足時から「水」が市政の大きな課題であったとい

Pho.Ⅰ1-1　那珂川上流の清流

Pho.Ⅰ1-2　南畑ダム

う。当初は井戸から水が供給されていたが、明治35年（1902）のコレラの流行ののち、清潔な飲料水の必要性から上水道を整備することとなり、明治42年（1909）には室見川上流の曲淵にダムを建設することが決まったものの、紆余曲折を経て着工したのは大正5年（1916）であり、完成したのは大正12年（1923）のことであった。この曲淵ダムはその後の福岡市の人口急増のために拡張工事がなされ、昭和９年（1934）には容量を倍増して完成した（註３）。

ところで、福岡市域を通って博多湾に流入する河川はすべて二級河川であり、そのうち流路延長が最も長いのは那珂川の35.13㎞である。他の河川は地形的環境に左右されながら、西から見ると瑞梅寺川が12.8㎞、室見川：15.1㎞、樋井川：12.9㎞、御笠川：20.7㎞、多々良川：17.4㎞、というように短いものしかない。これはひとえに福岡平野の拠って立つ地形的制約のなせる結果である。最長の那珂川は脊振山に源を発して北流し博多湾に注ぎ、その流域は福岡市、春日市、那珂川町そして佐賀県神埼郡吉野ヶ里町［旧東脊振村］の２市２町からなり、流域面積は124k㎡である。

那珂川には、既に昭和41年３月に完成した上述の福岡県営南畑ダム、昭和52年（1977）３月に完工した水道専用の福岡市営脊振ダムがあり、五ヶ山ダムは同河川での３つ目のダムということになる。このダムは福岡県が事業主体となって建設することとなった。

福岡県は昭和53～54年の異常大渇水を受けて、昭和54年（1979）には那珂川におけるダム建設に向けての地形測量や物理探査などの予備調査を開始し、昭和58年（1983）からは実施計画調査に入っていった。そして昭和63年（1988）度に至ってダム建設事業が建設省（現：国土交通省）に採択されるに及び、平成３年（1991）12月にはダム軸が決定され、いよいよ本格的な建設に向けてのスタートが切られた。そして、このダムにより、那珂川町五ヶ山地区全域（網取・桑河内・東小河内・大野）と佐賀県東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内のそれぞれの集落の計66世帯の人たちが影響を受けることとなったのである（註４）。

ダム建設の影響を被る地元においては、「五ヶ山ダム対策協議会」（那珂川町）、「五ヶ山ダム水没対策協議会」（東脊振村）が設置され、町・村の行政とも協議しながら、事業主体である福岡県との調整・折衝が進められてきた。

そのような中、福岡都市圏は平成６年（1994）７月～同７年（1995）５月には、昭和53～54年の渇水にも勝る295日間に及ぶ給水制限を強いられるという再度の大渇水に見舞われた。いよいよ福岡都市圏における渇水対策は焦眉の急となってきたのであった（註５）。

その後、平成８年（1996）には、福岡県那珂川町側、佐賀県東脊振村側ともにダム建設事業に係る用地補償調査に関する協定書が締結されるとともに、同年から移転補償のための建物調査も開始された。そして翌平成９年（1997）11月にはダム事業全体計画が認可され、さらに平成12年の地目認定基準締結等を経て、平成14年（2002）12月14日には損失補償基準合意の調印式が行われた。その後は、地元在住の方々の生活再建対策及び補償交渉を進めながら、ダムの完成に向けて、事業が推進されているところである。

なお、このダムに関する文化財の実地調査に入った平成14年（2002）も雨量が少なく、その８月から翌15年（2003）にかけて、断水というような時間給水（給水制限）には至らなかったものの、筑後川等をも含めた水の供給源からの長期にわたる取水制限が実施されていた。福岡都市圏の水不足はますます深刻な事態に立ち至ってきていたのであった。

文化財に関して

ところで、このダム事業に関わる文化財等の調査については、福岡県北谷・五ヶ山ダム建設事務所（現：五ヶ山ダム建設事務所）が主体となって、特に環境影響評価に関連したところで、まずは自然部門での両生類・は虫類の任意観察や聞取り調査が平成２年度から開始された。特に、この那珂川水系において昭和51年（1976）にオオサンショウウオ（地域を定めず指定された特別天然記念物）が捕獲されたことがあったため（註６）、その生息調査も視野に入っていた。それは継続して実施されるとともに、自然環境全体の調査へと及び、平成14年（2002）10月に至って「那珂川水系五ヶ山ダム環境影響調査・評価書（案）」が作成され縦覧に供された。これは「環境影響評価法」による法的手続とは別の任意的な調査という位置づけであった。

また、福岡県と佐賀県の文化財部局及びダム関係部局との合同協議については、五ヶ山ダム建設事務所が主導しながら平成９年（1997）度から開始され、同年６月５日に「第１回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議」が開催された。それと併行しつつ文化財担当者のみの打合せ及び協議も継続して実施されてきた。

さらに、ダム建設事務所としては、近い将来に起こる住民移転の前に、福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山地区（網取・桑河内・東小河内・大野）及び佐賀県神埼郡東脊振村〔現吉野ヶ里町〕小川内地区での住民の人々の生活及び年中行事あるいは自然などを、写真及び映像記録として残すこととし、平成12年度から記録撮影を実施するとともに、文化財調査の情景についても撮影を行った。

そのような経過の中、那珂川町五ヶ山地区及び東脊振村小川内地区の集団移転地の選定や工事等に係る取付け道路等の問題が急ぐべき案件として取り沙汰されてきて、住民の移転を視野に入れた事前の民俗や建造物等の調査が緊急の課題となってきた。特に、住民が集落で暮らしている間に実施しなければならない部門の調査は、早急に体制を整備して取りかかる必要があった。そこで、ダム建設の事業主体者である福岡県において、文化財部局としてもしかるべき対応を図るべく「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」を立ち上げて総合的に調査を実施していくこととし、佐賀県及び地元とも協議しながら委員の人選等も進めていった。

そして、平成13年度中において諸準備を経たなかで、平成14年（2002）４月15日の「第４回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議」及び「第７回文化財担当者打合せ」における諸調整が済んでから、平成14年（2002）５月23日に「第１回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」を開催するに至った。その委員構成はⅠ-２に示すとおりである。

第１回の「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」は五ヶ山現地の大野地区にある五ヶ山ダム建設事務所現場詰所（五ヶ山ダム生活再建相談所）にて開催し、福岡県、佐賀県双方からの推薦による11名の委員には現地を見ていただくとともに、委員長に佐々木哲哉委員、副委員長に服部英雄委員を選出し、これ以後は平成17年度の報告書作成を目指して調査を進めて行くこととした。その後、報告書の作成は諸般の事情から平成19年度に繰り延べることとなった。

以上、述べてきた事を含めた、五ヶ山ダムに関する時系列の経過は、下記に示すとおりである。なお、平成14年度以降の調査経過については現時点までをⅠ-３の経過２の中で触れることとする。

［経過］1

▼1949年(昭和24)8月	豪雨；那珂川洪水
▼1953年(昭和28)6月25日～30日	西日本大水害；那珂川洪水（北九州豪雨）
▼1958年(昭和33)6月～8月	渇水で北九州、福岡市は時間給水
□1960年(昭和35)4月	南畑ダム起工
▼1963年(昭和38) 6月29日～7月1日	豪雨；那珂川洪水（北部九州に集中豪雨）
▼1964年(昭和39)	渇水：福岡市給水制限
□1966年(昭和41)3月	南畑ダム完成
▼1973年(昭和48)7月31日	那珂川洪水（31ヶ所被害）
□1977年(昭和52)3月	脊振ダム完工
▼1978年(昭和53)6月	那珂川洪水
▼1978～79年(昭和53～54)	**福岡都市圏を中心に287日に及ぶ大渇水（五ヶ山ダム計画）**
◇1979～82年(昭和54～57)	五ヶ山ダム予備調査（地形測量・物理探査・水文調査）
▼1980年(昭和55)8月	那珂川洪水
◇1983～87年(昭和58～62)	五ヶ山ダム実施計画調査（試錐・地形測量・物理探査）
▼1983年(昭和58)7月	那珂川洪水
▼1985年(昭和60)6月	那珂川洪水
◎1988年(昭和63)	五ヶ山ダム建設事業採択
◇1991年(平成3)1月～3月	ダム事務所による両生類・は虫類の任意観察・聞取り調査（2年度） (1997年(平成9)9月ダム事務所報告)
◎1991年(平成3)12月	ダム軸（位置）決定（ダム基本設計会議）
◎1992年(平成4)～	付替道路の測量設計に着手
◎1993年(平成5)3月	国道計画の建設省の付替えルート承認
◇1994年(平成6)4月～5月	ダム事務所による両生類・は虫類の任意観察調査（5年度）
◇1994年(平成6)6月～10月	ダム事務所による両生類・は虫類の任意観察・確認調査（6年度） (1997年(平成9)9月ダム事務所報告)
▼1994年(平成6)	**渇水による給水制限等（九州・山口地区では５県48市町村で約190万人、全国では31都道府県285市町村の約994万人に影響）**
◎1996年(平成8)2月	那珂川町側、用地補償調査に関する協定書締結
◎1996年(平成8)5月	東脊振村側、用地補償調査に関する協定書締結
◇1996年(平成8)3月・12月	建物調査
◎1996年(平成8)年7月17日	文化財保存佐賀県協議会等の三者が福岡県知事に対して公開質問状提出
◎1996年(平成8)年7月25日	上記に対し回答
◎1996年(平成8)年7月27日	文化財保存佐賀県協議会が「五ヶ山ダムを考える」の公開講座
◎1996年(平成8)年8月12日	文化財保存佐賀県協議会等の三者が福岡県知事・佐賀県知事に対して『「五ヶ山ダム」建設計画についての再公開質問状』提出
△1997年(平成9)年4月23日(水)	佐賀県庁内会議室にて、佐賀県（文化財課、ダム対策課、東脊振村文化財係)、福岡県（河川開発課、北谷・五ヶ山ダム事務所）と協議

△1997年(平成9)年4月25日（金）	那珂川町役場内会議室にて、那珂川町（社会教育課、企画課）、福岡県（河川開発課、北谷・五ヶ山ダム事務所）と協議
△1997年(平成9)年4月30日（水）	東脊振村役場内会議室にて、佐賀県東背振村（教育委員会、企画課）、福岡県（河川開発課、北谷・五ヶ山ダム事務所）と協議
△1997年(平成9)6月5日（木）	第１回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議
△1997年(平成9)8月6日（水）	第１回文化財担当者打合せ　於：東脊振村役場内会議室
△1997年(平成9)9月4日（木）	第２回文化財担当者打合せ　於：北谷・五ヶ山ダム建設事務所
◇1997年(平成9)9月	『五ヶ山ダム環境調査業務実施状況』報告書　於：北谷・五ヶ山ダム建設事務所
◇1997年(平成9)9月24日～26日	両生類・は虫類の確認調査実施（オオサンショウウオ）（8年度）
◇1997年(平成9)10月	『五ヶ山ダム環境現況補足調査《両生類・は虫類補足調査》報告書』
△1997年(平成9)10月17日(金)	第３回文化財担当者打合せ　於：北谷・五ヶ山ダム建設事務所
◎1997年(平成9)11月	ダム事業全体計画認可
△1998年(平成10)2月18日(水)	第２回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議　於：北谷・五ヶ山ダム建設事務所
△1998年(平成10)5月28日(木)	第４回文化財担当者打合せ　於：北谷・五ヶ山ダム建設事務所
◇1998年(平成10)4月～10月	ダム事務所による両生類・は虫類等環境調査（9年度）
△1998年(平成10)10月21日	東脊振村との協議／佐賀県文化財課との協議
△1998年(平成10)11月1日	福岡県文化財保護課と協議
△1998年(平成10)11月13日	佐賀県文化課と協議
◇1998年(平成10)12月	『五ヶ山ダム用地立木調査（19工区）工事報告書（文化財文献調査編）』
◇1999年(平成11)3月～6月	ダム事務所による両生類・は虫類等環境調査（10年度）
▼1999年(平成11)6月	洪水
◇1999年(平成11)10月～12.3月	ダム事務所による両生類・は虫類等環境調査（11年度）
◇2000年(平成12)4月～13.7月	ダム事務所による両生類・は虫類等環境調査（12年度）
◎2000年(平成12)3月	地目認定基準締結
△2000年(平成12)7月19日	佐賀県庁にて協議
◎2001年(平成13)2月	地目認定了解
◎2001年(平成13)3月	格差基準（案）の提示
◇2001年(平成13)7月～14.3月	ダム事務所による両生類・は虫類等環境調査（13年度）
◇2001年(平成13)9月4日	『五ヶ山ダム建設事業に係る環境影響評価（調査等進捗状況）』
△2001年(平成13)9月12日(水)	第３回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議
△　〃	第５回文化財担当者打合せ　於：東脊振村保健福祉センター「きらら館」
△2001年(平成13)11月6日(火)	第６回文化財担当者打合せ　於：五ヶ山ダム建設事務所
△2002年(平成14)4月15日(月)	第４回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議
△　〃	第７回文化財担当者打合せ　於：五ヶ山ダム建設事務所

註

1　福岡市役所『福岡市史　第八巻　昭和編後編（四）』　昭和53年（1978）３月

2　土木学会関西支部の編集になる『水のなんでも小事典　―飲み水から地球の水まで―』講談社（1989.10）には福岡渇水が群を抜いた異常事態であったこと、そしてそれに伴う五ヶ山ダムの建設のことに触れている（P132～134）。

3　柳　猛直　1995『福岡歴史探訪　早良区編』海鳥社

4　五ヶ山は『筑前国続風土記』等に記されている如く、網取・道十里（道枝折）・桑河内・大野・東小河内の五村（集落）を指して“五箇山”と称していた。しかるに、昭和42（1967）年に南畑ダムが竣工して道十里集落は水没し消滅した。その後の五ヶ山地区は現在まで４集落が存続してきたものである。

　　貝原益軒編　1703『筑前国続風土記』

5　平成９年（1997）、福岡地区水道企業団が事業主体となって海水淡水化事業を実施することが決まり、同13年（2001）に福岡市東区に「海の中道奈多海水淡水化センター」の建設が着工され、同16年（2004）に完成した。当初は同17年（2005）４月より「まみずピア」として稼働開始予定であったが、直前の３月20日に発生した福岡県西方沖地震で被災したため、供用開始は６月１日となった。１日あたりの最大生産量は約５万トンで、国内最大である。

6　昭和51年（1976）７月に大野川で全長70㎝のオオサンショウウオが捕獲されている。その後平成６年以降に同河川域で調査を実施したものの、その存在は確認されていない。これについて、戦後すぐの頃（1945～1947）に那珂川河畔で養殖していた人があったらしく、それが放流されたものの可能性が高いとみられている。

2　調査組織

平成14年度に、『五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会』を設置し、その下に、福岡県教育庁総務部文化財保護課が事務局となって調査を進めた。その各機関に係る関係者等は以下のとおりである。

◎　**五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**　〔平成14（2002）年度～17（2005）年度〕

委員長	佐々木哲哉	［民俗］	（田川市石炭資料館長：～平成16年3月まで）
副委員長	服部　英雄	［歴史］	（九州大学大学院比較社会文化研究院　教授）
委員	富田　正幸	［行政］	（那珂川町教育委員会教育長：平成14年11月まで）
	篠田　直喜	［行政］	（那珂川町教育委員会教育長：平成15年1月以降）
	築地　　忠	［行政］	（東脊振村教育委員会教育長）
	米倉　利昭	［民俗］	（長崎純心大学大学院教授）
	吉良　国光	［歴史］	（大分県立芸術文化短期大学教授）
	佐藤　正彦	［建造物］	（九州産業大学工学部教授）

山野　善郎　［建造物］　（九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門建築設計学講座助教授：～平成16年3月まで）
（平成16年4月～　建築史塾　Archist）
錦織　亮介　［美術工芸］（北九州市立大学文学部教授）
宮島　　寛　［自然］　（九州大学名誉教授）
東　　和敬　［自然］　（佐賀大学名誉教授）

◎　**五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会　調査員**〔平成14（2002）年度～17（2005）年度〕

井上　　晋　［自然：植物］　（九州大学大学院農学研究院助教授）
西田　民雄　［自然：地質］　（佐賀大学文化教育学部教授）
下山　正一　［自然：地形］　（九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門古環境学分野助手）
川野　良信　［自然：地質］　（佐賀大学文化教育学部助教授）
柚原　雅樹　［自然：地質］　（福岡大学理学部地球圏科学科地学分野助手）
魚住　賢司　［自然：陸産貝類］（日本貝類学会評議員）
永渕　成樹　［自然：陸産貝類］（とんぼ研究会）
中野　　等　［歴史］　（九州大学大学院比較社会文化研究院助教授）
松原　孝俊　［歴史民俗・言語］（九州大学言語文化部言語文化系教授　／韓国研究センター教授）
本田　佳奈　［歴史］　（九州大学大学院比較社会文化研究院：平成14～17年）
渡邊　太祐　［歴史］　（九州大学大学院比較社会文化研究院：平成14～15年）
江藤　千春　［歴史］　（東京大学大学院：平成14～16年）
北島由紀子　［歴史］　（九州大学大学院比較社会文化研究院：平成15～16年）
吉田　洋一　［歴史］　（久留米大学大学院比較文化研究所研究員：平成14～16年）
（佐賀県佐賀城歴史館：平成17年）
内山　一幸　［歴史］　（九州大学大学院比較社会文化研究科：平成16年）
中西　裕二　［民俗］　（福岡大学教授：平成14～17年）
松村　利規　［民俗］　（福岡市博物館）
福間　裕爾　［民俗］　（福岡市博物館）
清永久仁子　［民俗］　（ふくおか・筑紫民俗の会）
岩本　　恵　［民俗］　（ふくおか・筑紫民俗の会）
寺崎　直利　［民俗］　（ふくおか・筑紫民俗の会）
一瀬　　智　［民俗］　（ふくおか・筑紫民俗の会）
河村　麻子　［民俗］　（ふくおか・筑紫民俗の会）
岡　紀久夫　［歴史・写真］
祐徳　信武　［自然：岩石］　（福岡大学：平成15年）
宇藤　千恵　［自然：岩石］　（福岡大学：平成16年）
味志　秀昭　［自然：岩石］　（佐賀大学：平成15～16年）

【福岡県】

◎　土木部河川開発課

	14	15	16	17	18	19
課長	江口友弘	黒川博司	大場　優	大場　優	井上徳太郎	西田直人
課長補佐	筒井保臣	野中良徳	筒井保臣	筒井保臣	江上直治	江上直治
課長技術補佐	近藤伸幸	井上徳太郎	西田直人	西田直人	後藤俊一	岡田裕彰
建設係長	岡田裕彰	岡田裕彰	野上嘉久	野上嘉久	野上嘉久	平川忠敬
主任技師	濱地健吾	濱地健吾	濱地健吾	濱地健吾		
			中川順野	中川順野	中川順野	
				四元秀哲	畑野貢二	畑野貢二
					四元秀哲	田中快彰
						四元秀哲

◎　五ヶ山ダム建設事務所

	14	15	16	17	18	19
所長	笠井博文	笠井博文	井上徳太郎	井上徳太郎	西田直人	後藤俊一
庶務課長	野中良徳	野中良徳	成清勝己	成清勝己	山西　隆	山西　隆
用地係長	吉良忠明	神吉龍一				
事務主査	小旗茂樹	田中　隆				
事務主査	神吉龍一	執行正則				
主任主事	井口恭一	井口恭一				
主任主事		齊藤健治				
主事	井上雄一郎	井上雄一郎				
用地第一係長			杉野卓治	白井正剛	白井正剛	白井正剛
事務主査			田中　隆	田中　隆	田中　隆	
事務主査			緒方久雄	戸田川洋治	戸田川洋治	戸田川洋治
事務主査				緒方久雄	緒方久雄	緒方久雄
主任主事			齊藤健治	龍田陽明	龍田陽明	龍田陽明
主任主事					中田法正	佐藤麻実子
主　　事			宮本純子	宮本純子		
技　　師			中村道夫	中村道夫		
技 能 員					秀島正規	秀島正規
用地第二係長			神吉龍一	神吉龍一	金富実一	金富実一
事務主査			執行正則	安永滋明	安永滋明	安永滋明
事務主査				執行正則	執行正則	執行正則
事務主査						宮本清治
主任主事			宮本清治	宮本清治	宮本清治	
主任主事			白垣幸助	白垣幸助	佐藤麻実子	中田法正
主任主事			原野友重	原野友重	原野友重	

主任主事				佐藤麻実子	蓑田一朗	
主　　事			蓑田一朗	蓑田一朗	信川茂樹	信川茂樹
調整係長	永野栄一	永野栄一	中野光治	中野光治		
技術主査		大野重雄	大野重雄			
事務主査		松本茂美	松本茂美	松本茂美		
主任主事	堤　幹雄	宮本清治				
主任主事	大町徳一	白垣幸助				
技　　師	中村道夫	中村道夫				
工務課長	井上徳太郎	堤　晴夫	堤　晴夫	岡田裕彰	岡田裕彰	鴨打　章
副長	宮丸正和	宮丸正和	奥村　修	奥村　修	龍　啓明	
技術主査		中條信也	中條信也	尊田誠二	尊田誠二	
技術主査					森原秀樹	
主任技師	中條信也			大曲哲次	大曲哲次	
主任技師	井上高志	井上高志	井上高志	井上高志	井上高志	
主任技師			新山　晃	豊増隆敏	豊増隆敏	
主任技師	畑野貢二	畑野貢二	畑野貢二	畑野貢二	外園寿郎	
主任技師	中園博一	中園博一	中園博一	中園博一	中園博一	
主任技師		神崎孝二	神崎孝二	神崎孝二	神崎孝二	
工務第一係長						龍　啓明
技術主査						森原秀樹
技術主査						大曲哲次
技術主査						豊増隆敏
主任技師						藤木稚昭
技　　師						合原周作
工務第二係長						原口和也
技術主査						尊田誠二
主任技師						尾崎幸太
主任技師						外園寿郎
主任技師						堀口幸一

◎　**福岡県教育委員会**

	14	15	16	17	18	19
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	森山良一	森山良一	森山良一
次長	三瓶寧夫	三瓶寧夫	清水圭輔	清水圭輔	清水圭輔	楢崎洋二郎
総務部長	松本通憲	清水圭輔	中原一憲	中原一憲	大島和寛	大島和寛
文化財保護課長	井上裕弘	井上裕弘	井上裕弘	久芳昭文	磯村幸男	磯村幸男
副課長				川述昭人	佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事				佐々木隆彦		

参事			新原正典	新原正典	新原正典	新原正典
参事						伊﨑俊秋
参事兼課長技術補佐						
	橋口達也	川述昭人	川述昭人	木下　修	池邉元明	池邉元明
	川述昭人	木下　修	木下　修	池邉元明	小池史哲	小池史哲
参事兼課長補佐	久芳昭文	久芳昭文		安川正郷	安川正郷	中薗　宏
課長補佐			安川正郷			
・管理係						
参事補佐兼係長	古賀敏生	古賀敏生		稲尾　茂		
係長			稲尾　茂		井手優二	井手優二
事務主査			宮崎志行			
事務主査			石橋伸二	石橋伸二	野中　顯	
主任主事	秦　俊二	末竹　元	末竹　元	末竹　元	渕上大輔	渕上大輔
主任主事				渕上大輔	柏村正央	柏村正央
主任主事					小宮辰之	小宮辰之
主　　事						野田　雅
・文化財保護係						
参事補佐兼係長	池邉元明	池邉元明	池邉元明	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	
技術主査		田上　稔	田上　稔	田上　稔	田上　稔	田上　稔
技術主査				齋部麻矢	齋部麻矢	齋部麻矢
主任技師	田上　稔					
主任技師	久野隆志	久野隆志	久野隆志	久野隆志	久野隆志	久野隆志
主任技師		國生知子	國生知子	國生知子	國生知子	國生知子
技　　師	國生知子					
臨時職員	荒川直子	平尾直子	平尾直子	平尾直子	平尾直子	平尾直子
	三浦明美	三浦明美	三浦明美	三浦明美	三浦明美	三浦明美
						中村　理
・重要大規模遺跡対策班						
参事補佐	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋				
技　　師	平尾和久					
・大規模遺跡対策・災害復旧班						
参事補佐			伊﨑俊秋			
技術主査					重藤輝行	重藤輝行
主任技師				重藤輝行		
主任技師				入佐友一郎	入佐友一郎	入佐友一郎
主任技師			小澤佳憲	小澤佳憲	小澤佳憲	小澤佳憲
・調査第一係						
参事補佐兼係長	佐々木隆彦	小池史哲	小池史哲	小池史哲	小田和利	小田和利

参事補佐	飛野博文	飛野博文	飛野博文			
技術主査				吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
主任技師（福岡教育事務所：地域担当）					今井涼子	今井涼子
主任技師（福岡教育事務所：地域担当）						岡寺未幾
臨時職員	加藤陽子					
福岡教育事務所　生涯学習課文化班						
主任技師	吉村靖徳	重藤輝行	重藤輝行	森井啓次		
九州歴史資料館　学芸第一課						
主任技師	井形　進	井形　進	井形　進	井形　進	井形　進	井形　進

◎　**那珂川町教育委員会**

	14	15	16	17	18	19
教育長	富田正幸（～11月）					
	篠田直喜（１月～）	篠田直喜	篠田直喜	篠田直喜	篠田直喜	篠田直喜
教育部長	重松喬次	重松喬次	重松喬次	真鍋憲生	八尋博基	八尋博基
生涯学習課長	内野　学	上野信之	上野信之	簑原義文	簑原義文	八藤丸彰
文化財係長	澤田康夫	澤田康夫	澤田康夫	藤島　仁	簑原義文	藤島正春
主査技師	茂　和敏	茂　和敏	茂　和敏	茂　和敏	茂　和敏	茂　和敏
	佐藤昭則	佐藤昭則	佐藤昭則	佐藤昭則	佐藤昭則	佐藤昭則
	吉岡賢生	吉岡賢生	吉岡賢生	吉岡賢生	吉岡賢生	吉岡賢生

【佐賀県】

◎　**佐賀県教育委員会**

	14	15	16	17	18	19
教育長	松尾正廣	松尾正廣				
		吉野健二	吉野健二	吉野健二	吉野健二	吉野健二
副教育長	溝上雅章	溝上雅章	中野哲太郎	中野哲太郎	古谷　宏	古谷　宏
文化課長	佛坂勝男	香月博子	初村健二	初村健二	松永光生	松永光生
参事				東中川忠美	東中川忠美	東中川忠美
副課長	東中川忠美	東中川忠美	東中川忠美	松本誠一	松本誠一	松本誠一
文化財指導班						
専門員	鈴田由起夫	鈴田由起夫				
企画調整主査	徳富則久	徳富則久				
主査	五島昌也	白木原宜				
主査	宇治　章	宇治　章				
主事	小渕重樹	小渕重樹				

文化財指導担当						
主幹			鈴田由起夫			
係長			徳富則久	徳富則久	徳富則久	徳富則久
係長				樋口秀信	樋口秀信	樋口秀信
主査			白木原宜	白木原宜	白木原宜	細川金也
主査			宇治　章	宇治　章	山崎和文	山崎和文
指導主事			小渕重樹	小渕重樹	小渕重樹	小渕重樹
佐賀県立博物館						
学芸員	竹下正博	竹下正博	竹下正博	竹下正博	竹下正博	竹下正博

◎　**吉野ヶ里町［旧東脊振村］教育委員会**

	14	15	16	17	18	19
［東脊振村］						
教育長	築地　忠	築地　忠	築地　忠	築地　忠		
教育総務課長	平野恵一	平野恵一	柿本一則	直塚員幸		
副課長		福光正弘	福光正弘			
文化財係長	久保伸洋	久保伸洋	久保伸洋	久保伸洋		
主任主事	河野竜介	河野竜介	河野竜介	河野竜介		
［吉野ヶ里町：H18.3.1～］						
教育長				重松成典	井上和洋	井上和洋
社会教育課長					直塚員幸	直塚員幸
副課長				田中清美	田中清美	田中清美
文化財係長					久保伸洋	草野誠司
					草野誠司（H19.1.1～）	
主任主事				草野誠司	草野誠司	
主任主事					河野竜介	河野竜介

Pho.Ⅰ2-1　第１回指導委員会

Pho.Ⅰ2-2　第４回指導委員会

3　調査経過

平成14年度から17年度の間の文化財調査等の経過は後掲の［経過］２に示すとおりである。この４～５年の間にもダム建設に関わる状況は刻々と変化していった。

まず、平成14年（2002）12月14日には福岡県と地元（那珂川町五ヶ山・東脊振村小川内）とで損失補償基準書の調印式が行われ、着工へと正式に進んでいくこととなった。

福岡県側の五ヶ山は42戸、佐賀県側の小川内は24戸の合計66戸が移転していくこととなり、那珂川町下梶原に31戸、同別所に２戸、東脊振村三津に７戸が集団移転し、他はそれぞれが個別に移転していくことが平成15年度末頃までには決まってきた。那珂川町下梶原地区の集団移転予定地は広さ約35,000㎡と広大であるが、ここについては試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、平成15年12月～16年３月と、平成16年５月～12月に２次にわたる発掘調査が行われ、入道町遺跡として報告されている。

発掘調査終了後の造成工事には九州新幹線のトンネル掘削土砂が用いられ、造成後には住宅工事が進められていった。そして平成17年末までには10戸が新しい土地での生活を始め、平成18年春には15戸ほどが完成した。平成18年度中には全世帯の移転が完了する予定である。

そのような中、平成17年（2005）10月16日には小川内地区において、佐賀県知事ほかの来賓の方々と地元住民その他の出席を得て「小川内地区離村式・小川内小学校廃校式典」が挙行された。かつて小川内に住み、やがてふるさとをあとにして現在は別の所に居住しているという人も出席されていた、とのことであった。

ところで、平成15年（2003）５月23日には五ヶ山ダムが「水源地域対策特別措置法」の適用ダムに指定され、これを受けて平成16年（2004）６月14日には「五ヶ山ダム」の106億円に及ぶ水源地域整備計画が国土交通省により決定されている。

また福岡県は、平成18年（2006）２月15日に、これまで五ヶ山ダムの完成予定を平成22（2010）年度としていたのを、伊良原ダムとともに平成29年（2017）度末になる見通しであることを発表した。

なお、平成14年（2002）11月18日には、一般国道385号東脊振トンネルの起工式が行われ、平成16年（2004）２月には小川内までの1.41㎞が貫通し、周辺整備を終えてのち、平成18年（2006）３月21日には開通式が行われた。

Pho.Ⅰ3-1　小川内地区離村式・小川内小学校廃校式典

Pho.Ⅰ3-2　東脊振トンネル開通式

さて、文化財調査にかかるところでは、既述の如く、第１回の「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」は平成14年（2002）５月23日に那珂川町五ヶ山の現地で開催し、現地調査が終わりに近づいた平成17年（2005）６月の第７回委員会も、同じく現地にて開催した。この４年間で現地の景観は少なからず変貌していた。それ以外の委員会は福岡市博多区の吉塚合同庁舎内の福岡県教育庁福岡教育事務所視聴覚室などを主会場として開催した。

第１回の委員会の後、地元の皆さんへは役員会や総会の場で文化財調査に対する協力依頼を行い、承諾を得たうえで、実際には９月になってまず歴史部門の調査に入った。その後は美術工芸部門、建造物部門、そして自然部門、民俗部門といった各部門で調査が進められた。当初スケジュールでは平成16年度中に現地調査を終了し、17年度は補足調査と報告書作成に充てることとしていたが、結果的には17年度まで現地調査が延伸することとなり、報告書作成については18年度に諸作業を行い、19年度に刊行することとなった（Tab.Ⅰ3-1-1）。

現地調査においては、福岡県筑紫郡那珂川町大字五ヶ山の４集落（網取・桑河内・東小河内・大野）及び佐賀県神埼郡東脊振村［現吉野ヶ里町］大字松隈の１集落（小川内）の合計５集落にそれぞれ「地元協力者」をお願いして、集落内の諸調査にかかる調整及び聞取り調査や調査補助、案内等の諸業務に携わっていただいた。

それぞれの分野の現地調査は後掲の［経過］２を参照されたい。

歴史部門においては、武廣邦敏・進藤直文・大石久一・山田善寛さんの各家から文書等を収集、借用し、また鬼塚泰介・築地正輝さんからは書籍等をいただいた。これらの資料整理は福岡県教育庁福岡教育事務所文化財作業室及び五ヶ山ダム建設事務所にて実施した。武廣邦敏家文書の９件及び鬼塚泰介さん寄贈の１件については翻刻して本報告書に収録した。

民俗部門においては、現地調査は、小川内と東小河内・大野が中西裕二・谷智子氏と福岡大学、網取・桑河内が松村利規氏と「ふくおか・筑紫民俗の会」、道十里が佐々木哲哉氏とで分担した。その中で、西村哲也・武廣邦敏・築地幸子・鬼塚健吉・田中保・伊藤博行・築地敏恵・築地蔵次・築地九内・鬼塚泰介・築地正輝の皆さんから民具等の寄贈を受けた。その一覧はTab.Ⅺ4-1①～⑤のとおりであり、これらについては那珂川町及び吉野ヶ里町の教育委員会にて保管、管理していくこととなる。

また、昭和41年（1966）３月に完成した南畑ダムの事務所課長（当時は那珂川ダム建設事務

Pho.Ⅰ3-3　小川内公民館にて聞取り調査

Pho.Ⅰ3-4　小川内調査風景

所）であった大庭武雄氏や山田善寛氏（網取）、築地九内氏（桑河内）は貴重な写真を所蔵されていたので、その一部を掲載させていただいた。

なお、平成14年［2002］11月28日の第２回委員会の開催間近であった11月23日には、委員である那珂川町教育委員会の富田正幸教育長が急逝されるという予期せぬ事態が起こったが、翌15年１月からは後任の篠田直喜教育長が引き継いで委員に就任された。故富田委員におかれては深く御冥福をお祈りいたします。

このたびの調査については、地元協力者は言うに及ばず、地元住民の皆さん方の御協力及び関係機関の方々の助力・支援があったからこそ、大きな障害もなく進捗したのであり、この報告書の完成に至ったものである。関係の皆さんに深甚の謝意を表したい。

また、調査中や収集品の整理等において、福岡県五ヶ山ダム建設事務所をはじめ、多くの機関にも大変お世話になった。厚くお礼申し上げます。

この報告書は、五ヶ山ダムの建設に伴って影響を受ける集落の、歴史・民俗・建造物・美術工芸について、その周囲の自然とともに記録として残すことを第一義とする。那珂川町五ヶ山（網取・桑河内・東小河内・大野）及び東脊振村小川内に住んでいた皆さんが、ここで暮らしていたことの証しをその環境とともに記録するものである。

また、この報告の内容は、自然や歴史・民俗・建造物・美術工芸の各分野で学問的にも寄与するところが少なくないであろう。

［お世話になった方々・機関］　（所属・肩書き等は、平成14～18年度の当初の所属）

阿部憲之介	（櫛田神社宮司）	／	内山芙美子	（九州大学工学部建築学科）
大庭武雄	（元南畑ダム建設事務所）	／	木村達美	（犀川町教育委員会）
熊谷信孝	（福岡県環境審議会委員）	／	柴田正美	（日本風景写真協会）
謝　荔	（法政大学社会学部助教授）	／	進藤直文	（西九州大学教授）
田坂大蔵	（福岡市博物館副館長）	／	田鍋隆男	（福岡市博物館学芸課長）
張　磊	（九州大学工学部大学院）	／	筒井貞雄	（福岡植物研究会代表）
長野　覺	（日本山岳修験学会顧問）	／	埜口章順	（脊振山積翠教寺修学院住職）
久枝和彦	（九州大学農学部大学院）	／	日高正幸	（東峰村教育委員会）
松尾美幸	（建築史塾Archist）	／	宮崎潤二	（佐賀県林業試験場）
宮原文彦	（福岡県森林林業技術センター）	／	山口英樹	（日本樹木医会会員）
山崎周一	（佐賀県東松浦郡七山村役場）	／	山田龍蹊	（KBC水と緑のキャンペーン事務局）

青木政澄・吉田繁一・古川秀幸・村上敦（糸島郡二丈町役場・教育委員会）

永見秀徳（筑後市教育委員会）

古賀正明・石川健悟・工藤博子・水野晶子（日本シネフィルム研究所）

瀬戸秀樹・高野恵・宮下祥子（福岡大学研究推進部研究振興課）

今村洋子・中村佳子・水落昭男・大場慎吾・野村護・重松アス子・春田浩良・馬頭和子

楠　正治・佐藤聡子・久保美子・渋田　喬・安武敏夫・江崎久誌・原　順子・石田慶喜（木曜古文書会）

那珂川町立福岡女子商業高校

【五ヶ山ダム関係の文化財調査でお世話になった地元の方々】

〔**網取**〕　田中周二、田中保、田中信之、田中計、田中政博・絹子、築地哲郎・アサノ
山田和弘・タマヨ、山田和馬［地元協力者］・ミツ江、山田勉・シズ子
山田善寛［地元協力者：H15・16年度五ヶ山区長］・弥生

〔**桑河内**〕　鬼塚健吉・友恵・ミキ、田中幸太郎・ノブヨ、田中光義、田中幸徳、築地笑子
築地勝蔵［地元協力者］・富喜子、築地辰男、築地九内［地元協力者］・洋子

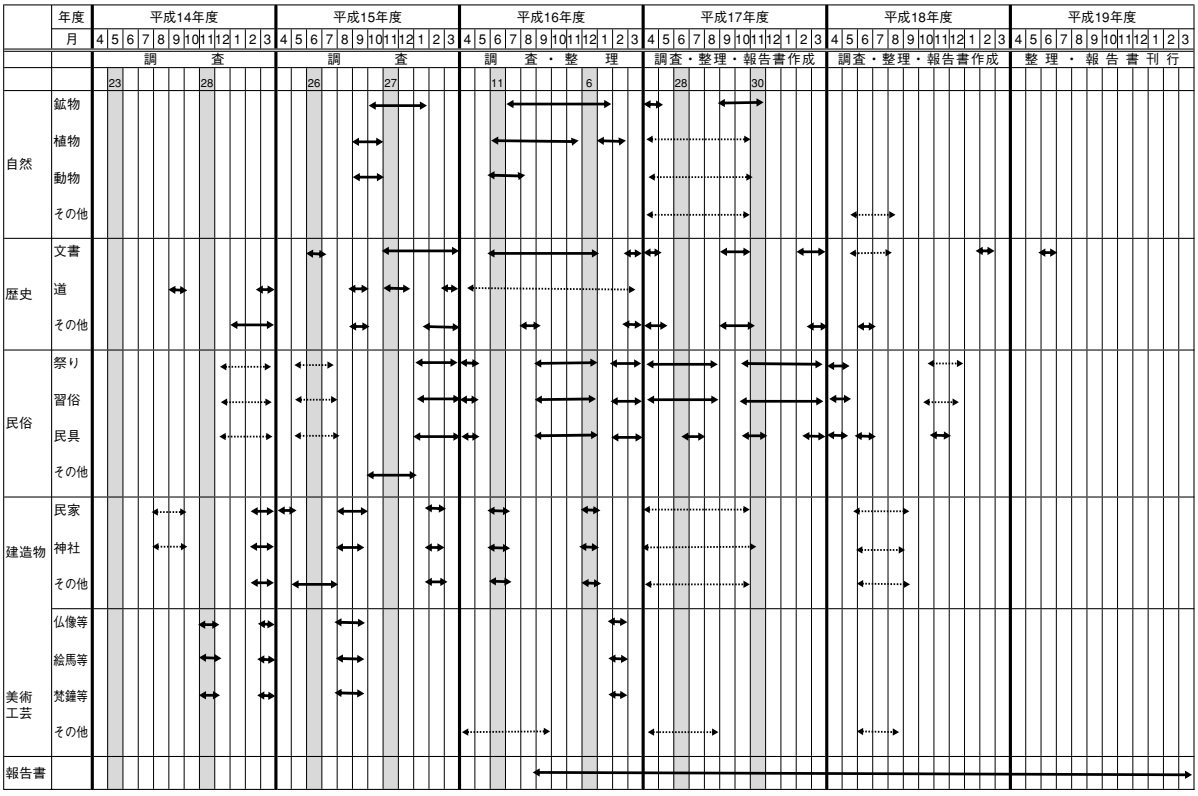
〔**大野**〕　鬼塚和生、築地幾雄［五ヶ山ダム対策協議会会長］、築地蔵次［地元協力者：H14年度区長］、築地弘孝、築地俊一・益穂、築地徳實［地元協力者］・裕、築地敏恵［地元協力者］、築地均、築地儀忠

〔**東小河内**〕　伊藤茂志、伊藤博子、築地山治・ミヨ子、築地正輝・壽子、伊藤政喜、伊藤博行［地元協力者：H17年度五ヶ山区長］・信子、伊藤港、築地和弘・築地松蔵［地元協力者］・ナナエ・憲一・小百合、築地文隆

〔**小川内**〕　井上茂美、大石登、大石久一、大石博見、大石雅子、大石泰之、進藤一枝、杉谷五人、杉谷シゲ子、杉谷千代子、杉谷初子、宗雲綾子、宗雲敏夫、杉谷信弘［五ヶ山ダム水没対策協議会会長］・ヒサ千代、宗雲千代美、宗雲孝吉［地元協力者：H14・15・16年度区長］、宗雲政美、宗雲佑太、武廣邦敏［地元協力者］・都、武廣哲哉、武廣徳二、武廣敏幸、西村哲也［地元協力者：H17年度区長］

〔**その他**〕　鬼塚七三男、鬼塚カネ・高浜四郎・ゆかり

※小川内の杉谷五人さんは平成17年９月に逝去された。謹んで御冥福を祈ります。



Tab.Ⅰ3-1-1　五ヶ山ダム関係文化財調査スケジュール

［経過］2

■平成14(2002)年度

△4／15(月)	第４回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議及び第７回文化財担当部局打合せ	於：五ヶ山ダム建設事務所
□5／23(木)	**第１回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：五ヶ山ダム生活再建相談所
△7／8(月)	五ヶ山ダム対策協議会役員会（那珂川町）	於：五ヶ山ダム生活再建相談所
△7／13(土)	五ヶ山ダム対策協議会総会（那珂川町）	於：五ヶ山ダム生活再建相談所
◇9／16(月)～9／17(火)	歴史部門調査：東小河内・大野	
△10／30(水)	五ヶ山ダム水没対策協議会役員会（東脊振村）	於：小川内公民館
△11／11(月)	五ヶ山ダム水没対策協議会全員協議会（東脊振村）	於：小川内公民館
◇11／13(水)～11／14(木)	美術工芸部門調査：東小河内・大野・桑河内・網取	
◎11／18(月)	東脊振トンネル起工式	
□11／28(木)	**第２回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：吉塚合同庁舎２Ｆ視聴覚室
◎12／14(土)	損失補償基準書の調印式	於：那珂川町役場

平成15(2003)年

◇3／15(土)～3／31(月)	建造物部門調査：小川内
◇3／18(火)～3／19(水)	歴史部門調査：大野・小川内
◇3／19(水)	美術工芸部門調査：小川内・東光寺

■平成15(2003)年度

◇4／5(土)～4／12(土)	建造物部門調査：小川内	
△4／22(火)	第５回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議及び第８回文化財担当部局打合せ	於：五ヶ山ダム建設事務所
◇5／21(水)～7／27(日)	建造物部門聞き取り調査：網取・桑河内・東小河内・大野	
◎5／23(金)	五ヶ山ダムが水源地域対策特別措置法の適用ダムに指定される（国土交通省）	
◇6／20(金)	文書調査：小川内	
□6／26(木)	**第３回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：吉塚合同庁舎２Ｆ視聴覚室
◇8／4(月)	美術工芸部門調査：小川内	
◇8／5(火)～9／9(火)	建造物調査：桑河内・網取	
◇9／1(月)～9／3(水)	歴史部門調査：網取・桑河内	
◇9／9(火)	美術工芸部門調査：那珂川町市ノ瀬日吉神社	
◇9／11(木)	自然部門［植物・陸産貝類］調査	
◇9／17(水)～10／21(火)	自然部門［植物］調査：東脊振村・脊振村	
◇9／25(木)～10／22(水)	自然部門［陸産貝類］調査：小川内・東小河内・網取・桑河内	
◇10／4(土)	自然部門［地形・地質］調査	
◇10／27(月)～12／18(木)	自然部門［地質・岩石］調査	
◇11／13(木)～12／17(水)	歴史部門［文書］調査	
□11／27(木)	**第４回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：吉塚合同庁舎２Ｆ視聴覚室
◎12／15(月)	五ヶ山ダム関係の集団移転地として下梶原地区に31戸（那珂川町議会）	

平成16(2004)年

◇1／8(木)　自然部門［地質・岩石］調査

◇1／13(火)～3／4(木)　歴史部門［文書］調査

△1／27(火)　第６回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議及び第９回文化財担当部局打合せ
於：五ヶ山ダム建設事務所

◇1／29(木)～3／28(日)　民俗部門調査：網取・桑河内

◇2／9(月)～2／26(木)　歴史部門［歴史民俗］調査：小川内・桑河内

◇2／11(水)～2／14(土)　建造物調査：桑河内

◇2／14(土)～3／21(日)　民俗部門調査：小川内・東小河内・大野

◇3／26(金)　歴史部門現地調査：一の岳城跡→筑前・肥前街道→国境石等

■平成16(2004)年度

◇4／3(土)　民俗部門調査：小川内

□6／11(金)　第５回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員　於：吉塚合同庁舎２Ｆ視聴覚室

◎6／14(月)　「五ヶ山ダム」の水源地域整備計画決定（国土交通省）

◇6／23(水)～6／25(金)　建造物部門調査：東小河内

◇6／24(木)～7／13(火)　自然部門［陸産貝類］調査：小川内・網取

◇6／29(木)～11／25(木)　自然部門［杉］調査

◇6／30(水)～12／3(金)　歴史部門［文書］調査　於：福岡教育事務所文化財作業室

◇7／20(火)～12／5(日)　自然部門［岩石］調査

◇8／4(水)～8／5(木)　歴史部門［国境石］調査

◇9／17(金)～11／18(木)　民俗部門調査：東小河内

□12／6(月)　第６回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会　於：吉塚合同庁舎７Ｆ702会議室

◇12／11(土)　民俗部門調査：網取・桑河内

◇12／12(日)　建造物部門調査：小川内

平成17(2005)年

◇1／17(月)　自然部門［岩石］調査

◇1／27(木)～2／15(火)　自然部門［杉］調査：小川内

△1／31(月)　第７回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議及び第10回文化財担当部局打合せ
於：五ヶ山ダム建設事務所

◇2／13(日)～3／30(水)　民俗部門調査：網取・桑河内

◇2／15(火)～3／28(月)　民俗部門調査：東小河内

◇2／22(火)　美術工芸部門調査　於：福岡教育事務所文化財作業室

◇3／17(木)　歴史部門［文書］調査　於：久留米市文化財収蔵館

◇3／28(月)　歴史部門［文書］調査　於：福岡教育事務所文化財作業室

■平成17(2005)年度

◇4／2(土)～7／24(日)　民俗部門調査：網取・桑河内

◇4／7(木)　歴史部門［文書］調査　於：福岡教育事務所文化財作業室

◇4／17(日)　自然部門［岩石］調査

□**6／28(火)**	**第７回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：五ヶ山ダム生活再建相談所
◇7／24(日)	民具収集（小川内：西村哲也さん）	
◇8／6(土)	民俗部門打ち合わせ	於：福岡市博物館
◇8／29(月)	ダム事務所にて協議	
◇9／4(日)～10／9(日)	自然部門［岩石］の調査	
◇9／9(金)～10／29(土)	歴史部門［歴史民俗］の調査	
◇9／15(木)～10／24(月)	歴史部門［文書］の調査	於：福岡教育事務所文化財作業室
◎10／16(日)	小川内地区離村式・小川内小学校廃校式式典	於：小川内小学校
◇10／20(木)	五ヶ山ダム対策協議会	於：五ヶ山ダム生活再建相談所（那珂川町大野）
◇11／18(金)	自然部門［地質］の調査	
	民具収集（東小河内：築地幸子さん）	
◇11／23(水)	民具収集（桑河内：鬼塚健吉さん）	
□**11／30(水)**	**第８回五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会**	於：福岡教育事務所視聴覚室
◇12／5(月)	民俗部門の調査	
平成18(2006)年		
◇1／26(木)	民俗部門の協議	於：福岡市博物館
◇2／14(火)～3／20(月)	民俗部門の調査	
◎2／15(水)	五ヶ山ダム、伊良原ダムの完成予定が2017年度末に変更されると発表	
◇2／15(水)～3／1(水)	歴史部門［文書］の調査（大石久一家文書）	於：ダム事務所
◇3／7(火)	歴史部門の調査	
◇3／9(木)	民具収集（網取：田中保さん／東小河内：伊藤博行さん／小川内：武廣邦敏さん）	
◇3／15(水)	民具収集（大野：築地敏恵さん）	
◇3／26(日)	民具収集（大野：築地蔵次さん）	
△3／28(火)	第８回五ヶ山ダム文化財調査連絡調整会議及び第11回文化財担当部局打合せ	於：五ヶ山ダム建設事務所
■平成18(2006)年度		
◇4／27(木)	民具収集（桑河内：築地九内さん／大野：鬼塚泰介さん）	
◇6／7(水)	民具収集（大野：鬼塚泰介さん）	
◇6／13(火)	歴史部門の調査	
◇6／22(木)	民具収集（東小河内：築地正輝さん）	
◇11／16(木)	民具収集（大野：築地幾雄さん）	
平成19(2007)年		
◇2／27(火)	文書資料の返却（進藤直文さん、大石久一さん、武廣邦敏さん）	
■平成19(2007)年度		
◎4／24(火)	文化財保存佐賀県協議会等三者からの要望書	
◇6／13(水)	文書資料の返却（山田善寛さん）	

Pho.Ⅰ3-5～11　東小河内の水田風景
5：H15. 5 . 7
6：H15. 9 .11
7：H16. 1 .29
8：H16. 2 .26
9：H16. 6 .15
10：H15. 7 .13
11：H16. 6 .15

4　歴史的環境

i．はじめに

脊振山は標高1,055ｍ。今はこれを脊振山といっているが、江戸期までは上宮嶽（じょうぐうだけ）もしくは御嶽（おたけ）（雄岳）・弁才嶽（べんざいたけ）（弁財天山）と称していたという。あるいは金龍山（伽羅山）という呼称もあったらしい。その山頂には水に関係が深いとされる弁財（才）天が祀られており、これを地元では「べんじゃーてん」と呼んでいる、とのことである。

その弁財天を祀る脊振神社自体の祭神は、市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）・湍津姫命（たぎつひめのみこと）・田心姫命（たごりひめのみこと）という三女神であり、これは筑前・宗像大社の祀る宗像三女神と同一である。

この山頂からは、晴れて霞のない日には、北側には博多湾から玄界灘を望むことができる。翻って玄界灘側から見ると、博多の奥に屏風のようにそびえ立ちはだかる山並みの最高所が脊振山であるということになろう。宗像大社と同じく海上交通に関連した祭神が祀られているということは、その地理・立地と深い関係があるというべきである。

山頂の石宝殿の前面に「大弁財天」の掲額のある鳥居があり、そこへ続く参道両脇には、元禄10年（1690）に肥前佐賀藩主鍋島綱茂が寄進した石灯籠が建っている。

また脊振山頂の近くには修験道の祖とされる「役行者」の像もある。

大正4年（1915）２月８日。この日、歌人であり小説家でもあった長塚節は福岡市の九州大学病院で亡くなった。37才であった（満年齢は35才７ヶ月）。常陸（茨城県）生まれの長塚節は、自らが罹患している咽頭結核等を九州大学耳鼻咽喉科教授の久保猪之吉博士に診てもらうために九大病院へ来ていた。それは夏目漱石の紹介によると言われている。また、久保猪之吉博士はその令夫人（より江）ともども歌人であり俳人でもあった（註１）。

当時の結核は不治の病であった。その長塚節は、生きる望みを抱きつつ、体調のよいときには大宰府観世音寺などに足を運んだりしていた。そして、亡くなる前年の11月16日に、脊振山を詠んでいる。

不知火の　国のさかひに　うるはしき
脊振の山は　暖かに見ゆ　　（「鍼の如く　其五」）

“暖かに見ゆ”という言の葉には、自らの病身のことを踏まえてのさまざまな想いが込められているのであろう。この時、若き才能を閉じようとしていた長塚節は、はたして脊振山が修

Pho.Ⅰ4-1-1　脊振山と小川内集落

Pho.Ⅰ4-1-2　脊振山上宮

験の山でもあったことを知悉したうえでこの歌を詠んだのであろうか（註２）。

さて、脊振山の北麓にある佐賀県神埼郡東脊振村［現吉野ヶ里町］の小川内、及び福岡県筑紫郡那珂川町の五ヶ山という地域の歴史を省みるとき、中世以降においては栄西禅師にまつわる「お茶」のこと、そして脊振千坊ともいわれた「修験道」を抜きにしては語れないだろう。さらに近世以降については、江戸・徳川幕府をも巻き込んだ筑前・肥前の国境問題を前提にしたうえでさまざまな事象を考察しなければならないだろう。

すなわち通史的に見れば、五ヶ山ダムに関連したこの地域におけるキーワードとしては、「茶」・「修験道」・「国境」があげられよう。そしてさらにこの地を特徴づけるものとして「水」を加えるべきと思われる。これらのうち、とくに「修験道」と「国境」については、本書の各部門の調査の中で随時論究されるであろうから、ここでは「水」と「茶」について若干触れておきたい。また、かつて金の採掘が行われていたというから、そのことについては近代の項で若干触れることとする。

水　「水」については、今回の五ヶ山ダムの建設そのものが象徴しているところである。それに関連するものとして、福岡県東小河内と佐賀県小川内との間にある「稚児落しの滝」にまつわる話が伝わっている。この滝の下の渕は昔はかなり深く、ここでは雨乞い行事が行われていたという。その様子は『郷土誌　那珂川』（註３）には次のように記されている。

> 「この渕には日照りが長くつづくと、博多の方から雨乞いに青年たちがやってきていた。加藤清正が朝鮮から持ち帰ったという櫛田神社の虎頭を、〆縄を張った箱に納め、車力に駕してこの滝にやってくるのである。青年たちはその虎頭を、この渕につけてはあげ、つけてはあげして、雨が降るまで泊まりこんで祈願をした。渕のまわりは瀑布のしぶきがたちこんでいて、祈願をする裸の青年たちの姿が異様に見えた。そのうちにきっと雨は降った。青年たちは、降った降ったとよろこび、しぶきにぬれて酒をくみかわしていたという。この稚児落しの渕に虎頭をつけて降雨を祈る雨乞いの行事は江戸時代からつづいていたといわれる。」（P55～P56）

この話に出てくる虎頭は、櫛田神社に確かにあった。『博多津要録』にも「虎之頭」が見える（註４）。そして、いまも櫛田神社に「虎頭」の頭蓋骨が収蔵されている（註５）。

さらには、地元の人たちもこのことを覚えていたり、聞いたりしていた。

Pho.Ⅰ4-1-3　虎頭（正面から）

Pho.Ⅰ4-1-4　虎頭（横から）

東小河内で、大正７年（1918）生まれの築地松蔵さんに雨乞いの話を聞いた（2003.10.８）。

“小学校を卒業する頃だから、昭和の初め頃と思われる。福岡の五十川や老司のおとな20～30人が松明を持ってやってきて、櫛田神社から借りてきた虎頭で雨乞いをしているのを見たことがある。体を浄めてから水浴びをしながら虎の頭を水につけていた。”

また、東小河内で昭和８年（1933）に生まれた築地富喜子さん（桑河内）と、その弟で昭和11年（1936）生まれの伊藤博行さんは、五十川や曰佐の青年たちが虎頭を持って稚児落しの滝へ来て雨乞いをしていたという話を、明治20年（1877）生まれの祖母から聞いたことがあるという。

なぜに虎の頭を使っての雨乞いなのかはよくわからないが、稚児落しの滝で雨乞いをしたというのは、福岡平野の田園部を潤し、博多の街なかを貫流して博多湾へと流れていく那珂川の源流近くにこの滝があるからであろう。那珂川中流域の、老司・曰佐・五十川周辺に拡がる水田を潤す水を求めての雨乞いであったと思われる。

いまひとつ、肥前佐賀藩の成富兵庫茂安がつくったといわれる「蛤水道」にまつわる悲話が伝えられている。概略は次のとおりであるが（註６）、水にかかわる悲話として伝えられているのは、それほどに水の重要性が思われるところであろう。

「蛤水道」は、蛤岳（標高862.8ｍ）の東側を水源としてそこから那珂川へと流れていた水を、有明海へと注ぐ田手川（石動川）へ灌漑用水として導くためにつくられた水路である。全長は700間余というから1,200ｍ以上もある。ところが、この「蛤水道」ができたために今度は筑前福岡藩側が水不足に苦しむこととなった。これを解消するには「蛤水道」の水を福岡側へ流すしかなく、その水盗りの役に選ばれたのが、乳飲み子を抱えたお万という女であった。水番人の警戒が厳しい中で、山中の大きな自然石の陰で泊まりながら（この大きな石を「お万泊まり岩」という）機会を伺っていたが、ついに意を決して、邪魔になる乳飲み子を「稚児落しの滝」に投げ捨てたのち、「蛤水道」へ出かけて行った。しかし、結局はどうすることもできずに、お万はその下流にある滝つぼ（これを「お万が滝」という）に身を投げたのであった。

この蛤水道の敷設は灌漑用水として水を制御、誘導するためのものであったが、そこには当時の国の境界（藩境）を見据えた画策があった。歴史の重みを感じるところである。

茶　茶については、日本臨済宗の開祖とされる栄西（註７）が、建久２年（1191）に中国は宋

Pho.Ⅰ4-1-5　蛤水道水源付近

Pho.Ⅰ4-1-6　蛤水道

から茶の種子もしくは若木を将来したとされている。それを植えた所のひとつとして脊振山石上坊が挙げられ、これが我が国で最初のお茶栽培として広く喧伝されている。東脊振村［現吉野ヶ里町］松隈にある中宮の霊仙寺・乙護法堂の前には「日本最初之茶樹栽培地」の石碑が建っており、その周辺には茶畑がある。

筑前側では、『筑前国続風土記』に「茶を多く植て家産とす。五ヶ山茶とて、是を用ゆ」と記され（註８）、また『筑前国続風土記附録』では「五箇山の郷内に茶を多く生す。名産也」（註９）、『筑前国続風土記拾遺』には「農民薪炭を販き或ハ紙をすき茶を製し山菓をとりて市中に持出す」（註10）とある。近世の五ヶ山では茶が名産であったことがわかる。今でも、東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内や五ヶ山の集落周辺には野生化したような茶樹を所々に見ることができる。

日本最初の茶樹栽培地が歴史的にいずこであるか、いま喧伝されている所が事実であるかどうかは俄に判断できない。ただ、栄西が中国から帰着した平戸葦津も、そして脊振霊仙寺も、また国指定天然記念物の「嬉野の大チャノキ」がある嬉野も、全て肥前のうちであり、肥前という地が茶樹に関して縁の深い場所であることは確かであろう。

Pho.Ⅰ4-1-7　栄西禅師像

Pho.Ⅰ4-1-8　小川内の石垣・茶樹

Pho.Ⅰ4-1-9　稚児落しの滝

Pho.Ⅰ4-1-10　かぐめ石

註

1　久保猪之吉博士と九州大学病院、そして長塚節のことについては下記にも詳しい。

岡部信彦　1996『千代の松原　池の金魚５』　海鳥社

和泉僚子　1998「久保猪之吉・より江夫妻と雑誌「エニグマ」の周辺について」

福岡県地域史研究第16号　　福岡県地域史研究所

2　脊振山麓の昔話を収集し集成した宮地武彦氏編集の『脊振山麓昔話集』において、その解説を行った臼田甚五郎氏も冒頭にこの歌を掲げている。

なお、『万葉集』の巻３の336には沙彌満誓の次の歌がある。長塚節はこの歌を念頭においてうたったのかもしれない。

「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖かに見ゆ」

3　『郷土誌　那珂川』　昭和51年（1976）

4　『博多津要録』第22巻に「42　旱魃雨乞ニ付虎之頭御入用之事」と題する宝暦４年の記事がある。

このときは那珂郡堅粕の千鳥ヶ池で別の虎頭を使って雨乞いをしている。

秀村選三ほか校注『博多津要録』第三巻　昭和53年（1978）　財団法人西日本文化協会

5　平成16年（2004）10月28日、櫛田神社に阿部憲之介宮司を訪ねて、虎頭を見せていただいた。神社の寄附台帳によると、この虎頭は元文３年（1738）に奉納されたことが記録されている。また、阿部宮司によると、昭和53年（1978）の福岡大渇水の時にもこの虎頭が貸し出されて、古賀で雨乞いがなされたという。

6　この話については、次の文献を参照。

・『小川内観光案内』　昭和42年（1967）

・市場直次郎編著『豊国筑紫路の伝説』　昭和48年（1973）8

・東脊振村史編さん委員会『東脊振村史』　昭和57年（1982）11.3

・小川内誌編纂委員会『小川内誌』　昭和60年（1985）

・河西照勝ほか『自然ガイド　脊振を歩く』　葦書房　平成14年（2002）

7　栄西（1141～1215）［ようさい（えいさい）］備中の生まれ。仁安３年（1168）４月に入宋し、半年後に帰国。また、文治３年（1187）に再度入宋し、建久２年（1191）７月に肥前平戸島の葦浦に上陸して帰国した。このとき茶の若木を持ち帰り、それを葦浦や、脊振山、博多聖福寺などに植えたとされるとともに、抹茶法も将来したとされている。『喫茶養生記』（1211）を著した。

8　貝原益軒編　1703『筑前国続風土記』

9　加藤一純編　1798『筑前国続風土記附録』

10　青柳種信ほか　1854『筑前国続風土記拾遺』

ⅱ．周辺の歴史的環境

昭和55年（1980）３月31日に福岡県が刊行した『福岡県遺跡等分布地図（筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編）』では、那珂川町の山間部である南畑ダムの南側には11箇所の地点が遺跡等としてリストアップされている。そのうち３箇所は神社、４箇所は板碑・五輪塔であり、残りの４ヶ所が埋蔵文化財としての遺跡に該当するものである。それは網取遺跡（中世：古貨埋蔵地）、代官屋敷跡（居館跡）、白土城跡（近世：城跡）、尼寺跡（寺院跡）となっており、尼寺跡の時期が明確でないが、この段階までにははっきりと中世より古い遺跡は知られていない。また那珂川町教育委員会が平成７年（1995）３月に刊行した『那珂川町文化財分布地図』（註１）及び平成11年３月刊行の『那珂川町の文化財　町内の遺跡地図』（註２）によれば、南畑ダムの南側には17ヶ所の地点が遺跡等として挙げられている。これらのうち、ダムの建設で影響を受けるものは10ヶ所ほどとなる。

一方、佐賀県側の東脊振村［現吉野ヶ里町］においては、平成７年３月作成の「東脊振村文化財マップ」では村域の南半部に吉野ヶ里遺跡を始めとする遺跡が集中して分布しているが、北端部の小川内周辺では遺跡としては「竹ノ屋敷座主別宅跡」があるのみで、ほかに「小川内の杉」「蛤水道」「オオサンショウウオ発見地」が地図上に示されている。このうちダムの建設で影響を受けるものは「小川内の杉」である。

今後のダム建設に伴った試掘、確認等の調査で新たな遺跡の発見があると思われるが、ここでは主に那珂川流域で、その周辺も含めた少し広い範囲の中から五ヶ山地区及び小川内地区の歴史的環境を考える際に参考となるような遺跡等を時代ごとに概観しておきたい。

◎　旧石器時代・縄文時代

那珂川の上流域の山中で、若干の平地とともに水を確保しうる所であれば、この時代の人々が住んでいた場所はあちこちに存したものと考えてよいだろう。狩猟・採集にはもってこいの自然環境であったものと思われる。しかしながら五ヶ山・小川内地区にはこれまでのところ当該期の遺跡は知られていない。ただ、周辺においては幾つかの遺跡が知見にあがっているので、おそらく今後の調査において発見されるであろう。

四郎五郎池遺跡は九千部山の北側山中、標高約380ｍの所にある遺跡で、縄文早期～前期の押型文土器や曽畑式、轟式、後期～晩期の土器のほかに、打製石鏃等が採集されている（註３）。

成竹の尾添では1953年頃に粘板岩製の磨製石斧が採集され、南面里でも1955年頃に緑色片岩製の磨製石斧片が採集されている。これは縄文後期～晩期の所産と思われるので、この周辺一帯に縄文時代の遺跡が展開していることは確かであろう（註４）。

板屋遺跡は福岡市早良区板屋の脊振ダムの近く、標高550ｍの高所にあり、市道建設に先立って調査された。溝、土坑、柱穴が検出され、縄文早期の押型文土器、貝殻条痕文土器、サヌカイトの剥片や石核、黒曜石剥片が出土している。キャンプサイトのひとつなのかも知れないが、このような標高の高い所で遺跡が確認されたことはきわめて重要である（註５）。この板屋遺跡における遺跡立地は、五ヶ山・小川内の地が決して旧石器・縄文人に忌避された土地ではなかったであろうことを示唆しているといえよう。

なお、五ヶ山ダム関係の集団移転地として平成15～16年度に調査された那珂川町下梶原の入

道町遺跡（註６）では縄文時代早期と晩期の遺構・遺物が検出されている。

◎　弥生時代

弥生時代は、基本的な生業として稲作農耕が大きな比重を占めるようになった時代である。

五ヶ山・小川内地区では近年までは谷水田、棚田として水田稲作が行われてきていたが、今は休耕転作奨励で杉・檜等の植林が行われて林地となっているところが多い。その谷水田・棚田がいつ開墾されたのか、その起源が江戸期以前のいつ頃まで遡るのかは明確にしえない。現状では、この時代の当該地における人の存在を裏付ける遺跡は発見されていない。

しかしながら、那珂川町全体として見ると、北側の平野部周辺は「奴国」の版図に入っていて、いくつかの有力集団や地域首長の存在を伺わせる遺跡が知られている。

山陽新幹線車両基地建設に先立って調査された門田遺跡辻田地区では中期後半の甕棺墓に副葬品を持つものがある。24号甕棺墓には棺外に鉄戈があり、盗掘坑からは棺内副葬であった鉄剣が出土している。さらに下甕には現物は盗掘で失われているが直径13㎝と14㎝の円弧が見られるので前漢鏡が副葬されていたことは間違いない。また、27号甕棺墓にも棺外に鉄戈があり、棺内からは副葬していた鉄剣２口が出土している。これらの２基を含む甕棺墓群は10基ほどが一辺10ｍほどの区画内に収まっており、特定集団の墳丘墓とみなされている（註７）。

さらにここ最近で最も顕著な成果が見られるのは安徳台遺跡群であろう。ここは比高差30ｍほどの独立した阿蘇火砕流を基盤とした台地で、その上部平坦面は約100,000㎡にも及び、自然の要害といえる立地をなしている。平成９～15年度に確認調査が行われ、弥生時代では中期～後期初めの集落及び中期後半の墓地群が検出されている。竪穴住居は直径が14.6ｍに及ぶ大型のものを含む130軒ほどが確認されており、多くの土器とともに青銅器の鋳型や漢式鏃、天河石製勾玉などが出土している。平成14年度には甕棺墓群が確認され、２号甕棺墓には棺外に鉄戈・鉄剣が、棺内の男性人骨の頭部周辺にはガラス製の塞杆状製品２・勾玉３・管玉340以上があり、人骨の右腕付近に43個のゴホウラ製の立岩型貝輪があった。また５号甕棺墓には女性が埋葬され、頭の周辺にガラス塞杆状製品２があった。これら２基を含む10基の甕棺墓は周辺の状況から見て特定集団の墳丘墓になるものと考えられる。集落と墓地とが完結した立地にあり、弥生時代の社会構造を解明するには格好の、きわめて重要な遺跡である（註８）。

安徳台遺跡群にほど近い安徳原田遺跡では広形銅矛12本が出土している。2.5尺くらい下に刃を互い違いにして横に並べてあったというが、その遺構は明確でない。近年、その近辺で調査が行われており、弥生中期～古墳時代前期の溝や土坑、住居跡が検出されている。銅矛は集落と近接して埋納されていた可能性もあろう（註９）。

また、成竹の尾添では1957年頃にペグマタイト製らしい有溝石錘が採集されている。川で拾ったという７×12㎝ほどの重量のあるものとのことである。形態からすると古墳時代に下る可能性もある（註４）。

◎　古墳時代

那珂川町は古墳が多い。その多くは後期群集墳であるが、古くに調査された炭焼古墳群（註10）や油田古墳群（註11）は古式の群集墳である。

時期として最も古いのは安徳大塚古墳で、全長64ｍ、周溝まで含めると81ｍの規模をなす。詳細は未調査のため不明であるが、奴国のエリア内に築かれた最古の重要な古墳であることは間違いない（註12）。

後期群集墳は丘陵の中腹や裾部に築かれ、町内には500基以上が存在したものと思われるが、すでに開発等に伴って消滅したものも少なくない。かつて山陽新幹線車両基地建設に伴って観音山古墳群の一部が調査されたが（註13）、いままた九州新幹線の建設に際して同古墳群の中原Ⅲ群と平石Ⅲ群とが調査されている（註14）。

那珂川北中学校建設に伴って調査された丸ノ口古墳群では２基の装飾古墳が発見された。彩色ではなくて、敲打して同心円などを表現した彫刻系のものであり、技法としても注目される（註15）。移築復原の３基を含む６基が古墳公園として整備されている。

那珂川町にある古墳群の南限は現在のところ安徳台遺跡群の周辺地までであり、それより南には見られず、五ヶ山の地域にまでは古墳は及んでいない。しかし、古墳時代人が五ヶ山の地に足跡を印さなかったかどうか、今後の調査の進展で判明するだろう。また、阿蘇Ⅳ火砕流が基盤をなす安徳台周辺には横穴墓群がいくつか見られることも重要である。

先に触れた入道町遺跡では古墳時代の遺物も検出されている（註６）。

◎　奈良時代

安徳台遺跡群では７～８世紀代の掘立柱建物跡が数棟分見つかっている（註８）。この台地の裾部に流れる「裂田溝」は『日本書紀』に神功皇后の事績として記述の見られるものであるが、実際にはそれがいつ開削されたのか明確ではなく、時期的な関係も含めて今後の更なる多方面からの調査が望まれる。

地別当遺跡群は標高97～108ｍの丘陵斜面で窯跡２基と土坑が検出されており、須恵器窯跡は那珂川町では初めての発見であった。大野城市牛頸を中心とした牛頸窯跡群とは1.5㎞以上離れるとともに谷筋も異なっているがやはり一連の窯跡群と捉えるべきであろう。２基の窯とも小規模で、かつ１回きりの操業で廃絶したものとみられる。８世紀中頃の所産である（註16）。

後野・山ノ神前遺跡群は片縄山（292.6ｍ）の南西方、標高220～230ｍの斜面にあり、祭祀遺構23基、焼土坑７基、土坑33基などが確認されている。祭祀遺構は掘込みのあるものとないものとがあり、自然石の露頭の周辺で祭祀が執り行われている。３号のみは完形の土器があるが、それ以外は破砕された状態で須恵器・土師器等が出土している。祭祀遺構その他から焼塩用の製塩土器10数点も出土しており、祭祀の内容や形態を含めてさらなる検討を要する遺跡といえよう（註17）。

別所次郎丸遺跡は８世紀前半～中頃の遺跡で、墨書土器等が出土している。「土器の組合せは官衙あるいは寺院的である」とするが（註18）、蛍光Ｘ線による胎土分析では地別当窯跡群の須恵器胎土と同じという結果が出ている（註19）。なお、別所という地名の起こりは脊振山東門寺に関係があるとされている（註20）。

◎　中世

さきに触れた安徳台遺跡群では室町時代の居館跡が検出され、一辺が100ｍ×110ｍの方形に

巡る溝で囲繞された内側には数棟の建物が確認されている。ほかに地下式横穴墓も見つかっている（註８）。

中世以降になると、五ヶ山でも遺跡の存在が知られるようになるが、この五ヶ山と類似した立地での遺跡として萩ノ原遺跡群・古屋敷遺跡群がある。これらは山間部の遺跡で、遺構は少ないものの焼土坑が検出されていて、縄文・弥生・古墳の各時代の土器もあるが、土坑は12世紀以降の所産とされる。山間部ではあるけれども福岡市南部へ通じる道に面した所であり、遺跡の形成はその交通との関連でなされていると見てよい（註21）。

また、先に触れた入道町遺跡では中世の陶磁器類も検出されている（註６）。

さて、五ヶ山・小川内地区の歴史、民俗、建造物等の調査その他の折りに、周辺地を見回ったりしている時に土器片等を採集もしくは確認した所や遺構らしきものを視認した所がある。確実に中世の所産であるかどうかはこれからの調査や分析を待たねばならず、近世に属するものもあるかもしれないが、この項で紹介しておく。

網取の山神社の北側で、家屋の背後にあたる場所は水田及び畑となっているが、そこで土器片を採集した（平成15年８月９日）。

大野の大野橋東側の所でも土器片の散布が確認された（平成15年９月11日）。またここの南側には五輪塔の空風輪等を配した石組みと土壇風の高まりがあり、これは平成17年１～３月に大野遺跡群の一つとして調査された。石垣や石段が確認され、近世の17～18世紀の所産であろうとされている（註22）。

五輪塔はほかに次の場所にも見られる。

・網取の観音堂の裏手に４基ほどが立っているが、再配置されたものらしい。
・桑河内の集落の西方、那珂川の河岸段丘の所。土壇風の高まりがあり、五輪塔は倒壊しているが、数基分は存するであろう。
・東小河内の集落の西側、「テラノウラ」という小字の所にあったものが納骨堂を建てた場所に移動して置かれている。

山城跡

周知の遺跡として挙げられているものとして、ダムに直接かかわるのが白土城（猫城）である（註１・２）。那珂川本流と大野川、倉谷川が合流する所にあり、貝原益軒の編になる『筑前国続風土記』にも見えている（註23）。詳細は発掘調査を待たねばならないが、項部はあまり広くなく、郭の存在も明確でない。

一ノ岳城は九州探題の千葉氏の居城であったが、天正年間には肥前勝尾城主筑紫広門の支城となったという（註24・25）。郭と立派な石垣が残っている。

岩門城（龍神山城）は戦国期には大内氏の直轄の城であったとされるが、平成14～16年度に確認調査が行われ、出土遺物より13世紀後半から城として機能し、16世紀代まで使用されたと推測されている（註25）。

備蓄銭

『郷土誌　那珂川』（註26）には、昭和30年（1955）８月、網取において古貨が発掘されたことを記している。

「ここから夥しい古貨を発掘した。縦横とも40㎝くらいの素焼の壺に入れて、地下約

Pho.Ⅰ4-2-1　白土城跡

Pho.Ⅰ4-2-2　南畑ダムと一ノ岳城跡（鉄塔左）

Pho.Ⅰ4-2-3　一ノ岳城石垣

Pho.Ⅰ4-2-4　国境石（標石４）清掃中

60㎝くらいのところに埋もれていた。百枚ずつ繋がれて約3,000枚、重さ３貫匁あったという。

古貨の種類は20種、一部朝鮮のものを除き、他は悉く中国の古貨であった。一番古いのは唐時代の開元通宝（西暦621年、推古29年）、次に宋時代の太平通宝（西暦976年、藤原兼通時代）がある。」（P72～73）

開元通宝、太平通宝、そして写真にある大定通宝（西暦1178年、平清盛時代）以外の銭種が明確でなく、最新銭が何であるかも不明だが、中世期のいわゆる備蓄銭として捉えられるものである。

◎　近世

国境石

脊振山系周辺の筑前と肥前との国境の争いは１回のみのことではない。場所と時期を違えて数回の争論があった。

(1) 筑前と肥前の脊振山周辺の境界論争は天和３（1683）年10月頃からである。山頂にある弁財天堂の修理をめぐる言い争いが発端となり、山頂南側の開墾のことも絡んできて、幕府への提訴にまで展開した。結局は元禄６（1693）年10月には肥前佐賀藩が勝訴し、ここの部分の国境が確定した。

(2) 次いで、元禄９年（1696）には、那珂郡大野村の地焼と、肥前神埼郡西小河内村と間で国境の争論が起こったが、元禄13年（1700）に、地図の修正によって解決した。このとき、坂本峠近くの札木山から大野川に沿って北向し佐賀橋に至る間に国境石が設置されたという（註27)。現在11本の国境石を見ることができる。

(3) 肥前田代領との境界にあたる権現山から、西へ大峠（塩買峠）を経て九千部山へ、そしてさらに西の石谷山の三領堺峠までの間には宝永元年～２年（1704～1705）に国境石が設置されたとされている（註27)。この間には12本の国境石が残っている。

(4) 三領堺峠から七曲峠（綾部峠）を経て坂本峠の札木山までの間にも16本ほどの国境石が現存しているが、これも宝永元年～２年の設置であろうとされている。

(5) それでは、小川内と東小河内の間の那珂川の中洲にある石垣と「此石垣相障申間敷事筑前国五箇山村」と刻んだ文字を小川内側に向けている標石はいつ設置されたものであろうか？

小川内村については、(1) の争論の時からすでに肥前領として扱われているようであり、筑前の東小河内とは原則的には那珂川を境界としていたであろう。那珂川の中洲にある石垣と刻字の標石は、その中洲の帰属についての争論があってのちに設置されたものと思われる。福岡藩では４代藩主の黒田綱政のとき、元禄15年（1702）10月17日に国境の取り扱いについて７項目のお触れ（「国境厳守の覚」）を出しているので、それ以後に設置されたものとも考えられる。いまこれらを那珂川町教育委員会編集の『国境石』に従って標石１～４としておく（註28)。

氷倉

小川内の東光寺の南側山中に、排水溝のような水口を備えた石垣がある。

『東脊振村史』（註29）には「冬期の寒冷を利用してカケヒの水を岩上に落して、そのしぶきを利用しての製氷も奥深い山中で行われていた。」という記述がある（P320)。

歴史の道（肥前・筑前街道）

「肥前・筑前街道―脊振坂越」は、福岡県下では「長崎街道―冷水峠越」とともに、文化庁が平成８年（1996）に選定した「歴史の道百選」に選ばれている。そのうち、那珂川町市ノ瀬から一ノ岳城と亀ノ尾城の間を通って道十里（南畑ダム）へと通じる旧道、いわゆる亀ノ尾越の周辺には今も所々に石畳が残っており、これが街道であったことがわかる。五ヶ山ダムによる影響範囲内においては、一部にその街道の痕跡らしい幅員の農道もしくは里道を見るが、こ

Pho.Ⅰ4-2-5　氷倉

Pho.Ⅰ4-2-6　肥前・筑前街道

れが旧街道であったか否かについては確証はない。

五ヶ山大野から大野川沿いに坂本峠へと向かう所では、坂本峠の少し下方に国境石が向かい合わせで建っており（註28）、その両方の石の間隔約1.5～2.5ｍが街道の幅であったものと見なされる。またさらにその下方には溝状となった道路状の窪みが残っており、その底面幅は約1.2ｍである。

なお、坂本峠を越して坂本へと下っていく途中に番所（関所）跡があるという（註23）。

蛤水道

佐賀藩の水利の神様と言われた成富兵庫茂安が造ったという長さ1,260ｍ（1,077ｍとも）に及ぶ水路である。築造は元和年間（1615～1623）と伝えられる。現役の水路として近代産業土木遺産とも捉えられるものであるが、かつては素掘りの水路であったというものの、現在では三面がコンクリートで固められている。

キリシタン伝承

小川内の地に存する下記のいくつかの遺構等についてキリシタンに関係するものとする説があるが（註30）、現時点ではいずれも判断がつかない。

・稚児落しの滝の南側にある板碑がマリヤ様ではないか。
・「ガランサン淵」という地名が小川内小学校の上流側にあるが、この地名はキリシタンの命名に由来するものではないか。
・竹の屋敷の北東方に「たたり石」という三角形状の石がある。これにクルスの陰刻があるのではないか。

◎　近代

○　石灰岩採掘のこと

小川内の中の、大谷原と大谷の境にある谷において、大正５年（1916）に石灰岩の採掘を始めたという（註31）。肥料用として採掘されたのであったが、いつ頃まで行われたかはわからない。いまでも現地には石灰岩が転がっている。

○　金山採掘のこと

小川内大野のうちの瀬無井郷（せむいごう）で、大正10年～15年（1921～1926）に那珂川町網取の田中左内という人が金を採掘していたという（註31）。坑口が１箇所残り、また砕石は水車で行っていたが、その水車を設置していた溝状の石組みが川のそばに遺存している。

また、五ヶ山大野のうちの高村においても、那珂川町網取の田中左内さんが大正～昭和10年（～1935）前後の頃に採掘を行っていたという（註32）。ここには２箇所の坑口が残っている。ほかにも幾つかの竪坑があるというが確認できない。砕石は瀬無井郷で行っていたというから、瀬無井郷での採掘をやめてからこちらに移ったのかもしれない。

なお、この高村においては、昭和28年（1953）頃から３～４年ほど、香月・井上という人が金の採掘をしていたという。このときの砕石は坑口から50ｍほど離れたオロスギという所に水車を据えて行っており、そこには水車を設置していた溝状の石組みが遺存している。

さらに、小川内のカノシシ谷という所でも金を採掘していたらしいが、その場所は未確認である。

○　炭焼窯

五ヶ山では江戸時代に炭焼きをして炭を売っていたことが『筑前国続風土記拾遺』にみえている（註20）。小川内でも炭焼きは盛んであったと思われる。所々に炭焼窯の跡が残っており、どちらかといえば標高の高い場所に多くが築かれている。

註

1　那珂川町教育委員会　1995『那珂川町文化財分布地図』
2　那珂川町教育委員会　1999『那珂川町の文化財　町内の遺跡地図』
3　赤崎敏男　1970「福岡県那珂川町四郎五郎池発見の縄文土器」九州考古学39・40
4　渡辺正気氏は、地元の人が所蔵されている資料を1959年10月に実測されている。
5　福岡市教育委員会　1987『福岡市板屋・今津遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第166集
6　福岡県教育委員会　2006『入道町遺跡群』福岡県文化財調査報告書　第207集
7　福岡県教育委員会　1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第９集
「門田遺跡辻田地区24・27号甕棺墓出土品」は平成16年２月18日に福岡県指定有形文化財（考古資料）に指定された。
8　那珂川町教育委員会　2000『安徳台』　那珂川町文化財調査報告書　第52集
那珂川町教育委員会　2004『安徳台遺跡群』　那珂川町の文化財Ⅷ
那珂川町教育委員会　2006『安徳台遺跡群』　那珂川町文化財調査報告書　第67集
9　那珂川町教育委員会　1990『安徳遺跡』　那珂川町文化財調査報告書　第25集
那珂川町教育委員会　2001『安徳原田遺跡群』那珂川町文化財調査報告書　第54集
10　福岡県教育委員会　1968『炭焼古墳群』　福岡県文化財調査報告書　第37集
11　福岡県教育委員会　1969『油田古墳群』　福岡県文化財調査報告書　第42集
12　井上裕弘　1971「危機の安徳大塚古墳を守れ」　『ふるさとの自然と歴史』
13　福岡県教育委員会　1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第５集
14　福岡県教育委員会が2005年から九州新幹線の建設に先だって調査を行っている。
15　那珂川町教育委員会　2003『片縄山古墳群』　那珂川町文化財調査報告書　第61集
16　那珂川町教育委員会　1997『地別当遺跡群』　那珂川町文化財調査報告書　第40集
17　那珂川町教育委員会　2000『大薮池遺跡群　後野・山ノ神前遺跡群』
那珂川町文化財調査報告書　第49集
18　福岡県教育委員会　1994『別所次郎丸遺跡』福岡県文化財調査報告書　第114集
19　三辻利一「平蔵遺跡群、別所次郎丸遺跡群出土土器の蛍光Ｘ線分析」
那珂川町教育委員会　1998『平蔵遺跡　Ⅲ』　那珂川町文化財調査報告書　第41集所収
20　青柳種信ほか　1854『筑前国続風土記拾遺』
21　那珂川町教育委員会　1999『萩ノ原遺跡群　古屋敷遺跡群』
那珂川町文化財調査報告書　第46集
22　飛野博文氏の教示による。
23　貝原益軒編　1703『筑前国続風土記』
24　廣崎篤夫　1995『福岡県の城』　海鳥社

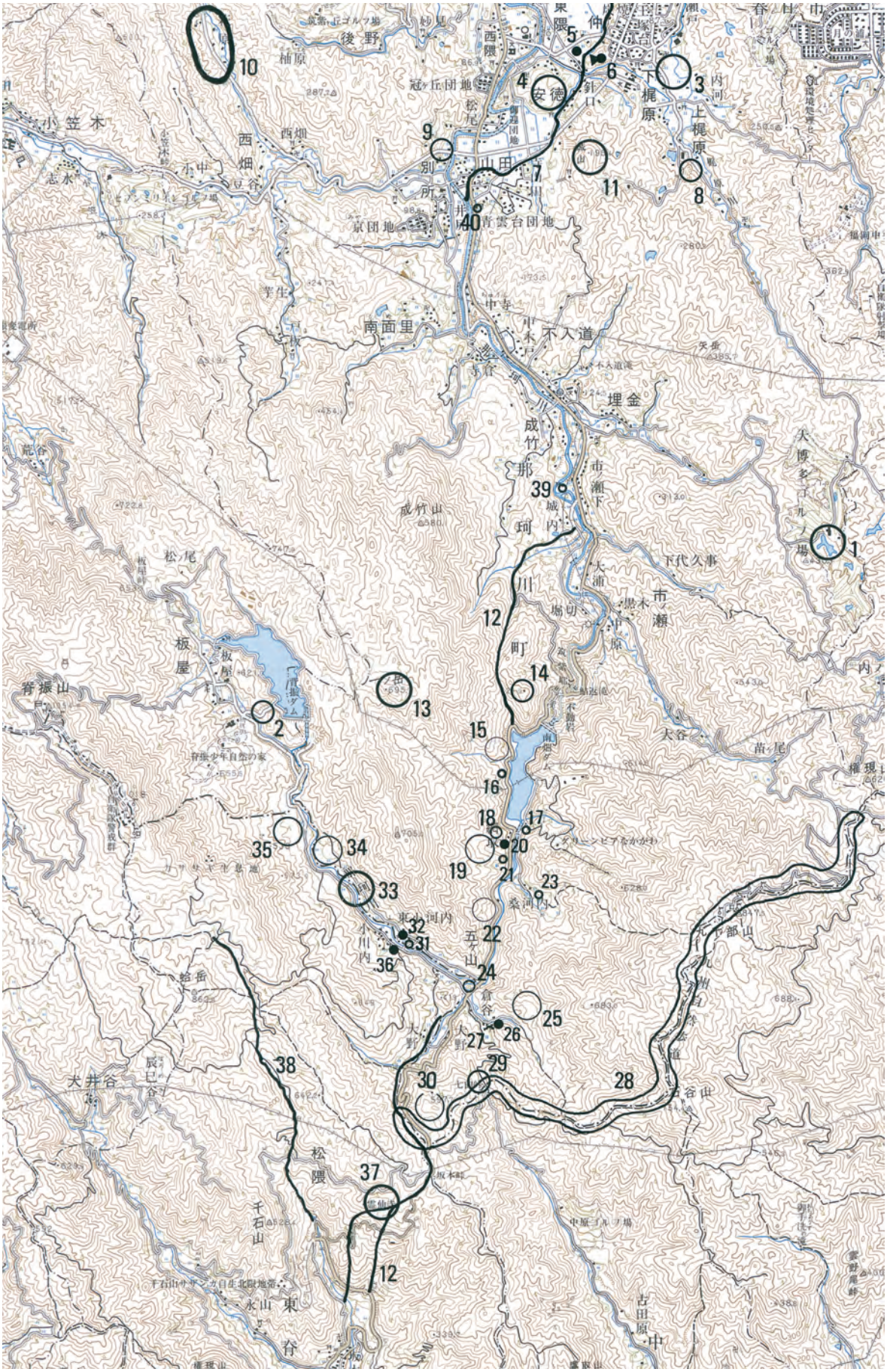


Fig. Ⅰ4-2-1　五ヶ山ダム周辺遺跡等位置図（1/60,000）〈国土地理院発行地図〉

25　那珂川町教育委員会　2006『岩門城跡』　那珂川町文化財調査報告書　第68集
26　那珂川町教育委員会　1976『郷土誌　那珂川』
27　川崎幹二　2001『那珂川町の歴史探訪』
28　那珂川町教育委員会　2002『国境石』　那珂川町文化財ハンドブック
29　東脊振村史編さん委員会　1982『東脊振村史』
30　吉原　勝　1968「小川内キリシタン序論」
　　武広　勇　1969「秘境小川内（二）隠れキリシタン」　新郷土　昭和44年11月号［248］
31　小川内誌編纂委員会　1985『小川内誌』
32　註26文献。

金の採掘については、武廣邦敏・築地蔵次・築地敏恵・築地儀忠・築地松蔵・山田和馬さんから話を聞いた。

Pho.Ⅰ4-2-7　国境石（標石２）

Pho.Ⅰ4-2-8　国境石（31・32）

Fig.Ⅰ4-2-1　五ヶ山ダム周辺遺跡等分布図（1/60,000）

1　四郎五郎池遺跡
2　板屋遺跡
3　入道町遺跡
4　安徳台遺跡群
5　安徳原田遺跡
6　安徳大塚古墳
7　裂田溝
8　地別当遺跡群
9　別所次郎丸遺跡
10　萩ノ原・古屋敷遺跡群
11　岩門城跡
12　肥前・筑前街道
13　一ノ岳城跡
14　虎ヶ岳城跡
15　御所ノ原遺跡群
16　猿田彦大神
17　猿田彦大神
18　網取遺跡（古貨埋蔵地）
19　赤坂遺跡群
20　山神社
21　舟地蔵
22　代官屋敷跡
23　猿田彦大神
24　白土城跡
25　尼寺跡
26　大野・山神社
27　猿田彦大神
28　国境石群
29　七曲城跡
30　大野遺跡群
31　猿田彦大神
32　山神社
33　国境石垣
34　竹屋敷遺跡群
35　竹屋敷座主別宅跡
36　山祇神社・「小川内の杉」
37　霊仙寺跡
38　蛤水道
39　日吉神社
40　伏見神社

ⅲ．那珂川町・吉野ヶ里町［旧東脊振村］の成り立ち

ａ．那珂川町

現行の那珂川町は、昭和31年（1956）４月１日に南畑村、岩戸村、安徳村が合併して成立した。平成18年（2006）には町制施行50周年となる節目の年を迎えたところである。

合併前の各村は、明治22年（1889）の町村制施行時に成立したものであり、それぞれは次のような村からなっていた。

南畑村‥‥五ヶ山・市ノ瀬・成竹・埋金・不入道・南面里

岩戸村‥‥山田・別所・西畑・西隈・後野・道善・恵子・片縄

安徳村‥‥安徳・上梶原・下梶原・東隈・仲・五郎丸・松木・今光・中原

合併した昭和31年３月１日現在の人口は南畑村2,532人、岩戸村3,702人、安徳村2,714人の合計8,948人であった。

平成17年（2005）10月１日の国勢調査では46,970人となっており、さらに平成18年（2006）２月28日現在では47,938人を数えるに至っているので、50年間に約5.3倍に増えたことになる（註１）。

ｂ．吉野ヶ里町［旧東脊振村］

現行の吉野ヶ里町は、平成18年（2006）３月１日に東脊振村と三田川町が合併して成立した。この五ヶ山ダムにかかる文化財調査の期間中の最後に至って合併がなされ、調査中の大半はまだ東脊振村であった。

東脊振村は明治22年（1889）の市町村制施行とともに誕生したが、これはそれまでの大曲、石動、三津、松隈の４ヶ村が合併したものであり、その地名は大字として受け継がれた。

東脊振村となる前の各村は、それぞれが次のような村からなっていた。

大曲村‥‥大曲・横田・唐紙

石動村‥‥上石動・下石動・西石動

三津村‥‥三津・永山

松隈村‥‥松隈・坂本・西小川内

人口は昭和30年には5,351人であったが、昭和50年には5,626人、昭和55年では大曲が1,720人、石動779人、三津847人、松隈589人、団地ほか1,710人の計5,645人であった。平成17年（2005）10月１日現在の概数は6,242人となっている。因みに、三田川町と合併しての平成18年（2006）３月１日の吉野ヶ里町では15,845人とされている（註２）。

註

１　那珂川町教育委員会　1976『郷土誌　那珂川』ほか

２　東脊振村史編さん委員会　1982『東脊振村史』ほか

iv．五ヶ山・小川内周辺の指定文化財等

(1) 那珂川町五ヶ山には国・県・町指定の文化財はない。最も近い所にある指定文化財は大字市ノ瀬字釣垂にある県指定天然記念物の「釣垂のヒノキシダ」(昭和37［1962］年４月19日指定）である。

しかしながら、福岡県文化財保護課に残る事績によれば、五ヶ山にもかつて指定物件があり、また指定申請されたものがあった。

□　天然記念物「垂乳根薬師の大銀杏」昭和32［1957］年12月20日　県指定
　　所在地：大字五ヶ山字道十里垂乳根薬師境内
　　→　昭和40［1965］年４月６日指定解除

○　天然記念物「ちくししゃくなげ」　昭和39［1964］年３月９日　県指定申請
　　所在地：大字五ヶ山字大野　築地秀実宅

○　天然記念物「大野の山茶花」　昭和39［1964］年３月９日　県指定申請
　　所在地：大字五ヶ山字大野

○　名勝「稚児落しの渕」　昭和39［1964］年６月２日　県指定申請
　　所在地：大字五ヶ山字東小河内

○　天然記念物「道枝折のかえで」　昭和40［1965］年５月17日　県指定申請
　　所在地：大字不入道（もと道十里に存したのを移植したものらしい）

「垂乳根薬師の大銀杏」については指定が解除されているが、現在でも南畑ダムの東南部湖畔に枯れたまま立っている。県指定申請された上記４件についてはいずれも指定されるに至らなかった。

「大野の山茶花」は倉谷川のほとりにあり、平成16年４月まではまだ現存していて、３本が一体となって樹形をなしていたが、同年11月までの間に伐採された。最も大きい１号木は、指定申請当時は根本回りが85㎝とされているが、平成16年［2004］には111㎝にまでなっていた。40年を経過して直径が27㎝から８㎝余増えて約35㎝になったことになる。

「稚児落しの渕」は本章の「はじめに」の中で「稚児落しの滝」として述べた通りである。

Pho.Ⅰ4-4-1　南畑ダムと「垂乳根薬師の大銀杏」

Pho.Ⅰ4-4-2　大野の山茶花

(2) 一方、東脊振村［現吉野ヶ里町］小川内には佐賀県指定の天然記念物がある。

□　天然記念物「小川内の杉」　昭和31［1956］年３月１日　指定

所在地：大字松隈字小川内　山祇神社境内

この山祇神社境内にある杉は３株があり、そのうちの１本は小さいが、他の２本は幹回りが５ｍを越す大きなものである。樹齢は推定でしかないが、700～800年ほどと言われている。この３本はDNA鑑定の結果では同一のクローンであることがわかっているので、ともにもとの親木から挿し木で大きくなったものである。

この杉は、かつて２回ほど伐り倒されそうになったというエピソードが知られている。まずは、佐賀新聞の昭和52（1977）年８月15日付け紙面に「村の文化財博士」として武廣勇さんが紹介されているが、その中に大正初期に村で起こった事件として次のくだりがある。

「福岡県の炭鉱王・伊藤伝右衛門が華族出身の詩人・柳原燁子と結婚する際に、彼女のため赤銅（あかがね）御殿の建設を思い立った。その財力に物を言わせ、“夫婦杉”（引用者註：小川内の杉）を建設資材に活用しようとした。」

このときは結果的に伐り倒されることはなかった。２度目は終戦後まもなくの頃にまた伐採の話が持ち上がったが、このときも何とか伐採を免れたという。伊藤伝右衛門の赤銅御殿にまつわる話については今となっては確かめる術がないが、事実とすれば興味は尽きないところである。

なお、佐賀県の県鳥でもあるカササギは、福岡県でも県南のかなり広い地域がその生息地として国指定天然記念物に指定されているが（大正12年３月７日指定）、脊振山系を越えた北側には生息地が及んでおらず、小川内にも見られない。　〔伊崎〕

Pho.Ⅰ4-4-3　小川内の杉　遠望

Pho.Ⅰ4-4-4　小川内の杉

Pho.Ⅰ4-4-5　小川内の杉

Ⅱ　自然部門

1　地形・地質・鉱物

i．地形

本地域は、脊振山地の東端にあたり、福岡県と佐賀県の県境地域に位置している。谷や稜線の連なりは、北西-南東、北北西-南南東、北東-南西系統のリニアメント（地形的線構造）を表現している（Fig.Ⅱ1-1-1）。

那珂川上流部では背振ダムから小川内にかけての地形は北西-南東系統のリニアメントに並行する縦谷を形成している（Pho.Ⅱ1-1-1・2）。さらにこの系統を横切る北北西-南南東系統の横谷として、筑紫耶馬渓やダムサイト付近の峡谷が発達している（Pho.Ⅱ1-1-4）。二系統の谷の組み合わせが県境部の「レの字」の地形をつくっている（Fig.Ⅱ1-1-2）。このように、地層境界や断層線それに褶曲の軸部など、基盤の地質構造を反映した地形のことを「構造谷」という。

五ヶ山ダムから小川内付近ではしばしば花崗岩を切る北西-南東系統の断層が見られ、断層粘土やカタクレーサイトを伴っている（Fig.Ⅱ1-1-3、Pho.Ⅱ1-1-3）。これは新しい断層地形を伴っていないので、現在活動していない、古い断層線と考えられる。

河川の下刻作用によって、河床面が低下した場合、古い河床や古い山麓扇状地が台地（低位段丘面）や緩斜面を形成する（Pho.Ⅱ1-1-5・6）。このような台地や緩斜面が小川内と大野の谷に発達している。旧小川内小学校東側には河川争奪の痕跡地形と低位段丘堆積物（Pho.Ⅱ1-1-7）がみられる。これらの台地や緩斜面と砂礫層は河川の流路変更（河川争奪）にともなう河床低下によって生じたと考えられる（Pho.Ⅱ1-1-8）。

旧小川内小学校の川を挟んだ反対側の山麓には工事用の取り付け道路が建設されている。この道路の上方に球状岩塊がみられ、丸い岩塊を積み上げたような独特の奇岩地形をつくっている（Pho.Ⅱ1-1-9）。球状岩塊の成因を考える。花崗岩のような均質な岩石が膨潤収縮を繰り返すと岩盤に碁盤の目状の節理が立体的に入る。節理がキューブ状になった状態で風化が進んでゆく。風化は節理とその交差部分で著しいため、キューブの外側ほど風化が進む。このため、均質岩の風化は玉葱状に進んでゆく。玉葱状風化がさらに進むと中心に丸い岩芯が残る。この状態で外側部分の浸食が進んで風化部分が失われると丸い岩芯のみが露出する。丸い岩塊はその場で花崗岩の岩芯がむき出しになったものである。ここでは古い断層地形の三角末端面の頂部に発達している。岩塊が丸いので地震などで下の道路に落下するおそれがある。そのような部分では、何らかの崩落対策が必要である。

〔下山正一〕

Fig.Ⅱ1-1-1　脊振山地のリニアメント

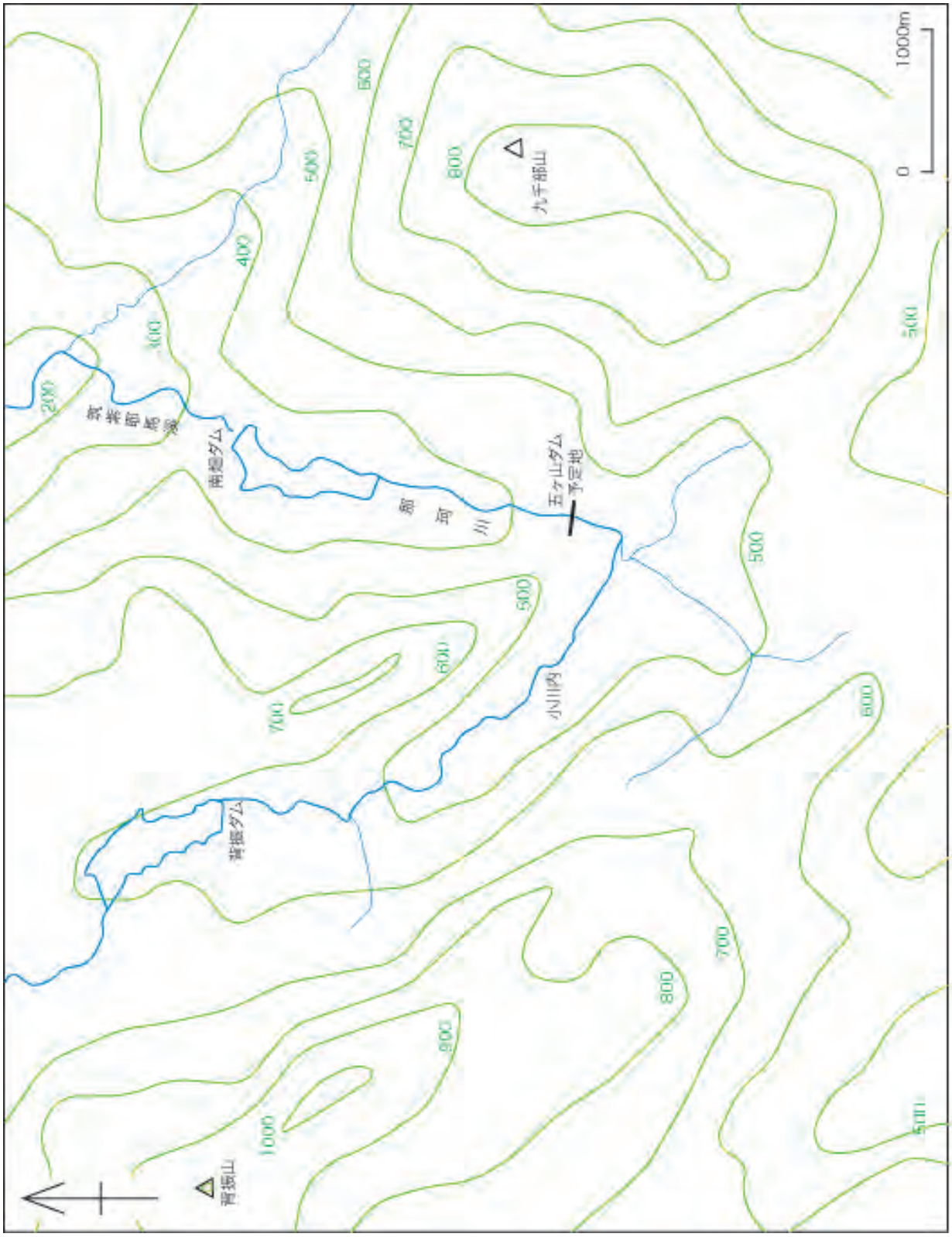


Fig.Ⅱ1-1-2　五ヶ山付近の地形概略図（500ｍ谷埋図）

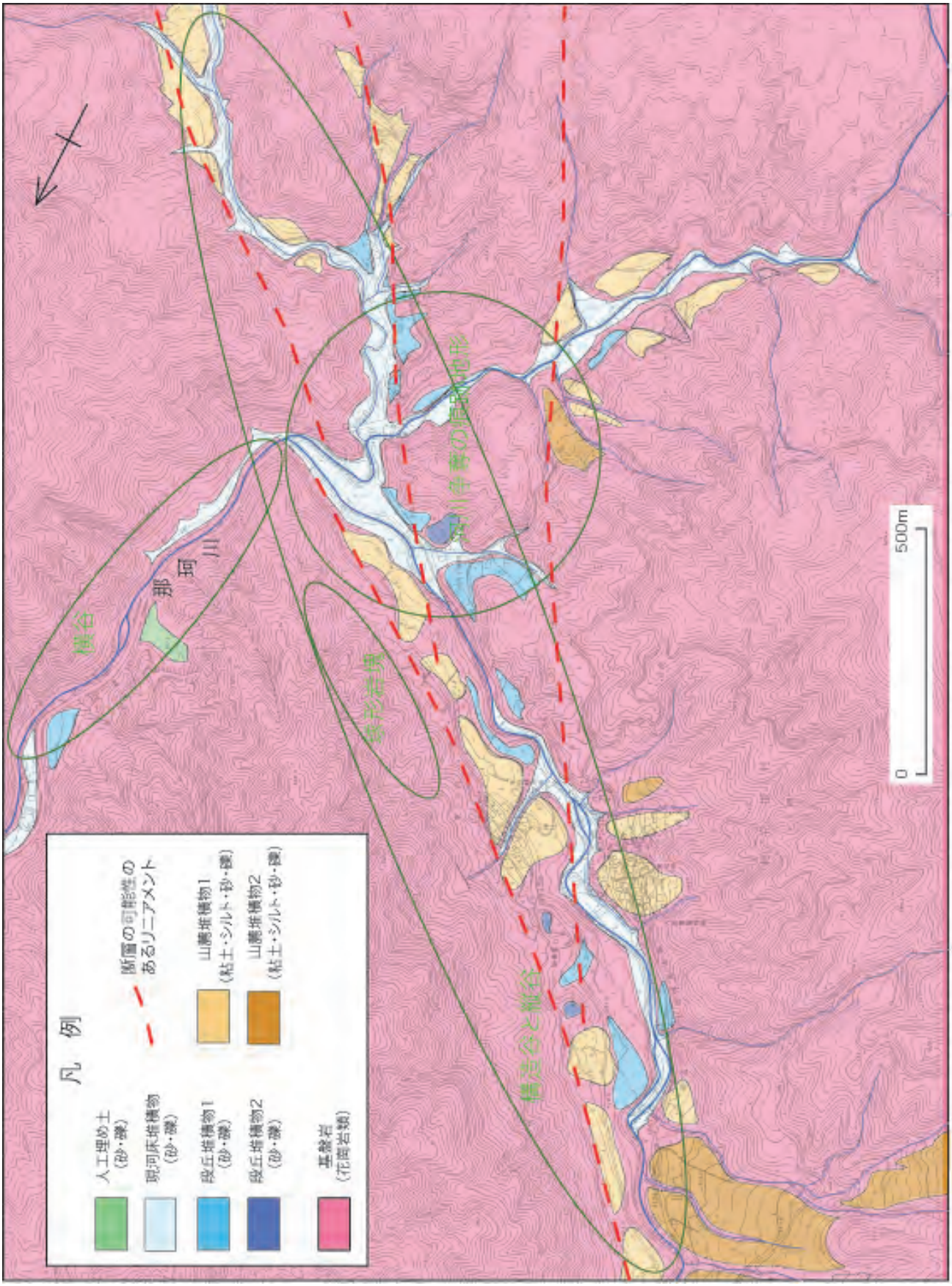
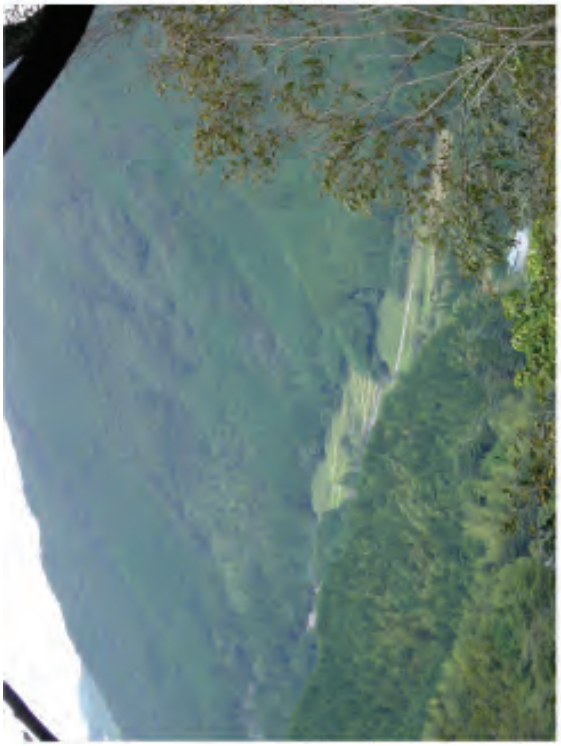


Fig. Ⅱ 1 - 1 - 3　五ヶ山付近地形及び第四紀地質分布図



Pho. Ⅱ1 - 1 - 1　七曲峠からみた小川内谷（縦谷）

Pho. Ⅱ1 - 1 - 2　小川内谷（小川内小学校付近）

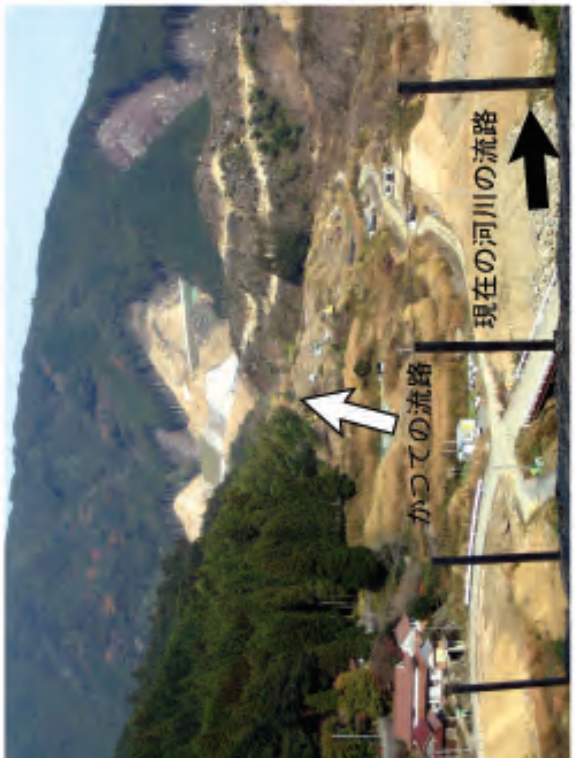
Pho. Ⅱ1 - 1 - 3　古い断層（白色粘土）

Pho. Ⅱ1 - 1 - 4　筑紫耶馬渓（横谷）

Pho. Ⅱ 1 - 1 - 5　緩斜面をつくる古期山麓堆積物

Pho. Ⅱ 1 - 1 - 6　低位段丘面（小川内小学校）

Pho. Ⅱ 1 - 1 - 7　低位段丘堆積物（砂礫層）



Pho. Ⅱ 1 - 1 - 8　河川争奪の跡（大野）

Pho. Ⅱ 1 - 1 - 9　球状岩塊（東小河内）

ⅱ．地質・鉱物

本調査地域は白亜紀に活動した花崗岩類が広く分布し、古生代の三郡変成岩類が小規模なレンズ状岩体として花崗岩類中に認められる。そして、これらを覆う河川堆積物が那珂川に沿って点在する。また、熱水変成作用によって形成された金鉱床を採掘した小規模な金探鉱跡が花崗岩中に２カ所認められる。主な地質構造としては北西-南東方向の断層とそれを切る北北東-南南西方向の断層が存在する。Fig.Ⅱ1-2-1に本調査地域の地質図（川野・柚原，2005）を示す。

岩石記載（下位より）

(1) 三郡変成岩類

小川内集落から北西へ１kmほど離れた糸島花崗閃緑岩の分布域に幅５ｍ、長さ15ｍほどの大理石ブロックが露出している。露頭は林道から東に20ｍほど分け入った緩傾斜の林の中にあり、以前は農耕用の肥料として採掘が行われていたようである（東脊振村小川内，1985）。岩石は方解石からなる粗粒の結晶質石灰岩で肉眼では白色を呈する。なお、周囲の糸島花崗閃緑岩との接触部は確認できず、交代作用が生じているのか定かではない。

大野川沿いに分布する変成岩レンズは厚さが最大25ｍ、長さは100ｍ以上で、N58°W，82°Sの面構造が発達する。レンズの伸びはこの面構造とほぼ平行である。レンズの周辺部では崩壊が進み、糸島花崗閃緑岩中の暗色包有物へと変化している（Pho.Ⅱ1-2-1ａ・ｂ）。このレンズ

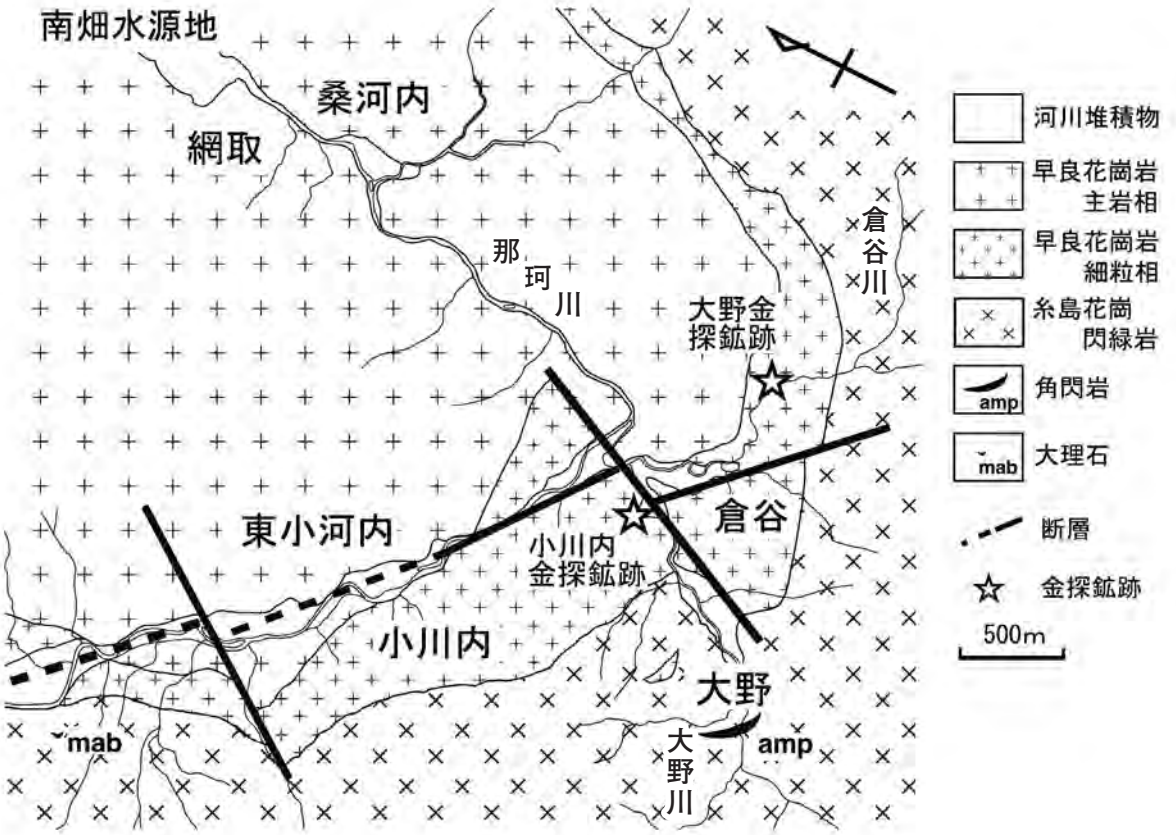


Fig.Ⅱ1-2-1　五ヶ山ダム湛水域周辺の地質図（川野・柚原，2005）

岩体は、細粒の泥質～マフィック片岩と細～中粒の角閃岩からなる。泥質～マフィック片岩は、ざくろ石-黒雲母片岩～黒雲母-普通角閃石片岩で、鏡下ではレピドブラスティック組織を呈し、主に黒雲母、斜長石、石英、普通角閃石と少量のざくろ石からなり、副成分鉱物として燐灰石、不透明鉱物、褐れん石、ジルコンを伴う。普通角閃石が含まれるマフィック層と全く含まれない泥質層が５mm～数cmオーダーで存在することから、泥質岩とマフィック岩が互層をしていた可能性が高い。角閃岩は、普通角閃石-黒雲母角閃岩で、鏡下ではネマトブラスティック組織を呈し、主に普通角閃石、斜長石、石英と少量の黒雲母からなり、副成分鉱物として燐灰石、不透明鉱物、チタン石、ジルコンを伴う（Pho.Ⅱ1-2-1c・d）。

倉谷川上流にも厚さ６ｍ以上の小規模な角閃岩レンズが挟まれる。これにはN64°E，66°Sの面構造が発達する。本岩は、普通角閃石-黒雲母角閃岩で、鏡下ではネマトブラスティック組織を呈し、主に普通角閃石、斜長石、黒雲母、石英からなり、副成分鉱物として燐灰石、不透明鉱物、褐れん石、ジルコンを伴う。

(2) 花崗岩類

北部九州に分布する白亜紀花崗岩類は唐木田（1985）によって以下に示す15の岩型に分類されている。古いものから新しいものへと順に、糸島花崗閃緑岩、深江花崗岩、朝倉花崗閃緑岩、鞍手花崗閃緑岩、添田花崗閃緑岩、平尾花崗閃緑岩、香春花崗閃緑岩、北崎花崗閃緑岩、志賀島花崗閃緑岩、真崎花崗岩、油須原花崗岩、勝山花崗岩、嘉穂花崗岩、早良花崗岩、佐賀花崗岩の各岩型である。このうち、平尾花崗閃緑岩・勝山花崗岩・真崎花崗岩・油須原花崗岩・添田花崗閃緑岩の５岩型は小倉-田川断層帯の東側に位置し、不透明鉱物としてチタン鉄鉱を含むチタン鉄鉱系列花崗岩類に属する（石原ほか，1979）。残る10岩型は北部九州花崗岩類の主体を構成し、不透明鉱物として磁鉄鉱を含む磁鉄鉱系列花崗岩類に分類されている（石原ほか，1979）。

本調査地域には前述の15岩型のうち糸島花崗閃緑岩と早良花崗岩が露出しており（唐木田，1985；久保ほか，1993）、前者は調査地域の南側に、後者は北側に広く露出している（Fig.Ⅱ1-2-1）。また、糸島花崗閃緑岩に接する早良花崗岩は粒度が細かくなっているため、主岩相と細粒相に細分される。

（2-1）糸島花崗閃緑岩

本調査地域に分布する糸島花崗閃緑岩は主として灰緑色～暗緑色を呈する粗粒岩である（Pho.Ⅱ1-2-2a）。部分的に細粒を呈する岩相も認められる場合がある。角閃石、黒雲母、斜長石から成る北西-南東方向で南に傾斜する面構造が発達する。この面構造に調和的なカリ長石の濃集部や暗色包有物が認められる（Pho.Ⅱ1-2-2b）。暗色包有物は優白質の周縁相をもっており、細粒の黒雲母が発生している。一般的に糸島花崗閃緑岩は粗～中粒の普通角閃石-黒雲母トーナル岩～石英閃緑岩から構成され、鉱物の配列による片状構造を示すことによって特徴づけられる。本岩型からは116±17Maの Rb-Sr 全岩アイソクロン年代、93.4±0.5Maの全岩-鉱物アイソクロン年代（大和田ほか，1999），110±10Maのジルコン Pb-α年代（Karakida et al.，1965）、99±6Maの黒雲母 K-Ar 年代（Shibata and Karakida，1965）が報告されている。

糸島花崗閃緑岩の主要構成鉱物は斜長石、石英、カリ長石、黒雲母、角閃石でしばしばチタン石を含む（Pho.Ⅱ1-2-2c・d）。斜長石は自形～半自形を呈し、長径は５mmほどのものが

多い。多片双晶や累帯構造を示し、セリサイト化しているものも認められる。石英は他形で最大３mmに達し、多くは波動消光を示す。カリ長石は僅かに含まれ、他鉱物の間に充填するように産する。パーサイト構造が顕著である。角閃石は自形を呈し、最大長径が１cmに達するものもある。双晶を示しているものが多い。黒雲母は自形～半自形で、角閃石や不透明鉱物を伴って産する。部分的に変形を被っているものも認められる。チタン石は黒雲母や角閃石に伴われて産し、自形を呈する。副成分鉱物としては燐灰石、不透明鉱物、ジルコンが認められる。

（２-２）早良花崗岩

早良花崗岩は糸島花崗閃緑岩に貫入する粗～中粒の黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩である。長径数cmに発達したカリ長石の巨晶を有することによって特徴づけられる。本岩型からは114±11MaのRb-Sr全岩アイソクロン年代、105.2±2.3MaのRb-Sr全岩-鉱物アイソクロン年代（大和田ほか，1999），84.3±0.3Maの黒雲母アイソクロン年代（柳ほか，1999）、90±10Maのジルコン Pb-α年代、90±10Ma、94±10MaのモナザイトPb-α年代（Karakida et al.，1965）、85±7Maの黒雲母K-Ar年代（Shibata and Karakida，1965）が報告されている。以上の放射年代からいずれの岩型も白亜紀に活動した岩体であることがわかる。また、早良花崗岩が糸島花崗閃緑岩に貫入する様子が野外で認められており（唐木田，1985；大和田ほか，1999）、早良花崗岩の放射年代が若干若いことと調和的である。

早良花崗岩細粒相は淡桃～灰白色の岩石で（Pho.Ⅱ1-2-3 a）、糸島花崗閃緑岩との境界部に最大で幅およそ800ｍにわたって露出している。鉱物の配列による弱い片状構造を示す場合がある。主岩相に比してカリ長石の巨晶の含有率が低くなる傾向があり、まれに優白質の包有物を含んでいる（Pho.Ⅱ1-2-3 b）。また、風化の進行が早く、地表付近では新鮮な岩石の露出は僅かである。主要構成鉱物はカリ長石、石英、斜長石、黒雲母で少量の白雲母を伴う（Pho.Ⅱ1-2-3 c・d）。斜長石は自形～半自形を呈し、長径は１～２mmほどである。多片双晶や累帯構造を示し、セリサイト化が著しい。石英は他形で１～２mmのものが多く、波動消光を示す。数cmに達する自形のカリ長石巨晶には自形の斜長石や黒雲母が包有されている。“石基”を構成するカリ長石は他形で、充填状に産する。黒雲母は自形～半自形で、不透明鉱物を伴って産する。変質が進み、緑泥石に変化しているものが多い。副成分鉱物として燐灰石、褐れん石、ジルコン、不透明鉱物が含まれる。

早良花崗岩主岩相は淡桃～灰白色の岩石で細粒相よりも多くのカリ長石巨晶を有することによって特徴づけられる（Pho.Ⅱ1-2-4 a）。地表踏査では確認できなかったが、ダム工事に伴うボーリング試料からは板状の暗色包有物や不定形の優白質包有物を含むことが確認できる（Pho.Ⅱ1-2-4 b）。主要構成鉱物はカリ長石、石英、斜長石、黒雲母である（Pho.Ⅱ1-2-4 c・d）。斜長石は自形～半自形を呈し、長径は２～４mmに達する。累帯構造が顕著であり、セリサイト化が進行している。石英は他形で２～３mmのものが多く、波動消光を示す。数cmに達する自形のカリ長石巨晶は自形の斜長石や黒雲母が包有している。“石基”を構成するカリ長石は他形で、５mmほどに成長している。黒雲母は自形～半自形で、２～３mmのものが多く、不透明鉱物を伴って産する。部分的に緑泥石化が進行している。副成分鉱物としては燐灰石、褐れん石、ジルコン、不透明鉱物が認められる。

前述の糸島花崗閃緑岩と早良花崗岩の鉱物容量をポイントカウンターで測定した。測定結果

岩体名	石英	斜長石	カリ長石	黒雲母	角閃石	チタン石	白雲母	不透明鉱物
早良花崗岩（主岩相）	34.3	39.4	18.8	7.5	—	—	—	0.3
早良花崗岩（細粒相）	30.3	38.9	22.2	8.4	—	0.2	0.2	0.3
糸島花崗閃緑岩	22.6	42.7	10.4	11.9	12.2	0.3	—	—

Tab.Ⅱ1-2-1　花崗岩類の平均モード組成（容量%）

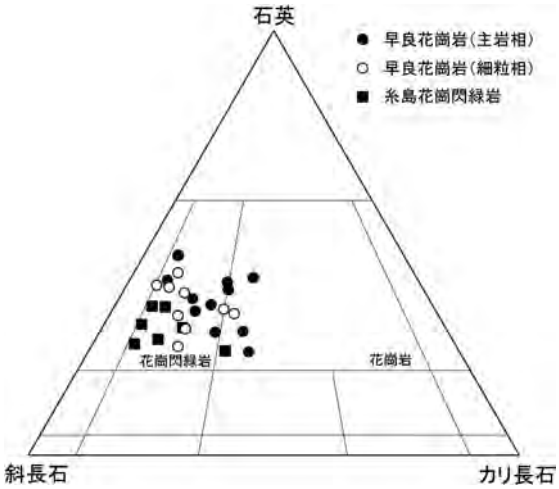


Fig.Ⅱ1-2-2　花崗岩類の石英-斜長石-カリ長石三角図

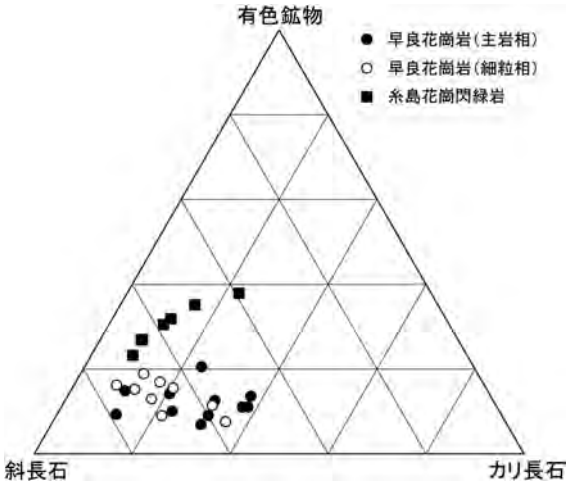


Fig.Ⅱ1-2-3　花崗岩類の有色鉱物-斜長石-カリ長石三角図

をTab.Ⅱ1-2-1とFig.Ⅱ1-2-2・3に示す。糸島花崗閃緑岩と早良花崗岩との最も顕著な相違は角閃石を含有するか否かである。糸島花崗閃緑岩は平均で10%超える角閃石を有するのに対し、早良花崗岩は主岩相、細粒相共に角閃石を含んでいない。また、黒雲母も糸島花崗閃緑岩で12%近く含まれるのに比して、早良花崗岩は９%以下である。不透明鉱物は糸島花崗閃緑岩ではカウントされていないが、黒雲母や角閃石に含有されている産状が確認されている。通常、チタン石は糸島花崗閃緑岩を特徴づける鉱物であるが、境界域に近い早良花崗岩の細粒相に含まれていることが確認された。これらの花崗岩類を分類するために石英-斜長石-カリ長石三角図に点示すると、多くの試料は花崗閃緑岩の領域にプロットされる。ただし、糸島花崗閃緑岩は早良花崗岩よりも斜長石に富む傾向が認められる。有色鉱物-斜長石-カリ長石三角図では糸島花崗閃緑岩が明らかに有色鉱物（黒雲母、角閃石、チタン石、白雲母、不透明鉱物の合計）に富む傾向があり、有色鉱物の減少に伴って斜長石が増加する変化傾向を示している。

(3) 河川堆積物

河川堆積物は那珂川・大野川流域に発達し、早良花崗岩、糸島花崗閃緑岩、変成岩、ペグマタイト、アプライト、閃緑岩等の細礫～巨礫を含む砂礫層からなる。礫は亜角礫～亜円礫からなり、大きさは最大数ｍに達する。河川堆積物の厚さは不明であるが、数ｍから10ｍ程度であると考えられる。

地質構造

糸島花崗閃緑岩と早良花崗岩との境界部付近では、倉谷から小川内に伸びる北西-南東方向

の断層とそれを寸断する北北東-南南西方向の右横ずれ断層が認められる（Fig.Ⅱ1-2-1）。これらの断層は、確実度Ⅱ～Ⅲの活断層とされる板屋峠断層系（九州活構造研究会，1989）に相当すると考えられる。前者は4カ所で確認しており、後者は2カ所でその位置を確認している。小川内南東では、断層の姿勢はN53°W，83°Sで、幅約2mの破砕帯を伴う（Pho.Ⅱ1-2-5a）。佐賀橋北西では、N31°W，82°Wで、2枚の厚さ1～15cmの断層ガウジを伴う（Pho.Ⅱ1-2-5b）。この断層は、周囲に発達する小断裂を切っている。さらに、この10m西側には厚さ1～5cmの断層ガウジを伴う断層（N13°W，90°）が認められる。これら3本の断層の周囲は破砕された白色変質花崗閃緑岩（柚原・祐徳，2005）である。倉谷では、断層の姿勢はN42°W，83°NEで、厚さ20cmの断層ガウジを伴う（Pho.Ⅱ1-2-5c）。さらに幅1m以上の破砕帯を伴う。破砕されているのは白色変質花崗閃緑岩である。大野橋北西では、北北東-南南西方向の断層が認められる（Pho.Ⅱ1-2-5d）。断層の姿勢はN27°E，87°Eで、厚さ最大3cmの断層ガウジを伴う。断層の西側最大30cmと東側最大40cmは、白色変質花崗閃緑岩からなる。

本地域には露頭規模で認められる様々な小断裂が発達している（柚原ほか，2006a）。小断裂は、緑色小断層、マイクロクラック、節理、断層ガウジを伴う小断層に区分される。各小断裂の方向性、切断関係、伴われる断層岩の性質などから、これらの小断裂の多くは板屋峠断層系の活動に伴って形成されたと考えられるが、一部はそれに先立つ断層活動で形成されたと考えられる（柚原ほか，2006a）。

金探鉱跡

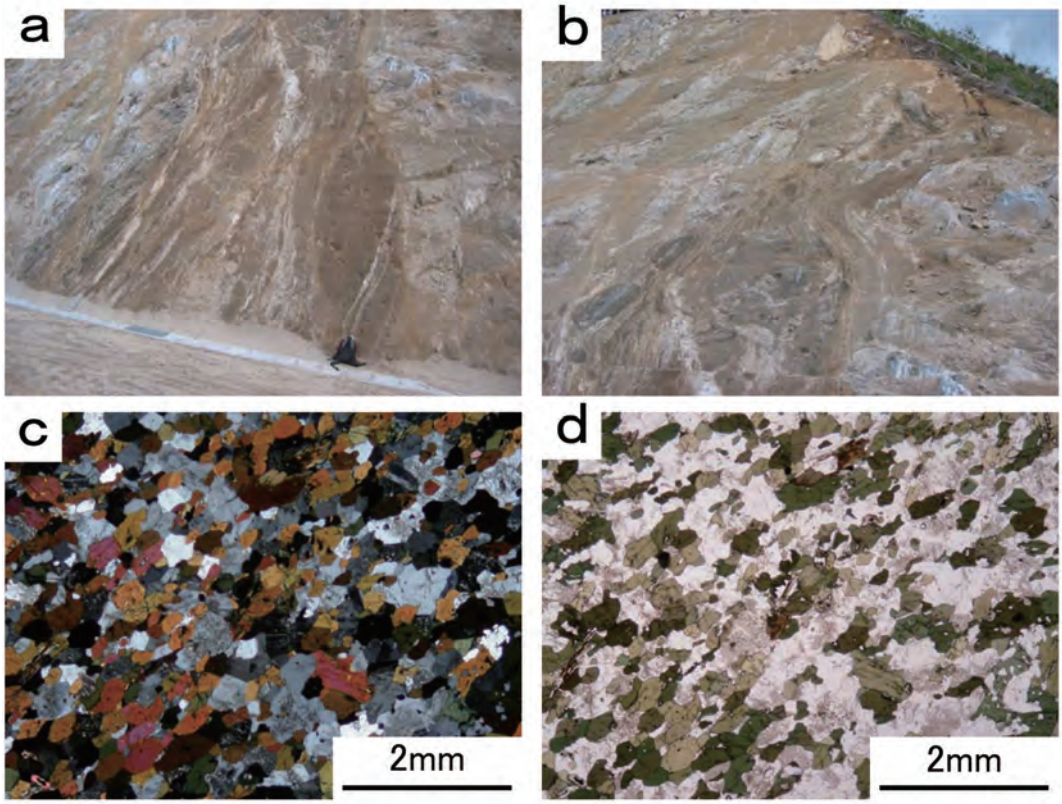
早良花崗岩細粒相分布域には2カ所の金探鉱跡地が認められる（Fig.Ⅱ1-2-1）。一つは福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山大野地区（那珂川町教育委員会，1976）に、もう一つは佐賀県神埼郡東脊振村小川内地区（東脊振村小川内，1985）にある。柚原・祐徳（2005）は、正式に名称が決まっていないことから、それぞれ大野探鉱跡、小川内探鉱跡と仮称した。大野探鉱跡では終戦後まで（那珂川町教育委員会，1976）、小川内探鉱跡では大正時代に採掘が行われたとされる（東脊振村小川内，1985）が、鉱業主が記録されているだけで、金の採掘量などの情報は無い。

大野探鉱跡には坑口が2つ残っている。上流側の坑口Aは、幅約1m、高さ約1mでほぼ東の方向に10m以上の奥行きがあるが、内部に水がたまっており、奥部を観察することはできない（Pho.Ⅱ1-2-6a・b）。坑口A周辺には、鉱脈周辺の岩石が露出している。さらに、坑口の上流には採掘時に整備された石垣が残っている（Pho.Ⅱ1-2-6c）。坑口Aの南方40mに位置する坑口Bは、林道のすぐ下にあり、周囲は土壌に覆われている（Pho.Ⅱ1-2-7a）。坑口Bの幅は約1.6m、高さは0.3m以上で、北北東方向に数mは確認できるが、内部は多量の土砂で埋まっている（Pho.Ⅱ1-2-7b）。坑口Bの下方にも、採掘時に整備された石垣が残っている（Pho.Ⅱ1-2-7c・d）。小川内探鉱跡では坑口が残っているが、周囲は土壌に覆われており、岩石の露出は少ない（Pho.Ⅱ1-2-8a）。坑口は幅約0.8m、高さ約1mで、西北西方向に奥行き30m程度あったとされるが、現在は多量の土砂とゴミで埋まっている（Pho.Ⅱ1-2-8b・c）。坑口から東北東にほど離れた大野川のほとりには、鉱石を粉砕した水車跡の石垣が残っているが、水路は土壌に覆われ、最上部の石がわずかに出ているのみである（Pho.Ⅱ1-2-8d）。

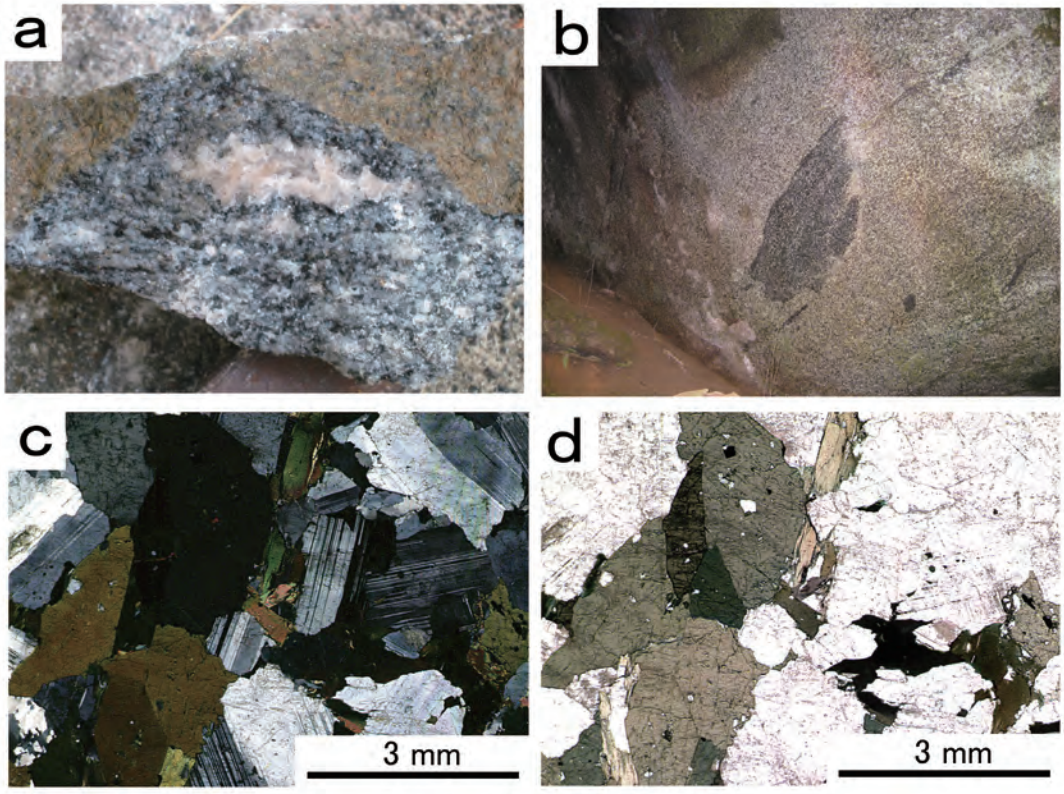
金探鉱跡周辺の早良花崗岩細粒相は、金鉱床を形成した熱水活動によって変質が進んでおり、

白色化している（Pho.Ⅱ1-2-9a・b）。この熱水活動は、板屋峠断層系の主要な活動以前に起こったと考えられる（柚原ほか，2006a）。柚原・祐徳（2005）は、これを白色変質花崗閃緑岩と呼んだ。金鉱脈（採掘され現在は確認できない）および白色変質花崗閃緑岩を形成した熱水の温度は、ズリから採取した自形石英に包有される流体包有物の均質化温度と白色変質花崗閃緑岩における変質鉱物の組み合わせから、中心部で230～280℃、白色変質花崗閃緑岩部分で200℃以上であったと考えられる（柚原・祐徳，2005）。白色変質花崗閃緑岩は大野探鉱跡および小川内探鉱跡周辺のほか、北西-南東方向と北北東-南南西方向の断層に沿って点在する。さらに、これらから離れた地点にも分布する。これらも、前述の２方向の断層に平行な断裂に沿って分布すると考えられる。このように、白色変質花崗閃緑岩は五ヶ山地域の限られた範囲に局所的に存在している。小川内探鉱跡周辺や断層沿いに点在する白色変質花崗閃緑岩の多くは、後の断層活動による破砕のため断裂が多数発達しており、全体的に褐色を呈する。大野探鉱跡周辺の白色変質花崗閃緑岩においても、断裂に沿って、数mm～1.5cmの褐色帯が認められる。早良花崗岩の熱水変質は、イライト、黄鉄鉱の出現（Pho.Ⅱ1-2-9c・d）で特徴づけられ、これに伴い、鉄、マグネシウム、カルシウム、ストロンチウム含有量の減少と、硫黄、ヒ素含有量の増加が生じている（柚原・祐徳，2005；柚原ほか，2006b）。硫黄およびヒ素は、黄鉄鉱に含まれていると考えられる（柚原・祐徳，2005；柚原ほか，2006b；小路，2006MS）。この黄鉄鉱は、酸素濃度の高い地下水下では不安定なため酸化分解され、硫黄とヒ素は地下水ならびに地表水中へ溶出していると考えられる。しかし、その溶出量は、五ヶ山ダム建設事務所の水質試験の結果から見ると、極めて微量であり、水道法基準よりもはるかに低い量である。さらに、溶出したヒ素の大部分は褐色化した白色変質花崗閃緑岩中に含まれる鉄の酸化・水酸化物中に再び吸着している。すなわち、硫黄は地下水ならびに地表水中へ拡散しているが、ヒ素のほとんどは岩石中に固定されていると考えられる。本地域の河川堆積物中のヒ素濃度は、周辺地域よりもわずかに高い（伊藤ほか，2007）。これは、河川堆積物中へのヒ素の固定を示していると考えられる。ダムの建設に伴い、周辺環境の変化が生じた場合、白色変質花崗閃緑岩中や鉄の酸化・水酸化物表面に吸着したヒ素が、再び溶出し地下水や河川水へ移動・拡散する可能性がある。しかし、白色変質花崗閃緑岩の局所性とその量の少なさや、溶出する量が極めて微量であることなどから、人体に影響が出るような量のヒ素が環境中に放出されることはないと考えられる。しかしながら、五ヶ山地域の地球化学図の解析の結果、現在その存在を確認していない場所にも白色変質花崗閃緑岩が分布している可能性が高い（小路，2006MS）。したがって、自然の定常的な拡散をはるかに越えた拡散を工事によって招くことを防止するためには、現在確認されている白色変質花崗閃緑岩の露出部分と、存在の推定される場所での適切な工法の施工によって、そのような岩石の環境への暴露を防ぐ必要があろう。

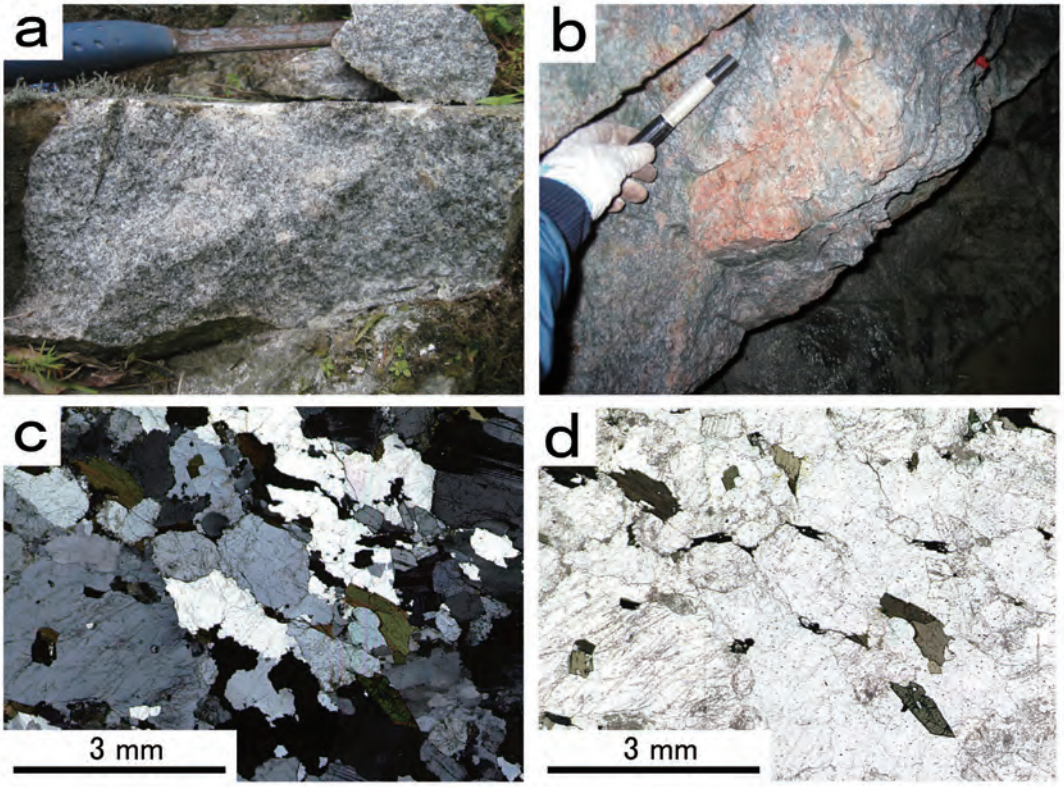
〔川野良信・柚原雅樹〕



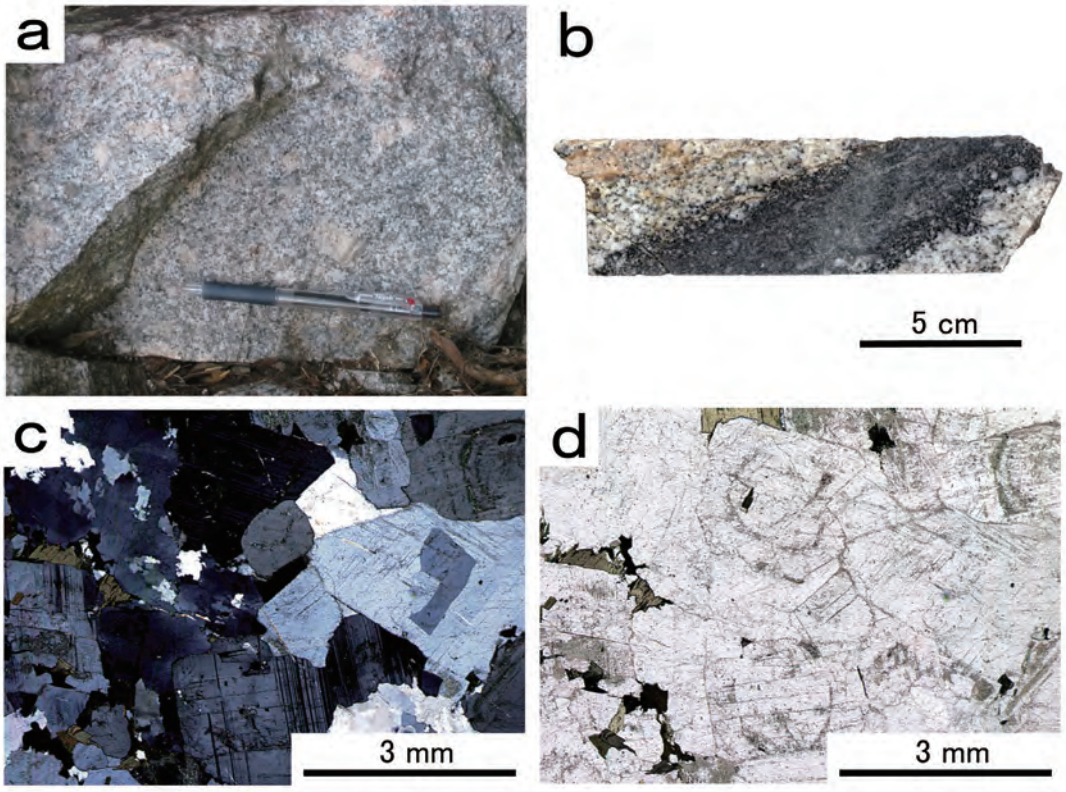
Pho.Ⅱ1-2-1　大野に産する角閃岩の産状と薄片写真



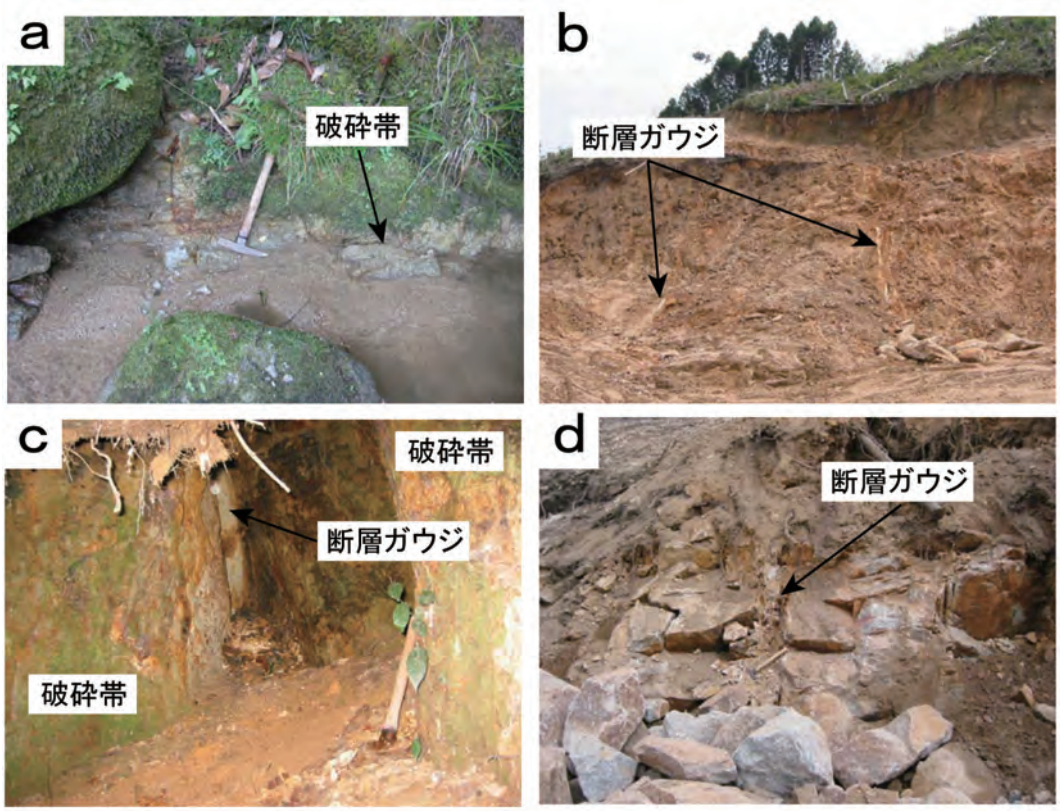
Pho.Ⅱ1-2-2　糸島花崗閃緑岩の産状と薄片写真



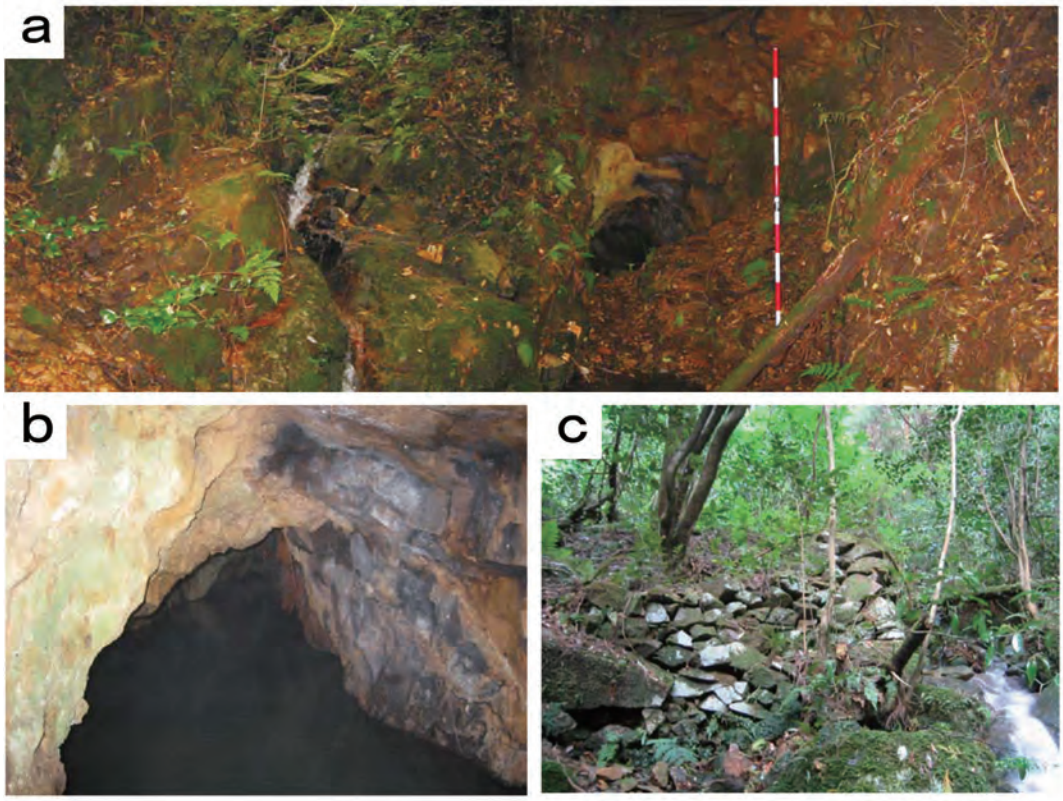
Pho.Ⅱ1-2-3　早良花崗岩細粒相の産状と薄片写真



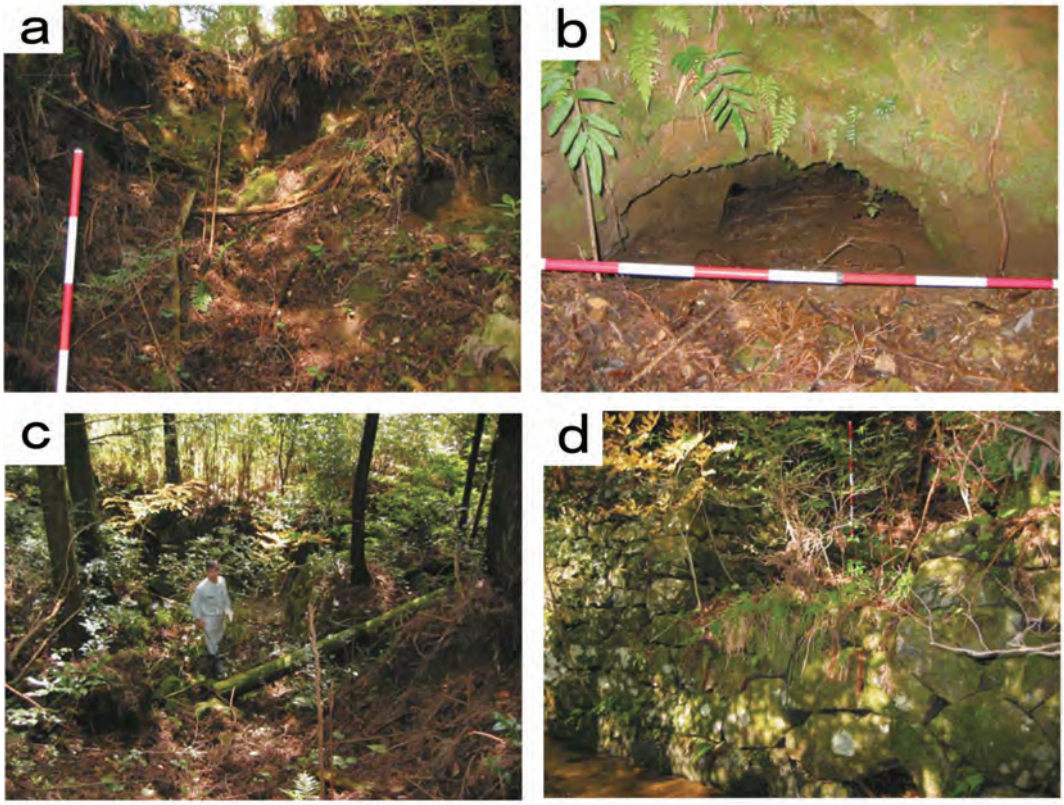
Pho.Ⅱ1-2-4　早良花崗岩主岩相の産状と薄片写真



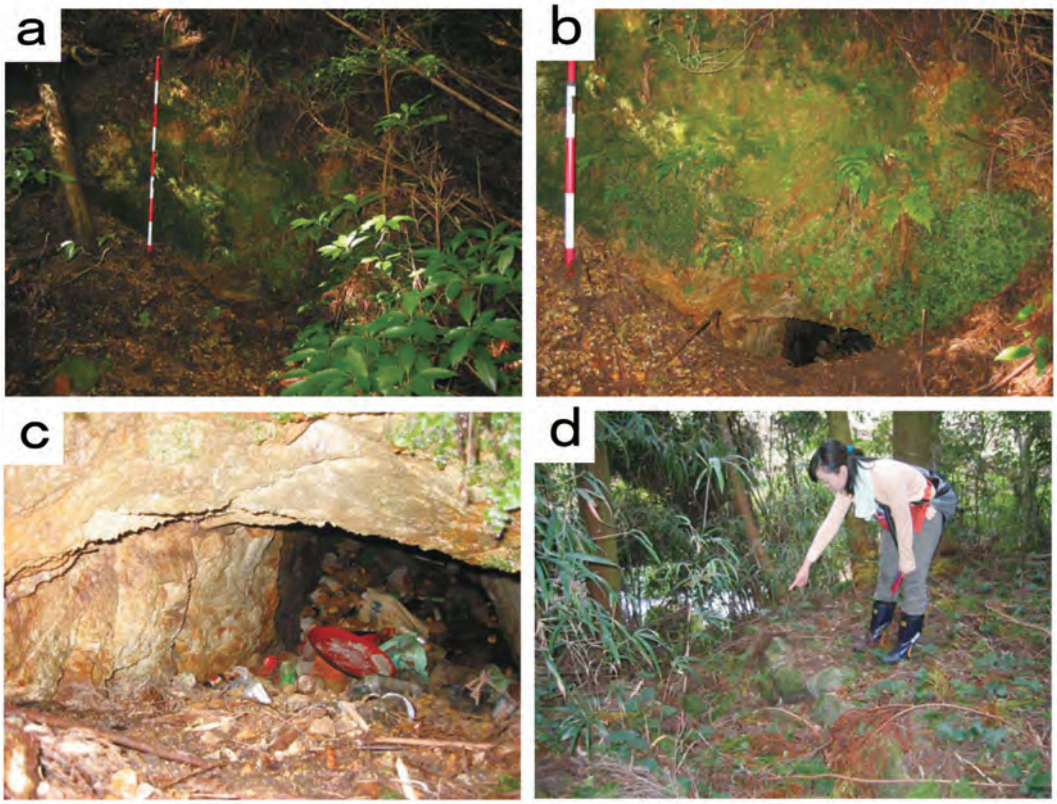
Pho.Ⅱ1-2-5　調査地域にみられる断層や破砕帯



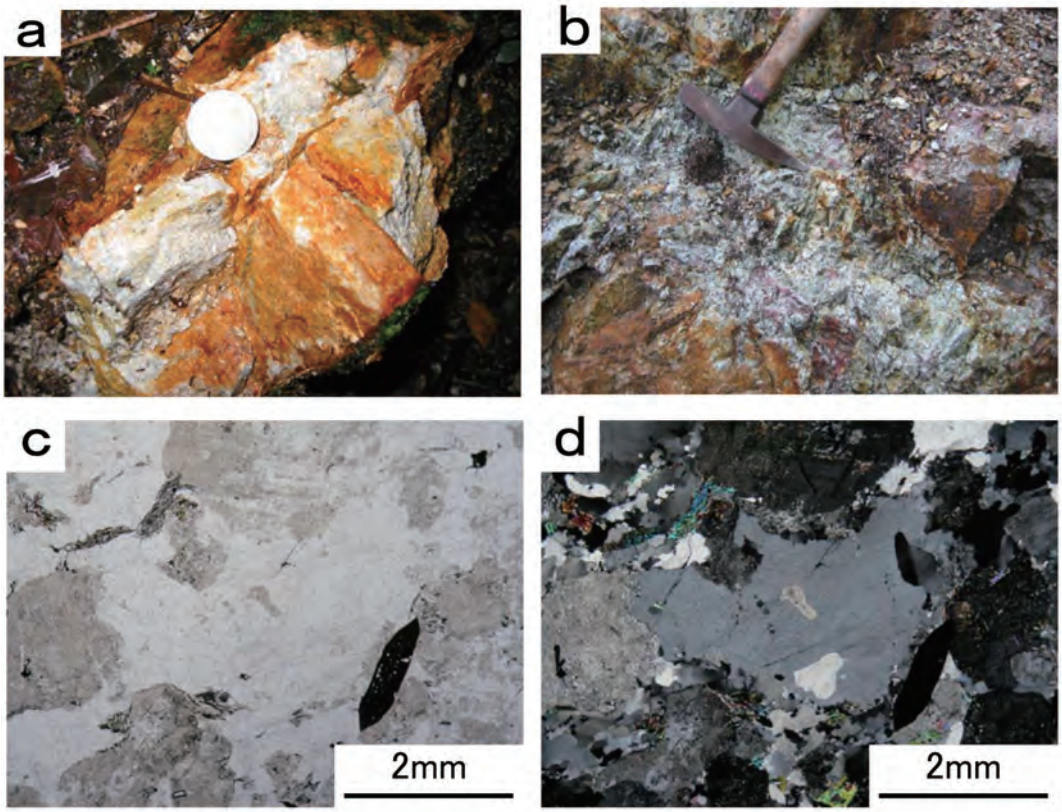
Pho.Ⅱ1-2-6　大野金探鉱跡の様子１



Pho.Ⅱ1-2-7　大野金探鉱跡の様子 2



Pho.Ⅱ1-2-8　小川内金探鉱跡の様子



Pho.Ⅱ1-2-9　金探鉱跡周辺の変質花崗岩の産状及び薄片写真

Pho.Ⅱ1-2-1　大野に産する角閃岩の産状と薄片写真

a：角閃岩の中央部　　b：角閃岩の上部

c：角閃岩の薄片写真（クロスニコル）　　d：角閃岩の薄片写真（オープンニコル）

Pho.Ⅱ1-2-2　糸島花崗閃緑岩の産状と薄片写真

a：花崗閃緑岩中に含まれるカリ長石の濃集部　　b：花崗閃緑岩中に含まれる暗色包有物

c：花崗閃緑岩の薄片写真（クロスニコル）　　d：花崗閃緑岩の薄片写真（オープンニコル）

Pho.Ⅱ1-2-3　早良花崗岩細粒相の産状と薄片写真

a：細粒相の岩相　　b：細粒相中に含まれる優白質包有物

c：早良花崗岩細粒相の薄片写真（クロスニコル）

d：早良花崗岩細粒相の薄片写真（オープンニコル）

Pho.Ⅱ1-2-4　早良花崗岩主岩相の産状と薄片写真

a：主岩相の岩相

b：ボーリングコアにみられる主岩相中に含まれる暗色包有物

c：早良花崗岩主岩相の薄片写真（クロスニコル）

d：早良花崗岩主岩相の薄片写真（オープンニコル）

Pho.Ⅱ1-2-5　調査地域にみられる断層や破砕帯

a：小川内南東における北西-南東方向の断層　　b：佐賀橋北西における北西-南東方向の断層

c：倉谷における北西-南東方向の断層

d：大野橋北西における北北東-南南西方向の断層

Pho.Ⅱ1-2-6　　大野金探鉱跡の様子１

a：大野探鉱跡の坑口Ａの全景　　b：坑口Ａの内部　　c：坑口Ａの上流の石垣

Pho.Ⅱ1-2-7　大野金探鉱跡の様子２

a：大野探鉱跡の坑口Ｂの全景　　b：坑口Ｂの内部

c：坑口Ｂ下方の石垣　　d：坑口Ｂ下方，倉谷川沿いの石垣

Pho.Ⅱ1-2-8　小川内金探鉱跡の様子

a：小川内探鉱跡の全景　　b：小川内探鉱跡の坑口

c：坑口の内部　　d：水車跡の石垣

Pho.Ⅱ1-2-9　金探鉱跡周辺の変質花崗岩の産状および薄片写真

a：大野探鉱跡周辺の白色変質花崗閃緑岩　　b：小川内探鉱跡周辺の白色変質花崗閃緑岩

c：白色変質花崗閃緑岩の薄片写真（オープンニコル）

d：白色変質花崗閃緑岩の薄片写真（クロスニコル）

引用文献

東脊振村小川内（1985）：小川内誌．佐賀県神埼郡東脊振村小川内，213p.

石原舜三・唐木田芳文・佐藤興平（1979）：北九州-西中国地方の磁鉄鉱系とチタン鉄鉱系花崗岩類の分布　ー特に小倉-田川断層帯の再評価ー．地質雑，85，47-50.

伊藤裕之・柚原雅樹・石原与四郎・古川直道・小路泰之（2007）：福岡県西部，室見川および那珂川流域の地球化学図．福岡大学理学集報，37，1，37-56.

唐木田芳文（1985）：北九州花崗岩の地質学的分類．日本応用地質学会西日本支部会報，6，2-12.

Karakida Y., Tomita, T., Gottfried, D., Stern, T. and Rose, H. J. Jr.（1965）：Lead-Alpha ages of some granitic rocks from North Kyushu and Central Japan. Mem. Fac. Sci. Kyushu Univ., Ser.D,（Geol), 16, 249-263.

川野良信・柚原雅樹（2005）：福岡県五ヶ山周辺に分布する花崗岩類．佐賀大学文化教育学部研究論文集，10，143-149.

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本　博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男・中島和敏（1993）：20万分の１地質図　福岡．地質調査所．

九州活構造研究会（1989）：九州の活構造．東京大学出版会，553p.

那珂川町教育委員会（1976）：郷土誌　那珂川．福岡県筑紫郡那珂川町，403p.

大和田正明・亀井淳志・山本耕次・小山内康人・加々美寛雄（1999）：中・北部九州，白亜紀花崗岩類の時空分布と起源．地質学論集，53，349-363.

Shibata K. and Karakida Y.（1965）：Potassium-Argon ages of the granitic rocks from the Northern Kyushu. Bull. Geol. Surv. Japan, 16, 443-445.

小路泰之（2006MS）：五ヶ山地域における地球化学図を用いた地圏環境評価．福岡大学理学部地球圏科学科卒業論文，214p.

柳　哮・浜本礼子・劉　旭東・中村　真（1999）：Rb-Sr法による年代測定の新しい試み．月刊地球，21，811-816.

柚原雅樹・宇藤千恵・小路泰之・川野良信（2006a）：那珂川上流，五ヶ山地域の花崗岩類に発達する断裂系．福岡大学理学集報，36，1，55-67.

柚原雅樹・祐徳信武（2005）：那珂川上流，五ヶ山地域の金探鉱跡地周辺に認められる早良花崗岩の変質．福岡大学理学集報，35，1，49-73.

柚原雅樹・祐徳信武・宇藤千恵・小路泰之（2006b）：那珂川上流，五ヶ山地域の金探鉱跡周辺の熱水変質早良花崗岩のヒ素含有量．福岡大学理学集報，36，1，43-53.

2　植物

i.「小川内の杉」及びその周辺地域の杉について

福岡県が計画し施工する「五ヶ山ダム」の建設に伴って、その水没予定地内にある佐賀県指定天然記念物の「小川内の杉」に関連して、自然保護、環境保全のために、スギを中心とした調査を実施した。平成14年と15年の予備調査の後、平成15年９月～平成17年６月の間に８回にわたってスギ古木に関する本格的な現地調査を実施したものである。

脊振山系のスギ古木群は、南西側の佐賀市富士町［旧佐賀郡富士町］、北西方向の雷山、浮岳などと分布域が繋がっており、これらの隣接地についても調査を行った。また、福岡県下の他地域と比較対照させるために、英彦山、若杉山、権現山（帆柱山）などのスギ古木（註１）についても触れることとした。

１．スギとは

スギ（杉）は、わが国における最も普遍的な樹木の一つである。それは幹がまっすぐに伸び、高さは50ｍ以上になり、幹廻りは屋久島の縄文杉のように16ｍ以上に達するものもある。古くから社寺などにも植えられ、信仰の対象（神木）ともなってきた。

従来、地球上で、天然には日本列島にしか存在せず、わが国固有のスギ科スギ属の一属一種の樹木（Cryptomeria japonica D.Don）とされてきた。もっとも、近年、中国南東部の福建省などには Cryptomeria fortunei Hooibrenk ex Otto et Dietr. なる学名が与えられ、日本産のスギとは別の独立の種としているもの（柳杉と呼称）もある。しかしこれらは、戦前には日本のスギの一変種として Cryptomeria japonica D.Don var kawaii HAYATA と命名されていたもので、日本古来のスギとほとんど変わらない（上原　1961）。

いずれにしても、世界的にみれば、スギは、今日でもきわめて珍奇な植物である、といっても過言ではない。

２．かつて、九州本島にスギは存在しなかった？

スギは、植物生態学的には、冷温帯（温帯）的気候に適応したもので、今日では、秋田地方をその郷土としている。わが国における現生スギの分布の歴史については、これまで多くの研究者の関心が注がれてきた。

まず、スギを含む主要針葉樹類を優占種とする森林植生の分布様式の類似性を森林生態学的立場から考察し、スギの移動経路を推論した河田の報告がある（河田　1933）。それによると、「スギは屋久島に起源し、九州本島を避けて、まず四国に上陸し、さらに、そこから一つの道は中国地方に向かい、日本海側を北上して、秋田へと漸次前進した。他の道は四国から紀伊半島を経て伊豆半島へと移動したものであろう」と述べている。

つぎに、花粉分析法によってスギの分布史を実証的に究明しようと試みた研究報告がある（塚田　1980）。それによれば、最終氷期最盛期（約２万５千年前から１万５千年前までの約１万年間）に、日本海側では若狭湾地帯に逃避していたスギは、その後の気候温暖化によって分

布域を拡大し、北上して今日の秋田スギの祖先になった。一方、若狭湾から南西の地方では、島根県南西端あたりまでスギ林がまばらに見られ、これが晩氷期の温暖化とともに低地から高地へと分布域を広げていったものであろう（約１万年前まで）と推定している。

他方、太平洋側では、伊豆半島付近にあったスギは、北上して仙台付近へ到達したのが今から約1,500年ほど前とみられている。

また、紀伊、四国山地および屋久島にそれぞれ逃避し隔離分布していたスギは、「暖温帯（暖帯）性植生（いわゆる照葉樹林帯）の繁茂や海岸による障壁などによって拡大分布することなく、それぞれの地域で今日に及んだものであろう」としている（塚田　1980）。

さて、九州本島については、塚田は花粉分析の結果から、スギが移動を開始する最終氷期（約１万５千年前までの約１万年間）以前に、すでに姿を消してしまっていたと推定している。また河田説も、九州本島での天然スギの存在を否定しているが、林弥栄は、全国国有林の「森林植生調査報告書」に示されたように、現地調査の結果をも加えて、スギをはじめ「日本産主要樹種の天然分布図」を作成している（林　1951）。それによると、福岡県下の英彦山、若杉山などをはじめ北部九州（福岡、大分県下一部を含む）など数か所の国有林に、ごく僅かながら天然スギの存在が見られるとしている。しかし、これまでのところ、これらは平安末期から鎌倉時代にかけて、山岳宗教による修験者らの献木（福岡県朝倉郡東峰村［旧小石原村］にある行者杉を含む）か、あるいは藩政時代の人工造林地（北九州市の権現山、篠栗町の若杉山）などか、または、さらにそこから二次的に広がったものではないかと考えて、先に述べた河田らの「九州本島に天然スギは存在しない」という説が支配的であった。

ところが、近年（1984）、宮崎県北東部の大分県境に近い大崩山系の一つ、鬼の目山南西斜面一帯に天然スギらしい群落が発見され、調査の結果、天然スギの可能性がきわめて高いと結論されている（外山ら　1986、宮島　1989）。

３．福岡県下の主なスギ古木群（Pho.Ⅱ2-1-29～32）

北部九州、とくに英彦山を中心とする一帯は、平安時代末期（約800～1,000年前）、修験道の振興により、英彦山、脊振山などに修験者（行者）らの手によって、本州の吉野、熊野、高野山あるいは遠く山形県羽黒山などから持ち込まれたスギ（種子か苗木か）が植栽されたものではないかとも考えられる。

とくに、英彦山最大の巨木「鬼杉」は県下でも最大の巨樹で、胸高周囲12.4ｍ、樹高38ｍ、樹齢は1,200年と推定され、国の天然記念物に指定されている。

また、平成３年９月の台風19号により倒木した「泉蔵坊杉」（英彦山神宮境内の県天然記念物指定）は、胸高周囲9.6ｍ、樹高41ｍ、樹齢800年と推定されていた。倒木したこの「泉蔵坊杉」の挿木クローン苗は現在、その跡地に植栽されている。

このほか英彦山には次のような大きな杉がある。

・分峯鷹ノ巣山麓の「夫婦杉」（１本のみ現存、よって「後家杉」とも呼ばれる）：胸高周囲7.80ｍ、樹高28ｍ。
・高住神社の「天狗杉」：胸高周囲6.10ｍ、樹高40～45ｍ、推定樹齢800年。
・英彦山神宮入口の「銅の鳥居」（1637年、佐賀鍋島藩主より献進）脇の「英彦山下宮スギ」：

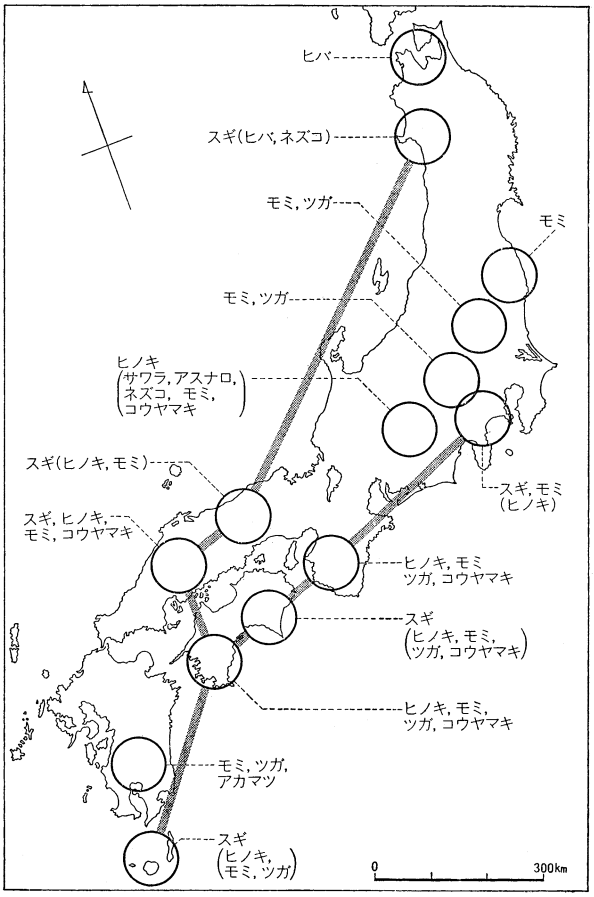
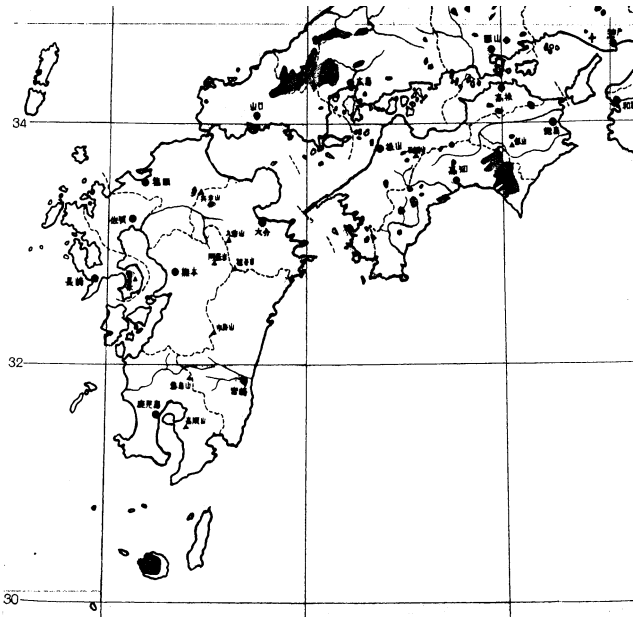


Fig.Ⅱ2-1-1　河田氏のスギの道（遠山1976より）



● 多　Areas in which the species is relatively abundant.
● 少　Areas in which the species occurs less abundantly.
＋ 希　Occurs rarely

Fig.Ⅱ2-1-3　スギの天然分布（林　1951）

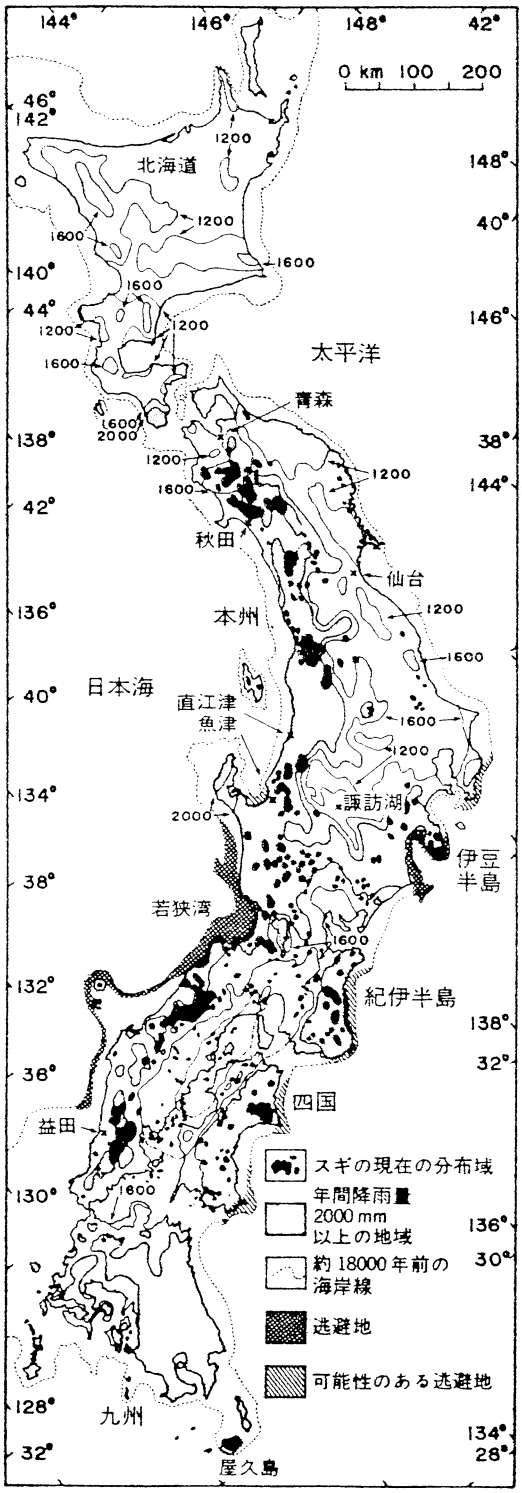


Fig.Ⅱ2-1-2　スギの分布と年間降水量との関係ならびに氷期の逃避地（塚田　1980）

胸高周囲5.65ｍ、樹高約30ｍ。

英彦山の山麓地帯の朝倉郡旧小石原村［現東峰村］の旧筑前国と旧豊前国の境界付近にあるスギ古木群として、境目杉（旧国境杉）、鬼杉（英彦山のそれとは別）、霊験杉、大王杉（胸高周囲8.29ｍ、樹高52ｍ）、及び少し離れて立つ雲竜杉などがあり、これらはいずれも500～600年以上（700年とも）の古木である。その他のスギは、300年クラスと100年前後の樹齢構成を持ったスギ林（宿平国有林、元日田営林署、前大分西部、現福岡森林管理署所属）で、これら一団のスギ林を通称『行者杉』と呼んでいる。

行者杉を含む英彦山周辺地域のスギ古木群とともに、北九州市権現山（帆柱山・皿倉山一帯）のいわゆる皇后杉についても、同様の繁殖様式（実生か挿木か）を推定する一つの手がかりとして個体（個樹）ごとにＤＮＡ鑑定用の針葉を採取し、九州大学農学部に鑑定を依頼した。

北九州市八幡西区に位置する権現山（617.2ｍ）には、八幡西区市瀬の鷹見神社の上宮（鷹見権現）があり、かつては彦山修験道48宿の一つであった山で、英彦山の秋の峰入修行のルート上にあったとの伝承もある。この山の西側の権現の辻一帯の標高450～500ｍの約４haには、皇后杉と呼ばれるスギの林がある。熊谷信孝によれば、「その多くは胸高直径が0.9ｍ（周３ｍ弱）あまり、推定樹齢300～400年のものであるが、なかには直径1.50ｍ（周4.7ｍ強）を越えるものもあり、最大で胸高周囲5.62ｍ、推定樹齢は600年であった」とされている（熊谷　1992）。

福岡市郊外の東部三郡山（936ｍ）の北に位置する若杉山（681ｍ）一帯は、玄界灘から吹きつける北西の風を受けて年間の降水量も多く、スギの生育限界といわれる1,700㎜以上、約2,000㎜程の降水量に恵まれ、古くからスギの大木が群生していた。この地も英彦山や近くの宝満山とともに、中世期から山岳宗教による行者の往来も多かったものと思われ、とくに若杉山は福岡市東区の香椎宮とのつながりも強く、香椎宮の杉を山に分けて植えた、あるいは山の杉を分けて香椎宮に植えたとも伝えられて、分杉山＝若杉山の呼称になったと言われている。この若杉山のスギ古木群の分析については、福岡県森林林業技術センターの協力を得た。

以上の福岡県下のスギ古木群のＤＮＡ鑑定結果については、Tab.Ⅱ2-1-1・2に示した。

４．佐賀県脊振山周辺地域のスギ古木群（Pho.Ⅱ2-1-2～28）

福岡市の南に横たわる脊振山系は、佐賀県との県境をほぼ東西に走る断層によってできた山脈で、最高峰は脊振山（1,055ｍ）である。その西側に雷山（955ｍ）があり、西端には佐賀県七山村［現唐津市］と福岡県二丈町との境界になる浮嶽（805ｍ）がある。

一方、脊振山から東側は佐賀県神埼郡東脊振村と同三養基郡みやき町［旧中原町］、鳥栖市が、福岡県福岡市早良区および同筑紫郡那珂川町と境界を接し、そこの東端部の最高峰は九千部山（848ｍ）である。地質は、一般に三郡山系の花崗岩でできており、脊振山周辺は四種類の花崗岩（糸島花崗閃緑岩、早良花崗岩、深江花崗岩および佐賀花崗岩）からなっている。

ａ．「小川内の杉」（Tab.Ⅱ2-1-1・2）

（佐賀県指定天然記念物・神埼郡吉野ヶ里町［旧東脊振村］小川内　大山祇神社境内）

推定樹齢が600年、あるいは500年とされる三本杉である。中央木の胸高周囲は5.48ｍ、樹高27.0ｍ。南側の幹は胸高周囲5.28ｍ、樹高40.0ｍ。北側の幹は周2.20ｍと小さい。この３本杉は昔、人の手によって１本のスギから挿し木によって育成されたもので、過去に人為によってこ

の場所に直挿しか挿し木苗を植栽したものと考えられる。３本のうちの２本は同年代に、他の１本は相当年後に挿し木苗として植栽されたものと思われる。針葉の特徴は、先端鋭先、やや内曲がり、葉色濃緑、表面銀白、つやがあり、ホンスギ型（小川内ホンスギと仮称）である。

〈小川内のスギの挿し木クローン〉

平成７年３月、大山祇神社スギ（「小川内の杉」）の１本の枝が、積雪の重みで折損したので、その杉の枝を福岡県森林林業技術センターで挿し木苗養成し、後日（平成９年３月）、発根した苗木４本を小川内の武広邦敏氏が受け取り、さらに武広氏がこれを２年間養苗して、平成12年３月に民有林道蛤岳線の、通称西ベラ山の林道登り方向左脇ガードレール下の斜面（雑木林を伐り開いた跡地）に植林した。

また、同じく平成７～８年ごろ、九州林木育種場に依頼し、「小川内の杉」の挿し木クローン苗を養成した。これらは、大山祇神社境内の裏手の集落林道小川内線の右側斜面の空地に平成13年３月に植栽された。林道を登って右側ガードレールに沿って斜面右下に根付いている。

ｂ．杉谷の大杉（佐賀県東脊振村小川内岩立）（Tab.Ⅱ2-1-2）

『小川内誌』（昭和60年２月）によれば、「小川内の杉」のほかに、同集落周辺にもスギ巨木がいくつかあり、「小川内の杉」に次いで、それに匹敵する巨杉は同村岩立の谷の大杉である。標高約550ｍほどの所で、そこは「小川内の杉」から西方約600ｍ、林道を登って左側へ入った谷間である。目通り（胸高周囲）は4.37ｍ、目測で樹高は約30ｍ、推定樹齢は300年以上と見られる。これを杉谷の大杉と称する。

福岡県森林林業技術センターのＤＮＡ分析によって、「小川内の杉」と同一クローンであることが確認された。

ｃ．脊振神社旧登山道筋のスギ古木群

脊振神社は元明天皇の和銅元年（708）に湛誉上人が創建したと伝えられ、祭神は宗像大社の祀る宗像三女神と同じである。上宮は山頂（1,055ｍ）にあり、清和天皇の貞観12年（870）に従五位下に叙せられる。元禄９年（1696）には鍋島直茂が上見や神殿を石堂に改築し、また石灯籠52基を寄進した。この石灯籠は今も山頂に残る。下宮は白蛇神社境内にあり、明治６年（1873）に郷社となるが、翌７年に罹災している。

(1) 脊振山頂付近のスギ群（Tab.Ⅱ2-1-1）

６本を試料としたが全て同じクローンであった。これらはまた、旧登山道の７本、鹿路神社の１・３・５と同一クローンである。

(2) 脊振山旧登山道のスギ古木群（Tab.Ⅱ2-1-1・2）

脊振神社下宮から約500ｍ上がった旧登山道入口から上宮まで1.8㎞にわたる城原川源流域のスギ古木群のうち、７本を試料とした。これらは全て同一クローンであり、脊振山頂付近の６本及び鹿路神社の１・３・５とも同一クローンである。

(3) 両童子杉（脊振山旧登山道スギ群の一つ）（Tab.Ⅱ2-1-2）

旧登山道入口から約300ｍの沢にある大杉で、旧登山道では最大のスギ古木であり「両童子杉」と称する。１は胸高周囲4.97ｍ、登山道を挟んだ２は周4.13ｍ。２本とも同一クローンである。

(4) 脊振神社下宮のスギ（脊振村大字服巻字田中）（Tab.Ⅱ2-1-1）

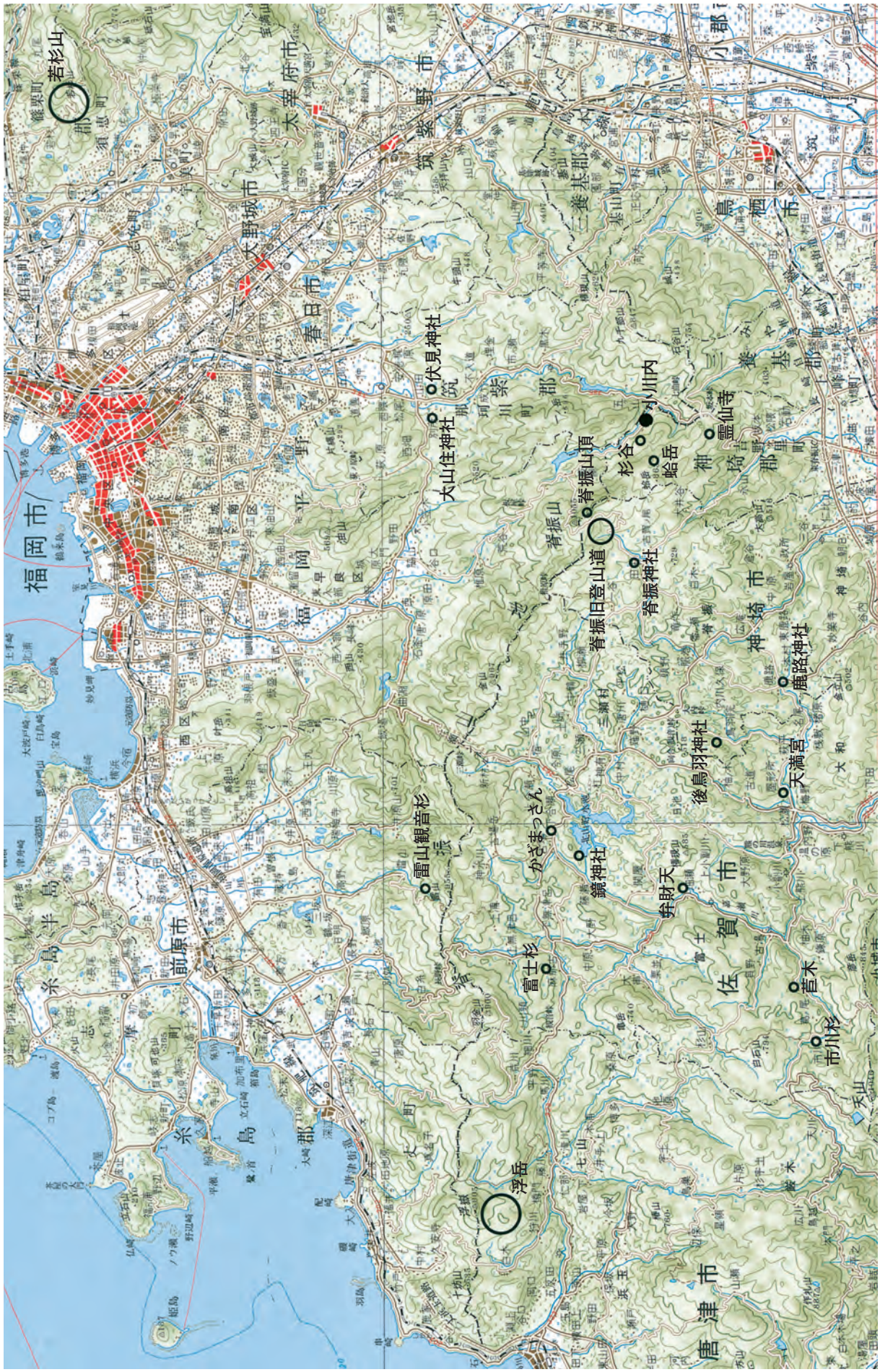


Fig. Ⅱ2-1-4　脊振山系のスギ（1/200,000）〈この地図は、国土地理院発行の20万分の1地形図（福岡）を使用したものである。〉

脊振神社下宮の社殿前石段下の両脇にスギが２本ずつある。この４本は同一クローンとみてよい。またもう１本の同一クローンがある。

(5) 鹿路神社境内のスギ（脊振村大字鹿路字西鹿路）（Tab.Ⅱ2-1-1）

脊振神社下宮の南方７㎞に鹿路神社は鎮座する。亀山天皇の弘長３年（1264）建立で、天文５年（1536）に神代勝利が再建し、弘治３年（1557）に今の場所に遷されたと伝えられる。鳥居は宝永７年（1710）の銘がある。社殿周辺に杉があり、１・３・５は脊振山頂付近及び旧登山道のスギ群と同一クローン、４・６はアカバで後鳥羽神社の５や富士町［現佐賀市］のかざまつさん、鏡神社の５・６と同一クローンである。

(6) 後鳥羽神社境内のスギ（脊振村大字鳥羽院）（Tab.Ⅱ2-1-1）

後鳥羽上皇が隠岐島よりこの地に潜幸し、延応元年（1225）に崩御したので御祠を建て、御鳥羽院宮（後鳥羽神社）としたとされている。境内の中に囲い杉として存する６本について試料とした。５はアカバで鹿路神社の１・３・５、富士町［現佐賀市］のかざまつさん、鏡神社の５・６と同一クローンである。６はヤブククグリで富士町［現佐賀市］の弁財天の杉や伊万里市の井泉杉と同一クローンであった。

(7) 雷山観音杉（福岡県前原市雷山）（Tab.Ⅱ2-1-1）

福岡県エリアにあり、脊振山系の北側に位置する巨杉である。雷山千如寺大悲王院中の坊である旧観音堂跡にあり、推定樹齢は700～800年、一説では1,000年ともいわれている。実測では１号木の胸高周囲6.0ｍ、２号木は周7.0ｍである。別に200年程の樹齢のものが１本あり、３本とも同一クローンである。

(8) 浮嶽のスギ古木群（佐賀県七山村［現唐津市］）（Tab.Ⅱ2-1-2）

福岡県二丈町と佐賀県七山村［現唐津市］との境にある浮嶽の山頂（805ｍ）の神社から七山村の方向への下り道にスギ巨木群があり、そのうち６本を試料とした。浮嶽のスギは、樹肌が赤味（明るい茶褐色）がかった明るい色をなし、樹皮は縦縞でややねじれた感じがする。ネジカワ（カゴスギ）の系統である。１・２・６のアカバと３・４・５の二グループのクローンが見られる。

ｄ．佐賀県富士町［現佐賀市］その他のスギ古木群

(1) 弁財天の大杉（佐賀県佐賀郡富士町［現佐賀市］関屋・東畑瀬）（Tab.Ⅱ2-1-1）

脊振山系の南側の佐賀県富士町［現佐賀市］もスギ古木の宝庫である。弁財天の大杉（別名・天神様）は、嘉瀬川ダム建設計画に伴って水没予定となっている。推定樹齢500年。この大杉は九州在来品種ヤブククグリの元祖と見られており、その貴重な遺伝子は針葉を他所に挿し植えして、生命が継承されている。後鳥羽神社の６、鏡神社の３、伊万里市の井泉杉は同一クローンである。

(2) かざまつさん（富士町［現佐賀市］下合瀬上平）（Tab.Ⅱ2-1-1）

弁財天の大杉から北東へ約10㎞の北山ダムの北側の下合瀬の集落の中に、九州の代表品種アカバの元祖と見られる“かざまつさん”がある。推定樹齢1,000年と地元で伝えられている。鹿路神社の４・６、後鳥羽神社の５、鏡神社の５・６と同一クローンである。

(3) 鏡神社のスギ（富士町［現佐賀市］下合瀬）（Tab.Ⅱ2-1-1）

かざまつさんのすぐ近くの北山ダムの畔の鏡神社の御神木である。６本を試料とした。３

はヤブクグリで後鳥羽神社の６、弁財天の杉、伊万里市の井泉杉と同一クローンである。

(4) 苣木の大杉（佐賀県富士町［現佐賀市］苣木（チヤノキ））（Tab.Ⅱ2-1-1）

古湯温泉の中心地（旧富士町役場）から西へ４㎞の天山県立自然公園の一角にある苣木集落内にある巨杉。胸高周囲4.68ｍ、樹高25ｍ、枝張り18ｍ、推定樹齢500年。

このスギは、福岡県八女地方、矢部村大字北矢部字竹原一帯に植林のカゾウ（嘉蔵）＝ミゾスギ＝シカクスギ（四角）、そして苣木のすぐ西隣の「市川の大杉」（台風で倒木後、その枝葉を挿し木してクローン苗を養成し、倒木跡に植栽）等と同一クローンであることがわかった。

(5) 伊万里市横野の井泉杉（伊万里市横野）（Tab.Ⅱ2-1-1）

富士町［現佐賀市］の弁財天の大杉とまったく同じものが、約30㎞西方の伊万里市横野の井泉にあり、これは“波多津ヤブクグリ”である。推定樹齢500年の貴重な古木である。後鳥羽神社の６、鏡神社の３も同一クローンである。

５．考察と結論

これまで述べきたったことをまとめると、次のようになる。

１．福岡県北部（英彦山、行者杉、北九州市権現山・皇后杉）と福岡市郊外の若杉山のスギ古木は、ほとんど実生系のスギである。もっとも100～300年以下の比較的若いスギは、挿し木系のものもある。

２．佐賀県脊振・天山山系（福岡県雷山観音杉を含む）のスギ古木は、ほとんど挿し木スギのクローンが多い。これらは人為による植栽が明らかである。

３．とくに今回主要調査対象となった「小川内の杉」の大小３本は、いずれも同一遺伝子型を示すことから挿し木による同一クローンと認められる。しかもこのクローンはこの地方によく見られるウラスギ型（日本の山陰地方一帯）のホンスギ系のスギで、「オガワチホンスギ」と仮称したい。

４．この「小川内の杉」と同一遺伝子型を示す個体は同じ小川内にある「杉谷の大杉」（樹齢推定300年）であることも明らかとなった。

５．なお、福岡県の北部一帯のスギも挿し木クローンのものもないではないが、個体間のＤＮＡによる解析結果では、ほとんど異なるパターンを示す。これは、スギが実生由来のものとの疑問を抱かざるを得ない。

以上のことから類推して、福岡県北部地方一帯には、あるいは実生スギが存在した可能性も否定しきれないと思われる。

ただし、花粉分析研究者によれば、地史学的研究による証明がなされなければ、「天然スギ」の存在は疑問であり、やはり他地方の中国、近畿など本土から人の手によってもたらされたもの、という疑いは消えない。

最後に、九州の主なスギ挿し木品種の来歴について考察する。

ヤブクグリ（従来、日田・小国地方のヤブクグリ）と、佐賀県伊万里地方（波多津）のハタツヤブクグリは、別のクローンと思われていたが、ＤＮＡ分析によって、同一クローンであることが判明した。したがってヤブクグリは、単一クローンであることが明らかとなった。つま

り、佐賀県富士町［現佐賀市］のヤブククグリ（弁財天の大杉）は、従来の日田・小国・八女林業における主要挿し木品種ヤブククグリ（インスギ、インタロウともいう）の元祖としてあげることができる。

次に、佐賀県富士町［現佐賀市］下合瀬の“かざまつさん”のスギは、主に福岡県八女地方で植林されているアカバや同じ富士町下合瀬の鏡神社のご神木のスギ及び浮嶽南斜面（七山村［現唐津市］）のスギの一部も、アカバと同一クローンであり、佐賀県三瀬村・富士町［現佐賀市］や脊振などに多く見られるアカバの造林地の元祖の一つといえる。

また、「市川の大杉」（もと佐賀県指定文化財）は、先年台風により倒木したが、ＤＮＡ解析の結果、近くの「苣木の杉」と同一クローンであることが判明した。このスギ品種も、福岡県八女地方、矢部村の竹原一帯に植林されているカゾウ（嘉蔵）＝ミゾスギ＝シカク（四角）スギと同一クローンであることも判明した。

註

1　古木とは、古き立木で、王維の詩に「古木無人逕　深山何處鐘」とあり、老樹のことを指している。
　簡野道明　1985『増補　字源』　角川書店（第298版）

引用・参考文献

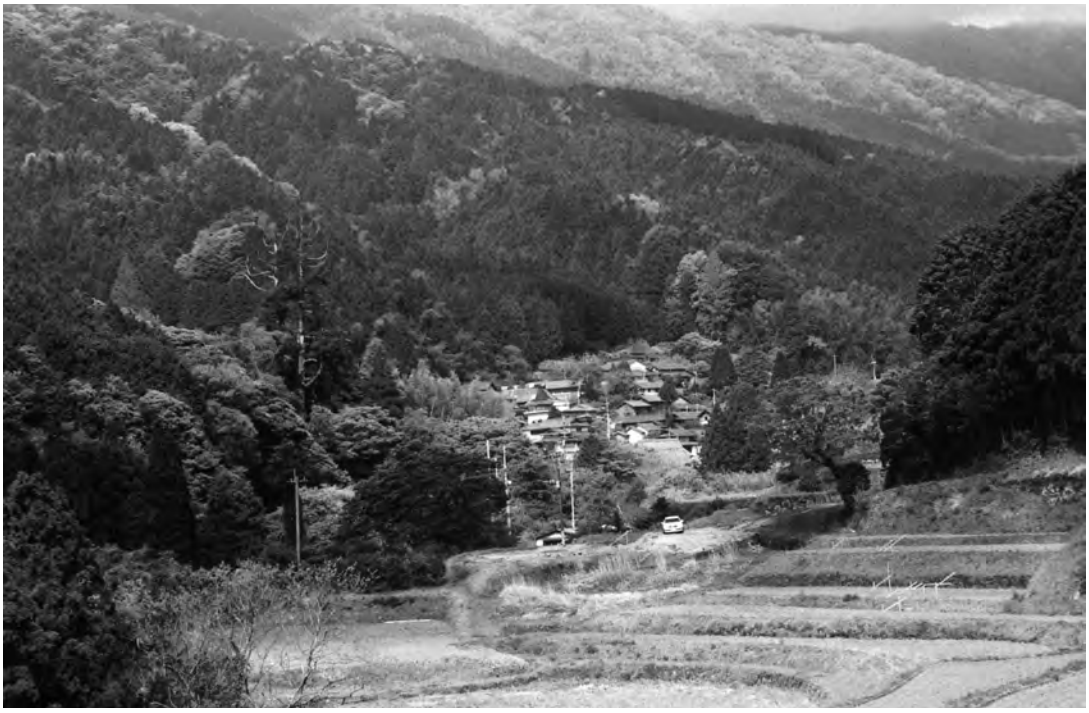
岩水豊・フォレストリサーチ研究所版　1993『銘木最先端技術の研究』
上原敬二　1961『樹木大図説Ⅰ』　有明書房
河田　杰　1933『森林生態学講義』　養賢堂
河西照勝他　2002『脊振を歩く』
熊谷信孝　1992『英彦山地の自然と植物』
熊谷信孝　2002『貫・福智山地の自然と植物』
合屋武城　1957『筑前若杉郷土誌』
添田町編　1993『彦山流記』付・彦山縁起
遠山富太郎　1976『杉のきた道』　中公新書419
外山三郎・黒木嘉久・中尾登志雄・細山田典昭　1986『鬼ノ目山のスギ群落に関する調査報告書』
塚田松雄　1980『杉の歴史：過去一万五千年間』　科学　Vol.50　No. 9
長野　覺　1994「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持―その地域的諸相―」
　駒沢大学文学部研究紀要　第50号
林　弥栄　1951「日本産主要樹種の天然分布」　林業試験場研究報告　第48号
東脊振村小川内編　1985『小川内誌』
南石武編　1966『篠栗小史便覧』
宮島　寛　1989『九州のスギとヒノキ』
宮原文彦　2001『若杉において発見された新大杉等株立ち個体のクローン性』

【補記】

この脊振山系を中心としたスギの調査においては次の方々にお世話になった。記して感謝いたします。（平成16年段階）

白石　進（九州大学教授）
畑中健一（北九州大学名誉教授）
宮原文彦・森　康浩（福岡県森林林業技術センター）
森　保廣（直方森林管理センター）
藤本泰郎（英彦山神宮）
日高正幸（福岡県小石原村教育委員会）
青木政澄（福岡県二丈町）
宮崎潤二（佐賀県林業試験場）
香月博子（佐賀県文化課）
久保伸洋（佐賀県東脊振村）
今村　榮（ＮＰＯ脊振森林監視隊）
山口英樹（樹木医・富士緑化園）
久枝和彦（九州大学農学部）
長野　覺（日本山岳修験学会顧問）
熊谷信孝（福岡県環境審議会委員）
田代誠一（帆柱自然公園愛護会）
椎窓　猛（福岡県矢部村教育長）
黒瀬茂文（福岡県篠栗町文化財係）
木村達美（福岡県犀川町）
財津忠幸（大分西部森林管理署）
西岡高弘（佐賀県富士町林業課）
山崎周一（佐賀県七山村）
佐藤義明（日田林工高校講師）
大神邦昭（樹木医・雷山観音杉）
中條信也・神崎孝二（福岡県五ヶ山ダム建設事務所）
宗雲佑太・宗雲孝吉・武廣邦敏・杉谷初子（東脊振村小川内）
山田龍蹊（ＫＢＣ水と緑のキャンペーン事務局）
（順不同：調査時の所属・敬称略）

〔宮島　寛〕



Pho.Ⅱ2-1-1　小川内集落と「小川内の杉」

※９＝１と判定

	名称	胸高周囲(m)	樹高(m)				該当品種	(照合)
1	小川内の杉：東脊振村							
	小川内杉１（1034）	5.49	36.00	009110	1110011	110110	ホンスギ	
	小川内杉２（1035）	5.28	39.00	009110	1110011	110110	ホンスギ	
	小川内杉３（1036）	2.20	24.00	009110	1110011	110110	ホンスギ	
2	脊振山頂：脊振村							
	脊振山頂１（1122）	1.95		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	脊振山頂２（1123）	1.77		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	脊振山頂３（1124）			000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	脊振山頂４（1125）	1.90		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	脊振山頂５（1126）	2.30		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	脊振山頂６（1127）	2.60		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
3	脊振旧登山道：脊振村							
	旧登山道１（1128）	2.15		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道２（1129）	2.75		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道３（1130）	4.13		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道４（1131）			000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道５（1132）	4.63		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道６（1133）	2.94		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
	旧登山道７（1134）	4.06		000010	1110011	011111		ロクロ　A（1・3・5）
4	脊振神社下宮：脊振村							
	セフリ１（931）			010910	9010111	010111	ホンスギ	
	セフリ２（932）			010910	1010111	010111	ホンスギ	
	セフリ３（933）			010110	1010111	010111	ホンスギ	
	セフリ４（934）			010110	1010111	010111	ホンスギ	
	セフリ５（935）			000010	1110001	111111		
	セフリ６（936）			000010	1110001	111111		
	セフリ７（937）			010110	1010111	010111	ホンスギ	
	セフリ８（938）			000010	1110001	111111		
	セフリ９（939）			000010	1110011	011111		
5	鹿路神社：脊振村							
	ロクロ１（925）	2.94		000010	1110011	011111	A	脊振山頂・旧登山道
	ロクロ２（926）	3.73		011110	1110011	011011	該当なし	
	ロクロ３（927）	4.00		000010	1110011	011111	A	脊振山頂・旧登山道
	ロクロ４（928）	3.80		019010	1110011	010111	アカバ	シモオオセ1／カガミ5･6／ゴトバ5
	ロクロ５（929）	1.66		000010	1110011	011911	A	脊振山頂・旧登山道
	ロクロ６（930）	2.00		019010	9110010	010911	アカバ	シモオオセ1／カガミ5･6／ゴトバ5
6	後鳥羽神社：脊振村							
	ゴトバ１			011000	0010101	110110		
	ゴトバ２			000000	1011010	011111		
	ゴトバ３			001000	0001000	110110		
	ゴトバ４			001000	0110100	110110		
	ゴトバ５			011010	1110010	010111	アカバ	シモオオセ1／カガミ5･6／ロクロ4･6
	ゴトバ６			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
7	雷山：前原市							
	雷山のスギ１	6.00	32.20	019001	1100000	011111		
	雷山のスギ２	7.00	31.60	019001	1100000	011111		
	雷山のスギ３			019001	1100000	011111		
8	弁財天のスギ：富士町							
	セキヤ１A（962）	5.80		011100	0010101	110110	ヤブクグリ	井泉杉
	セキヤ１B（963）	(6.10)		011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
	セキヤ１C（964）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
9	かざまつさん：富士町							
	シモオオセ１（951）	3.70	21.00	019010	1110010	010111	アカバ	カガミ5･6／ゴトバ5／ロクロ5･6
10	鏡神社：富士町							
	カガミ１（945）			010000	1111110	000010		
	カガミ２（946）			011010	0101100	000100		
	カガミ３（947）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
	カガミ４（948）			010110	0110100	110110		
	カガミ５（949）			011010	1110010	010111	アカバ	シモオオセ1／ロクロ5･6／ゴトバ5
	カガミ６（950）			019010	1110010	010111	アカバ	シモオオセ1／ロクロ5･6／ゴトバ5
11	苣木の杉：富士町	4.70		001110	1010011	110110		
12	市川の杉：富士町			001110	1010011	110110		
	（嘉蔵杉）			001110	1010011	110110		
13	井泉杉：伊万里市横野							
	ヨコノ１A（1017）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	弁財天の杉
	ヨコノ１B（1018）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
	ヨコノ１C（1019）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
	ヨコノ１D（1020）			011100	0010101	110110	ヤブクグリ	
14	英彦山							
	鬼杉	12.40	38.00	101101	1010011	910111		
	泉蔵坊杉［倒木前］	9.60	41.00	011110	1000010	110110		
	夫婦杉（後家杉）	7.80	28.00	001000	1000010	110110		
	高住神社杉	6.10	40.00	101000	1000011	990110		
	下宮〈銅鳥居脇〉	5.65	30.00	101101	9000011	110111		
15	皇后杉：北九州市権現山(帆柱山)							
	アヤスギ（1045）			010010	1110111	010111		
	皇后杉１（1050）			111010	1101010	100111		
	皇后杉２（1051）			101910	0101101	111110		
	皇后杉３（1052）			111010	1111111	110011		
	皇后杉４（1053）			111000	1101010	090111		
	皇后杉５（1054）			000010	1111100	110110		

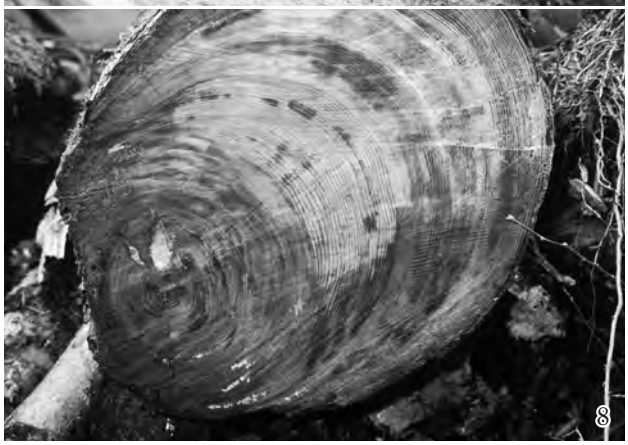
Tab.Ⅱ2-1-1　スギＤＮＡ（Mups型）

No.	名称	胸高周囲（m）	樹高（m）	A-04 800	A-14 500	B-01 760	D-2 510	E-12 550	F-19 800	J-19 450	R-09 720	S-07 550	S-19 510	U-06 300	X-02 360	X-04 320	FB-4 450	品種
1	小川内の杉	5.48	39.00	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	ホンスギ
2	杉谷（岩立）の杉	4.37	30.00	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	ホンスギ
3	蛤岳 1	2.49		0	0	1	1	1	—	1	1	0	1	0	0	0	0	
	蛤岳 2			0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	
	蛤岳 3	2.94		0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	
	蛤岳 4	3.16		1	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	ホンスギ
4	脊振登山道：両童子杉 1	4.98		0	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	
	脊振登山道：両童子杉 2	4.13		0	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	
5	伏見宮 1	3.12		0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	ヤブクグリ
	伏見宮 2	4.04		0	0	1	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1	
	伏見宮 3	2.25		1	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	
	伏見宮 4	1.67		1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	
6	別所大山住神社 1	4.70		0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	ヤブクグリ
	別所大山住神社 2	4.33		0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	ヤブクグリ
7	浮嶽 1	4.08	35.00	1	1	1	1	0	0	0.5	0	1	0.5	0	1	0	1	アカバ
	浮嶽 2	4.25	40.00	1	1	1	1	0	0	0.5	0	1	0.5	0	1	0	1	アカバ
	浮嶽 3	3.50		1	1	1	1	1	0	0.5	0	0	1	1	0	0	1	
	浮嶽 4	4.60		1	1	1	1	1	0	0.5	0	0	1	1	0	0	1	
	浮嶽 5	5.52	35.00	1	1	1	1	1	0	0.5	0	0	1	1	0	0	1	
	浮嶽 6	4.53		1	1	1	1	0	0	0.5	0	1	0.5	0	1	0	1	アカバ
8	若杉山：大和の杉			1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	若杉山：権現杉 1 号			1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	若杉山：綾杉			1	0	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	
	若杉山：ジャレ杉			0	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	1	0	
	若杉山：ドウダ杉			0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	

Tab.Ⅱ2-1-2　スギＤＮＡ（RAPD型）

Pho.Ⅱ2-1-2　小川内のスギ

Pho.Ⅱ2-1-3　杉谷のスギ



Pho.Ⅱ2-1-4～8　「小川内の杉」（7はクローン、8はH16.10.20の台風で折れた枝）

Pho.Ⅱ2-1-9
杉谷のスギ

Pho.Ⅱ2-1-10
脊振山頂のスギ

Pho.Ⅱ2-1-11
脊振登山道のスギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -12～14　脊振登山道のスギ（14は両童子スギ）

Pho.Ⅱ2-1-15
脊振神社のスギ

Pho.Ⅱ2-1-16
雷山観音スギ

Pho.Ⅱ2-1-17
大山住神社のスギ

Pho.Ⅱ2-1-18～20　浮岳南方のスギ（18：２号木、19：５号木、20：３・４号木）

Pho.Ⅱ2 - 1 -21～23
弁財天のスギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -24
かざまつさんのスギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -25～28（25・26：苣木のスギ、27：鹿路神社のスギ、28：井泉スギ）

Pho.Ⅱ2 - 1 -29
英彦山の鬼スギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -30
英彦山天狗スギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -31
若杉山太祖神社のスギ

Pho.Ⅱ2 - 1 -32
若杉山大和の大スギ

ⅱ．その他の植物

1　植生の現状・概況

五ヶ山ダム建設に伴い影響を受けると予測される区域の植生は、平成14年（2002）作成の現存植生図（Fig.Ⅱ2-2-1）に示すように、北部九州の里山一帯に広く見られる人間の影響を強く受けた人為植生のスギ・ヒノキ植林地が７割以上、一部、水田・畑地雑草群落、モウソウチク林等が１割程度とその面積の大部分を占有、その他は、人為による攪乱を受けた代償植生のコナラ・イヌシデ・アカマツ等の群落やシイ・カシ萌芽林、伐跡地・路傍草本群落などが１～２割を占め、本地区本来の自然植生である暖温帯林中～上位の森林のシラカシ群落や河辺・湿地植生であるツルヨシ・セキショウ群落等はほんのわずかの立地環境にのみ残存し、その面積はきわめて少ない。

このことは、本五ヶ山地区が大都市福岡市に近接した地域に在って、ことに昭和30年代後半まで薪炭の供給を行ってきたことや、その後に引きつづく拡大造林時代によるスギ・ヒノキ林への一大転換などの林業政策を強く反映するものである。しかし近年の木材不況と伐採・保育の人的不足等の経済・社会的情勢の変化から、放置されたり手入れ遅れの不良植林地や竹林拡大などの種々の問題が本地区でも発生しているとみてよい。

2　主要な植生概況

１）人為及び代償植生

対象地域のほぼ全域でスギ・ヒノキ植林地が谷部、山腹斜面、稜線部を被覆し、概して樹高10～15ｍ、胸高直径20～40㎝の林分が多い。集落付近ではモウソウチクが植林地に侵入して荒廃したものや、集落や林道から離れた斜面や稜線部には一度だけの除間伐や、枝打ち等の保育手入れが実施されていない林地が存在する。集落付近の給水可能な立地は水田が拓かれており、イネの栽培期は当然イネが初夏から秋季まで優占しているが、収穫後の水田は水を落としそこにイネ科やタデ科を主体とした雑草群落が発達する。これは面積的に少ない畑地の雑草群落や路傍草本群落とも一部共通種もあるが、ナデシコ科やキク科などの乾地を好む植物が多い。

モウソウチク林についてはかつて竹材と筍生産が盛んな時代は確立された竹林栽培法によって農家生産者が管理していたが、近年の山村過疎化による労働力不足から放置竹林および地球温暖化現象に伴う竹の旺盛な繁茂によって、植林地や耕作地・人家へと拡大し、里山地域の大きな社会問題となりつつある。

集落周辺部にあたる二次林植生として、自然植生の常緑広葉樹林ヤブツバキクラスの代償植生は、かつて薪炭利用林の取り扱いで20～30年回帰により繰り返し伐採し薪と木炭の生産を行っていた35～50年経過した箇所には、常緑広葉樹林のシイ・カシ萌芽林やコナラ・ノグルミ・イヌシデ・クマノミズキ・アカマツなどを優占群落とする暖温帯性落葉広葉樹と常緑針葉樹の二次林がパッチ状に群落を形成している。しかし後者のアカマツ林は近年のマツクイムシ被害により枯死・消滅し今はない。各群落とも常緑広葉樹種のヤブニッケイ・シロダモ・タブなどの混交率が高く、いずれ将来は極相のツブラジイ・タブ・シラカシ林へ遷移していくことが予測される。

２）自然植生

本地域の標高は海抜約300ｍ以上の網取付近から最上部の標高が小川内地区の海抜450ｍに及ぶため、本来の自然植生の大部分は常緑広葉樹林ヤブツバキクラス中～上位植生のシラカシを優占種とする森林群落に属する。しかし先述の拡大造林時代以降のスギ・ヒノキ植林化が進展したため、植林不適地の尾根や斜面の岩角地にはシラカシ群落が、また河辺・水湿地沿いの立地には落葉低木のネコヤナギ・ツルヨシ・セキショウなどの自然性群落がごく小断片的に残存するのみである。

３　本地域の植物

五ヶ山ダム予定地付近の植物相（フロラ）の状況については、現在、シダ植物や種子植物の陸上植物が計143科1,020種、水中の植物、底泥、礫、岩石などの表面に生育する付着藻類が計19科105種確認されており、北部九州に普遍的、共通性の高いフロラと考えられる。

４　本地域の重要植物

上記３で確認された植物群のうち、福岡・佐賀両県における希少野生植物および我が国における絶滅のおそれがある野生植物等の選定基準（Tab.Ⅱ2-2-1）から日本在来の種として選ばれた重要植物は、陸上植物27科34種で付着藻類にはカウント種がなかった（Tab.Ⅱ2-2-2）。

なお、ここで取り上げた種については、群落として存在するアカマツや河辺植生のツルヨシ・ネコヤナギ、またはコナラ・クヌギ等の雑木林、神社境内林を構成し単木的に存在が認められるスギ・シラカシ・ムクノキ・イチョウなどの巨樹は除外した。今後はこれら重要植物の保護・保全措置について各専門研究者の意見を取り入れ、ダム建設に伴う生育環境の変化から、消失してしまうのか、消失の可能性が高いので移植して種の保全を図るべきか、移植困難な種の対処、または種的な繁殖形態に関し、種子か挿木か継木などの繁殖方法の検討から移植地環境の適合条件、成長経過等に関しても移植後のモニタリングもふまえた詳細かつ綿密な調査・研究を早期に実施する必要があろう。（註）

５　消滅植物の記録保存

ダムの建設に伴い、近い将来消滅が予測される本地域の植物の記録保存も重要植物の種としての保全・移植・モニタリングとともに重要な要素となる。この一環として、植物標本の作製・保存が、五ヶ山ダム建設事務所の委託事業のひとつとして福岡植物研究会の筒井貞雄氏らによってなされた。採集され腊葉標本として記録保存された高等植物は2005年11月現在122科760種にのぼり、内容はシダ植物21科125種、種子植物101科635種である（Tab.Ⅱ2-2-3）。これらの標本はダム建設後も引き継がれて実施される植生・植物モニタリング調査の重要な植物および環境の動向を知る指標としてもきわめて有効な情報源を与えることが予測できる。

なお、本稿を取りまとめるにあたり、植物リスト並びにその量的構造、重要植物の選定と分布状況については、現地調査を担当された国際航業株式会社の森山大吾氏らから多くの資料提供を受けた。ここに厚く謝意を表する次第である。

（註）五ヶ山ダム建設事務所としても、最重要植物のシシンランやオニコナスビ等（生育地は未公開）については、調査や保存手法の措置をすでに講じている。

〔井上　晋〕

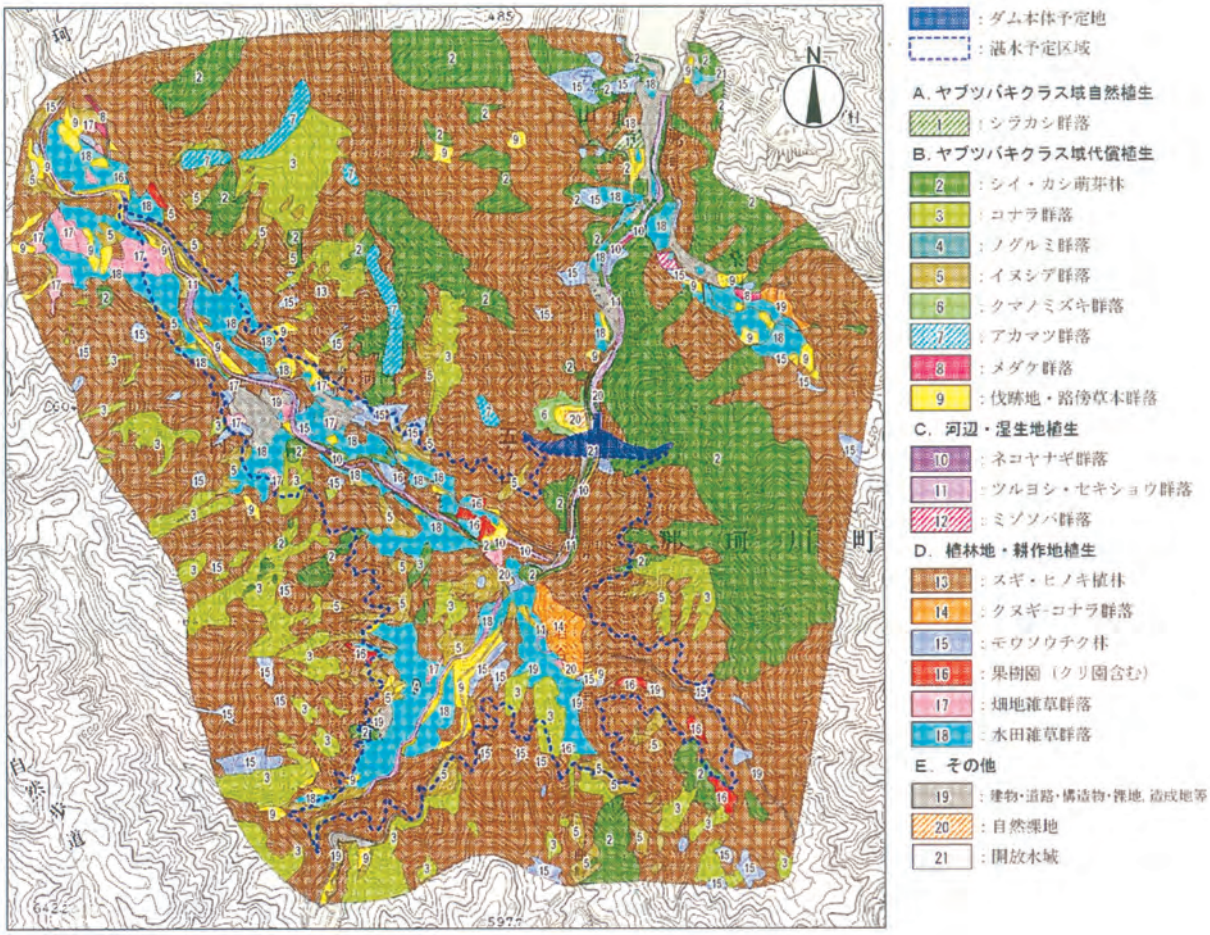


Fig.Ⅱ2-2-1　五ヶ山の現存植生図

	指定の法律または出典	種　　別
法的指定	文化財保護法　(1950.5.30)	特別天然記念物
		天然記念物
	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律　(1993.4.1)	国内希少野生動植物種
		国際希少野生動植物種
		特定国内希少野生動植物種
		緊急指定種
その他	福岡県版レッドデータブック　(福岡県　2001年)	絶滅
		野生絶滅
		絶滅危惧ⅠA類
		絶滅危惧ⅠB類
		絶滅危惧Ⅱ類
		準絶滅危惧
		情報不足
	佐賀県版レッドリスト　(佐賀県　平成15年)	絶滅種
		絶滅危惧Ⅰ類種
		絶滅危惧Ⅱ類種
		準絶滅危惧種
		情報不足種
	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ(維管束植物)》(環境庁　平成12年)	絶滅
		野生絶滅
		絶滅危惧ⅠA類
		絶滅危惧ⅠB類
		絶滅危惧Ⅱ類
		準絶滅危惧
		情報不足

Tab.Ⅱ2-2-1　五ヶ山ダム予定地の重要植物選定基準

分類			該当する選定基準	
科　名	No.	種　名	種　別	指定の法律または出典
オシダ	1	キヨズミオオクジャク	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
メシダ	2	トゲカラクサイヌワラビ	絶滅危惧Ⅰ類種	佐賀県版レッドリスト
	3	フモトシケシダ	情報不足	福岡県版レッドデータブック
ナデシコ	4	オオヤマフスマ	絶滅種	佐賀県版レッドリスト
キンポウゲ	5	フジセンニンソウ	情報不足	福岡県版レッドデータブック
	6	サバノオ	絶滅危惧Ⅰ類種	佐賀県版レッドリスト
ウマノスズクサ	7	ウンゼンカンアオイ	絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧種	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 佐賀県版レッドリスト
ツバキ	8	サザンカ	絶滅危惧Ⅱ類	福岡県版レッドデータブック
ケシ	9	ナガミノツルキケマン	準絶滅危惧 絶滅危惧ⅠB類	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 福岡県版レッドデータブック
アブラナ	10	ワサビ	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
	11	コイヌガラシ	準絶滅危惧 絶滅危惧ⅠB類	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 福岡県版レッドデータブック
ユキノシタ	12	ナメラダイモンジソウ	絶滅危惧ⅠA類 準絶滅危惧種	福岡県版レッドデータブック 佐賀県版レッドリスト
バラ	13	ヤマブキ	準絶滅危惧種	佐賀県版レッドデータブック
ツゲ	14	ツゲ	絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧種	福岡県版レッドデータブック 佐賀県版レッドリスト
ミソハギ	15	ミズマツバ	絶滅危惧Ⅱ類	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》
ウコギ	16	トチバニンジン	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
ツツジ	17	ツクシシャクナゲ	準絶滅危惧種	佐賀県版レッドリスト
ヤブコウジ	18	カラタチバナ	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
サクラソウ	19	オニコナスビ	絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅰ類種	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 福岡県版レッドデータブック 佐賀県版レッドリスト
アカネ	20	ルリミノキ	準絶滅危惧	福岡県版レッドデータブック
クマツヅラ	21	コムラサキ	準絶滅危惧種	佐賀県版レッドリスト
	22	マルバノホロシ	絶滅危惧ⅠA類	福岡県版レッドデータブック
イワタバコ	23	シシンラン	絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧ⅠA類	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 福岡県版レッドデータブック
オミナエシ	24	ツルカノコソウ	準絶滅危惧種	佐賀県版レッドリスト
ユリ	25	ミヤマナルコユリ	絶滅危惧Ⅰ類種	佐賀県版レッドリスト
	26	ホソバシュロソウ	絶滅危惧ⅠA類	福岡県版レッドデータブック
ヒナノシャクジョウ	27	シロシャクジョウ	絶滅危惧Ⅰ類種	佐賀県版レッドリスト
ホシクサ	28	ホシクサ	絶滅危惧ⅠA類	福岡県版レッドデータブック
イネ	29	サヤヌカグサ	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
カヤツリグサ	30	オクノカンスゲ	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
ラン	31	エビネ	絶滅危惧Ⅱ類 絶滅危惧Ⅱ類 絶滅危惧Ⅱ類種	改訂版レッドデータブック《植物Ⅰ（維管束植物）》 福岡県版レッドデータブック 佐賀県版レッドリスト
	32	シュンラン	準絶滅危惧種	佐賀県版レッドリスト
	33	カヤラン	絶滅危惧Ⅱ類種	佐賀県版レッドリスト
	34	セッコク	絶滅危惧Ⅱ類 絶滅危惧Ⅱ類種	福岡県版レッドデータブック 佐賀県版レッドリスト

Tab.Ⅱ2-2-2　五ヶ山ダム予定地の重要植物リスト

シダ（胞子）植物群		種子（有花）植物群							
ヒカゲノカズラ科	3	イヌガヤ科	1	ツバキ科	5	イイギリ科	1	ゴマノハグサ科	15
イワヒバ科	1	クルミ科	2	オトギリソウ科	5	スミレ科	9	キツネノマゴ科	1
トクサ科	1	ヤナギ科	1	ケシ科	5	ウリ科	4	ハエドクソウ科	2
ハナヤスリ科	2	カバノキ科	2	アブラナ科	10	ミソハギ科	4	オオバコ科	1
ゼンマイ科	1	ブナ科	8	マンサク科	1	アカバナ科	6	スイカズラ科	11
キジノオシダ科	3	ニレ科	3	ベンケイソウ科	2	アリノトウグサ科	1	オミナエシ科	2
ウラジロ科	2	クワ科	6	ユキノシタ科	14	ウリノキ科	1	キキョウ科	5
フサシダ科	1	イラクサ科	15	バラ科	19	ミズキ科	5	キク科	60
コケシノブ科	4	タデ科	18	マメ科	24	ウコギ科	8	オモダカ科	1
コバノイシカグマ科	5	ヤマゴボウ科	1	カタバミ科	5	セリ科	10	ユリ科	19
ホングウシダ科	1	ザクロソウ科	2	フウロソウ科	2	リョウブ科	1	ヒガンバナ科	1
シノブ科	1	ナデシコ科	10	トウダイグサ科	6	ツツジ科	3	ヤマノイモ科	4
ミズワラビ科	4	アカザ科	2	ユズリハ科	1	ヤブコウジ科	4	ミズアオイ科	1
シシラン科	1	ヒユ科	3	ミカン科	5	サクラソウ科	3	アヤメ科	4
イノモトソウ科	3	モクレン科	2	ヒメハギ科	1	カキノキ科	1	イグサ科	7
チャセンシダ科	3	マツブサ科	1	ウルシ科	4	エゴノキ科	1	ツユクサ科	3
シシガシラ科	3	シキミ科	1	カエデ科	3	ハイノキ科	5	ホシクサ科	1
オシダ科	35	クスノキ科	12	アワブキ科	1	モクセイ科	4	イネ科	65
ヒメシダ科	9	キンポウゲ科	13	ツリフネソウ科	1	リンドウ科	3	ヤシ科	1
メシダ科	33	メギ科	1	モチノキ科	6	キョウチクトウ科	1	サトイモ科	3
ウラボシ科	9	アケビ科	3	ニシキギ科	4	ガガイモ科	1	ウキクサ科	1
		ツツラフジ科	2	ミツバウツギ科	2	アカネ科	14	カヤツリグサ科	41
		ドクダミ科	1	クロウメモドキ科	2	ムラサキ科	5	ラン科	6
		センリョウ科	1	ブドウ科	5	クマツヅラ科	5		
		ウマノスズクサ科	1	シナノキ科	2	シソ科	24		
		マタタビ科	1	グミ科	2	ナス科	6		
			113		137		130		255
21科	125							101科	635

（註）福岡植物研究会 筒井貞雄氏らの採集標本に基づく

Tab.Ⅱ2-2-3　標本による保存植物リストの科と種数

五ヶ山ダム改変区域の植物標本目録

ヒカゲノカズラ科　LYCOPODIACEAE
ヒカゲノカズラ　*Lycopodium clavatum* L.
ヒロハノトウゲシバ　*Lycopodium serratum* Thunb. var. *intermedium* (Nakai) Miyabe et Kudo
オニトウゲシバ　*Lycopodium serratum* Thunb. var. *longipetiolatum* Spring

イワヒバ科　SELAGINELLACEAE
カタヒバ　*Selaginella involvens* (Sw.) Spring

トクサ科　EQUISETACEAE
スギナ　*Equisetum arvense* L.

ハナヤスリ科　OPHIOGLOSSACEAE
オオハナワラビ　*Botrychium japonicum* (Prantl) Underw.
フユノハナワラビ　*Botrychium ternatum* (Thunb.) Sw.

ゼンマイ科　OSMUNDACEAE
ゼンマイ　*Osmunda japonica* Thunb.

キジノオシダ科　PLAGIOGYRIACEAE
フタツキジノオ　*Plagiogyria* × *sessilifolia* Nakaike
オオキジノオ　*Plagiogyria euphlebia* (Kunze) Mett.
キジノオシダ　*Plagiogyria japonica* Nakai

ウラジロ科　GLEICHENIACEAE
コシダ　*Dicranopteris linearis* (Burm. fil.) Underw.
ウラジロ　*Gleichenia japonica* Spr.

フサシダ科　SCHIZAEACEAE
カニクサ　*Lygodium japonicum* (Thunb. ex Murray) Sw.

コケシノブ科　HYMENOPHYLLACEAE
アオホラゴケ　*Crepidomanes insigne* (V. D. B.) Fu
ウチワゴケ　*Gonocormus minutus* (Bl.) V. D. B.
コウヤコケシノブ　*Hymenophyllum barbatum* (V. D. B.) Bak.
ハイホラゴケ　*Lacosteopsis orientalis* (C. Chr.) Nakaike

コバノイシカグマ科　DENNSTAEDTIACEAE
イヌシダ　*Dennstaedtia hirsuta* (Sw.) Mett. ex Miq.
コバノイシカグマ　*Dennstaedtia scabra* (Wall. ex Hook.) Moore
イワヒメワラビ　*Hypolepis punctata* (Thunb. ex Murray) Mett. ex Kuhn
フモトシダ　*Microlepia marginata* (Panzer) C. Chr.
ワラビ　*Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Underw. ex Hell.

ホングウシダ科　LINDSAEACEAE
ホラシノブ　*Sphenomeris chinensis* (L.) Maxon

シノブ科　DAVALLIACEAE
シノブ　*Davallia mariesii* Moore ex Bak.

ミズワラビ科　PARKERIACEAE
イヌイワガネソウ　*Coniogramme* × *fauriei* Hieron.
イワガネゼンマイ　*Coniogramme intermedia* Hieron.
イワガネソウ　*Coniogramme japonica* (Thunb.) Diels
タチシノブ　*Onychium japonicum* (Thunb. ex Murray) Kunze

シシラン科　VITTARIACEAE

シシラン	*Vittaria flexuosa* Fee

イノモトソウ科　PTERIDACEAE

アマクサシダ	*Pteris dispar* Kunze
オオバノハチジョウシダ	*Pteris excelsa* Gaud.
イノモトソウ	*Pteris multifida* Poir.

チャセンシダ科　ASPLENIACEAE

トラノオシダ	*Asplenium incisum* Thunb.
コバノヒノキシダ	*Asplenium sarelii* Hook.
クルマシダ	*Asplenium wrightii* Eaton ex Hook.

シシガシラ科　BLECHNACEAE

シシガシラ	*Struthiopteris niponica* (Kunze) Nakai
オオカグマ	*Woodwardia japonica* (L. fil.) Sm.
コモチシダ	*Woodwardia orientalis* Sw.

オシダ科　DRYOPTERIDACEAE

ヤマグチカナワラビ	*Arachniodes* × *subamabilis* Kurata
オオカナワラビ	*Arachniodes amabilis* (Bl.) Tindale
ナンゴクナライシダ	*Arachniodes miqueliana* (Maxim.) Ohwi
ミドリカナワラビ	*Arachniodes nipponica* (Rosenst.) Ohwi
オニカナワラビ	*Arachniodes simplicior* (Makino) Ohwi var. *major* (Tagawa) Ohwi
ハカタシダ	*Arachniodes simplicior* (Makino) Ohwi var. *simplicior*
コバノカナワラビ	*Arachniodes sporadosora* (Kunze) Nakaike
リョウメンシダ	*Arachniodes standishii* (Moore) Ohwi
キヨスミヒメワラビ	*Ctenitis maximowicziana* (Miq.) Ching
オニヤブソテツ	*Cyrtomium falcatum* (L. fil.) Pr.
テリハヤブソテツ	*Cyrtomium fortunei* J. Sm. form. *laetivirens* Hiyama
ヤマヤブソテツ	*Cyrtomium fortunei* J. Sm. var. *clivicola* (Makino) Tagawa
ヤブソテツ	*Cyrtomium fortunei* J. Sm. var. *fortunei*
イワヘゴモドキ	*Dryopteris* × *mayebarae* Tagawa
アイノコクマワラビ	*Dryopteris* × *mituii* Serizawa
ナンゴクオオクジャク	*Dryopteris* × *satsumana* Kurata
イワヘゴ	*Dryopteris atrata* (Wall. ex Kunze) Ching
ツクシイワヘゴ	*Dryopteris commixta* Tagawa
イヌイワヘゴ	*Dryopteris cycadina* (Fr. Et Sav.) C. Chr.
オオクジャクシダ	*Dryopteris dickinsii* (Fr. et Sav.) C. Chr.
ベニシダ	*Dryopteris erythrosora* (Eaton) O. Kuntze
ミドリベニシダ	*Dryopteris erythrosora* (Eaton) O. Kuntze f. *viridisora* (Nakai ex H. Ito) H. Ito
トウゴクシダ	*Dryopteris erythrosora* (Eaton) O. Kuntze var. *dilatata* (Koidz.) Sugimoto
マルバベニシダ	*Dryopteris fuscipes* C. Chr.
クマワラビ	*Dryopteris lacera* (Thunb. ex Murray) O. Kuntze
キヨズミオオクジャク	*Dryopteris namegatae* (Kurata) Kurata
ナガバノイタチシダ	*Dryopteris sparsa* (Hamilt. ex D. Don) O. Kuntze
オクマワラビ	*Dryopteris uniformis* (Makino) Makino
オオイタチシダ	*Dryopteris varia* (L.) O. Kuntze var. *hikonensis* (H. Ito) Kurata
ヤマイタチシダ	*Dryopteris varia* (L.) O. Kuntze var. *setosa* (Thunb.) Ohwi
キヨスミイノデ	*Polystichum* × *kiyozumianum* Kurata
イノデ	*Polystichum polyblepharum* (Roem. ex Kunze) Pr.
サイゴクイノデ	*Polystichum pseudo-makinoi* Tagawa
イノデモドキ	*Polystichum tagawanum* Kurata
ジュウモンジシダ	*Polystichum tripteron* (Kunze) Pr.

ヒメシダ科　THELYPTERIDACEAE

ゲジゲジシダ	*Phegopteris decursive-pinnata* (V. Hall) Fee

ミゾシダ	*Stegnogramma pozoi* (Lagasca) K. Iwats. ssp. *mollissima* (Fisch. ex Kunze) K. Iwats.
ホシダ	*Thelypteris acuminata* (Houtt.) Morton
イブキシダ	*Thelypteris esquirolii* (Chirst) Ching var. *glabrata* (Christ) K. Iwats.
ハシゴシダ	*Thelypteris glanduligera* (Kunze) Ching
ハリガネワラビ	*Thelypteris japonica* (Bak.) Ching
ヤワラシダ	*Thelypteris laxa* (Fr. et Sav.) Ching
ヒメシダ	*Thelypteris palustris* (Salisb.) Schott
ヒメワラビ	*Thelypteris torresiana* (Gaud.) Alston var. *calvata* (Bak.) K. Iwats.

メシダ科　ATHYRIACEAE

ナンゴクイヌワラビ	*Athyrium* × *austro-japonense* Kurata
ヒサツイヌワラビ	*Athyrium* × *hisatsuanum* Kurata
オオサトメシダ	*Athyrium* × *multifidum* Rosenst.
オオカラクサイヌワラビ	*Athyrium* × *tokashikii* Kurata
ヤマカライヌワラビ	*Athyrium clivicola* × *vidalii*
カラクサイヌワラビ	*Athyrium clivicola* Tagawa
トガリバイヌワラビ	*Athyrium iseanum* Rosenst. f. *angustisectum* (Tagawa) Kurata
ホソバイヌワラビ	*Athyrium iseanum* Rosenst. f. *iseanum*
ツクシイヌワラビ	*Athyrium kuratae* Serizawa
イヌワラビ	*Athyrium niponicum* (Mett.) Hance
タニイヌワラビ	*Athyrium otophorum* (Miq.) Koidz.
トゲカラクサイヌワラビ	*Athyrium setuligerum* Kurata
ケヤマイヌワラビ	*Athyrium vidalii* (Fr. et Sav.) Nakai f. *pulvigerum* Kurata
ヤマイヌワラビ	*Athyrium vidalii* (Fr. et Sav.) Nakai f. *vidalii*
ヒロハイヌワラビ	*Athyrium wardii* (Hook.) Makino
ヘビノネゴザ	*Athyrium yokoscense* (Fr. et Sav.) Christ
シケチシダ	*Cornopteris decurrenti-alata* (Hook.) Nakai var. *decurrenti-alata*
タカオシケチシダ	*Cornopteris decurrenti-alata* (Hook.) Nakai var. *pilosella* H. Ito
ホソバシケシダ	*Deparia conilii* (Fr. et Sav.) M. Kato
オオホソバシケシダ	*Deparia conilii* × *japonica*
ホソバシケシダ×ムクゲシケシダ	*Deparia conilii* × *kiusiana*
セイタカシケシダ	*Deparia dimorphophylla* (Koidz.) M. Kato
シケシダ	*Deparia japonica* (Thunb. ex Murray) M. Kato
ナチシケシダ	*Deparia petersenii* (Kunze) M. Kato
フモトシケシダ	*Deparia pseudo-conilii* (Serizawa) Serizawa
ヒカゲワラビ	*Diplazium chinense* (Bak.) C. Chr.
ホソバノコギリシダ×ミヤマノコギリシダ	*Diplazium fauriei* × *mettenianum*
シロヤマシダ	*Diplazium hachijoense* Nakai
ミヤマノコギリシダ	*Diplazium mettenianum* (Miq.) C. Chr. var. *mettenianum*
オニヒカゲワラビ	*Diplazium nipponicum* Tagawa
キヨタキシダ	*Diplazium squamigerum* (Mett.) Matsum.
ヘラシダ	*Diplazium subsinuatum* (Wall. ex Hook. et Grev.) Tagawa
ノコギリシダ	*Diplazium wichurae* (Mett.) Diels

ウラボシ科　POLYPODIACEAE

ミツデウラボシ	*Crypsinus hastatus* (Thunb. ex Murray) Copel.
マメヅタ	*Lemmaphyllum microphyllum* Pr.
ヒメノキシノブ	*Lepisorus onoei* (Fr. et Sav.) Ching
ノキシノブ	*Lepisorus thunbergianus* (Kaulf.) Ching
イワヤナギシダ	*Loxogramme salicifolia* (Makino) Makino
ヌカボシクリハラン	*Microsorium buergerianum* (Miq.) Ching
クリハラン	*Neocheiropteris ensata* (Thunb.) Ching
ヤノネシダ	*Neocheiropteris subhastata* (Bak.) Tagawa
ヒトツバ	*Pyrrosia lingua* (Thunb. ex Murray) Farwell

イヌガヤ科　CEPHALOTAXACEAE

イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch

クルミ科　JUGLANDACEAE
オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.
ノグルミ　*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.

ヤナギ科　SALICACEAE
ネコヤナギ　*Salix gracilistyla* Miq.

カバノキ科　BETULACEAE
オオバヤシャブシ　*Alnus sieboldiana* Matsumura
イヌシデ　*Carpinus tschonoskii* Maxim

ブナ科　FAGACEAE
クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky
アカガシ　*Quercus acuta* Thunb.
アラカシ　*Quercus glauca* Thunb.
シラカシ　*Quercus myrsinaefolia* Bl.
ウラジロガシ　*Quercus salicina* Bl.
コナラ　*Quercus serrata* Thunb.
ツクバネガシ　*Quercus sessilifolia* Bl.

ニレ科　ULMACEAE
ムクノキ　*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.
エノキ　*Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai
ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

クワ科　MORACEAE
ツルコウゾ　*Broussonetia kaempferi* Sieb.
コウゾ　*Broussonetia kazinoki* × *papyrifera*
クワクサ　*Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai
イヌビワ　*Ficus erecta* Thunb.
イタビカズラ　*Ficus oxyphylla* Miquel
ヤマグワ　*Morus australis* Poir.

イラクサ科　URTICACEAE
ヤブマオ　*Boehmeria japonica* (L. fil.) Miq. var. *longispica* (Steud.) Yahara
ツクシヤブマオ　*Boehmeria kiusiana* Satake
カラムシ　*Boehmeria nipononivea* Koidz.
メヤブマオ　*Boehmeria platanifolia* Franch. et Savat.
コアカソ　*Boehmeria spicata* (Thunb.) Thunb.
ヒメウワバミソウ　*Elatostema umbellatum* Bl.
ムカゴイラクサ　*Laportea bulbifera* (Sieb. et Zucc.) Wedd.
カテンソウ　*Nanocnide japonica* Bl.
サンショウソウ　*Pellionia minima* Makino
オオサンショウソウ　*Pellionia radicans* (Sieb. et Zucc.) Wedd.
キミズ　*Pellionia scabra* Benth.
ヤマミズ　*Pilea japonica* (Maxim.) Hand.-Mazz.
ミヤマミズ　*Pilea petiolaris* (Sieb. et Zucc.) Blume
アオミズ　*Pilea pumila* (L.) A. Gray
イラクサ　*Urtica thunbergiana* Sieb. et Zucc.

タデ科　POLYGONACEAE
ミズヒキ　*Antenoron filiforme* (Thunb.) Roberty et Vautier
サクラタデ　*Persicaria conspicua* (Nakai) Nakai
ミヤマタニソバ　*Persicaria debilis* (Meisn.) H. Gross
イヌタデ　*Persicaria longiseta* (De Bruyn) Kitag.
オオネバリタデ　*Persicaria makinoi* (Nakai) Nakai

タニソバ　*Persicaria nepalensis* (Meisn.) H. Gross
ヤノネグサ　*Persicaria nipponensis* (Makino) H. Gross
ハナタデ　*Persicaria posumbu* (D. Don.) H. Gross var. *laxiflora* (Meisn.) Hara
ホソバノウナギツカミ　*Persicaria praetermissa*
ボントクタデ　*Persicaria pubescens* (Bl.) Hara
ママコノシリヌグイ　*Persicaria senticosa* (Franch. et Savat.) H. Gross
アキノウナギツカミ　*Persicaria sieboldii* (Meisn.) Ohki
ミゾソバ　*Persicaria thunbergii* (Sieb. et Zucc.) H. Gross
イタドリ　*Reynoutria japonica* Houtt.
スイバ　*Rumex acetosa* L.
ヒメスイバ　*Rumex acetosella* L.
ギシギシ　*Rumex japonicus* Houtt.
エゾノギシギシ　*Rumex obtusifolius* L.

ヤマゴボウ科　PHYTOLACCACEAE
ヨウシュヤマゴボウ　*Phytolacca americana* L.

ザクロソウ科　MOLLUGINACEAE
ザクロソウ　*Mollugo pentaphylla* L.
クルマバザクロソウ　*Mollugo verticillata* L.

ナデシコ科　CARYOPHYLLACEAE
ノミノツヅリ　*Arenaria serpyllifolia* L.
オランダミミナグサ　*Cerastium glomeratum* Thuill.
ミミナグサ　*Cerastium holosteoides* Fries var. *angustifolium* (Franch.) Mizushima
オオヤマフスマ　*Moehringia lateriflora* (L.) Fenzl
ツメクサ　*Sagina japonica* (Swartz) Ohwi
ノミノフスマ　*Stellaria alsine* Grimm var. *undulata* (Thunb.) Ohwi
ウシハコベ　*Stellaria aquatica* (L.) Scop.
サワハコベ　*Stellaria diversiflora* Maxim.
コハコベ　*Stellaria media* (L.) Villars
ミドリハコベ　*Stellaria neglecta* Weihe

アカザ科　CHENOPODIACEAE
シロザ　*Chenopodium album* L.
ケアリタソウ　*Chenopodium ambrosioides* L.

ヒユ科　AMARANTHACEAE
ヒカゲイノコズチ　*Achyranthes bidentata* Bl. var. *japonica* Miq.
ヒナタイノコズチ　*Achyranthes bidentata* Bl. var. *tomentosa* (Honda) Hara
ホナガイヌビユ　*Amaranthus viridis* L.

モクレン科　MAGNOLIACEAE
ホオノキ　*Magnolia hypoleuca* Sieb. et Zucc.
コブシ　*Magnolia praecocissima* Koidz.

マツブサ科　SCHISANDRACEAE
サネカズラ　*Kadsura japonica* (Thunb.) Dunal

シキミ科　ILLICIACEAE
シキミ　*Illicium anisatum* L.

クスノキ科　LAURACEAE
カゴノキ　*Actinodaphne lancifolia* (Sieb. et Zucc.) Meisn.
ヤブニッケイ　*Cinnamomum japonicum* Sieb. ex Nakai
カナクギノキ　*Lindera erythrocarpa* Makino
ヤマコウバシ　*Lindera glauca* (Sieb. et Zucc.) Bl.

ケアブラチャン	*Lindera praecox* (Sieb. et Zucc.) Blume var. *pubescens* (Honda)
ケクロモジ	*Lindera sericea* (Sieb. et Zucc.) Bl.
ホソバタブ	*Machilus japonica* Sieb. et Zucc.
タブノキ	*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.
イヌガシ	*Neolitsea aciculata* (Bl.) Koidz.
シロダモ	*Neolitsea sericea* (Bl.) Koidz.
ケシロモジ	*Parabenzoin trilobum* (Sieb. et Zucc.) Nakai f. *pilosum* Sugimoto
シロモジ	*Parabenzoin trilobum* (Sieb. et Zucc.) Nakai f. *trilobum*

キンポウゲ科　RANUNCULACEAE

ヒメウズ	*Aquilegia adoxoides* (DC.) Ohwi
サラシナショウマ	*Cimicifuga simplex* Wormsk.
ボタンヅル	*Clematis apiifolia* DC.
フジセンニンソウ	*Clematis fujisanensis* Hisauti et Hara
ケハンショウヅル	*Clematis japonica* Thumb. var. *villosula* (Ohwi) Tamura
コバノボタンヅル	*Clematis pierotii* Miq.
サバノオ	*Dichocarpum dicarpon* (Miq.) W. T. Wang et Hsiao
ケキツネノボタン	*Ranunculus cantoniensis* DC.
ウマノアシガタ	*Ranunculus japonicus* Thunb.
トゲミノキツネノボタン	*Ranunculus muricatus* L.
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* L.
キツネノボタン	*Ranunculus silerifolius* Lev.
アキカラマツ	*Thalictrum minus* L. var. *hypoleucum* (Sieb. et Zucc.) Miq.

メギ科　BERBERIDACEAE

ナンテン	*Nandina domestica* Thunb.

アケビ科　LARDIZABALACEAE

アケビ	*Akebia quinata* (Thunb.) Decaisne
ミツバアケビ	*Akebia trifoliata* (Thunb.) Koidz.
ムベ	*Stauntonia hexaphylla* (Thunb.) Decne.

ツヅラフジ科　MENISPERMACEAE

アオツヅラフジ	*Cocculus orbiculatus* (L.) Forman
ツヅラフジ	*Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wils.

ドクダミ科　SAURURACEAE

ドクダミ	*Houttuynia cordata* Thunb.

センリョウ科　CHLORANTHACEAE

センリョウ	*Sarcandra glabra* (Thunb.) Nakai

ウマノスズクサ科　ARISTOLOCHIACEAE

ウンゼンカンアオイ	*Heterotropa unzen* (F. Maekawa) F. Maekawa

マタタビ科　ACTINIDIACEAE

マタタビ	*Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim.

ツバキ科　THEACEAE

ヤブツバキ	*Camellia japonica* L.
サザンカ	*Camellia sasanqua* Thunb.
サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
ヒサカキ	*Eurya japonica* Thunb.
チャノキ	*Thea sinensis* L.

オトギリソウ科　GUTTIFERAE

オトギリソウ	*Hypericum erectum* Thunb.

ヒメオトギリ　*Hypericum japonicum* Thunb.
コケオトギリ　*Hypericum laxum* (Bl.) Koidz.
キンシバイ　*Hypericum patulum* Thunb.
サワオトギリ　*Hypericum pseudopetiolatum* R. Keller

ケシ科　PAPAVERACEAE
ジロボウエンゴサク　*Corydalis decumbens* (Thunb.) Pers.
ムラサキケマン　*Corydalis incisa* (Thunb.) Pers.
フウロケマン　*Corydalis pallida* (Thunb.) Pers.
ナガミノツルキケマン　*Corydalis raddeana* Regel
ナガミヒナゲシ　*Papaver dubium* L.

アブラナ科　CRUCIFERAE
ハタザオ　*Arabis glabra* (L.) Bernh.
ハルザキヤマガラシ　*Barbarea vulgaris* R. Br.
セイヨウカラシナ　*Brassica juncea* (L.) Czern.
ナズナ　*Capsella bursa-pastoris* (L.) Medic.
タネツケバナ　*Cardamine flexuosa* With.
オオバタネツケバナ　*Cardamine scutata* Thunb.
マルバコンロンソウ　*Cardamine tanakae* Franch. et Savat.
ワサビ　*Eutrema japonica* (Miq.) Koidz.
オランダガラシ　*Nasturtium officinale* R. Br.
イヌガラシ　*Rorippa indica* (L.) Hochr.

マンサク科　HAMAMELIDACEAE
イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.

ベンケイソウ科　CRASSULACEAE
コモチマンネングサ　*Sedum bulbiferum* Makino
ヒメレンゲ　*Sedum subtile* Miq.

ユキノシタ科　SAXIFRAGACEAE
テリハアカショウマ　*Astilbe thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Miq. var. *kiushiana* (Hara) Hara
クサアジサイ　*Cardiandra alternifolia* Sieb. et Zucc.
ヤマネコノメソウ　*Chrysosplenium japonicum* (Maxim.) Makino
コガネネコノメソウ　*Chrysosplenium pilosum* Maxim. var. *sphaerospermum* (Maxim.) Hara
ウツギ　*Deutzia crenata* Sieb. et Zucc.
コガクウツギ　*Hydrangea luteo-venosa* Koidz.
ヤマアジサイ　*Hydrangea macrophylla* (Thunb.) Ser. var. *acuminata* (Sieb. et Zucc.) Makino
ノリウツギ　*Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc.
ツルアジサイ　*Hydrangea petiolaris* Sieb. et Zucc.
オオチャルメルソウ　*Mitella japonica* Maxim.
コチャルメルソウ　*Mitella pauciflora* Rosend.
ナメラダイモンジソウ　*Saxifraga fortunei Hook.* fil. var. *suwoensis* Nakai
ユキノシタ　*Saxifraga stolonifera* Meerb.
イワガラミ　*Schizophragma hydrangeoides* Sieb. et Zucc.

バラ科　ROSACEAE
キンミズヒキ　*Agrimonia japonica* (Miq.) Koidz.
ヒメキンミズヒキ　*Agrimonia nipponica* Koidz.
ヘビイチゴ　*Duchesnea chrysantha* (Zoll. et Mor.) Miq.
ヤブヘビイチゴ　*Duchesnea indica* (Andr.) Focke
ダイコンソウ　*Geum japonicum* Thunb.
ヤエヤマブキ　*Kerria japonica* (L.) DC. f. *plena* C. K. Schn.
ミツバツチグリ　*Potentilla freyniana* Bornm.
オヘビイチゴ　*Potentilla sundaica* (Bl.) O. Kuntze var. *robusta* (Franch. et Savat.) Kitag.
カマツカ　*Pourthiaea villosa* (Thunb.) Decne. var. *laevis* (Thunb.) Stapf

リンボク	*Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc.
ノイバラ	*Rosa multiflora* Thunb.
フユイチゴ	*Rubus buergeri* Miq.
ビロードイチゴ	*Rubus corchorifolius* L. fil.
クマイチゴ	*Rubus crataegifolius* Bunge
ミヤマフユイチゴ	*Rubus hakonensis* Frach. Et Savat
クサイチゴ	*Rubus hirsutus* Thunb.
ナガバモミジイチゴ	*Rubus palmatus* Thunb.
ナワシロイチゴ	*Rubus parvifolius* L.
ウラジロノキ	*Sorbus japonica* (Decne.) Hedl.

マメ科　LEGUMINOSAE

クサネム	*Aeschynomene indica* L.
ネムノキ	*Albizia julibrissin* Durazz.
ヤブマメ	*Amphicarpaea bracteata* (L.) Fernald ssp. *edgeworthii* (Benth.) Ohashi var. *japonica* (Oliver) Ohashi
ゲンゲ	*Astragalus sinicus* L.
ジャケツイバラ	*Caesalpinia decapetala* (Roth.) Alst. var. *japonica* (Sieb. et Zucc.) Ohashi
シバハギ	*Desmodium heterocarpon* (L.) DC.
フジカンゾウ	*Desmodium oldhamii* Oliver
ヌスビトハギ	*Desmodium podocarpum* DC. ssp. *oxyphyllum* (DC.) Ohashi
ノササゲ	*Dumasia truncata* Sieb. et Zucc.
コマツナギ	*Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum.
ヤハズソウ	*Kummerowia striata* (Thunb.) Schindler
メドハギ	*Lespedeza cuneata* (Du Mont. D. Cours.) G. Don
マルバハギ	*Lespedeza cyrtobotrya* Miq.
ネコハギ	*Lespedeza pilosa* (Thunb.) Sieb. et Zucc.
ビッチュウヤマハギ	*Lespedeza thunbergii* Nakai var. *albiflora* f. *angustifolia* (Nakai) Ohwi
クズ	*Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi
コメツブツメクサ	*Trifolium dubium* Sibth.
シロツメクサ	*Trifolium repens* L.
ヤハズエンドウ	*Vicia angustifolia* L.
スズメノエンドウ	*Vicia hirsuta* (L.) S. F. Gray
カスマグサ	*Vicia tetrasperma* (L.) Schreb.
ヤブツルアズキ	*Vigna angularis* (Willd.) Ohwi et Ohashi var. *nipponensis* (Ohwi) Ohwi et Ohashi
ヤマフジ	*Wisteria brachybotrys* Sieb. et Zucc.
フジ	*Wisteria floribunda* (Willd.) DC.

カタバミ科　OXALIDACEAE

イモカタバミ	*Oxalis articulata* Savigny
カタバミ	*Oxalis corniculata* L. f. *corniculata*
アカカタバミ	*Oxalis corniculata* L. f. *rubrifolia* (Makino) Hara
ムラサキカタバミ	*Oxalis corymbosa* DC.
オッタチカタバミ	*Oxalis stricta* L.

フウロソウ科　GERANIACEAE

アメリカフウロ	*Geranium carolinianum* L.
ゲンノショウコ	*Geranium thunbergii* Sieb. et Zucc.

トウダイグサ科　EUPHORBIACEAE

エノキグサ	*Acalypha australis* L.
コニシキソウ	*Euphorbia supina* Rafin.
アカメガシワ	*Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.
コバンノキ	*Phyllanthus flexuosus* (Sieb. et Zucc.) Muell. Arg.
ヒメミカンソウ	*Phyllanthus matsumurae* Hayata
シラキ	*Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm.

ユズリハ科　DAPHNIPHYLLACEAE

ユズリハ	*Daphniphyllum macropodum* Miq.

ミカン科　RUTACEAE

マツカゼソウ	*Boenninghausenia japonica* Nakai
ツルシキミ	*Skimmia japonica* Thunb. var. *intermedia* Komatsu f. *repens* (Nakai) Hara
ミヤマシキミ	*Skimmia japonica* Thunb. var. *japonica*
カラスザンショウ	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.
イヌザンショウ	*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.

ヒメハギ科　POLYGALACEAE

ヒメハギ	*Polygala japonica* Houtt.

ウルシ科　ANACARDIACEAE

ツタウルシ	*Rhus ambigua* Lavall. ex Dipp.
ヌルデ	*Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehder et Wils.
ハゼノキ	*Rhus succedanea* L.
ヤマハゼ	*Rhus sylvestris* Sieb. et Zucc.

カエデ科　ACERACEAE

ウリカエデ	*Acer crataegifolium* Sieb. et Zucc.
イタヤカエデ	*Acer mono* Maxim.
イロハモミジ	*Acer palmatum* Thunb.

アワブキ科　SABIACEAE

アワブキ	*Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc.

ツリフネソウ科　BALSAMINACEAE

ツリフネソウ	*Impatiens textori* Miq.

モチノキ科　AQUIFOLIACEAE

ナナミノキ	*Ilex chinensis* Sims
イヌツゲ	*Ilex crenata* Thunb.
モチノキ	*Ilex integra* Thunb.
タラヨウ	*Ilex latifolia* Thunb.
ケナシアオハダ	*Ilex macropoda* Miq. f. *pseudomacropoda* (Loes.) Hara
イヌウメモドキ	*Ilex serrata* f. *argutidens* (Miq.) Kurata

ニシキギ科　CELASTRACEAE

ツルウメモドキ	*Celastrus orbiculatus* Thunb.
コマユミ	*Euonymus alatus* (Thunb.) Sieb. f. *ciliato-dentatus* (Franch. et Savat.) Hiyama
ツルマサキ	*Euonymus fortunei* (Turcz.) Hand.-Mazz. var. *radicans* (Sieb. ex Miq.) Rehder
ツリバナ	*Euonymus oxyphyllus* Miq.

ミツバウツギ科　STAPHYLEACEAE

ゴンズイ	*Euscaphis japonica* (Thunb.) Kanitz
ミツバウツギ	*Staphylea bumalda* (Thunb.) DC.

クロウメモドキ科　RHAMNACEAE

クマヤナギ	*Berchemia racemosa* Sieb. et Zucc.
ネコノチチ	*Rhamnella franguloides* (Maxim.) Weberb.

ブドウ科　VITACEAE

キレハノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. var. *heterophylla* (Thunb.) Hara f. *citrulloides* (Lebas) Rehder
ノブドウ	*Ampelopsis glandulosa* (Wall.) Momiyama var. *heterophylla* (Thunb.) Momiyama
ヤブガラシ	*Cayratia japonica* (Thunb.) Gagn.

ツタ　*Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch.
サンカクヅル　*Vitis flexuosa* Thunb.

シナノキ科　TILIACEAE
カラスノゴマ　*Corchoropsis tomentosa* (Thunb.) Makino
ヘラノキ　*Tilia kiusiana* Makino et Shirasawa

グミ科　ELAEAGNACEAE
ナワシログミ　*Elaeagnus pungens* Thunb.
アキグミ　*Elaeagnus umbellata* Thunb.

イイギリ科　FLACOURTIACEAE
イイギリ　*Idesia polycarpa* Maxim.

スミレ科　VIOLACEAE
アリアケスミレ　*Viola betonicifolia* Smith var. *albescens* (Nakai) F. Maek. et Hashimoto
タチツボスミレ　*Viola grypoceras* A. Gray
アオイスミレ　*Viola hondoensis* W. Becker et H. Boiss.
コスミレ　*Viola japonica* Langsd.
スミレ　*Viola mandshurica* W. Beck.
コミヤマスミレ　*Viola maximowicziana* Makino
ヒメスミレ　*Viola minor* (Makino) Makino
ナガバタチツボスミレ　*Viola ovato-oblonga* (Miq.) Makino
ツボスミレ　*Viola verecunda* A. Gray

ウリ科　CUCURBITACEAE
アマチャヅル　*Gynostemma pentaphyllum* (Thunb.) Makino
カラスウリ　*Trichosanthes cucumeroides* (Ser.) Maxim.
キカラスウリ　*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitamura
モミジカラスウリ　*Trichosanthes multiloba* Miq.

ミソハギ科　LYTHRACEAE
ホソバヒメミソハギ　*Ammannia coccinea* Rottb.
ヒメミソハギ　*Ammannia multiflora* Roxb.
キカシグサ　*Rotala indica* (Willd.) Koehne var. *uliginosa* (Miq.) Koehne
ミズマツバ　*Rotala pusilla* Tulasne

アカバナ科　ONAGRACEAE
ミズタマソウ　*Circaea mollis* Sieb. et Zucc.
アカバナ　*Epilobium pyrricholophum* Franch. et Savat.
チョウジタデ　*Ludwigia epilobioides* Maxim.
メマツヨイグサ　*Oenothera biennis* L.
コマツヨイグサ　*Oenothera laciniata* Hill
ユウゲショウ　*Oenothera rosea* Ait.

アリノトウグサ科　HALORAGACEAE
アリノトウグサ　*Haloragis micrantha* (Thunb.) R. Br.

ウリノキ科　ALANGIACEAE
モミジウリノキ　*Alangium platanifolium* (Sieb. et Zucc.) Harms

ミズキ科　CORNACEAE
アオキ　*Aucuba japonica* Thunb.
ヤマボウシ　*Benthamidia japonica* (Sieb. et Zucc.) Hara
ミズキ　*Cornus controversa* Hemsl.
クマノミズキ　*Cornus macrophylla* Wall.
コバノハナイカダ　*Helwingia japonica* (Thunb.) F. G. Dietr. var. *parvifolia* Makino

ウコギ科　ARALIACEAE

オカウコギ	*Acanthopanax nipponicus* Makino
コシアブラ	*Acanthopanax sciadophylloides* Franch. et Savat.
ウド	*Aralia cordata* Thunb.
タラノキ	*Aralia elata* (Miq.) Seemann
タカノツメ	*Evodiopanax innovans* (Sieb. et Zucc.) Nakai
ヤツデ	*Fatsia japonica* (Thunb.) Decne. et Planch.
キヅタ	*Hedera rhombea* (Miq.) Bean
トチバニンジン	*Panax japonicus* C. A. Meyer

セリ科　UMBELLIFERAE

ノダケ	*Angelica decursiva* (Miq.) Franch. et Savat.
シシウド属の一種	*Angelica* sp.
ツボクサ	*Centella asiatica* (L.) Urban
ミツバ	*Cryptotaenia japonica* Hassk.
オオバチドメ	*Hydrocotyle javanica* Thunb.
ノチドメ	*Hydrocotyle maritima* Honda
オオチドメ	*Hydrocotyle ramiflora* Maxim.
セリ	*Oenanthe javanica* (Bl.) DC.
ヤブニンジン	*Osmorhiza aristata* (Thunb.) Rydb.
ウマノミツバ	*Sanicula chinensis* Bunge
ヤブジラミ	*Torilis japonica* (Houtt.) DC.

リョウブ科　CLETHRACEAE

リョウブ	*Clethra barvinervis* Sieb. et Zucc.

ツツジ科　ERICACEAE

ネジキ	*Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Sieb. et Zucc.) Hand.-Mazz.
ヤマツツジ	*Rhododendron obtusum* (Lindl.) Planch. var. *kaempferi* (Planch.) Wilson
コバノミツバツツジ	*Rhododendron reticulatum* D. Don

ヤブコウジ科　MYRSINACEAE

マンリョウ	*Ardisia crenata* Sims
カラタチバナ	*Ardisia crispa* (Thunb.) DC.
ヤブコウジ	*Ardisia japonica* (Thunb.) Bl.
イズセンリョウ	*Maesa japonica* (Thumb.) Moritzi

サクラソウ科　PRIMULACEAE

オカトラノオ	*Lysimachia clethroides* Duby
コナスビ	*Lysimachia japonica* Thunb. f. *subsessilis* Murata
オニコナスビ	*Lysimachia tashiroi* Makino

カキノキ科　EBENACEAE

カキノキ	*Diospyros kaki* Thunb.

エゴノキ科　STYRACACEAE

エゴノキ	*Styrax japonicus* Sieb. et Zucc.

ハイノキ科　SYMPLOCACEAE

タンナサワフタギ	*Symplocos coreana* (Lev.) Ohwi
ミミズバイ	*Symplocos glauca* (Thunb.) Koidz.
シロバイ	*Symplocos lancifolia* Sieb. et Zucc.
クロキ	*Symplocos lucida* Siev. et Zucc.
ハイノキ	*Symplocos myrtacea* Sieb. et Zucc.

モクセイ科　OLEACEAE

レンギョウ	*Forsythia suspensa* (Thunb.) Vahl

ネズミモチ　*Ligustrum japonicum* Thunb.
イボタノキ　*Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc.
ヒイラギ　*Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S. Green

リンドウ科　GENTIANACEAE
フデリンドウ　*Gentiana zollingeri* Fawcett
アケボノソウ　*Swertia bimaculata* (Sieb. et Zucc.) Hook et Thoms.
ツルリンドウ　*Tripterospermum japonicum* (Sieb. et Zucc.) Maxim.

キョウチクトウ科　APOCYNACEAE
テイカカズラ　*Trachelospermum asiaticum* (Sieb. et Zucc.) Nakai f. *intermedium* (Nakai) Murata

ガガイモ科　ASCLEPIADACEAE
オオカモメヅル　*Tylophora aristolochioides* Miq.

アカネ科　RUBIACEAE
オオアリドオシ　*Damnacanthus indicus* Gaertn. fil. ssp. *major* (Sieb. et Zucc.) Yamazaki
オオバジュズネノキ　*Damnacanthus macrophyllus* Sieb. ex Miq.
メリケンムグラ　*Diodia virginiana* L.
ヒメヨツバムグラ　*Galium gracilens* (A. Gray) Makino
キクムグラ　*Galium kikumugura* Ohwi
ヤエムグラ　*Galium spurium* L. var. *echinospermon* (Wallr.) Hayek
ヨツバムグラ　*Galium trachyspermum* A. Gray
ホソバノヨツバムグラ　*Galium trifidum* L. var. *brevipedunculatum* Regel
ハシカグサ　*Hedyotis lindleyana* Hook. var. *hirsuta* (L. fil.) Hara
ルリミノキ　*Lasianthus japonicus* Miq.
サツマイナモリ　*Ophiorrhiza japonica* Bl.
ヘクソカズラ　*Paederia scandens* (Lour.) Merr.
アカネ　*Rubia argyi* (Lev.) Hara
オオアカネ　*Rubia hexaphylla* (Makino) Makino

ムラサキ科　BORAGINACEAE
ハナイバナ　*Bothriospermum tenellum* (Hornem.) Fisch. et Mey.
チシャノキ　*Ehretia acuminata* R. Br. var. *obovata* (Lindl.) Johnst.
ヤマルリソウ　*Omphalodes japonica* (Thunb.) Maxim.
ミズタビラコ　*Trigonotis brevipes* (Maxim.) Maxim.
キュウリグサ　*Trigonotis peduncularis* (Trevir.) Benth.

クマツヅラ科　VERBENACEAE
コムラサキ　*Callicarpa dichotoma* (Lour.) K. Koch
ムラサキシキブ　*Callicarpa japonica* Thunb.
ヤブムラサキ　*Callicarpa mollis* Sieb. et Zucc.
クサギ　*Clerodendrum trichotomum* Thunb.
ハマクサギ　*Premna japonica* Miq.

シソ科　LABIATAE
キランソウ　*Ajuga decumbens* Thunb.
セイヨウキランソウ（セイヨウジュウニヒトエ）　*Ajuga reptans* L.
クルマバナ　*Clinopodium chinense* (Benth.) O. Kuntze var. *parviflorum* (Kudo) Hara
トウバナ　*Clinopodium gracile* (Benth.) O. Kuntze
イヌトウバナ　*Clinopodium micranthum* (Regel) Hara
ナギナタコウジュ　*Elsholtzia ciliata* (Thunb.) Hylander
カキドオシ　*Glechoma hederacea* L. var. *grandis* (A. Gray) Kudo
ホトケノザ　*Lamium amplexicaule* L.
オドリコソウ　*Lamium barbatum* Sieb. et Zucc.
ヒメオドリコソウ　*Lamium purpureum* L.
ヒメジソ　*Mosla dianthera* (Hamilt.) Maxim.

シラゲヒメジソ　*Mosla hirta* Hara
イヌコウジュ　*Mosla punctulata* (J. F. Gmel.) Nakai
レモンエゴマ　*Perilla frutescens* (L.) Britton var. *citriodora* (Makino) Ohwi
ウツボグサ　*Prunella vulgaris* L. ssp. *asiatica* (Nakai) Hara
ヤマハッカ　*Rabdosia inflexa* (Thunb.) Hara
ヒキオコシ　*Rabdosia japonica* (Burm.) Hara
アキチョウジ　*Rabdosia longituba* (Miq.) Hara
タカクマヒキオコシ　*Rabdosia shikokiana* (Makino) Hara var. *intermedia* (Kudo) Hara
アキノタムラソウ　*Salvia japonica* Thunb.
タツナミソウ　*Scutellaria indica* L.
ツクシタツナミソウ　*Scutellaria laeteviolacea* Koidz. var. *discolor* (Hara) Hara
ニガクサ　*Teucrium japonicum* Houtt.
ツルニガクサ　*Teucrium viscidum* Bl. var. *miquelianum* (Maxim.) Hara

ナス科　SOLANACEAE
クコ　*Lycium chinense* Mill.
アメリカイヌホオズキ　*Solanum americanum* Mill.
ヒヨドリジョウゴ　*Solanum lyratum* Thunb.
マルバノホロシ　*Solanum maximowiczii* Koidz.
イヌホオズキ　*Solanum nigrum* L.
ハダカホオズキ　*Tubocapsicum anomalum* (Franch. et Savat.) Makino

ゴマノハグサ科　SCROPHULARIACEAE
アブノメ　*Dopatrium junceum* (Roxb.) Hamilt.
マツバウンラン　*Linaria canadensis* (L.) Dum.
ウリクサ　*Lindernia crustacea* (L.) F. V. Muller
アメリカアゼナ　*Lindernia dubia* (L.) Pennell
アゼトウガラシ　*Lindernia micrantha* D. Don
アゼナ　*Lindernia procumbens* (Krock.) Borbas
サギゴケ　*Mazus miquelii* Makino
トキワハゼ　*Mazus pumilus* (Brum. fil.) V. Steenis
ミゾホオズキ　*Mimulus nepalensis* Benth.
オオヒナノウスツボ　*Scrophularia kakudensis* Franch.
トレニア　*Torenia fournieri* Linden
タチイヌノフグリ　*Veronica arvensis* L.
フラサバソウ　*Veronica hederifolia* L.
ムシクサ　*Veronica peregrina* L.
オオイヌノフグリ　*Veronica persica* Poir.

キツネノマゴ科　ACANTHACEAE
キツネノマゴ　*Justicia procumbens* L.

ハエドクソウ科　PHRYMACEAE
ハエドクソウ　*Phryma leptostachya* L. var. *asiatica* Hara f. *asiatica*
ナガバハエドクソウ　*Phryma leptostachya* L. var. *asiatica* Hara f. *oblongifolia* (Koidz.) Ohwi

オオバコ科　PLANTAGINACEAE
オオバコ　*Plantago asiatica* L.

スイカズラ科　CAPRIFOLIACEAE
ヤマウグイスカグラ　*Lonicera gracilipes* Miq.
テリハニンドウ　*Lonicera japonica* Thunb. f. *flexuosa* (Thunb.) Zabel
スイカズラ　*Lonicera japonica* Thunb. f. *japonica*
ニワトコ　*Sambucus racemosa* L. ssp. *sieboldiana* (Miq.) Hara
ガマズミ　*Viburnum dilatatum* Thunb.
コバノガマズミ　*Viburnum erosum* Thunb. var. *punctatum* Franch. et Savat.
ハクサンボク　*Viburnum japonicum* (Thunb.) Spreng.

サンゴジュ　*Viburnum odoratissimum* Ker. Gaul. var. *awabuki* (K. Koch) Zabel
ヤブデマリ　*Viburnum plicatum* Thunb. var. *tomentosum* (Thunb.) Miq.
ゴマギ　*Viburnum sieboldii* Miq.
ツクシヤブウツギ　*Weigela japonica* Thunb.

オミナエシ科　VALERIANACEAE
オトコエシ　*Patrinia villosa* (Thunb.) Juss.
ツルカノコソウ　*Valeriana flaccidissima* Maxim.

キキョウ科　CAMPANULACEAE
サイヨウシャジン　*Adenophora triphylla* (Thunb.) A. DC.
ツルニンジン　*Codonopsis lanceolata* (Sieb. et Zucc.) Trautv.
ミゾカクシ　*Lobelia chinensis* Lour.
タニギキョウ　*Peracarpa carnosa* (Wall.) Hook. fl et Thomson var. *circaeoides* (Fr. Schm.) Makino
キキョウソウ　*Specularia perfoliata* (L.) A. DC.

キク科　COMPOSITAE
ノブキ　*Adenocaulon himalaicum* Edgew.
ヌマダイコン　*Adenostemma lavenia* (L.) O. Kuntze
キッコウハグマ　*Ainsliaea apiculata* Sch. Bip.
オトコヨモギ　*Artemisia japonica* Thunb.
ヨモギ　*Artemisia princeps* Pampan.
ヤマシロギク　*Aster ageratoides* Turcz. ssp. *amplexifolius* (Sieb. et Zucc.) Kitamura
ホソバコンギク　*Aster ageratoides* Turcz. ssp. *angustifolius* (Kitamura) Kitamura
ノコンギク　*Aster ageratoides* Turcz. ssp. *ovatus* (Franch. et Savat.) Kitamura
シラヤマギク　*Aster scaber* Thunb.
アメリカセンダングサ　*Bidens frondosa* L.
モミジガサ　*Cacalia delphiniifolia* Sieb. et Zucc.
ヤブタバコ　*Carpesium abrotanoides* L.
ガンクビソウ　*Carpesium divaricatum* Sieb. et Zucc.
サジガンクビソウ　*Carpesium glossophyllum* Maxim.
トキンソウ　*Centipeda minima* (L.) A. Braun et Ascherson
ノアザミ　*Cirsium japonicum* DC.
キセルアザミ　*Cirsium sieboldii* Miq.
ツクシアザミ　*Cirsium suffultum* (Maxim.) Matsum.
オオアレチノギク　*Conyza sumatrensis* (Retz.) Walker
ベニバナボロギク　*Crassocephalum crepidioides* (Benth.) S. Moore
シマカンギク　*Dendranthema indicum* (L.) Des Moulins
タカサブロウ　*Eclipta prostrata* (L.) L.
ダンドボロギク　*Erechtites hieracifolia* (L.) Rafin.
ヒメムカシヨモギ　*Erigeron canadensis* L.
ハルジオン　*Erigeron philadelphicus* L.
ヒヨドリバナ　*Eupatorium chinense* L. var. *oppositifolium* (Koidz.) Murata et H. Koyama
サワヒヨドリ　*Eupatorium lindleyanum* DC.
ツワブキ　*Farfugium japonicum* (L.) Kitamura
ハキダメギク　*Galinsoga ciliata* (Raf.) Blake
ハハコグサ　*Gnaphalium affine* D. Don
チチコグサ　*Gnaphalium japonicum* Thunb.
チチコグサモドキ　*Gnaphalium pensylvanicum* Willd.
ウスベニチチコグサ　*Gnaphalium purpureum* L.
ウラジロチチコグサ　*Gnaphalium spicatum* Lam.
キツネアザミ　*Hemistepta lyrata* Bunge
オオジシバリ　*Ixeris debilis* (Thunb.) A. Gray
ハナニガナ　*Ixeris dentata* (Thunb.) Nakai var. *albiflora* (Makino) Nakai f. *amplifolia* (Kitamura) Hiyama
ニガナ　*Ixeris dentata* (Thunb.) Nakai var. *dentata*
イワニガナ　*Ixeris stolonifera* A. Gray
ヨメナ　*Kalimeris yomena* Kitamura

アキノノゲシ　*Lactuca indica* L.
ムラサキニガナ　*Lactuca sororia* Miq.
コオニタビラコ　*Lapsana apogonoides* Maxim.
ヤブタビラコ　*Lapsana humilis* (Thunb.) Makino
オタカラコウ　*Ligularia fischeri* (Ledeb.) Turcz.
フキ　*Petasites japonicus* (Sieb. et Zucc.) Maxim.
コウゾリナ　*Picris hieracioides* L. var. *glabrescens* (Regel) Ohwi
シュウブンソウ　*Rhynchospermum verticillatum* Reinw. ex Bl.
トウヒレン属の一種　*Saussurea* sp.
コメナモミ　*Siegesbeckia orientalis* L. ssp. *glabrescens* (Makino) Kitamura
セイタカアワダチソウ　*Solidago altissima* L.
アキノキリンソウ　*Solidago virgaurea* L. ssp. *asiatica* Kitam.
オニノゲシ　*Sonchus asper* (L.) Hill
ノゲシ　*Sonchus oleraceus* L.
ヒメジョオン　*Stenactis annuus* (L.) Cass.
シロバナタンポポ　*Taraxacum albidum* Dahlst.
セイヨウタンポポ　*Taraxacum officinale* Weber
オオオナモミ　*Xanthium occidentale* Bertoloni
ヤクシソウ　*Youngia denticulata* (Houtt.) Kitamura
オニタビラコ　*Youngia japonica* (L.) DC.

オモダカ科　ALISMATACEAE
オモダカ　*Sagittaria trifolia* L.

ユリ科　LILIACEAE
ノビル　*Allium grayi* Regel
ホウチャクソウ　*Disporum sessile* Don
シロバナショウジョウバカマ　*Heloniopsis orientalis* (Thunb.) C. Tanaka var. *flavida* (Nakai) Ohwi
ヤブカンゾウ　*Hemerocallis fulva* L. var. *kwanso* Regel
コバギボウシ　*Hosta sieboldii* (Paxton) J. Ingram f. *lancifolia* (Miq.) Hara
ウバユリ　*Lilium cordatum* (Thunb.) Koidz.
オニユリ　*Lilium lancifolium* Thunb.
コオニユリ　*Lilium leichtlinii* Hook. fil. var. *tigrinum* (Regel) Nichols.
ヤブラン　*Liriope muscari* Bailey
ジャノヒゲ　*Ophiopogon japonicus* (L. fil.) Ker-Gawl.
ナガバジャノヒゲ　*Ophiopogon ohwii* Okuyama
ナルコユリ　*Polygonatum falcatum* A. Gray
オオナルコユリ　*Polygonatum macranthum* (Maxim.) Koidz.
オモト　*Rohdea japonica* (Thunb.) Roth
ツルボ　*Scilla scilloides* (Lindl.) Druce
サルトリイバラ　*Smilax china* L.
シオデ　*Smilax riparia* A. DC. var. *ussuriensis* (Regel) Hara et T. Koyama
ヤマホトトギス　*Tricyrtis macropoda* Miq.
ホソバシュロソウ　*Veratrum maackii* Regel var. *maackioides* (Loes. fil.) Hara

ヒガンバナ科　AMARYLLIDACEAE
ヒガンバナ　Lycoris radiata (L'Herit.) Herb.

ヤマノイモ科　DIOSCOREACEAE
ニガカシュウ　*Dioscorea bulbifera* L.
ヤマノイモ　*Dioscorea japonica* Thunb.
カエデドコロ　*Dioscorea quinqueloba* Thunb.
オニドコロ　*Dioscorea tokoro* Makino

ミズアオイ科　PONTEDERIACEAE
コナギ　*Monochoria vaginalis* (Burm. fil.) Pr. var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub.

アヤメ科　IRIDACEAE

シャガ	*Iris japonica* Thunb.
ニワゼキショウ	*Sisyrinchium atlanticum* Bicknell
オオニワゼキショウ	*Sisyrinchium* sp.
ヒメヒオオギズイセン	*Tritonia crocosmaeflora* Lemoine

イグサ科　JUNCACEAE

イ	*Juncus effusus* L. var. *decipiens* Buchen.
コウガイゼキショウ	*Juncus leschenaultii* Gay
クサイ	*Juncus tenuis* Willd.
ハリコウガイゼキショウ	*Juncus wallichianus* Laharpe
スズメノヤリ	*Luzula capitata* (Miq.) Nakai
ヤマスズメノヒエ	*Luzula multiflora* Lejeune
ヌカボシソウ	*Luzula plumosa* E. Meyer var. *macrocarpa* (Buchen.) Ohwi

ツユクサ科　COMMELINACEAE

ツユクサ	*Commelina communis* L.
イボクサ	*Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz.
ヤブミョウガ	*Pollia japonica* Thunb.

ホシクサ科　ERIOCAULACEAE

ホシクサ	*Eriocaulon cinereum* R. Br.

イネ科　GRAMINEAE

アオカモジグサ	*Agropyron racemiferum* (Steud.) Koidz.
カモジグサ	*Agropyron tsukushiense* (Honda) Ohwi var. *transiens* (Hack.) Ohwi
ヤマヌカボ	*Agrostis clavata* Trin. ssp. *clavata*
ヌカボ	*Agrostis clavata* Trin. ssp. *matsumurae* (Hack. ex HOnda) T. Tateoka
スズメノテッポウ	*Alopecurus aequalis* Sobol.
メリケンカルカヤ	*Andropogon virginicus* L.
ヒメハルガヤ	*Anthoxanthum aristatum* Boiss.
コブナグサ	*Arthraxon hispidus* (Thunb.) Makino
トダシバ	*Arundinella hirta* (Thunb.) C. Tanaka
ヒメコバンソウ	*Briza minor* L.
キツネガヤ	*Bromus pauciflorus* (Thunb.) Hack.
ノガリヤス	*Calamagrostis arundinacea* (L.) Roth var. *brachytricha* (Steud.) Hack.
ジュズダマ	*Coix lacryma-jobi* L.
オガルカヤ	*Cymbopogon tortilis* (Pr.) A. Camus var. *goeringii* (Steud.) Hand.-Mazz.
ギョウギシバ	*Cynodon dactylon* (L.) Pers.
カモガヤ	*Dactylis glomerata* L.
メヒシバ	*Digitaria ciliaris* (Retz.) Koel.
コメヒシバ	*Digitaria radicosa* (Pr.) Miq.
アキメヒシバ	*Digitaria violascens* Link
アブラススキ	*Eccoilopus cotulifer* (Thunb.) A. Camus
イヌビエ	*Echinochloa crus-galli* (L.) Beauv.
オヒシバ	*Eleusine indica* (L.) Gaertn.
カゼクサ	*Eragrostis ferruginea* (Thunb.) Beauv.
ニワホコリ	*Eragrostis multicaulis* Steud.
オオニワホコリ	*Eragrostis pilosa* (L.) Beauv
オニウシノケグサ	*Festuca arundinacea* Schreb.
トボシガラ	*Festuca parvigluma* Steud.
ドジョウツナギ	*Glyceria ischyroneura* Steud.
コバノウシノシッペイ	*Hemarthria compressa* (L. fil) R. Br.
チガヤ	*Imperata cylindrica* (L.) Beauv. var. *koenigii* (Retz.) Durand et Schinz
チゴザサ	*Isachne globosa* (Thunb.) O. Kuntze
サヤヌカグサ	*Leersia sayanuka* Ohwi
ササクサ	*Lophatherum gracile* Brongn.

ササガヤ	*Microstegium japonicum* (Miq.) Koidz.
アシボソ	*Microstegium vimineum* (Trin.) A. Camus var. *polystachyum* (Franch. et Savat.) Ohwi
ヒメアシボソ	*Microstegium vimineum* (Trin.) A. Camus var. *vimineum*
ススキ	*Miscanthus sinensis* Anderss.
ネズミガヤ	*Muhlenbergia japonica* Steud.
ケチヂミザサ	*Oplismenus undulatifolius* (Ard.) Roemer et Schuit. var. *undulatifolius*
チヂミザサ	*Oplismenus undulatifolius* (Ard.) Roemer et Schult. var. *japonicus* (Steud.) Koidz.
ヌカキビ	*Panicum bisulcatum* Thunb.
オオクサキビ	*Panicum dichotomiflorum* Michx.
シマスズメノヒエ	*Paspalum dilatatum* Poir.
スズメノヒエ	*Paspalum thunbergii* Kunth
チカラシバ	*Pennisetum alopecuroides* (L.) Spreng. f. *purpurascens* (Thunb.) Ohwi
クサヨシ	*Phalaris arundinacea* L.
ツルヨシ	*Phragmites japonica* Steud.
メダケ	*Pleioblastus simonii* (Carr.) Nakai
ミゾイチゴツナギ	*Poa acroleuca* Steud. var. *acroleuca*
タマミゾイチゴツナギ	*Poa acroleuca* Steud. var. *submoniliformis* Makino
スズメノカタビラ	*Poa annua* L.
ヤマミゾイチゴツナギ	*Poa hisauchii* Honda
オオスズメノカタビラ	*Poa trivialis* L.
ヒエガエリ	*Polypogon fugax* Steud.
ヤダケ	*Pseudosasa japonica* (Sieb. et Zucc.) Makino
ハイヌメリ	*Sacciolepis indica* (L.) Chase
ミヤコザサ	*Sasa nipponica* (Makino) Makino et Shibata
アキノエノコログサ	*Setaria faberi* Herrm.
キンエノコロ	*Setaria glauca* (L.) Beauv.
コツブキンエノコロ	*Setaria pallide-fusca* (Schumach.) Stapf et C. E. Hubb.
エノコログサ	*Setaria viridis* (L.) Beauv.
ネズミノオ	*Sporobolus fertilis* (Steud.) W. Clayton
カニツリグサ	*Trisetum bifidum* (Thunb.) Ohwi
ナギナタガヤ	*Vulpia myuros* (L.) Gmel.
シバ	*Zoysia japonica* Steud.

ヤシ科　PALMAE

シュロ	*Trachycarpus fortunei* (Hook.) H. Wendl.

サトイモ科　ARACEAE

セキショウ	*Acorus gramineus* Soland.
マムシグサ	*Arisaema serratum* (Thunb.) Schott
カラスビシャク	*Pinellia ternata* (Thunb.) Breit.

ウキクサ科　LEMNACEAE

アオウキクサ	*Lemna aoukikusa* Beppu et Murata

カヤツリグサ科　CYPERACEAE

エナシヒゴクサ	*Carex aphanolepis* Franch. et Savat.
マツバスゲ	*Carex biwensis* Franch.
ヤマジスゲ	*Carex bostrychostigma* Maxim.
アオスゲ	*Carex breviculmis* R. Br.
ナルコスゲ	*Carex curvicollis* Franch. et Savat.
カサスゲ	*Carex dispalata* Boott
シラスゲ	*Carex doniana* Spreng.
タニガワスゲ	*Carex forficula* Franch. et Savat.
マスクサ	*Carex gibba* Wahlenb.
ジュズスゲ	*Carex ischnostachya* Steud.
ヒゴクサ	*Carex japonica* Thunb.
テキリスゲ	*Carex kiotensis* Franch. et Savat.

ナキリスゲ	*Carex lenta* D. Don
ゴウソ	*Carex maximowiczii* Miq.
ヌカスゲ	*Carex mitrata* Franch.
ツクシミノボロスゲ	*Carex nubigena* D. Don var. *franchetiana* Ohwi
コジュズスゲ	*Carex parciflora* Boott var. *macroglossa* (Franch. et Savat.) Ohwi
クサスゲ	*Carex rugata* Ohwi
ベニイトスゲ	*Carex sachalinensis* Fr. Schm. var. *sikokiana* (Franch. et Savat.) T. Koyama
ヒメアオスゲ	*Carex subumbellata* Meinsh.
ヒメモエギスゲ	*Carex tristachya* Thunb. var. *pocilliformis* (Boott) Kukenth.
ヒメクグ	*Cyperus brevifolius* (Rottb.) Hassk. var. *leiolepis* (Franch. et Savat.) T. Koyama
クグガヤツリ	*Cyperus compressus* L.
タマガヤツリ	*Cyperus difformis* L.
ヒナガヤツリ	*Cyperus flaccidus* R. Br.
アゼガヤツリ	*Cyperus globosus* All.
コアゼガヤツリ	*Cyperus haspan* L.
コゴメガヤツリ	*Cyperus iria* L.
カヤツリグサ	*Cyperus microiria* Steud.
ウシクグ	*Cyperus orthostachyus* Franch. et Savat.
カワラスガナ	*Cyperus sanguinolentus* Vahl
ミズガヤツリ	*Cyperus serotinus* Rottb.
シカクイ	*Eleocharis wichurae* Bocklr.
ヒメヒラテンツキ	*Fimbristylis autumnalis* (L.) Roem. et Schult.
テンツキ	*Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl
クロテンツキ	*Fimbristylis diphylloides* Makino
ヒデリコ	*Fimbristylis miliacea* (L.) Vahl
ヒンジガヤツリ	*Lipocarpha microcephala* (R. Br.) Kunth
ホタルイ	*Scirpus juncoides* Roxb. subsp. *Hotarui* (Ohwi) T. Koyama
イヌホタルイ	*Scirpus juncoides* Roxb. subsp. *juncoides*
アブラガヤ	*Scirpus wichurae* Bocklr.

ラン科	ORCHIDACEAE
サイハイラン	*Cremastra appendiculata* (D. Don) Makino
シュンラン	*Cymbidium goeringii* (Reichb. fil.) Reichb. fil.
ミヤマウズラ	*Goodyera schlechtendaliana* Reichb. fil.
コクラン	*Liparis nervosa* (Thunb.) Lindl.
カヤラン	*Sarcochilus japonicus* (Reichb. fil.) Miq.
ネジバナ	*Spiranthes sinensis* (Pers.) Ames var. *amoena* (M. Bieberson) Hara

注）種の分類は「植物目録　1987」（環境庁　1988）を基本とし、記載がないものについては、「日本の野生植物　シダ」（平凡社　1992）・「日本の野生植物　草本Ⅰ　単子葉類」（平凡社　1982）・「日本の野生植物草本Ⅱ　離弁花類」（平凡社　1982）・「日本の野生植物草本Ⅲ　合弁花類」（平凡社　1981）・「日本の野生植物　木本Ⅰ」（平凡社　1989）・「日本の野生植物　木本Ⅱ」（平凡社　1989）・「日本の帰化植物」（平凡社　2003）・「原色日本植物図鑑・草本編Ⅲ」（保育社　1964）・「原色日本帰化植物図鑑」（保育社　1976）より補填した。

3　動物

i．哺乳類ほか

福岡県が行った環境影響評価の結果を示した『那珂川水系五ヶ山ダム建設事業環境影響評価書』（註１）の「生物の多様性の確保及び自然環境の体系的保全」の項では、五ヶ山ダム関係事業区域における動物に関する次の３項目についての調査、予測、評価が実施されている。なお、必要に応じて、この環境影響評価書の図表の番号や頁を付することにする。

(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況（６.１.６.-１頁）

(2) 動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況（６.１.６.-15頁）

(3) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況（６.１.６.-200頁）

以下の脊椎動物（哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、魚類）、昆虫類、底生動物に関しては、この成果に依拠した内容である。

１　調査結果の概要

(1) の「脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況」に関する調査すべき情報としては、哺乳類、鳥類、爬虫類・両生類、魚類、陸上昆虫類、底生動物の７分類群が取り上げられている。「五ヶ山ダム関係文化財調査指導委員会」としては、未調査の分類群として、これに陸産貝類を加えた。

調査方法、調査地域（範囲）、調査期間、そしてこれらの調査によって確認された結果（確認種数）は次のような内容であった。

○哺乳類

方法‥‥①目撃法　②フィールドサイン法　③トラップ法　④無人撮影法

地域‥‥対象事業実施区域及びその周辺500ｍまでの範囲

期間‥‥平成３・６・10・11・12・13年

結果‥‥７目11科20種

○鳥類

方法‥‥①定点観察法　②ルートセンサス法　③プロットセンサス法　④任意観察法

地域‥‥対象事業実施区域及びその周辺500ｍまでの範囲（ただし、鳥類は広域を移動するので、周辺地域にも調査地点を設定）

期間‥‥平成３・６・10・11・12・13・14年

結果‥‥15目38科114種

○爬虫類・両生類

方法‥‥①任意観察法

地域‥‥対象事業実施区域及びその周辺500ｍまでの範囲

期間‥‥平成３・６・10・11・12年

結果‥‥（爬虫類）１目５科10種　　（両生類）２目７科15種

○魚類
　方法‥‥①任意採集法　②任意観察法
　地域‥‥対象事業実施区域内の主要河川のうち対象事業実施区域から500ｍまでの範囲及び南畑ダム下流
　期間‥‥平成３・６・11・12・13・14年
　結果‥‥３目３科６種、南畑ダム下流：６目10科18種
○陸上昆虫類
　方法‥‥①任意観察調査　②任意採集調査　③ライトトラップ法　④ベイトトラップ法
　地域‥‥対象事業実施区域及びその周辺500ｍまでの範囲
　期間‥‥平成６・10・11・12年
　結果‥‥21目290科1633種
○底生動物
　方法‥‥①定量採集調査　②任意採集調査
　地域‥‥対象事業実施区域内の主要河川のうち対象事業実施区域から500ｍまでの範囲及び南畑ダム下流
　期間‥‥平成３・６・11・12年
　結果‥‥20目79科204種、南畑ダム下流：19目69科164種

（2）の動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況」に関する調査すべき情報としては、「文化財保護法」や「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律」などで法的に指定された種や各レッドリスト及びレッドデータブックの対象種などを基に、前項目（1）の調査結果（表６.１.６-５）の中から調査対象種として74種を選定している。その内容は次のとおりである。

○哺乳類　５種
　ニホンザル、スミスネズミ、カヤネズミ、イタチ類＊、アナグマ
　＊印：調査結果では、（ホンド）イタチかチョウセンイタチか判断できなかったのでイタチ類としてある。
○ 鳥類　23種
　チュウサギ、オシドリ、ミサゴ、ハチクマ、オオタカ＊、ツミ、ハイタカ、サシバ、ハヤブサ＊、ヤマドリ、コノハズク、アオバズク、フクロウ、ヨタカ、ヤマセミ、アカショウビン、オオアカゲラ、ヤイロチョウ＊、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウ、シマアオジ、カササギ
　＊印：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づき指定された種である。
○爬虫類　２種
　ジムグリ、シロマダラ
○両生類　10種
　カスミサンショウウオ、ブチサンショウウオ、オオサンショウウオ＊、イモリ、ニホンヒキ

ガエル、タゴガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、カジカガエル

＊印：国の「特別天然記念物」に指定されている。

○魚類　７種

スナヤツメ、タカハヤ、アリアケギバチ、アユ、ヤマメ、カジカ（陸封型）、オヤニラミ

○陸上昆虫類　26種

ムカシトンボ、ムカシヤンマ、ハルゼミ、イトアメンボ、アカスジキンカメムシ、オニクワガタ＊、クスベニカミキリ、ハマダラハルカ、サカハチトガリバ＊、アオバセセリ＊、ミヤマセセリ＊、ヒメキマダラセセリ、ミヤマチャバネセセリ＊、オオチャバネセセリ、オナガアゲハ、ツマグロキチョウ、アカシジミ＊、クロシジミ、ウラギンヒョウモン、クモガタヒョウモン＊、ヒオドシチョウ、ジャノメチョウ、オオシモフリスズメ＊、シモフリトゲエダシャク＊、チャオビフユエダシャク＊、イチゴキリガ＊

＊印：専門家により当該地域に生息の可能性が高いとされ、重要な種として選定されている。

○底生動物　１種

ムカシトンボ

調査方法は、目撃法、フィールドサイン法、トラップ法、無人撮影法、定点観察法、ルートセンサス法、プロットセンサス法、任意観察法、任意採集法、任意観察調査、任意採集調査、ライトトラップ法、ベイトトラップ法、定量採集調査、鳴き併せ法、産卵床調査、トランセクト調査などであり、調査は平成６年のほかに、平成９年～15年の間に多く実施されている。

74種の中には、前述のように、国の特別天然記念物に指定されているオオサンショウウオや「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律」に基づいて指定されているオオタカ、ハヤブサ、ヤイロチョウも含まれている。

オオサンショウウオは、昭和51（1976）年に大野川で１個体が捕獲されたという記録があるものの、平成６年～12年の間の９回にわたる現地調査では確認されていない。

この過去に捕獲されたオオサンショウウオについては飼育されていたものが逃げ出した可能性が高いと考えられている。

猛禽類の繁殖可能性については、環境庁（省）の「繁殖可能性の判定項目」があり、例えば、成鳥の求愛行動や巣の確認などを基準にして、繁殖の可能性を判定することになっている。オオタカとハヤブサは個体の確認あるが、上記の判定項目は観察されなかったことから、当該地域での繁殖の可能性は低いとされている。ヤイロチョウは鳴き声だけの確認である。

（3）の「注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況」に関する調査結果に基づいて、1）指定された天然記念物等や、学術上あるいは希少性の観点から重要である生息地、2）地域の象徴となることやその他の理由による注目すべき生息地、については確認されなかったと述べられている。

２　予測対象種と生息環境

ダム工事等による動物への影響の予測は、先に選定した74種の重要な種のうちから、下記の31種（表６.１.６.-24-１）を対象として実施されている。除外された種のそれぞれの理由

（６.１.６.-24-２）については、多くの種で「主要な生息域ではない」だったり、「生息の可能性が低い」と判断されたものである。

予測対象種への影響については、「事業計画と重要な種の確認地点等を重ね合わせる」ことで、「生息環境の改変の程度」で予測が行われている。

○哺乳類　１種

ニホンザル

○鳥類　８種

オシドリ・サシバ・アオバズク・フクロウ・ヤマセミ・アカショウビン・ヤイロチョウ・オオルリ

○両生類　６種

イモリ・ニホンヒキガエル・ニホンアカガエル・ヤマアカガエル・トノサマガエル・カジカガエル

○魚類　７種

スナヤツメ・タカハヤ・アリアケギバチ・アユ・ヤマメ・カジカ・オヤニラミ

○陸上昆虫類　９種

アカスジキンカメムシ・ヒメキマダラセセリ・オオチャバネセセリ・オナガアゲハ・クロシジミ・ウラギンヒョウモン・ジャノメチョウ・シモフリトゲエダシャク・チャオビフユエダシャク

予測結果には、１）事業の実施による影響は小さいと考えられるもの、２）鳥類では事業による直接改変によって餌場や営巣場所として適さなくなるもの、３）生息域の減少が指摘されるもの等がある。そして環境影響がないか、または極めて小さいと判断される種を除く24種については、主要な生息環境の復元や創出などの環境保全措置の検討がなされることになっている。なお、除外された種は、哺乳類のニホンザル１種、鳥類ではアカショウビン、ヤイロチョウの２種、両生類のニホンヒキガエル１種、陸上昆虫類ではヒメキマダラセセリ、オナガアゲハ、クロシジミの３種、合計７種である。

環境保全措置

環境保全の対象種とする24種の内、サシバとヤマセミ（鳥類）、トノサマガエル（両生類）の環境保全措置は「６.１.８.生態系」の項目で検討し、魚類７種については「６.１.４.水質」で検討した環境保全措置で兼ねるとしている。したがって、14種について環境保全措置の検討を行っている。

環境保全措置の検討は、「事業者の実行可能な範囲内で環境影響をできる限り低減しているか」を検証し、さらに検証は、複数の環境保全措置案の比較や実行可能なより良い技術を取り入れたかどうかの検討によって行われている。

なお、対象事業実施区域のほとんどが、河川環境から広いダム貯水池となることから「回避」は困難であると判断し、主要な生息環境の復元や創出による環境保全措置がとられ、工作物の構造や設置による「低減」、移入や消失する環境の復元による「代償」などが検討され、学識経験者、専門家の指導・助言を受けて進めることになっている。環境保全措置の各分類群につ

いての具体的な施策は、次のようになっている（表６.１.６-31）。

○　鳥類（オシドリ、アオバズク、フクロウ、オオルリ）についての「代償」は、溜め池の創出や樹林、および餌場を復元すること、「低減」策としては餌場環境の維持を行うことである。

○　両生類（イモリ、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、カジカガエル）についての「代償」は、湿地を整備すること、「低減」としては、卵塊や幼生の移入による生息数の低減や土砂流入の防止を行うことである。

○　陸上昆虫類（アカスジキンカメムシ、シモフリトゲエダシャク、チャオビフユエダシャク）の「代償」は、生息環境や樹林を復元すること、「低減」としては、生息環境の維持、走光性の顕著な昆虫には遮光設備の設置を行うことである。

　サシバとヤマセミ、トノサマガエルの環境保全措置は、「６.１.８.生態系」の項目で、次のように検討されている（表６.１.８-40）。

○　サシバは、陸域生態系の上位種とされ、消失する採餌場及び営巣環境の復元と整備を「代償」とし、「低減」としては工事による直接・間接的な影響を低減する措置をとる。ヤマセミは、河川域生態系の上位種とされ、主要な餌場となる水際の落葉広葉樹林の復元・創出・維持、および、主要な営巣環境（例えば人工巣の利用）の復元・維持を「代償」としている。

○　トノサマガエルは、陸域生態系の典型種とされ、主要な生息環境の復元・創出（例えば湿地の整備）による「代償」と、生息数の低減（例えば卵塊の移入）を「低減」措置としている。

○　魚類７種の内、タカハヤについては、河川域生態系の典型性とされているが、ほとんどの河川で優占して生息しているので、事業の実施による影響は小さいと見なされている。ただし、必要に応じたモニタリングを継続すると明記されている。

３　事後調査

重要な種について、１）影響予測の不確実性が大きいもの、２）環境保全措置の効果に関する知見が不十分なもの、３）影響の程度が著しいものは、工事の実施期間および共用開始後において、生息状況、生息環境の状況などを把握する目的で、次にあげる種と分類群について事後調査を実施するとされている。

イタチ類は、在来種のイタチと移入種のチョウセンイタチの生息状況を明らかにするため、カジカガエルは河川の出水時など想定外の流量となった場合、沈砂池下流に土砂による影響を受ける可能性があるため、魚類は共用後の出水時に、南畑ダム下流域で水質モニタリング調査を実施する。同時に魚類の生息状況を把握するため、チョウ類には環境指標性があり生息環境を保全する環境保全措置全般の効果についてモニタリングする目的のため、それぞれ事後調査を行う（表６.１.６-33）。

さらに、事業実施区域内で、次のような新たな情報が得られた場合は、学識経験者や専門家の指導と助言を受けて、環境保全措置および事後調査の実施について検討することになっている。１）事後調査で新たな確認情報が得らた場合、２）予測対象としなかった重要種について新たな確認情報が得られ、生息の可能性があると判断された場合、３）環境保全措置を検討し

たが、事後調査しない重要な種について、期待した効果が得られないと判断された場合である。

そして、事後調査の結果については、「事後調査報告書」としてまとめることが明記されている。

4　「環境保全措置」に関する諸問題

(1) 工事や調査等で現地に立ち入る人々のために、携帯用の「環境手帳」が作成されている。この手帳には、五ヶ山ダムおよびその周辺地域で生育・生息が確認された、あるいは、生息の可能性がある注目すべき動植物が写真付で解説されている。現地で見逃されがちな動植物を手元にあるこの手帳で確認できるので、注目すべき動植物の保護に貢献することが期待される。

(2) 湿地や溜め池に棲む多くの生物は、現在の水田にも数多く生息していると思われるが、事業区域内の水田は耕作が放棄されていて、乾燥による陸地化が進み、多くの種の生息を困難にしていることが予測される。従って、「環境保全措置」による湿地や溜め池の創出や復元は、「代償」場所の早期決定を行い実行に移すことが望まれる。幸い、すでにカジカガエルとトノサマガエルについては、「代償」の場所（仮の場所を含む）が設定され、受け皿が準備されつつある（註１）。これらの「代償」場所は（特にトノサマガエルのための）、水田の多くの生物にとっても、一時的な避難場所となることが予測され、本格的な「代償」場所が造成された場合、生物の再生が早められることが期待される。さらに、生態系の上位種にとっても、湿地や溜め池は、餌場の復元としての役割を果たすことにもなるので順次造成されることが望まれる。

(3) 多くの生物のための樹林や営巣環境の復元についても、基本的には上述と同様なことが考えられる。すなわち、これらの復元も、前もってその場所を設定し、復元作業に取りかかることが重要である。それは、これらの復元した生息場所を生物が利用できる状態になるまでには、かなりの年月を必要とするからである。

(4)「卵塊や幼生の移入」は、遺伝子の多様性も考慮して行う必要がある。保全生態学では、生物の多様性として「遺伝子の多様性」も対象とするので、卵は出来るだけ多くの卵塊から（例えば、複数の卵塊からその一部分を採集）採集して移入する方法が考えられる。幼生に対しても同様な考えで採集し、移入することが望まれる。

(5)「卵塊や幼生の移入」では、さらに次の点を考えておく必要がある。例え移入させても、生態系には環境収容能力（carringcapacity）があり、移入した個体の生存は必ずしも保証されている訳ではない。言い替えると、その場の餌量、微生息場所には制限があるために、種内関係（競争）や捕食関係が想定され、期待した程の効果は得られない可能性も視野に入れておく必要がある。

(6) 生息環境の寸断によって、移動能力が低い生物では個体群が分断されることも考慮しておく必要がある。これによって、個体群の間の交流（遺伝子の交流）が妨げられ、近交弱勢の問題が生じ、繁殖力や生存力が弱まって個体群が維持できなくなる可能性も予測されるからである。

(7) 図６.１.８-28（2）によると、背振ダムにはブルーギルが、南畑ダムにはブラックバスが生息していることが示されている。従って、将来、五ヶ山ダムにはこれらの外来種が侵入する可能性は否定できない。環境省では、これらの魚種についての対策を出しているが、福岡県でも「福岡県特定外来種対策検討会議」が発足しており（註２）、この「会議」の方針が期待される。

(8) ムカシトンボは、対象地域で少なからず確認されているが、もともと密度が高い種ではないため、各調査地点で発見されるとは限らない。たとえ他の場所で確認されていなくても生息の可能性は否定できないので、慎重を期して「予測の対象」種とすることが望まれる。

註

1　福岡県　2003.７『那珂川水系五ヶ山ダム建設事業環境影響評価書』

2　福岡県　2005　『五ヶ山ダム環境調査（自然環境）及び保全措置検討業務」報告書』

参考文献

矢原徹一・鷲谷いづみ　1997『保全生態学入門』　文一総合出版

種生物学会編、矢原徹一・川窪伸光責任編集　2002『保全と復元の生物学』　文一総合出版

〔東　和敬〕

ii．陸産貝類（かたつむり）

1　陸産貝類とは

陸産貝類は「かたつむり」として、昔から親しまれてきた身近な生き物である。もともと海に住むサザエなどと同じ巻き貝の仲間で、進化の過程で陸に上がって生活するようになった一群である。同じ陸産貝類の仲間でもエラ呼吸に近いものから肺呼吸するものまで様々である。もともと水中で生活していたため、陸産貝類も湿気の多い場所を好んで生息している。乾季には殻に閉じこもって湿度の高くなるのをじっと待っている。一番進化した陸産貝類は、殻を持たずに生活できるようになったナメクジの仲間である。

陸産貝類は移動力が弱いため、一生を狭い地域で過ごすしている。このため、同じ種でも遠くの場所にいる陸産貝類とは異なる方向に進化している場合が多く、様々な種へと分化してきた。日本には約800種ほどの陸産貝類が確認されているが、同じ仲間でも陸に住むもの、海に住むもの、淡水に住むものが混ざっており、明確にこれが陸産の貝で、これが海産の貝、これが淡水の貝という区分はできていない。

このように陸産貝類は、種の多様性が高いこと、生息域が湿気の多いところに限られることから、過半数の553種・亜種（淡水産貝類を含む）が絶滅の危機にさらされており（註２）、日

本にいる生物では他に例を見ない。

2　既存の記録

福岡県の陸産貝類の調査記録は、福岡県の希少野性生物（註４）、福岡県産貝類目録（註３）、その他には魚住他の調査報告（註１）があるが、佐賀県の陸産貝類の体系的記録はない。しかしながら、その福岡県関係の文献の中にも五ヶ山地区の陸産貝類の記録は見あたらない。

3　調査方法

１）調査方法

調査地域は杉、檜の植林地帯であり、集落周辺に残された自然林もカシ系の林であるため、陸産貝類の生息にはあまり適していない地帯である。このため、民家周辺の植栽、社寺林を中心に行った。調査地域を徒歩で巡回し、生息に適すると思われる環境について個体採取を行い、持ち帰って同定を行った。なお、殻標本及びナメクジのホルマリン浸漬標本は筆者が保管している。

２）調査時期

２年間に季節を変えて８回の調査を行った。

平成15年（2003）は9/11、9/25、10/1、10/8、10/15、10/22の６回。

平成16年（2004）は6/24、7/13の２回。

4　調査結果

調査結果は別表（Tab.Ⅱ3-2-1）のとおりである。なお、図版にその写真を掲載する。

１）生息種

生息が確認された種は、９科24種であった。

２）生息場所

かたつむりの生息が多くみられたのは、神社環境（古木、落ち葉の下）、民家の生け垣や民家跡などで、人の生活環境のそばで共存しているのが確認された。

逆に、杉の植林地や残された常緑林（カシ系）では、ほとんど限られた少数の種しか確認されなかった。

３）生息種の概要（Pho.Ⅱ2-2-1～24；以下、末尾の括弧内は番号対応）

＜民家周辺の植栽に多い種＞

(1) **ヤマタニシ**　*Cyclophorus herklotsi* Martens, 1860

川のタニシに似ていて、蓋がある。落ち葉の下から多数の個体を確認した。(1)

(2) **サツマオカチョウジガイ**　*Allopeas satsumense*（Pilsbry, 1906）

１cm程度の細長い貝。落葉下から１個体の殻を確認した。(9)

(3) **オカチョウジガイ**　*Allopeas clavulinum kyotoense*（Pilsbry & Hirase, 1904）

前種によく似ているが、殻がやや太く短い。巻数も少ない。前種同様に落葉下から１個体の殻を確認した。(10)

(4) **チャコウラナメクジ**　*Lehmannia marginatus* Muller, 1774

鉢の下などに多く生息していた。背中に小判型の甲羅があり、黒褐色の２本線が有る。移入種であるが民家の内外に広く生息しているため、通称「ナメクジ」と思われている。本来の在来種であるナメクジは少なくなっている。(11)

(5) **マルシタラガイ**　*Parasitala reinhardti*（Pilsbry, 1900）

樹皮上や木の葉の裏側に棲む５mm程度の丸い微少貝。殻が薄く壊れやすい。網取の船地蔵近くの廃屋跡の樹の葉の裏から１個体のみ確認した。(13)

(6) **コベソマイマイ**　*Satsuma myomphala myomphala*（Martens, 1865）

ツクシマイマイに生態も形態も似ているが、成貝では、殻底（裏側）の臍孔が閉じている。成貝は網取の杉林の放置ゴミの下で確認した。幼貝は植木の根元から確認した。(19)

(7) **フリイデルマイマイ**　*Aegista*（*Aegista*）*friedeliana friedeliana*（Martens,1864）

１～２cm程度の平たい円盤状の貝で、殻底の臍孔が大きい。樹の根本、落ち葉の下で多数確認した。(21)

(8) **キュウシュウシロマイマイ**　*Trishoplita eumenes eumenes*（Westerlund, 1883）

樹上生活であり、きれいな白い殻をした２cm程度の三角すいの貝である。九州と山口に分布する。植木の根元で確認した。(22)

(9) **ツクシマイマイ**　*Euhadra herklotsi herklotsi*（Martens, 1860）

「デンデンムシ」として知られている種で、九州と四国、中国の一部に分布する４cmを越える大型の平たい円盤型の貝である。雨降り時には葉の上にいたが、乾燥期には樹の根本の落葉の下などに避難しており、様々な場所で見られ、個体数は多かった。標高400mあまりの低山地にもかかわらず、殻色は濃い褐色の山地型であった。(23)

(10) **ウスカワマイマイ**　*Acusta despecta sieboldiana*（Pfeiffer, 1850）

畑やその周辺で見られる貝である。野菜を食害するため嫌われている外来種である。貝径２～３cmの球状で、殻は薄い。(24)

＜神社の周辺・自然度のやや高い地域＞

(11) **ミジンヤマタニシ**　*Nakadaella micron*（Pilsbry, 1900）

小川内の山祇神社の落ち葉の下から確認された。ヤマタニシの子供のような３mm程度の微少貝。(2)

(12) **ヒダリマキゴマガイ**　*Palaina*（*Cylindropalaina*）*pusilla pusilla*（Martens, 1877）

前種と同じ場所で確認された３mm程度の微少貝。白色のでごま粒のような形である。(3)

(13) **ホソキセルガイモドキ**　*Mirus rugulosus*（Moellendorff, 1900）

網取の神社の大木の樹幹から見つかった。九州、四国に分布するが少ないため、国では準絶滅危惧種、福岡県でも準絶滅危惧種に指定されている。名前にモドキとあるようにキセルガイに似ているが、右巻で２cm程度の茶褐色の貝である。(4)

(14) **スグヒダギセル**　*Paganizaptyx stimpsoni subgibbera*（Boettger, 1877）

キセルガイ（左巻の細長い貝の仲間）の１種で、1.5cm程度。倉谷（大野）の神社にある梅の古木に多産していた。(5)

（15）**ピルスブリギセル**　*Tyrannophaedusa*（*Decolliphaedusa*）*pilsbryana*（Ancey, 1904）

２cm程度の細長いキセルガイで、開口部にヒダが数本見られる。群で見つかることは少なく、今回も１個体だけ倒木の下で確認された。（6）

（16）**シリオレギセル**　*Tyrannophaedusa*（*Decolliphaedusa*）*bilabrata*（Smith, 1876）

前種より大きく２～３cm程度ある。成貝では殻の先端が折れてなくなるのが特徴である。倒木や落ち葉の下で確認された。（7）

（17）**オキギセル**　*Vastina*（*Vastina*）*vasta vasta*（Boettger, 1877）

３cmを越え、キセルガイとしては大型である。倒木の下や大きな樹の根本、落ち葉の下など色々な場所で確認された。（8）

（18）**タカキビ**　*Trochochlamys praealta*（Pilsbry, 1902）

山祇神社の落ち葉の下で確認された３mm程度の微少貝で、かなり高めの三角錘の貝である。（14）

（19）**ハリマキビ**　*Parakaliella harimensis*（Pilsbry, 1901）

３mm程度の三角錐の貝で、網取の観音様の近くの柿の木の根元で２個体確認した。（15）

（20）**ヤクシマヒメベッコウ**　*Discoconulns yakuensis*（Pilsbry, 1902）

山祇神社の落ち葉の下で確認した３mm程度の微少貝で、平たい円盤状をしている。（16）

（21）**ウラジロベッコウ**　*Urazirochlamys doenitzii*（Reinhardt, 1877）

ヤクシマヒメベッコウに似ているが５mm弱とやや大きく、殻の裏面は透明感のあるベッコウ色であるが、殻底は白くなる。網取、桑原の神社の落ち葉の下で確認した。（17）

（22）**タカハシベッコウ**　*Nipponochlamy takahashii* Kuroda & Hirase, 1969

ウラジロベッコウに似ているがやや大きく、殻の表面、裏面とも透明感のあるベッコウ色である。桑原の屋敷跡の落ち葉の下で１個体確認した。（18）

＜山地の林縁、林内＞

（23）**ヤマナメクジ**　*Meghimatium fruhstorferi*（Collinge, 1901）

伸びた時は10cmを越える大型で、黒っぽい色をしている。椎茸のほだ木の下で確認した。（12）

（24）**シメクチマイマイ**　*Satsuma*（*Satsuma*）*ferruginea*（Pilsbry, 1900）

1.5cm程度の茶褐色の球型で、山道の林縁で散見された。（20）

４）地域性

・小川内及び網取の神社は、自然度が高く多種のかたつむりが生息していた。

・いずれの地区も、民家の周辺の植栽では限られた種であるが個体数は多かった。南斜面に位置する東小河内や平坦部の多い倉田では個体数は少なかった。

５　考察及び結論

・今回の調査で24種の陸産貝類が確認できた。杉林、檜林に囲まれた地域であるが、神社周辺は豊かな自然が残っていた。

・特記すべき種として、福岡県が希少種としているホソキセルガイモドキが確認された。

（謝辞）
この調査、報告に際し、多大な御指導を賜った日本貝類学会員の魚住賢司氏に心からお礼申しあげる。

（文献）

1）魚住賢司他　福岡県・陸淡水産貝類多様性調査　環境省　平成８年（1996）
2）環境省　改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物　６陸・淡水産貝類　平成17年（2005）
3）高橋五朗・岡本正豊　福岡県産貝類目録　自刊　昭和36年（1969）
4）福岡県　福岡県の希少野性生物　平成13年（2001）

〔永渕成樹〕

和　名	小川内	東小河内	大野	網取	桑河内
ヤマタニシ	○	○	○	◎	○
ミジンヤマタニシ	○				
ヒダリマキゴマガイ	○				
ホソキセルガイモドキ				○	
スグヒダギセル			◎	○	○
ピルスブリギセル				○	
シリオレギセル		○		◎	○
オキギセル	○	○	○	○	○
サツマオカチョウジガイ				○	
オカチョウジガイ				○	
チャコウラナメクジ	○				
ヤマナメクジ	○				
マルシタラガイ				○	
カサキビ	○				
ハリマキビ				○	
ヤクシマヒメベッコウ	○				
ウラジロベッコウ				○	○
タカハシベッコウ					○
コベソマイマイ	○				
シメクチマイマイ	○		○	○	○
フリイデルマイマイ	○	○	○	◎	○
キュウシュウシロマイマイ	○				
ツクシマイマイ	○	○	○	○	○
ウスカワマイマイ	○				○

※　○：生息　◎：多数生息

Tab.Ⅱ3-2-1　生息種の確認地

図版

1.ヤマタニシ

2.ミジンヤマタニシ

3.ヒダリマキゴマガイ

5.スグヒダギセル

4.ホソキセルガイモドキ

6.ピルスプリギセル

7.シリオレギセル

8.オキギセル

9.サツマオカチョウジガイ

10.オカチョウジガイ

11.チャコウラナメクジ

12.ヤマナメクジ

13.マルシタラガイ

14.タカキビ

15.ハリマキビ

16.ヤクシマヒメベッコウ

17.ウラジロベッコウ

18.タカハシベッコウ

20.シメクチマイマイ

19.コベソマイマイ

21.フリイデルマイマイ

22.キュウシュウシロマイマイ

24.ウスカワマイマイ

23.ツクシマイマイ

Pho.Ⅱ2-2-1～24　陸産貝類

Ⅲ　歴史部門

1　中世の脊振山について

脊振山関係の近世史料については、肥前・筑前の国境相論に関するものを始め、比較的多くの史料が残されているが、まだ十分な調査がなされているとはいえない。

本稿では、天正15年の豊臣秀吉による九州統一期までの脊振山の概要と史料及び年表について、報告することにしたい（註１）。

脊振山は肥前と筑前の国境をなす海抜1055ｍの山で、金山、雷山へとつながる山系をなしている。古くから山岳信仰の対象として、修験道的な神仏習合的色彩を持ち、筑前・肥前両国にまたがり宗教的権威を有していた。現在は、脊振山頂近くには弁財天が祀られ、佐賀県側の中腹の中宮、かつての霊仙寺跡には乙護法堂があり、脊振山系が佐賀平野に接するあたりの坂本には天台宗寺院の修学院が現存しているが、近世以前の下宮は積翠寺であったとされている。中世の脊振山は、脊振神社の神宮寺に当たる上宮東門寺を中心に、中宮、下宮がおかれて一山組織を形成しており、山腹から山麓にかけて多数の僧坊で埋まっていた。玉林苑（註２）によると「龍樹権現跡を卜、徳善大王、辨財天、乙護法の霊場」とある。また戦国期東門寺衆徒の申状（註３）には「本□（社カ）龍樹三所権現、鎮□（主カ）者乙護□（法カ）童子」とある。更に、康治元年（1142）大勧進僧増忍により営まれた経筒の刻銘（「その他の史料」　２号）には「大悲三所権現竜樹□士、□善帝王八所王子、大慈大行事乙護法」とある。また応永20年（1413）の明源田地譲状（「修学院文書」13号）によると、「肥前国三根郡坊所郷宮富名之内田地一町」は「脊振山乙護法所大般若田」とされており、乙護法堂で大般若経の月次転読・祈祷が行われていた。

乙護法については『渓嵐拾葉集』巻第三十六や『肥前古跡縁起』（註４）に説明があり、吉田扶希子氏により詳細な考察がなされている（註５）。それによると、乙護法は天竺国の大王徳善大王と后辨財天の十五番目の王子で、生後七ヶ日で行方不明になった。大王は龍樹菩薩に行方を尋ね、菩薩は天眼通を現し、三千界を知見し、西海の地脊振山に王子が居ることを見つけ、これを聞いた徳善大王は、残りの十四人の皇子を引き連れ、龍樹菩薩と共に我が国に影向したのが、脊振権現である、とのことである。

脊振山の辨財天は日本国六辨財天の一つに数えられている。辨財天は河の女神で、脊振山頂には池があり、近世には雨乞いの祈祷も行われていることから、脊振の辨財天は水神として信仰され、それに対して乙護法は脊振山を守護する山の神である、とする研究もある（註６）。

脊振山が確かな史料上最初に現れるのは、貞観12年（870）５月29日で、正六位上から従五位下に叙されている（『三代実録』）。更に天文８年～９年頃のものと思われる東門寺衆徒申状（「修学院文書」14号）は破損が多く意味不明ながら「一元□□□□□御時、當山湛譽上人」とあり、脊振山の僧湛譽上人のことが記されている。湛譽については『玉林苑』や『肥前古跡縁起』では「元明の聖夜」とか和銅年間としているが、『扶桑略記』巻第二十四の延長３年６月７日条から、「平安初期の背振の住僧」で天台系の僧侶であり、「学僧を目指すよりも、むしろ山林を抖擻しつつ修行を重ねる修験僧」とする研究もある（註７）。

つづいて播磨国書写山円教寺を開いた性空は、天暦２年（948）日向国霧島から脊振山へ移り、康保３年（966）書写山に移るまで脊振山にて修行を重ねている。性空は霧島や脊振山等の山林で修行した山林抖擻の比丘であり、性空に関する伝記類の多くが、「筑前国脊振山に移住、歳卅九にして、法華経を暗誦した」とあるように（註８）、法華経の持経者でもあった。また『元亨釈書』には性空の甥の皇慶阿闍梨の脊振入山を記している。

嘉保３年（1096）「脊振山上宮住僧睿恒聖人」は、大蔵種房の私領である脇山地方を「圖彼野御山北坂本、為建立下宮并堂社、永禁断殺（生脱力）、成仏地、令住僧侶、奉祈天下安穏」為に施入してほしい旨申し入れ、種房はこれを聞き入れ、四至を限って施入している（「修学院文書」16号）。「御山」とは比叡山の事であり、睿恒は天台系僧侶で、勧進や開発等を行う修験者であろう。

こうした勧進やそれと関連した開発等を行う聖として、同じ山稜の西に位置する雷山千如寺を初め怡土郡七ヶ寺や油山を開いたとする清賀の存在がある。清賀は「法持聖人」と呼ばれ、御坂村を開発し、千如寺千手観音の仏性灯油料田とした、とする伝承が鎌倉時代には成立している（註９）。清賀が実在の人物かどうかについては議論の余地があるが、ともあれ平安末期、脊振山系の峯には、こうした天台系の勧進僧で、山林抖擻を旨とする修験者の活動がかなり活発に行われ、それにより脊振山や雷山等の活動が支えられていたことは、十分に考えられる。

また康治元年、法華経12部と止観経１部を書写し、脊振山上に経塚を営んだ大勧進僧増忍は、勧進活動を行う天台系の僧で、法華経や止観経の持経者であり、性空や湛譽とも通ずるものがある。

こうした天台僧の脊振山での活動が顕著なためでもあろうか、『玉林苑』には「伝教弘法慈覚智證、渡唐の波を凌しも、先此勝嶺の雲を分、祈願の誠を凝さしむ」とあり、天文年間の東門寺衆徒申状にも「桓武天［　］伝教弘法［　］慈覚智證御入□□」等とあり、（「修学院文書」14号）、最澄・空海・円仁・円珍等の脊振入山を説いているが、正確なことは不明である。また同申状には「所祈者文官武職之靜寧、顕教密教並修、所稀者天下海内之安泰」とあり（「修学院文書」15号）、公家や武家のための祈祷を行う顕密並修の山岳寺院であった。

更に経筒の銘文中には「三所権現」の名がみえ、長亨３年（1489）の東門寺衆徒の紛失状には、この数通の証文焼失の事、偽り申したならば「脊振三所権現御罰を蒙るべく候」とある（「修学院文書」16号）。この三所権現を紀伊の熊野三所権現に比定し、平安末期に英彦山を経由して熊野信仰が脊振山に及んだとする見解も見られる（註10）。脊振山の筑前国側の室見川流域には、多くの熊野社が分布している。生の松原の十二諸権現、拾六町の熊野神社、脇山地域の横山三所権現社、石釜・広瀬・中山の三所権現社、谷口の十二所権現等に熊野神が祀られており、更に脇山には釣溝を造ったとされる熊野の比丘尼の伝承も伝えられている（註11）。脊振山の南側については未調査であるが、修学院のある坂本あたりに熊野社がいくつか分布しており、更に筑後国の広川庄は熊野社領であり、脊振山を中心にして北は筑前国早良郡、南は神埼庄から筑後国にかけて熊野信仰が広く浸透していたことが考えられる。

こうして10世紀以降、湛譽や性空、睿恒、増忍等山林抖擻を旨とする天台系僧侶の活動に支えられて、脊振山は所領や宗教的権威を増し、天文年間の東門寺衆徒申状（「修学院文書」15号）に頼朝や尊氏の白幡の奉納等を説くが、もとより確証は無い。ともあれ「脊振山は昔三千

坊の所にて、坂本千坊、西谷千坊也」と言われている（註12）ように、山の随所が僧坊で埋められていたと思われる。史料上確認できる建造物施設を列挙すると、脊振山大講堂、脇山政所、本社宝殿、中法殿、東門寺政所、当山（脊振山）権現堂、多宝塔、脊振山乙護法所、三所鎮主、九間拝殿、経所、本社御宝殿、鐘楼、乙護法宝殿、三郎護法宝殿、箕護法宝殿等である（「その他の史料」５号、「修学院文書」３・10・11・13・15・16号、「結城文書」９号、「鳥飼文書」５号等）。史料上には現れない金堂等その外の施設も当然あったと思われる。そしてこれらの施設では様々な宗教的行事が行われていた。例えば乙護法所ではでは大般若経の月次転続と公私の御祈祷が行われ（「修学院文書」13号）、大講堂では仁王講が、その外施設は不明であるが、正月７ヶ日の祭礼や修正会、５月５日の祭礼、更に「年中廿五ヶ度御供」とあり（「修学院文書」10・16号）、様々な祭礼が年間を等して行われていたことは間違いないであろう。そしてこうした祭礼や施設・建造物の維持、その他の費用として後で述べるような免田や寺領等が設定されている。また脇山の施入を申請した睿恒の言葉に「下宮并堂社」を建立せんが為、とあり、肥前側以外に、筑前側の脇山にも下宮等が建立されていた可能性がある。脇山には政所が置かれ、文書等を保管する新治宿所も置かれていた（「修学院文書」３号、「結城文書」１号）。

こうした上宮や中宮・下宮以外に多数の僧坊があり、史料上確認できるものを挙げると次の通りである。天文７年（1538）脇山池田の大日堂の大日如来座像の体内には、この仏像の造立に結縁した坊と僧侶の名前が右脇に、左脇には給主・土豪や脇山・小笠木・内野の旦那衆が記されており、常楽坊、円光坊、宿室坊等の坊名が見える（「その他の史料」24号）。その外脇山地方に坊領等深い関係を持つ坊として、積善坊、円覚坊、成就坊、大教坊、大弐坊、真蔵坊等がある（「鳥飼文書」１・５・６・14・16・21号、「結城文書」２・３・４・６・７・８・10・11号）。また、筑後国大善寺玉垂宮の定額僧として名前のはっきりしている者に大教房安常、心融房阿闍梨教辯、巧恵房万恵、教月房尊暁等がおり（「その他の史料」４号）、長亨３年の証文焼失に関する紛失状には一和上を筆頭に五戒坊英澄、實城坊貞秀、大教坊恵秀、円光坊秀準、真蔵坊準暁、金光坊慶宥、脇山衆徒内として寂光坊、円周坊、上ノ坊等の名前が見える（「修学院文書」16号）。この外、政所坊、水上本坊、上宮本坊等の存在を史料から窺うことができる（「その他の史料」26号、「修学院文書」１号）。なお、東脊振村教育委員会の東脊振村文化財調査報告書第４集『霊仙寺跡』には水上坊、五戒坊をはじめとする中宮の坊跡が比定されている。

さて、この様に上宮東門寺を中心として、多数の坊によって構成された脊振山の僧侶たちは、脊振山（東門寺）衆徒と呼ばれる組織を形成していた。康治元年の経筒には「東西満山護法聖衆」とあり（「その他の史料」２号）、衆徒の組織は大きく東西の二つに分かれていたようであるが、詳細は不明である。「満山衆徒」の名称は康暦２年（1380）の今川了俊書下（「修学院文書」12号）や天文年間の東門寺衆徒申状（「修学院文書」15号）等にもみえ、脇山寄合中等からは「山上御衆中」（「鳥飼文書」24号）とか「山上御役人」（「鳥飼文書」23号）とも呼ばれている。彼らは、断片的史料からも、脊振山東門寺の所領内における裁判権の行使（註13）や次に述べるように証判の作成や河上社課役に関する請文の作成（「その他の史料」15号）、更に所領の還補を求めて大内氏に訴えており（「修学院文書」15号）、又脊振山領における徳政の実施を伝える大内氏奉行人の連署奉書が「東門寺衆徒御中」に宛てられる（「修学院文書」17号）

等々、恐らく脊振山内における最高の意志決定・執行機関とみて良いであろう。衆徒の構成員をうかがうことのできる史料として、正和年間僧成賢が肥前国柳嶋村地頭職につき、衆徒の証判を請うたのに対し「当知行無相違之間、為後證、衆徒等加署之」として一和上法橋上人位を筆頭に権律師法橋上人位、法眼和尚位、大法師、阿闍梨、大法師、法橋上人位、法眼和尚位、阿闍梨、阿闍梨、権律師法橋上人位、権律師法橋上人位、大法師、法橋上人位、大法師、阿闍梨の16名の名前が見え、此の内「在判」とあるのは一和上法橋上人位を含め７名である（「修学院文書」２号）。但し、この文書は紙継目より後半が欠失しており、署名者はこれ以上いたと思われる。また永徳２年（1382）の脊振山衆徒請文写は、破損により署名者不明の箇所があるが、政所大法師、権律師、法眼和尚位等約10名が署名していたと思われる（「その他の史料」15号）。一方先に述べたように長亨３年の証文焼失の紛失状には一和尚以下五戒坊英證、實城坊貞秀、大教坊恵秀、円光坊秀準、真蔵坊準暁、金光坊慶宥等の名前が記され、しかも「一和尚」と記すのみで、一和尚には名前も署判もみられない。また天文20年（1551）与四郎と田中左衛門尉の間でなされた「横山六十三町之内円覚坊領中山村之内北田下より二段」に関する相論について裁許したものには、東門寺として法印永賀、成就坊秀兼、円覚坊長暁の名前が見える（「結城文書」10号）。一和尚を筆頭に僧侶としての僧職・位階により構成されていた東門寺衆徒の構成は戦国期には崩れ、一和尚を中心とした各坊により構成されており、僧侶としての資質を中心として構成・組織化された僧職・位階よりも坊を中心とする門閥主義が重んじられるようになっていったものと思われる（註14）。このことは次に述べる東門寺の所領支配のあり方にも反映されている。

脊振山の所領は、主に脊振山の北側・筑前国と脊振山の南側・肥前国にわたって分布しており、一部筑後国にも及んでいる。先ず肥前国側であるが、神埼庄、三根郡、河副庄、養父郡、基肄南郷等主に脊振山の南から東にかけての地域に広がっている。また北の筑前国側は、脊振山の膝下にあたる脇山地方が東門寺領とされている。内容的に見ると、多宝塔免や乙護法所大般若田、大講堂灯油免等の免田、脇山地方を始めとする脊振山領（東門寺領）として、領主権を有するものと、脊振山の住侶が河上社等の免田を給主として知行しているものに大別できる。勿論、脊振山領を背振山の住侶が地頭その他の給主として知行している例も多い。

先述したように正和年間の文書と思われるが、僧成賢は賢秀から譲られた重代相伝の私領である「肥前国柳嶋村地頭職」を覚秀が横領したとして博多に上訴し、覚秀は去状を出し、脊振山の衆徒から安堵の証判を得ている。更に建武元年（1334）脊振山は「神埼庄内柳嶋田畠半分」の返付を訴え、認められている（「修学院文書」６号）。また文明17年（1485）東尚盛は水上坊に対し、「神埼郡内柳島村并坂本之内坊地弐箇所」を代々支配の旨に任せて安堵を行い、寺役等先例を守り勤めるよう命じている（「その他の史料」21号）。賢秀や成賢は水上坊の僧かと思われ、柳嶋村は神埼庄内であるが脊振山東門寺領であり、水上坊はその地頭職等の知行権を持っていた。

正安２年（1300）法橋長印は水上本坊、上宮本坊、同（上宮）政所職、肥前国袋向嶋免田畠在家等、筑前国脇山免田畠屋敷在家、筑前国岩門郷別所毘沙門寺院主職・同免田在家等を栄印と文殊丸に譲ったが、栄印他界につき、全てを文殊丸に譲り直している（「修学院文書」１号）。この内袋向嶋については天文14年（1545）少弐冬尚は脊振山政所坊に対し、「肥前国三根郡之

内袋向嶋四十町地」を不入地として安堵している（「その他の史料」26号）。袋向嶋は40町の規模をもち、田畠在家を含む一円領域を持った脊振山領であろう。

元亨２年（1322）実成律師成舜は神埼庄小崎郷加納下東□□□□爪里３坪２杖・水町２丈中・賀崎郷小津里28坪田□□杖・東郷田地３丈中等を「今に知行相違無」により、安堵されている（「修学院文書」４号）。これらの田地は「聊かも公事所役有るべから」ざる地であり、この文書が修学院文書に含まれている事から、これらの田地は脊振山の免田であり、成舜が知行していたものであろう。

応安６年（1373）藤原貞氏は重代相伝の当知行地である神埼庄東郷上柏原里７坪の「多宝塔免参段」を淨光阿闍梨に譲与して貞氏家門繁昌の祈祷を依頼しているが、それには「此田地者、本自背振山知行之所候上、為免田之間、適多門坊御事、為同法之上、山里異于他近付申候間、相副本証文、永代所譲與申也」とある（「修学院文書」11号）。多門（聞）坊は淨光阿闍梨を指しており、「同法」とある事から、貞氏も脊振山の住侶であろうと思われる。つまりこの神埼庄東郷上柏原里７坪３段は脊振山の多宝塔の免田であり、その知行はこれまで脊振山の僧侶である藤原貞氏が重代相伝明していたことがわかる。大園隆二郎氏によると淨光は俗名国分又次郎長季であり、貞和４年（1348）足利直冬が河副庄の長尾山福満寺を再建した時に「大勧進沙弥淨光藤原氏、肥前之国府之領主」とあり、福満寺の再建に大勧進として助力している（註15）。永仁４年（1296）脊振山住明準は親父西願と師匠から譲られた河副庄寺社免田等を安堵されており（「その他の史料」８号）、河副庄内に脊振山領の存在をうかがうことができるが、応永22年（1415）河副庄福満寺末寺の妙福寺領の内、朝順分と朝金分について定め置かれており、そこでは新合名２坪１町は「脊振免」とされ、北依５段は朝順分、南依５段は朝金分とされている（「その他の史料」19号）。河副庄内の長尾山福満寺は脊振山と深い関係にあり、『長尾山年譜』には「當山（長尾山）より脊振山の住持に赴きし師」として教辯や明準、準海をはじめとする僧侶の名前が挙げられている（「その他の史料」８号）が、この内教辯は、先述したように承久３年（1221）の筑後国玉垂宮定額僧注文に最勝講の新定額僧として江上村に料田１町を宛てられている（「その他の史料」４号）。以上のように、神埼庄から河副庄にかけて脊振山との関係が深いが、中宮霊仙寺跡から大量の輸入陶磁器が出土している問題と併せて考える時、脊振山にとってこの地方が単なる所領の問題以上に、交通上貿易品の輸入基地としても重要な位置を占めていたと思われる（註16）。

先述したように、応永20年、明源が若松殿に三根郡坊所郷宮富名内田地１町を譲った譲状には「脊振山乙護法所大般若田也、殊致月次転読之、可致公私御祈祷」とある。宮富名内田地１町は脊振山乙護法所で毎月大般若経を転読するための免田であり、この田地を知行している明源はそれらを行う脊振山の僧侶であったであろう。

以上のように免田等脊振山の所領を脊振山の僧侶が知行している例が多く見られるが、それらは淨光阿闍梨が国分氏の出であることからわかるように、彼らの多くがこの地方の在地豪族の出であることに起因していよう。

この外、貞和７年（1351）足利直冬は、筑後国板井庄古飯村の地頭職を脊振山に寄進しており（「修学院文書」９号）、弘治３年（1557）良龍は水上坊を祈願所として、養父郡神辺村内国泰寺３町３段を安堵している（「修学院文書」18号）。また先述したように、承久３年の玉垂宮

定額衆注文によると、脊振山住僧が筑後国大善寺玉垂宮の定額僧となっており、本定額衆に３名、新定額衆の内、最勝講に２名、金剛般若に１名の計６名が玉垂宮の定額衆となって、三潴庄内の荒木、藤吉、江上、西牟田、高屋等の各村にそれぞれ１町の料田を与えられている。

次に、河上社免田を脊振山住僧が給主となって知行している事例をみてみたい。元亨３年（1323）、脊振山住侶学円坊長政は河上宮最勝講免である肥前国三根西郷久能向嶋正義名田地３町を知行しながら、神役を対捍したとして、河上宮雑掌に訴えられている（「その他の史料」11・13号）。「正応以来未済」とあり、鎌倉時代末期から南北朝期にかけて神役の対捍が恒常化していたことがわかる。年月日未詳であるが、国司初任・重任の時の勘料支配に関する河上宮の免田給主注文によると、給主として脊振山の名前が記載されているものに「大万六十疋」「本大六十疋」「勢万四十疋」「正義九十疋」がある（「その他の史料」９号）。仁治２年（1241）の河上宮の神事并次第課役料免立用給主注文案によると本大５町７段（幡修理１町・朔日仁王講１町２段・季法花十講１町５段・竈門大般若２町）、正義９町５段（二季最勝講４町５段、季灯油３町・南門修理３町）、勢万１町６段（仁王講１町・毎月五箇日仁王講６段）、財（大）万２町６段（季五ヶ日仁王講１町・毎月五ヶ日観音経１町・季大般若６段）となっている（註17）。文永３年（1266）の肥前国検注帳案によると財万名は基肄南郷内にあり、見作田13町２段の規模を持ち、除田７町には河上宮百世々長灯油免３町と脊振山大講堂灯油免２町が含まれている（「その他の史料」５号）。

正和４年（1315）、脊振山住侶善陽律師成秀は河上社幡免１町を引き募りながら、今に課役を勤めず、として河上社雑掌禅勝から訴えられている（「その他の史料」10号）。この課役は代一度の勤役と言われ、幡に12流があり、１流別代銭３貫文で、計36貫文を遷宮の時納めるようになっている。この課役はその後も未進がつづき、善陽律師・深教律師・大弐房と３代続けて造進せず（「その他の史料」13号）、更に永徳２年（1382）には今川仲秋から脊振山衆徒御中に、至徳元年（1384）には今川了俊から脊振山善陽律師跡にそれぞれ沙汰するよう命じられている（「その他の史料」15・16・17号）。

以上のように、河上宮の免田（名田）等を、脊振山の僧侶が給主として知行して、課役を河上宮に納めていたが、鎌倉時代も末期になると、課役を対捍するようになる。これらの側面は、彼らが脊振山の僧侶と云うよりも、むしろ在地豪族としての側面を示すものであろう。

次に、脊振山の北、筑前国内については、脊振山領は膝下の脇山地方のみにみられる。この地方については、かって触れたことがあるので、要点のみを記す事にしたい（註18）。先述したように嘉保３年、脊振山上宮住僧睿恒聖人の申請を受けて、府官大蔵一族の種房は先祖相伝の私領であるこの地方を四至を限って施入している。その後、暫く史料を欠いているが、鎌倉時代末期から南北朝期にかけて「筑前国脇山免田畠屋敷在家」「脊振□□（山上カ）宮領筑前国脇山院中山□（北カ）六郎大夫跡名田」「筑前国早良郡脇山院内脊振山上宮領」等と呼ばれており、「脇山院」と呼称されている（「修学院文書」１号、「結城文書」１号、「修学院文書」５号）。その後16世紀になると脊振山領を総称する文言として「筑前国早良郡之内脊振山東門寺領横山六十参町之内」「横山六拾三町者、前々悉寺領候之處」とあり、「横山」と言う言葉が使用されている（「結城文書」10号、「修学院文書」20号）。先述したように天文７年の木造大日如来座像体内銘には「内野諸旦那」「小笠木一村旦那」と並び「脇山内旦那」と記されており、脇山は内野や小笠木

と並ぶ一村落名に変化している。「横山六拾三町」とあり、63町の耕地をもつ一円領域からなっており、脇山、小笠木、中山、広瀬、石釜、曲淵等の村＝惣村を含み、横山はそれら惣村の集合体＝惣郷であった。また天文17年（1548）の史料には「廿五名御百姓」と言う文言があり（「鳥飼文書」13号）、25の名からなっていたことがわかるが史料的に確認できる名は大辻名、おくの名、窪名、紺屋名、専道名、太郎丸名、南名、彌鬼丸名である。

さて、脊振山東門寺のこうした脇山支配は、脇山に現地支配機関として「政所」を置いているが、鎌倉時代末期から南北朝期にかけては、下作職の安堵や没収等は一和尚の袖判下文や下知状によって行われていた。

一方15世紀後半以降になると、それまでの脊振山領や脊振山上宮領という呼称に代わり、「～坊領」と言う言葉がみられるようになる。例えば「筑前国早良郡脊振山中宝殿免積善坊分くほの名」とか「筑前国早良郡　脊振山円覚坊領中山之村」「筑前国早良郡脊振山東門寺成就坊領小笠木之村」という（「結城文書」２・６・８号）ように村や名がそれぞれの坊に割り当てられている。これらの坊は地頭とか領主と呼ばれており、その下に下作職を所有する地主とか作人と呼ばれる層がいた。地主や作人層には鳥飼、田中、重松、庄崎、結城等の小領主が多く含まれているが、中には名前からみて百姓層も含まれている。坊はこれら坊領＝地主・作人層に対し、下作職の安堵や没収等の進止権を持っており、また下作職の相論に関する裁判権も持っていた。他方では、坊は下作職の買得・譲与等を行っており、いわゆる坊による加地子の集積・地主化の動向がみられる（註19）。後述するように半済を始めとする戦国大名や国人層の所領侵略のため、脊振山の所領支配は危機に瀕しており、それらに対処する方策の一つとして、坊による所領支配と坊の地主化が試みられたものであろう。その結果、各坊による発言力が強化され、衆徒の構成にも変化がみられ、坊が中心を占めるようになったものと思われる。

以上、脊振山の施設、祭祀、組織、社領等についてみてきたが、こうした脊振山の宗教的勢力が最も盛んだったのは平安後期から鎌倉時代にかけてであり、河上山座主職相承次第写には、恵鑁僧正の項に「脊振衆徒門徒満諸国」とある（「その他の史料」７号）。内容をそのまま事実とすることはできないが、脊振山の活発な宗教的活動を暗示するものと解釈しておきたい。その後、室町・戦国期になると、国人領主や戦国大名の侵略による社領の減少、堂舎の荒廃等が顕著になる。建武４年（1337）、一色道猷は、甲乙人が兵糧借用の使者と号して、脊振山寺社領に乱入して、乱暴狼藉をすることに対し、近隣の地頭御家人に触れて召し置き、交名を注進するように脊振山衆徒中に命じている（「修学院文書」７号）。康暦２年、脊振山衆徒は脊振山領の半済分の還補が事行かないことを訴え、それに対し今川了俊は「自今以後者、堅く給人等押妨を停止せられ、満山衆徒の領掌を全う」するよう命じている（「修学院文書」12号）。その後天文８～10年頃のものと思われるが東門寺衆徒は筑前国早良郡の「横山六十三丁」の還補を訴えている（「修学院文書」15号）。それによると永享９年（1437）石釜・曲淵を人給に仰せ付けられ、その残りは或いは半済、或いは他寺へ寄進されて、脊振山上に持ち留めるのは僅かに11町５反である、そのため本社・鎮主・その他社頭は荒廃し、満山衆徒は修理を加えず、老若の学侶は田里に逃亡し、僧衆は聚落に散在す、と述べられている。東尚盛が脊振山衆徒中に宛てた書状には「神埼郡東郷脊振山領坂本事、衆徒御散在之上者、帰山之間、可為御公領歟、雖然多聞坊円秀懇望之旨、令披露候、任　上意渡進之候」とあり（「その他の史料」22号）、脊振

山衆徒等が脊振山を離れて、（集落）に散在しているため、脊振山に帰るまでは、山領坂本は没収して公領とすべき處、多聞坊円秀の懇望により、没収を免れている。

この様な脊振山衆徒による集落への散在という傾向は、脊振山領の減少、社頭の荒廃ということだけでなく、坊による坊領支配・地主化の傾向とも関係があろう。また享禄３年（1530）、大内氏は堂舎大破、坊寮転倒に対し、半済（還補）の愁訴は認められないが、脊振山雑掌の両度の愁訴を聞き入れて、脊振山領に対し徳政を実施し、借用米銭・質物・沽却地の還補を命じている（「修学院文書」17号）。さらに天文18年（1549）大内氏は脇山12町を東門寺に沙汰し付けているが、これについてはその後、聖福寺護聖院が異論を申している（「その他の史料」29号）。大内氏滅亡後、筑前国早良郡を支配下に置いた大友氏に対し、脊振山衆徒は大内氏時代半済等により11町５反となった寺領を、小田部宗雲が知行するようになってから、節々押領され、さらに残る寺領も押し取り、請地と称しているとして、11町５反の寺領と早良郡職の安堵を訴えている（「修学院文書」19号）。天正８年（1580）筑前に侵入してきた龍造寺氏に対し、脊振山は東門寺領の（軍勢等）の不入を申請し、そのための祝儀の札銭を横山（脇山）の百姓に賦課している（「結城文書」11号）。貝原益軒の『筑前国続風土記』には「金吾中納言秀秋、当国の主となられし時、国中の寺社領を没収せらる。此時此地の領をも、悉く取上られしかは、いよいよ再興の頼もなく、僧徒も所を去て、つゐに廃亡の地と成ぬ」と記されており、この後、肥前鍋島藩による再興まで、脊振山は荒廃同然の状態が続いたと思われる。

註

1　中世脊振山関係の参考文献を最初に挙げておきたい。

川頭芳雄　1977「天台密教の脊振山」（中野幡能編『英彦山と九州の修験道』名著出版）

波佐場義隆　1977「脊振山修験の歴史と宗教活動」（中野幡能編『英彦山と九州の修験道』名著出版）

大園隆二郎　1980「Ⅵ総括」（『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第４集　佐賀県東脊振村教育委員会）

吉田扶希子　2002「脊振山信仰の一考察」（西南学院大学大学院『文学研究論集』第21号）

吉良国光　1987「背振山の所領支配と村落」（『九州史学』特集号）

吉良国光　1991「筑前国早良郡脇山地方における村落の形成過程について、（附）中世史料集」（福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　脇山Ⅱ』）

吉良国光　1998「中世における水利・耕地の開発・村落の形成」（『九州史学』120号）

2　『続群書類従』所収。

3　以下、引用史料は、本報告に記載の「脊振山関係中世史料集」の名称と番号によることとする。「修学院文書」14号。

4　『肥前叢書』第１輯所収（昭和48年、青潮社）。

5　注１吉田論文。

6　注１波佐場論文。

7　注１吉田論文。

8　『峯相記』をはじめとする性空に関する史料の多くは『兵庫県史』史料編中世巻に収められている。また性空については、注１の川頭、波佐場、吉田論文でも触れられているが、吉田氏には

この外「性空の悟道と霧島」（西南学院大学大学院『文学研究論集』23号、平成16年）とする論文もある。

9　「大悲王院文書」（『鎌倉遺文』7855・20871号）。

10　注１波佐場論文。

11　注１吉良「背振山の所領支配と村落」論文を参照の事。

12　「肥前古跡縁起」。

13　広瀬村の牛方民部丞と上ノ古波新三郎が相論を行っている所領につき、「山上御衆中」「山上御役人」、その中でも特に「永賀法印」が中心になって裁許をしているが、それに対して給主や在地勢力「六十三丁御老中」の代表である田中・鳥飼等が異論を唱え、愁訴を行っている（鳥飼文書23・24号）。

14　これらの点については注（1）吉良「背振山の所領支配と村落」においても述べている。

15　注１大園論文。大園隆二郎『長尾山年譜一・二』貞和４年の項。

16　注１の参考文献『霊仙寺跡』。同書所収の大園論文にも同じような指摘がなされている。

17　「河上神社文書」１号（『佐賀県史料集成』古文書編第１巻）。

18　注１の拙稿を参照されたい。

19　注１の吉良国光　1987「背振山の所領支配と村落」参照。

〔吉良国光〕

Pho.Ⅲ1-1　小川内集落遠景

Pho.Ⅲ1-2
脊振山から小川内・五ヶ山をのぞむ

脊　振　山　年　表　（古代～中世）

和銅2(709)　元明天皇綸旨・院宣（？）（修学院文書）

養老5(721)　元正天皇綸旨・院宣（？）（修学院文書）

貞観12(870)　5・29筑前国脊振山、従五位下を授かる（『三代実録』

天暦2(948)　性空上人、39歳にて日向国霧島より、肥前国脊振山に移り、修行を重ねる
（『峯相記』・『扶桑略記』・『元亨釈書』・『朝野群載』・『今昔物語』）

康保3(966)　性空上人、脊振山を去りて、上洛し、播磨国書写山に移る
（『峯相記』・『扶桑略記』・『元亨釈書』・『朝野群載』・『今昔物語』）

嘉保3(1096)6・29　脊振山上宮住僧睿恒聖人、大蔵種房私領（脇山院）を比叡山坂本のように、下宮堂舎を建立し、殺生禁断の仏地として僧侶を住まわしめ、天下安穏を祈らしめんが為、寄進を種房に依頼。種房四至を限り、狩野である私領を施入する
四至　東　鳥越
西　持井広瀬大隈長峯松
南　□□□□
北　河
「嘉保年中睿恒［　］講堂三所鎮主九間之拝殿並年中御供講行灯油等之免田被相定所也、就夫堀河院勅請無相違、山領被相伏畢」（修学院文書）

天永3(1112)5　脊振山に如法経書写の経塚営まれる（『経塚遺文』）

長承3(1134)9・23　1村が脊振山に寄進される（？）（修学院文書）

康治元(1142)11・16　大勧進僧増忍、法華経12部・止観経1部を書写し、脊振山に経塚を営む（『経塚遺文』）

庚申(1160カ)3・2　僧浄源、脊振山霊仙寺跡に滑石製大日如来座像を刻む（『霊泉寺跡』）

建久年中(1190～99)　頼朝、奥州征伐の御祈祷の為、白旗1流を脊振山に寄進する（？）（修学院文書）

承久3(1221)9・28　筑後大善寺、本定額僧・新定額僧52口を注進する。中に乗台房永青、大教房安常、心融房阿闍梨教弁、巧恵房万恵、教月房尊暁等の脊振山住侶の名前あり
（「筑後御船家文書」）

文永3(1266)6　肥前国検注帳が作られ、基肄南郷の財万名内の除田分として「脊振山大講堂灯油免二丁」あり（龍造寺家文書）

文永9(1272)5・13　関東御教書・関東下知状（修学院文書）

建治2(1276)6　弟子□春・源知、霊仙寺に三重層塔を造立する（『霊泉寺跡』）

年未詳　河上座主職相承次第「恵鑁僧正」項（河上神社文書写）
「脊振衆徒門徒満諸国、灌頂付法四国讃州禅□寺遂之、事相教□□学□俗姓安徳云々」

永仁4(1296)6　河副庄寺社免田事につき、西願代子息脊振山住明準、旧例に任せて安堵の下し文を申請。佐兵衛尉、西願伝続分と云い、明準師匠の譲と云い、注文の旨に任せて安堵する。
注文「六所免田之事、五段（二段は除く、証文別にあり）河副六所宮御輿修理免」
当山（長尾山福満寺）より背振山に赴く住持
僧覚――教弁――明準――準海――準経――円朝――朝桂――亮桂――朝怡
（「長尾山年譜」）

正安2(1300)3・3　法橋長印、以下の所領を大進房栄印・文殊丸に譲るも、大進房栄印去る年12月22日他界の上は、文殊に全てを譲る。文殊丸一期の後は宝珠丸領知すべし（修学院文書）
肥前国脊振山水上本坊・上宮本坊・同政所職・同国袋向嶋免田畠在家等・
筑前国脇山免田畠屋敷在家・同国岩戸郷別所毘沙門寺院主職・同免田在家等、

年未詳3・5　成賢、先師智妙房賢秀より譲られた肥前国神埼庄柳嶋村地頭職を覚秀横領するにつき、博多に上訴する。覚秀去状を出し、成賢、脊振山衆徒の証判を請うにより、脊振山衆徒証判を与える
署名者は脊振山東門寺の衆徒16人（内署判者は7人）
一和上法橋上人位、権律師法橋上人位、法眼和尚位、大法師、阿闍梨、大法師、法橋上人位、法眼和尚位、阿闍梨、阿闍梨、権律師法橋上人位、権律師法橋上人位、大法師、法橋上人位、大法師、阿闍梨（修学院文書）

正和年中（1312～17）早良郡新治宿所炎上し、中山引地屋敷以下の証文を焼失する（結城文書）

正和4(1315)5・2　河上社雑掌禅勝、脊振山住侶善陽律師成秀が河上社神役対捍するを訴える（河上神社文書）
禅勝…河上社幡免は代一度の勤役、成秀田地１町を引き募りながら、今に課役を勤めず
探題…正和３年３月７日・３月21日両度（成秀に）尋ねるも無音。
尻田八郎・神崎田所藤三入道淨西を以て尋問。淨西４月25日成秀請文を執り進める
成秀請文…浮免一町を引き募り、遷宮の時幡を造進するは先規。然るに造営未だ遂行せざるに、申すのは謂われ無し
禅勝所進注文…幡12流、１流別代銭３貫文
探題裁許…成秀申す所、違背の咎を逃れ難し。結解を遂げ先例を守り沙汰せよ

正和4(1315)12・18　脇山政所学円坊長政、怡土庄名主山北孫六三聖が住吉先座主長弁に与力して、脊振山領弥鬼丸名に乱入し、苅田放火刃傷狼藉を行う旨を重ねて訴える。太宰小弐貞経、催促するも無音につき怡土庄惣政所に対し、尋沙汰するため三聖の出頭を命ず（修学院文書）

元亨2(1322)4・27　前対馬守、実成律師成舜の申請により、以下の所領を成舜に宛行い、更に公事所役無き旨、下知す（修学院文書）
神埼庄小崎郷加納下東□□□□瓜里３坪２杖（免田取出）・水町２丈中□□□賀崎郷小津里28坪田□□杖・東郷田地３丈中、以上田畠２□□□

元亨3(1323)5・16　河上宮雑掌、脊振山住侶学円房長政が河上宮最勝講免肥前国三根西郷久能向島正義名内田地３町（明覚町一丁・多平町一町・河太郎町一町）を知行しながら、神役を対捍するを鎮西探題に訴え、探題、恒例の神役に於いては弁勤すべき旨を命ず（「河上神社文書」）

元徳2(1330)8・27　上宮東門寺一和尚、新次郎実房に、一和尚進止分在家で新次郎実房相伝の「脊振山上宮領筑前国脇山院中山北六郎大夫跡名田□□草□５段３杖下作職（此の内１段は井料田に除く）」を安堵する（修学院文書）

年月日未詳　河上社免田につき、国司初任・重任勘料支配注文が作られ、勘料と給主が注進される。中に脊振山が給主を務める所領有り（実相院文書）
「脊振本大六十疋」「脊振勢万四十疋」「脊振正義九十疋」「脊振大万六十疋」

建武元(1334)12・27　脊振山が訴え申していた神埼庄内柳嶋田畠半分を返付する旨の隼人正奉書が「了明禅師庵」に出される（修学院文書）

建武2(1335)10・3　法橋隆舜、以下の所領を代銭20貫文で性如御房に売却する
「早良郡脇山院内脊振山上宮領中山引地屋敷・坊雑舎以下小家等
四至東は岸額、西は谷川、南は山神前植、北は藤四郎屋敷中林外植」
この坊敷、一和尚慈心代に「仏地たるにより、余儀有るべからず」旨、下知状を給わり、この屋敷に付きては、公地無し。但し根本証文は、正和年中早良郡新治宿所焼失の時、炎上に付き、新券文を立つ。公家武家徳政出来するも、一切煩い無し。もし相違有れば、本物一倍を以て口入人共に糺返すべし
署判　（日下）　法橋隆舜（花押）
弟子隆元（花押）
同弟子理渕（花押）
口入人藤四郎大夫（略押）（結城文書）

建武3年(1336)　尊氏、帰洛の時、白旗・願書・筑前国穂波郡内15町地を脊振山に寄進する(？)(修学院文書)

建武4(1337)3・14　一色道猷御判（修学院文書）

建武4(1337)5・15　一色道猷、「諸国散在の甲乙人等が兵糧借用の使者と号して、背振山寺社領に乱入して、濫妨狼藉する由風聞あり、そのような輩が現れたならば近隣の地頭ご家人に触れて召し置き、交名を注進するよう」脊振山衆徒中に命ず（修学院文書）

建武5(1338)閏7・11　筑前国一貴寺山政所朗融、有智山按擦律師代琳智が政所坊領散在の田地を刈り取らんするを訴え、それを受けて、少弐頼尚、草野次郎に狼藉を鎮めるよう命ず（修学院文書）

貞和3（1347）9　玉垂宮并大善寺仏神田免田注文が作成され、脊振山大教坊が筑後国三潴庄藤吉村に１口１町の定額田を所持す（筑後御船家文書）

貞和6(1350)12・28　足利直冬、筑後国板井庄古飯村（古飯次郎資信跡）地頭職（カ）を脊振山に寄進する（修学院文書）

貞和7(1351)2・11　杉原光房、足利直冬の寄進状を宇都宮常陸前司に施行する（修学院文書）

正平9(1354)6　座主増成、河上神社の神役を対捍している免田畠と役人を注進す。中に脊振山僧侶の知行地有り（河上宮古文書写）
「一幡免１町毎度12流、１流別３貫文脊振山善陽律師成秀跡
正和四年五月二日前上総介下知状在之
善陽律師・深教律師・大弐房已上三代不造進之」
「一、最勝講免三町向嶋正義名内脊振山学円坊長政跡
元亨三年五月六日、下知状在之

正応以来未済之」

正平13(1358)6　長基、修正免田以下の事につき、観性譲状に任せて、成敗してほしい旨、重訴状を出す。

正平20(1365)8　綾部備前入道、宝篋印塔１基を霊仙寺に造立する（『霊泉寺跡』）

応安6(1373)11・27　藤原貞氏、重大相伝の当知行地神埼庄東郷上柏原里７坪多宝塔免３反を淨光阿闍梨御房に譲与して貞氏家門繁昌の祈祷を依頼する（修学院文書）
「此田地者、本自脊振山地行之所候上、為免田之間、適多門坊御事、為同法之上、山里異于他近付申候間、相副本証文、永代所譲与申也」

康暦2(1380)10・25　今川了俊、今川仲秋に脊振山領の半済の中止を命ず（修学院文書）
脊振山衆徒訴え申す
脊振山領所々半済大法たると雖も、崇敬他に異なるにより、一円当山に返付すべき由度々成敗に及ぶと雖も、未だ事行かず
今川了俊
事実であれば甚だ然るべからず。自今以後は給人等押妨を停止し、満山衆徒の領掌を全うし、武運長久・凶徒降伏の修法を専らにすべし

永徳2(1382)3　脊振山衆徒、２月13日の御教書に対し、河上社遷宮御幡12流事、脊振山諸役として勤仕する事先規無き旨の請文を出す（河上宮古文書写）
連署者：政所大法師行準・大法師種成・法師成準・阿闍梨明海・権律師兼□成源・権律師長秀・法眼和尚位明舜・経準・貞準等

永徳2(1382)4・1　今川仲秋、河上社御遷宮幡役につき、脊振山衆徒等先例無き由を申すに対し、「先規の段、支証分明につき、善陽律師跡に仰せて、幡役を遂げるよう」命ず（河上神社文書）

至徳元(1384)10・23　今川了俊、背振山善陽律師跡に対し、河上宮宝殿幡12流事、来月20日以前に沙汰するよう命ず（河上神社文書）

明徳3(1394)1・27　阿闍梨安□33回忌のため、子息、妙経３部を書写して、供養塔を脇山院谷山に造立する（『筑前国続風土記拾遺』）

応永20(1413)4・2　明源、若松殿に肥前国三根郡坊所郷宮富名内田地１町（月次転読・公私ご祈祷の脊振山乙護法所大般若経免田）を譲与する（修学院文書）

応永22(1415)3・6　朝弘、川副庄福満寺末寺妙福寺領の事につき定め置く（「長尾山年譜」）
一、朝順分…新合名２坪脊振免５段（北寄）・真鳥ケ里４坪六所免５段（西寄）、妙福寺中ノ坊地
一、朝兼分…新合名１坪２段２丈・同名２坪脊振免５段（南寄）・山門新田三ツ乗り28坪
已上寺領は門徒一同に定め置く所、この旨を守り永代知行あるべし

永享9(1437)　石釜・曲淵を人給に仰せ付けられる。その余は半済、他寺への寄進により、脊振山領は僅かに11町５段となる。講堂本社並びに鎮主其の余の社頭増廃、満山衆徒修理を加えず、老若の学侶田里に逃亡し、上下の僧侶集落に散在する（修学院文書）

長禄2(1460)2・27　六郎三郎、脊振山中宝殿免積善坊分窪名の四至堺と坪付を作成し、積善坊英隼「披見した」旨の裏書を据える（結城文書）

長禄4(1460)3・23　積善坊英亘（？）積善坊抱分窪屋敷内１反（河成２丈・徳田３丈）を明券有るに依り、本主として指し置き、勘料１貫文を受け取る（明光寺文書）

長禄4(1460)3・27　積善坊英隼、窪屋敷に土貢を申し懸けるも、（六郎三郎カ）侘び事申すにつき、差し置き、勘料１貫文を請け取る（明光寺文書・鳥飼文書）

文明10(1478)10・4　脊振山政所坊、博多聖福寺の大内政弘のもとに参賀し、御太刀と百疋を進上する（『正任記』）

文明17(1485)1・11　東弾正少弼尚盛、水上坊に対し、脊振山領肥前国神埼郡柳島村並びに坂本内坊地２ヶ所を安堵し、先例を守り寺役を務めるよう命ず（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）

年未詳2・3　東弾正少弼尚盛、脊振山衆徒等に対し、脊振山領坂本につき、衆徒散在により、帰山の間、公領と為すも、多聞坊円秀懇望により、上意に任せて渡し進らす旨を告げる（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）

長亨3(1489)1・10　脊振山上宮東門寺経所等、火災により、綸旨・院宣・御教書・その外所々の御寄進状等数通を焼失する（修学院文書）

長亨3(1489)1・22　脊振山上宮衆徒等、不慮の火災によりの証文を焼失した文書の紛失状を立てる（修学院文書）
＊紛失状の書判者

一和尚、五戒坊英澄、實城坊貞秀、大教坊恵秀、円光坊秀準、眞蔵坊準暁、金光坊慶宥
外に脇山衆徒の内寂光坊、円周坊、上ノ坊、田　大日堂、乙護法、虚空蔵
＊「西村ノ内山田ト云所ニ、乙護法ノ社跡有リ、別所云所有、其奥山ニ乙護法ノ社有リ此所ニ湛誉上人住山之山候」

明応9(1500)2・17　脊振山上宮領脇山内小笠木村専道名内名頭分事、専道先祖、大教坊に永代売却するも、当専道源左衛門所望により、大教坊真恵、名頭分半分、６貫500文で預け置く（結城文書）

大永5(1525)2・23　源五左衛門尉、脊振山領中山村内上原田２段事につき、某より安堵料として鳥目200文を請け取り、安堵する（結城文書）
「弐段年貢公事真蔵坊江堅固納候て、抱あるへく候」

享禄3(1530)7・21　大内義隆、脊振山領（横山）63町に徳政を行う（修学院文書）
＊背振山領63町事、半済以後度々給人に給付するにより、背振山当知行分は11町５段となり、堂舎大破、坊寮転倒す。
＊半済事、惣国準拠たるにより、申すに及ばず。
＊徳政事、去年より（脊振山）雑掌両度愁訴する。大内氏、法度たると雖も、無力の由申されるにより、徳政を遣わす。
「借用米銭（不謂公物私物）質物并沽却地等事、悉可有還補候」

享禄4(1531)4・18　積善坊澄海、「くほ名之田地主鳥飼新兵衛丞俊久」に対し、「脊振山中宝殿免深渡（カ）くほ名内7段余屋敷・類地」を筋目により、地頭として付け置く（鳥飼文書）

享禄5(1532)2・26　箱田長安・積善坊菊千代丸、連署にて石谷新兵衛に対し、以下の所領を宛行う。

脊振山領中之御宝殿免深渡村内	原田三反田　３段 赤二郎作　２段１丈 上之原之前畠地　２丈	窪　７丈 原渡瀬上之口　７丈 寺之上　１段	
以上９段２丈。此の内窪の内２丈屋敷を除く田数８段２丈相当の年貢諸納所等人足以下馳走して相抱えるべし。			

（結城文書・明光寺文書・鳥飼文書）

天文3(1534)5・15　円覚坊長暁、以下の所領・屋敷を宮丸が子「六郎太郎」に譲る（結城文書）

脊振山円覚坊領中山之村大辻名	薗田１段 森之下２反	計３段
３町分半田半屋敷		

天文5(1536)壬10・17　大弐坊堯満、脊振山領小笠木村之内仙道分７段を仙道源太郎に安堵し、祝儀として米１石を請け取る（結城文書）
＊「脊振山領小笠木之村之内仙道分之事、近年ハ四反之土貢納候、然處當時東門寺領御徳政を依給候、大教坊売地之分、本主仙道進退候間、七段之土貢納候上ハ、於後代重而少も違乱之儀不可有候」
＊「老師秀慶被定置上ハ、我々一通望之由候間、為後代一筆如件」

天文7(1538)6　結城兵部丞房実、「脊振山東門寺大日堂（池田大日堂）之御宝前」に鰐口を奉納する（『筑前国続風土記附録』）

天文7(1538)11・8　背振山東門寺大日堂の大日如来が造立される。
（躰内墨書銘文）

結縁衆	右脇	常楽坊　□海、恵海、栄海、秀慧、円光坊　秀慶　宿室坊澄海、永賀、良暁、真海、貞宥、賢栄、真賢、長暁、堯海中納言
	左脇	箱田殿、宇奈中（井カ）殿、治田殿、山田殿、飯田殿、脇山内旦那、内野諸旦那、小笠木一村旦那
願文「為現世安穏後世善処」		

胎内納入木札銘文
「大村兵庫助多々良興景（花押）氏女多々良午歳」
（『筑前町村書上帳　早良郡四』）

天文8～10年9・10　東門寺衆徒等、横山63町の還補を大内氏被官杉興重・貫武助に願い出る（修学院文書）

天文14(1545)4・1　少弐冬尚、脊振山政所坊に対し、肥前国三根郡内袋向嶋40町を守護不入地と為す旨を告げる（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）

天文14(1545)12・2　成就坊秀兼、小笠木山頭源太郎に対し、脊振山東門寺成就坊領小笠木村山頭抱の１町２段半の内、４反１丈は小中新左衛門に、１反半は（池田）平兵衛尉に分地として認め、年貢諸当以下沙汰して抱えるよう安堵する（結城文書）

天文15(1546)カ12・10　陶晴賢、江上左馬助に以下の３ヶ条を報ず（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）
一、東門寺事、先代以来護聖院存知しており、だだ今究めるべきであるが、年内残り

少ないので、来春相談する。
一、筑前公領事も来春相談する。
一、龍造寺山城守（家兼）跡事、鑑兼が相続している由であるが、理由は追って承る由であるので其の時相談する。

天文17(1548)3・20　積善坊真海、鳥飼新兵衛尉に「積善坊領新兵衛尉方相抱くほ屋敷之内ますほり」を安堵する（鳥飼文書）

天文19(1550)2・4　積善坊真海・箱田長安、鳥飼新兵衛尉・同源五郎に対し、「赤二郎作西之より」土貢不納の由申し懸けるも、鳥飼新兵衛尉、「三段田之内たる由」申し、侘び事申すにより差し置く（鳥飼文書）

年未詳5・16　陶晴賢、江上肥前守に対し、東門寺領筑前国早良郡脇山12町事、去る天文18年東門寺に付け渡した處、護聖院子細を申すも、東門寺に安堵の一通をつかわすので、演説肝要の由を命ず（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）

年未詳5・16　陶晴賢、東門寺衆徒中に対し、筑前国早良郡内脇山12町を去る天文18年７月13日御奉書の旨に任せて、安堵し、委細は江上肥前守から演説ある旨を報ず（『肥前脊振辨財嶽堺論附録一』）

天文19(1550)11・20　与四郎、米１石を納め、東門寺政所坊、請取状を出す（結城文書）

天文20(1551)5・10　法印永賀・成就坊秀兼・円覚坊長暁、「脊振山東門寺領横山六十参町之内円覚坊領中山村之内北田下ヨリ弐反之地」につき、与四郎代々抱来たるも、田中平左衛門子細を申すにより、郡職に於いて東門寺相決し、与四郎所持の地頭安堵状３通明白により、与四郎に安堵する（結城文書）
与四郎所持証文：永正７年12月７日秀準１通
享禄３年12月８日長暁１通
天文９年11月５日長暁１通

年未詳8・9　早良郡東門寺領小笠木山頭祐木源太郎と池田平兵衛尉が竈原１段の下作職について相論有り。筑前国守護代杉氏奉行人これを裁許して、「本主下地儀は源太郎に去り渡すことで落着した」旨、庄崎雅楽允に伝える（結城文書）
＊「依為山頭由緒地、先祖令沽却箱田和泉守相抱候キ、然處去享禄三東門寺領被成御徳政之御下知、何茂対本主還補候」
＊「山頭源太郎由緒之儀、無紛之由、領主成就坊一通在之、徳政之時、可進止事勿論候」

弘治3(1557)1・19　良龍、脊振山水上坊に対し、忰家の武運長久の祈願所として、肥前国養父郡神辺村内国泰寺３町３段を安堵する（修学院文書）

永禄2(1559)2・22　妙西禅尼、板碑を造立する。胎蔵界大日如来の種字あり（『霊泉寺跡』）

永禄2(1559)2・2□　法印永□、板碑を造立する。胎蔵界大日如来の種字あり（『霊泉寺跡』）

永禄2(1559)4・15　鳥飼彦若、「東門寺円覚坊分中山之内後田」２段を百姓地として侘び事申すにより、円覚坊英賢、これを鳥飼彦若に安堵し、祝儀として銀40文目を請け取る（鳥飼文書）

年未詳10・14　法倉、田中左衛門尉と鳥飼新兵衛尉の両名（六十三丁御老中の代表者）に対し、上古波新三郎と広瀬村牛方民部丞相論の件につき、自分から山上御役人に申したいけれども、時儀につき不知案内なので、理非の段は六十三丁御老中存知しているであろうから、山上御役人様に何度も愁訴するよう勧めている（鳥飼文書）

年未詳11・2　寄合中各々、船越備後守入道（法倉カ）に返書を送り、昨日まで山上に愁訴していたが、山上御衆中は余儀なきように仰せられるけれど、永賀法印が御分別無き旨等を報ず（鳥飼文書）

年未詳11・3　脊振山衆徒等、２箇条につき、大友氏に言上する（修学院文書）
(1) 大友氏が支配するようになり、東門寺より祈祷の巻数進上しょうとした所、小田部宗雲、豊後より罷り下り、中途に於いて使僧と出会い、この由申した所、「横山事宗雲私領之儀候間、屋形様言上無用之由」を申され、使僧を追い返された。衆徒の聊爾に非ず。
(2) 横山六三町は前々より寺領の所、大内氏の時、惣国準拠と号して借り召され（半済）、寺得分は僅かに11町５段になった。然るに宗雲知行以来節々押領され、迷惑している上に、残る寺領悉く押し取り、請地の由申す。11町５段の外、別の寺領がないので、衆徒は逐電している。願わくば、大内家知行時のように、11町５段の寺領と同郡職、相違なき様に、御上意を成される様披露を依頼する。

天正8(1580)2・26　脊振山、龍造寺氏に筑前国早良郡内背振山東門寺領不入の儀を申請し、それにつき成就坊永海、成就坊領小笠木村百姓衆に祝儀の御札銭を申し付け、銀子40目を請け取り、見返りとして夫銭を免除する旨、仙道刑部・おくの名源三郎に伝える（結城文書）

説○猶江良丹後守可申候、恐々謹言（候、）

五月十六日　　晴賢（陶）　判

東門寺御同宿御中

(29)陶晴賢書状写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録一』所収文書

東門寺領筑前早良郡脇山拾弐町之事、去天文十八年有衆評、對東門寺被付沙汰候、然處護聖院有申子細之条、付遣之由、雖申候、寺訴之趣、尚種□承候条、東門寺知行不可有相違之由、遣一通候、慥に御演説肝要候、猶江良丹後守可申候、恐々謹言

五月十六日　　晴賢（陶）　判

江上肥前守殿御宿所

(30)霊仙寺跡出土板碑銘文

（『東脊振村文化財調査報告書4集　霊仙寺跡』）

永禄二年

（胎蔵界大日如来種子）　妙西禅尼

二月廿二日

(31)霊仙寺跡出土板碑銘文

（『東脊振村文化財調査報告書4集　霊仙寺跡』）

永禄二年

（胎蔵界大日如来種子）　法印永賀（カ）

二月廿□（二カ）日

諸旦那　　善處

天文七年戊戌霜月八日　敬白

以上左脇中
銘なり

○『筑前国続風土記拾遺』にも載せているが異同あり。この大日如来は今も池田の大日堂に鎮座しているが躰内の銘文は見ることができない。

(25)木像大日如来坐像躰内木札墨書銘文

○『筑前町村書上帳』早良郡の条

大村兵庫助多々良興景（花押）
氏女多々良午歳

○『筑前国続風土記拾遺』にも載せられている。現存するか否かは確認していない。

(26)少弐冬尚書下写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録一』所収文書

肥前国三根郡之内袋向嶋四十町地之事、可為不入之状如件

天文十四卯月一日　　冬尚（少弐）　判

背振山政所坊

(27)陶晴賢書状写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録一』所収文書

追而御状令披閲候

一東門寺事、度々承候、如申□候、先代以来護正院（聖カ）存知候、只今雖可相究候、年内無余日候、来春□（必）可申談候、聊不可有余儀候、

一筑前御公領之事、是又来春可申談候、

一龍造寺山城守（家兼）跡事、同名孫九郎鑑兼当時被相抱之由候、此謂追而可承之由候条、其時可申談候、何も於身不可有余儀候、委細猶期後音候、恐々謹言

（天文一五年）十二月十日　　晴賢（陶）　判

江上左馬助殿御報

(28)陶晴賢書状写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録一』所収文書

當寺領筑前早良郡内脇山拾弐町事、任去天文十八年七月十三日御奉書旨、寺務聊不可有相違候、委細對江上肥前守方申遣候条、可有演

文明十六年
一二月三日　　（東）弾正少弼尚盛　判

謹上　背振山衆徒中

(22)東尚盛奉書写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録一』所収文書

脊振山領肥前国神崎郡柳島村并に坂本之内、坊地弐ヶ所事、任代々御支配之旨、寺務不可有相違候也、然者寺役等守先例可有執（沙汰カ）□□之由、依仰執達如件

文明十七年
正月十一日　　（東）弾正少弼尚盛　判

水上坊

(23)池田大日堂鰐口銘文　○『筑前国続風土記附録』早良郡の条

大日堂ィケダ本編に見えたり、古へ背振山東門寺有し跡也。天文年中大村兵庫助多々良興景といふ士建立せりといふ、堂内に鰐口あり、銘に

奉寄進背振山東門寺大日堂之御寶前、天文七年六月吉日　施主結城兵部亟房實敬白

と記せり、

○『筑前国続風土記拾遺』は「施主結城刑部亟房實」とする。

(24)木造大日如来坐像躰内墨書銘文　○『筑前町村書上帳』早良郡の条

常樂坊　□海
惠海　榮海　秀慧　圓光坊
秀慶　宿室坊　澄海
永賀　良曉　眞海
貞宥　賢榮　眞賢
長曉　堯海　中納言

以上右脇中銘なり

箱田役　脇山内旦那
宇奈中役　内野諸旦那
治田殿
山田殿　小笠一村旦那
飯田殿　爲現世安穏後世

背振山衆徒御中

(17)今川了俊(貞世)書下　○河上神社文書

肥前國河上宮寶殿幡十貳流事、任先規、來月廿日以前、可致其沙汰之状如件、

至徳元年十月廿三日　(今川了俊)沙彌(花押)

背振山善陽律師跡

(18)『筑前国続風土記拾遺』脇山村の条

経塔　谷山に在、宝形の所に梵字三つあり、基石に奉造立塔婆一基事、右志趣者、爲阿闍梨安□卅三回菩提證善□妙経三部亦奉造立供養□如件、明徳五(甲戌)正月廿七日孝子敬白と銘あり

(19)朝弘定置状　○『長尾山年譜一・二』所収

妙福寺領事

一、朝順分新合名二坪背振免五段(依北)真鳥ヶ里四坪六所免五段(依西)妙福寺中坊地等

一、朝金分新合名一坪二段二丈同名二坪背振免五段(依南)山門新田三乗二十八坪

右寺領者門徒一同定所被置也、守此旨無他煩可有永代知行也、仍為後證所定置状如件

應永廿二年三月六日　朝弘判

(20)『正任記』文明十年十月四日条

一肥前国背振山政所坊参賀候、御太刀・百疋進上候、依尾州(陶弘護)之儀、正任披露候、

(21)東尚盛書状写　○『肥前脊振辨財嶽堺論　附録二』所収文書

(肥前国)神崎郡東郷背振山領坂本事、衆徒御散在之上者、帰山之間、可為御公領歟、雖然多聞坊円秀懇望之旨、令披露候、任　上意渡進之候、如此申定候上者、於當方甲乙仁等乱入之義、可令停止候、為衆徒中、被拘御神領候人々、被相背衆儀不足之時、不可及御進退候者、依御(マヽ)住進、其時一途可被申(談)○候、一切尚盛不可存疎儀候、然者自今以後御沙汰、以此旨可申成候、恐惶謹言

座主兼御免執行權律師増成

□

□大法師種成

□法師成準

□衆

□□(阿カ)闍梨明海

權律師兼□成源

權律師　長秀

□眼(法カ)和尚位明舜

□　經準

□師貞準

進上　御□

(14)霊仙寺跡出土宝篋印塔銘文

(『東脊振村文化財調査報告書4集　霊仙寺跡』)

奉彫造

宝篋印塔一基

妙法華経十部普賢

無量義経心

正平廿年乙巳八月日

綾部備前入道□

(15)背振山衆徒等連署請文寫　○河上宮古文書寫

去月十三日御教書、今月三日到來、謹拜見仕畢、抑如被仰下候、河上社□(御カ)遷宮御幡十二流事、爲當山役其沙汰云々□(之カ)條、自當山所役等勤仕事、先規無之上者、□□沙汰仕候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

永徳二年三月□□　　政所大法師行準

(16)今川仲秋書下　○河上神社文書

就河上社御遷宮幡役事、先立被仰候處、無先例云々、先規之段、支證分明之上者、所詮、被仰善陽律師跡、可被遂其役之状如件、

永徳貳年卯月一日　　右衞門佐(今川仲秋)(花押)

一町夜明村額修理田　一町五十町村一命婦　一町一段久重村五節供田

樂人給

一町荊津村　一段安武村大臺鼓免　一段夜明村鬼丸六郎

一段鰺坂村　四段白口村舞師給　一段弟子丸村

舞人免

二段夜明村鬼丸　二段同村源藤太夫　二段同村甲斐公

二段同村萬善　二段荒木村清四郎入道　二段葦塚村小二郎丸

二段夜明村又三郎　三段同村　二段津福村刑部公

二反大隈

貞和三年九月

公文

公文

惣公文

(13)座主増成免田畠等注文寫　○河上宮古文書寫

注進

肥前國鎮守河上社神役對捍免田畠并役人等注文事、

鎮西下知状分

一、幡免壹町毎度十二流、一流別三貫文背振山善陽律師成秀跡、

正和四年五月二日前上總介(北條政顯)下知状在之、

善陽律師・深教律師・大貳房已上三代不造進之、

(中略)

一、最勝講免四町三向嶋正義名内背振山學圓房長政跡、

元亨三年五月十六日下知状在之

正應以來未濟之、

(中略)

右、當社々對役對捍免田畠等、且注進如件、

正平九年六月　日

一口 同村 野中三郎押領也
一口 夜明村 疑然房高良山
一口 同村 開四郎
一口 同村 律壽坊
一口 久重村 禅定坊
一口 津村
一口 清松村
一口 諸富村 性圓坊
一口 同村
一口 高津村 同尼
一口 同村
一口 同村 中村

一口 同村 犬塚入道押領也
一口 同村 界蔵坊同山
一口 同村最勝講田 圓臺坊
一口 同村 性圓坊
一口 藤吉村 大教坊背振山
一口 五十町村 持禅坊
一口 木佐木村 五光坊
一口 間村 即如坊
一口 同村
一口 江嶌村 同尼
一口 蒲池村 開四郎
一口 恆武村 佛成阿闍梨

一口 同村 淨戒阿闍梨
一口 同村 實成法橋
一口 同村 久留米入道
一口 同村 高津尼
一口 同村 □
一口 聖空閑 實成法橋
一口 同村 高津尼
一口 西牟田村
一口 高屋村
一口 白口村
一口 同村 淨性房
一口 荒木村 乘覺坊

一口 同村

已上定額田

二町 鯰空閑 両坂本燈油田
七段 夜明村 同夜燈油田
一町 一木町 正宮仕給
三町 久重村 大祝給
一町 同村 三命婦給
一町 高三潴村 朝妻社免
一町 諸富村 浮殿免
一町 夜明村五反柱一本釘貫十五間 高津尼 五反開四郎同前 但冠木貫木免四反津村
二町 夜明村 橋免
一町三段 藤吉村 御供新田

一町 弘藤 一宮燈油田
六段 時藤 夜燈油田
一町 一木村 三宮燈油田
一町 弟子丸 二宮燈油田
一町 同村 神輿免
三町 江上村 大宮司給
一町 安武村 權宮司給
一町 同村 二命婦給
二町 弟子丸村 小祝給
六段 夜明村 両坂本免
一町 同村 留主社免
五段 夜明村 獅子免
三町 西牟田村 大鳥居免
一町 聖空閑 中鳥居免
一町 鯰空閑 橋免
八段 弟子丸 神宮寺大般若田
二町 弟子丸村久重村 当社修理田
椛門 四郎丸村料所宮郷之時 安泰座主開発也

役由事、

右、如禅勝訴状者、當社幡免者、代一度之勤役也、成秀引募田地壹町、于今不勤課役云々、仍去正和三年三月七日・同廿一日兩度尋下之處、無音之間、以尻田八郎并神崎田所藤三入道淨西尋問畢、如淨西執進同四月廿五日成秀請文者、引募浮免壹町、遷宮之時、造進幡者先規也、而造営未遂行之處、遮令申之條、無其謂云々、爰如禅勝所進注文者、幡拾貳流一流別代銭云参貫文々者、成秀雖申子細、不遁違背之咎歟、然則遂結解、守先例、可致沙汰也者、依仰下知如件、

正和四年五月二日

前上總介平朝臣（北條政顯）（花押）

（11）鎮西下知状　○河上神社文書

河上宮雑掌申、肥前國三根西郷久能向嶋正義名田地三町神役事、右彼地者、當社領也、背振山住侶學圓房長政令知行之、對捍神役之由、依訴申、度々催促之上、以横大路次郎入道西迎、尋問實否訖、如執進去年七月十一日長政請文者、如雑掌解者、乍知行河上宮最勝講免向嶋内三丁、不弁神用云々、何田地事哉、不備進坪付之間、不存知訴訟之趣、召給本解、可明申云々者、正義名内明覺町壹丁、多平町壹町、河太郎町壹町、已上参丁之由、載訴状之處、不注申坪々之旨、長政載請文之条、爲奸曲之上、有陳謝之所存者、可参上之處、于今無音、無據糺明、然則於恒例神役、可令弁勤矣者、依仰下知如件、

元亨三年五月十六日

修理亮平朝臣（北條英時）（花押）

（12）玉垂宮・大善寺免田注文寫　○筑後御船文書

玉垂宮并大善寺佛神免田注文事、（筑後國三潴郡）

合一口一町

一口高三妻村観成房高良山　一口同村上雲坊同山　一口同村沓脱

一口同村大進法橋　一口同村沓脱　一口同村

一口同村内野四郎押領也　一口同村野中三郎押領也　一口犬塚村最勝講田又三郎

（背カ）
肖振
大万六十疋
岸河
貞清四十疋
背振
勢万四十疋
浄鏡房
吉益二十疋
龍造寺
末吉百疋
玉井阿防房
基肆眞松四十疋
薗部法橋
彌弘二十疋
神上近江房
富松八十疋
力安跡在應
力安百疋
□衛入道
小千員二十疋
寛同丸廿疋
隆円房
稲吉二十疋
西泉安徳今蒲池唯心房跡
自藏丸三十疋

以上、近年府案定、初任重任共以支配也、

或府案

背振
本大六十疋
中河
眞松六十疋
國分今山
定力六十疋元吉富
山田
末次六十疋
寂智房
彌末吉八十疋
國分
松武四十疋
不動寺尼
成万四十疋
姫方尺乗房
財万六十疋
河原左衛門
久善二十疋
一樂二十疋
在應跡
諸納二十疋
益田小次郎
福光二十疋
土々呂木或同馬場入道
末永二十疋

背振
正義九十疋
代浄寺次郎入道
彌福武二十疋
恵利小次郎
力武二十疋
講衆募内
變樂五十疋
講衆募内
□力二十疋
多比郎
吉富四十疋
益田大郎入道
五郎丸四十疋
刑部三郎
□永二十疋
於保
安松二十疋
當給主不知之
夕原三郎跡
佐□□衛入遠
豊益六十疋

宮原
得万四十疋
大俟文殊兵衛
快万四十疋
國分甲斐法橋元座主募内
一得二十疋
宮師募内
樂万二十疋
長瀬越後阿闍梨
万力四十疋
坂東尼
下五郎丸四十疋
早岐六郎
西坊所千員
平左近入道
福万二十疋
神崎横大路
小有松二十疋
給主不知之
財法
久布志郎
安光六十疋

以上余分用立定、初任之時加之、但濟否不分明、

（以下略）

（10）鎮西下知状　○河上神社文書

肥前國河上社（佐嘉郡）雜掌禅勝申、背振山住侶善陽律師成秀、對捍當社神

(8)佐兵衛尉安堵状并六所免田注進状　○『長尾山年譜一・二』所収

肥前國河副庄寺社免田等事

西願代子息背振山住明準、任舊例可賜安堵下文之由、請申之間、云西願傳續分、云明準師匠之譲、任注文之旨、賜安堵者也、仍無其煩、可令相傳領掌之状、依仰如件、元家宜承知莫違失

永仁四年六月　日　　佐兵衛尉判（マヽ）

注進　六所免田之事

五段但貳段除之證文別有焉河副六所宮御輿修理免

永仁四年六月　日

自當山赴背振山住持之師證文別有之僧覺―教辨―明準―準海―

―準經―圓朝―朝桂―亮桂―朝怡已上

(9)河上社免田國司初任并重任勘料支配文書案　○実相院文書

○紙継目裏毎ニ「封」ノ墨書アリ

○前闕

□初任并重任勘料支配應□定□

合　但河上宮御免分給主

千員百五十疋

□二郎得四十疋

□五十四疋

□二十疋

基肆眞松四十疋

力安二十疋

□四十疋（富カ）今松武

桂樂二十疋

比力十疋

勢万二十疋

末次六十疋

以上大畧古帳府案定

近年支配定

合

高木千員百五十疋

定樂百八十六疋

本大五十四疋

香万二十疋

矢俣犬丸三十疋

末吉四十疋

貞清二十疋

末永二十疋

晴気小次郎松浦鬼丸五十疋

実松六十疋

安光二十疋

寛同丸二十疋

定樂跡定樂百八十六疋

〰〰 在判

〰〰 在判

(6)霊仙寺跡出土三重層塔銘文

（『東脊振村文化財調査報告書4集　霊仙寺跡』）

石塔婆者大日　　諸仏之降臨願

覚王之三摩耶形　　則幽□称念

満月所尊之一實　　早出六道之□

躰相也所以龍猛　　□□昇九品之

之開鐵□□□□　　覚□仍所造□

先規(カ)於此□□□　　如件

之開瓊(カ)□於上□　　建治二年六月日

證明於此現誠□　　弟子□春

□金鈴宝鐸之□　　源知敬白

□□□不□十方

（注）塔身の四面に阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩・地蔵菩薩の種子あり。

(7)河上山座主職相承次第寫　○河上宮古文書写

○前闕

尋有上人

良厳法印　圓尋与良厳相共別所建立、同菩提院開山、琳譽法印□二年宣旨下、

春勝律師文治二年院宣下、

恵鑁僧正　此代、弘安四年、蒙古渡、抽天下御祈祷、真手山主日祥院金台寺(マヽ)寺建立、背振衆徒門徒満諸國、灌頂付法四國讃州禅□寺遂之、事相教相学之、俗姓安徳云々、

弁髪法眼　弘安十年、自恵鑁被譲、空王坊内供弁髪、此代講堂鐘永仁年中被鋳、恵鑁之付法、

圓雅　元亨四年六月九日、於社頭有大祓、依高木平尾喧嘩、令失済(マヽ)

増恵僧都□元年中、此代尊氏九州下向、依宮方對治、

増妙律師　康永四年六月、増恵ヨリ相続、

（後　略）

承久參年九月廿八日

本定額衆并新供僧番帳任札寫畢、

公文（花押）

公文（花押）

惣公文（花押）

(5)肥前国検注帳案　○龍造寺家文書

肥前國

注進　文永二年乙丑先任豊後法橋慶實檢注分郡郷等事

（中略）

一　基肄南郷

財万名

見作田十三丁二反二〜

損田四丁四反四〜

得田八丁七反二〜

除

河上宮百世々長燈油免三丁

背振山大講堂燈油免二丁

惣社仁王講免一丁　御領佃五反

書生正得分三反　定使二反

残田一丁七反三〜

沽田一丁一反三〜　分銭八百十二文

早米田六反　分米一石二斗

宿料米一斗二升

表引一疋四丈八尺

（中略）

右、先御目代豊後法橋慶實檢注分、注進如件、

文永三年六月　日

〜在判

〜在判

〜在判

〜在判

〜在判

當住　本法乘房鏡圓　新田一丁　木佐木中比別人知行
當住『福春村』　新義釋房慶印　无新田
柳坂　本實乘房榮琳　嚴　新田一丁　高三万『藤吉一反別人』
當住『夜明』　新定蓮房定西　新田一丁　鰺空閑『蜷尻』
當住『夜明』　新即成房良快　无新田
高良山　新戒心房円長　犬墓一丁
當住　新經王房脩範　无新田
當住『夜明』　新道乘房俊増　新田一丁　五十丁元二反
柳坂　新經乘房長榮　无新田
當住高良山〃〃〃　新教大房澄弁『大万』　高三万一丁
當住『夜明』　新明教房民慶澄〃　无新田
理趣分一口
當住　本定法房永秀『一和尚死去』　新田一丁　江上元一反
薬師經一口
高良山　本定陽房琳慶　新田一丁　蒲池村

金剛般若五口
庄内　香蓮房勢舜　新田一丁　清松
當住　義雲房榮久　新田一丁　蒲池
背振山『在坊地』　教月房□榮曉〃　新田一丁　高屋内今勘返
當住　南泉房慶心　无新田　得丸
當住　鏡智房重慶　无新田　湯坪
金光明經三口
□　實円房増心　新田一丁　間村
高良山　教淳房榮禅　新田一丁　高屋今勘返
高良山　円性房榮源　新田一丁　高三万鉾田
觀音經一口
高良山　義円房慶琳　新田一丁　江上斗代
壽命經一口
當住　円智房澄定（カ）　新田一丁　中牟田
已上五十二口内勘返二口
右、注進如件、

背振山　□勢房□□　新田一□
□　□　新田一丁　□
□振山『在坊地』　乗台房永青　新一丁　□不断經田□　草菜
高良山『在坊地』　戒藏坊阿闍梨忠円　新一丁　同經田五反　夜明村□
當　住　圓融坊靜秀　新田一丁　同經田五反（マヽ）　高三万戌
當　住　日乗房印秀　新田一丁　高三万『五反別人』
□　大道房長久『□号大蓮房』　新田一丁　高三万『此内三反□』
柳　坂　道性定房定□『定□□』　修正　新田一丁　荒木村
柳　坂『在坊地』　蓮實房□琳　新田一丁　荒木
高良山　慈觀房慶俊　新田一丁　高三万『同經田五反』
當　住　戒榮房印勢西　新田一丁　高三万
背振山　大教房安常　新田一丁　藤吉□『三反別人』
高良山　定教房永慶　新田一丁　夜明佛師町『五反別人』
當　住　泉靜房慶久　新田一丁　夜明河瀬町
高良山『在坊地』　凝然房道円　新田一丁　江嶋村『又不断經五反』

新定額

寂勝講十口新田十町包別田

背振山『在坊地』　心融房阿闍梨教辨　新田一丁　江上『此内二反引　不断經田五反　本田』久重内』
高良山　寶光房幸慶　新田一丁　高三万
當　住　乗門房安慶　新田一丁　募六反□四反葦墓『新六丁佛村北』
高良山『在坊地』　深勢房慶西　無新田
高良山『在坊地』　教法房慶秀　新田一丁　白口　珍益
高良山　月性房春賀　新田二丁　犬墓
『高良座主』柳　坂『在坊地』　蓮實房嚴琳　新田一丁　垣坂
背振山『在房地』　巧惠房万惠　新田一丁　西牟田
高良山『在坊地アリ』　乗雲房永慶　新田一丁　高三万
高良山　深鏡房春詠　新田一丁　高三□『此内六反三十六東依』
仁王講十三口
當　住　本慈心房宗西　新田一丁　白口　道□□
高良山『坊地アリ』　本安光房湛勝　新田一丁　木佐木

大勧進僧増忍　」

5　五号

「鎮西肥前国背振山　如法書写法花経十二部内
守護者
大悲三所権現竜樹□士　□善帝王八所王子
大慈大行事」護法　□貫□権現
東西満山護法伽監神□（マヽ）　大率□時□冥□処
右意趣非他□偏　為上求菩下化衆生也
康治元年歳次壬戌十一月　十六日□供養畢
大勧進僧増忍　」

6　六号

「鎮西肥前国背振山　如法書写止観経一部
大□三所権現大行事」天尊　東西満山護法聖衆
右志者為大勧進僧増忍　師長尺母及至六道四生
三而　四趣郡類併成仏　得道也
康治元年歳次壬戌十一月　十六日供養畢

大勧進僧増忍　」

7　七号

「鎮西肥前国背振山　如法書写止観経一部
大悲三所権現大行事」天尊　東西満山護法聖衆
右志者為大勧進僧増忍　師長父母及至六道四先
三悪四趣郡類併成仏　得道也
康治元年歳次壬戌十一月　十六日供養畢
大勧進僧増忍　」

註　菩薩形坐像の金銅仏一体が同伴出土

(3)肥前背振山霊仙寺跡出土の滑石製半肉彫大日如来坐像　刻銘
『東背振村文化財調査報告書四集・霊仙寺跡』

「勧進　庚辰三月二日
僧浄源」

(4)筑後高良社定額衆注文　○筑後御船家文書

本定額十五口□

（五）その他の史料

(1)肥前背振出土の滑石製経筒　刻銘『経塚遺文五六』

「天永三年（マヽ）辰壬五月
如法経如理
願以書写□仏現世无□□
致菩提法界　」

(2)肥前背振経塚（一―七号）出土の銅製経筒　刻銘
『経塚遺文』一五七―一六三

1　一号経塚

「鎮西肥前州背振山如法　書写妙法蓮華経十二部内
□権現大行事し天尊　東西満山護法聖衆
□為一花一礼諸大　法主現世安穏後世芽也
康治元年歳次壬戌十一月　十六日甲辰供養畢
大勧進僧増忍　」

2　二号

「□（鎮カ）西肥前国背振山　如法書写法花経十二部内
大悲三所権現□□　无子諸善□无子
大□大行事し護法　東西満山聖衆
□二類　先正□滅迺等□道
□実厳慈父　悲母□
康治元年歳次壬戌十一月　十六日甲辰供養畢　」

3　三号

「鎮西肥前州背振山　如法書写法花経十二部内
□三所権現□　東西満山護法□
□　」

4　四号

「鎮西肥前州背振山
□　□妙法蓮華経十二部内
□　□西満山護法聖衆
□　□徳道也
康治□　□供養畢

通、令披露候、雖爲御法度、既各無力相□(存カ)之由、被申之条、被遣徳
※政候、然者、借用米錢(不謂公物私物)質物并沽却地等事、悉可有還補候、仍
法度物一巻(封裏)進之候、守此旨、被全進止、弥被抽御祈祷精誠、可
被專修理造營等之由、被仰出候、恐々謹言、

(異筆)「享禄参庚寅」七月廿一日　　(杉)興重(カ)（花押）
(野田)興方（花押）

東門寺衆徒(カ)御中

※の箇所に大村重継の物と思われる裏花押あり。

(18)良龍安堵状

任吉日、令啓札候、仍爲忰家武運長久之祈願所、養父郡神邊村内國
泰寺参町三段地事、如先例、御知行肝要候、恐惶謹言、

(異筆)「弘治三年丁卯」
正月十九日　　良龍（花押）

背振山水上坊
玉床下

(19)背振山衆徒申状案

背振山衆徒等謹而言上
一筑前國之事、豊州(大友氏)御下知罷成□(候カ)刻、從□(東カ)門寺、御祈祷之巻數、令
進上候之處、小田部宗雲、從豊州被罷下候、於中途使僧參合、如
此之由申候之處、横山之事、宗雲私領之儀候間、奉對　屋形様、
言上無用之由被申、使僧を被返候之間、依其儀、終不致言上候、
衆徒非聊爾候、
一横山六拾三町者、前々悉寺領候之處、防家(大内氏)御代、被号惣國准據之
儀、被借召、纔寺徳分拾壹町五段罷成候、然處、宗雲知行已來、
節々押領之條、迷惑仕候之処、結句相残寺領悉被押取、爲請地之
由、被申候、右之拾壹町五反之外、別所寺領無之候間、衆徒逐電
迄候、仰願者、從防家如有來候、拾壹町五反之地、同郡職、無相
違之旨、被成　御上意候之様、御披露奉恃候、誠恐誠惶敬白、

拾一月三日

大講堂免拾八町付仁王講免　　圓光坊
五月五日祭礼免、年頭七ヶ夜燈油免　　秀準同
鐘樓免貳町　石釜六町、曲淵三町　　眞藏坊
九間拜殿并年中廿五ヶ度御供・元日祭礼　　準暁同
　　金光坊
　　慶宥同
　　彌鬼廿七町
乙護法寶殿免十八町　　寂光坊
三郎護法寶殿免　田々良村參町　　圓周坊
箕護法寶殿免　峯村三町　　上ノ坊
夏中燈油免　野中參町　　梅木田庄や　次兵衛
右、六拾三町之内廿五名各ヨリ號參町分下便給定置也、
右、此數通之證文焼失候事、僞之儀申候者、背振三所權現可蒙御罰候、

長享三年己酉正月廿二日

一和尚
五戒坊　英澄判
實城坊　貞秀同
大教坊　惠秀同

外ニ　脇山衆徒ノ内
池田　大日堂
乙護法
虚空藏

西村ノ内山田ト云処ニ乙護法ノ社跡有り、
中野郡ノ内　別所云所有、其奥山ニ乙護法ノ社有此所ニ
　　湛譽上人住山之由候、
穂浪郡ノ内　白旗云所ニ、睿恒上人住居故号白旗上人と、（後欠）

（17）大内氏奉行人連著奉書

當山領六拾參町事、半濟已後、度々被付給人、於□拾壹町五段依當知行候、堂舍及大破、坊寮令顚倒候、半濟事者、爲惣□（国カ）御準據之条、先以不及申候、徳政事□（カ）後之由、去年以來、以雜掌、兩度愁訴之

自他之願望、令成就者也、誠恐誠惶謹言、

菊月十日　　東門寺衆徒等（花押）

杉民部大輔殿（興重）

進上　貫越中守殿（武助）

（16）東門寺文書紛失状写

筑前國背振山上宮東門寺經所等事

綸旨院宣御教書其外所々之御寄進状數通雖有之、長享三歳己酉正月拾日、不慮之火事、一和尚五戒坊紛失之間、少々注之、

元明天皇　一通　綸旨院宣　自和銅貳年草創、長享三年己酉迄、七百八十四歳

元正天皇　一通　綸旨院宣　自養老五年草創、長享三年己酉迄、七百七十四年

一通　尊氏將軍　自建武三年九州御下向之時、

建久年中、為奥州凶徒征伐御祈祷、御寄進白旗一流其御□例以當山護法御白旗一流并三ヶ村□穂浪郡宮吉拾五町同教書、長享三□（献）百五十七年、

一通　一色沙彌道献（御）判　自建武四年三月十四日、長享三年迄、百五拾年、

一通　關東御教書　自文永九年五月十三日、長享三年迄、百五十八年

一通　鎌倉殿御下知　同年相模守平朝臣御判　左京権大夫平朝臣御判

一通　兩油山

一貫首大藏朝臣種房謹言

奉施入、相傳私領□（狩カ）野□所事、

在、管早良郡宇□田□□（内カ）野者、

一　東限鳥越、西限持井廣瀬大隈長峯松、南限□、北限河、不知木原安石庄境、

右、件狩野□□先祖相傳私領也、然背振山上宮住僧睿恒聖人、圖彼野御山北坂本爲建立下宮并堂社、永禁斷殺成佛地（生脱カ）、令住僧侶、奉祈天下安穏之由、被觸語此由於種房、是依權現之威驗嚴重、永所奉施入彼野也、自今以後、世々代々、更不可致違失、仍注施入帳、謹言、

嘉保三年六月廿九日　　貫首大藏朝臣在判

筑前國早良郡之内横山、原□（田カ）種房所望、令開發、號□（横カ）山六十參町、背振山東門寺上宮堂社并講行祭礼燈油等之事

大馬上廿七町

本社御寶殿免七町

響□真提高臨前者江□濯□□業(煩悩カ)□□畏以威光照
秋津洲之外、三所權(カ)現□(庭カ)豊葦原之内、□□(爾来カ)仁王十五
代、(異カ)□國御退治之御時□□皇宮(神宮カ)□高良(並カ)・住吉、於此□祈請、□實(其カ)
歴然也、加之、桓武天王□傳教舛法□(慈カ)覺智證御□(入カ)佛法
之□懐(本カ)□祈請感□(應カ)一通交之□(成カ)就之地、然則堂塔佛閣
布□□舎□並學一實□□静□(寧カ)護持修□上乗
□□安泰精誠□武安全□利益衆生□所□(也カ)、
一元□□□(明天王カ)□御時、當山湛譽上人□□加持速疾□(有カ)感應云々、
宗□□被□□□(仰付カ)承(長カ)三年九月廿三日一村之地有御寄進、

○後闕、次ノ第一五号文書ニ続クカ、

(15)東門寺衆徒申状　　斐紙

○前闕、前ノ第一四号文書ヲ承クルカ、

右大將頼朝、建久年中、御白旗有御奉納、□後建武年中、(足利尊氏)等持院殿
御歸洛之□例、是又御白幡御願書并筑前□之内十五
丁有御寄進云々、

横山□□(六十カ)餘町之事、嘉保年中、睿恒□(カ)以來發講堂三所鎮主九
間之拜殿并年中御供講行燈油等之免田、被相定處也、就夫、堀河院
勅請無相違、山領被相伏畢、然處永享九年、石釜・曲淵□(入カ)給被仰付、
其餘或者被成御半濟、或者他寺江依有御寄進、山上持留僅十一丁五
反也、當此時、講堂本社並鎮主其餘社頭、増癈損年、襄零落日、然
則滿山衆徒等、不可加修理、遅々春朝者一鉢底恒空日暮、冷々冬
夕者三衣蓄至疎夜明、志雖堅於金石、力既輕於塵埃、更有何便遂再
興望哉、剰老若學侶逃亡田里、上下之僧衆散在聚落、晨鐘夕梵誰人
勤之、焼香供花何輩修之哉、仰願者、横山六十三丁之支、這般被成
御還補者、構松壖柏城瑞籬、專蘋蘋薀藻之礼賽、敬白毫金口之尊容、
礼丹菓□□(青蓮カ)之妙相、神事佛事、不可有怠者也、若然者、所祈者文官
武職之静寧、顯教密教並修、所稀者天下海内之安泰、然時者、三所
權現之神風轉盛、一天之邪雲爲之収、威力神通之惠日倍明、四海之
波浪爲之穏、當爾時、滿山衆徒等、蒙佛陀護念預神明之冥助、萬春
之花綻東風朝、開戒定惠之榮花、千龜月傾西山暮、感法報應之實菓、

(11)藤原貞氏田地譲状

奉譲與　淨光阿闍梨御房所

在肥前國神崎庄東郷上柏原里七坪、多寶塔免參段事

右田地者、貞氏重代相傳、當知行無相違地也(カ)、仍此田地者、本自背振山知行之所候上、爲免田之間、敵多門坊御事、爲同法之上、山里異于他近付申候之間、相副本證文、永代所譲與申也、子々孫々全知行、貞氏家門繁昌、預祈祷候者、悦入候、若貞氏子孫中、自然致違乱煩之輩候者、此状爲本證文、可被申行罪科候、仍譲状如件、

應安六年十一月廿七日　　藤原貞氏（花押）

(12)今川了俊(貞世)書下

背振山衆徒等申、當山領所々半濟事、凡雖爲大法、依崇敬□□□□(異他、可被カ)返付一圓當山之由、度々雖及□□(成敗カ)、未事行(云々)、爲事實者、冥慮頗逗渕(カ)者歟、太以不可然、所詮、於自今已後者、堅被停止給人等押妨、全満山徒之領掌、且奉祈武運長久之茄運、且可專凶徒降伏修法之旨、可令成敗賜状如件、

康暦貳年十月廿五日　　沙彌(今川了俊)（花押）

右衛門佐殿(今川仲秋)

(13)明源田地譲状

譲與　　若松殿所

肥前國三根郡坊所郷宮富名之内田地壹町事、背振山乙護法所大般若田也、殊致月次轉讀之、可致公私御祈祷、

右免田者、明源當知行無相違、依有志、所譲與若松殿實也、無他妨、可令領掌状如件、

應永廿年卯月二日　　明源（花押）

(14)東門寺衆徒申状

□

□□國(肥前カ)背振山東門寺　　衆徒等申

□當山(右カ)者、佛法僧□依戒定惠□練之□□也、□□本□龍樹三所權現鎮□者乙護(カ)□童子□願後□巍□風傳□淨

(9)椙原光房奉書

背振山御寄進地筑後國板井庄古飯村古飯次郎資信跡地□□(頭職カ)事、任去年十二月廿八日御寄附之状、可被致其沙汰之状、依仰執達如件、

貞和七年二月十八日　　(椙原光房)散位（花押）

宇都宮常陸前司□

(10)長基重申状

長基重言上

欲早任觀性讓状承伏旨、蒙御成敗修正免以下事

右、如善阿千代益丸謀陳者、取詮彼免田者、自本主觀性、令讓與子息青蓮之条、文保二年十一月十六日讓状明白也、云々、此條、失爲方申状也、其故者、文保二年十月十日、二郎仁乍讓與、以何故、十一月十六日中間以四十日内、可改返哉、眼前謀書也、觀性青蓮手跡判形多之間、被召出、有枝見(マヽ)之時、謀書段、可露顯者也、次青蓮依年貢對捍、被闕所、云々、闕所之地、何所哉、鶴若女當知行之所々、皆以青蓮之跡也、号一和尚御下知者、安堵之事歟、鶴若女幼少之間、依不支申、被成之歟、次、二郎知行事、無跡形不實也云々、此條号文保二年二月讓状者、何状哉、不存知、※(紙継目)構今案之間、諸事皆以非據也、二郎不知行云々、此条、不知巨細申状也、其故者、二郎彼田地當知行、依無相違、本物返仁、栗尾之惣三仁、雖令入置、探(マヽ)政之時、取返畢、有御尋、不可有其隱者也、次、又五郎連署云々、此條、爲親之身、申之日、何又五郎可背申哉、次同状云、雖令現存、可任父祖意条、定法也、云々、此條、二郎之咎、何事哉、存命之間者、爲祖父親父、致忠勤之条、脇山甲乙人等、皆以令存知者也、同状云、員外非分之鶴若女、不顧觀性青蓮之素意、以数十年不知行地、奇(マヽ)附他人長基条、死骸敵對罪責不軽云々、此條悪口也、於鶴若女者、依爲二郎一子、當山權現堂宮司職、同屋敷田畠等令相傳、專寺社佛神事等、公家武家所致御祈祷也、何死骸敵對之由、可令過言哉、然早被處悪口重科、迄長基者、任道理、爲蒙御成敗、重言上如件、

正平十三年六月　日

※の箇所に継目裏花押あり。

元亨二年四月廿七日

前對馬守（花押）

(5)上宮東門寺一和尚某下文

一和尚（花押）

下　新次郎實房所

背振□□（山上カ）宮領筑前國脇山院□□（中山北カ）六郎大夫跡名田□□草□□（伍カ）段

參杖（此内壹段者除井料田）下作職事

右地者、自往古、一和尚□（進）止在家分也、□實房之□（相カ）傳代□（々カ）依無

相違、或公事以下致忠勤、或□□□井料田之上者、□可預御下知旨

申之間、所宛□（行）也、迄子□（々）孫々、令進退領掌、於年貢以下公事者、

守先例、至井料□役□（者カ）、可全人夫雜事之狀如件、

元徳二年□（八カ）月廿七日

(6)隼人正某奉書　楮紙

背振山申、肥前國神崎庄内柳嶋田畠半分事、所被返付也、存其旨、

可令下知給之由、被仰下候也、仍執達如件、

建武元年十二月廿七日　　隼人正（花押）

謹上　了明禅師庵

(7)一色道猷（氏範カ）書下案

諸國散在甲乙人等、号兵粮借用使者、近日乱入當山寺社領、致濫妨

狼藉之由（カ）、普有其聞、如然之輩、令見形者、相觸近隣地頭御家人、

且召置其身、且可被注進交名也、仍執達如件、

建武四年五月十五日　　沙彌（一色道猷カ）

背振山衆徒中　　御判

(8)少弐頼尚書下

筑前國一貴寺山政所朗融申、有智山按擦律師代琳智、擬苅取政所坊

領散在田地由事、訴狀副書如此、早任御事書、莅彼所、且鎮當時狼

藉、且載起請詞、可注申也、仍執達如件、

建武五年閏七月十一日　　大宰少弐（頼尚）（花押）

草野次郎殿

一和上法橋上人位在判
權律師法橋上人位
法眼和尚位
大　法　師
阿　闍　梨
大　法　師在判
法橋上人位在判
法眼和尚位
阿　闍　梨
阿　闍　梨
權律師法橋上人位在判
權律師法橋上人位
大　法　師在判
法橋上人位
大　法　師在判

阿　闍　梨在判

（紙継目ヨリ欠）

(3)少弐貞経召文

筑前國脇山政所學圓房長政申、怡土庄名主山北孫六三聖、令與力住吉先座主長辨、亂入當山領彌鬼丸名、致苅田放火刃傷狼藉由事、重申状如此、先度催促之處、無音云々、所詮、爲尋沙汰、今月中、可被催進彼輩候、仍執達如件、

正和四年十二月十八日　　大宰少貳（貞経）（花押）

怡土庄惣政所殿

(4)前対馬守某下知状

□□（肥前カ）國神崎庄小崎郷加納下東□瓜里三坪二杖免田取出水町二丈中、□□次餘残分賀崎郷小津里廿八坪田□杖東郷田地三丈中、彼是田畠貳□實成律師成舜、自本領知之上者、可□由申之間、宛行之、于今知行雖無相違、□後可賜御下知由、被申之間、所令下知成□聊不可有公事所役、早存其旨、可被□知不輪、仍下知如件、

所爲質券、對山頭、從池田所契約」時、右旨趣可相答儀、無其届条、池田」所申非無一儀候歟、所詮彼下地職之」

（中　　欠）

請取之下地儀（本主）、對源太郎可去渡由」被申候、兩方共以任下知之由申之、落」着候、尤肝要候、此由能〻可申之」旨候、恐〻謹言、

八月九日　　長遠（花押）

連祐（花押）

長益（花押）

庄崎雅楽允殿（御宿所）

○継目裏に花押あり

○袖を切除

（四）修学院文書

(1)法橋長印置文写

肥前國背振山水上本坊并上宮本坊、同政所職、同國袋向嶋免田畠在家等、筑前國脇山免田畠屋敷在家、同國岩門郷別所毗沙門寺院主職、同免田在家等者、大進房榮印并文珠丸（仁）讓与之處、去年十二月廿二日、榮印他界之上者、文殊（二）悉無残所讓与者也、雖然、文殊丸一期後者、寶壽丸可領知行、縱又、雖爲存日、文珠丸有不調不法事時者、寶壽丸可領掌也、存先非、誠向後上者、寶壽丸宜依長印之存知、爲後日、所誠量（置カ）如件、

正安二年三月三日　　法橋長印（判）

(2)僧成賢申状案并東門寺衆徒連署証状

肥前國柳嶋村地頭職事、依爲先師智□（妙カ）房賢秀重代相傳之私領、讓与□□（成賢カ）□助房覺秀致非分押領之間、捧賢秀讓状、於博多、經上訴之刻、覺秀頗無□、就出避状、成賢當知行無相違、然者、任彼讓状等、爲將□、欲給衆徒證判、仍状如件、

□（正和カ）三月五日　　僧成賢

賢秀讓状并覺秀避状明白之上、當知行無相違之間、爲後證、

衆徒等加署之、

永正七年庚午」十二月七日秀準一通、同享禄三年庚寅十二月」八日長暁一通、同天文九年庚子十一月五日同」長暁一通、彼両三通明白之上者、与四郎申所」無紛者也、於然者、任地頭案堵(マヽ)状之旨、年貢」公事諸天役以下堅固遂其沙汰、可相拘也、」仍為後代證文之状如件

天文廿年辛亥五月十日　　法印永賀（花押）
成就坊秀兼（花押）
圓覺坊長暁（花押）

与四郎所へ

（11）成就坊永海子請取状（25.4×42.6）　楮紙　竪紙

（端裏書）「證文状　仙道刑部おくの名源三郎両人参　成就坊永海」

筑前之國早良之郡之」内背振山東門寺領、」至竜藏(マヽ)寺殿様ニ、不入之」儀從一山被申請候条、」成就坊領小笠木之村」百性衆御祝儀之御札銭」申付候間、就其夫銭」之事、於永ゝニ扶持仕候、」然者銀子四十め慥請取」申候、於向後、別儀有間」敷候、仍為後日之一筆如件

天正九年庚辰（かのへたつ）二月廿六日　　仙道刑部・おくの名源三郎参　永海（花押）

（12）長遠・連祐・長益連署状（27.6×96.4）　楮紙　継紙（三紙）

（端裏書、切封墨引）「└──┘」

就早良郡東門寺領小笠木山頭」祐木源太郎与池田平兵衛尉論所壹」段号竈原下作職事、源太郎申分者、依」爲山頭由緒地、先租令沽却箱田和泉守」相拘候キ、然處去享禄三東門寺領被成」御徳政之　御下知、何茂對本主還」補候、池田事、山頭親類之条、爲憐愍」預置候、於于今者、可進退之由候、池田」申分者、右論所山頭由緒無紛候、然者」御徳政之砌、對山頭租母、出安堵料、相拘」之處、今違變之儀、無謂候、聊非憐愍」（紙継目）由候、重而源太郎申分者、依御徳政、」所ゝ御還補之儀、領主・名頭各へ礼儀之」時、親類中不限池田爲合力少分出銭候、」曾而非安堵料之由候、兩方訴陳次第」遂披露之處、被申分者、山頭源太郎由」緒之儀、無紛之由、領主成就坊一通在之」徳政之時、可進止事勿論候之處、于今池田」拘來候事、安堵料故候歟、乍去於安堵」料者、可取置一通儀候、無其儀之条、」源太郎如申候、各へ礼儀可爲合力候歟、」此段互口状之条、不分明候、仍近年彼」論

（端裏書）
「仙道源太郎所へ　堯滿（カ）」

為祝儀壹石請取也

筑前國早良郡背振山領」小笠木之村之内仙道分之事、」近年ハ四反之土貢納候、然處」當時東門寺領御徳政を依給候、」大教坊賣地之分、本主仙道」進退候間、七段之土貢納候」上ハ、於後代重而少も違亂」煩之儀不可有候、子ゝ孫ゝ至、」無他妨相拘、有限土貢少納所」以下、堅固勤仕可相拘者也、」老師秀慶被定置上ハ、我ゝ」一通望之由候間、為後代一筆」如件

天文五年丙申壬十月十七日　大貳坊堯滿（花押）

(8)成就坊秀兼安堵状（25.5×37.6）　楮紙　竪紙

筑前國早良郡背振山」東門寺成就坊領小笠木之村」山頭拘壹町貳反半、此内」爲分地四反一丈小中新左衞門、」一反半平兵衞尉（池田）、何茂年貢」諸（マヽ）當以下遂其沙汰、代ゝ任筋」目、無他妨、可相拘也、若對地頭」於不（マヽ）儀者、可（マヽ）新者也、仍爲後日」證如件

天文十四年乙巳十二月二日　成就坊秀兼（花押）

小笠木　山頭源太郎所

(9)東門寺政所坊請取状并与四郎注文（25.4×37.9）　楮紙　竪紙

請取申畢

天文十九年十一月廿日

東門寺政所坊（花押）

（裏文書）
「　注文

米壹石

以上

与四郎（花押）」

(10)法印永賀他二名連署宛行状（26.2×37.4）　竪紙　楮紙

（端裏書）
「證文之状　東門寺」

筑前國早良郡之内背振山東門寺領」横山六十參町之内、圓覺坊領中山村之内北田」下ヨリ貳反之地之事、与四郎代ゝ拘來候処、」田中左衞門尉与申結子細、於郡職、東門寺」相決候之処、与四郎申分者、去

筑前國早良郡之内、背振山領」中山之村之内上原田貳段之事、爲」
安堵料鳥目貳百文請執候、仍永」代相拘候て、貳段年貢公事真藏」
坊江堅固納候て、拘あるへく候、同上の」諸天役以下并夫銭等、
是又涯分勤仕候て、可然候、至此上無沙汰無ニ、此方」親類にて、
違覧(マヽ)之儀あるましく候、」仍爲後□(證)状如件

大永五年乙酉二月廿三日　　源五左衛門尉（花押）

□（花押）

(5)箱田和泉守長安・積善坊菊千代丸連署宛行状（25.8×37.5）　楮紙　竪紙

(端裏書)「一筆　石谷(釜カ)之村新兵衛所へ　積善坊代箱田和泉守」

筑前國早良郡背振山領之内、」中之御寶殿免深渡之村之内、原田」參
反田參段、赤二郎作貳段一丈、」上之原之前畠地二丈、窪七丈、原
渡」瀬上之口七丈、寺之上壹段、以上九段」二丈、此内窪之内二丈
屋敷除、田数」八段貳丈相當之年貢諸納所等」人足以下、堅固(カ)ニ馳
走候て、無他妨、」永代可相拘者也、如此雖定置候、年貢」諸濟物
於無沙汰者、可政(マヽ)者也、仍爲後日」一筆如件

享禄五年壬辰二月廿六日　　箱田和泉守長安（花押）

石谷(釜カ)新兵衛所へ遣也　　積善坊菊千代丸

(6)円覚坊長暁譲状（31.8×51.7）　楮紙　竪紙

(端裏書)「辻名譲状　六郎太郎所へ　　圓覚坊長暁」

筑前國早良郡　背振山圓覚坊」領中山之村大辻名薗田壹段、森之」
下貳反、合參段并三町分半田半」屋敷共ニ宮丸か子六郎太郎譲渡所」
実也、然者年貢小納所まんさう(万雑)」公事等、相勤仕、無地之(マヽ)好、可相
拘者也、」右參段之内、薗田壹段年貢之事、」當社まつり(祭)當候する歳
ハ、為御供米」可指置候、如此相定候上ハ、六郎太郎子ゝ」孫ゝニ
至、無相違可相拘候、自然此方」為子ゝ孫ゝ、違亂煩之儀候者、此
證文」任之旨、「御」(追筆)役及も致披露、無相違」可相拘者也、仍為後
代一筆如件

天文參年甲午五月十五日　　圓覚坊長暁（花押）

(7)大弐房堯万安堵状（25.7×42.6）　楮紙　竪紙

屋敷ノ上、七丈田
一所　壹段此内こうて壹丈
かきのうち
一所　貳段壹丈此内壹丈御供田
をのはる
一所　壹段
同くほノ内原田之事
三段田
一所　三段此内あか二郎作水口ノヨリ同三反ノ内也
同坪西之方三丈御倶田也
あか二郎作、下ノヨリ
一所　貳段
原ノまへ
一所　壹丈

（紙継目）

まつの木田
一所　壹段
かわら田
一所　貳段此内壹反川成
下はすハ
一所　三丈
西ノ原
一所　三丈
山つくり
一所　四丈西ノヨリ、コレハ不也
下てま
一所　壹丈ひらき
田畠二丈　田ふちヲかぎり（限）
長禄二年（辛巳）三月廿七日　六郎三郎（略押）
（紙継目裏書）

「彼坪付令（マヽ）所披見也
長禄二年（辛巳）三月廿七日　積善坊隼英□（花押）」

○長禄四年の干支は庚辰。

(3)大教坊真惠売券案（25.2×32.2）　楮紙、竪紙、

背振山上宮領

筑前國早良郡脇山之内小笠木之村專」道名之内名頭分之事、專道先租者」大教坊江永代賣渡所也、雖然、依當」專道源左衞門所望候、彼名頭分半」分之事、代六貫伍百文ニ預置所」実也、若自然對大教坊、不儀緩怠」儀候する時者、彼本物返候て、此方（カ）より」知行可致也、見（マヽ）門高家如何成徳世（マヽ）」興行候共、相違有間敷候、山道子（專カ）ゝ」孫ゝ可相拘者也、仍状如件、

明應九年庚申二月十七日　大教坊真惠有判

(4)源五左衞門尉・某連署安堵料請取状（26.6×32.2）　楮紙、竪紙

（端裏書）
「永代状　源五左衞門尉」

（三）結城文書

(1)法橋隆舜売券（30.8×69.8）　楮紙　継紙（二紙）

沽渡進

筑前國早良郡脇山院内背振山上宮領中山」引地屋敷并坊雑舎已下小家等事

四至限東岸額限南山神前植　限西谷川限北藤四郎屋敷中林外植

右件屋敷者、隆舜為師資相承之地、知行無相違、而」依有要用、代銭貳拾貫文限永代性如御房ニ所」沽渡進之実也、此上者、迄盡未來際、有進退領掌、」無他妨、可令領知給者也、全以不可有後日返改之」儀、且彼坊敷者、先一和尚慈心代ニ為佛地之間、不可有」豫儀之旨、賜下知状之間、付彼屋敷、□（聊）母無公事之」地也、但根本證文者、去正和年中ニ、早良郡新治宿所」焼失之時、令炎上之間、立新券次第（マヽ）明鏡也、縦自」公家・武家御徳政之法、雖出來、於此地者、一切不」可成煩、將又不慮之外、有相違之時者、」以本物一倍、廿日中ニ口入人共ニ可令糺返者也、」背如此自筆誡状、云隆舜之弟子同法、云親類縁者等、付惣別、聊（母）成違乱申異義（マヽ）族出來之」時者、可為不孝仁之間、可被申行罪科也、仍為後日」證文沽券状如件

建武二年乙亥十月三日　　法橋眼隆舜（花押）

弟子隆元（花押）

同弟子理渕（花押）

口入人藤四郎大夫（略押）

○地・奥切除、後欠の可能性あり。※の箇所に隆舜の紙継目裏花押あり。

(2)背振山中宝殿免積善坊分くほ名堺・田数注文（27.6×62.0）、

楮紙（斐紙混り）、継紙（二紙）

筑前國早良郡背振山中寶殿免」積善坊分くほ（窪）の名堺之事、北者節供田」ノ大かき（垣）を堺、東者ミち（道）をかきり（限）、南者筧ノ」ミそ（溝）の築地をかきり（限）、上者まるくまのひらを」かきり（限）、むかへハ原ミそ（溝）のミつはつしをかきり（限）、」西ハ原ミそ（溝）のミそ（溝）ふちをくたり、同くほ（窪）の」名田数坪付之事

(9)鳥飼万休濱銭請取状（24.4×12.5）楮紙　竪紙

且納鳥飼之村濱銭之事、

合銀七十八文目者

右、為春納、所請取申如件、

永禄二年四月廿日　鳥飼對馬入道　万休（花押）

庄屋宮内丞殿

(10)与三郎書状（22.5×38.5）楮紙　竪紙

（前欠）

可申候、其方さま（様）も我等かため（為）」大事之御智（マヽ）人之事にて」御座候、

此方之客衆之儀も、」智人之儀候間、外分実儀」にて候間、事行申

候やう奉」頼候、唯今彼者ニます持せ進候、万恐惶謹言、

三月七日　与三郎（花押）

（奥ウワ書）「（切封墨引）（博多）はかた綱場町　与三郎　鳥飼對馬入道殿参」

人々御中　」

(11)鳥飼俊久・馬田久次・結城庚実連署申状案（24.3×36.8）楮紙　竪紙

（端裏書）「案文」

熊令啓上候、仍當郡中諸納銭之事、」何茂清料一和利束之辻以諸郷

被致」其答候之処、限横山（カ）之郷、和利辻余郷ニ」相替被仰付候、御

百性中致迷惑候、」此等之次第、於連〻雖遂愁訴候、如何候、」被成

御分別候哉、已兎角之儀、御返事」不被仰聞候、無御心元存候、當

國之儀者、」近年就御弓矢之儀、諸郷致辛勞候、」就夫下村邊大郷之

儀者、去一兩年者、御土貢之内過分之被成御扶持在所」多之候、御

存知之前候、以御分別、右一ヶ条」愁訴之儀可預御取合候、奉頼候、

恐惶」謹言、

卯月廿一日

鳥飼對馬守　俊久

馬田將左衞門尉　久次（カ）

結城刑部丞　庚実

（奥裏書）「執行出雲入道殿人々中　御百性中」

下寺先の田地之事者、」新兵衛□方ニ永太さうてん（代カ）（相伝）」にわたし（渡）候所、
定かの地（彼）ニ」つき、いつかたより（何方）いらん（違乱）」之儀候ハヽ、何時も我ゝ」
こたへ（答）候へく候、仍為已後」書文（マヽ）如件、」
かのさい（彼在）所ふわん候、おかへの」こ□へ申付候、

天文十年二月廿（日脱カ）　　筥田泉□（花押）

(5)曲淵氏助名字書出（24.8×32.4）　楮紙　竪紙

鳥飼名字之事、帯證文、」數年令懇望、至向後子供ニ」茂、弥奉公
緩有間敷之由」申候之条、令存知所也、

実名　　俊久

天文十六年三月五日　　氏助（曲淵）（花押）

鳥飼新兵衛尉殿

(6)鳥飼俊久譲状写（24.0×32.0）　楮紙　竪紙

（端裏書）「譲状　道後五郎左衛門尉へ　　俊久

進候　　」

かりわけますほりの事、」道之後五郎左衛門へ、末代」ゆつりわた（譲）（渡）
し候之所」実成（マヽ）、任此證文可有進」退之者、仍為後日一筆」如件、

天文十九年十月十四日　　鳥飼進兵衛尉俊久（花押）

(7)曲淵氏助安堵状（23.4×34.8）　楮紙　竪紙

當郡入部庄之内貳町」地之事、重久知行」不可有相違者也、恐ゝ謹
言

弘治三年三月九日　　氏助（曲淵）（花押）

鳥飼刑部丞殿

(8)鳥飼万休銀子請取状（24.4×12.8）　楮紙　竪紙

且納（カ）□　　□料（カ）□事

合銀百六十五文目者

右、為正月・二月・三月分、所請取申」如件

永禄二年三月廿六日　　鳥飼對馬入道万休（花押）

庄屋宮内丞殿

（西河限）にしハかわをかきる、（北）きたハはる」わたセをかきる（り）候、仍為後日如件

長禄二年かのとのミ三月廿三日　　積善坊英亦（在判）

○前欠、最初の一行は欠損しているが、同家所蔵の写真により判読した。

(2)積善坊英隼勘料安堵状（23.7×27.8）　楮紙　竪紙

（端裏書）「くほノ六郎三郎□屋敷□　積善坊」

（窪）くほの屋敷之堺之事

東ハ道をかきり（限）、西ハ河をかきり（限）、北者大」かへを堺、南ハ原渡瀬をかきり（限）候、然者、彼」屋敷土貢之事、申かけ（懸）候處、あまり侘言」申候間、無余儀さしをき（置）候条、かんれう（勘料）壹貫」文請取申候、殊河瀬等屋敷之内たるへく候、」同七丈田□（ひの口）者土貢をきんし（勤仕）」あるへく候、かくのことく（此如）申付候上者、子ゝ」孫ゝ□（まてカ）も相拘あるへき事かん□（肝要）よう候、」仍為後日一筆如件、

長禄四年かのとのミ三月廿七日　　積善坊英隼（花押）

(3)箱田長安・積善坊菊千代丸連署安堵状写（24.5×38.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）「一筆者石之口村新兵衛所へ（カ）　積善坊代箱田和泉□（守カ）」

筑前國早良郡背振山領之内、中之」□寶殿免深渡之村之内、原田參反」田參段、赤二郎作貳段□（一）丈、上之原（カ）」之前畠地二丈、窪七丈、原渡瀬」上之口七丈、寺之上壹段、以上九段」二丈、此内窪之内二丈屋敷除、田」數八段貳丈相當之年貢諸納」所等人足以下、堅（マヽ）箇ニ馳走候て、」無地（マヽ）妨永代可相抱（拘）者也、如此雖」定置候、年貢諸濟物於無沙汰者」可政（マヽ）者也、仍為後日一筆如件、

享録（マヽ）五年壬辰二月廿六日　　箱田和泉守長安（花押影）

（マヽ）石谷新兵衛所へ遣也　　積善坊菊千代丸

貞享丙寅年十一月

(4)筥田長安渡状（24.0×32.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）「（永代相伝）ゑいたいそうてん状　長安」

之處、于今上ノこは」新三郎として、御給主へ六カ敷被申事、」各ゝ
不及分別申候、万事為御心得候、恐惶」謹言
十一月二日　　おの〳〵(各々)判
船越(カ)備後守入道殿御返報

(25)某書状　(25.8×42.8)　楮紙　竪紙

腰緒同□畏入候、」返ゝ此□之儀候間、連ゝ」可申承候
處、題目無御取まゝ申後候、」口惜敷候、世上相静候ハ
ゝ、申入可得御意候、

先日者、預御懇札候、其時分」致他行、御返事不申候、」誠所存之
外候、幾日無音候共、」於心中ニ非如在之儀候、爰元へ」相應之儀
共不可有無沙汰候、」然者去年善兵衞尉方、以口入を」出子申遣候、
去年のハ請取申」たて(カ)子細承候間、八木七斗」程御使へわたし(渡)申候、
將又前日」見斗の燒塩送給候、數」慥届申候、忝畏入候、何様」御
礼可申入候、□秀敷者」(紙継目ヨリ後欠)」
○端ニ切封アリ。

(26)坪付断簡　(25.8×6.0)　楮紙

「一所　二丈　両所并□(とうりこう)　神宮寺灯油免」

(27)断簡　楮紙

「□ヨリ
鳥飼佐渡守御宿所(まいる)　安□」
○裏にも墨跡あれど読めず

(二)　明光寺文書

(1)積善坊英旦勘料請取状案　(24.0×23.0)　楮紙　竪紙

(端裏書)「□渡積善坊案文」

□渡積善坊拘分窪の屋敷
一反之内、河なり(成)二丈・徳田三丈之事、」めいけん(明券)候間、本主とし
てさしおき(指置)候、」さ候間、かんれう(勘料)文一くわんうけとり(貫請取)候、」しゝ(子ゝ)
そん〳〵(孫ゝ)にいたるまで(至迄)、かたくかゝゑ(堅抱)」候へく候、屋敷の(四至堺)○しんちさかい
の事、ひかしハ(東道限)ミちをかきる、ミなみハはるのハたセをか(南原)(渡瀬限)」きる、

(22)安重書状（26.0×33.4）　楮紙　竪紙

態用書候、仍而處外之御弓箭出」來候て、御棄(気カ)遣察存候、尤早〻進人」可承候処、遙〻申後候間、乍存無沙汰」令申候、少も非心疎候、随而今時分、其」方角之立柄如何成行候哉、精示」預度候、自然代儀とも候者、於我等相」當之御用於無沙汰有間敷候、此謂可申」ために候、彼者進之候、殊先日者」脇山へ在陣申候、其時分可參營語候へ」とも、陣所之習候間、無油斷存候て、無沙」汰申候、所存之外候、万彼者可達候之条、」閣筆候、恐〻謹言、

卯月六日　　安重（花押）

(23)法金書状（26.2×34.6）　楮紙　竪紙

連〻可得御意候間(カ)、□状にて申入候、」畏入存候、尚〻

各〻中御意被」願□

雖未申通候、以次令申候、仍上こは□」弘瀬村牛方民部丞相論地御座候て、當時」清(マヽ)段之由其聞候、如何候哉、理非之段、謹而御」役人様へ何ヶ度も御愁訴申候て、可然候、」理非之儀者、定而六十三丁御老中可被御」存知候、尤自此方、山上御役人様へ御侘言申度候へ共、時儀不知案内に候間、万事」御老中頼存候て、愁訴可申候、民部丞(カ)江」各〻中被加御意候者、自此方越(マヽ)可申付候、」万御心得頼存候、所仰候、恐〻謹言、

十月廿四日　　法倉(カ)（花押）

田中左衞門尉殿

鳥飼新兵衞尉殿　御宿所

○破損甚しく原形をとどめざるにより法量は参考まで、

(24)寄合中各々書状写（24.4×44.3）　楮紙　竪紙

牛方民部丞与上ノ古波新三郎申むすふ(結)」論地之儀ニ付而、寄合中へ預御状候、拝見仕候、」則可致御報候之處ニ、昨日まて山上へ御愁訴」申より、致無沙汰候、於山上御衆中者、多分」無余儀様ニ雖仰被候、　永賀法命印一圓ニ無」御分別候、清(マヽ)段之由被仰候間、民部丞幸〻ニ存候、」以定日、早〻被仰付候へ之由申候、定而可被仰付候哉、」乍去、先御郡代二代以御分別、□渡江付被」置候事、めいはく(明白)ニ候

小松原
一〻壹段之内　三丈徳壹斗四舛、貳丈河成
ところき
一〻貳丈　松源寺免
（紙継目）

同所
一〻壹段　七郎大明神修理免
分米貳石参斗六舛八合付口ノ物在之
なうての下
一所壹反　徳参斗
三十六
一〻壹段　作立　六斗貳舛
一〻壹段　用作　皆河成
惣田数壹町九段之内　貳反神講免　壹段貳丈不河成
此前分米参石貳斗八舛八合之内
五斗　用料給
六舛ノ上物ハ十二積ノ餅壹膳仕候
残而定米貳石七斗貳舛八合定
半名重松備後守（花押）
半名此内重松治部丞（花押）

庄崎新九郎
永禄貳年己未六月廿六日　平次郎

（21）円覚坊英賢安堵状写（24.5×38.0）楮紙　竪紙

（端裏書）
「鳥飼彦若とのまいる（殿）（参）　英賢」

東門寺圓覺坊分中山之内後田」貳反之事、為百性地侘言候間、付」
進之候、向後納所公事等堅」可被調候、仍為祝儀、銀四十文目」請
取申候、於後代彼地不可有」其煩候、為後日之状若斯、
永禄貳年卯月十五日（マヽ）　圓覺坊英賢
（花押影）

（異筆）
「鳥飼彦若とのまいる（殿）（参）
貞享三年丙寅ノ十一月」

右件米者、當秋御法儘之」利分相添申、無未進、可致」返弁候、但
質券にハ、我等下」地之内五段田五百文田壹段」書入申處実也、若
於無沙汰ハ、彼」相當程押御進退可召候、其時」聊一口之儀申間
敷、仍而(候脱カ)」一筆如件

天文廿四年三月十三日　　助左衛門（花押影）

執行雷訓(カ)まいる

(19)鳥飼俊久出挙米借状（25.3×43.6）　楮紙　竪紙

(端裏書)
「米参石借状　　俊久(カ)」

申請　出挙せいふく(西福)寺御城米事

合参石定也

右件御城米ハ、來秋御」法儘利分相添申、無未進」可致返弁候、但
しちけん(質券)ニハ、」我等相抱候下地之内、原前三段田」三反書入申候
處実也、若於」無沙汰者、彼在所相當程可」有御進退候、其時聊一
口之儀申」間敷、仍而(候脱カ)一筆如件

天文廿四年三月廿二日　　鳥飼對馬守俊久（花押）

執行雷訓参

(20)重松備後守外三名連署太郎九名坪付（26.0×76.5）　楮紙　継紙

太郎丸名

宮ノ下　一所壹反　徳貳斗四舛
ミつ瀬　一〻貳段　徳参斗貳舛
野中原下　一〻貳段　徳貳斗四舛
いもし作　一〻貳反　徳参斗貳舛
鬼房作　一〻四丈　徳九舛六合
松木下　一〻三丈　七郎大明神免
きくとく　一〻貳丈　徳四舛八合
三十六　一〻貳段之内　壹反徳壹斗六舛　壹段徳貳斗四舛
ふけ　一〻四丈　徳壹斗六舛
熊崎　一〻貳段之内　壹反徳壹斗六舛　壹段徳貳斗四舛

仰候、其」時一口之儀申間敷候、仍為以」後状如件

天文七卯（十年脱カ）月十六日　　助久（神）在判

(16) 積善坊真海・箱田長安連署証状（25.4×33.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）「鳥飼新兵衛尉・源五郎　遣置候　積善坊」

今度あか二郎作西之より土貢」不納之条、申懸候之處ニ、三段田之内」たる之由申候、頻雖可申付候、餘之」わひ（侘）事候間、さし（指）置候、同押」西ノより事ハ、社役田之由候、就夫、」彼くほ（窪）名、於以後も、ふさた（無沙汰）之儀」あるまし（有間敷）く候、仍為後日状如件、

天文十九年二月四日　　真海（積善坊）（花押）

長安（箱田）（花押）

鳥飼新兵衛尉同源五郎　遣置也

(17) 田中久長出挙米借状（26.2×36.4）　楮紙　竪紙

（端裏書）「五石四斗五舛之状三年之間申入候也　田中左衛門尉」

申請　出挙米之事

合五石四斗五舛定也、

右御米之事ハ、天文廿年之秋より、壹年ニ」四石三斗六舛宛納、天文廿貳年之秋まて、」彼三年之間ニ堅固ニ可致奔走候、雖然共、」為彼質券○我々相抱分浦田なわて事、上代貳貫五」百所（文脱カ）・同下わほき貳百文所、彼兩所之事」書入申候、自然於致無沙汰者、申入在所（カ）」押而可有御進退候、謂哉（マヽ）天下御一同之」御徳政行申候共、相違之儀御座有」間敷候、万一相違候者、可被任彼壹通」之旨ニ候、仍為以後之状如件、

天文廿年正月十一日　　久長（田中）（花押）

鳥買（マヽ）源五郎殿参

(18) 助左衛門出挙米借状写（25.4×43.1）　楮紙　竪紙

（端裏書）「米五斗借状　助左衛門」

申請　出挙せいふく（西福）寺御城米事

合五斗か定也

無沙汰可納申候、夫銭事者、清料五文分・當料」七文はん、年中四度まハり廿五名御百姓衆並」可納申候、此外護聖院江月夫銭堅固可納申候、」右条々無沙汰又違乱之儀申候者、彼下地」事、別作人ニ被仰付候共、一口之儀申間敷候、」紺屋名名一并南名内大称壹反、以上六段」事、子にて候又四郎ニ申付候、大称の事者、壹段ニ」相當之公事足并夫銭年中ニ當料九」十文、可答申候、無沙汰有間敷候、仍一筆如件

天文十七年二月十六日　　鳥飼新兵衛尉　俊久（花押影）

大河内吉松殿　　進上

(14)積善坊真海安堵状（26.0×36.0）　楮紙　竪紙

（端裏書）
「
鳥飼（カ）新兵衛尉方へ遣置候　積善坊
」

積善坊領新兵衛尉方相拘（窪）」くほ屋敷之内ますほり（桝　濠）之事、」先年彼六郎丸可為進退之由、」於庄崎方、子細雖申候、○新兵衛尉」方申所無餘儀之由候、然處、今度」六郎丸平左衛門尉子細雖申候、先年」落着令申候、新兵衛尉方申所」無餘儀之条、付置候、仍為後代」一筆如件

天文十七年三月廿日　　真海（積善坊）（花押）

鳥飼新兵衛尉方所遣置候

○瑞裏と宛所の「鳥飼」は追筆カ。

(15)神助久御城米借状案（26.8×41.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）
「
三斗状定也　　神兵衛尉
」

天文十七卯（年脱カ）月十六日　　助久」

申請　御城米之事

合三斗か定也

右米ハ、當秋御法利分相」そへ（添）、ほんそう（奔走）可申候、しちけん（質券）」にハ、ミやのまゑ（宮前）五百文田壹反書」入申候、若於無沙汰者、彼しちけん（質券）」の在所を、御おさゑ（押）御作あるへし、」其時とかくいらん（兎角違乱）申間敷候、若」いかなる（如何）天下一同之御徳せいなり（政）」とも、以此状、かたく（堅）可被

(10)幸久次証文（25.1×38.8）　楮紙　竪紙

（端裏書）「（捻封墨引）

「｜

｜」

幸對馬守

新兵衛□（殿カ）　久次

今度山口の御入目として、ひろ（広）せ（瀬）の宮しうりめん（修理免）の事、其方」相抱らるゝ（被）によって（依）、しやま（社米）いの事、我等つかいにて（使）壹石」かりめ（借召）されなん（被）時も、宮」しゆり（修理）之時、あしつけ（足付）事、可」被仰付之由候、我等事、不」斷たひのミに候条、為い（以）」このに、後如此一通進候、可被」其心得候、恐ゝ謹言、

天文拾五年二月廿七日　　久次（幸）（花押）

いしかま（石釜）

新兵衛殿

(11)曲淵氏助名字書出（26.8×39.1）　楮紙　竪紙

源　五　郎

重　久

天文十五（年脱カ）三月吉日　　氏助（曲淵）（花押）

鳥飼千代松殿

(12)箱田秀安下女去文（23.5×26.1）　楮紙　竪紙

（端裏書）「新兵衛殿　　箱田神五郎」

買渡（マヽ）申下女乙くりか事、」御城米五斗之方ニ永代進置候、」万一御徳政行候共、彼下女事」相違之儀有間敷候、為後日」壹筆如件

天文十五年四月十日　　箱田神五郎　秀安（花押）

(13)鳥飼俊久契状案（25.4×38.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）「（捻封墨引）

｜

案文　大河内殿へ」

御領分廣瀬村紺屋名事、依有子細、近年御」領主被召放候處、護聖院様對御領主被添」尊意、安堵之儀被仰付候、誠忝候、就夫為御礼」當料貳貫文、大河内殿へ進上仕候、然者、年貢」辻参斗代参段・壹斗八舛代参反、右壹斗」八舛代事者、夫銭之外仁券注銭小俵米無」

下、堅箇(マヽ)ニ馳走候て、無他妨」永代可相拘者也、如此雖定置候、年貢」諸濟物於無沙汰者可政(マヽ)者也、仍為後日」一筆如件、

享禄五年壬辰二月廿六日　　箱田和泉守長安

積善坊菊千代丸

石谷(釜カ)新兵衛所へ遣也

○奥紙継目に墨跡あれど読めず。

(7)たての新左衛門出挙米借状（23.4×32.1）　楮紙　竪紙

（端裏書）「米貳□状　たての新左衛門(カ)」

申請　出挙□

合米貳斗か定

右件米者、當秋御法之儘、利」分相そへ申、無未進、可致返弁(カ)(候カ)□、」但しちけん(質券)にハ、我等かゝへ(抱)之内、原ノ」はしつめ(カ)と申候田四百文彼所在」壹段書入申候処実也、何時も彼米」無沙汰之時者、をさへ(押)御作あるへく候、」其時聊一口之儀申ましく(間敷)候、たとへ」天下一同御徳政興業候共、彼米」相違あるへからす候、仍為後日證文」如件

享禄五年五月十四日　　たての新左衛門（略押）

(8)三郎ゑもん出挙米借状写（27.1×33.8）　楮紙　竪紙

申請　出挙米之事

合米一斗五舛定也

右件米ハ、當秋方之(法カ)まゝ(儘)理分(利カ)」相副、無未進、弁可申候、但」しちけん(質券)にハ、我等名田之内」いちい木を、千王殿御米」口入め(召)され候間、書入申候所」実也、もし米ふさた(無沙汰)仕候者、」彼米所押御作あるへし、」其時者聊一口之儀、」申ましく(間敷)候、依為已後状」如件

天文九年子かのへ正月廿日　　三郎ゑもん(衛門)（花押影）

○端裏に墨跡あれども破損により不明。

(9)曲淵氏助名字宛行状（25.7×37.5）　楮紙　竪紙

名字之事、源左衛門尉」康秀、以一通懇望之」間、得其心所如件、

天文十貳年十一月十九日　　氏助(曲淵)（花押）

鳥飼千代松所へ

返弁」可申候、但御しちけんに、上わさた」一反かき入申事しつ也、若無沙汰」仕候者、この米之もとこにあひ」あたるほと、おさへ御作あるへく候、」其時聊一口之儀申ましく候、」仍而為後日、證文如件

寛正六年五月廿九日　　上田之西福庵普　はんあり

(4)石竈せん道左衛門某出挙米借状（27.5×34.0）　楮紙　竪紙

「五斗二舛状　　いしかませんたう」

申請　出挙米事

合五斗二舛か定也

右件御米ハ、來秋年貢舛」にて、六りのり分合そへ申」候て、未進けたいなくわきまへ」申へし、たゝし七けんにわ、」三反田二反三丈書入申所」實也、もしふさた申候者、」此米之本子相あたり候する」ほと、めしあけられ申へし、」其時一口儀申ましく候、」仍為後日状如件、

文明十四年十一月廿九日　　石竈せん道　さるもん□（略押）

(5)積善坊澄海安堵状写（26.5×44.8）　楮紙　竪紙

背振山中法殿之免□中深□」くほの名之内、七反余屋敷其外」類地之事、依筋目、為先地頭」成分別、付置處実也、但萬」雑公事以下、無懈怠勤候て、」子ゝ孫ゝ迄而、相拘られへき」事肝要候、たとへ如何様方、」於彼地、違乱煩之儀申候共、此」任一通旨候て、無さをい拘可有候、」仍證文如件

皆享禄四年四月十八日　　積善坊　澄海（花押影）

くほ名之田地主□新兵衛丞俊久

○「くほ名」「鳥飼」「俊久」は追筆。

(6)箱田長安・積善坊菊千代丸連署安堵状写（28.5×38.5）　楮紙　竪紙

「□殿免深「　」」参段、赤二郎作貳段一丈、上之原之前」□二丈、窪七丈、原渡瀬上之口七丈、□」上壹段、以上九段二丈、此内窪之内二丈屋」敷除田數八段貳丈相當之年貢諸」納所等人足以

（一）鳥飼文書

(1)積善坊英隼屋敷安堵状（24.8×34.5）　楮紙　竪紙

（端裏書）
「くほノ六郎三郎所（カ）へ　屋敷あんと（安堵）状　積善坊　□」

くほ（窪）の屋敷之境之事

東ハ道をかきり（限）、西ハ河をかきり（限）、北者」□□（大カカ）へを堺、南ハ原渡瀬をかきり（限）候、」然者、彼屋敷土貢之事、申かけ候之處、」あまり侘言申候間、無余儀さしをき（指置）候条、かんれう（勘料）壹貫文請取申候、殊河瀬等」屋敷之内たるへく候、同七丈田ひの口（樋）者、」土貢をきんし（勤仕）あるへく候、かくのことく（如）」申付候上者、子々孫々までも（迄）、相拘ある」へき事かんよう（肝要）候、仍為後日一筆」如件

長録（マヽ）四年　かのとのミ三月廿七日　積善坊　英隼（花押）

(2)西福庵普出挙米借状案（27.3×37.9）　楮紙　竪紙

（端裏書）
「御米七斗文　上田之西福庵」

申請　出挙之御米事

合七斗か定也

右件之御米者、來秋之時、六」り（利）の利分を相そへ（添）申候て、」無未進、返弁可申候、但御しち（質券）」けんにハ、わさ田（早稲）一反をかき入（書）申」事しつ（実）也、若無沙汰仕候者、」この米之もとこ（元子）にあひあた（相当）り」る候つるほとおさへ（程押）候て、御作」あるへく候、其時聊一口之儀申」ましく（間敷）候、仍而為後日證文如件

寛正六年乙酉五月廿九日　上田之西福庵普判

(3)西福庵普出挙米借状案（26.9×39.0）　楮紙　竪紙

（端裏書）
「御米七斗文　上田之西福庵
あんもん（案文）」

申請　出挙之御米事

合七斗か定也

右件之御米者、來秋之時、六りの（利）」利分を相そへ（添）申候て、無未進、

脊振山関係中世史料集

凡　　例

一　本史料集は、中世脊振山関係のものを収録したものである。

一　鳥飼文書は福岡市早良区大字石釜869-1、鳥飼恵氏所蔵の文書であり、明光寺文書は福岡市早良区大字石釜193、明光寺所蔵の文書である。また結城文書は福岡市博物館所蔵の黒田家文書に含まれている。
鳥飼文書と明光寺文書については『九州史学』77号において史料紹介を行い、また福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　脇山Ⅱ』に、結城文書も含めて紹介している。今回の再録にあたって若干の誤り等を訂正した。また結城文書は、最近福岡市博物館から刊行された『黒田家文書一』の中に「東門寺古証文」として写真付きで翻刻がなされている。名称については、江戸期まで早良区小笠木の結城家に所蔵されていたという青柳種信の記述（『筑前国続風土記拾遺』）に従い、「結城文書」の名称を以前のとおり使用した。これらの文書の凡例については、以下のとおりである。
一、法量は縦×横である。
一、料紙の破損による欠字、或いは解読困難な箇所は、その字数分を □ で示した。
一、抹消は〃〃で示した。
一、原本における行変わりは」で示した。
一、仮名は、推定できるものについては、（　）で漢字を充てた。
一、紙継目は点線で表わした。

一　修学院文書については『佐賀県史料集成』第五巻に収められており、今回は、それに従い、若干の誤り等を訂正した。

一　「その他の史料」として、脊振山関係の資料を管見の範囲で収録した。

目　　次

一　鳥飼文書 …… 2頁（167頁）

二　明光寺文書 …… 11頁（158頁）

三　結城文書 …… 15頁（154頁）

四　修学院文書 …… 20頁（149頁）

五　その他の史料 …… 29頁（140頁）

2　国境の村々・五ヶ山の歴史

i．国境を越える峠

1　塩買峠（大峠・標高545メートル）

五ヶ山は筑前・肥前の国境地帯である。それぞれ人々の行き来があった。筑前と肥前を結ぶ街道が峠を越える。一帯にはいくつもの国境の峠があった。東からいって、九千部山の北（権現山の南）を越えるみちが塩買峠である。筑前側、市ノ瀬での呼称で（『筑前国続風土記拾遺』、『郷土誌那珂川』那珂川町教育委員会編、1976）、福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図・那珂郡絵図」（本文187頁参照）にも塩買峯、塩買峠峯とみえる。貝原益軒『筑前国続風土記』（巻二、提要下）「国境之小名」にも同じ地名がある。いま峠周辺を「しおかい」といい、「一升盛（いっしょうもり）」という因んだ地名の小山がある。肥前側、鳥栖市域にこの名前はなく、大峠（ううとうげ）と呼んでいる。

この地域では古くから製塩地は博多湾であった。有明海では塩は生産されない。有明海岸はヘドロの堆積ばかりで、砂がなかった。かん水も塩も泥で黒くなったのではなかろうか。砂がなければ安価で上質な塩を作ることはできなかった。干満差のある博多湾や今津湾沿岸での製塩については、文永の役（文永十一年・1274）を描いた『蒙古襲来絵詞』に「とりかひ（鳥飼）のしほひかた（潮干潟）」、「とりかひかたのしほやのまつ（鳥飼潟の塩屋の松）」がみえる。また文正二年（1467）四月五日・興隆寺文書に「当宮（筥崎宮）領田嶋村内塩浜四町」と見えている。樋井川河口は元来鳥飼潮干潟（現在その名残が大濠公園となっている）を経て荒戸の東に流れ出ていたものが、近世初期の福岡城下町整備の過程で、現在の河口に付け替えられて、干潟の排水、干陸化が進行した。今は内陸となっている樋井川河口・鳥飼や田島は中世・近世には塩田で、塩屋であった苫屋からけむりがたなびく光景があった。今津にも瑞梅寺川河口干潟沿岸にかつては塩田があり、塩屋の地名もある。『筑前国続風土記』（708頁・拾遺）にも次のように記されている。

国中塩浜在所

凡八所　姪浜塩地二十三四町　今宿十七町　松崎十町余　和白二十五町新地　勝浦廿三四町　津屋崎町数不詳新地　渡村三町七反新地　芥屋少

貞享三年（1686）・筑肥国境脊振山争論文書（秀村選三編・地域史資料叢書１・29頁）に

久保山村新之允と申者椎原村次兵衛所へ参、物語仕候ハ、私儀福岡へ塩なと買ニ参候

とみえており、肥前久保山村（脊振村）の人も、塩を福岡に買いに行ったことがわかる。一石（いちこく）越え（椎原峠）、釜蓋峠（車谷越え）のいずれかを越えたのであろう。養父郡の人々の場合は、福岡まで塩を買いに、この塩買峠を越えることがあった。筑後川流域や、遠く杵島郡・藤津郡の人々も塩を買うために有明海を渡って筑後川を遡り、鳥栖より峠を越えたらしい。

塩買峠（大峠）は鳥栖市・勝尾城下と那珂川町・市ノ瀬を結ぶ。市ノ瀬の南西には一の岳城がある。勝尾城は筑紫氏の本城であり、一の岳城は支城であるから、この道は筑紫氏にとっての軍道であったことがわかる。一の岳城については後述する。峠を越えた河内にある禅刹万歳

寺は中国人（元）僧見心来復、中国渡来僧以亨得謙の頂相（禅僧の肖像画、ともに国指定重要文化財）を所有する。この道の頻繁な往来を語る。

2　高村峠・コ峠（標高570メートル、以下付図「五ヶ山・小川内地区しこ名分布図」参照）

九千部山から南に、国境の尾根道はいくつかの峰を経て下って行く。この峰々を、福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図」（那珂郡図、187頁）では順に水ノミ山、高尾、タラムセ、力石原、ホコ石、ホコ石立粒、三領境谷、三領境峠、大谷頭、と記している。前掲『筑前国続風土記』「国境ノ小名」（名著出版、54頁）にも同じ記載がある。三領境とは筑前・黒田領、対馬・田代領、肥前・鍋島領の境であろう。対馬領は基肄郡全部と養父郡半分で、牛原村までを含んだ。三領境は佐賀鍋島領の山浦と田代領牛原との境の山で、いまの石谷山の北西に該当しよう。いま三領境峠とよぶ地点がある（『国境石』那珂川町文化財ハンドブック、那珂川町教育委員会2002）。大谷頭は谷より屏風岩を経て下り、コ峠（「小峠」）となる。小峠に登る道は明治35年地図に書かれ、一部は平成９年地図にも歩道として記されている。倉谷では高村の上にあることから高村峠と呼んでいた。

3　七曲峠（標高495メートル、旧５万分の１図では501.6メートル）

「筑前国郡絵図」（187頁）ではコ峠から西に、コヤ尾、曲りを経てアヤベ峠となる。さらにフタキ子（『続風土記』では「札木辻」で、こちらが正しい）、メクラオトシ、中ノ峠となっている。アヤベ峠すなわち七曲峠である。峠を越えれば綾部（佐賀県中原町［現みやき町］）に出た。この峠を越えて、耕作の安全を祈願するため、五ヶ山の人々が綾部神社の風切り神事に参った。鳥栖・久留米まで炭やわさび葉などを販売に行って、生活の糧とすることもあった。

「筑前国郡絵図」また明治35年陸地測量部５万分１図によれば、肥前街道は市ノ瀬と五ヶ山の境である亀の尾峠より南下、終始那珂川の左岸（西側）を通り、落合（大野谷と小川内谷の合流点）のわずか下流（東側）で道は橋を渡った。小川内道はそこで分岐し西に向かった。橋を渡ると右に小山があって、『筑前国続風土記』にみえる白土城があった。白土は筑紫氏・一の岳城の支城である。現地では猫城と呼んでいる。

「直に行て白土か城と云小山を越え」（『筑前国続風土記』137頁）

「小山を越」とある。絵図や地図に見る限りは現道に同じであるから、バス道開通時に地下げされる前は小さな峠になっていた。猫城はその峠を押さえる城で、西北から西にかけては白土川に面した絶壁に守られていた。

このちいさな峠から坂本峠道と七曲峠道が分岐した。『筑前国続風土記拾遺』は

「大野の方に行く道の東に大谷あり。広瀬といふ。桑河内と大野との堺なり」

とし、倉谷は広瀬と呼ばれていた。『小川内誌』88頁に二つあった大野橋のうち、ひとつを広瀬橋といい、ひとつを前川の橋といったとある。七曲道は明治期の地図によると、水田から草山に続き、谷に入って沢どうしに峠に出たようである。「七曲」とは倉谷の水田地帯に付せられた小字である。しかしながら七曲峠という峠の名前は筑前側の史料にも出てこない。「筑前国郡絵図」に「あやべ峠」とあったことはみた。高村峠に同じく、村内の地名によって峠の呼称も付いたのだろう。猫城から東に白土川に沿って七曲峠道は行く。徒渉地点は飛石であった。

置かれた石をわたることで、濡れずに川を渡ることができる。橋ではなく徒渡りであった。牛や馬は横の浅瀬を行った。また茶屋の前という地名もあるから、一時期茶屋があったらしい。往来は頻繁だったようだが、宿泊施設などはない。時おり旅人が民家に宿泊していたという記憶は、聞き取り調査によって確認できる（214～215頁参照）。

4　坂本峠・中峠

（標高545メートル、中峠は標高525メートル、旧５万分の１図では534.5メートル）

坂本峠は肥前国坂本村に行く峠の意味であるから、筑前側からの呼称であろう。しかし近世の文献ではその名を確認できない。『筑前国続風土記拾遺』には「東流は地焼峠より出る川にして」とあり、「地焼峠」と見えている。福岡県立図書館蔵「筑前国郡絵図」では「中ノ峠」、『筑前国続風土記』では「中峠」とある。神埼郡に行く本道であった。最高所の標高は545メートルで、県境そのものにはなく、佐賀県側に入った位置にある。手前に小さな峠（標高525メートル）があって、そこが県境である。ここが史料に「中峠」とみえるものに該当しよう。明

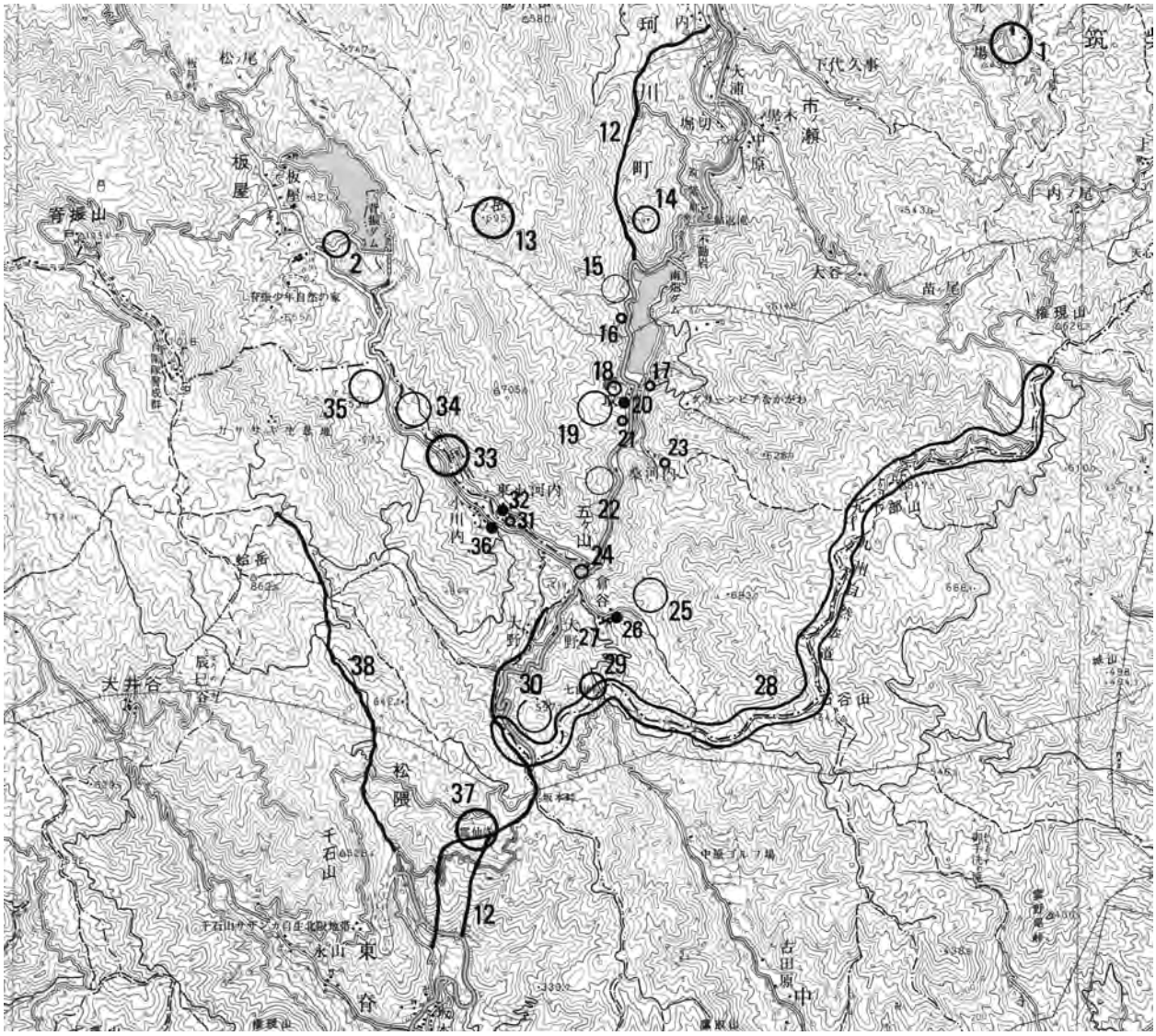


Fig.Ⅲ2-1-1　五ヶ山周辺図（1/60,000）〈国土地理院発行地図〉
（遺跡番号は35頁参照）

治35年地図を見ると、「中峠」から直接養父郡・三根郡に下る道があって、谷に下ってすぐに七曲峠からの道と合流していたことがわかる。

小川内から最も近い鉄道駅は中原駅であった。「小川内区長日誌」（資料編）をみると、昭和7年11月4日では出身者の凱旋歓迎に中原駅まで行っている。その日に大山祇神社で祝賀会を開催しているから、午前に下って駅にて出迎え、午後には戻ることができた。それほどに遠い距離ではない。ほかの例（同12月2日）もあわせれば、出征兵士、凱旋兵士の送迎は中原駅まで行くことになっていたようである。ただし『小川内誌』90頁によれば、中原駅まで見送るのは、親戚と青年団で、ほかの村民は佐賀橋までであった。また学校教職員の離任・赴任そのほかでは、一本杉（桜グウ）の丸木橋にて見送った（『小川内誌』88頁）。前者は七曲道で、後者は坂本峠道を行ったのであろう。丸木橋とあるが、牛馬も橋を渡れたのか、牛馬は下って流れを渡ったのかはわからない。

「区長日誌」昭和5年3月の記事では、唐津を経て東松浦郡に行くために中原駅に出ている。明治35年地図では中原・神埼駅のみで三田川駅はまだ存在していなかった。昭和初期も同様であった。

5　亀の尾峠

陸軍陸地測量部の地図に、亀の尾峠の東に虎ヶ岳（笹城）とみえる。『続風土記』に虎岳城、『拾遺』に笹城とある。現在虎ヶ岳も笹城の呼称も、ほとんど記憶されていないようだ。峠をはさんで東に笹城、西に一の岳城があったから、一の岳城に敵対する勢力が、この峠を行軍することは至難であった。

ⅱ．軍事要衝としての中世五ヶ山と一の岳城

大峠（塩買峠）をはさんで筑紫氏の本城勝尾城（鳥栖市）と支城一の岳城（那珂川町）があったことをみた。

筑紫氏の城を書き上げた「城数之覚」（筑紫文書・『佐賀県史料集成』二八-三六）のうち、那珂郡の記載を見よう。

一　牛頭ノ城　　幡崎兵庫頭・筑紫越前守
一　白水ノ城　筑紫良甫　一　隈本ノ城　　番持　一　山田ノ城　同
一　猫尾ノ城　同　一　一ノ嶽ノ城　同　一　蟻塚の城　同

牛頸城（大野城市不動城：牛頸を牛頭で表記する例がいくつかある）、一ノ岳城、山田城（岩戸城）は遺跡が明確に残り、白水城もおおよその位置がわかる。隈本は天正期・指出帳に熊本がみえ、現在の東隈、西隈とされる（『角川福岡県地名辞典』）。猫尾ノ城は未詳だが、猫城という呼称は郡内に不入道と五ヶ山の二つがある。前者については『続風土記拾遺』古城記の項に「猫城、不入道村の西六町斗、成竹村に境へる所、川に臨て一孤山有、茂山にして岩多く崎嶮也、上の平地一反余有、西南の岸下を那珂川遶り流る。昔山田兵部丞といひし士の城址といふ、いかなる人にや年暦も不詳。東北の方山田に越る坂を猫峠と云、猫城峠其由来伝はらす」とある。『続風土記』は「猫嶺城」と表記し、『拾遺』は「猫城峠」と表記している。いま一つ

が五ヶ山の猫城だが、『続風土記』が白土の城として記述していること、「小山を越」とあることは先に見た。

『続風土記』をみると、ほかに遠賀郡上底井野村にも「猫城とて小山有」（巻31拾遺、707頁）とあるから、要するに猫のような形をした小山は、しばしば猫城と名付けられたことが分かる。「城数之覚」の「猫尾ノ城」は、「尾」の語義からいっても、猫城に同じである。筑紫氏はこの軍道を行き来したが、むろん攻める側もこの道を使った。

筑紫文書・慶安五年（1652）の筑紫良泰筑紫家由緒書（『佐賀県史料集成』二八）に、一の岳城についての詳しい記述があって、五ヶ山の戦略的な位置がわかる。

一、

大友殿筑後國へ出勢候て、九州之内筑前・豊前・肥前・筑後・肥後・豊後六ケ國、大友殿御知行ニ被成、諸大名大友殿御幕下ニ罷成候、惟門様秋月文珠と被仰合、大友殿ニ不被成御随候条、六十國之人数を卒、秋月ニ取掛ケ候処、法名宗吟家中之者心替リ仕、文殊相果被申候、後ニハ文珠子息種實中國衆を憑、秋月ニ入被申候、

一、

秋月文殊相果、大友殿基養父河内之城ニ責掛被申候、大手口ニて良祝一戦仕、豊後衆引退在之へ陣取仕候、勝尾ハ城悪敷御座候、殊ニ豊後衆大勢二て候条、五ケ山ニ被成御引籠候、山中難所之山豊後衆承及、五加山へハ取掛不申、肥前龍造寺表を働、それより帰陣ニて御座候、筑紫事五ケ山ニ罷有、大友殿へ随不申候条、筑後一ケ國之衆ニ大友殿より被申付、筑紫五ケ山ニ籠居候可討果由にて、筑後衆人数弐万之筈ニて筑後を打立申候由相聞へ申候、豊後より御目付衆新光寺と申出家、佐藤と申侍被罷出候、惟門様良祝被成御談合、筑後人数五加山ニ御引請候事、心外思召候間、宰府表へ御打出候て、可被成御討死と被成御定、宰府へ御出候、宰府ハ廣所ニて御座候故、合戦之次第難成ニ付、針摺と申村ニ御人数被成御立、筑後衆御待候処、一番備星野・門中書、両人弐千程ニて御座候、惟門様御人数、五加山ニ御座候間、御家中之衆知行無御座候故、侍衆我々計已上五六百ニ星野・門中書被成御伐崩、御鎚下ニて両人相果、不残頸を御家中衆取被申候、筑後衆惣敗軍ニ罷成候、筑後河邊迄追討被成候、百姓已下迄御味方ニ罷成、頸を取申候、弥御人数かさみ申候、討取頸、千三百七十、武籠と申村之前ニ頸塚を御つき被成候、惟門様五ヶ山にて御煩被成、御死去候、廣門様十二ノ御年、良祝取立、御家被成御連続候、惟門様御内儀様馬場殿御娘にて御座候、満門様敵の末御縁組故、御たたれ披成、惟門様さう気

Pho.Ⅲ2-2-1　一の岳城（鉄塔左）

Pho.Ⅲ2-2-2　白土（猫）城

ニ被為成、御内儀様害し被成候、其御身も御煩て終自害被成、御死去候、馬場殿一類悉たたれ御つふし、御家来ニ被成候より御たたりやミ候、筑紫越前馬場殿末也

文中に登場する良祝は筑紫秀門の養子で屋山弥三郎といった人物である。筑紫越後守と称して家門での年寄であった（良悦とした史料もある）。家督を継いだ惟門の義兄にあたる。文殊は秋月種実の父で、文種また種方といい、弘治３年（1557）に討死にした。

そのあと惟門は五ヶ山に退いた。しかし雌伏していた筑紫惟門は捨て身の戦いで、永禄２年（1559）に逆転勝利を収めた。この由緒書には合戦の年が明記されていないが、永禄２年４月２日の合戦である。一連の文書が『大宰府太宰府天満宮史料』一五巻に収録されていて、問註所文書や蒲池文書のリアルタイム史料（同時代史料）によって、大友方の門中書（問註所）鑑豊とその親類被官ら数十人、蒲池十郎親類被官が戦死していることが史実として確認できる。ほか時代的には下った叙述になるが、『北肥戦誌』もこの合戦での星野鑑泰、問注所鑑晴らの討死を記している。『大友家文書録』は「此役未詳敵姓名」と書いているから、事実とすればよほどの奇襲作戦だったらしい（なお東大史料編纂所『史料綜覧』もこの合戦を取りあげているが、若干の混乱があり、永禄２年と７年の同じ４月２日にほぼ同じ内容の綱文（概要を記した文章）がある。２年が正しい）。合戦のあった侍島という場所については、満盛院文書中に筑紫村内侍島とある。『福岡県の地名』は筑紫野市下見に比定している。下見は筑紫村に隣接し、士島屋敷（「しとうやしき」とルビがある。「さむらいしま」かもしれない）という地名がある。筑紫良泰由緒書が、合戦があったと記す針摺とは２～３キロメートル離れている。

由緒書では針摺原の合戦で星野・問注所ら大友の一番備（ぞなえ）は2,000の兵で、対する筑紫方は500ないし600人、討ち取った首は1,370ということである。数字が事実ならば、筑紫方には大きな勝利だった。なぜこのような奇跡の勝利が可能だったのか。

宣教師たちの報告によると、永禄２年２月25日に反大友勢力二千人が博多の町を占領し、大友氏の庇護を受けていたキリシタンも平戸に逃げたとある（「イエズス会士通信」ほか、『大宰府太宰府天満宮史料』一五）。針摺合戦の一月前には大友氏の支配は大きく揺らいでいたのである。筑紫惟門そしておそらく連携していた秋月勢力はこの動揺を大きく突くものであった。

なお『龍造寺隆信譜』（史料稿本所引）永禄五年・筑紫真清安堵本領には

傳曰、先年筑紫惟門爲大友氏所攻下城走中国、永禄二年八月、惟門郎従等、在筑前五箇山蜂起、掠筑紫長門入道真清領、迎惟門於本城、城于一瀬搆数箇所守之、真清無力攻之、乞加勢、四月下旬、公及神代勝利遣軍士合戦、得首数十級、贈真清、真清以其威追払彼党、安堵本領、大友宗麟以使書感之

とある。８月は、４月の誤りではないか。そうなら４月２日侍島合戦のあとの状況となる。惟門による五ヶ山支配は短かった。

永禄２年に惟門が勝利した針摺は、大宰府から南下する日田街道が通り、針摺山や針摺峠があったように、小さいながらも地峡であった。よってしばしば合戦場になっている。永禄２年の合戦が侍島合戦とされるのは、おそらくは緒戦が針摺原で、終戦が侍島だったのだろう。『筑前国続風土記』『筑前国続風土記拾遺』のそれぞれ古城・古戦場の項には、天正７年（1579）４月秋月種実、筑紫広門が大友方の高橋紹運と戦い、種実が針摺原に陣を取り、紹運が二日市

にまで出張したと記している。

この由緒書には「基養父河内之城」とある。基肄郡と養父郡をあわせた呼称が、戦国時代からあったらしい。河内の城というが、現在の勝尾城山は北側が河内地籍に、南側が牛原地籍に属している。河内の側にも城郭として重要な機能があった。城下の市（市場）が東にあったといわれることも関連しよう。「勝尾は城悪しく、ござ候」とある。五ヶ山と比較したものである。要害に不十分ということで、五ヶ山に引きこもった。『北肥戦誌』には「豊後衆攻一岳不果、犬塚山城守等墜命者衆矣」とある。たしかに攻めるのに難しかったようだ。大友側にしてみれば、犠牲を出してまで、奥に逃げ込んだ敵は追わない、無視して差しつかえないということであろう。街道沿いの要衝ではあったが、たしかに山中の難所でもあった。

惟門は、馬場氏女子を妻としていた。満門の敵になる家筋であり、祟りによって「そう気」となり、妻を殺し、自身も五ヶ山にて自害したとある（引用文末尾）。「諸家系図纂」にも自害のことは見えて、永禄10年（1567）のこととある。

『大友家文書録』永禄十年六月条に「高橋鑑種毛利元就に通じて岩屋城に挙兵、筑紫広門が五箇山城に拠り、龍造寺隆信が鑑種に呼応し、豊芸和睦が破綻した」とある。八月条に、大友方の軍勢（斉藤鎮実）が園部から五ヶ山を攻撃したと見えている。

「至肥前、向五箇山城」、「屯園部、遠攻五箇山」

園部はいまの基山町園部であるから、おそらくいったん南の谷に入ってから、ないしは権現山から大峠を越えて、五箇山城すなわち一の岳城の攻撃に向かったものであろう。園部・宮ノ前にサブタンジ・サブタンゴエ（三郎ヶ谷路、三郎ヶ谷越）という谷道と峠道があり、勝尾城の侍が使った道という伝承がある。なお、園部・宮ノ前南方のオトサ（オトサン）山頂に筑紫広門の墓があるという。同じく『大友家文書録』同月条によれば「生松原戦死戸次鑑連家士」として「後藤隼人佐・奈良原備後守」ほか数名の戦死者の名がみえる。対原田、対筑紫の両面作戦だったが、生の松原方面の北部作戦は失敗した。しかし五ヶ山攻めでは筑紫惟門が自害しており、成功である。惟門の死と、永禄十年の戦い・大友氏の五ヶ山侵攻との前後関係はくわしくは分からないのだが、密接な関連を持とう。

『続風土記』古城・鷲が岳城（南面里）の項には、同じ天正７年の10月24日に龍造寺隆信が、その将大田兵衛に三千余人の兵をつけ、筑前五ヶ山の奥、大野の里へ打ち越し、つづいて鷲が城・大鶴宗雲を攻撃し、筑紫広門も同調して攻撃したとある。高橋紹運が後詰（援軍）に山田山（岩戸山）に布陣したため、大田は撤兵したが、広門は包囲を続け、秋月が高橋の本城岩屋城を攻撃した際に、有利な形勢となったことを記している。大宰府攻略に五ヶ山を進軍して、岩戸での合戦になった。大野とあるから坂本峠越えだろう。

五ヶ山は奥深い山中であったから、逃げ込み城に適していた。ここまで逃げ込めば、追求してくる敵はあまりいなかった。放置しておいても影響は少なかったのだろう。五ヶ山城を確保することによって、肥前・筑前の幹線道路を押さえることはできた。しかし別にも基幹本線があるのだから支障はさほどにはなかった。

こうした五ヶ山の位置は不思議な役割を果たす。しばしば逆転の目になることがあった。起死回生策を可能とするのが五ヶ山だった。南北朝期に宮方が吉野山などを拠点とし、九州の宮方も八女郡矢部や肥後矢部など山岳地帯を拠点としている。かれらは少数派・劣勢派で、中央は

掌握できず、山岳ゲリラ的な戦いを強いられた。五ヶ山の戦いはゲリラ作戦である。

同じく『続風土記』古城・一嶽古城（一瀬村、市ノ瀬）の項では、天正14年７月の島津方による筑前攻めの際に、広門自体は勝尾城にて降参したが、家人の園部財部が亀尾・一の岳に籠もったことを記している。亀ノ尾嶺は敵に「かさ」（上方）より攻められて、本城へ撤退、薩摩方が亀ノ尾に向陣をとったけれどもその日の内には落とせず、夜中に筑紫勢は肥前へ落ちたこと、そののち大善寺に囚われていた広門が脱出に成功して、一の岳の秋月勢を攻め崩して入城、次第に勢力を回復して、勝尾城を挽回したと記している。

この事件については史料が多い。まずは同時代史料（リアルタイムに記された文献）をみる。第一は島津方の枢要人物であった上井覚兼の日記（『上井覚兼日記』大日本古記録）である。

（天正十四年八月廿九日条）

筑紫広門、五ヶ山へ被打入候由也

（三十日条）

筑紫広門再城之由候、就其、御行（てだて）之事

（九月）朔日

広門、去廿七日被忍出、先一嶽へ取乗、翌日勝尾へ被仕乗候、蒲池衆当番にて、迷惑仕由註進也（中略）、彼城も不番たるへく候由也（中略）、

終日各談合にて候　筑紫方如此之分別ハ、定而龍造寺一致候而、指立候て如此候らん、然者、彼堺之様体見申候分者、輙筑紫可召崩事可難成候、先日被仕崩候ハ、不慮之仕合候、剰、肥前（龍造寺）と同意候てハ、容易難被攻候（下略）

（御前＝島津義久）広門事、不被討果、中途ニ被召置候歟、言語道断、曲事ニ被　思召候、せめて其分候ハゝ、早々如爰元被遣候て可然之旨、被仰候処（以下略）

四日

（前略）御恥辱此上ハなく候、人の見申さぬ所にてハ、御落涙なさるゝ計也

脱出して一の岳城に入った広門は、翌日には勝尾城に入ったという。よほどに手薄な状態になっていたのであろうか。島津方には大失態で、島津義久はなぜ早く処刑しなかったのか、それがかなわないにしてもなぜ早く八代にまで連れてこなかったのかと叱責している。義久は人目のないところでは涙を流した（「御落涙」）とあるのだから、世間の笑いものになった悔しさは一通りではなかった。

第二の史料は『大友家文書録』（三、『大分県史料』33、天正14年７月～９月の項・237頁）と、そこに収められた豊臣秀吉御内書である。まず『大友家文書録』をみる。

七月島津忠長、伊集院忠棟、入筑前、撃筑紫広門、広門戦敗、以五箇山城降、実是月十日也、忠長錮之於筑後大善寺、一説曰先是高良山座主麟圭降属島津、於是忠長遣広門於筑後、錮麟圭家、進陥高鳥居城、斬城主筑紫左衛門佐、而附五箇山城於秋月種実、使星野鎮豊・其弟民部少輔・共筑後州士、守高鳥居城、陥其余二城

とある。大善寺幽閉ではなく、高良山座主宅での幽閉という説もあった。つづく九月の条項に

筑紫広門逃出大善寺之囚、催兵、得計千人、至筑前、攻五箇山城、斬城守坂田蔵人、板井大炊助・共秋月家士、復其城、而告黒田孝高等属之

とある。豊臣秀吉は労せずして城を二つも手に入れたわけだから、喜んだ。（天正14年）10月3日秀吉御内書が『大友家文書録』に収められている。

九月廿一日書状、今月三日於京都披見候

一筑紫主居城取返候由申越、尤之仕合候、右仕立悪敷様相聞候処、今度彼居城手入、忠節なるへき由尤候、入念、人数・兵粮・玉薬已下、安国寺令相談、可然様可申付候事

島津義久とは逆で、さぞかし笑いが止まらなかったことであろう。このようなことが可能になったのにはいろいろな事情や状況があったと思われるが、詳細までは分からない。覚兼らがいうように、龍造寺の動きが連動していたのであろう。筑紫広門が龍造寺政家あてに出したこの前後の起請文が龍造寺文書に二点ほど残されている（『佐賀県史料集成』三）。もっとも利を得たのは秀吉だった。秀吉こそが後ろでさまざまに手を打っていた。

以上の史料では五ヶ山攻めの詳細は分からないけれど、先の良泰由緒書では攻防の詳細が分かる。いくぶん時間をおいたのちの記述とはいえ、なにより当事者の回想である。貴重な叙述だ。

大善寺を出た広門は、夜中に秋月家老坂田蔵人、板並大炊（先の史料では板井。板井が正しいか）が千余りの人数で守っていた一の岳城（一ノ嶽之城）に着いた。使者を遣わして開城を要請したが、断られる。その日の卯の刻（朝五時）に攻めかかった。城中には鉄砲が多く、手負いも出たが、みな塀にとりつき、本丸には我ら（良泰）が一番乗りした。坂田蔵人は我らの槍にて討ち果たされた。二の丸には広門小姓衆七人が一番乗りしたが、五人は内よりの槍につかれて相果てた。浅手だった二人（高原新兵衛・後瀬助兵衛）は刀で奮戦し首を取った。本丸を先に確保できたので、劣勢であった二の丸勢を本丸に引き取った。板並大炊は台所口にて討ち死にした。広門が登城して首実検をしたところ、甲頸三百七十三あった。勝ち鬨を上げて山下の百姓の所へ宿を取った。戌の刻（夜七時頃）に広門からの使者がきて、夜中に大儀だが、勝尾に行き、薩摩方として在番している蒲池兵庫に使者に立ち、城受取の交渉をせよと命令された。われらは今日の戦いで腕に覚えのある者は三人が討ち死にし、手負いも十人以上いるので、夜中に勝尾に行くことはとうていできないと断ったが、家中の者といえども大善寺にいる間にちりぢりになってしまった。それでもわれらにはいまだ四五百の兵があるということで、承知し、夜中に三里の道を歩み、夜明けに勝尾城に着いた。城に使いを立て、受け取りたいと申したところ、城を開け退け、一人としていなくなった。

勝尾城に登ったところ、基養父両郡の百姓がお礼に続々とやってきた。二三日して広門もやってきて、近在の敵方諸処を焼き払った。こうして太閤様の御出馬を待った。

『覚兼日記』の記述にもよく合うし、当事者の発言だからリアルである。ただし373という首の数が正確なのかどうか、誇張が含まれているのか、いないのかは分からない。

五ヶ山城は不思議な位置にあったことになる。たしかにここを確保できれば、劣勢挽回が可能になることがあった。

なおいま残る一の岳城の石垣遺構は、この時代にしては新しい印象を与える（本書30頁、Pho.Ⅰ4-2-3）。おそらくはこの峠と城の重要性を認識した黒田藩が、近世に入ってからも城地を維持管理していたのであろう。いったん事あるときは、いつでも再利用できる状態にして

いたと考える。

五ヶ山のなかで、道の分岐として最大のものが、七曲道と坂本道の分岐点である。小さな峠のわきに、猫城（白土城）が置かれた。小さな城であったが、街道押えの城で、虎岳城に同じ意味を持った。わずかな手兵が置かれるだけでも、通行者には大きな脅威を与え、軍隊によるその突破には多大な時間を割く必要があった。

なお『続風土記』虎岳城とあるのは陸地測量部地図による限り、亀尾峠東の城、つまり亀尾城を指そうが、「城主不詳、麻生氏が端城なりと云伝ふ」としていて、筑紫氏との関連は不明瞭である。峠を挟む二つの城（亀尾城・一の岳城）は、相呼応するもので、平時には関所の機能も果たしたことであろう。猫城、虎ヶ岳という比喩は、それぞれの役割を例えるものでもあった。

峠を下ったところにも城がある。塩買峠を下れば勝尾城、七曲峠・坂本峠を下ればいずれも綾部城があった。綾部城は元亀二年（1571）、龍造寺氏の攻撃によって、綾部鎮幸が敗れるまで綾部一族の城であった。しかしのちには筑紫氏の城となり、城督として筑紫四郎右衛門尉が居城し、のち龍造寺氏に譲られている（前掲「筑紫文書」・城数之覚）。城は峠・道の押さえとしてあった。道は経済流通そのものでもあり、軍事そのものでもあった。

ⅲ．肥筑国境争論

1　元禄六年・筑前板屋と肥前西小川内の境論

A　小川内周辺の論

脊振山相論（争論）といえば、天和３年（1683）に発生し、10年を要して元禄６年（1693）に幕府の裁許によって決着した肥筑国境相論、すなわち肥前国神埼郡久保山村と筑前国早良郡

Pho.Ⅲ2-3-1　早良郡絵図（福岡県立図書館所蔵・河崎文書。右が小川内境で、東から古川、クビリ、栗穂、妹路釜、高野頭の地名が、脊振山頂の西に魚釣谷頭、車越の地名がある。）

板屋村、脇山村、椎原村との相論が知られている。このときの相論は、二重平と呼ばれた山頂から西・南に下った一帯広域の領有をめぐって起きたものだった。五ヶ山（那珂郡）は従来の研究では、二重平相論の当事者ではなかったとされている。相論は早良郡と神埼郡の間でのものだったからだ。しかし実際には国境を挟む肥前西小川内と筑前板屋もまったく無関係ではなかった。このとき肥前側は、両国国境は往古より高障子からクビリに至る線と主張したが、筑前・板屋村側は新儀であるとして承知しなかった。

肥前側は、国境は往古より決まっていて、明白であると主張した。このときの肥前側の主張を網羅する「光茂公譜考補地取」『佐賀県近世史料』（１－３）には、以下のようにある。

是（＊弁財天）ヨリ東ハ小川内ト申候テ、嶺ヲ越、筑前内へ肥前ノ内指入居申候（371頁）

段々峯分ケ上宮岳東、高障子ノ辻迄是ヨリ谷ニ下リ、小川内ト申候一村ノ在所、肥前石高ノ内ニテ人家田畠御座候、谷ニテ候故、川ヲ限リ、両国ノ境往古ヨリ相分リ申候、北ハ筑前板屋村、南ハ肥前国小川内村、谷続平地ニテ、川ヲ境ヒ、双方ヨリ田畠作リ来候、此小川ノ頭ハ、高障子辻ヨリ落候谷川ニ付テ、峯ヨリ下ハ谷ノ水筋ニテ、古来ヨリ国境相分リ候（364頁）

小川内村ノ儀、谷ニ下リ両国ノ在家田畠御座候ニ付、川ヲ堺、北東ハ筑前、南西ハ肥前、東ハ筑前山、西ハ肥前山、其間ノ谷川ヲ分ケ、東小川内ハ筑前、西小川内ハ肥前ト往古ヨリ堺目無紛候（372頁）

小川内村ハ一村ノ地ニテ在家田畠御座候（373頁）

これに対し筑前・東小川内は、肥前の主張は新儀であって認められないとした。評定所における当事者千右衛門（筑前側）と五左衛門（肥前側）のやりとりが逐語記録されている（同上、光茂公譜考補地取五、『佐賀県近世史料』一の三）。それによれば、肥前側は立岩からクビリが境界で、谷川であることはまちがいない。高障子峯右側の水流に落ちる谷が古来よりの境であるとした。くびりについては「西小河内村・板屋村境　くひりと被申候所より東小河内境」ともあるし、『筑前国早良郡図』（福岡市博物館・藤井靖司資料、ほぼ同じ絵図が福岡県立図書館・河崎文書にある）にも位置が示されている。

いっぽう千右衛門は唐船岩から立岩に見渡し（見通した線）であるが、いったん川に沿って、三渡瀬に出る。そこよりは谷川伝いに東に登り、そこの立岩が境であると伝え聞いている。立岩からは谷に下り、東は峯分けである。魚釣谷、牛宮谷、花木原は従来炭焼きをしてきたところで、67、68年以前に野火（山火事）にて山が焼けるまでは炭焼きをし、運上を納めてきたと

Pho.Ⅲ2-3-2　脊振山・脊振ダム

Pho.Ⅲ2-3-3　五ヶ山

ころだと主張した。五左衛門は立岩が境界であることは承知できない。下の谷川が境界であることは筑前衆も前々より了解していたことである。今回立岩が境と主張して谷川の半ばから尾にかけて新たに境だとして踏査をしていったが、西小川内村になんの断りもなく領内を押して通過したことは遺憾である。このように主張しており、小川内境についても係争となった模様である。しかしこれは二重平という大問題に比べれば、きわめて些細なことであった。

年未詳板屋村百姓喜兵衛申状（文中に「亥ノ十一月、同十二月」とあり、貞享元年か。『筑肥国境脊振山争論文書』秀村選三編・地域史資料叢書1）によっても、

70、70年前から板屋村は古野山が荒れたため、うおつり谷、花ノ木原にて炭釜をこしらえ炭焼きをしてきた。肥前側から「その場所は肥前の狩山であるから筑前側で炭を焼くことはできない」という主張があると聞いたので、久保山村にたずねたところ、あれは筑前（＊板屋）の内山であるという回答があった。肥前の狩山であったというように佐賀藩当主による狩などが行われていた。

「当時論地ニ成居申候、牛宮谷、花木原、魚釣谷」とある（331頁）。「早良郡図」（178頁）に魚釣谷頭がみえる。車越の東に当たり、いまの椎原車谷の反対側、肥前側に相当しよう。牛宮谷は後述（次頁）のように現存するが、「上宮ヨリ南、牛宮谷辺ノ儀」（355頁）に合致する。なお論所に鋳師石竈があり、それは牛宮谷之尾にて鋳物師が炭を焼いたからだとされている（369頁）。「早良郡図」には稜線より東の国境線上に「妹路釜」という地名をのせている。鋳師石竈のある場所はいくつかあったのであろうか。花木原という地名もいまの西小川内に地名として残っている。ハナノキは樒（シキミ）の別称というから、各地に植えられていたのかも知れない。

B　板屋・久保山間の論地

係争地については『脊振村史』（1994）におよその比定がされている。脊振山頂の直下、西側である。比定の根拠は明治初年絵図に記された「篠平野」にあるようだ。「篠平」はたしかに主要な係争地だが、耕地「篠平」と原野「篠平野」が同一の場所なのかどうか。古文書に記された論地地名はまだまだ多い。『村史』記述はそれらを具体的にふまえた比定ではないと思われた。

今回佐賀県側、久保山田中（脊振村、神埼市）の地名調査を行うことができ、いくつかの論地の地名が判明した。いずれも土地台帳記載地名である小字ではなく、聞き取りによってしか収集できない通称地名（しこ名）である。炭焼きに従事した人が詳しいが、昭和30年代に炭焼きが行われなくなった。いま、50代以下の世代は山の地名を知らない。

1　ニンジュウ

ニンジュウは田中より山側に登った田地で、田中の枢要耕地といえる

久保山より二重平拾弐丁、二重平より弁才天迄十六、七丁

（『筑肥国境脊振山争論文書』地域史資料叢書・12頁）

弁才天山（上宮岳）から17丁（1.8キロ弱）とされた二重平に該当しよう。脊振山（上宮）山頂から下って２キロの位置にある。脊振神社下宮（旧多聞坊）のわずか500メートルほど東の位置にあり、田中の集落にも近い。「二重」では古田なのか開田なのかの検証が行われている。

2　ササンジャーラ

二重（ニンジュウ）の東はウーコチ（オオコチ）川である。それを隔てて、イシカキタ（石垣田）、ササンジャーラと続く。ササンジャーラは現在、耕作放棄されて植林されているが、かつてはウーコチ川・ササンジャーラ井手が灌漑する水田であった。水田の形状も残されている。ササンジャーラ（篠平・笹平）でも新開地なのか否かが争われて、篠平古田跡の検証が行われた（『佐賀県近世史料』469頁）。ここには一晩で石垣を築いたという伝承があるらしい。

3　ウシグーザカ・シェイバの石飛

ウシグーザカという地名がある。争論では牛宮谷にて久保山村百姓が炭を焼こうとしてさしとめられた、また椎原村が炭を焼いた場所とされている。

脊振村田中の人々はウシグーザカでさかんに炭を焼いた。一カマから50俵の炭が出るから、牛は八俵、男は三俵、女は二俵をかついで三日から四日がかりでおろした（１俵は15kg）。牛

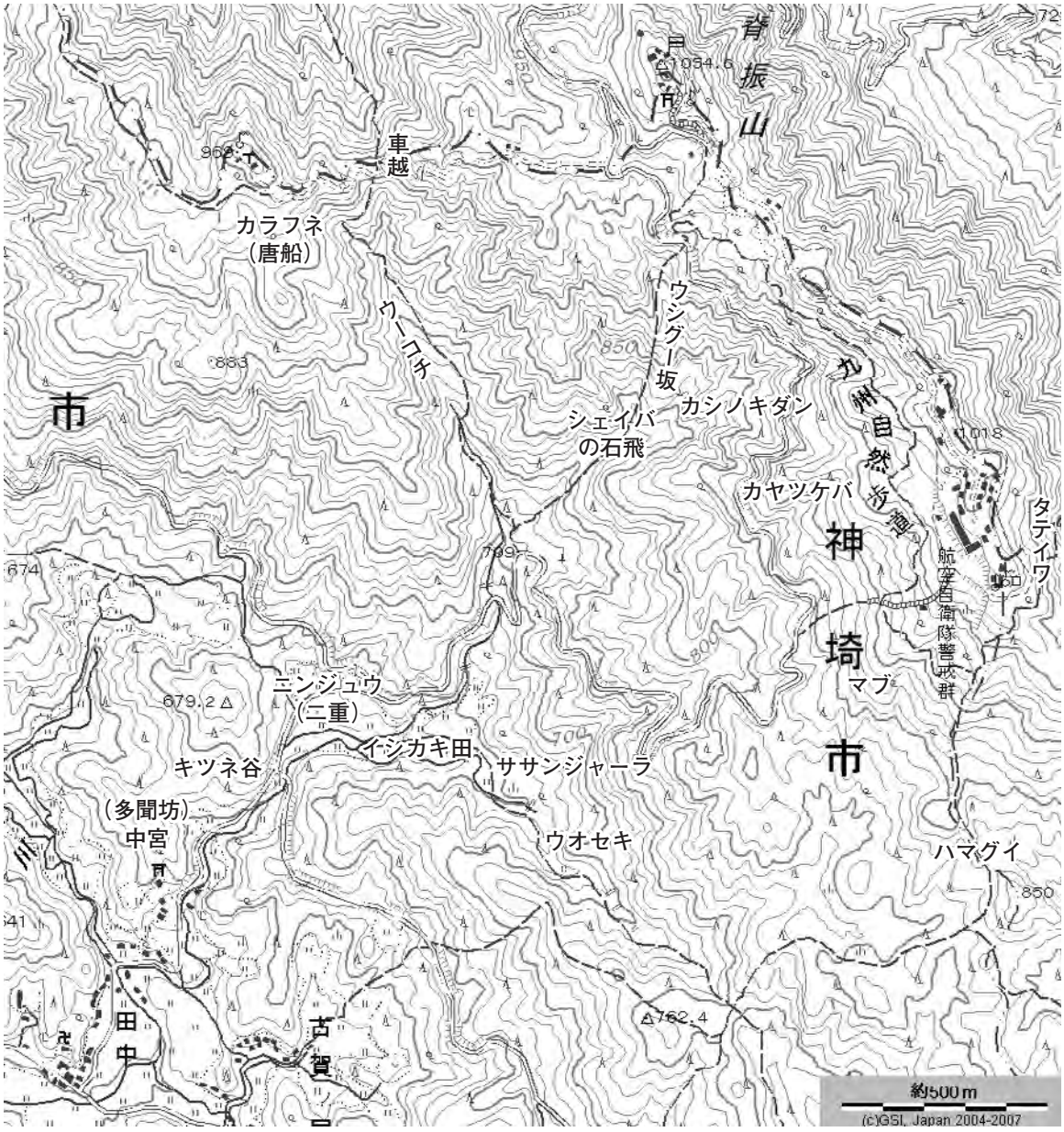


Fig.Ⅲ2-3-1　神埼市久保山・田中のしこ名（1/25,000）〈国土地理院発行地図〉

が川沿いに上り下りした坂がウシグーザカであった。

　牛宮谷・脇　塩井谷（『筑肥国境脊振山争論文書』46頁）

あるいは

　牛宮谷汐湯場下（同97頁）

とあるように、牛宮谷の一部で脇からの谷が塩井谷で、汐湯場があった。この地名は「シェイバの石飛」として記憶されていた。

　「シェイバの石飛、そがんとを登りよったもん。うしぐーざかの下の方だ」。

登山道沿いを指した。神水川をよくシェイガワという。シェイバ（神水場）はお塩井取りをする塩井場だった。

4　マブ

　立岩（自衛隊基地）の西側をマブとよぶ。マブ（間歩）は坑道を指す。国境争論に「かねほり」が頻出する。筑前国板屋村によれば

此方よりかねをほり申たる跡所々ニ有之、立岩之浦合ニ御座候（『筑肥国境脊振山争論文書』64頁）

とある。マブは金堀の跡だ。

　ほかにも弁財岳南の平の内、桑河内、篠平、きつね谷、金山、桜の木山にマブがあったという（『脊振村史』381頁）。「きつね谷」は田中集落の北に、「桜の木」は田中の村南に地名がある。

5　カラフネ・ウオセキ

　ウオセキ（イオセキ）という地名は篠平の東にある。国有林との境界に近い。かつて山腹を流れて南の古賀ノ尾の水田を灌漑するウオセキの取り入れ口があり、多くの人に記憶される。板屋村から走った人物が、国境は「唐船より篠平・うをせきはた・くり山迄」（『脊振村史』382頁）といっている。カラフネ石は縦走路にある。気象台レーダ近くのザレ場で、南の展望がよく、いまも多くの登山者が休む。田中の人も周知しているし、福岡市立博物館蔵ほかの「早良郡図」にも明記されている。板屋村の村人が国境と認識していた線は、３つの地名が現存するから、かなり明確である。ウーコチ川という自然河川が境である。不自然な国境認識ではない。

　史料にみえる魚釣谷はウオセキとは別である。右の早良郡図によれば、車越と脊振山・役行者の中間が魚釣谷頭だった。車越は北側（福岡県側）、椎原・車谷の頭で、今日ヤハズ峠とよばれている。よって魚釣谷に該当しそうなものは、ウーコチ川に流れ込む東の谷か。文脈からはウーコチ川そのものを指すようにも思われる。伝承されていないのは筑前側の呼称だったからであろう。

　筑前側が国境線と主張した三渡瀬という地名は、いま久保山・肥前側では記憶されていない。しかし「篠平之下」が「三渡瀬近く」で、「三渡瀬の印杭の上が肥前領二重平」であった（『佐賀県近世史料』444頁）。さらに「三渡瀬西ノ田中」とあり、田中の東である（313頁）。「三渡瀬より神水場迄拾壱丁四間、三渡瀬より唐船迄拾弐丁八間」ともある（『脊振村史』383頁）。場所はおおよそ推定できる。おそらくウーコチ川とイオセキ川の合流点か、その近くであろう。

　『脊振村史』が引用する『肥前国官社記』によると、天正11年（1583）の山論に高祖原田と龍造寺の間で決定された「昔ノ国境」は「クビリ立岩・花木原・二重平・三ツ渡・魚釣谷・立

石・唐船・シヤブ頭（辻シヤウブ頭、菖蒲）」で、それが元禄六年の裁定で山頂の峯分になったと書かれている。二重平・三ツ渡が国境ならば、まちがいなく西の山麓に筑前領が伸びていた。戦国時代、原田少輔の時分に、早良郡内、西は一の鳥居、北は鷲ヶ嶽、東は九千部嶽、南は三渡瀬までを寄進し、その寄進状が残されていると板屋村は主張した（『脊振村史』380頁）。

「車越之大谷ヨリ此川筋ニ境ヲ引下シ候ハ、無紛境目」（『佐賀県近世史料』444頁）

とある。細部の出入りはあるかもしれないが、おおむね国境はウーコチ川筋にある。境界認識は巨視的には一致している。村史が依拠した明治図の「篠平野」は耕地「篠平」の上部にあった野をいおう。係争地はずっと下である。

論所となった地点は地名調査によって明らかになる部分が多い。一帯は国有林になった。また筑前側は敗退し、排除されたから、筑前側呼称は使用されずに消滅した。いまでは位置を確認できない地名も確かに多いのだが、それでも収集できた地名によって、争論のようすが具体的に、詳細になった。

稜線（分水嶺）によって確定されず、越境する国境線のありかたについては、潜在的に不信の念があったようで、「ミのを切ニ、何とて不仕候か」（どうしてミのを切目にしないのか）という発言もある。「みのう」は尾根の頂上の意味で、「みのうまで」というように今も使っている。

「みのお切ならば、西小河内（西小川内）は筑前に入るはずだと発言したが、いまだその点に関する回答はない」（71頁）。あるいは

「我々共見申候而ハ、筑前之内ノ様ニ見へ申候か、何とて西小河内共ハ山ヲ越候か」

と、山を越えて肥前領があることへの疑念は、なかなかに払拭されなかった（88頁）。

西小川内が肥前領であるという認識は、元禄以前はむろん、国絵図が作成された正保以前にも確定していたであろうが、稜線をこえて飛び地があることを不自然に思う気持ちは、元禄段階でも、依然根強かったようである。西小川内が肥前領となった歴史的な経緯には、稜線より西に当たる地域との交換などがあった可能性を想定できるかと思う。

係争地であった牛宮谷・魚釣谷には筑前板屋、肥前久保山の農民が炭焼きに入っていた。山を焼き草切山にしたこともあった。両国両村の共同用益権があったと考える。山頂弁財天宮補修が両国で行われてきたことも、共同用益権と一体である。

秣山、草山などにはもともと境界意識は稀薄だった。のちに見るが佐賀県三根郡上峰町大字堤字三本黒木の秣場は養父郡・三根郡・神埼郡の草山、すなわち三郡立合の山であった。明治

Pho.Ⅲ2-3-4　脊振山と南麓

Pho.Ⅲ2-3-5　五ヶ山・小川内

9年（1876）官有地編入時に境界査定が行われて紛争になった。もともと境界線がなかったところに境界線を設定しなければならなくなったから、境界紛争が起こった。

国絵図作成などで国境意識は強くなる。共益地にも国境を引く必要が生じてくる。争論は必然的に発生した。それまでは国境は二本線で、両国の意識は相互に越境していた。それでかまわなかったのである。

二重平は筑前側の用益が認められてきた土地には違いないように思われ、いわば一種の共同利用地であろう。しかし筑前側はそうしたことを証明し、幕府に承認させることはできなかった。

なお久保山・田中、古賀ノ尾での聞き取りに際しては田中・服巻正夫氏（昭和8年生まれ）から多大な情報を得た。またそれを森崎満、西川進、納富照海氏らから再確認した。また古賀ノ尾では築地力（大正15）、吉浦文夫、築地はま（大正13）の各氏からご教示を得た。

2　九千部山から坂本峠の国境石設置

現在、五ヶ山と周囲には国境石が点々と確認されている。これは天和・元禄の相論結果によるものなのだろうか。『栖』26、特集「国境の石をめぐって」（1995）によれば、九千部山の尾根筋にある国境石は、宝永元年（1704）から二年にかけての建設であることが、対馬藩・宗家文庫文書によってわかる。長忠生「文書にみる九千部山尾根筋の国境石」（同上所収）によって概要を紹介すれば、このとき福岡藩側が設置した碑を対馬藩側で確認した。境界そのものに建てた場所は、権現山、大峠の二ヶ所のみで、「何れも境石、筑前の内に少し宛、引き取り立てこれ有り候由」とあるように、他の石は境界線上そのものではなく、少し引いた位置に設置された。これは坂本峠の近辺でも同じであって、緩衝帯としての国境域を設けたものである。

二重平・元禄裁定からおよそ10年が経過していた。一敗地に塗（まみ）れた福岡藩にしてみれば、国境線自体の確定・確保を早急の課題としたものであろう。

設置場所は

1権現山　2大峠　3藤内が崩・とうないがくえ（筑前でいう塩買）　4象石　5薬師峯　6塔尾か（九千部山山腹）

＊以上は河内村・市ノ瀬村境、当初は無銘石を宝永元年11月4日に建て、確認を得たのち、刻銘石としたのが12月3日。

7笛草山　8制札の本（水のみ頭）

＊以上は河内村・道十里村・桑河内村境、宝永2年4月22日建立。

9高尾山　10二管（にかん）山（たらむせ頭、たうむせ頭か）　11かど石

＊以上は牛原川内村・道十里村・桑河内村境、宝永2年4月22日建立。

12ほこ石　13大谷頭　14三領境

＊以上は牛原川内村・大野村境、宝永2年4月22日建立（長論文に6月とあるが4月ではなかろうか）

このときの国境石は文言が共通していて、いずれも「従是北筑前領」「従是西北筑前領」というものである。碑文の筆跡も同誌掲載の写真・拓本を見る限り極めて似る。同一人のものであろう。筑前側で建てたから、筑前の文字しか記されなかった。

この筑前領と対馬・田代領との境界石に続いて、七曲峠までにさらに九つの国境石が残されている（13～21）。その文言は先のものと少し異なって、「従是北筑前國」「従是西北筑前國」と「領」の文字が「國」に代わっている。筆跡も先のものとは異なっていて、筑前の「前」のうち、月の部分が耳のような印象を受ける。これらは筑前黒田藩と、肥前鍋島藩との境界に建てられたものであり、さきの対馬・田代領との境石とは別の時期に建設されたと考えられる。文言は先のものに類似しており、肥前側が建てたわけではなく、筑前側が建てたことは明瞭である。

次に七曲峠から坂本峠北を経て谷川まで14個の国境石が確認されている（22～35）。これについては主としてさきの『栖』には言及がない。『栖』は鳥栖市域を扱う雑誌だからであろう。この分は『国境石』（くにざかいいし、那珂川町文化財パンフレット・那珂川町教育委員会）によりつつ、述べてみよう。

碑文の文字は「従是北筑前國」22・28、「従是西筑前國」24、「従是東北筑前國」32・34・39、「従是東筑前國」37、「従是南肥前國」23・26・27、「従是東肥前國」25・35、「従是西南肥前國」29・33、「従是西肥前國」36・38、とある。すなわちこれらの区間は筑前と肥前と両方の国境石がある。それより東には筑前領が建立したものしかなかったから、建立の経緯を別にするものである。

これらは肥前側と筑前側の石が近接するものが多い。27－28、29－30、31－32、38－39は対面するかのようである。24－25、33－34も、いくぶん離れてはいるが、基本は同様であろう。おそらく両藩が立会しつつ、ほぼ同時に建設したものと考えられる。

3　札木山・地焼争論

さて二重平争論決着のあとも、福岡藩・佐賀藩領の境界争いは、坂本峠周辺では継続して行われていた。

国境石は当初の争論地を示すわけではなく、争論後の調停結果を示す。肥前側は当初、現在の国境よりも東、また北が国境線であると主張し、筑前側は西または南が国境線であると主張したはずである。

こうした争論が起きる原因は国境の山々が両国数か村の草山（秣山）つまり入会山であったからではないかと考える。現在の古老が記憶する限りでは国境の山は雑木山だったという。しかし明治35年地図に明瞭なように、この国境の山は草原であった。牛の飼料を得るための草山であった。

そこでこの周辺一帯の争論の内、現代に至るも決着を見ない、佐賀県での事例についても紹介しておきたい。

その１　肥前管内・周辺草山の相論

国土地理院から刊行された平成九年刊の２万５千分の１地図をみると、中原町と上峰町（以上は旧三根郡、それぞれ現在はみやき町、上峰町）の境界は未定となっている。高柳（中原町）と塚原（上峰町）の間に引かれた境界線は北には続かず、そこで消えている（筆者は東脊振村・神埼郡、現吉野ヶ里町との境界を未定とした従前図もあったと記憶する）。

『角川日本地名辞典・佐賀県』高柳村の項（411頁）に、八か村の入会山であった「三根郡

草山」をめぐって宝暦六年（1756）神埼郡大曲村と三根養父両郡五ヶ村で争論となり、藩の見分を受けた。文政四年（1821）にも争論が再発したとある。このことは『東脊振村史』（1982）ほか『峰』創刊号に掲載された鶴田浩「上峰町北部境界について」（刊行年未詳）も詳しい。これによれば

１宝暦六年・文政四年（鎮西山北部が対象か）

２明治九年の境界査定

の二度の争論があった。上峰村大字堤字三本黒木の秣場は養父郡・三根郡・神埼郡の草山であった。明治初年、官有地編入時に境界査定をした。

養父・三根の郡界は

福岡県境字札木ノ辻ヨリ南千年中ノタヲ、戌亥谷、堂ノ谷、大塚山、狐谷ヲ以テ養父・三根ノ郡界

三根・神埼の郡界（上峰町・東脊振村境界になるはず）は

ダゴン堂登り口ヨリ北同県境字観音坂迄峰道ヲ以テ三根・神埼ノ郡界

とある。中原村は近世には三根郡であったが、明治初年には養父郡に属した。この論考に添付された明治19年製、昭和25年写の三本黒木国有原野反別二百五十町歩略図に書かれた地名は

筑前国境・札木の辻・時焼・千年中ノタヲ（以下略）

とあって、元禄の肥筑国境争論に登場する地名はここにも顔を出している。

その２　札木山・地焼争論

以上を踏まえながら、つぎに地焼・札木山をめぐる論所をみる。この山々の地名に関する記述を確認しておこう。

まず１『筑前国続風土記』には以下のようにある。

大野より南の方、肥前の内を四五町通り、川を越え、また筑前に入、十町余行て嶺あり。地焼嶺といふ。谷川の流れ出る頭を境とす。地焼の前の嶺を小嶺と云。道祖神両所にあり。又烏帽子岩と云岩あり。地焼嶺より肥前の方に、四町許ゆけは、彼国よりたてし関所あり。

２『筑前国続風土記附録』

本編に見へたる地焼嶺・小嶺・道祖神・烏帽子岩ハ皆肥前国西小河内に属す。

３『筑前国続風土記拾遺』

大野より肥前神埼にゆくには、村より十町斗道の左に山伏塚とてあり、又其先に烏帽子岩といふあり。地焼とて峠の下に野あり。此辺両国の地入交りて犬牙の如し。目くら落しとて、馬のかうねの如き赤剥の上に、肥前の境石野石立り。

１の貝原益軒の時代には、大野から峠（地焼嶺＝地焼峠＝坂本峠）に至るまでは、最初は肥前領を通過し、つぎに筑前領を通って峠（嶺）までは筑前領であった。ところが附録の段階になると、烏帽子岩より上は全て肥前領となっていた。そして拾遺になると、両国は入り交じって犬の牙のようだとある。犬牙錯綜、つまり犬のきばのように、互いに食い違い入り組んでいるという。これを歴史的変遷と読むか、調査の精度とみるかであるが、前者とすれば、国境ないし道筋はその都度変わっているかのようである。じつは、前掲『国境石』によると、旧街道と国境の線の関係は、大野地内では肥前領を通過し、上部になると（35より上）では筑前領を通過している。『続風土記』本編の記述が、じつはもっとも旧状にはあっている。

Pho.Ⅲ2-3-6　那珂郡絵図

　地理的記述は１の本編、２の附録が
１烏帽子岩・２道祖神・３小嶺（地焼の前の嶺）・４地焼嶺（関所四丁手前）
３の拾遺が
１山伏塚（現存）・２烏帽子岩・３野（地焼）・４目くら落とし（馬のこうね状の赤ハゲ）
となる。さきの肥前側の史料を以下に示す。県境一帯に札木の辻、南に時焼があった。
御領他領境在名録（『東脊振村史』昭和57・所収）
北筑前山
一　札木山　神崎郡小川内村　但双方山峰尾両水流境、筑前側えの往還あり　大庄屋小宮善左エ門　大山留重永清兵エ
北筑前
一　寺焼　　同郡同村　　番人侍・足軽なり　　右同人
但此筋宝永年中境論候所双方歩寄境目差分・絵図証文取替・境石立て方今に歴然
東は筑前村
一　大野　同郡小川内村の内、但小川内川境
右同人　大山留　平山新蔵
東同嶺小川内村
一　小川内村　　右同　　右同　　右同人
東同嶺板屋村
一　くびり　　右同　　右同　　右同人
　　但此所より鬼ヶ鼻之間、先年筑前国と争論、公儀御役人御下向御裁許之標示弐拾本相建居候
東右同村
一　千葉岳　　右同　　但谷境　　右同人
　なお福岡県側の認識では、札木山も地焼も福岡県側に入りこんだ地点の地名であるという意識があるらしい（060307　築地徳実さん）。点の地名ではなく、面積をもった面的な地名であったものか。
　以下は、築地徳實・裕御夫妻からの聞取りである（平成18年３月７日）。
――（徳実さん）ダムの無線塔のあるところ（597ｍの少し北）、県境よりちょっと福岡県に入っている、ジヤケって所がありますもんね。ジヤケはちょうど、うちの山境、境界ですもの。民有林です。
ああ、フダキノツジってあるもんなぁ。ジヤケから続いとるもんなぁ。フダキノツジは県境ではない。福岡県にだいぶ入っている。いま工事しよろうが。あれからフダキノツジって登れる。フダキノツジから無線塔に続く。フダキノツジって、山の境界の道。三角点より北側。メクラ落としは知らんなぁ。中峠、牟田、知らん。ジヤケへ道はない。
(明治の頃には草山ですけど？)
自分が知る限り、草山ではなく、ゾウキ山だった。
(やすさん) エボシイワってききよったもんねぇ。
　よってこの認識と筑前国郡図をあわせ考えれば、ジヤケもフダキノツジも点的な地名という

よりは領域的な面的地名ではないかと考えられる。

争論の経緯を示す筑前側の史料を引用する。

「黒田新続家譜巻十一」「綱政記四」元禄九年～元禄十三年より

那珂郡大野村の内地焼ハ、肥前國神崎郡西小河内にさかひ、殊ニ其地、入ましりたる所なれハ、兩國の百性數年争論する所也。此度際圖取かハしの事に依て、去元禄十三年綱政命有て、此方家老中より際繪圖取かハしの相談、双方役人申談せしむへき旨、飛札ニて申遣し、其後彼方役人有田主計・枝吉三郎右衞門・竹田權右衞門と、久大夫・八右衞門と度々書通ニ及ふ。境目の繪圖、たかひに借覧しけるに、彼方正保の古繪圖に替る趣もなく、背振山御裁許の所はかり、改候由、申來る。地やけ境も分明ならす。此方新古の繪圖に各相違の所も有しかハ、相談に及ふへき處に、江府より御いそきの旨にて、隣國の境相調さる所ハ、其儘持参し、江戸におゐて、雙方役人申談し、相極むへき旨申越しけれハ、 此地におゐて論談に及ハす。去十三年の秋、各江戸に持参しける。江戸において伊左衞門・武助・與兵衞共に大和守へ参り、長濱次左衞門に面談し、肥前境の際圖を渡し置ける。公儀繪圖所の例、境圖出入ある所ハ、雙方長を断、矩を補て繪圖を改む。狩野良信か門弟繪圖所の頭取磯野彌兵衞と云者、此方肥前國共に繪圖うけ合調へけるか、伊左衞門方へ申越けるハ、其御國と肥前國と共に境の所を少々改置候。最初寫し候繪圖に少々ちかひ候間、先一覧のために遣すへき由申越けるにより、山本源助を遣し、此方繪圖ハ規矩の器を以分間を定置、其上良信既に得心にて下繪圖成就したる事なるを、今以改めらるる事いかかに候間、此方へ來り役人共へ其趣を詳に申され候へと申ける。其後彌兵衞改たる圖を持來ル。一覧するに、第一地焼の圖出先を断、其外所々相違せり。彌兵衞申けるハ、佐賀役人衆地形に別條も是なき由申され候。勿論筑前繪圖ハ御念入たる事なれハ、其旨に随ひたく候へとも、彼方はかり改候てハ、役人の不念ニも成候間、此所を料見いたし候へと申され候故、かくのことく改候由申ける。武助・與兵衞申けるハ、怡土郡未の方ハ、公領なるに依て此方より分間に及ハす、形相はかりの圖なる故に、長短の出入最初既に望のことく、改置候。當領ハ、ことことと規矩に合せ、郡縣の周圍、山谷の高下までも、少の差語なき旨を、光之・綱政も聞ととけおかれ候へハ、今更爰許ニおいて、役人の心得として改候事ならさる事ニ候。しかしなから、佐賀役人衆出あひ、たかひの帳面を以て相校へ、此方分間相違候ハハ、宜きに随ひ、改め候へし。此方少も異儀を立候事ニてハ無之候間、此旨佐賀役人衆へ申談し給り候へ、と申けれとも、左様ニてハとかく相濟さる事に候間、幾重ニも中をとり、よろしき様に申談へき由にて、歸りける。佐賀役人、出あひ候とても、少も我意を立、何かと諍ふ事ニてハ、なき事なから、肥前境、すへて何の障も是なき處に、わつかの地焼のあらそひにて、事かましく、成行てハ、いかかなれハ、彼方役人と出會候事ハ、無用にすへき由、福岡よりも下知し給ひける。長濱次左衞門に相談しけれとも、雙方繪圖の出入ハ、補正して合せ置通例なれハ、所存のことくに成かたき故、次左衞門料見を以、彌兵衞に申付、ふたたひ、よろしきやうに、當國の際圖ともに相改め、佐賀方三分の二、筑前の方三分一を改めける。際繪圖、取かハさるる前に、飛脚を福岡に馳て、此旨を申遣し、第一地焼の模様を通覧せしめらる。几ハ、大野村前川筋を上り、烏帽子石邊にて川をさかひ、それより上、地焼に至てハ、古道筋を境と此方にては申傳へ、彼方よりハ新道筋を境と此方にてハ申傳へ、彼方よりハ、新道限りを境のよし、論しける。彼地分間の時、古道筋の谷頭ニてハ、形相よろしからさる故に、中谷筋を境にして、分間しけ

る。然るに此方、札木辻より猫嶺といふ處を境筋なる旨、彼方役人申候由、次左衞門語りける。猫嶺といふハ、佐賀より稱する名にて、此方ニハ其名なし。道祖神ある石塚の邊成へし。然れハ境筋甚相違し心もとなき故、福岡にて、再ひ役人を出し、分間して、山形を江戸に遣しける。然とも論地ハ、わつかの事なれハ、事決せすハ、畢竟、間地ともなすへし。事故なく繪圖の上にて、境を極め候へと福岡よりも追々下知せられ、江戸において次左衞門よりも、肥前の方、別條なき境なる旨、彼方役人申由にて、度々際圖をいそき、且此方繪圖の内に、札木辻・烏帽子石も有て、彼方形相、其趣に、かハらす。雙方少の補正ハ諸國の通例にて、殊ニ此方の圖を削補する事、 彼方に比すれハわつかの事なれハ、異儀ニ及ハす、際圖取かハして事濟ける。

川添昭二校訂『新訂黒田家譜第三巻』180～182頁

正保国絵図を改訂する必要があった。いわゆる元禄国絵図の作成である。二重平の問題は幕府裁定を受けて決着したが、地焼の境界は決定できなかった。筑前側は古道が境と主張、肥前側は新道が境と主張した。このときは国絵図作成の期限に間に合わせることが最優先されたようで、中間の中の谷で分間絵図を作成することにしたが、なお猫嶺までの境界については、両国に隔たりがあった。そこで分間測量をして福岡藩からは山形（山の地形模型図）を江戸に送ることにした。しかしその主張は正保図に比して、わずかな訂正ですんだし、福岡藩にしてみれば、佐賀藩側の訂正よりも、わずかですむものであった。

国境の境石については『筑前国続風土記』「肥前国あや部村へ越る道也、此所に境塚あり。筑前肥前の境なり」と七曲峠の境塚について記述するが、他の塚の記載はない。

また『筑前国続風土記拾遺』では上述のように「目くら落し」と呼ばれる「馬のこうね」（馬の背）状の地点には「肥前の境石（野石）」があったと記している。一カ所の境石の記述しかなく、他の石の状況は不明である。

みたように元禄13年の相論は図上で決着が付けられた。おそらくこうした解決法では、現地に境界指標を設置するまでには至らなかったことであろう。現在残されている国境石が設置されるまでには、なお時間を要したと考えられる。

坂本峠近辺の相対する両藩の境石は、国境が線ではなく、幅を持つ帯であることを示す。緩衝地帯ともいえよう。しかしこの帯は実は現在の県境には踏襲されていない。24―25の対面する両藩の石は二つとも福岡県内にある。27－28、29―30、31－32はいずれも佐賀県内にある。23は大きく福岡県に入りこんでいる。峠より五ヶ山に下っては江戸時代の国境の帯よりも東に県境が設定され、札木山周辺では南に下がって県境が設定された。そこにいかなる駆け引きがあったのか、あるいはなかったのか。それもわからない。

4　国境石

水没予定地域のなかに国境石がある。全部で４つあって、一つは転倒し、原位置を動いているようだ。ほかは旧位置のままで、よほどに水流の影響を受けない位置を選んで建設した。石垣の中にあるので運んできた石のように思われるが、あるいは基部は自然石なのだろうか。文言はみな同じである。

此石垣相障申間舗事
筑前國五箇山村

碑文の筆跡は同一人のものである。ただし一つ一つの文字は差異もあって、「まじく」の箇所が間舗としたものと、間敷としたものがある。つまり一枚の原紙を書いて渡したのではなく、一人が四枚分を書いて、それを別の数人の石工に渡したのであろう。

設置位置は中島状態で、国境石碑文の西と東に水流がある。現在では東が本流で水量も多い。ときによって水流に変化が生じやすかったのであろう。川には梁をかけたり、魚を捕ったり、また用水を取水したりで、権益が錯綜しがちだった。筑前側の意思表示として、この境界石を動かしてはならないと主張した。藩よりの資金の支援は受けたであろうが、建設主体はあくまで五ヶ山（五箇山）村であった。その点が先の札木争論を受けて藩自体が建てた国境石との相違である。

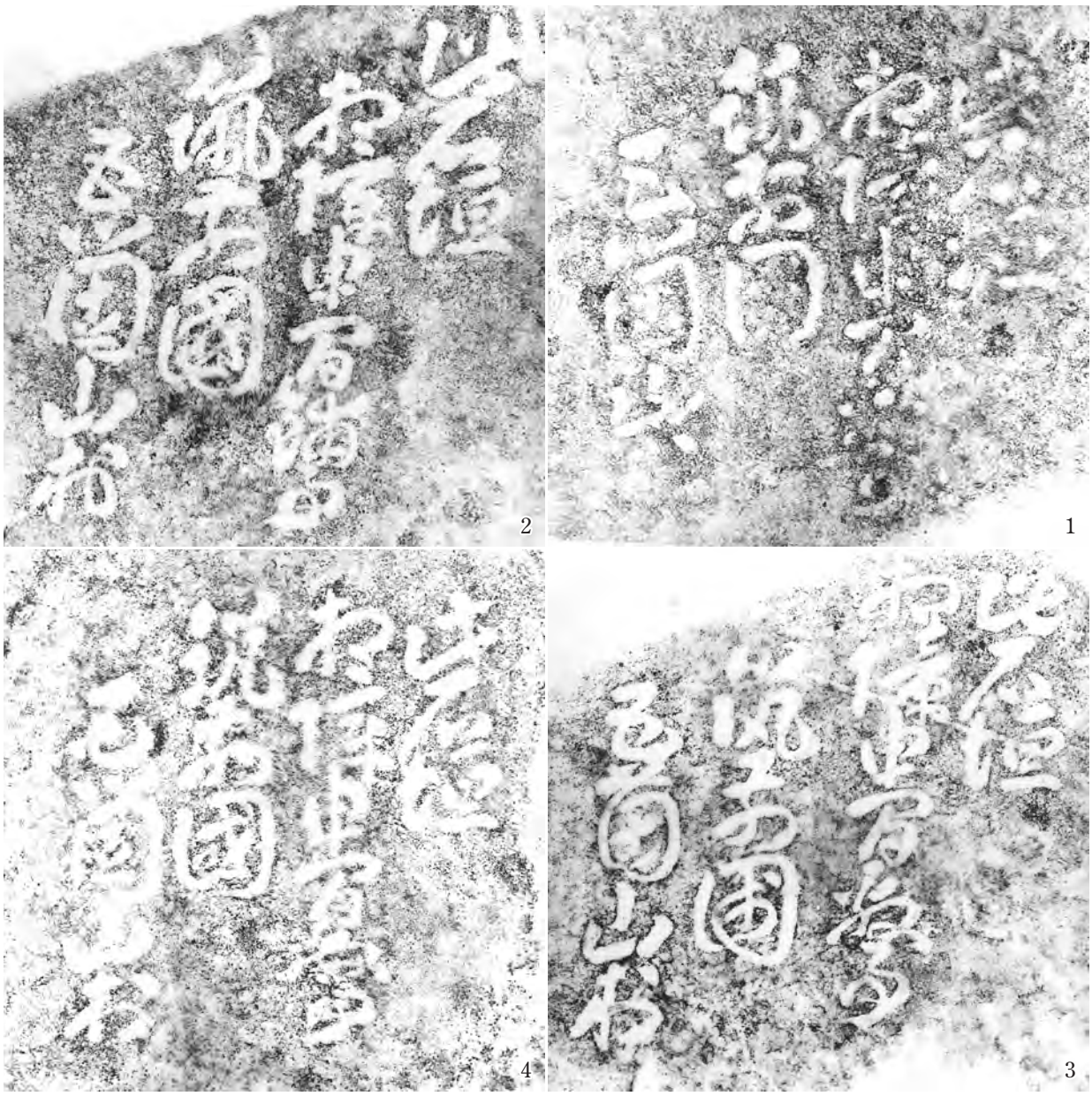


Fig.Ⅲ2-3-2　五ヶ山国境石拓影（1/10）
（下流から順に1・2・3・4）

札木争論の結果を受けた国境石は峠から下って、『栖』26報告の35で終わる。山伏小積石の近くである。ここよりは「従是川中境」とあるから、境界石の設置は不可能であった。中洲・中島状となるこの地点において、再度国境石を設置した。

5　山内刀指

近世、肥前側では住民の一部が山内刀指と位置づけられたらしい。山内とは佐賀郡・神埼郡の山地部をいう。神代氏家臣の後裔で、この地に居住した人々をいうようだ。刀指は文字どおり帯刀を許された人々であろう。

山内刀指由緒

佐嘉神埼山内の処、我等先祖以来、惣心遣御付置被候処委細新敷く能不申達候

一、御公私の法の処は沙汰に及ぼす万厳蜜に相守り小百姓に至る迄一流風俗悪しき処等の無き様内連々申諭可く侯

一、惣心遣御付なされ置き候に付いては勿論不刀指被宦山中住居の人小百姓に至る迄、自然御法及相背萬風俗悪しき処等之れ有らば其申付可く候尤も重き事柄に候半ば筋々相達し手当之有り候様御取斗申処に候条兼々相慎申可候

一、泰盛様御代より第一他より被官相成り絵人相増侯処桐き御法ついに被れ仰せ付き置き候　此方家督初めには御書き付相被され処に候共の末両山内大庄屋小庄屋江も跡方定規の如く相違無き様申達置く処に候条其の意を得可く候

『西小川内誌』に記されたこの古文書は現在確認ができない。文言も不安定で、厳密な史料批判が重要に思われる。しかし国境の村、西小川内に鉄砲を所持する刀指が置かれたことは、大いにあり得ることであろう。

〔服部英雄〕

Pho.Ⅲ2-3-7　立（楯）岩

Pho.Ⅲ2-3-8　国境石の調査

3　五ヶ山の地名と地誌

i．網取　〈2003（平成15年）９月１日取材〉

地名
いちのこーち：谷水がかり、ウエンタは良い田、反当５，６俵、麦も作った。
あいばたけ：田んぼがあった。寒天会社があった。
池尻
ごしょ（御所）：道の上。
もぐち（門口）：一の岳城の門。
ウエンタニ：門口の上。
マゴハチ岩（敵が来たとき弓で射たところ）
前田
えのき谷：前田の小川の支流。
しいのきぶち
はる
といしだに（とびいし谷か）：飛び石があった。牛はだぶだぶ横を行く。（飛び石だから、橋はない）大水が出てこっちへ帰ってこられなくなった。小屋もちょこっとはあったけど、泊まった覚えはない。水の引くのを待つ（あるいは下流まで下って橋を渡ったか）。
の（野）：牛用の草場。いまはダムサイトの横の檜山。
いせびせい（石びせい）：瀬はなかった。川がひいろう（広く）なっとった。中島。ヤエザクラブチは一のコウチの横。
にわとりぜ：小さな渕、河野さんのお宅の前の深み。前はボロンボロン、石飛び。
平石の石飛び：学校なんか飛び石を通っていった。
馬の子尾根：うまんこおね、馬の骨のような尾根という意味。「こお」に屋根の桁という意味があるらしい。

炭焼き

五ヶ山にある国有林全部、九千部頂上まで。みんなで50戸、50で切り分ける。小組合（こぐみあい）、世話人がよる。入札をする。一年中焼く。夏でも焼く。窯が上と下と離れている。２か所で焼く。窯は個人個人、１俵は15キロ、前んとは（以前は尺貫法）25斤っていった。キロに直せば15キロ。

国からの五ヶ山区への木の払い下げは一括。向こうのいう値段のまま（交渉はできない、高いと思えば入札しない）。それを区が入札して50戸に分ける。条件によって値段がちがう。一人で二つ分。兼業といっても農家の方がいくらもない。金といえば炭（炭の現金収入が米よりもよい）。世話人みんなで見てまわる。あそこはどうとか。入札料は（営林署からの）払い下げ値段より高くなる。

窯はひとつで100から100俵のうえ、できる。窯を作るまでは個人の仕事。木を入れて土をあ

げて叩く（窯は詰めた燃料自体が柱になって、上から土をかぶせて作る）。何人か、10人ぐらいで、窯打ち。講のごと、講（相互扶助グループ）みたいにする。よそから雇うことはちょっとなかった。窯自体、寿命はかなりある。去年の窯、人の窯じゃあるけど、使える。けどまわりに木がない。１年ごとに次の雑木に行く（周りに木のあるところへ窯は移っていく）。

薪炭材を焼いたあとは植林。床ざらい、杉植え、ねざらい。国の政策でほとんど（杉に）転換。カシ、ナラ、シイ。（ほんとうは）自然（林）がよい。炭を焼いたあと、どうかしたら、たまに（木の残りを焼畑として）焼く。小豆やら、蒔いたり、たまにした。近くのところせな、からわなならん（背負っていかなければならない）。めったにはせん。切畑焼きとか何とかいった。

おうこ（朸、負うこ）、人間がからって降りる。行きは道具、帰りには俵にしたと（炭俵）を持って、４つ持つ人もおった（４俵60キロを担ぎ降りる人もいた）。

（100俵も下ろさなければならない）わざわざ弁当なんかも持って行かない。一日、二日すぐに４俵いのうて、こにゃーならん。手ぶらで帰ってくることはない。地下足袋はいて。牛で出すことはした。

炭の検査は西畑（＊那珂川町）の人、１等、２等を決める。値段もちがう。優良炭は五ヶ山組合が燃料屋に売る。カシ１俵、1,000円、10俵１万円、木炭組合が売って、何％かを取る。

たわら、なわ、自家製、茅を切って「ダツ」（俵）づくり。全部自分、縄のうて（縄をなって）ダツ編んで。朝でも夜でも。たくさん焼いたけど、大もうけした人はいない。月に焼く量、決まっている。５へんも10ぺんも焼けん。窯１個で１週間かかる。窯踏み（火留め）、密閉、（密閉しても、ずーっと）火のついとるちゃなかろうかってぐらい熱かった。１月に２回。窯を二つ。去年のと、今年のと。いっぺん焼いたら次の木を（伐って）用意せにゃならん。休みはない。土曜も日曜もない。雪の日も雨の日も炭作り、たわらに入れる。骨折るわりには豊かではない。でもその頃のサラリーマンよりは良かった。わたしは窯３つ持っとりましたよ。まったくの失敗もある。窯のコウ（屋根）が落ちる。山火事になる。師走の24日には山に行かん。山の神祭り、12月24日、山の木を切らん。土用（禁忌）の話は聞いたことはない。炭焼きの道は良かったはずですよ、修理しよりました。板屋に行く道、板屋と特別な交流はなかったけど、屋根やさん、屋根葺きの職人さんにお願いに行った。

塩クジラや皮クジラ、佐賀、綾部の方から担いで歩いてきた。一番長もてするこんな大きなのを買った。山にぶら下げて窯の小屋の中、ちょっとずつ切って、ご飯のオカズ。

窯踏みは火を止める時期のこと。窯によってちがう。時間早うしたら、炭がやおくて火もてが悪い。遅くなったら、灰のごとなってしまって、量が少なくなる。夜じゃろうが、なんじゃろうが、火を止める。火を入れてから煙の色とかみて。寒暖計もあった。

（はじめ）白い煙が、（つぎに）青くなって、（やがて）見えんごとなる。それを見て止める時期を判断できる。（人によっては）ニオイもしんなさった。木の水分によってもちがうかもしらんが、最初がちがうだけと思う（煙の色の視覚判断、人によっては臭覚も加味。自分は焼き上がり頃の臭覚差はわからなかった）。

窯踏みが必ず夜中になった。その（火を止める）頃ですよ、今でもそうして行かれるとは思うけど、月もなか、まったく真っ暗ななか、飛び石を跳んでいった。提灯は持っていくことが多かったけど、提灯は雨降りには消える。真っ暗ななか、行って、赤土で煙突を塞いだ。近く

にある赤土で。

夜中に行くのはいやだった。１時頃に行かなかんなぁ、夜中恐ろしうて行ききらん。明日の晩・窯踏み。風の入る穴を小さくする。明日の晩か、明後日の晩になるかも知らん。どうかすると明後日の夜(経験で窯踏みの時刻を見計らって夜中に窯まで行くが､遅れることもあった)。晩の11時頃からのぼらなならん。１時間ぐらい窯の前で寝たりする。ねぼうしたらたいへん。冬でも熱うして寝られん。厚着なんかできん。汗びっしょり。

炭窯（の屋根）は竹が一番よかとです。下から持って行くとは、やおいかん。下は木にして杉の皮。上は竹。下をささこ（竹）で茅を置き、押さえを竹。窯小屋と炭小屋、両方屋根を付ける。トタンはいちばん弱い。煙の酢、酸味でやられる。茅の方がうんと強い。屋根が煙で固まってしまう。(結わえている）かづらもガチンガチン。

入札の場所、木の気というか、平地もあって真っ黒で、上から下に木の集めやすいところ、しまうときの分（運び出し、片づけのしやすさ)、(いろいろな条件を整理できている）頭のよかもんが勝ち。

入札、国からこうた金はきまっとる。五ヶ山の区に50万円、入札して、高う買うても、配当があった。その配当金を計算に入れてよい山を取った。

「負（お）うこ」(朸）はまだうちにありますよ。肩だけだから（余分なものは何も付いてないから)、慣れればいい。

きんま道、山に対して自分で作ります。木を寄せるため、牛にひっぱらせて（＊作るときに牛を使役か)。索道でも出した。あとになって近くの５～６人でやった。こっち（炭の入った袋か）が下がれば、空（から）があがっていく。よう破れよった（落ちた)。下の方で煙が上がる。落ちたら商品には、なりゃせん。100俵のはずが70俵、80俵。炭のクズばっかり。イロリにいれた炭、長もてする火の「あたり」とかね。炭のクズはけっこうできる。うちに使（つこ）うして（自家用として、使ったが)、もっとあって山に捨てた。

いま木炭はいい。竹炭はキロ数がない。あの頃は焼かん。

田と小屋

田はトイシ谷やエノキ谷、遠い田のところは掘っ立て小屋、稲刈りで雨降り、雨宿りの場所がいる。棟木で三角の小屋を作った。そういう小屋が多かった。床は土。上は杉の皮。長もてするよう、栗の木を使った。くさらん。ぐるりは腐れても、芯は保つ（掘っ立て柱は土に触れる部分は腐るが、芯で保った)。カリンカリンしとる。持ち主が強うするなら竹も使う。

茅屋根の葺き替え：こーがけ

家の茅屋根は何十年にいっぺん葺き替え。コーガケっていう。講（こう）を作る。茅は一軒から何把の割り当て。いつでもはされん（準備期間が要る)。茅が枯れてりっぱにならんと。一年にいっぺんか、(葺き替えが）ないときもありゃぁ二軒がいっぺんの年もあった。うちのうら（側)、20年、保った。屋根の日当たりの具合による。屋根替えを雨の降るときにすると、弱い。縄もすぐぼろっと切れる。準備していてたまたま天気がはずれた。そうしたら中止。網取全戸、こーがけ。

肥え松・火打ち石・たばこ

九千部のなんとか林班にワサビあるけど、こっち側（＊左岸）にはワサビがない。植えても

消える。地にあわん。逆に九千部側（＊右岸）は松の木がだめ。松明の芯にする肥え松。こっちにはあるけど、向こうにはない。

肥え松は炭焼きの時、必ず火を燃やすたき付けに使った。向こうの山に入るときは、（松がないから）こっちの肥え松をけずっといて持って行く。マッチはあったけど、戦争中にはなくなった。タバコには火打ちを使った。タバコはマッチをたくさん使うから。ホクチって、やおーか木を屑にした。炭に焼いて粉にする。ちょっとあったら火はつきます。石を左手、右に金具、落ちたときすーっと吸うとつく。ドーランってタバコ入れ。刻みタバコ。山に入ったら火打ちで炭焼きもした。タバコは左手に持って手の上で転がして。（戦時中のたばこは）三服でしまい。町は敷島とか、巻きたばこ、農家は刻みたばこ。戦時中は配給だったから。20年ころは全然なかった。

たばこのたねを取ってきて、山の中でこっそり作った。みつかったら処罰される。

サルの頭は焼いて漢方薬に

何一つなかった。山にはサルが集団でいくつもおった。田から荒らしてしまう。鉄砲で撃った。火薬はどっかから手に入れる。弾は鉛を溶かして自分で作る。一回に二つ弾を入れる。弾一つだけだと皮で留まって逃げる。二個入れれば鉛の弾が中へ入っていく。サルは食べた。おいしい。馬肉のごとある。脂っ気もない。すき焼きにした。だれか砂糖をもっておらした。

「中国では頭は最高級のごちそうですね」

頭は食べる。内臓以外みな食べた。タヌキ、アナグマ、野ウサギ、山鳥。何でも食べた。犬はいっぺん食べたことがある。うまい。サルは一匹か二匹、はぐれていると、反対に仕掛けてきます。サルは鉄砲でどんどん撃て。下に行った。埋金から下、西隈(にしぐま)、集団でいる。

サルの黒焼きは頭の病気の薬、じいさん、いつも飲みよりましたね。だいぶ遠いところからたずねても来ました（遠方からも買いに来た）。身はふつうに食べる。頭の骨、ツボに入れて黒焼き、炭焼きにする。炭をノコで切る。その鋸屑。ノコで切った屑。

＊漢方薬でいう猿頭霜（えんとうそう）のことで、「サルの頭の黒焼。頭痛薬」とされる。密閉した容器内で、つまり酸欠状態で焼いたものを霜（そう、黒焼き）といい、効果は認められているが、薬理は未解明とされる。

大きなテッポウ、六番くらい持っている人がいましたよ。イノシシはいなかった。このごろ出る。ずーっと前はシカもいた。シカのどうかして跳んでいきよるそうです。わたしは見たことはない。ヒラクチは食べるし、薬にもなる。いたち食べたらおねしょに効く。あれ臭いもんねぇ。猫がイタチを捕まえにきて、辛抱しながら待ちかまえている。

山にある薬はじいさんが良く取ったのはハクリ、葉っぱがでてきてラッキョウみたい。根っこがべとべとになってアカギレの薬。

＊ハクリはサイハイランの別名で塗り薬として使用。

薬はセンブリ、ゲンノショウコ、ドクダミ。せんぶりは男の薬、前は山のはげたところにあった（胃の薬、毛はえ薬としても知られる）。

川

といしの谷、アブラメとかおってもいくらもおらん。むかし、イシモチ、石にペタッペタッと付く。きれいな魚、ドンクロとはちがう。

「カジカですか？」

カジカは蛙（カワズ）。ウナギ、エノハが本流にいた。魚釣りはミミズ、糸は木綿糸で釣った。竹（サオ）も自分で作る。ハリは買う。

「川の毒流しは？」

しよったけど、いうてよかと？終戦後すぐ、なんべんかしたけど。木の葉っぱ、アシビ。あんまり効（き）かんかった。ゲランは小さいとが、ひっくり返る。だんだん食べよりました。（毒に当たったからといって）どうもなかったな。おいしかった。川掃除みたいなもの、（魚がいなくなる時期は）長うはない、よってくるからまた復活する。（魚は死にますか？）そうでもなかった。生きてる。

＊アシビはアセビ、馬酔木に同じ。葉にアセボトキシンという毒素がある。毒流し漁で、“ゲラン”と呼ばれるものは、外国産マメ科の植物である。根っこに殺虫効果があり、デリスという天然農薬として流通していた。ゲラン化学が製造元であったため、デリスの根をゲランと呼んだ。

家庭用電気100ボルト、片一方の線だけ、瞬間に浮いてくる。すぐにまた逃げていく。（川は汚れないけど）電気もいかん（脱法行為）、電気を盗むから。

青年

五ヶ山は上山、下山。上山が大野、東小河内、下山が桑河内、網取、網取は（県境ではないから）佐賀県となかが悪いということはないけれど、縁組みはない。東、西、小川内どうしの縁組みはない。下に下がったら嫁に行ったとがある。

ヨバイはむらのなか。（きれいな人を）「じょうもんさん」て言った。よその村の者が来て追い出すということは知らない、酒を持って来るという話も知らない。集会所はお観音さま、青年は泊まりよった。桑河内へ行ったり、道十里に行ったり、上山でも泊まる。相撲をしたり、お話をして、ただ泊まるだけ。力石もあった。観音堂に丸い石、担ぎよんなった人もあったねぇ。

金鉱

網取で金山の鉱石選別。トユを持ってきて、棒に石を付けてゴロゴロまわした。お宮の階段の下。あとで米つきに転用した。川から水、松の木で箱、米をついてもらってお礼をする。八十吉（ヤソキチ）さんの（が）ロクロを作った。蛇の目傘のアタマ。

金山をした人は田中左内さん、知っている。財産家、自分で資本投資、馬に乗って革の靴やらはいてすごかった。お祝い事の肴代、封筒に左内さんの書く字はこぼれとった。はみ出るごと、大きな字。全部なくして、しもうた。金（キン）も取れてはいた。金が出るところは水晶が出る。肴代、佐賀はしおくじら、鮭の干物。

＊田中左内氏については『小川内誌』184頁。

シンキョウさん

シンキョウさんはここに泊まった。（南畑）ダムができる頃まで。目は見えた。りっぱな男、息子もいっぺんか、二へん、きなった。琵琶を持ってきた。むしろ引いて、わらに御幣、のりと（祝詞）をあげて。米取れたら新しか、わらを束ねて、竹刺して新しい御幣さん。

遠くへ宮参り・綾部、吉木

かざどめ（風留め）のころ、二百十日のおこもり。大風のこんように、綾部の風の神様を頂いてきて、田の東西南北に立てよった。綾部まで歩いて総代が取りに行った。坂本峠まで二時間、また二時間。いま田がない。

太宰府、吉木の須佐神社、７月15日のお祇園さんは自転車で行った。10月16日オクンチ、自分のお宮のお祭り、お祇園さまのお礼。何年にいっぺんか、座元になる。一年中のお祭りとかはこちら。集会所のないとき、お座元。いま網取に座元はない。桑河内はまだ座元がある。

飢饉の話は聞いたことがない。葛根（かんね、くずね）も食べない。箕を直して来る人、桶の輪がえ、修繕は来た。

地主・小作はあったけど、自作農の方が多かった。小作も何軒かあった。小作ばっかしだと食べる米がない。麦を食べることが多かった。（米は）あってもよかとは全部やって（売って）しまった。屑米ばかし。

古墓改葬

南畑ダムの時、網取の古か墓を改葬した。墓掘り専門の人もいるけど、頼むと金がいる。私が掘った。カメは臭った。最初は恐ろしかった。うわっ、出てきた。慣れたらもう、どうってことはない。新しい人から古い人から。顔を知っている人の墓もあった。いくら新しくても骨のない人もあった。あとなったら木だけど、もっと前はカメの墓。カメ棺（に溜まった）水は結核の薬によかげな。箱（の棺）になったらみんな寄って、作って、いのうて行った。五組合で製材所、せいた、いらんと（不要材）をもらって、下のいまのお寺の近くで焼いた。

網取の寺は観音様、山神社、ふないし地蔵さん。札所になっている。地元で管理。

発電所

電気が来たとき、それまで全部ランプ。水で灯りがどうしてつくか。灯りを消す方じゃないか。反対があって、電気はただでやる、とかいう話があったらしい。

空池は手前に吊り橋があったはず。ウツオの下の川のとこ、その尻。空池底の横が九電取り入れ口。どうして空池というかというと、工事が天ぷら工事、セメント半分しか使っていない。うちのじいさん、馬車引き。セメン樽、いくつも積んでても半分は空。セメント100俵、半分50俵しか使っとらん。水が漏って貯まらん。

ダムの飯場は上ん田にあった。御所に事務所。道十里への石飛は飛石と丸太３本。グワングワン動く。沈み橋もあって、飯場の方から（学校へ）子供が来た。

網取から出征は何人もしとる。けど戦死者は一人もおらん。

Pho.Ⅲ3-1-1　網取・山神社

Pho.Ⅲ3-1-2　網取・山神社境内

ii．桑河内　〈2003（平成15年）9月3日取材〉

地名と回想
いでのくちがわ
まつのはる
にしうらの田んぼ
なかのぎし
こあら：ここはそれぞれの田の町が狭い。二人も入れん。一人ずつ入って苗を植えおった。イノシシが来て土手やら崩して、いまは薮になっとる。
中のきり：
ひこひったん：九内さんが知っとう池がある。ひこいっちゃんじゃなかろうか。今榊を植えてのぶよさん、きよちかさんのうち。
またはち：みなアダナ。だいぶ田がある。のぶさんたちの田、それくさ、だんだん荒れて、いまは薮。**カワラ**、**マエダ**、**ウラダ**、**川口**、みなアダナ。
ニシビラ：西日のよう当たるところ。稲にはいいです。朝日は長くは当たらない。熟れ方も少ない。小川内は朝から夕日まで。日照時間が長い。山と山の間をこう行く。米もとれる。向こうが実りはじめても、こっち、うちの田はまだ青々しとる。
ニタンタン：＊2反田という意味であろうか。
コナガン（コナカン）：何枚か、かなりある。石垣もある。鍬、みつまた、打って踏みたくる。そこそこ踏んで、一坪、二坪。牛、たいていの田には入る（のに、そこは狭すぎて入らない）。そういう田は何枚もない。クワジロ（鍬・人力だけだと）、牛で鋤く（の）とは10倍ぐらい、ちがおうね。そういう田（鍬でしか鋤けない田）も、桑河内じゅうでいえば、少々、4～5枚はあった。
キンノキ：桐の木。減反以後、杉を植えた。昭和46年にはね、うちのキンノキも作っていた。橋を渡ってすぐにカネちゃんとがあって、あと5枚。こっちに長いとが1，2，3枚と、こっちへんに1，2，3枚（そんな風に川の向こう、キンノキには田があった）。
イイモリ：わたしが昭和48年にゴルフ場に出るようになった。おとうさん、お前がキャディーして5万円もらえるようになったら、イイモリ、やめてもよか、っていった（耕作に苦労の多い田だったということであろう）。
マツノハル：ミツヨシさんの田。
セグチ：
アラタ：
ニュウドウ：ニタンタより下がニュウドウ。
ヨコイバ（ヨコイワ）：よこうとこ、つまり休むところ。ちょっと、よこう。稲をかろうて、そこにちょっとした段があれば、尻餅ついて、「よこう（いこう）」。
さくらのもと：
たのくぼ：
おうらかみ（オウラカン、オオダガミ）

よもしろう・よしのもと：そのあい中が、**たのくぼ**。
やたろう：初永さんの母親が作った。その下がおうらがみ。
はさこ：ひっこんで、せーまいところ、そこは、はさこ。そのしこ名は**さくづくり**、その下が**やさぶろう**。**かとうだ**。
ふけ：麦は作る。全部は作れない。自動車の廃車置き場。
しんぞうだ：心臓部に当たる。ほんのちょこっと。いい田ではない。
寺の前：むかし寺があったじゃろうか。
岸高、くぼ：むかい。
石仏は網取。亀の尾の方、ふな地蔵のあたり。
水あみ場（水アビバ）、ます石がのこっとる。一番上の家の前。平石のこっちから渡るところ、子供が学校行くとき、飛び石。（石は何度か）いくつか流れた。下さ、回らないかんって。（人間は）一人も流れんでいっとるけんなぁ。いまのもんは渡りきらん。
いしぶせ（石伏せ）、川の渡る前。石ぶせ通って、平石、渡る。**前田の下**、**岸高**、**くぼ**、**砂ワラ**、あとは**前田**。「**くぼ**んせ、こんかい」って。カネちゃんの田んぼ。
国有林は上の方、カメノオ官山、クセンブ官山、大野は高村（官山）。国有は林班、99林班。民有との境に**ホリキリダオ**。
タキダン（滝谷）、大雨が降ると、（村から）滝が見える。
ワサビ田は**ワサビ谷**、ワサビ取りに行きよった。きょうはどっち行こうか。
ワサビ取りとかあんまりいっとらん、ほとんどいかん、（国有林での入札価格が）高っかもん。あんまりあわん。３年にいっぺん借地願い。願（ねご）うとるのは１か所。じっさい取るとは２カ所。３人の名前で申請、個人では（許可を）おろさん。全員の名前で願いを出す。網取はサクラダニ（道十里）に作る。植えて（わさび）田にしている。国の補助を受けて作ったけど、水害で流れた。いまは葉っぱばっかり。
　お茶は畑の周り、田の周り、石垣、だんだんと生える。天然、いくらなっても、のうならん。土手あぜには大豆、小豆。あぜめ（あぜまめ？）って、ガンノメ、小豆より小さい。わたし来た頃に、いつもとった。

井手について・災害復旧での改良

　井手は本川に３つ。井手の川に一つ。あとは竹のとい（竹樋で水を取った）。**西平**（にしひら）の井手。合流してから**向かいの井手**。前田にかかる。
　井手相互の（配水比率など）取り決めはない（自由に取れる）。取り口には鉛管。旱魃の時は井手の口と向こう閉めて合流させる。前田はまかなう。なんべんか開けたことはある。むかしのままなら、石を並べて堰くような井手。
　堰堤改修、井手の口は早（はよ）うできとる。昭和24年災害、28年災害があった。30年ころの災害工事だろうか。
　（奥さん）28年にここ（お嫁）にきた。ここへこん前、（嫁入り前に）知らずに仕事に来た。あとで結婚してそこが自分の田だと知った。しばらくしたら（井手が改修されて堰堤ができ）川のなか、飛石を渡すのに板、敷いて、耕耘機渡した。ここの災害、うちの裏がくえて（崩れて）土砂が入り込んだ。深川組が日雇いで工事。三面側溝は谷組。よこいばで、初めてこまー

かブルを押した。ユンボ、その前は、てぼり。向かいの大きな堰堤の時は岡沢組。下請けで三坂。谷組の別れが岡沢組。

チゴが渕での雨乞い

稲は必ずできた（不作の話は聞いてない）。むかしは造林していないから（雑木山だから）、水はあったんじゃないかな。雨乞いは知らないけど、ばーちゃん、88になって死んだ。大正２年生まれ、ばーちゃんがいうには博多から虎の頭。もってきてチゴの渕につけんしゃった。小学校のころ、はなしに聞いた。

＊虎の頭による雨乞いは『小川内誌』156頁。

チゴの渕はうずまきに巻き込まれたらこわい。アメちゃん（進駐軍兵士）、ふりちんで泳ぐ。怖いながら見に行った。また水浴びにきとる。チョコレートくれた。追っかけてくるから逃げた。６年生で終戦だったから、中学生ぐらい。

山の地名・いわぐら

いわぐらは東小河内、岩ばっかり。部落よりずーっと上。ゼンリン教の行場がいわぐら（岩蔵）。峠もいわぐら峠。むかし牛と人間しかいかん。いまは車で行ける。さがしのと竜王（背振山荘の下）のあいなかが、いわぐら峠。むかしはこうもり岩といった。なか真っ黒。

山からとれるもの

まつはだめ（生えない）、かずらは太るけど、くずね（葛根）、むかしは取りよったげなけど、わしら知らん。親父が水に溶いて作った。よそからは（くずを）取りにきよった。（葛は立木を枯らす。猪が掘っていく）いのししがきてよかったことはそれぐらい。

竹の実は食うた。だいぶむかしじゃろう。竹の実はおいしい。小さい竹、もうそう（孟宗）ではない。小さいきれいな実。あれがなったら不作、「そうもう」する。不作のことをそうもうという（「損毛」であろうか）。米粒にする。

炭・官山雑木山の入札

炭は冬、夏、農閑期。昭和40年まで焼いた。国有林払い下げ、特売でもらった。雑木、かし、しい、くぬぎ。優先権があって、むかし営林署から10町歩、５町歩。五ヶ山に特売の権利。

それを９月の１日か２日に投票。山（組合か）の約1,000万（円）もっていた。いま500万（円）なかろう。40人炭焼き、40ぐらいに分ける。３から５反歩。敷き札、振り出し。こまーか紙、１から40まで番号。ご飯茶碗に入れて、紙をかぶせて穴を開けて、ほい、と出す。敷き札５万円、日当もかける。１町が５万だけど、７万か８万で落としてもらう。場所振り出し。敷き札３万、どこ山。80万も90万もなった。

元方がすわっていて、そこに出す。一番高いやつが落とす。ごまかしがきかない。金は別の箱、自分はいくら。（狙っていても）取り損ねることもある。うんと焼く人は一つの山では足らん。引っ付きおうてる横の山、買おうと思って高く出せば買えた。買えないとき、また売りはできたから、（どうしてもほしい場合には）その落札した人から買った。落札された金（国からの価格との差額分）は区の維持費になる。

（伐採後、木が大きくなる）45年が１サイクル。40年か41年すぎりゃ焼かれる。営林署の担当が調べる。収穫調査。条規持って立てる。測量させる。（ここを）10町払い下げよう。収益が余ったら国に納めよう。営林署担当区主任、（みなで）ごちそうして殿様のごと、さまさま。

タブの木、シイの木、やおかですもんねぇ、安物だからカクビョウ（角俵）、四角にダツをする。正味25キロ。（目方を稼ぐため？）たたき割って押し込む。高いのはカシ（樫）、カシだけは別、樫炭（かしずみ）は一番長持ちする。樫は樫ばっかりで小丸のダツに入れる。

入札対象の山はバラバラだった。銭さえ出せばとれる。網取・亀の尾山、１時間あれば行く。わぁわぁいってにぎやか。九千部頂上まで、４キロほど。自分は１時間で行く、女の人は１時間半、下りは30分。（いま）一番上にはＮＨＫテレビ塔。

大野と網取に木炭倉庫があった。

入札は山惣代の家でした。ひとつの割にひとつの窯。（40のわりだから）40のカマができる。

カマうち

かまうち衆は手間替え（＊交代で協力、「ゆい」がえし）。かまうちの日、今頃、二百十日の頃、芋がら、担いでいく。煮炊きする。芋がらの芋煮て、食べさせた。終わったら、酒飲ませる。地鶏こうてきて、むしって腹一杯食いよった。おはぎはいっぱい持って上がった。窯の前で酒とおはぎと、お煮染め。10何人分、３升ぐらい炊いた。小豆も１升ぐらい、餡こしらえた。のんきな仕事じゃあるけれど、重労働。むかしの人は強かったです。

（できた炭を）４俵、いのうてくる。斤で25斤を４俵。自分も降りたことがある。１俵と２俵、片荷が軽い。山道やけん（オウゴで天秤にして担ぐと片荷になるが、坂道だからそれでもよかった）。ちょっと鉄索を入れた。索道を途中まで、線にぶら下げて。

カマ場所、ないとこは安うなりました（竈作りに適切な場所がないと入札価格は下がった）。谷の湿気のないとこ、（もしも）尾根に作ったら木ば寄せるとき、全部担ぎ上げにゃならん（竈はふつう木を運びやすく、降ろせるところ、低い谷に作る）。45年前に作られたようなところが多い（適切な場所は限られているから、伐期になると、同じ所に再び作られる）。（入札前にどの山によい木があるか）下調べ、40くらいの山、あらかた見とかにゃ、ならん。２～３日かかる。

火種

戦時中少なかったもんな。ひっちゃんじいさん、火打ちでたばこを吸いなった。刃がね、三日月のような形、鎖つけて。むかしは刻み、キセルと、胴乱。火打ち石、ホクチ（ホクチに火種を落として火を付ける）、榎（エノキ）か何か焼いて炭ないて（なして）、粉にないて、火付きがいい。四角か胴乱の丸うなって、ちゃっと（素早く）せると、火の粉のでる。ちょっと吸いよるならもう、ついとるもんねぇ。（家には必ず）火種を残しよんなったもんなぁ。つけぎ（先端に硫黄が付けてある杉皮）はしっとう（知ってますか）？（火種は）冬ならこたつ、夏は囲炉裏。

青年・志願召集

青年の頃、市ノ瀬から下は集会所、うちんとはなかったから（集会所ではなく）、お観音様になんべんか泊まった。力石はお観音様のところにある。もってあがっとる。一番ちいさか、長かとで120斤（約70キログラム）あった。国武が、手の届かん一番小さいやつ。胸まであげた。そこまで。それより前のひとは力が強かった。夜おそうまでしてわぁわぁいって遊んだりした。飲み食い。金ももっとらん。

干し柿をおといて（落として）きたこと、あるわなぁ。青年の遊び、ひもじゅうなったごと

あるねぇ。

終戦間際、志願で行かされる。志願で行って、知った人はたいてい戦死。昭和20年３月、二日市の公会堂で徴兵検査で第一乙種。５月末、現場召集。引っぱられて１万６千人、あいのうて佐世保海兵団に入った。針尾、７月入団式。１ヶ月半の新兵教育が終了、そしたら８月15日だった。それで一緒に終了。腕、胸に二等水兵の徽章、でも何にもないとですよ。終戦と同時に一等兵になった。とうぐわ、大根鋤いて帰ってきた。まだおるうちにアメリカの兵隊、低う飛んでくる。びっくりした。

桑河内では、いいさん、もりみつさん、かのうさん、としおさん。四人が戦死。としおさんは朝鮮にいて兵隊に。戦争未亡人は大野にいる。大蔵さん。戦死の家、兵隊の家、農作業を手伝って、面倒をみたり、勤労奉仕。小学校五、六年、六年頃からは女子の手伝い。戦死ではないけど、満州から命からがら引き上げた人も何人もいる。

死んだ大蔵さんやそうじさん、銃剣術で郡の大会に出た。悪さもしている。

私たちのころは夜ばいといっても草履持ち、下駄持ちでついて行かされただけ。亡くなられたけど、東小河内、県会議員のＹさんが、88歳の祝い、青年頃から悪さ、口もうまい、夜ばいの話をよくされた。

川東と川西、運動会の綱引きをしおったよ。

ロクロ師

網取でロクロ師をしていた人はよその人で、網取の人ではない。お宮の下にうちがあって、水車があった。めずらしいから見に行った。ロクロの水車。Ｎ・八十吉さんという。おとななら炭焼きの山でロクロ木を分けておく。（残しておいて）「こりゃ、八十吉さんとこ、もってきゃよかね」、こどもならロクロ木を持って行けば羊羹をくれた。卸にいって中州まで行ってバクチうちよんなった。えずかった（怖かった）。ロクロ細工する。石を持ってなんべんもいたずら。学校まで八十吉さんが追いかけてきて、「この石を投げたもんは出てこい」。いま孫は不入道にいる。

シンキョウさん

ここがシンキョウさんの宿だった。西新から琵琶もってござった。シンキョウさんの来よらしたままのお札、残してある。家は改造したけん、お荒神さん、くど、その上にエビの太か。

Pho.Ⅲ3-2-1　桑河内：聞取り調査

Pho.Ⅲ3-2-2　桑河内風景

荒神さんの寝場所はカマドの上。煙で真っ黒なって強い。一回来たら桑河内全部回る。年に四回、ほかのところは二回。しき祭り、たびたびござった。網取はいまの区長さんが宿、いっぺんきて２、３泊する。庭に台をおいて、あとは土間。おぼんに一升なんていわん。米を荒神さんにあげとる。それを引いてく。ふつうのお礼はいくらか払うけど、（ほかに）荒神さんに（奉穀）。袋はこんなにふくれてる。ぎゅっと抱（だか）いて、担いでいく。こうもり傘持って。10軒も回れば１俵になる（60キロ）。歩んでいって、途中の非農家で米を売っていく。荒神さんは火の神様。

平野シンキョウ、その親父さんが目の見えんやった。そいで座頭さんていった。シンキョウさんにザトウさんていうと、腹かいた（目が見えるから）。すぐ（メモ不十分）とわらは半分、竹ば立てて。御幣切ってからそれ隠す。竹も切ってしのき竹。縄のうたり（縄なったり）、わらと幣紙と竹を用意、こっこっ、くわ、ぱっとうちがえてくさ、さーっと切る。くどの前。ねぶりかぶって（目をつむって）宙で引く。

子供がついて行った。おしろダコ、たんでダコをした。

こうじん坊さん、位はよかった。琵琶のベンベン、上手やったって、母親から聞いている。年取って子供が１回か２回きたけど、金は（？）全然（ちがう）――。うちの父親がその人、シンキョウさんと同い年、終戦のとし、41で死んだ。山惣代しとった。若かった。

iii．東小河内　〈2002（平成14年）９月16日取材〉

地名（しこな）

オオバル（大原）、サガシノ、竹の屋敷、カメノオ、ミヤデン、カメヤグチ
ナガウエ（ナガムネ）、イタチガワ、クロイシノタニ、マルクマの谷、シンミチ（新道）、
チゴトシ（水番のおまんさん、稚児をここにおいて行った）、**レンキチブチ**
ネコトウゲ、ガランサン

地名について

地名は土地台帳に記載される小字（正式地名）と文字化はされていないしこ名・通称地名があった。

ここがヒガシオガワチ（東小河内）、ここがオオバル（大原）、納骨堂がある。それから上、サガシノ、竹の屋敷、カメノオ。ところの名であって、オオバルの一番とかいう（＊台帳に載っていて地番がついた地名である）。ミヤデンとかはしこ名（＊通称）ですたいね。しこ名を使うのは家族ぐらい。むかしは田。お宮の田、竹ノ屋敷にも（別の）ミヤデンがある。カメヤグチも田が１反ぐらいある。

一番上（北側）、ナガウエ、ナガムネかもしれない。つぎの谷はイタチガワ。サガシノから飲料水を取る。ダムができた昭和52年、ダムから新規に水道ができた。

（ダム以前も以後も）サガシノからも取るとは取ったです。十分ではない。水槽も新規。

クロイシはダムの下、少し田がある。何枚か水路の上にもある。イタチゴウは谷の名前は地

図には載っていないけど、何かで（文字でも）見たと思う。ケンメンは竹屋敷のうち。

ウラヤマって竹の子掘って、コウネ（＊尾根をコウネという）。「家の上」から取ってくる。ウラヤマと家の上は別の場所。マエは家の前、前田とか。

あっちこっち名前はもっとるよ、場所を知らせるためのしこ名。

小川内水路と芝取り場、区役

――用水は村を貫通していたが、下流部では不足がちだった。

水路が２キロある。オガワチ水路、もとは一、二反かかりさえすりゃー川へ落ちる。水路自体は明治時代からある。（けど、よい）水路がなかった。

――庄屋だった家が中心となって水路を整備した。

サラサン畑っていいますがね、サラ吉っていう人の畑、その人は庄屋さん、五ヶ山部落の庄屋、五ヶ山中から人が寄ったと聞きましたがね。明治大正ではすぼり（素掘り）、どんどん水が漏る。赤土水路は漏らん。ガラガラ石（を通過するところ）が漏る。毎年やり換え。穴のほぐるですよ。芝を貼る。鍬の先で、打（うつ）とですよ。打って、泥と一緒に貼り付ける。石を入れといて泥、芝でふさいだ。足でよう踏まえとく。芝と泥、そげん強くはなかろうけど、漏水は防げる。

――水路維持のための土地もあったし、区役も多くあった。

山側は井手から下10～20メートルは共有の土地。芝うち床。（井手を）修理するための芝（をとる）、ノンナカ（草藪）にしとった。上（の方）は秣野にする。だれがうちおといてもいいように、芝生をとるため。個人（有地）ではむやみに立ち入れないから。だんだんせんごとなった。

芝うち床はあとでコンクリーに改修したとき、12軒に割って、分けあった。だからいまは個人分（＊共有地から民有地に変わった）。

10日くらいは区役ってありました。水路の区役、学校卒業したもんと、うちにおるもん、一軒から二人、三人。それじゃぁ、やぉいかん。

大井手そのものはシバノではいかんわけ、周囲から竹の長いとを切ってきましょう。しがらみ、杭木（くき）を立てる。網のごと、しょうけ編んだごとして、竹とか柳の木とか、曲がるような木は切って井手を堰くのに使う。個人も自分の土地のこまい木は切ってもらった方がいいわけ。赤土は、もってこいといわれたら担いでいく。

井手はびっしゃりは、とまらんです。横からビュービュー漏ります。60年ばかし前、井手堰を修理、ダムのできたとき、やりかえて今はコンクリ。

その前は、大水のくれば、流れる。また修理、２回も３回も。水の足らんといったら（いわれたら）、石を持ちかけて貼っていく。年によってちがう。雨の多い年に井堰は流れる。雨の少ないとき石を置いて川を堰き止める。雨の降る年は、ありゃーされん。流される（その都度直す）。

ちびちびの区役は１軒からひとり。苗代前の大仕事は男のおるしこ、全員がでる。田植え前、区役、植えてからも２～３回、入れ区役。下の方は旱魃、今年（は特に）、雨が降らない。年三回・四回区役があった。

止めさえすりゃ、水は十分あったけど、漏れ水がある。下、大原にまで下って行くと、水はいかほどもない。手入れさえすりゃー水はあったから、上から順に田植え。部落の規約で決め

てはないが、上から順が決まり。どうしても田は白なって、こりゃー全滅しよるぜ、お互い隣組、譲りおうたろうけれど、いままでそげん旱魃はありません。手入れさえすりゃ水はある。大川から取るから手はいるけど、水不足はなかった。旱魃したほうが米はよけいに取れる。早うも育つし、大きなる。旱魃ほど満作。曇りの多い、雨の多い年は、稲は良くない。

道水路改良

道と水路さえありゃくらせる。けどこれがあるから難儀する。何とかせにゃいかん。この前の道が里道、30歳ぐらいの時、50年ばかし前、改修をした。一番の発起人は築地幸四郎（こうじろう）、わたしの先祖、60ぐらいで亡くなった。水路と道をよう（良く）なさんと、この村はようならん。水路と道、昭和時代になりゃ補助金が出る。それをもらって1,000メートルないか、改修した。幸四郎は村会議員、そのひとが話の発端、道は上がり下がりしてウサギの道みたいな道、その道をよくしていった。お宮（の土地）は国のもの（国有地）、何筆もあった。そのお宮に木のたっとるのを切って開墾して田んぼ、一軒・一二軒、家の前の道が昔の道、里道。借金して道作り。補助はあった。半分は払わしゃんか。水路は水路で借金。利の分、金利を四、五年払いよった。足らん分、上の山、37万円で売って借金が終わった。

これがいっぺん目の改修、位置は同じでコンクリーにした。２へん目の改修はダムの時。背振は上水専用のダム。けど、この村に水利権がある。どうしてもせにゃならん。ダムの補償で三面側溝にした。手打ちの方が安い。（既設のコンクリ溝を）いけただけではダメ。継ぎ目の処置もある。

水路が谷川を横断するところは漏る。尾はほりこみだから漏らん。マルクマの谷、シモノ谷――。

新道は昭和になってからの道。前にも曲がり曲がりの道はあった。

水不足で（クロイシに）池があった。20町歩の共有林、その中に私の畑があった。村の中に換えてくれんか。換えたけど、造林し切らん。いまは鯉を活かしてある。遊び場さ。田はあるが、３～４枚。

宮田

一番下にお宮、むかしお宮があったが今は田になってしまっている。お宮の田、宮田（ミヤデン）、１反ぐらいある。道路、水路の改修で村が借金、それを返すため、ミヤデンを売った。それはうちが買った。前にもっちゃった人の名前。それでうちではしこ名でミヤデンっていう。水路や道路に金がいる。何とかしてこりゃ収入が、なからにゃいかん、毎年貯金しながら――。

ミヤデンを売ったりしても、まだ水路の修理に金が足りん。毎年やり換え、年によっちゃぁ二回も三回も。

むかしは水不足、脊振ダムが昭和45年着工、52年完工。人家はなかった、脊振ダムでは家は浸かっちゃおらん。板屋の人の田と、開拓の人、どかしてダム。（そこは）板屋の主力の田だった。

水田

お宮の前にもひとつ、堰がある。こっちはさがしい。向こう（佐賀）は谷が深い。こっちは下が岩盤でけわしく育ちも悪い。農作物になれば天気が左右する。むこうは午後は日陰、作物はこっちがよい。現在でも米の反あたり１俵か、半俵半もちがう。こっちは６俵、むこうは５俵いかんぐらいでしょう。五ヶ山は田は１軒１町、むかしは４俵かそれくらい。１町で40俵、４斗俵で16石、６～７人家族の飯米で（自家用）10俵残す（30俵を売る）。戦前麦も作りまし

たもんねぇ。大体自作農。田は大体平均していたが、山は持ち主の差別があった。多い人で10町、少ない人は１町以下。

県境・その１、鞍結いほか

佐賀県側（小川内、西小川内）に行き来する事は多かった。この橋が900円ぐらいかかった。昭和――、50年前、そのころ橋を架けた。その前は飛び石っていうてですね、行き来が多い。五ヶ山より（も）小川内を頼りにしていた。むこう（小川内）は有力な親方がいた。

うちのじいさん、三軒上の家からの分かれ。いのししがりとか遊ぶことの大将。明治18年が親父、その前の代。もたんやったろうね、米一俵の余裕はなかった。

佐賀県は山が多い村、田はたいしたことはないけれど、山の木を１反売れば、一年は使い銭があった。生活された。むこうはそれで生活がよかった。（こちらは米の１俵も無い生活）。高利貸しのようなこともしよった。たとえば、くらさぎ、牛馬に負うする鞍ですたい。鞍に藁なんかをつめておく。新しいうちは中がはっている。だんだん牛の体に当たる。鞍は３年にいっぺん換える。古いままだと体裁も悪い。見栄もある。鞍を作ることは鞍イイ（結い）という。ちょっとかろわせてみにゃーいかん、ペターっと五体になじむごと、こまかく調整する。具合を見る時、積み荷の米を佐賀県側から借りた。一回ぐりーっと、荷を積んで回ってみる。大野がっさに回ってきたら、それで１升の借り賃をとりに来よった。訓練用に廻るだけで。

そういう生活、わたしもたいてい大きうなって、親しうなって、近うした人だけど、親父さん、背広着て田んぼへ行く。すっかき（鍬カキ）、水見（調節）に背広。（そういう口実で）わたしがどげな仕事しくるか、見に来た。ドレイのようなことして佐賀県の人に仕えた。

三代すりゃー家も代わる。庄屋の家、こっちはもう絶えた。町あたりの太い庄屋とはちがう。

鞍を作るときは鞍イイさんにこういう風に使います、といえばそれにそって作ってくれる。牛も馬も同じ。積み荷、鞍の斤目の重たければ丈夫に作らないといけない。うんとは乗せんなら、軽く。斤でいえば500斤とか（１斤は160匁で600グラムに当たる、500斤は30㎏）。貫目とはいわなかった。

路引き（ろびき、どびき）する鞍はまた違う。鞍はこもうしていい。胸で引く（路引き用の鞍は胸にかかる）。前を丈夫にしてある。引き緒を二つ、まんなかに肘木、曲がった木。カンを木の真ん中に打つ。その前にチェーン。五体にかかるように引く。10年くらい、路曳き、馬車引きをした。

木馬

シュラ（シラ、修羅）はそりの事。そりのように作る。全体をキンマ（木馬）という。木のつきしろが少ないとよく滑っていく（枕木とそのうえの横木の接触面が少ないと、滑るという意味）。少しずつ道を作りながら。キンマ道は橋のようにかける。汽車みたいに道に枕木をおいて。レールが下で枕木が上になるところがちがう。枕木のレール、レールがキンマ道。二間、４メートル20センチずつ。９間にきる。谷の上を運ぶ時は柱を立てて、その上を運ぶ。二本接いで支柱のごと、谷の上なんか、こわいとこも掛ける。杉の裏木、こまいところ、横木はこまい。枕木。路地につかんから（横木は）軽かですよ（軽い方がよい）。枕木は金釘が打ってあります。山が終わったら持って帰る。横木は捨てても、枕木は使う。運び出すためのレールは末代もんですよ、山が閉まるまで。キンマ道がついていれば、その山を売らんか、と行って来

る人もあった。キンマ道があるという事は山に付加価値がつくという事。

キンマ道は、はしごの段をわたっていく。馬や牛では引かれん。人間が肩にかけて揺さぶりながら、さがしいところ、急なところ、厚いぼろ切れ、つるつると３回巻き付けて、（てこで）ゆるめてブレーキにする。終わったら次の人がまたする。どんなさがしい所でもくるです。

わたしも加勢に行ったことがある。すーしこずつ、次々に作っていく。千石っていいよったように、大きからにゃあわん。山が大きいと出し賃がかかる。簡単に出せるようにすることが大事。

亀の尾もダムに降りる方は民有林、キンマ道もあった。道もつくっとうけん、山も高こう買うから。そういう計画、第三者は崩してしまう。その分の道があれば安く買う。

樫の木が堅いけん、油をかけて、引きよりましたね。杉でん摩擦すれば減る（柔らかい杉は早く消耗する）。

切畑（山焼き）

むかしはソバって作りよった。山焼きにした。切畑っていわっしゃった。木を切ったあと、畑を作るのが切畑、焼くのが山焼き、わたしの代ではソバも作るし、むかしは焼いた後に大根。はっぱ、虫もつかんし。種をパラパラ。土と混ぜくりあう。新規のところはわりかた虫がおらん。まくとも大根、ゴボウ。うちぶっといて木の枝で混ぜくってやる。よう生えます。間引きはする。しかしそれほど手がいらない。木を切った後の根払いも、焼いてしまえば、片付いてしまう。

村の変化

元は22軒、今は10軒。百姓やめて炭坑、筑豊や長崎の炭坑に出ていった。職業軍人、兵隊になる。炭坑に行く、先生になる。残ったものはフータ息子だけ。わたしの里、この上４軒目、長崎商業の先生で出ていった。息子の代になって、村に残っていたもの、何もかも売った。親戚の残ったものが田や山をもらうのがふつう。そのいえは村には何もない。

川と生活

チゴ落としは県境に井堰がある。オマンが滝、蛤水道って佐賀県に行く水道。水（みず）飢饉にチゴを捨てといて水番に行かっしゃったって、西小川内の人から聞きましたわ。

大野橋（おおのばし）の下にレンキチ淵（ぶち）。合流点、連吉さん、一番上のじい。
チゴ落としは岩は低い。レンキチ淵は飛び込み、やおいかん。橋の架かる前、飛び石、その上が小学校４～５年の時の遊び場。

木の箱の底にガラスをはめて、ろうそくを垂らしてぐるり。一時（いっとき）はもちよった（水もすぐには漏らない）。上からみえた。魚がじっとしとる。ひっかけばり、竹の一ヒロの先につっかけ、ひっぱると、ひもが付いている。針だけ抜ける。

ドンボウ、イシモチ、ハヤ、ヤマブチバヤ。イシモチは石の中に下に付いている。エノハは早いけん、とれる（とりにくい？）。むかしはおったそうですよ。

山の生き物

冬はカッチュウワナ。壁しましょうが（まわりに壁）、中にえさ、やっといて、はね木、えさを採りに入ろうとして踏むと、こーまい落とし、チンチロが外れる。かちゃんと落ちてクビが挟まる。たまに足をはさむ。カッチュウヒヨドリはわたしたちの小遣い。10銭ぐらい。帳面

の替わりよったですよ（新しいノートが買えた？）。山に20も30もかける。日に一羽、とれたら学校へ行く時の小遣い、店のひと、（子供から）こう（買う）といて、また売りはった。店のひとは不入道あたりのひと。学校は南畑小学校、６年生までは分校（五ヶ山分校）、高等小学校は不入道まで、２里半、２時間はかかる。学校から帰ったら勉強どころかワナ見て回る。ワナ道って道がついとったですよ。シバはわいとったら（掃わいておけば）、どうしたもんか、えさの多いと思ってよってくる。すぐかかる。もようて（催うて、共同で）ワナをかけて当番で見よった。ほんつぐみのみが黄ない実、こしばの実とか赤いもん――。

茅山と山焼き

尾まで茅山、杉山、松山があった。竹山はない。竹の屋敷も草切りと茅山。冬にふちを５メートルくらい切っておく（防火帯を周りに作っておく）。焼く時は男も女も出て焼く。切るときは男だけ（が出る）。上から順々に焼いていく。飛び火（失火延焼）もあった。何年かにいっぺん。民有林が焼けた。ヨコの山。失火しても罰金は払わん。口の断り、「粗相したけん、こらえてつかーさい」（口頭で謝罪する）。急に風の方向が変わる。反対から吹いたら人手不足、ちょっと残っとったら（草が残っていると、完全な防火帯にならずに）あぶない。フチの焼きようが少なかったということはあまりない。少しずつなら危ないことはない。下からぼーっと燃やす。すると上だけ燃えて芯が残る。上からゆっくり焼いて、いい草とか茅ができる。

茅きりの講があった。氏神様、市ノ瀬に合幣（合併）、日吉神社。今も社地はある。

（講は家数が決まっていた）分家や他から入ってきた家は茅きり講に入る時、加入金を払って入る。20万とか30万ださんと共有林とかの権利は得られない。20町からの財産、無償でかたることはクサ、できん。八女からきたひと、かたしてくれ。断った。区にはかたっている。行事にはかたっていない（引っ越してきた人は区の構成員にはなれるが、財産区の構成員にはなれない）。

近くの山、ウラヤマはたきぎ山、あんた方の焚きもン、焼くっていやぁ、24戸、助け合う。１軒のたきぎはしれたもの。

うるしはみない。お茶はどこ切っても自然に、はゆる。背振千坊、納骨堂の裏、寺の裏という。石塔なんかありますよ。（ダムの）補償ねらいで、よその人が買っている。

木炭

木炭は焼いた。炭焼きはナラ、クヌギ、カシ、うら木（雑木）。杉は別、炭にはならん。やおうして、ぼうぼうして灰になってしまう。雑木はもつ。堅い方が火付きは悪いが長持ちする。

木炭山は亀の尾の国有林と民有地。木を買う。国有林は雑木を切ってあと造林する。木は払い下げるから、といってお前たち、根ざらいせよ。雑木だけは区にもらって、それをさらに競売にかけて炭焼き。大きく焼いていたのは雑餉ノ隈の渡邊鉄工所、そこの焼子になる人もいた。その人たちは今では良いくらし、木炭抱いて斤目もしかといわんなら（きちんと主張しないと）、１俵いくら（むこうが値段を付けてしまう）。もうけは業者。Ｉって佐賀に木炭業者。不入道のＫ、あちこちに土地を持っている。炭担いでもっていく。値段を決める。Ｋのおばあさん、酒をいっぱいついでくる。いわば酒が賄賂、（酔ってしまって）値段を値切られる。

炭焼いて、儲かったもんはおらん。三人の木炭組合評価委員が炭の値段を決める。評価委員のＺさんだけは儲かった。竈もつくらんで、国有林のあまり、うら木（雑木）を焼くために人

が使って空いた竈を使って焼いた（人の焼いた後の窯をついて、人を雇って安く焼いていた）。金儲け、松は下の方は松ずみを焼いた（松炭は火力が強い）。Ｚさんが松を渡邉鉄工所に売った。最後は局長にまでなった。

物資の運搬

川流しはできない。岩や滝のあるところはダメ。材木が割れてしまう。木口（こぐち）をドスンとやったら、製材したときに割れる。

昭和20年より前、まえは佐賀橋まで。（それより上が）道のようになったとは22～23年、佐賀橋から下がトラック、上が馬車、馬車の入るところまでは路引き。さーっと下がってくるから、牛でも馬でも音で分かるとでしょう。一息で駆け下りる。牛も一生懸命。カンが足にくる（足に触れる）。くるっと横向きになる。路引きした牛は慣れている。五ヶ山でも路引きしたのはわたし一人ぐらいやろう。馬車引きもした。山から出して佐賀橋までいくら。馬車引きの方が良かった。この山全部を請け負った。大体二人で組んどったけど、３人のこともあった。組んだ人は西小川内、炭坑やめとらっしゃった人で路引きの経験者、わたしより10才ぐらい上の賢い働く人、戦後佐賀の平野の方の田んぼ、朝鮮の人が帰りまっしょう。その人から田をこうたりしたような人。

現金取りは炭焼き、炭焼きの手ご。日当は70銭か80銭。ほかは山行きの手ごぐらい。たまに道の修理。

県境・その２、ケンカなどの思い出

佐賀県との結婚はない。どうしてかなぁ。身分の差がある。佐賀県は金持ち、商売上のつきあいがある。よかお客さんだったですよ。格差があったじゃろうと思いますわ。むこうは禅宗、こっちは真宗。

姉がもらわれて、養女でやってくれんかってたのまれたけど、その話も成立せんかった。小川内は40何軒。学校が一丁あるぐらい大きい村。

こっちの学校は２里半先、歩いて２時間の不入道、同級生は男が一人、女が二人、一人は杉谷てるこ、看護婦になった。一人は佐賀県に行った。男一人はすぐ死んだ。

尋常小学校は近かったけど、むこう（佐賀）の高等小学校は遠かった。小川内から南畑小学校への越境はあった。こっちへ通うときは委託料とかいって、20銭とか25銭の月謝、ふつうの

Pho.Ⅲ3-3-1　東小河内：山神社

Pho.Ⅲ3-3-2　国境石

ひとよりあの人たちは10銭ぐらい多かった。（同級生だから）子供の頃はよか友達、ケンカもしましたもんねぇ。けんかの宿、けんか大将、はじまりは一人、おればこなす、蹴ったりなんかする。５人も10人も集まってどっちも大きくなる。（決着を付けるため）あしたケンカする。こっちには五ヶ山から加勢、むこうは大野から加勢。石投げつけ合い。人数でどうしても負ける。向こうが強いもんじゃから、家の中に逃げて入って、障子を破られて親父に叱られた。

宗雲（そうぐも）ますみ、ケンカの強い人、大人になって一緒に区長、電話取り付けで天神まで行って、局長に土下座して頼んだ。秀太郎という局長に、山芋ば掘ってきて、山のおみやげです、どうぞ、とかいって。もう一人、杉谷巽（たつみ）もいた。ダム反対派。

電話は当時１軒14万の負担だった。半分お互いに利用ということで一緒に陳情した。町からは半分補助。電気自体は子供の頃からこーまい発電所。佐賀県ともようて（催うて）発電。大正の終わりにはあった。ダムができるうんと前、九電が水利権の買収、各戸の電気取り付け料は無料でやろう。電気代は払った。（発電の）水利権をやった。下はそのとき網取の山を売ったから共有林がない。

遊びには行った。たばこ店があって、みどりさんというじょうもんさん（きれいな人）、お茶飲んだり。お祭りにはあんまり行きよらん。

青年

（佐賀県とは）結婚はなかったけど、夜這いは行った。ふたりでつるのうて行こうか。戸のきしきしいう家は小便かける。きしってだけいう。目的ははたさんなぁ。少しも（成果は）なかった。追いたくられた。明くる日は秋の新竈づくりの忙しいとき。牛馬に喰わするえさは、明くる日までに掘っておかにゃならん。にぐるクサ（逃げるとき）、芋も盗んだ。（むこうが）起きらっしゃったら、芋ののう（なく）なっとる。

五ヶ山では村の中ではカキ泥棒ぐらい。青年宿で年功の人が「きょうは柿ばもいでこい」、トナワ（10縄）ぐらい軒下の柿を取ってくる。「うちんとに似たるごたるねぇ」、うちんとこ（命令した先輩の家）の柿とってきたって。

柿を連で数えることは知らない。１縄、かたっぽう10ずつで20。買いにきよったです。

青年のときは奉納相撲、日吉神社の相撲大会、桑の河内はお観音様の広い。相撲の稽古。鬼塚先生が向上会で意見発表したこともある。宿は空き家を利用して、ないところはお観音様、お宮。冬でも泊まった。青年にかたったときは綿を１斤ずつ出す。（蒲団）一枚が抱えきらんくらい（大きくて）重い。しらみ、のみはおらんごとあった。

兵隊は洗濯もせん。へこまで抜けて、のみ、虱。疲れとるけん、ねずみも多い。足を齧られてもおぼえんごと。

軍隊・戦死した弟

久留米の54自動車隊、輜重兵だった。軍隊に行く前から自動車に乗っていた。馬車挽きになそうか、自動車か。免許も兵隊に行く前から持っていた。自動車が入ってからは（山仕事も）楽だった。

軍隊は内地勤務。木炭車は班に２台、車。指揮班で中隊の指揮をとっていく。模範の隊。鹿児島、宮崎に行って終戦。

軍隊で叩かれるのは誰でもいっしょ。頭がいいとか、悪いとかは関係なし。老年兵の住友で

課長さんだった人が「ぼくがねぇ」、「キサマジィ、ぼくとは何か！」ぴしゃーんと叩かれる。巻脚絆、ぽーんとあけといて崩れたら、「当番以外は練兵場一周」。夏の温いとき、そこにたまっとる水、ぎゅうぎゅうのんどるですよ。

軍隊は大工も左官もしょうけ屋もおる。何でもできます。小隊に一人か二人の脱走兵、すぐつかまえられる。自殺の危険があるから金具類、ボタンは取られる。ベルトもない。地方の監獄に入れられる。入れ墨の人なんかはかえっておとなしい。

同士討ちは多い。うらまれるもんは多い。戦地に行ったら、あれば一番に殺せ。突撃の時撃ってもわからん。戦死として届け出る。人間もいよいよ鍛われるとこうなる。

戦争中の見送りもたいしたものだった。１日前に（今の）ダムの辺まで見送り。入営時間の８時か９時までに届くように前の日から。わたしの弟、海軍。20才で、特攻で死んどる。村の人はかわいがってくれる。特攻で死んだといえば、取り入れにも加勢。臼杵としお、わたしの友達も特攻死。

網取、城のあったとき、お姫様が一の岳城におらしゃった。納骨堂の改葬の時、掘りに行った。（お姫さま墓地から）この箱を持ってきている。あけてみたが砂しかなかった。お神棚にあげといた。豊臣時代の鏡はありますよ。シナ事変の金の法被、赤くて後（うしろ）に金の字がある。

ⅳ．大野　〈2002（平成14年）９月17日取材〉

台帳に記載された字名

大野（うーの）

倉谷

茅床：かつては共有地で20町の原野に茅床が１反あった。３日ぐらいかけて野焼きが行われた。「わちぎり」といって、山の頂上から10ｍくらい、延焼を防ぐため、あらかじめ焼いておく。防火用にバケツに水を入れ、ポンプを用意する。

――ノ（野）ばっかり、ワラビ・ゼンマイ、花はオミナエシ・キキョウ・センブリ、きのこはアカナバ、ナメコみたいだけど味は悪かった。ノグリは笹栗、20町歩ぐらい持ってましたもんねぇ。ノは焼きおった。ワチギリで先切るとですよ。大火事にならんごと。

ここの秣は牛の飼料、肥料は２～３月頃、麦田に入れた。麦は小麦（うどん用）と裸麦で、米７に裸麦３ぐらいの割合で混ぜて食べた。

――牛のクサ、田に枯らしといて、マヤゴエもあるし、そのまま２月から３月、麦田の上に広げていく。

井柳：イヤナギ、ダム事務所の上。

七曲：ダム事務所の上。

水川：墓がある。

中尾：お宮の上。

高村：お宮からずっと上がって行った所。

宮の内：高村の少し手前。
白土：川の向こう。しらつち

しこ名
びくんだに（びくにだに・比丘尼谷）　茅切り床。茅床の共有原野で、国有林の手前の１反（国有境まで山で１反）。ここの茅を使って１年に１軒ずつ「手間がえ」で茅を葺く。そこがびくんだん。金鉱があって小規模に採掘された時期があった。いまも縦坑が残っている（後述）。
おろしぎ　田があったが、今は杉林になっている。田の形はしている。わたしとトシエさんとイクオさんが作った。
ねこじょう（猫城）　上は立派なひらた。つつじがきれいで、お篭りは５月11日。弁才天お篭りをする。背振の頂上がべざいてん、女の神様。
みやのさき　１反、田があったが、杉林になっている。
なかおじり・ながおじり　高村峠の下に田があって、たえちゃんが作っていた。現在は栗が植えられている。ここから高村峠、むかしオイヅカさんの家があった。やっぱり百姓だけど、学校の先生、五ヶ山小の校長先生だった。３ｍくらいで峠。
ささでーら（笹平）　区の草きり場がある。入札して草切りを決める。オイヅカ先生に草切り床を売った。そこからずーっと行くと九千部に行かれるですよ。
たかむらがわ　カシ・ナラ・クヌギ等の炭焼きを、国有林内で九千部の上まで行っていた。ささでーらからリアカーを引いて川の横を通って炭焼場に行っていた。そこから九千部は近かった。現ダム事務所は木炭組合倉庫の跡地である。
しおいば（お汐井場）　馬を洗う。馬の方が足は速いが、部落の人は牛の方が使い慣れていた。競犂会があった。父親が戦地から馬を連れ帰ったため、馬を使っていた家もあった。
いまじょーだん　谷筋
ちゃやのまえ（茶屋の前）　井手がある。七曲峠（綾部峠）に至る道沿いに茶屋があったのであろう。飛び石があった。右岸。こうくぼうより上。
こうくぼう・こうくぼ　イヤナギ井手がある。コウクボの池があった。右岸。川（河）はコウと発音するので、おそらくコウクボ・川久保であろう。

倉谷は昔も今も９軒だけでずーっときている。増えもせず、減りもせず。むかしはまだ家数はあって、ここ（ダム事務所）をウメさん屋敷という。ほとんどが築地姓。

お宮は日吉神社、９軒で守り、（戸数が少ないから）１年１年じゃ参ってしまう。一年に一回くじ引きをする。その年の当番を決める。前年につとめた人をのぞいて８人の名前を書いて小さな木の箱に入れる。穴、ほがいとるから、一枚、ぽろりと出てくる。翌年の当番が決まる。大役、いわんなぁ。（とにかく）たいへん。お宮の守り、一年中の行事、掃除、はわく、草切る、榊を神様にあげる。神様は大山祇の尊じゃないかな。戦時中に市ノ瀬に合併、南畑ぢゅう（南畑村全部の神社が合祀された）。忘れ物があって、持って行くつもりだったカッポン、神主の靴の片方、それがご神体だった（合祀の時に忘れた靴が神体代わり）。寺は無い。

集落の南の方には坂本峠が、南東には七曲峠がある。坂本峠は郵便配達が東脊振からやって

くる。佐賀県との境は地図上では峠上だが、実際は少しズレており、正確には送電線と峠が一致するという。ここから一番地がはじまる。七曲峠はより狭く、かつて村の人々はここを通って綾部八幡様（風の神様）にお札をもらいに行っていた。

集落の東の方には林道が通っているが、九千部の頂上にはとどかず、途切れている。昔は徒歩（カチ）道が原野の中や尾道にあった。

峠を行き来する人々

――隔絶された山村のようだが、峠を越えて村人は行商にも行く。

わさびだん、国有林の谷を税金出して軒別に谷を割り当て、９つ（９区を入札した）。佐賀さ越えて、女がしょうて（背負って）、ワラで作ったフゴ入れてから、うちの家内も中原まで楽に売りに行った。

「わさびでござっしょう」。

束にして葉っぱにして、葉っぱだけ、売りに行く。福岡はあんまり食べん、中原、神崎、鳥栖が売れる。泥棒が根ごと持って行く。ちょこっとんが、なかもんね。根から取っていけば、なくなるわなぁ。（育ちは）あんまり日陰でもいかん。

炭も出した。中原・綾部へ行くときは、峠までまえの晩に何俵か担ぎ上げといて、１俵15キロ、下りは２俵でもしょえるから。帰りがけ、イカの塩からとかと換えて。

彼岸の中日が風の神様（綾部神社）のフリュウ、歩んでから行ったけど、帰りがやおいかん。

――逆に峠を越えてさまざまな人も訪れ、通過していった。

こまか時、どじょう売りがきよった。タニシも売りに来た。３月の節句頃、皮を剥いてある。

田植えの時は鳥栖の朝日町、ぜにとりで手伝い、植えに来よった。雇いよったもん。一丁とか田が多かった（から）。六反でも雇った。ごっつぉう（ご馳走）、車代、いたれりつくせり、田植えは六反で三日かかる。加勢は（当てにしていた）親戚の遅れたり具合の悪かったりすることがある。金取りに行ったことはない（自分たちが他の村へアルバイトに行ったことはない）。石屋は早良からうちに三人ぐらい来た。川端、河川の石垣。何日も泊まり込み。田の石垣はここにはない。桑河内にちょっと。

盲僧琵琶・しんきょうさん

西新町（福岡市の中心街）から１年にいっぺんシンキョウさんがきて荒神さんを祭る（川崎真教氏と思われる）。琵琶を持ってひいた。のちには鈴だった。大野、泊まるところに帽子を掛けとく。中折りで羅紗。天気が良くてもコウモリ傘。「シンキョウさんのくるけん、雨が降る」といった。シンキョウさんは目は見えて、親父さんが悪かった（盲僧、親子で引き継いだ）。坊主の位は高かった。

シンキョウさんが来る日、うちのばあさんも、ほとめきおった。あのやかましか、うちのじいさんも一歩譲っていた。土間にござを敷いてお経。（カマドの）火の神様、台所の神様。じいさんたちも横座。あとでお礼に米をやった。荒神さんはたいせつにする。迷信ぶかい人はなんでも関連づける。火事が出たこともあったから。

箕の修理、肥（こえ）たごの修理はやってきた。どこからやってきたか。ゼンモンては、よういった。うちはたいがい泊めたけど、ゼンモンは泊めたことはない。お宮かなんかに泊まったろう。畳屋は泊めていた。立派なもんを作るけんな。ばあさんは親切なひとだった。巡礼途

中の旅のひと、いまいうハンセン病、「ライ」の夫婦も泊めたことがあった。やかましかじいさんが泊めてやった。信心ではなかろう。宿代なんかは、もらわんかった。店ではないから。豆腐も作れば飴も出す。ひとのよう、泊まった。ばあさん、学校の先生って（先生だといわれて）泊めてからくさ、ほとめいてご馳走。明くる日バスに乗る銭ももたん。（そのあと、その人物が）網取でも、だまくらかいてから。

肥前からはドジョウやタニシを売る業者が来た。川の石垣が崩れた時は早良（福岡市西区）の業者が来た。

炭

炭焼き、しよったですよ、リヤカーで引いて、ここ（ダム事務所）が木炭倉庫のあった所。新竈作るのはいまごろ（９月）、稲刈りの始まりか、終わる頃、おやじは竈つくり、あらかた仕舞えたら、残っているのは子供ばかり。子供が稲刈り。かし、なら、くぬぎ。世話人は地元の人、国有林（営林署）はタッチせんですよ。買った分、小分け。だいたい（境界は）分けてある。境だけ、切っていく。何合、１合から15合。１町歩、３町歩、五ヶ山50軒から山総代、投票して100林班を分ける。切れンとは印（入札区界の目印）をつける、目印に皮ば削る。

タカムラ山、アミトリ山。雑木山、国有林からの払い下げの値段と、個人への払い下げ価格に差額がある。その差額が区の財産になる。その財産がいまだに五ヶ山にある。入札、毎年、札を入れる。（そこを落札した場合）百俵できるか、できんか。ちょっと、もういっぺん、考えよう。一出し（ひとだし）でふつう80俵、90俵はできる。１俵は15キロ。カシの一番良ければ高い。米のダンじゃない、炭で食うとる（米より炭の方がずっと収入になる）。

田は平均６反、反当５～６俵。いまは８～９俵、１俵４斗の玄米、60キロで１万５千円が、政府の買い取り価格、個人で売れば高く売れるが（反当６俵で６反なら年間54万円の収入しかない）。

切畑（焼き畑）

切畑まきはうちのじいさんのころ、あずき、どーんとうちぶっといて。スイカ、カラスの食うてから。床焼きすれば草はあんまり生えん。バーさんがソバも作った。白い花、三角の実。昭和30年近く、中学卒業した頃。

牛と馬

昔は牛が活躍していた。おろしぎも宮ノ先も牛で行きおった。歩んでいく。牛に鞍をつけ、梯子のごたるつけよったなぁ。「テーキ」（梯子状の「テーキ」は荷用の専用鞍）をつけて、荷物を「いなわせ」（背負わせ）たりたり、クビキをクビからひっかけて田で働かせたりした。牛を右に動かすときには「しえい」、左は「しゃし（さし）」、前へは舌打ちして「チェチェチェ、はいけっ！」まっすぐも、横も、牛がいうことさえ、ききゃー、行きますよ。バックはあんまりせん。

モッタテ犂を使うと牛はまっすぐ進む。馬力のよか（とても力が強い）。田に出してすぐは跳ぶように働く。鞍あぐるとが、一苦労、びんこ、びんこ、してるから（元気がよすぎて鞍もあげられない）。危険だった。１畝、２畝は元気、持っただけでひきずられる。あとはぐったり。１日使うと、動けへん。こういう時は犂で牛をたたく。晩方になると、（帰ろうとして）わが家の方へどんどん行こうとする。

田植えの時は昼めし、牛に先に食わせてやった。後で人間が食べる。飼料は草とワラとフスマを混ぜたもの。フスマは裸麦や大麦の米ぬか。高いけん（高価だから）、ちょっとでよか。裸麦はそれだけ煮てから食わせた。牛は５月（田植え作業）するときはやおいかん。栄養がいるから高い飼料を食わせた。それ以外遊ばせる時は草だけでいい。田の草だけでは足りん。田の草は小さい、ノ（野）から大きい草を刈ってくる。ワラやら干してから、牛の一年の兵糧にせなかん。堆肥作りがおおごと、まや（牛小屋）に草を敷いておき、牛に踏ませて堆肥をつくっていた。マヤはフンやワラがたくさんあって、こづんどくと、ほめく（発酵する）。わらを唐鍬で切ると屑になる。夜なべにバーさんが二人で切りよった。発酵させて、10、11月にたたく。なかにカブト虫の幼虫のいっぱいおるとですよ。いま堆肥がない。

オスのキンキリ牛は女性がエサをやると「ふぐり倒す」こともある。人間が負けたらつけこむ。いっぺん、えすかって逃げたら、角でついてくる。（こらしめのため）鼻繰りを高い木につり下げて、ぼたぼた、うっ叩く。コッテ牛はおそろして、使い切らん。胴引き（路引き）に使う。金（キン、睾丸）を切ったのが金切り。金を切ってもコッテはコッテ。メスはウノウ牛、オスより足が速い。キンキリより高かった。肉が高いから（食肉としても高値で売れる）。太ったら（筑前だけど）「肥後牛」で売る、ばさら、もらった（値段が良い）。たかちゃんかたは、ウノ牛にも胴引きをさせた。

盆前は親父も金のいる。５月以降この牛をまるまる太らかいて、磨いてバクリューさん（博労）に売り、お金を手にすることができた。お金は盆の費用になる。差額で仔牛を買う。子牛は鋤きやら知らん、左さも行かん、右さも行かん、止まりもしない。一から教え直し。すぐに覚えるけど。牛、足の爪の破れる。小さい牛沓、わらじをつける。それが履かんのや。蹴られる。前足は何とか履かせる。後ろ足は履かせるとき蹴られる。痛（いた）か。

馬は荒かけん、大野に一軒、みちえさんが戦争の時、五島から持ってきなった。田んぼやら牛の倍を行く。競犁（きょうり）会があって、鋤く時間の早さを競った。馬洗いはお汐井場。場所のよかとこはリヤカーでも行ける。

山の恵み

――国の方針で薪炭用の雑木から針葉樹への樹種転換が図られた。雑木の時にはさまざまな幸があった。

営林署は、造林させよう、ってなったですよ。杉、檜にしたかった。山つきは栗、杉を植えた。減らかいて半分もない。自生するヘラの木の皮を剥いで川につけ、繊維を取って蓑を作った。これにはワラや庭のシュロ（棕櫚）の木も混ぜる。

うーへらの木は、一回でおしまい、枯れはせんけど。漆っては、なかけん。カゴ（楮）もない。トリモチの木は自分でメジロを捕るのに使う。

シュロの皮は下の方から皮剥いで池の中で石で突く。繊維が取れる。それを業者に売っていた。簑作ったりはワラじゃなく、シュロのはっぱ、山に自然にある。田植え綱にもする。田植え綱、シュロばっかり。枠は５本植え、６本植えがある。地元の手の器用な業者。治七じいさんが作った。

ミツマタは栽培した。アセビの毒は、川に撒いて魚を気絶させる。椎の実、食べる、どんぐりは、食べん。クヌギは野焼きしたところ。しいたけのほだぎにした。３年くらいもつ。椎茸

組合、ローキャビンの上、プールにほだ木を１週間漬けて、水（から）あげる。水あげて、ナバ（椎茸）を植え付け。五箇山区のしいたけ組合があって、冬に出荷したが、借金だけやった。冬出した。個人で売買する人はいない。家庭用が主だった（採算がとれなくなったため、現在は家庭用のみ栽培している）。ホダギは３年もしたら、つまらんなた（使えません）。

川

大野橋の下がレンキチ渕。魚取りよった。テッポウつくって。リヤカーのホーク（スポーク）やすりで研いで。ゴムでパチッ。箱めがねは自分で作った。ロウソク垂らして、よう見えるもんな。水中めがねはなかった。高くて買いきらん。越中べこで。網取の学校の前、椎の木渕、八重桜渕、深かった。八目鰻がいる。いっとう深いのは石の上。レンキチ渕はつっこみした。エノハ、どんどん浮いてくる。ゲランて乾燥した根っこ。大根の虫を殺す。Ｋさん、Ｔ屋のおやじ、三人で。芋づるが毒を吸う。あれば川にしとったら、それより下は死なんげな。雇うている石屋、何日も泊まりがけ。石屋さん、玄翁いっちょう、岩の上（叩く）。魚がビラビラーって浮いてくる。椎の木渕はえずーないけど、えすかったとはチゴ落とし。下まで潜るとはやおいかん。カッパの話はこの辺はない。

川の魚はおかずにはしなかった（＊忙しいから余り釣りはしなかったの意味と思われる）。エノハは焼いて、具合の悪か時（病気の時）、エノハの滋養の付く。味噌汁の薄うして飲んだ。西小河内からエノハ釣りの名人。朝から釣ってるところ、上から石を投げてじゃまをした。あのころ１匹50銭。

薬・食用になる虫・動物

サルカケイゲってトゲがある。猫の爪のようなとげ、根に虫。クサギの木に似ている。それがリューマチに効く。焼いて食えばカンの虫の薬、百葉丸。

おねしょに効くのはイタチの肉。中学生の頃から川端にずーっと、７つぐらい、竹のワナを仕掛けて、アブランコ（アブラメ）がエサ。500円か600円で売った。オスは美しかもん、メスやら銭にならんばい。子供だけん、だまされたかもしれんなぁ（安値で買い取られた）。肉はおねしょの薬、親父はイタチ取り専門、炭縄の縄ない機械、イタチ売ってこうた。屁が臭い。イタチの最後っぺ。皮を剥くときに出る。

「犬はおねしょの薬にならないんですか」

西小川内のＡさん、悪かった。アカイヌのおいしかって。泡のたつげなっていうが、たっとらんかった。たったいっぺんだけ（何の肉だったかわからないものを食べさせられた）。

うさぎはしょっちゅう、すき焼きにして食べた。おいしか、固くない、柔いですよ。専門にワナをかける人がいた。ウサギの皮、あれは売れめぇ。皮むきは尻から空気入れで剥ける。

カラスは殺したのを吊しといて、身のあるのはちょこっと、臭いとじゃ。毛ばむしる時、剥いてしまったら臭くないけど、うまくない。狸の皮を張っているのを見た。

イノシシはこうくぼの池、梅の木、ワイヤーのワナを掛けとった。あらかいたな。ブーブーブーブーいうて、根ば引き抜いていた。ワイヤーは切れめいが。足にかかって死んどらん（ワイヤーは切れず、木が引っかかって逃げられない）。とうぐわが冬で直してある（片付けてある）、それを組み直して、離れて先さ行って５発ぐらい撃ったら死んだ。あんまり太うして、あげきらん。50キロあった。冷とうなってダニが出てくる。

金の採掘

――昔びくんだん（比丘尼谷）で金を掘っていた時期があった。分限者のおばあさんＳさんが始めた。金山といっても手掘りの小規模なもので、人手は身内だけで間に合った。あとからも別の人が投資して井戸や水車を作ったが、けっきょく失敗。

あんたたちも知っとろう、水晶のある石。あとからだまされてこうてから。Ｋさんは静岡からきた。流れ者じゃろう。「んだもの」といったくさ。都合よう、養子に入られた。Ｓさんの婿。悪か人ではなかったけど、やおいかんねぇ。仕事すかず。Ｓさんの家は女ばっかしの家、そっちのＴ・Ｙさんのおかあさんが長女、Ｓさんは一番末の娘だった。網取のこげん大きなマキの木の何本もあった（それほどの分限者だった）。大正の初め、Ｓさんの（金鉱を）始めたけど成功せず、少しぐらいは金（キン）の取れたろうが、採算の合わんかった。その養子の（が）、財産のうして（なくして）しもうた。

そのあとからもＩさん、長崎のＫさんたちが「金が出る」とだまされ、水車小屋を作って、長屋たてて井戸掘って。結局何も出てこなかった。Ｉさんは長女がわたしと同級生。Ｋさんはふとか電蓄を持っていた。うちのじいさんがくさ、やかましかって腹かいて、それからいっちょんこん。

いまでも縦坑がある。水のだんぶりしとろう。ビクンダンのちょこっと入ったとこ。ほんの道の横、現在も国有林のなかに竪穴が残っている。もし子供がメジロ捕りに行って、落ち込んだら、帰ってこられん。

よばいはむかしあったげな。青年、戸の隙間、蚊帳吊っていたりする。ただ、いってからじゃー、冗談で。干し柿、夜ばい、石垣のそうへいさんのえすかった（石垣惣平さんからさんざん叱られた）。学校（不入道）の下まで行った人がいる。「だれかー」って（いわれておしまい）。

――小川内も大野も福岡県と佐賀県がある。佐賀県は向かい大野、「川向こうの大野」（佐賀県小川内）とは言葉も違い、交流は限られたものであった。

子供のころ、佐賀もんとは、よう喧嘩した。「向かい大野のおおべこ（べこはふんどしの意）はいて……♪」、おらびよったよ。あっちは言葉があらかもんなぁ。長じてからは死んだりしたらお悔やみには行く。それだけのつきあいで、結婚だけはない、行きも来もせん。

――寺は脊振の三光寺か埋金の光蓮寺まで出てゆかなければならない。

Pho.Ⅲ3-4-1　大野：聞取り調査

Pho.Ⅲ3-4-2　大野での聞取り

三光寺、築地姓のものばっかし、檀家は少ない、五ヶ山でも五、六軒。もし祈祷・お尋ね事があれば発電所近くのエトウさん（大分県出身）か、太鼓をたたく「ばあさん」を訪ねる。祈祷師はおかみさんのごと、おたずね。ばあさん、コマさんやらに行きんしゃった。

「おとこし、おなごしはいましたか？」

Ｔさんが使いよった。住みついてから二人いて、一人は焼酎じいさん。酒飲みすぎてうちにきて小便まいて困った。さかい雲右衛門とか浪曲語り、いちゃもん入れとる。肩から背中から観音様の立派な彫りもん。芝居青年に芝居を教えて、それでお礼に焼酎って約束。それがちょっとくわんねぇ。腕に「すみよのばか」って入れ墨で彫ってある。逃げた嫁御の名前がすみよ。流れてきて炭焼き使い。Ｔさん、よう使いきんなったなぁ。

戦死者

うちのおやじはガ島で戦死、30歳、わたしは４歳のときだった。さっきから親父っていってきたのは２番目の親父です。靖国には行ったけど、それよりもガ島、ガダルカナルに行きたい。50万（円）でいけるそうだ。いっしょにいくつもりの人、よかろうといっていたけど、弱ってきて困っている。

ｖ．道十里　〈2003（平成15年）３月18日取材〉

地名

桜谷：大きな谷、九千部山まで行ける道がある、今排土で埋め立てられて、グリーンピア。

漆ヶ谷：桜谷と下部で合流、桜谷より小さい、ヨダチの手前から分かれる。上の方には小さい深田、水の溜まったごとあったね、田のつづきに墓があった。

ヒトツノ：丸くて低い山、今グリーンピアのなか、漆ヶ谷のほん、傍やったよ。

ナバダン

ヨダチ：ふさえさんかたの田んぼがあった。

タチクチナワ：漆が谷の入り口。高い岩が割れとう、なかに立口縄、たった蛇（クチナワ）がいるという、何度も覗いてみたが、いなかった。

オオヤシキ・コウザブロウサンヤシキ

ハンノダン

中尾橋

オクノノ

大坂

セグチ

前田：大きな田で４反の田があった。

キタゴウ：北川の意か、やすさんの実家の屋号。

やすさんは道十里の出身、南畑ダム、五ヶ山ダムと、自分の住んでいた家がダム建設のためになくなるという経験を、生涯に二度もした。

お宮と仏さま

網取橋のすぐそこに社があった。桑河内と道十里のもやいのお宮。もともとは桑河内の宮、かたしてもらった（水没するので地蔵や社をここに一緒にした）。石の鳥居がいまでもある。

（お薬師さまと阿弥陀さま）

（見てもらった）地図の鳥居のマークは、神社ではなくお薬師さま。新暦の７月７日にお祭りがあって、地蔵の方は薬師さまのすぐ近くにあって、７月24日がお祭だった。お経はあげなかったなぁ。振る舞いは炭酸まんじゅう、ふくらかして。お煮染め、ちくわ、かまぼこ、肴作ってね。拝殿で。楽しかったね、あのころは。みんなで寄り合った。

御利益は何もなかったなぁ、あの人は（お地蔵さんは楽しかったみんなの村の生活を守ってくれなかった）。

近くに阿弥陀さまがあった。いまダム水面に枯れた２本の木が突き出ている。阿弥陀さまのイチョウと呼ばれた。おんなイチョウと傍らのおとこイチョウ。もう少し上にお宮（阿弥陀さんの建物）。大イチョウ・おんなイチョウはたらちねイチョウ、乳房がさがりよりましたよ。乳のでない人が参った。福岡県天然記念物にもなった。小川内の佐賀県天然記念物のスギ（山神社）よりもさらに奥に、同じようなイチョウ（東光寺）があった。それを切った関係者、若い人が、かつがつ亡くなった。神社の木を切ると祟りがあるというのは、まんざらでもない話（詳細は『小川内誌』142ページ）。大きな木、特にお宮の木は切ったら障りがある。切ってもいかん、売ってもいかん。ダムに沈むことになっても、そのままにしておいた。十何人でまわす（10人以上の人でもかかえきれんくらい）、大きな木（今もダムの中に立ち枯れている）。

ダムの記録映画か何かで、ギナン（イチョウ）の木の周りで踊り、そのなかに元気な母がいた。涙がとまりませんでした。

（最澄と空海）

一番奥の木戸にあった祠。空海と最澄をお祭していた。どちらも石作りの像で、茶色くなって、空海のほうが立派だった。祠の家も立派なものだった。来た人が売ってくれ。父が売らん。グリーンピアのところに移築した。それが去年、戸を叩き破って盗まれてしまった。

わたしの家が一番向こう、実家の姓は築地。屋号はキタゴウ（キタガワ）。他の家の屋号はなかった。川の北側、下から徳永、山田はじめ、長野洋三郎、きたごう（やすさん実家、築地）、南側長野さんの向あたりに福富、上は早くからよそに行った家、あとで佐七さんが入った。その山側に薬師。

用水

サクラダニとキタゴウ（北川）の二つの水で道十里の田んぼをまかなった。憶えている田んぼは、一番したからナバダン、次がオオサカ、そしてセグチ、一番奥がオクノノという順にたんぼがあった。10枚くらいずつに名前がついていて、ひとつずつ堰があって、水はそこでちょっと止めて流していた。みんな石垣をついていた。自分の里の山。

前田という、いい田んぼがあった。大きいとが４反。一枚の大きなよい田んぼだった。小さい方の田んぼがヨダチ。前田より登って、はるのだん（ハンノダン）、よだち、中尾橋のうえ。

漆ヶ谷の墓地改葬

ウルシガタン（漆が谷）には墓所があった。田んぼの堤のところ。ここにあたしのじいさん

がいけとった。掘りましたよ。ここ、ダムになりよりましたろう。そったら、おーきな甕にねえ。コンクリの蓋をかぶせとったんです。そおたらねえ、掘ったらね、まだ、足やら、立派についとって‥‥爪から指から、まだじいさんが若いとき、見覚えのある足も手も立派に。頭は上の方やけん、くさっとった。水が浸かっとうしこ、（ほ）んっとに澄んだ水。そいを飲めば肺が治るっていう。今は飲まれん。んっとに澄んどりました。匂いはした。上は腐っとりまっしょうが。

――病気の薬で欲しがる人がいましたか？

いや。いない。足見て、ああこげんな足しとったねえ、って。立派な足。83かねえ。出したのはそのあと、火葬にして焼きなおした。明治35年、五十歳のときにうちの母が産まれましたから。元気な人だった。漆が谷の墓には、ばあさん、おじいさんと、お父さんの子供のマツって人。それとその前のじいさん、ばあさんがいかして（埋めて）あるっちゃったい、な？（おじいさん、うなづく）。あたしのひいじいさんとひいばあさん。５～６人。

古墓

それより前の先祖の墓はマエダの田んぼの上のほう。ダムの中になっとりますたいね。そこが古い墓。そこも改葬したが、そっちは全部泥ばっかしだった。そいともう一つ、ナバダンの下に。３つお墓はありましたねえ。戒名は残ってない。石塔だけあった。サクラダニの墓には戒名があった。おじいさんの戒名はしらんばい。京都に参って戒名をいただくってしょうが。そしたら龍谷寺授与のなんとか、って戒名が書いてあった。龍谷セイ何とか…ちゃねえ。つまんない戒名じゃったなあ…。

ナバダンの墓が一番古い。その次がマエダ、一番新しいのがサクラダニの墓。誰の墓かということは多分ダム事務所が調べているはず。今実家は不入道の学校の下に移動した。お寺はコウエンジ。ぼんさん（お坊さん）呼んで、墓を移動させるのは、おおごとやった、って（実家の）嫁たちがいいよらしました。おもてなしやら何やらで、ですね。骨は火葬にしてお寺の納骨堂に納めた。道十里の墓所はその３ヶ所だったから、彼岸や盆に参る場所（墓）は沢山あった。ナバダンの墓所は三軒分。マンちゃん（福富マンキチ）とレンちゃん（マンちゃん・レンちゃんは同じ家。マンちゃんのほうが養子に行った）、うちと、サシチさん。福富、山田、長野の三軒。前田とサクラダンの二ヶ所の方は６軒すべての墓所があった。

――草分けという家はありましたか？

いえ。知りまっせんなあ。サシチさんの家は徳永さんの家の分かれ（分家）やけん、な？サシチさんの家は一番新しい。あと田作りで道十里に来て、そのまま住んだ人もいる。明治28年くらいの生まれの人。田つくりで10年くらい道十里の三軒の家の田を作った（＊のちダムを造るときに小作権補償が発生し、田の所有者ではなく、耕作者のほうへも補償金の一部が行ったらしい）。鳥栖の河内（カワチ）出身の人。東小河内から嫁をもらって。

オオヤシキと呼ばれる大きな畑があったが、そこには昔人がいた。自分は何も覚えていない。オオヤシキのあたりはコウザブロウサンヤシキとか、あたしたち、いいよらしましたよ。家はない。ただ、畑があっただけ。オオヤシキ。ハンノダン、こっちがオクノノ。オクノノまで田と畑があって、そこから先はずっと山。官山。

炭焼き

炭焼きをやりました。みんな部落で寄って、投票して。焼く場所を選んで、分けて。投票は一年に１回。秋。夏の終わりから秋口。９月に投票、籤じゃない。

山の値段を決める。20とか30に分けて、競って高いものが取っていく。ここなら500俵できるから、いくらとか。競りあぐる。五ヶ山中が全部寄って、ナラ、カシ。毎年投票する。国有林やから、炭焼きしたあとは全部植林していく。造林はスギ。ヒノキ。だからあとはずっとスギヒノキばっかし。そのころは、スギは値段は良かったですもんね。で、みんなスギを植えるのが良いって思ってた時代でしょう。それが、ねえ。今となっては。（部落から）遠い處は全部、官山。

――戦中でもスギを？

はい。スギ苗かろうて、唐鍬持ってねえ。山へ植えに行きましたもん。これくらいの穴掘って、スギ植えな、ならんでしょ。唐鍬っていうのは小さな鍬のこと。男も女も出て行ってようやりましたよ。よくぞやったよ、あの頃は！あはは。思い出すねえ、ほんと、な。

――営林署に雇われたんですね。

はい。あのころは一日５円か、６円か。今のお金で考えれば安かったですよ。でも昔はそれだけあれば…こう、物を（肩から）下げて帰ってくる（それ程度は買えた）。あんころは母が…ありゃあ、紋付っちゅうか、きちんと仕立てたものを買ったら230円したかねえ。行商の人が仕立てた着物を売りにきていたんで、私と妹が自分達の金で母に買ってやった。…そしたらもう、お父さんが怒ったもんねえ！あの頃は父親っちゅうもんは何でも取り締まってたから（笑）。“（その着物売りは）大野までまだ行かんくさ！”って。買った着物を戻してこいって。あれには難儀した。恐ろしかった、お父さんなァ（みんな大笑い）。お母さん喜ばそうって思ってね。自分達が働いた銭もあるっちゃけえねえ。お母さんも欲しいって言うし。

ワサビ売り

――官山の日雇いをしていた頃ですか

いや、あたしたちが娘のころはね。村の谷でワサビを一生懸命取ってね。肥前の山のむこーうへ、30キロもかろうて、もう、やおもいかんとですもんねえ。歩いてですよ。自転車もオートバイもない。あたし達の小さいときは。大野の道。七曲峠を越えてね。さがしいところですよ。２～３人で。ワサビの谷（キタゴウ谷）を官山から借りて。税金（入札料）は払うんです。道沿いにあった。鑑札はない。そやけん盗人がおりましたねえ。そんころは、肥前に行けばよう売れよっとですよ。鳥栖なんかはワサビ漬けで有名でしょ。神崎まで売りに行きましたよ。売れんときはとうとう、あんた。歩いて久留米まで行きましたよ。歩いて。久留米の市場で売れるかと思ったら、そしたら“５円！”って言われてくさ。いっしょけんめい行っても、５円やった。普段はいいお金取れた。10円か15円。

――久留米までも行って、がっかりですね。

根っこを持っとるほうがね、ずっと高値。あん時、そんなん（根でも）持っとればよかったばってん、根を取ったら生えてこない。持ってあったんとは（葉っぱだけだったので）５円ぎりやったけん、わたしはあんとき涙が出た。10枚葉っぱをまとめてとめるとも、ちょっとしたコツがあるとですよ。熱い湯で葉っぱを塩もみしたらカラっとなる。とっても美味しいとです

よ。食べさせてやりたいけど、時期がな（ワサビ葉は４月のみ）。あんた達が来るのがちょっと早かった（笑）。甘酢に浸けたり、粕漬けにしたり。とっても美味しいですもんね。酒の肴にいい（註１）。ワサビで稼いだお金で着物の羽織を買うたこともありましたよ。あの頃は着る物もなかった時代でしょう。それから炭をかろうて売りに行ったり。炭３俵で着物と交換。あれは絹やったなあ。柄もんですよ。山越して綾部町の方で交換しに行った。

ワサビ泥棒はなあ…誰がやったか、大体わかるくさ。でもそんなこと、いわれんなあ。やおいかん（笑）。土地の人は絶対そんなことせん。ここは白炭はなかった。黒炭、焼き子はいなかった。地元だけ。窯は自分達で作った。そうちゃんが今でも休校中の学校の傍に作ってあったが、上がぽんと、ほげて（笑）。泥が悪くてね。粘り気がなくって（註２）。

９月～10月に竈をうつ。５月～６月はいくめいな（時期ではない）。迷信というか、家でお葬式をすると、ちょっとしたしきたりがある。神棚に紙を貼るとか。うちのなかでさぐるだけ。書くとは家の門口に「忌中」。「ひのはれ」があって、女は（それまで）33日、男は31日、神様に参れない。お宮参りもしない。お産の時もしない。

切畑

切畑焼きは、前は小豆、らっきょう、里芋。自分の山でする。いまはサルとイノシシ、何も野菜は作れんですよ。サルはイノシシのおるところにはこん。（イノシシが食べるのは）くずね（葛根）、くずはかずら、山芋、ニオイがするそうです。タケノコ、いまは歩かれんごと、全然見えん。

国有林たら七曲峠ですなぁ。国境の石がずーっとある。境界のちがう。福岡の分、国有だから防火線がある。佐賀のもんは福岡県分下がった分を国有林っていう。

川の瀬、渕

大川の瀬はながあぜ（長ぜ、ながぁーせ）、水浴びどこ、深かった。立ったところ、いっぺんくさ、砂が、ぞーぞって、行くとですよ。小さい子は浅いとこ、六年生は深いとこ。みんなが助けに行く。事故はなかった。渕は道十里にはない。網取。

魚はアブランコぐらい。大きい魚はおらんやったですね。イシモチ、腹に吸盤、頭の太い、頭ばっかりでおいしない。ドンポ。アブラメはたべた。ウナギのおった。天然のエノハは佐賀橋、大野橋から上にいる。サンショウウオは見に行きましたよ。五十何年も前、胴がこげんに太かった。気持ち悪かった。

お万が滝、ハマグリ水道、佐賀にとられとる水を落とそう。チゴ落とし、そこにチゴを落として自分は上に行って、水を落とした。佐賀もんが通ったら草もはえん。佐賀とは縁組み一つない。わたしの子供のころ、石投げて喧嘩した。

平家伝説

平家の落人（おちびと）、白い馬に乗ってきた。白い馬はいまでいうふつうの馬だろう。平家の落人がばくろうになって、島原から来ましたげなから、馬に乗ってきてヤーラ（？、229頁、ヤーウチか）あたり、馬と換えた。ここで一人ぐらい百姓されるよ、っていった。みんなから材木もらって、家たてて暮らしたとか、先祖はばくろうだったげな。年寄りばばさがそういわした。

もみすり、田植え

道十里、前田が反当６俵、山田が４俵から５俵、１俵のげ（毛）、ちがうねぇ。うちの里は戦死した兄がいたころは１丁６反、村は平均６反、３分１は小作、（道十里）全部で５町歩くらいあった。１反で二人養える。11人家族だったけどゆっくり。

（収穫後の）もみすりは村のみんな、総動員。おい（おし）たり、ひいたり。足踏みで、わらから籾を落とす。天日に３日。そうけで担いで木のトウス（唐臼）、いっぱい。農協の機械が入る前のことはちいさか時、かすかに覚えとる。格好だけあった。木の臼、目ば詰めて、細工してあった。上から吊してって、聞くだけで、覚えていない。

「もみすり歌とか田植え歌とかは？」

田植えの時、歌でも歌おうもんなら遅れてしまう。競争しおりました。わたしは早かった。（一日で）苗取りしてから二人で一反植えた。仕舞い田は荒神。苗を３把、３つ苗、３把（さんば）苗をお荒神さまにあげよったねぇ。お荒神さんはムシロ敷いて庭であげましたもんねぇ。御幣は３つたって、りっぱなワラとってかな、いかんかったもんなぁ。

田植えは学校に行く子供も手伝う。加勢は４人ぐらい、それで１週間かかる。加勢にはお昼にごちそう、晩はお酒。ちょっとー。父親は采配をふるう。母が炊事、そとにでりゃ人が来る、はかがいかん。こびる（小昼）にお茶持って。それで、やとわな、植えきらん。

いまは祇園頃、７月15日まで。おそう（遅く、田植えを）した人がいる。わたしの里は６月の内に終わります。遅う植えるとを、好いとる人がいた。雇い手の奪い合いとか、よそに行きましたら、やおいかん。（人手の確保が楽でも）７月過ぎるとできが悪い。日和がだいぶちがう。太陽の光が当たる年と当たらん年があるけど。（夏至もすぎた）７月に植えると１俵ぐらいちがってくる（落ちる）。田植え前、麦をコンノウして、しもうて、田をおこさなならん。

小麦も作ってました。岩戸まで挽きにいきよりました。友達同士背負って、山田の上に精米所、粉を挽くとこ。母はうどんを作りよりましたもんねぇ。粉挽き、いつでも小麦をかろうて、津垂（つたる）沿いに行く。

盲僧琵琶とカマド

シンキョウさんの西新町からこらっしゃった。そのお父さんが目が見えない。チゴ落としから落ちた。お手引きさんがおこられよった。シンキョウさんのとまる家は決まっとりましたもんね。徳永さんやった。越中富山の反魂丹、入れ薬、それはうちに泊まった。姉さんが子供の時、寝とぼけて、薬屋さんとこに泊まり込んでおかしかった。

シンキョウさんのこらすばい、小学校のころ、えらいきよったが、４月か５月、背の大きうしてなぁ、りっぱな男、美しかった、きれいかった。ありがとうございましたって、１升ずつあげよった。帰り、百姓しおらんものに、売って帰る。

「荒神さんは竈神ですね、いつも竈に火はあったのですか？」

マッチの替わりはツケギって硫黄を溶かして、木のかんなくずみたいな―竈に火の消えたことはない。電気は３つまで、つかんかった。母が「キンギンっていったよ、あんたが、たまがったよ」ってのちのちまでいった。

早道は御所橋のずーっと上、石の飛び（飛石）があってね。近道がありました。学校はそっちが早い。大水には流れることがあった。

機織り

木綿、はたおりはしました。麻はしてない。木綿の糸は買ってくる。ばーちゃんたちがやっていた。蚕は飼いました。茅からダツ、寒いのに小屋に行ってダツ編み。

ささぐりは自分で取った。けど売らない。柿も売らなかった、甘くない、悪いけん。かじ、こうぞもない。お茶は東小河内。

戦争中のこと

今うちを継いどる弟は、戦争中は小学生、昭和６年生まれ。朝から巻脚絆、ゲートル巻いて学校へ。筑豊炭坑に送る坑木出し。戦争中の勤労奉仕、山から一本・二本、生徒が松の木を出す。馬車がかり（道）まで。学校しとらん、わたしも坑木出しには行った。市ノ瀬、山口のサル山。きょうも勤労奉仕、あすも勤労奉仕。電気があかかったら空襲の目標、電気を切らして（切って）。そのころは今の脊振山頂上の地下基地みたいな軍事施設はなかったけれど、国有林に焼夷弾を落とされて山火事になった。

＊昭和19年に日本陸軍のレーダー基地建設のため道路工事が行われたらしい。

兄が戦地に行って、田鋤（たすき）もしました。わたしは（女でも）競犂会にもでた。父が用事でいない、わたしが赤牛、ウノ牛を使った。女と思ってツノでわたしを土手まで押して。いつも鋤（すき）よるけんねぇ。父が竹持ってきて叩いたら、それから（悪さは）せんごとなりました。左、サシサシ、右、セッセッ、前は叩く、（止まれは？）だまって引けば止まる。

かわったもんで、女でも炭焼きにいった。木を切るとが、私たち姉妹の仕事。青い服着た囚人が加勢に来た。父が村会議員、明日おらんけん、たのもう。監視（看視）に頼む。上の竈で詰め替え。監視はいたけど。田植えにも来た。草とるときのがんづめ、囚人たちがはやく植えるけど、草とる場所を空けずに植える。いやでいやで、たまらんかった。

戦死の公報

昭和19年、みなで田を植えとりましたら、「ちょっと帰れ」、何ごとかと思った。帰ったら、ばあちゃん、川で麦をひらかす（冷やかす）。むかしは麦をそのままご飯に入れず、長（なご）う炊いて、大きうなして、それからご飯に入れた。そのままだと、べたべたするから晒す。ばあちゃんも、何があったか知らん。田植えで夕方にしか帰ってこんはずなのに、「あんたがた、昼に何ごと、帰ってきた」。家に入ったら、線香のにおいの（が）した。次の間で父が一人で、手あわせて拝んどる。いわんでもわかります。ばあちゃんは知らん、じいちゃんが悲しがるからと思って、いわんかった（いえなかった）。肉弾で突っこんどうですよ。築地淳美（あつみ）、20か21やったろう。ビルマ、日の丸高地だったかな。弟はまだ小さい、まだ小学校。兄がおるときは１町６反全部作ったですよ。（こんな気持ち）そういう目におうた人じゃなきゃわからんでしょう。

戦死者の家ということで、田植え、稲刈りも来てくれました。学校の生徒もきました。終戦までです。道十里で戦死した人は徳永さんの弟の勝（まさる）さんと二人。

遺骨迎えに行ったのは市ノ瀬、あそこまでは車で持って来とらっしゃって、そこまで行った。弟は男やけぇ、あんた（お骨を）持ちなさい。後ろから黙々と泣いていきよると、上から知らん人がわぁわぁ笑って歩いてくる。こんなん思い、身内じゃなきゃ、わからめぇ。昭和20年、もう戦争は終わっていました。

わたしの従兄になる人も一人息子で戦死しとります。その母、わたしのおばさんに当たる人がすでに死んでいて、葬式ができなかった。頼まれてこっちのお父さん、母の兄になる。遺骨迎えに（博多）万行寺まで行きました。わたしたちはいとこ結婚ということです。

父はわりとすぐに靖国神社に行っとります。母は腰が曲がって長旅はしきらんかった。行ききらんで死んだ。

vi．市ノ瀬　〈2005（平成17年）6月28日取材〉

塩買峠について市ノ瀬にて（2005年6月）

一里塚がある。成竹（なるたけ）の下、九千部にアンテナがある。正月の日の出を拝みに行く。犬の塔、猟師の人、峠でお弁当、犬がワウワウ吠えて、吠えかかってくる。自分の犬か野良犬か知らんですよ。せあしぃって、犬の首ば切った。大蛇のおって頭から呑まるるところやった。それを知らんで、犬を切った。犬をまつらないかん。それが犬の塔。

塩買峠、塩を買いよったんでしょうかねぇ。ここからも鳥栖に買い物に行くから。博多より鳥栖に行きよったって、古かバーちゃんがいった。シオクジラ、山の仕事に行くとき持って行く。半年たっても一年でも保つですよ。塩辛うしてあるですよ、焼いて食べておかず。塩くじらはかたまりでこうてきた。おばいけ、こうてきて、ずーっとくさらんですわ。薄く切って大根やらでたくと、油が出ておいしい。

むかし峠の歩いて行ったこと、あったかなぁ。戦時中、鳥栖までは行かんけど神辺（こうのえ）まで行った。鶏、卵は供出、鶏を買いにいって、めんどりば、こうてきた（塩買峠を越えて、ワサビや炭を売りに行った人は、苗ヶ尾、大谷には多い）。

このへんは塩をかますで１俵ずつ、買ったですもんねぇ。かますに入った塩、わたしの里、実家は笹原駅の方のこうちゃ店、ちょっとした百貨店みたいなところ、田植えになったら笠から蓑から絣の着物から。豆腐もあれば塩とか砂糖もあった。むかしは味噌、醤油、しこまなかんでしょう。牛にも馬にも、水飲ませなかんですもんねぇ。駄桶って桶の中にちょっと塩を一握り、入れてやるとよう飲む。塩は１俵いってもかます何斤っていった。20キロぐらい。

＊１斤は160匁、600ｇに当たる。

ざーっと編んだカマスに綱かけて。コリって桶、楕円形の桶、それにしょうけ、そこへ塩をのせておく。にがりができる。それで豆腐を作った。

豆ばひいて、炊いておく。豆腐たぎらかいて、にがりを入れないと固まらん。

市ノ瀬きてから老司の角、百貨店前に、市の立った。

市とヤマモモ

ここはヤマモモの産地、五ヶ山にはならん、五ヶ山は小さくてガシガシ、食べられん。西畑からあのへんまでは粒の大きい太いモモがなった。それから下も小さくて酸（す）いして食べられん。うちの桃は九平（きゅうへい）モモ。二代前が九平っていった。赤モモも白モモもある。黒田長政のごじぇん（御前）モモ、わたしが孫を育てる頃まではよかモモ。じぶんが子どもの頃は西畑やらの青年が取りにきよった。モモはねぇ、大きな木があれば接ぎ木してつがわ

る。堀切、大谷（うーたん）でも九平ってモモはあるですよ。ふしぎに接ぎ穂のモモはモモがちがう。うーきなモモ、大きな粒の上に二粒ほど飛び出てたモモは、この親モモにしかない。

今生きてれば100いくつ、明治10年生まれのじいさんが市へ売りに行った。自分も15くらいの時から、いのうてモモ売り。届いて降ろしさえすれば、すぐに売れた（市場に小売りの人がきて、すぐに買った）。仲間の人もりんちゃんのモモば、先に売らな、売れん（九平モモがはじめに売れなければ、自分のモモが売れない）。すぐ金になった。こんな楽なことなかった。かごはザッショかご、つぶれもせん、翌日の色変わりもない。いっちょも変わらん。買いやさんも知ってる。見て、よかとしか、買わん。

朝鮮人労働者

この家の下に橋が架かっていた。杉と杉の土橋。脊振、昭和20年に負けたけど、19年、日本陸軍がレーダー基地、どんどん、道路作った。そこに人夫、親方夫婦と子ども３人、（うちの土地に）杉と杉の間、ムシロひいて屋根はトタン、ふたをして、住んでいた。おじいさんが契約していた。陸軍に雇われて働きにきとった（＊軍属ではなく、協和会を通じて雇用されたはずである）。裸になってシャツ一枚、ツルハシで道路作り。15～16の娘、子どもを背負っていた。親方は朝鮮人、日本語分からない。娘は日本語できた。「みかんください」、いいよ、っていう。親方はおとなしい。

８月15日、終戦になったら、その晩わんわん、人夫が騒いで酒飲んだ。飯場は新しいどんぶり飯で、いっぱいだった。親方も（土地の）借り賃、支払います。ここにあるものは、持って帰れん。使えるものは使って下さい。案外お金を貯めて物持ち、それで帰っていった。

博多の空襲は夜やった。九電の鉄管、登ってみた。南畑ダムの九電鉄管は明治30年できあがって、まうようになったのは39年ですって。花火大会っていうけども（花火のように）、ここもビラビラ、そっちもビラビラ、それからがたいへんですたい。五ヶ山から嫁入りしていた人、夜明けになったら、こどもからって、ワンワン泣いて、帰る（帰ってくる）人がいっぱいおった。

聞取り協力者

山田和馬さん（昭和３年生れ）；山田善寛さん（区長：昭和16年生れ）
築地勝藏・富喜子さん（東小河内出身）；築地九内・洋子さん。
築地松蔵さん（大正７年１月１日生れ。聞取り時84歳）
築地徳実さん（大正11年生れ）・築地やすさん（大正14年生）
築地蔵次さん（昭和14年生れ、当時区長）、神代さん

註

1　ワサビの葉にお湯をかけて塩もみし、辛味を強くすることを“ワサビを立てる”という。「昔は根性の悪い人が立てると辛いと言っていた」とのこと。伊藤義光（64）・スミエ（59）さん談。（西日本新聞：平成９年４月25日付「五ヶ山の記憶・春―６」より）

2　ここに出てくる“ソウちゃん”とは宗雲荒江さんのこと。なお、西日本新聞の平成９年１月25日付「五ヶ山の記憶・冬」に東小河内でただ独り炭を焼きつづけている築地可隆さんの記事が紹介されている。

〔服部英雄〕

4　小川内の地名と地誌

〈2003（平成15年）3月19日取材〉

小川内俗称地名簿　　明治９年土地台帳より
昭和54年１月調査　杉童（武広勇）　小川内俗称地名調査
字**大野**・うーの（古代は笹の内・ささのうち）
　宮の瀬・ぐーのせ　**桜宮**・さくらぐー　**竹の出口**・たきんでぐち　**作開**・さくびらき　**南**・みなみ　**三（畝）町**・みつぜまち　**椿の下**・つばきのした　**川原**・こーら　**前田**・まえだ　**五畝田**・ごせだ　**花田**・はなだ　**笹原**・ささばる　**野間ヶ谷**・のまがたに　**頭石**・かぐめいし　**大原**・うーばる　**竜笹**・りゅーざさ　**芋山**・いもやま　**深谷**・ふかだに　**西ベラ**・にしべら　**かずらが谷**・かずらがたに　**ドックー谷**・どっくーだに　**裏田**・うらだ　**片ヘラ山**・かたへらやま　**大開**・うーびらき　**ジュルカイ**　**雪穴**・ゆきあな　**前川**・まえがわ
字**古小川内**・ふろうごーち
　瀬井川・せむいご　**堤ヶ原**・つつんがはる　**深田**・ふかた　**猫峠**・ねことーげ
字**長谷**
　矢落・やーうち　**加藍渕**・がらんさん　**墓の上**・はかのうえ　**墓の下**・はかのした
　礫ヶ谷・つぶてがたに　**お岩の谷**・おいわんたに　**大牟田**・うんた　**中畑**・なかばたけ
　又谷・まただに　**渕下**・ふちじも　**近道**・ちかみち　**稚子落**・ちごおとし
字**前田**・まえだ
　宮の裏・みやのうら　**宮の下**・みやのした　**一本杉**・いっぽんすぎ　**前川**・まえがわ
　川原・こうら　**八竜山**・はっちゅうさん　**前田**・まえだ　**森の裏**・もりのうら
　猪川・ししごー　**助の谷**・すぎんたに　**南**・みなみ　**丸山**・まるやま　**滋海山**・ぢかいさん
　加勢原山・がせばるやま　**寺屋敷**・てらやしき　**寺の上**・てらのうえ　**寺の下**・てらのした
　寺の坂・てらのさか　**寺山**・てらやま　**穴釜**・あながま　**石南の辻**・しゃくなんのつじ
　大凹山・おおぐぼやま　**金比羅山**・こんぴらさん　**溝洗**・みぞわら　**氷倉**・こうりぐら
　お萬泊・おまんどまり　**包石**・つつみいし　**堀釜**・ほいがま　**出切**・できい
　五郎兵衛・ごろべー　**登尾**・のぼりを　**お萬ヶ滝**・おまんがたき　**夫婦石**・みよといし
　中畑・なかばたけ　**徳阿弥**・とくあみ　**鹿の猪谷**・かのししだに　**鹿の尾**・このお
　阿弥陀山・あみださん　**篭原**・かごわら　**平口原**・ひらくちわら　**不動山**・ふどーさん
　楠ヶ谷・くすのきがたに　**長藪**・ながやぼ　**南**・みなみ　**茅立**・かやだて　**又谷**・まただに
　九衛門釜・くえもんがま　**竜笹原**・りゅうざさばる　**柿ノ木**・ツボ　**巻藁畑**・まきわらばたけ
　湧山・わくやま　**ニガ所**・にがどころ　**岩立**・いわたて　**オモノ木カクラ**　**打越**・うちこし
　大タブ・うーたぶ　**カキガ谷**・かきがたに　**穴釜**・あながま　**花子ダラ**・はなごだら
　ウボ山・うぼやま　**正札下**・せいたつもと（ママ、せいさつもとか）　**権ヶ坂**・ごんがさか
字**豆野**
　竜尾・リウーオ　**豆野**・まめの　**長石**・ナギャーシ　**丸尾**・まるお　**藤原**・ふじわら
　尻無尾　**三つ尾**・みつお　**豆尾**・まめお　**亀石**・がめいし

字**大谷原**・うーたんばる

一人遍人・ヒトイセンド　**大谷**・うーたに　**角石原**・かどいしわら

字**竹の屋敷**・たけんやしき

五次郎岩・ごじろーいわ　**長原**・ながひゃー　**鳥居ヶ原**・とりいがはる　**威張山**・いばりやま

火動ヶ原・ひどーがはる　**貞兵衛谷**・さだべぇだに　**竹の屋敷**・たけんやしき

香椎山・かっしいさん　**蛇谷**・じゃだに　**樵（杣）の家**・そまのえ

黒岩の谷・くろいわのたに（＊東小河内であろう）　**一本松**・いっぽんまつ

猪見石・ししみいし　**薬師ヶ瀬**・やくしがせ

筑前肥前国境

札木の辻　めくら落　中峠　地焼中の谷　地焼牟田　烏帽子岩　地焼下谷川　大坂上の塚　中の滝　さくら宮　まい渕　井手　椎木渕　川原　花田　瀬戸口　いやなぎ　渡瀬　白土川　新兵衛滝　こうご渕　小石の本　児落渕　塩井場　渡瀬　近道　中瀬　ふけばた　ほうら　長尻　井手　竜王　柳田　くまかし渕　せば戸　すか牟田　古川

＊小川内地名地図は、従前に江藤千晴が作成していた地図を参照しつつ、今回調査分によって新たに作成した（「佐賀県東脊振村小川内における山村空間の重層性―小地名とその住民認知を手がかりとして」日本地理学会、2004年度春季学術大会プログラム）。

地名（以下は武広勇氏資料を元にして、聞き取った地名の位置と回想）

ふるおごうち：佐賀橋からの入り口、(古小川内と書くが)村があったとかは全然聞いていない。

＊現在の佐賀橋の下にあった旧橋は古小川内橋（ふろうごうちばし）といわれていた（『小川内誌』154頁）。

つつんばる：

せむーいご：瀬守口、大野の谷水、せむいごっていう（＊瀬守川の意か）。

＊『小川内誌』68～69頁に宮の瀬井堰とならび、瀬無井吾井堰の写真が紹介されている。

深田：湿田、水気が一年中ある。牛は入った。日は当たるけど、乾かん。

長谷（ながたに）：学校の裏、深田の手前から右、墓地が二つあった。田はあった。枚数は――？２反ぐらい。奥まで。

＊『小川内区長日誌』に７月24日長谷道修理・前川飛石係とある。

猫峠、猫城：不入道、山を切り開いたところに猫城ってあるけど、うち（小川内）でも猫城っていう。ほんとうは白土城らしい。

ヤーウチ：小学校の先、追分をヤーウチ。鎮西山（上峰）から背振山、鎮西八郎為朝が矢を射たが届かず、ここに落ちた。＊『区長日誌』（資料編）・昭和７年１月から５月にかけて「里道矢討付近石垣修理」とみえ、昭和７年歳出歳入決算書では「矢落石垣竣功」とみえている。

くえた：竹屋敷（に出てくる）。

がらんぶち：七曲から下ってきた左の山に、がらんさん。下にがらんぶち。（脊振）頂上が東門寺、そのおまいり関係。カッパの話はきかんごとある。あまのじゃくの話もない。毘沙門さんの像は、石で作ってあったが、だれか走ってもってった。台座だけある。かすかに憶えとる。

＊ガランサン、ガランサンブチについては『小川内誌』154頁に詳しい。

つぶてだん、まただに：しらんばい。

ふちじも：チゴ落としのところ（＊渕のしもの意味か）、田んぼはあります。ほこらがある。

うんた（大牟田）：お宮の上、墓に行くところ。

＊『小川内誌』24頁に「学校職員住宅野菜畑の件　ウンタ杉山使用決定」、とある。武広勇地名簿（下記資料）では大牟田（うんた）。

中畑：うんたのちょっと手前。

前田：むらの一帯。**でき**ぃは前田のうち。

一本杉：大野の一本杉ははっきりしている。こっちの一本杉ははっきりしない。

＊『小川内誌』68頁に一本杉宮＜グウ＞の瀬井堰。

ぐう、ぐうの瀬：大野、宮の瀬井堰。

さくらぐうさん：ぐうの瀬。

さくびらき（作開き）：さくびらきといいよった。うちのワラ小屋。

あぶらこぼし：＊『小川内誌』210頁、坂本峠への道が険しく、どうしても油をこぼした。

おだて：＊同上『小川内誌』210頁、「尾立」の難所については同87頁。

あながま：寺の上、林道の終点。久保山越しは谷を行く。おまん泊まりの道は尾根が４つある。

かぐめいし：うちのおやじからは、あたまいしって（「頭石」の意味だと）、聞いちゃる。わたしはカゴメ、かごめの石かと思う。登ったところ、３つ重なった石がある。鬼がつきあげた石。

村人に鬼が捕まって約束させられた。田畑を荒さん、牛、馬を殺さん。もう一回悪いことをさせてくれ。（そんなにいうなら）石の家を作りなさい（もしできたらいうことをきこう）。下の方に大きな石があった。（その石を）家みたいにこづみなさい。一晩で作るなら鬼のいうことを聞こう。

下が二つ、上に大きな石。３つまではこづんだ。南側にもう一つ乗せるとよかったけど、夜が明けかけてきた。最後に一つ、かぽーっと嵌めると石の家ができる。一番鶏が鳴く前に作ってしまえ。（いま）仏様が二体入っている。磨崖仏が一番鶏を早くうたわせた。50メートル（実際には数百メートル）ばかり下に、積み損ねた石がひとつ残っている。鬼は夜しか動かん。

＊『小川内誌』30頁に「かごめ石付近植林の件」とあるから、「かごめ石」と発音・認識されていたことが分かる。

＊「かぐめいし」地名は「頂石」と表記するものが多い。迫野虔徳「地名と方言」（『角川福岡県地名辞典』月報「わたしの地名考」昭和63）はカグメイシ地名を収集、検討したもので、頭にかぶる動作の古表現がカグメルであるとする。戦国時代の宣教師が作成した日本語辞典である『日葡辞書』に「Cagume，uru，eta：（かぐめ、かぐめる、かぐめた）、ものを頭にのせて持つ、運ぶ。カミ（＊畿内地方、京都周辺）ではイタダクという。Cagumevchi（かぐめうち）力を入れて振り下ろすため、刀を頭上に備えて斬りつけること、カミではヲガミウチという」と記している。小川内のカグメ石の形状による限り、巨石のかたち、様子が、頭上（他の石の上）にあるようにみえることから、かぐめ石と名付けたと推定できる。（本書24頁、Pho.Ⅰ4-1-10参照）

うーばる（大原）：これも大野。切畑（焼き畑）をした。

こおりぐら：氷蔵。製氷会社ができたりしました。佐賀市に持って行った。

＊『小川内誌』89頁、156頁に氷倉に関する記述、写真がある。本書31頁、Pho.Ⅰ4-2-5参照。

寺やしき：水道の下、**てらんさか、寺の上**。だいたい弘法大師の石仏。西村さんの上。

じかいさんやま：水道の村山、今日は大和尚。（＊持戒山？）
しゃくなんのつじ：それがしらんたい。聞いたことあったばってんがね。やすえさん、もう（しゃくなげが）なくなったって、いいおった。やすえさんは大石久一さん、士族の家。
＊背振の山頂付近にしゃくなげがなく、小川内にはあることに関する伝承は『小川内誌』180頁。この地名も関係があるだろう。
つつみいし（包石）：お万泊まりのちょっと上、三方境（個人の山の三方ざかい）。
掘りカマ：山を掘って、すみがま、うたんで穴掘って。おれも焼いたことある（＊炭窯を作らずとも、ある程度燃えたところで土をかぶせれば炭はできる。もっとも簡易な炭焼き法）。ロスの多うして灰ばかり。炭は上等かもわからん（一部、質のよいものもできた）。
ごろべぇ：のぼいおの下やろうねぇ。
のぼいお（登り尾）：盆や正月、久保山（背振村）へ夫婦で行ったりする。その時休んだちょうど峠。石が二つあった。一人で動かしきるぐらい。だれかが転がした。登尾は大正12年まで茅床。13年に植林。
とくあみ：豆の尾林道の終点のにき。とくあみは深と。ムラサキサンショウウオもおる。毒するっていってよりつかん。ほんとうは無毒って大分の佐藤先生。両棲類の研究。とくあみは植林するといい木が育った。
かのしし谷：金を掘ってだまされた。名前がでんさくという人。名前がでんけん。出んくさ。小川内は金山の出た。金鉱石はあった。最終まで掘らせて。白土川の方はあとまであった。戦後、網取の方はうちたちが遊びに行った。
阿弥陀山：そこの出水が末期の水。ほこらがあって二体の仏様。（死ぬ前に）故郷の水を飲みたい。出て行った人も、くみにくる。それが末期の水。
ヒラクチガワラ：ヒラクチガハラ、川原ではない。ヒラクチのふとうと（太い、大きいの）がいた。
＊『小川内誌』189頁に不動明王（ヒラクチガラ）の写真がある。武廣ノートではヒラクチワラ。
くすのきだに（ししごう）：山の神社の近く。　**なりやぶ、なかやけ**：不明　**りゅーざさ**はわからん。　**かやたて**：聞いたことがある。中間に休むところ。　**かきのきつぼ**：　**にがどころ**：名前聞くばってん。　**岩立（いわたて）**：聞くけど。よう聞く。　**みぞわら**：　**うーたぶ**：水道の上のねき。　**うぼやま、おおくぼやま**：　**せいさつもと**：べざいてんに対する何かお札がたっとる。　**りゅうおう**：　**なぎゃーいし**：元製材所。ふじわらの下。　**しりなしお**：尾が切れるところ、下まで行っていない。　**みつお**（みつのであろう）：三本の尾根があるところ。　**さがべぇだに**：よう聞くばってん。　**ひどうわら**（火動原と書く）：
たていわ：幕府の役人がここまで駕籠できて検分した。＊楯岩（本書192頁、Pho.Ⅲ2-3-7参照）
はなのきばる（花の木原）：仏さまにあげる花しばがいっぱいある。そこだろう。
＊『筑前国風土記』早良郡下（名著出版・470頁）に「花の木原の川筋を此所（竹屋敷か）迄のほり、此所より川筋をはなれて、西北の方、楯岩ある所をさかひとして、これより又川筋にしたかひて背振の山に登る。471頁に「筑前肥前の境は、背振の西の酒盛山を下り、唐船岩をかきり、二重平の下を過て、谷川筋を以て境とす。三渡、花木原、楯岩なと云所境に在て、皆当郡板屋村に属す」とある。唐船岩、二重平については本編2章（180頁）。

そまのい：　ひとりへんろ：ひとりせんどっていう。
じゃだい：鉄塔の下をいいなったもんねぇ。
寺の上の上：わからんやった。
とりいか：とりいかは？べざいてんの鳥居やなかか。
おおびらき（大開）：だれかが開きよった。
くせだに：国有林、くせ谷国有林。
ししん石：石の上にあがってシシの動くのを見る。
どっくうだに：ガマガエルがドックウ。じゅるかい（じめっぽい）。
かずらだに：藤カズラのいっぱい。葛カズラはイノシシの掘ってくれる（クズは立木を枯らしてしまうが、イノシシが根を掘ってくれるから、木が助かる）。フジカズラはちいさかデンプン。トウカズラはむかしカンネ掘り。東脊振のクイワラ、あのへんは南面、採ったでしょう。カタクリでは作った。こっちのカタクリはヤマユリのこと。ユリみたいな花が咲きますもんねぇ。６月の始め、道ばたいっぱいにきれい。
地焼中の谷：坂本峠の方。
札木の辻（ふだきのつじ）：良材を産出して、杉を切りますよ、という札を立てた。
たたり石：竹の屋敷、シイの木を切ったら血が出た。シイの木はだいたい、赤かっと血の出ますもんね。（本書238頁、Pho.Ⅲ4-6参照）
＊『小川内誌』159頁にキリシタンであった尼御前処刑に関わる伝承が紹介されている。
しおいば：近道（ちかみち）橋、むかしは飛び石、あのへん、汐井場。お汐井。
＊国境の古文書にお汐井場が登場するが、これは牛宮谷の脇だから、別。

お宮の上にも飛び石。下の飛び石は福岡県が修繕、上のは佐賀県が修繕。大水のたんびに区役（工役）で出た。
＊『区長日誌』に区役記事多数。昭和５年９月19日記事では「小川内前川飛石掛村工役朝鮮田吾作君自発的ニ出役ス」とある。田吾作とはいかにも適当に付けた喜劇的日本人名である。あえてそれを用いた朝鮮の人が、積極的に「村工役」に出ることで、村人の理解を得ようとしていたことが分かる。自らの立場をアピールするための必死の行動であった。

国境の碑は全部で４つ、いちばん下のだけがうごいとる。石垣つきが上手いですよ。大水の時は石の流される音がする。あそこは流されない場所が選んである。
おいわの谷：＊杉山の件、『小川内誌』26頁。
竹の屋敷：小字
＊『小川内誌』159頁に詳しい。なお同２頁に小川内の史料上の初見史料として、黒田文書・建武二年隆寂等売券（『南北朝遺文』九州編・１―310号）をあげる。しかしながら、この史料には「早良郡脇山院内背振山上宮領中山引地屋敷并坊雑舎」とあるのみで、竹の屋敷とはない。『筑前国続風土記』早良郡・背振山の項（昭和48年・名著出版・470頁）には、この文書に依ったのではないかと思われる記述があり、座主別宅が立岩の麓、谷川の西北にあって、岳屋敷にあったが、貧窮して西小川内の民に20貫で売ったとある。この論を成立させるため、東小川内は那珂郡ではなく早良郡であったともする。いかにも強引な立論で史料解釈に無理があろう。東脊振村教育委員会『霊仙寺跡』1980、７頁が竹ノ屋敷座主別宅跡と地図上に記すことも、上記を受けてであろうが、根拠は薄弱である。

道

むかしの道、釣垂（つたる）から南畑ダムの堰堤にちょっと登る。トイレのところに出る。御所の橋、から池渡って、網取に上がる。高橋さんの山に石畳がある。笹城にも行ってきました。佐賀橋は飛び石、白土川は七曲峠へ。お宮の前、中島、そこに大きなヒノキ。一番はじめの橋のことは、明治20年の記録があって、『小川内誌』に抜粋が書いてある。

べざい天まいりの道、坂本峠、むかしは背振峠、あとでだれが、なしたか、坂本峠という名前に変わった。べざいてん、東門寺、坂本峠から背振の道はなかったけん、営林署の巡視路はあった。筑前街道は赤道（あかみち）としてあった。

べざい天まいりは白装束ではない。思い思い。夫婦一緒にとか。肥前久保山から脊振山日帰り。宿坊もあった。

綾部峠という道が、参謀本部の地図以来、七曲峠になった。往来は七曲峠の方が多かった。

蛤水道

おまんさんがチゴを落としたとは、むこう、五ヶ山はいわん。

蛤水道を落としに行く。福岡にくる水を成富兵庫が佐賀に流した。田植え時は水が足りない。福岡の岩戸あたりの水が足りない。それがたまたま乳飲み子を抱えたおまんさんが当番。番（警戒）が厳しい、気を緩めるのは若い婦人。チョイチョイ、落としにくる。53年の大渇水、平成６年も水を止める袋、米も入れる袋、スコップでどんどん落とした。その頃番人はあらんけん。

お万が滝、おまん泊まり。蛤水道まで近い道がある。お万が滝の上に蛤水道。おまん泊まりは泊まったところ、石があってから、なかに人が入って泊まれる。しばらく休んどって、日が暮れたら夜中に取りに行った。乳飲み子をからって行く。夜中に泣く。

稚児は連れていっとろう。何回も行ったんではないか。自分もとうとう水を落とすことができんやったから、村に帰れん。お万が滝に身を投げてしまった。

（筑前側）五ヶ山は本流からとっていない。向い大野でホンの少し。（もっと下流の）岩戸あたりの人が盗水。番人がおったわけはそういうこと。

ひとつ憶えとるのは、昭和12年。福岡も佐賀も大渇水。博多・櫛田神社に朝鮮征伐のトラの頭。チゴ落としでそれをつける。その年と、昭和53年にやった。53年は見た。水道局、南畑ダム関係者が祈祷人を連れてきた。平成６年（の旱魃）はきちゃぁなか。

＊虎の頭による雨乞いは『小川内誌』156頁。（本書22頁参照）

こっちの雨乞い。お万さんがしたみたいに混ぜる（キタないもので渕の水をかきまわす）。はっちゅう（八竜）さんて部落の中にある。ちょっとした広場、そこで女相撲、戦前はようありよった。戦後一回。まねごと。ふんどしなんかしないし、横綱もいない。（雨乞は）背振頂上、ベザイ天の下の池。雨乞いにいって（池の水をかき）混ぜてくるだけ。「効きますか」きかんね。

蛤水道、池からの頭首工は成富兵庫が作った40センチ角の切石、それだけしか行かんようになっとる。本流、福岡県側の堰堤がそれより高い。水は全部佐賀に行って、40センチを流れられないほど大雨が降って、堰堤まで水位が上がったときしか、流れない（ふだんは本流側に水は落ちない）。平成７年の改修で三面側溝の水路は50センチになって池の中に100メートルもあ

る。そこから下流に石伏せ（いしびせ）が二カ所あって、それが余水吐（よすいばけ、『小川内誌』71頁所収蛤岳井手溝之図では「ノコシ」）になっている。ちょっと低くしてもある。そこをはずせば本来の本流、福岡県側に水が落ちる。お万が落としに行ったのもそこ。53年大渇水、じぶんが止めにいった（大野は本流の水を宮ノ瀬井堰から取水するから救済が必要だった）。かますを持っていって、スコップで泥入れて、頭首工40センチの枡の所に（土嚢を）置いた。（お万とちがって）見張りも番人もおらん。４時間ぐらいで水が下ってきた。24時間流した。明くる日の昼には（取り去られて）ひとつも水がこらん。役場（東脊振村）の柿本さん、会計で知り合い、下から電話かけてきた。「坂本のノウシロが干上がった。役場に文句が来てる、うち（自分）があけやいた。お前が蛤水道、どげんかしたろう（止めただろう）」って、「いや、おれは知らーん」って。

「記録に残してもいいですか」

あぁヨカですよ。９月（少しずつ用水が不要になる時期）に入ったら、東脊振村が自発的に、全部福岡側に流した。それぐらい福岡は苦しんでいた。（この年は歴史に残る大渇水）。その時ギリのこと。平成７年（正しくは６年か）もじぶんが止めた。工事で頭首工の構造が変わって、３面側溝の50センチ、余水吐で落とした。気づかれたのは53年よりだいぶ後だったですよ。じぶんは南畑ダムに勤めていた。流入量ゲージが、ちょこおっと上がったです。

正月

お正月のまつたけ（飾り松）がちがう。うらじろ、山芋に似たつるで、ところ、ヒゲがながーい。子孫繁栄。とくぎ、しらかし、４つに割って１メートル20〜30、斧の柄とか、鍬の柄にこう、４つに割って、藤カズラで上、下くびって。炭、長く保てる、くさらん。栗はくりあいがいいよう、入り口の両側にユズリハ、新芽が出ておじいさん葉が落ちる。たえん（家が絶えない）。

14日のモグラうち、正月の餅、モグラうちをすっもんと、餅をもらうものと（役割分担）、あとで分け合って食べた。

種籾・田植え・もみすり

正月の２日、若木切り。男の青年だけ、カシの木、小さい木でよい。おじいさん、お父さん、孫は小さいの。正月が過ぎたら切って屋根裏にあげて、種まきの時、蒔く日にそれで（その木で）、ご飯炊きおった。種籾は各家で保存、乾燥するところ、屋根裏に。うちは杉の葉を敷く、枯れたら痛い、ネズミがこない。ヤマザクラが咲いたら、すぐ蒔きました。みず苗代、短冊はつくらんで、足かた、そこに蒔く。短冊はあとになって戦後作った。

水口から。朝早（は）ようから蒔いたら、種がよってしまう。午後３時ころから蒔おった。ほったらかし。水は入れっぱなし。苗代は戦後やり方が変わった。水３センチ、苗代期間が２ヶ月。植えるのが６月の10日から。でも田植えの賃取りに（平野部へ）行った。20日ぐらい。

お宮の下から本流に井堰。宮ン前の井手、受益者が掃除、道の改修で切ったけど、大杉が２本あった。大野川は谷の水、せむいごっていう。むかしは大野、フルゴーチがあった。

６月時分で麦を作っていた。７月で田植えする。下さ日用取り。下は６月、７月10日頃まで。一番麓から有明海まで植えて下った。はげみず（半夏水）がきてからしか、植えられん。はんげいじ（半夏至）、梅雨の末期の大雨でしか、植えられん（＊半夏至は夏至から11日目、太陽

暦７月２日ころ、田植えの終期とされる。賃取りと雨の関係で田植えは７月になった)。

山間の人は１ヶ月ぐらい田植えに出る。それで田植えも遅れる。３食・ホテル付き。長雨の時、はっちゅうさんでお籠もり（雨止み祈祷)。おにぎりを作って。今も年２回する。

田植え歌、聞かんだったですねぇ。小学校に昭和４年からはいっとるけど、みんな親たちは貧乏やけん、忙しかった。脊振村には西山歌、こびき歌ってあるけど、こっちは…。

14日のもぐらうち、ちょっと初めにせりふをいうて。歌のような、もう忘れた。

風切り

かぜ（祈祷、台風よけ)、歩いて綾部の八幡、姪浜と箱崎、久留米の高良山、ベザイ天に行く。綾部、姪浜、箱崎、３つくじを作って、湯呑みに紙を丸めて入れる。行きたいところを入れる。行かん人は出不足を納める。はじめは流行病の祈祷、虫の祈祷、綾部、いちょうの木。高い木の上に旗、７月１日、破れ具合、巻き付き具合で占う。ぎなんがいっぱい。

切畑

Ａきりはた、やったでしょうね。小さい頃、杉ば切ったあと、そば、あずき、あとでは里芋、そば、あわ、夏焼きは梅雨明け後、春焼きは２月、３月。

Ｂわたしはしおったですよ。杉植えるのに片づけなならん。うちの山で、ウーバル（大原)、雑木山、クワがよりつかん（鍬が入らない)。根がはっとるけん。ちょっとねぇ、根の張ってから。雑木山で杉も植えてない。土地が木におうた（適性が合う）ところはない。さがしかとこ。スギ、ヒノキ、マツ、のけたところ全部雑木、カシもシイも雑木。さきのサイコシまでびっしり。

お宮の山

お宮山に入ったら赤ガシはいっぱいあります。カシ、シイ。アカガシとシラガシ。ヒノキ、スギ、山ツバキ。サカキは大きい。ホオ（朴）の木が大きい。木は刀の鞘にする。カシ（樫）

Pho.Ⅲ4-1　小川内・宗雲商店

は堅い、根も堅い。村山に一本、アカガシのりっぱなもん、あります。

炭焼き

炭焼きはいまも学校の裏にカマがある。木炭組合、中原町販売所。プロパン流行ってから、30年ごろから炭焼きはいない。カマは炭だけは担ぐけど、原木が重い。集めよいところ、なるべく下に作る。石垣でカマを作り黒炭（こくたん）を焼く。しらすみはいない。五ヶ山の人もしらすみの焼き方は知らん。（特定の人の）専門だった。

戦後植林、戦前は農閑期だけ駄賃取り。夏はどうびき。木材。戦後炭山（すみやま）を買う。戦前は九千部。国有林の払い下げを佐賀県にもした。おやじ、塩原（しおばる）のお宮で入札。小川内の集落が区有金を持っとった。入札に行くとき、こっちの会計が行って区有金でどんどんとった。それを（区からさらに）とった（小川内の）人が、さらに五ヶ山に分けてやった。それから佐賀のもんはできんくなった。通知もこん、戦後はあちらばかり。

ワサビ

区有林からワサビ、借地願いで許可がおりよったですよ。ワサビは百年ゲンタロウさんがしよった。最初は島根・三瓶山から持ってきた。150年ぐらい前、佐世保のにきまで、売りに行きよった。いくーさん、あんた方がしよった。うちが昭和25年から請けてした。国有林の伐採になって７、８年入られん。

＊『小川内誌』21頁に昭和13年・山葵谷千本杉とあって十五年間の借地権設定がされている。29頁に、昭和33年、寺山ワサビ谷の件とあって、このときは借地料は取らないことに決定したとある。

小学校

シイの実、子供の頃、大野の観音様の下、いっぱい落ちとった。毎年子供の頃、生のまま、おいしいよ。甘くはない。このごろ（とる人がいないから）車が踏んで白うなる。

（あまり食べると）カサん、でくる。カサ、できもん、できる。かぶさ（かさぶ？）と洟垂れが多かった。着物の袖がキラキラ。カサは多かった。女の子はシラミ、男はちゃっと丸坊主、おかっぱでもしらみ、梳く櫛、細かい櫛、それでシラミをつぶした。戦後はＤＤＴ。ここはワラ葺きの小学校、私がその校舎の最後の卒業生。むこうは先生の住宅。門柱もここにあった。

電気は大正６年。お宮の下に発電所を持っていた。いまも残っとるです。昭和23年頃まで続いた。木炭組合、電気組合。

Pho.Ⅲ4-2　小川内・東光寺

Pho.Ⅲ4-3　小川内小学校旧校舎

中学・青年

福岡県とは中学生ぐらいまでケンカばかり。まっくらおつるまで、放課後、（遊んでいてケンカになる）石投げ、大将、中尉、少尉作ってから。向こうは親父も出てきた。向こうは（戸数・人数が）少ない。こっちがいつも勝っていた。それで親が出てきた。大野の方は福岡県の田んぼを小作させとった。女は行き来はない。女をいじめることもない。ケンカは男だけ。

薮のウメ（ドブロクのこと）、青年宿で泊まるときに盗った。盗んでもやかましう、いわれんもんねぇ。密造酒は山の中にカメ。見つけたら呑んでくる。たいてい掬うもん（ヒシャク）は置いてあった。お寺は無住。いぼとり地蔵、あそこに石がいっぱい、イボがとれたお礼に置く。

12月５日は小さい祭り、しめ縄。（春の）お彼岸、７月１日はがんたつ、８月１日はついたちごもり。９月１日、今はない。秋彼岸、12月１日から夜祭り。９月お彼岸中日、綾部八幡のお祭り。

青年の祭り、神様は出雲、11月が神無月、10月30日頭屋（とうや）に集まって、男の青年ばかり、お嫁さんを連れてきてください。出雲の神様、14人も嫁さんがいる。うちの親父どもの頃はヨバイもあったらしい。年頭（としがしら）、年長者が引率。雨戸に水を入れて。いちばん若い者が下駄持ち。つぎが障子を開ける係。年長者の入っていく。ぜったいいやいやする。ふられた腹いせ、うそかほんとか、飴、びろびろのゆるい飴を置いてくる。明くる日べとべとして困ったろうね。福岡県にもいった。ヨバイにはいくっとさ。よぉ聞いた。嫁さんには、もらいよらんかった。青年の（福岡県の村と）ケンカしたとはようきいた。五郎さんはいっとる。おれもいっぺんマスミさんといっとる。ケンカにいった。

大正時代の青年たちは、よう久留米の瀬の下、水天宮の近くの女郎屋、遊郭には金がないから、上がりきらん。お彼岸、綾部八幡、祭りのついでに行く。大正時代はよかったらしい。

ふろも男女混浴、30代ぐらいまで。村芝居は41の厄払い、青年がすることもあった。

医者・まじない・禁忌

お医者さん、常駐の代診さん。区に一人いた。綾部神社の人、納富（のうどみ）さんが正規の医者。そこに病院はあるけど（遠いから診療を受けることはほとんどない）。末期の水かわりに水薬をもらうくらい。小川内には派遣（の医者）、心得はある人。名義はどうだったか（正規の資格があったかどうか）。大坪さん、子供三人はりっぱに医者になった。診察は上手、大きな病院にいってもぴしゃり同じことをいった。投薬は下手だった。戦後まで重病人が出る

Pho.Ⅲ4-4　小川内・山祇神社

Pho.Ⅲ4-5　小川内・山祇神社狛犬

と、担架作って下までおろした。次男も三男も。おれの妹は北茂安へ、おれは神崎まで、いなわれていった。

代診の先生がどこどこの病院へ行け。手術をして直った。親父が負うて行った。筋炎、ものすごう痛い。いなわれて行くとき、ものすごう気持ちがよかった。地面からの震動が伝わらん。馬は荒い。馬車はがたがた。

まじないは各人で信心がちがう。各家で祈祷さんのところへ行く。うちは親父、瘧（おこり）になったとき、修学院で祈祷、スターッとよくなった。方角の悪いとこから、カマド、値で買いよった（方角が悪いとされたカマドを、安値で買った）。

全部土を取るときの日の廻り。コンジン（金神）、そこにおった時に（恐る恐る）土を取った。老僧がいった。運んだのは僕ばってん、ていったげな（サワリがあれば自分にくる）。

土を崩すのに、親父に障った。それでカマドは作り替えよった。赤土で。ヘッチイさんて、いいおった。カマドは10年ぐらい保つ。

筋炎、神様がとりついたろうって、おふくろがいいよった。お祓い。こまーかお札ば飲まされた。梵字見たいな字、お湯と一緒に飲んだ。歯が痛いとき、ばばさんがいっぱい、もっとる。

土用はいうねぇ。四回土用、土用のいって一週間はよかけど、土用のさめて一週間は入れていかん。土用は20日ほどある。土用のうちは扱うな。土用のいってなごうなるけん、もってこい。さめても一週間。屋敷内に持ってはくるさ。屋敷の外には行かん。お百姓されんもん。炭カマ、行っていかんのは12月の20日と、１月の20日。山に入らん方がいい。ケガなんかする。山の神様が嫌うけん。

11月から３月。（炭窯は）夏はされん（もともと夏土用に炭窯作りなどしない）。田の仕事が忙しい。土ば、かせてよせて。

新しく家を建てるとき、据え石の下をしめる時分、５～６人で引っ張り上げる。「じしん」、

Pho.Ⅲ4-6　たたり石

「石ぼうつき」といった。綱取りさんがいて、みんなで加勢。「やぁさらさぁ、やぁさらさぁ」って。
（たたり石とはちがう場所だが）穴がほげたところがある。ギナンはならんけど、乳の下がったおおきなイチョウ。その木を切ったあと。曲がってこうなっとった。もし水害が出て倒れたら（危険）、といって木を切ろうとした。切った人はN町のＴ製材所。刀「キチガイ」、長持ちに２杯も刀がある。鑑定士もした人。その切った人には障（さわ）らんで、50代の若い人ばかりが７人、一年ほどのうちになくなった。昭和25年、全部病死（事故死ではない。だから関係はないのだけれど）。切った人が残したところを床木に分けて残っている。村中の人が般若心経、266文字を紙に書いた。修学院の和尚さん、水垢離とって沈めた。修学院さん、薬師堂は前からあった。そこに倉庫があった。狂言も浪花節もあった。
＊大銀杏伐採の一件は『小川内誌』142頁にふれられている。

炭焼く時は一山倒すとき、一番大きい木に神が宿る。真ん中にさして拝みよった。酒と塩、炒り粉。むかし山知って行ったから。届いたら火をたきなさいよ。倒したら木を取って刺して拝んどけ。ヨギでぱっと立てて拝んどけ。昭和39年は補償で100万円もらっとる。

だますキツネ・動物

キツネ、経験はある。役場に行って農協に行って、遅うなる。魚屋があって、イワシなんかをワラツトを作って（ツトに魚を入れてきた）、峠を担（かた）げてきおったら、横をついてくる。10時くらいやったら、お月さんがあがってきた。むこうから人間がくる。こりゃだまされるぞってかまえたら、電報配りのおやっさんやった。そりゃー、キツネかタヌキぞ。月見ながらタバコ吸う。そっから先はついてこんやった。おやじは天ぷらもってて飛びかかられた。天ぷらとられた。ミノスケさんは酒飲んで、きのうとる（酔っぱらって峠まできている）。一生懸命歩いたつもりがぐるぐる回るだけ。坂本へ牛で荷物を運ぶ帰り。タバコかションベンまれよ。おちつくぞ。まりきらんとダマされるぞ（落ちついて一服するか小便をすればだまされない。だまされるのは酔っぱらい）。

アナグマはタヌキとは別。食べる。おいしい。ワナ、てっぽう。タヌキもむかしは食いおった。ＰＴＡの幹部、アナグマば食べさすって。校長、「アナグマのおいしかですねぇ」って。本当は犬の赤犬たい。犬は２回ぐらい食べた。野良犬だったかどうかは分からん。この辺ではうろつく犬がけっこういた。ネコも食べた。うさぎはよう食べさせてもらう。針金のワナ。あちこちに仕かけておく。こぐらいに、回ってきたら、からってきた。ワナ10個に１匹かかる。

バクチ

小川内、むこう（福岡県）のひとがばくちで取った。ばくちが流行った。金借りにきた（金取りに？）。その金が返せない。こちらの山、坂本峠、うちの資産の人の山、（ばくちで負けて）取られたことがある。

交流・格差

中学校を作るとき、村山を売ったこともある。七曲峠は中原の山。交流はないけど、お葬式のお悔やみは行った。婚姻はない。明治時代の戸籍を見ても。日常のつきあいはあるから、今でも倉谷までお悔やみは行く。

お宮は女性禁制、小作人が祭りに入れないというようなことはなかった。

戦後ぴしゃーと止めたけど、序列はもったもん順だった（資産の順）。固定資産税の大きな人から、賃貸価格の序列が付いていた。（戦後はまるで）イロハ順。

オトコシは住みついたことはない。鳥栖からここにきて、上に行って一緒になった人はいる。

葬儀

ウンタ・大牟田は墓地の下。水くみはそこで汲まんとない。葬式の時は、お棺かついで、おおごと。掘っていくとむかしの人の遺体に当たる。今の（村構成員の）年齢と（減ってしまった）人員なら、葬式もできん。花、すだけ、竹を二本、花柴とか花いけとく。花立てて枯れんように（うんたで）水を汲む。

座棺はその日に作る。すぐに手を結ぶ（合掌させる）。後ろから膝を抱いて。じいさんの時そうした。身内がする。お葬式のたきもん、お棺の木、朝からとらないけん。若い人は墓掘り。お葬式の買いもん。おとぎ、品物がきまっとる。あらめ。こんにゃく。豆腐屋はあった。旗が4つ、提灯が二つ。それができん。天蓋が一人。先頭は念仏の金叩き。

聞取り協力者

武廣邦敏さん（大正12年生れ）、西村哲也さん、宗雲孝吉さん

〔服部英雄〕

Pho.Ⅲ4-7　小川内集落（H15.10月）
Pho.Ⅲ4-8　小川内集落（H19）

Pho.Ⅲ4-9　小川内大野集落（H16.2月）
Pho.Ⅲ4-10　小川内大野集落（H19）

5　五ヶ山・小川内　昭和点描

i．五ヶ山の玉音放送

「朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲（ココ）ニ忠良ナル爾（ナムヂ）臣民ニ告ク。朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」

1945（昭和20）年８月15日正午、ＮＨＫ（日本放送協会）ラジオから「ただいまより重大なる放送があります。全国の聴視者の皆様、ご起立願います」とあり、「天皇陛下におかせられましては、全国民に対し、かしこきも御自ら、大詔をのたまわせたもうことになりました。これより慎みて玉音をお送り申します」とあった後、「君が代」のメロディーが流れ、上記のポツダム宣言を受諾する旨の玉音放送（終戦詔書の天皇の朗読）があった。

そもそも昭和天皇の声を聞いたことさえない五ヶ山の人々にとって、初めて接した肉声であった。難解な漢語、雑音混じりの音声、ましてや受信状態の悪い山間地域にあって、この玉音放送が聞き取れなかったにちがいない。しかし、誰しも、この玉音放送に続くＮＨＫラジオのアナウンサーによる説明で、やっと戦争が終結したと理解した。

独特なアクセントで続く玉音放送４分あまりの中でも、「堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス」は有名なフレーズであるが、その一節さえもほとんど知ることがなかった。五ヶ山のあるひとは、空襲が続く徴用先の北九州市内の軍需工場で、本土防衛決戦に備えて地下壕を掘り進めていた国内各地（鹿児島、大阪など）で、あるいは遠くベトナムの戦地で、この玉音放送を耳にしたという。いうまでもなく、すでにラジオ放送の電波が届いていた五ヶ山でも、多くの人々が玉音放送で日本の敗戦を知り、跪き涙したというが、その実態は難解な用語の連続と雑音で、意味不明であった。ただし、すぐに直感的に日本の敗戦を公的に通知するラジオ放送であると理解したという。その直前まで、勇ましい進軍ラッパと無敵の日本帝国陸海軍の輝かしき戦績がラジオを通して、国民に虚報が伝わっていたが、五ヶ山の人々にとって、敗戦の近いことは配給が滞り、福岡や北九州の空襲を山の上から眺めていたときに、敗戦が遠からぬ日に到来すると確信した人もいた。敗戦をするやいなや、「ホッと」したと記憶する。

しかしながら、この玉音放送を耳にすることもなく、無念にも、戦地で死去した人々が居た。彼ら戦死者の遺骨（あるいは遺品など）は役場で引き渡された。その中には、戦死公報が届きながらも、生きて無事に帰還した人もおり、その方は自分の墓を目にして驚いたという悲喜劇もあった。

小川内地区―――８名
大野地区――――１名
網取地区――――０名
東小河内地区――不明
桑河内地区―――４名

小川内地区以外は、公的な報告書に記載されていないので、その戦死者数を正確に把握できないままである。本来であれば、生きて本人が、あるいはその子孫が無事に五ヶ山ダム完成の

日を迎えられたはずである。

総力戦体制を支えた国家動員システムによって、日本国民の何千万名に「赤紙」（召集令状）が届いただろうか。第２次世界大戦の長期化と戦局全般の悪化で、国民の動員は1944（昭和19）年２月までに390万人（労働人口の17％）に達したという（『新聞集成・昭和史の証言』第18巻２頁）。小川内地区を例にとれば、東脊振村役場の兵事係と区長が「赤紙」を配達した。野良で仕事をしていた人、山で炭焼きをしていた人などが、突如として「皇軍兵士」へと変身することが期待された。中には、36歳で出征した働き盛りの男性もおり、５人の子供たちを残したままであったので、さぞや身の切られる思いであっただろう。家族・親類・地区民総出で、「のぼり」をたてて旗をふり、区全員は千人針と「武運長久」のお守りを身につけた男たちを佐賀橋や七曲峠まで見送り、家族・親戚・青年団は中原駅まで盛大に見送った。簡単な身体検査の後、「一銭五厘」で招集された兵士たちは軍服に着替えて、次々と戦地へと送られた。

事例１：Ａさんは、入隊年次は忘れてしまったが、初年兵＝二等兵として第12師団久留米野砲24連隊に入隊。営舎で軍服に着替え、帝国陸軍兵士となった。共に入隊した兵士の多くは、台湾で終戦を迎えた。自分はただちに幹部候補生に採用され、久留米予備士官学校を経て、ジャワ島にあった南方軍特別教育隊で切込み隊（ゲリラ）訓練を受けた。同期生は約150名。大東亜共栄圏建設を目指した軍政下で、同期はビルマ（現ミャンマー）のインパール作戦に従事したが、福岡出身の連隊長の力添えでベトナムへ転属になった。敗戦はハノイの郊外で聞いた。中国軍によって、武装解除された後、東京に復員した。東京の竹芝桟橋に到着したときは、嬉しさで涙がこらえきれなかった。日本に持ち帰った品は、ハノイの収容所で作ったリュックサックだけ。その中に士官行李を入れて持ち帰り、最近まで保管していた。

事例２：昭和20年３月に徴兵検査を受けて、甲種合格したＢさんは、同年７月１日に佐世保にあった相浦海兵団に入隊した（現、相浦駐屯地）。佐世保鎮守府開設以来、新兵教育を担ったのは佐世保海兵団であり、相浦海兵団は臨時に増設された海兵団であった。兵・下士官教育施設である臨時海兵団では、平時なら期間は３ケ月間であったが、昭和18年から短縮されて、教育期間はわずか１ケ月であった。

運が良かったのは、新兵教育を卒業し、輸送艦や護衛艦に乗りこむ迄の待機中に、敗戦の日を迎えたことである。アメリカの空爆で、日本海軍が誇る「千歳」「瑞鶴」「千代田」「瑞鳳」の空母４隻がすでに沈没しており、ましてや台湾にしてもフィリピン、インドネシアなどへたどり着くためのまともな艦船すら、佐世保港になかった。佐世保のハウステンボスの裏手にある釜墓地には、フィリピンからの引き揚げ船「ぼごた丸」で運ばれたフィリピン・カンルバンの日本人収容所や引き揚げ途中で亡くなった六千五百余人の戦没者の遺骨が埋葬されている。

残された家族たちの生活は、もともと家計維持さえ決して楽ではなかったにもかかわらず、「欲しがりません、勝つまでは」のスローガンのもとで衣食住に関する生活必需品の統制が打ち出されたために、窮乏生活に耐えねばならなかった。都市では、1940（昭和15）年に国民精神動員運動の一環として始まった「節米運動」、翌年1941（昭和16）年４月に実施された「米穀の割当通帳制」（東京、大阪、名古屋、京都、神戸、横浜の六大都市において実施され、後

に全国99％の市町村に拡大)、1942（昭和17）年の「食糧管理法」に至る一連の軍事優先措置によって、国民の生活関連物資は欠乏した。しかしながら五ヶ山では、生き抜く「しぶとさ」で白米を食べ、密造酒を飲み、柿を食べ、栗を拾い、味噌・醤油などの調味料に恵まれ、燃料エネルギー木炭も不自由しなかった。不自由したのは、配給されたマッチ、煙草、針金、鉄線などであった。国家総動員体制では、不自由な日常生活に不満を抱く者は非国民とか国賊として排除された。

ところで、昭和16年の国民学校令で、改称させられた小川内国民学校では、大きな変化があった。高学年に「戦陣訓」の指導がはじまり、戦時下の「少国民」として戦争協力の勤労奉仕作業に明け暮れたからである。「校門は営門に通ずる」と教え込まれた少国民たちはたとえ学童人数が少なかろうとも、軍隊式の行進、奉安殿の前に進んでの東方遥拝、授業の日課である＜鍛錬＞時間に、

「戦地の兵隊さんの苦労を思え」、

「皇国の御恩を忘れるな」、

「父母の慈しみを偲べ」

の３つのフレーズを強要されたという。また「勝ち抜く僕等、少国民」（上村数馬・橋本国彦）の国民合唱などは、今も記憶している人もいる。

「勝ち抜く僕等少国民　天皇陛下の御為に死ねと教えた父母の　赤い血潮を受けついで
心に必死の白襷　かけて勇んで　突撃だ」

という激烈な歌詞のワンフレーズを。なつかしい「お山の杉の子」（昭和19年、少国民文化協会が行った少国民歌の懸賞募集の第１位入賞歌）を歌って育った当時の少国民も、今は70代。「大東亜戦争」中に卒業した少国民たちは、「モノに乏しかった戦争」を饒舌に語る。

たとえ自衛か侵略かと迫る二者択一式の総括が出来ていなかろうとも、五ヶ山の「大東亜戦争」に末端の兵士として従軍した者たちは、無数の戦死者が出た悲惨な戦闘シーンや、マラリア・赤痢や栄養失調に苦しめられた行軍の様子などを、もはや誰一人として語ろうとしない。彼らは国に命じられて、帝国軍人に変身し、従順に戦地に赴き、果敢に戦闘に参加し、特攻隊員として迷いもなく敵艦に突撃し、本土決戦に備えて海浜で塹壕を掘りながら「竹槍」訓練に明け暮れただけだから。そして五ヶ山から出征した兵士の中に、無念にも戦死した人への哀悼の意を表するために。

ii. 江戸から明治へ：戸籍が語る人々

小川内区に伝来して何年になるだろうか、その黄色く古びた表紙に「明治以降／戸籍簿／小川内」と墨書された文書がある。地区のいわゆる「区長箱」（『小川内誌』48頁、昭和60年）に納められて、長い間手渡しで伝えられて来たという、佐賀県神埼郡東脊振村大字松隈151番地から順々に179番地まで、31戸の戸籍簿である。小川内地区に在住した総数、229名を網羅している。

この戸籍簿の随所に、「明治５年以前相続」とか「明治５年以前入籍」などと記載されていることから判断して、日本で最初の全国統一様式戸籍である「明治５年式戸籍」、いわゆる「壬申戸籍」の系譜を受け継いでいると考えて良いだろう。ただし、「明治５年式戸籍」そのま

まであるわけではなく、地番制度や除籍制度が戸籍に反映されているので、「明治19年式戸籍」に近い。本来であれば、「大正５年」であるべき箇所を、なぜか「明治49年」と誤記している箇所があるので、この戸籍は大正５年まで書き加えられたと推測できよう。換言すれば、小川内地区において「大正４年式戸籍」（「戸籍法改正法律」大正３年３月30日法律第26号など）が作成された段階で、不要となった明治戸籍そのものであったと考えて大きな誤りはない。

したがって、大正―昭和―平成の３代、各戸を巡回する区長箱に保管される明治戸籍を手にするたびに、小川内地区の方々は、過ぎ去りし明治時代への郷愁を思い浮かべただろう。しかし、間違いなく明治時代よりも一時代遡った「江戸時代」も意識したはずである。戸籍簿の中で時代を遡れば、「明治―慶応―元治―文久―安政―嘉永―弘化―天保―文政―文化」の年号が確認できるからだ。最古の年号は、「文化８年」（1811）。その年に武広タツが誕生している。つまり江戸時代の文化文政期から明治時代までの小川内地区における社会的参照体系が、この戸籍簿である。親族関係のみならず、婚姻・葬儀などの儀礼関係（誰を招待し、誰を招待しないかなど）、遺産分割などの相続関係、本家―分家関係などを考慮するときに、この戸籍簿はたえず取り出されて、最終的な決定の参照材料となったはずである。もっとも地区内の戸数とて多くないので、この戸籍簿に記述された人間関係は人々の記憶に深く刻み込まれており、取り立てて口に出さなくとも、自然と地区の常識に属する知識でもあった。

まず注目すべきは、この戸籍簿が表示する明治戸籍特有の「士族―平民」区分を明記する身分項目である。全31戸の内、士族は２戸（大石家・田中家）であり、残りの29戸はすべて平民である。しかしながら士族の田中家（五郎助）は明治25年６月に初代小川内尋常小学校校長を拝命して、佐賀市よりの転入者であり、元来の小川内地区民ではない。したがって、江戸時代において同地区在住の士族は「庄屋さん」と呼称されてきた大石家のみであった。

「文化７年12月　　足軽被召成　　小川内村庄屋　喜内

右は当年迄三拾四カ年相勤兼而正路之者に而御上納筋尖頭立百姓中引負不仕通、手を付候処より右村相栄殊先祖已来六代堅固相勤旁に付」

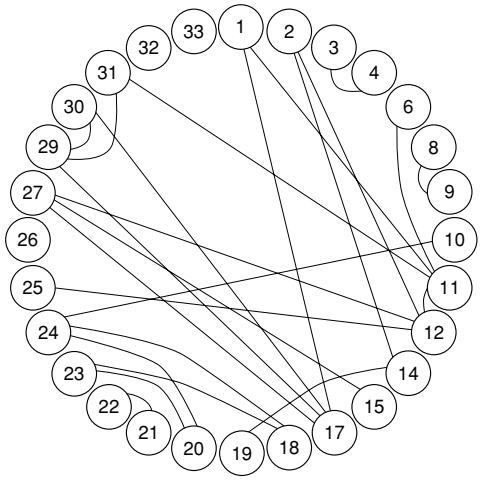
（『褒賞録』、『東脊振村史』357頁、昭和57年より引用）

したがって明治時代までの小川内地区が大石家を頂点とするハイラルキーの基に組織されていたと判断される。しかし明治維新を期に有為転変があり、そのハイラルキーは崩れていったので、あくまでも精神的な村内秩序を維持するときに、この「士族―平民」関係が思い浮かべられたに過ぎなかっただろう。

さて、この戸籍が地区内を巡回し始めて、約80年を経た我々の目に強烈な印象を与えるのは、地区内婚数の圧倒的な多さである。戸籍簿に記載された婚姻数は、93例である。平均年齢20歳前半。早婚の傾向はない。その内、配偶者の名前を明記しなかったり、あるいは配偶者の出身を記載しない事例を除外すれば、52例は配偶者の出身地が判明する。中原村堤、原古賀、石動村、養父郡、東脊振村など佐賀県から10例、福岡県から１例の、小川内地区外から婚姻を目的に転入してきた11例はあるにはあるが、残りの41例は地区内婚である。80％弱の割合で、地区内結婚の実態が浮かび上がってくる。この戸籍簿に記載されていないが、言い伝えによると、氏名が明示されているものの、その出身地が不明な者でも、その地区内婚の数はさらに増加し、ほぼ全体の85％近くに達するだろう。明治から昭和に至る間にも、この地区内婚の習わしは継

続されたと思われ、２～３のサンプリングを通して確認できる。あくまでも推測の域を出ないが、昭和20年代後半まで、この地区内婚が続いたに違いない。小川内地区では、親戚を「キョウダイヤド（兄弟宿）」と呼称しているが、その単語の由来は、明白である。

明治戸籍に依拠して地区内の婚姻関係を作成したのが下図である。この図を見るだけで、誰しも「イトコ婚」の多さを読み取ることは容易である。しかしながら現在の目から見て、イトコ婚などの近親婚で問題となる劣性遺伝病の発症率が高くなることをもって、この婚姻形態をあれこれと云々すべきではない。日本の法律制度では、血族結婚であるイトコ婚を禁止していないからである。またイトコ婚それ自体を国別に比較してみると、クウェートやヨルダンなどのアラブ諸国の一部は婚姻全体の約３分の１に達するほどである。なるほど欧米諸国におけるイトコ婚率は低い。日本でも、戦前には７～８％の割合でイトコ婚が行われていたとも言う。もちろん現在では、１％近くにまで減少しているが。



小川内地区の婚姻関係

そもそも父方平行イトコ（父の兄弟の子）と父方交叉イトコ（父の姉妹の子）、母方は母方平行イトコ（母の姉妹の子）と母方交叉イトコ（母の兄弟の子）の４タイプがあるものの、この小川内でタブー視されているのは父方平行イトコ婚である。父方交叉イトコ婚もタブー視されてはいないが、歓迎されてはいないようである。母方イトコ婚は全く「他人同士」の結婚として問題視されることはなかった。ここで強調したいのは、イトコ婚の多さを説明する上で、「秘境小川内」説が登場することの無意味さである。小川内地区が人里離れた秘境にあり、山から下りた里との間で容易に婚姻関係を結べなかったと説明することである。確かに隣の村との距離の遠さを指摘しても良いだろうが、小川内から隣の地区まで歩いて約１時間の距離である。この時間的距離をもって、閉鎖的社会が形成されたために、人々の姻戚関係が遮断されたと考えるべきではないだろう。むしろ積極的にイトコ婚を奨励した理由があったのではないだろうか。

ここで人類学教科書が説明する「結婚の互酬性」説を取り上げて、小川内地区にイトコ婚が多い理由を説明する必要もないだろうが、小川内地区における他者との関係性の強化、集団構成員相互の融和の確認、社会的統合のためであったことは間違いない。要するに、小川内地区におけるイトコ婚は、基本的に個人を中心とする姻戚関係であるものの、地区民にとって家族に次ぐ重要な経済的、社会的、政治的な資源と安全装置であった。だからこそ、彼らは姻戚関係にある家を「キョウダイヤド（兄弟宿）」と呼称した。いわば、小川内版の「結合家族」であった。それは地区民の賢明な知恵の結晶であった。また「山内刀指し」の誇りを維持するための社会装置であった。

iii．五ヶ山から満州（中国東北部）へ

なぜ、五ヶ山の人々はもっと早く山を下らなかっただろうか。言い換えれば、なぜ、五ヶ山の人々は、生活に不便で、里から遠い「山奥」で暮らし続けたのだろうか。記録によると、14世

紀にはすでに五ヶ山に人々が居住していたとあるので、今に至る約600年間、五ヶ山における人々の生活は続けられた。現代文明の利器である携帯電話さえつながらない「秘境、五ヶ山」で。

なるほど五ヶ山にはもはや小中学校も消え去り、しかも無医村である。コンビニエンスストアー・ファーストフード店も大型スーパー・映画館・美術館、役所もなく、ましてや繁華街もない地域である。近くのＪＲ九州中原駅まで徒歩で、五ヶ山から下りで約１時間を要する。その反対に上りは約２時間かかるという。中学校を卒業した若者の多くは、就職口さえない五ヶ山に戻ってこず、都市居住民と化すので、いきおい人口減少率が高くなり、地区を見渡せば高齢者ばかりである。典型的な「過疎地域」であると言って良い。だからといって、都会から離れた不便な地で、五ヶ山の人々は「いやいや」山村生活をしていただろうか。

五ヶ山を歩きながらよく耳にしたのは、南畑ダムができ、385号線が整備されて、車の往来が激しくなる前まで、家に鍵を掛けることはなかったという言葉である。駐在所に尋ねても、五ヶ山で凶悪事件や盗難事件は久しくないという。五ヶ山が「山奥」だからとか、里と比べて「閉鎖的」で人々との接触が少ないからだと言う回答を準備しては、それはトンチンカンであろう。そして現地調査のたびに気づくのは、「俳句」などの文芸を趣味に持つ人々が多かったことである。この趣味人の発見にしても、五ヶ山は山奥で、他に楽しみがないから、人々は「俳句」しか出来なかったという回答を用意するとしてならば、それも不適当だと言わざるを得ない。言い換えれば、五ヶ山のように「山村生活」はたえず貧窮のどん底にあり、暮らしの豊かさを感じない最低の生活水準に止まっていた、という前提に立つ回答には、否定的だからである。言うまでもなく、五ヶ山が日本の「理想郷」（シャングリラ）であったというわけでもない。

ところで1954（昭和29）年末の「神武景気」にはじまり、石油ショック後の1974（昭和49）年の間の約20年間、国民総生産（GNP）の実質成長率が年平均約10％という史上空前の伸びを示したので、周知のようにこの時期は日本の高度経済成長期と呼ばれている。敗戦から23年後の1968年に、国民総生産（ＧＮＰ）がアメリカにつづき第２位の規模に達したからである。鉄鋼・造船・自動車・電気機械・化学・合成繊維などの産業が急速に発達した結果、日本経済に占める第一次産業の比重が下がり、第二次・第三次産業の地位が高まった。さらに第二次産業のなかでも重化学工業の地位が高まって、工業生産額の３分の２を占めるに至った。

したがって東京オリンピック開催を前後として、東京・大阪・名古屋をはじめとする太平洋ベルト地帯に、確かに人々は吸い寄せられていった。日本中の山村・農漁村から、都市や工場で不足した労働力は集団就職などによって補充された。とくに若年労働層は、第二次産業の基盤を支える「金の卵」ともてはやされた。1965（昭和40）年から約５年の長期に及んだ「いざなぎ景気」は、終身雇用・年功序列といった安定的な労使関係を基調とした日本型の雇用慣行を生み出し、365日24時間働きづめの人間を作り出した。その結果、戦後の復興から高度成長期には「企業戦士」を、そして1970年代後半の高度成長期から経済安定成長の達成期に「会社人間」と形容される勤勉なサラリーマン層が出現した。大東亜戦争中に「産業戦士」予備軍であった若者たちが、その20年後に軍への忠誠ではなく会社へ、銃ではなく算盤に持ち替えて、家庭や地域、「個」としての生活を犠牲にして猛烈に働いた。その頃に流行したのが、「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」の名セリフで一世を風靡した植木等のヒット映画「ニッポ

ン無責任時代」（1962年上映）であった。また「会社人間」誕生を支える栄養剤が、ある人類学者の日本文化論であった。封建的なムラは人間関係が窮屈で、自由のないタテ社会であるので、そこから脱して都市へ飛び出せ、という指針である。

その会社人間たちは、東京を代表する高級住宅地である田園調布に居住し、リンカーン・コンチネンタルなどの外国車を乗り回して銀座のデパートでショッピングをして、シティーホテルでフランス料理を食べることに憧れ、水洗トイレもない田舎で田んぼの肥料にする糞尿が入った桶に棒を通して担ぎ、山村の急斜面を上り降りることを忌み嫌った。たとえ、朝のラッシュアワーにぎゅうぎゅう詰めの電車に乗り、片道１時間以上の通勤時間に耐えて、やっとの思いでたどり着いた会社では、配置転換、転勤、単身赴任、出向・転籍・長時間労働・サービス残業・リストラ・過労死が待ち受けていようとも。街にはビルが乱立し、土壌を一度として見ることないアスファルトジャングルの街に生きようとも、富へのあこがれ、社会的・文化的便利さを求めて、村から町や都市への大量人口移動現象が生じた。その結果、日本中の村々では「三チャン農業（じいちゃん・ばあちゃん・かあちゃん）」へと突入し、過疎化・高齢化が進行した。サラリーマン層を中心に全国民の９割までが中流意識を持つ時代になり、世の中は「昭和元禄」ムードに酔いしれたが、山村のいくつがそれを享受できただろうか。

ところで、都市への人口集中が起きたのは、何も高度経済成長だけが原因であったというわけではない。団塊の世代と呼ばれる戦後の第１次ベビーブームで誕生した約600万名の溢れる人間たちの就職先が山村や農漁村に存在しなかったことも、その原因の一つである。「小川内誌」に掲載された小川内小学校卒業写真を一見するだけでも、団塊の世代（1947年から1951年）の数の多さに気づくだろう。確かに土地相続などにしても、山村の限定された「猫の額のような」土地では、細切れに分割することが不可能であった。現金収入を求めて、家内の余剰人員は村外に出て行くしかなかったのも、紛れもない事実である。昭和30年以降の卒業生名簿を見ると、その現住所の90％以上が村外に、そして北海道から鹿児島まで全国に散在している事実が、それを裏付けている。

ところで、五ヶ山から村外への人口流出した時期は、何も第２次世界大戦後の高度経済成長期ばかりではなく、戦前にもその盛行期があった。日本がアジア大陸侵略に奔走した時期こそ、その時期であった。今さら小村寿太郎の帝国議会における演説（1909年２月）、いわゆる「満

Pho.Ⅲ5-1　小川内での聞取り調査

Pho.Ⅲ5-2　東小河内にて

韓移民集中論」を引き合いに出すまでもなく、世界各地に分散するのではなく、朝鮮半島や満州（中国東北部）への日本人移民の拡大は国策であった。初代満鉄総裁であった後藤新平が主張したという100万名移民論までとは言わなくとも、1872年ごろから流入していった満州の日本人は、1893年には33万名までに拡大した。1945年８月15日現在では、最終的に何万名に至ったか不明であるが、その中に五ヶ山出身者がいた。

その内の一人の事例を紹介しよう。この方は、1927（昭和２）年に満州に渡った。きっかけは、佐賀市にあった大坪書店に勤務していた親族が、勤務先の朝鮮半島と満州地域への販路拡大にともない、満州の奉天（現在の瀋陽）支店に転勤になったからである。しかも妹が奉天の満鉄病院の看護婦（産婆）として勤務していたので、奉天はまったくの見知らぬ土地ではなかった。とりたてて勤め先の宛があったわけではなかったが、行けば何とかなるだろう、という期待が先行したそうだ。いわば「一発組」に属する。

家族に見送られて、五ヶ山から国鉄長崎本線中原駅（三養基郡みやき町大字原古賀）まで現在の国道385号線を徒歩で降りた。荷物はカバン一つ。身なりは、洋服に靴。当時としては、ハイカラであったと思うと述懐する。長崎本線で鳥栖駅まで行き、鹿児島本線で博多駅まで行った。博多駅から小倉駅を経過して、下関駅に到着したときは、一日が暮れていた。下関と釜山を結ぶ的航路に乗船するためであった。「景福丸」「昌慶丸」であったかはハッキリと記憶していないが、乗った船の名前は朝鮮風であった。夜行の連絡船であったので、夜の闇の中を煙突から黒煙を上げながら船は出て行った。翌朝に到着した連絡船から下りた時、今で言うパスポートなどはなかったので、すぐに釜山桟橋駅に向かった。早朝に出発した『のぞみ』か『ひかり』の新京行き特急に乗車した。その列車の名前も出発時刻も、遠い過去の話なので、すっかり忘れた。特急の名前が『のぞみ』か『ひかり』であったことは、戦後に初めて乗った新幹線の名前と同じなので思い出した。大邱―京城―平壌、安東を経由して奉天に到着した。朝鮮を通過するときに、車窓から見える朝鮮の山々に木々がないことに驚かされた。

中国に入り、列車は見渡す限りの地平線を突き進んでいったので、我が未来の明るいことを確信した。奉天に到着して、親族の部屋に間借りした。大坪書店の販売の手伝いをした。その当時の奉天に、東脊振村坂本出身で、満鉄（南満州鉄道）の列車ボーイをしていた人にも偶然に出会った。奉天で生活している間に気づいたことは、多くの人が満州に骨を埋めるつもりでないこと、そして日本国内各地の方言が混在していることであった。確かなことはいえないが、多くの人が短期間にあちらこちらを移動しているようだった。東北方言、薩摩方言、熊本方言などが日常会話で使われており、コミュニケーションに戸惑うことも多かった。しかし日本各地から来た人々の寄せ集めであったので、各地特有の煩わしい因習も習慣も存在しなかった。気軽だったと思い起こす。ごみごみして人がごったがえしていた奉天の旧市街、豪壮な建物であった奉天大和ホテル、瀟洒なヨーロッパ風の満鉄奉天図書館も、懐かしい記憶にあった。

半年もたつと、勤務先にもなれてきたが、秋から冬の零下の極寒に我慢できるとしても、どうしても馴染めないのが人間関係であった。それに加えて、当時の満州には腸チフス、コレラ、赤痢等の伝染病が蔓延していたので、バタバタと死んでいった。自分自身も腸チフスの一種で「満州チフス」といわれた病気に罹患し、高熱・血便で生死の境をさまよったことを契機に、再び五ヶ山に帰った。不幸なことに私の妹は「満州チフス」で死んでしまったので、奉天にそ

の墓があるはずだ。そして妹の子供二人は、引き上げの混乱で死んでしまったと聞いている。

五ヶ山・小川内地区の人々にとって、満州は一攫千金を夢見て、出世に階段を駆け上がる「新天地」であったが、遙か遠くの「厳寒の異国」でもあった。だからこそ、満州の五ヶ山・小川内の人々は、etranger（エトランゼ、フランス語で異邦人の意）にすぎなかった。満州に旅立った人々の願いは「貧困からの脱出」であったので、典型的な山村出身者たちは、大根の煮染め、里芋の煮転がしといった田舎の食べ物を捨て去り、豊かな都市文明の象徴であるパン・コーヒー・ボルシチ（スープ）・ステーキなどの洋風食文化に憧れた。いわば戦前の奉天での生活は、戦後の高度経済成長を支えた「モノの豊かさ」という大衆の欲望を満たす先駆的試みがなされた実験場であったかもしれない。

iv．五ヶ山の朝鮮人

五ヶ山と朝鮮人。この組み合わせに不思議さを感じる人もいるだろう。福岡からも佐賀からも遠く離れた山村であるだけに、観光大型バスが行くだろうかと気遣い、観光資源は何があるかと考え込む人もいるかもしれない。なぜ、五ヶ山でハングルが行き交っただろうか、と。それは、いつだっただろうか、と。

確かにどの資料に当たってみても、五ヶ山の戸数は減ることはあっても、明治以降、分家などの自然増を除外すれば、戸数の増えることはなかった。金さんや李さん、朴さんを積極的に地区外から受け入れた形跡もない。しかしながら、どうしても人口の増加が必要であった時期があった。それは、五ヶ山が帝国軍人を戦場に送り出した時期であった。1938年４月１日に「国家総動員法」が制定された結果、「帝国臣民」男子を兵士へと変身させ、1941年に239万人、42年に281万人、43年に337万人に及ぶ兵力が動員されたという。44年には、さらに504万人に達する兵力が動員された。この数字は、男子人口の14.6％に及ぶという（内海愛子説）。いわば「根こそぎ動員」されて男たちが戦場に送り出されたので、銃後の工場、炭坑、造船所、農村、漁村、山村などのすべての場所でも労働力が不足するのも、当然である。

そこで日本政府は、まず1941年11月に「国民勤労報国協力令」を発布させて、14歳以上40歳未満の男子、14歳以上25歳未満の未婚女子を勤労報国隊に組み入れて、戦争に赴き、手薄になった各地に配置され、戦争の継続がはかられた。さらには、1943年６月に学徒動員計画が発布され、学生すべて（中学生から大学生）が「学びの舎」から離れて行かざるを得なかった。1945年には学徒動員数は約193万人、女子挺身隊は約47万人に及び（内海愛子説）、身体が動かせる青少年・壮年男女は食糧難の中で、激しい空襲の中で、誰が決めたわからないままに配属先で労働者としてがむしゃらに働かされた。

しかしながら学生たちを総動員したとしても、彼らを炭坑や精錬所、さらには建設工事現場などの「重労働」に従事させるわけにいかなかった。とりわけ戦時にあってエネルギーの源であった炭坑で不足する労働力には、朝鮮人や中国人、そして連合国捕虜を配置した。しかしながら連合国捕虜が多数確保できるはずもないので、「帝国」日本に組み込まれていた朝鮮・台湾には、1938年５月に国家総動員法を施行することで、朝鮮人を過酷な労働現場に動員する法的整備を行った。彼ら朝鮮人は日韓併合時の1910年から学校で日本語教育を受け、さらには内鮮一体（「皇国臣民」化）・「国体明徴」政策によって天皇への忠誠心を教え込まれていると信

じられており、その上に創氏改名で日本的名字を名乗っていたからでもある。「内地人」と同等に取り扱えると錯覚していたからでもあろう。統計を見ると、1939年に８万5000人の朝鮮人が日本の炭坑や建設現場に送り込まれたという（前田一説）。1940年１月に施行された「朝鮮人職業紹介令」によって、京城（現在のソウル）、釜山・大邱などの６都市に、職業紹介所が設置され、肉体労働者が募集され、彼らに対して「汚い、きつい、危険」な仕事が割り振られた。1945年当時、日本に居住していた朝鮮人の数は約200万人であったと推定されているので、その大多数がこうした職業紹介所を経て、日本に送り込まれたにちがいない。当時の日本の総人口の約３％に該当する比率である。

さて、五ヶ山・小川内地区内に移住した朝鮮人、金さん、李さん、朴さんは、1940年代の貴重な労働力であったが、いつから朝鮮人が地区に入り込んできたかに関して、人々の記憶は曖昧である。戦前から五ヶ山・小川内にいたようだと語る人もいるからである。とはいえ、戦時中には佐賀県上峰町に口入れ屋があり、そこの紹介であった。口入れ屋は今風に言えば人材派遣会社である。上峰の口入れ屋には、たくさんの朝鮮人が登録されており、神埼郡内に配置したそうである。五ヶ山でも炭焼きや木材出しなどの肉体労働者が不足していたので、その臨時的代用として朝鮮人を雇用した。「男衆」とも、「奉公人」と呼んだ例もある。たとえば、大野で働いていた金さんは、妻と娘の３人で五ヶ山に来住して、炭焼き小屋で生活をしていた。彼ら朝鮮人の総数は、1945年の敗戦時に男女10人ほどに過ぎなかった。

しかしながら五ヶ山・小川内地区の人々にとって理解不可能な外国語である朝鮮語を操り、辛いキムチを食べ、ニンニクを多用する食事をしたという。竹の屋敷に住んでいた金さんは、犬を食べていたようである。いぼ地蔵左の山手に住んでいた金さんの母は、頭の上に物をのせて運搬していたという。また、五ヶ山・小川内地区のひとりの朝鮮人男性が仲立ちして、東脊振村の男性と五ヶ山・小川内地区の女性が結婚したエピソードもあるという。韓服を着ていた朝鮮人の存在は、五ヶ山の人々の記憶に永く残っている。

いったい、朝鮮半島の故郷がどこで、いかなるルートを経て、朝鮮半島から玄界灘を超えて渡って来たのだろうか。五ヶ山の人々にとって、長い歴史の中で初めて接した外国人であったので、五ヶ山の人々には「異人（まれびと）」であったようだ。たとえ内鮮一体政策で皇国臣民であろうとも、五ヶ山の人々の目には朝鮮人は朝鮮人であった。その当時、すでに朝鮮半島では「創氏改名」運動が展開されており、本来であれば、金さんも朴さんも日本式氏名、たとえば「金田」とか「新井」などの氏名を付けていたはずである。しかしながら、五ヶ山の人々の記憶には、朝鮮人を日本式氏名で呼称したことはないという。とすれば、創氏改名しないままの朝鮮人が、何の支障もなく、玄界灘を超えてくることが出来たにちがいない。

ところで、五ヶ山の1945年８月15日は、日本人にとって「敗戦の日」であるが、一方で朝鮮人にとって「解放の日」でもあった。その日を境にして、支配―被支配の桎梏から抜け出した朝鮮人は、韓国京城で発生した民族独立解放デモンストレーション（1945年８月16日）のような集団行動をとることもなく、解放を喜ぶこともなく、日々の労働に従事したという。1950年６月に朝鮮戦争が勃発した大事件を契機にして、彼ら朝鮮人の多くが五ヶ山を下りていった。

噂によると、五ヶ山から那珂川町に流出した後、福岡県内でパチンコ業で成功した人もいるようであるが、何人が朝鮮半島に帰国し、何人が日本に残ったのだろうか。

ｖ．五ヶ山のラジオ

五ヶ山にラジオが届いたとき、そのスピーカーから鳴り響いた歌声を耳にした老婆が、「声が電線ば、どうして伝ってくるのか」と不思議がったという。今となっては笑い話ですませられるが、目に見えない電波を伝わって、見知らない男女の歌声が聞こえてくる「箱」に、明治生まれの老婆が驚いたのも無理はない。世の中の動きと無縁に生きていたか、あるいは生きようと、さらには生きなくてはならない人々が五ヶ山に存在したことに注目したい。

五ヶ山にラジオが入ったのは、1928年。日本でラジオ放送が開始されたのは、1925（大正14）年３月22日午前９時30分。その３年後の1928（昭和３）年６月開局のＮＨＫ熊本放送局、そして1930年12月に開局したＮＨＫ福岡放送局と、さらに1941年12月に開局したＮＨＫ熊本中央放送局佐賀出張所からの電波が五ヶ山に届いた。当時、鉱石ラジオにしても真空管ラジオにしても高価品であったので、1940年段階でも五ヶ山においてラジオの所有者は数戸であったという。

一般的にラジオ番組と言えば、ニュースや地震などの災害放送、さらには音楽番組が念頭に浮かぶはずである。興味深いことに、もっとも多くのラジオが五ヶ山に普及したのは、そうしたニュースや音楽などを聞くためではなく、「輝かしい（？）戦況」の大本営発表と空襲警報を国民に広く告げるために、1943年から1944年頃、国民一型、二型ラジオの配給があったからだという。言い換えれば、戦意高揚というプロパガンダ宣伝のために、国策で量販されたラジオが、五ヶ山の人々の手に届いたと言えよう。

その国民型ラジオを買い求めた人の記憶に残るラジオ番組は、戦後直後だけでも

(1)『のど自慢素人音楽会』(1946年)

(2)『日曜娯楽版』(1947年)

(3)『とんち教室』(1949年)

(4) 連続放送劇『君の名は』(1952年から1954年)

であった。一日中働き通しの中で、「君の名は」が流れてくるラジオに耳を傾けるのが唯一の楽しみであったと、夫婦が顔を見合わせて語る。30歳代を懐かしむ女性の言には、説得力があった。「モノがない」時代にあって、都市生活を憧憬する敗戦後の女性の意識変化を伺えるからでもある。

Pho.Ⅲ5-3　小川内にて

Pho.Ⅲ5-4　雪の小川内・山祇神社

さらに世相を反映して、

(5)「引揚者の時間」1947（昭和22）年７月～1957（昭和32）年３月

なども、五ヶ山でよく聞かれた番組であった。「リンゴの歌」（並木路子）や「鐘がなりますキンコンカ～ン…」（ＮＨＫのラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌『とんがり帽子』）などのメロディーは、「長崎の鐘」『黒百合の歌』などと共に、五ヶ山でも人気の高く、誰でも口ずさんだそうだ。

長い間、毎朝、新聞とて配達されることもなかった五ヶ山地区において、日々の国内外のニュースを知る手段、さらには娯楽を提供するメディアであっただけに、テレビにその席を譲るまでラジオは「家庭の主役」であり、夜なべ仕事を慰めるものであった。

ところで、忘れてはならないラジオ放送番組がある。ラジオ体操である。

「全国の皆さん、おはようございます。さあ、今日も元気で、体操を始めていただきましょう。ラジオ体操、はじめ、一、二、三、四」

という声が、今に至るまでラジオを通して全国津々浦々に響き渡る。戦前まで、そのラジオ体操は日本のみならず、朝鮮半島や満州（中国東北部）、台湾、樺太などの植民地にも配信されたので、広大な地域で、同時刻に一斉に、日本人ばかりではなく朝鮮人、中国人などの外国人までも動員されて、音楽と号令にあわせて同一の運動をする連帯感を醸成する文化装置であった。一般的にラジオと言えば、音楽にせよドラマにせよ、「聞く」行為であると考えられがちであるが、このラジオ体操だけは「身体を動かす」行為を促進するために制作される特異な番組であると言えよう。国民の体位向上を目的に制作された番組であるだけに、五ヶ山においても学校で、このラジオ体操を行っていた。夏休み中、郵政省簡易保険局が配布するカードを手にぶら下げながら、寝起きの子供たちは、目をこすりながら学校へ掛けていったそうである。

ラジオ番組と言えば、もう一つ忘れてはならない番組がある。昭和40年代に全盛期を迎えた深夜放送である。五ヶ山で生まれた団塊の世代が若かりし頃、受験勉強に精を出す深夜、多くの若者は深夜放送に耳を傾けた。「オールナイト・ニッポン」、「パック・イン・ミュージック」、「セイ！ヤング」等の東京制作番組、そして地元の福岡ＲＫＢラジオ「スマッシュ11」などである。それと同時に、五ヶ山に「新ながら族」が誕生したことになる。というのも戦後の五ヶ山では、土間で夜なべ仕事をしながらラジオに耳を傾けたのだから、すでに「旧ながら族」は存在していたからであった。

忘れるところであったが、中高年向けのＮＨＫ「ラジオ深夜便」の存在も書き残しておきたい。

vi．五ヶ山にテレビが来た

今や「一軒に３台も４台」もあるテレビであるが、その昔、初めてテレビを購入した家に、五ヶ山の人々が押し寄せて画面に釘付けになった時代があった。テレビ受像器が高価であったために、福岡や佐賀でテレビ番組のおもしろさを知っていたが、なかなか購入できなかった。平均年収数十万の五ヶ山では、テレビ１台20万円は手の出る価格でない。

1958（昭和33）年ごろから、ぼちぼち五ヶ山にテレビが入り出した。小川内で、桑河内で、大野で――。すると、まず子供たちがその家に殺到して、当時人気を博していた「月光仮面」や「名犬ラッシー」を観覧した。早速にその影響が現れて、子供たちは、「月光仮面」に憧れ

て、風呂敷を首に巻き、家の周りを走り回ったという。一方、大人は「大相撲」「プロレス」、「プロ野球」、「ジェスチャー」、「お笑い三人組」、「私の秘密」などを見るために駆けつけて、テレビ番組に興じた。今となっては想像も出来ない事態であるが、日本においてテレビが誕生した1953（昭和28）年に、東京の各所で「街頭テレビ」が登場した。「街頭テレビ」とは、プロレス「力道山とシャープ兄弟」の因縁対決を見るために、東京の新橋駅西口に約１万人におよぶ群衆が押し寄せ、一つの画面に皆が見入った事例（1954年）はその典型である。まさにその五ヶ山版現象である。

五ヶ山では、なぜか熊本の放送が映し出された。それもそのはず、ＮＨＫ熊本放送局の開局が1958（昭和33）年３月、熊本放送（ＲＫＫ、当初はＴＢＳ系列）の開局が1959年４月であったのに対して、ＮＨＫ佐賀放送局が開設した1968（昭和43）年まで待たなくてはならなかったからである。ちなみにサガテレビの開局は1969年４月であった。したがって五ヶ山では、しばらくの間、熊本で制作されたニュース番組や天気予報を見ざるをえなかったので、五ヶ山では地元佐賀に関する情報が蓄積されないという奇妙な事態が生じた。九千部山頂にテレビ塔が建設されてからは、チラチラした画面から解放されたという。

ところで、一軒の家に殺到して子供たちがテレビを見るために、親たちも仕方なく自分たちの家にテレビを購入することとなった。「一家に一台」時代の到来である。地区民が集落外で働き始め、現金収入が入り出した1965年頃には、五ヶ山の全戸にテレビが設置された。草創期のテレビ放送と言えば、「皇太子ご成婚パレード」の中継放送（1959年）が有名であるが、その姿を見た人は少ないようである。しかしながらケネディー大統領暗殺事件（1963年）、東京オリンピック女子バレー決勝に進んだ「東洋の魔女」（1964年）は人々の脳裏に刻み込まれている。

ある方の思い出の中に、ＮＨＫ朝の連続テレビ小説の「おしん」（1983年～1984年）がある。明治から昭和の激動の時代を生き抜き、米１俵で子守奉公に出され数々の苦難を乗越えたストーリーに感動し、涙を流すことがたびたびであったという。厳冬の小川で洗濯をしたこと、姑のつらい仕打ちに悩んだ日々、日暮れまで水田で草取りした農作業などの思い出などを重ね合わせて、しわだらけの手に目をやりながら話すある女性の姿は印象的であった。

さて、この女性の話で忘れられないのは、テレビがお茶の間に入ってきたために、「姑と嫁」の座が逆転したというエピソードである。それまで仏壇を背にして座り、威厳を示していた姑であったが、その仏壇の横にテレビを置いたために、もっともテレビが見やすい位置は、それまで台所に近い下座であった嫁の位置へと逆転した。テレビ画面を見づらくとも、威厳を保つために場所を変えたいと言い出せない姑の様子を見るたびに、その嫁は笑いをこらえきれなかったそうである。

子供たちが一人一人、集落外に転出していくにつれて、取り残された親たちは家の中でテレビを漫然と付けておくだけになった。がらんとした室内で、独居老人が、老夫婦が食事のたびにテレビに目をやりながら、外界の話題を求め、世相の移り変わりを感じた。積極的に話が交わされるのは、有名人の死亡ニュース。「誰それさんが、死んだそうだ」、と。新聞記事でも、ついつい新聞の社会面に掲載される死亡欄に目をやるという。

五ヶ山の人々にとって、テレビがプラズマテレビへと替わり、衛星放送を見る時代に突入し

て、かつてのように雪が降り続く「チラチラ」現象のテレビ画面を見ることはなくなっても、グローバル化した世界の趨勢とは無関係であり続けた。世界旅行に行かずとも、茶の間で「世界遺産」を見て、イラク戦争の勃発を知ろうとも、五ヶ山の方々は「チャンネル争い」をした昔、食卓を大勢の家族が取り囲んで「紅白歌合戦」を見た思い出などを饒舌に語る。「テレビ」のコマーシャルを見て、子供たちが欲しがり続けたお菓子やキャラクター商品などを数え上げるたびに、インターネットが生み出したＥメールもインターネットショッピングもバーチャルリアリティーもグーグルもヤフーもチャットもプレイステーションも、ましてやマイクロソフトやビルゲイツとも無縁でありつづけたことを忘れてはならない。重要なのは、濃密な人間関係で結ばれた社会であったからだ。学校の運動会が地区総出で盛り上げて、地区民の団結の象徴であったように。

五ヶ山の人々が山を下りた住居の一つの２階に、昔は子供部屋であった新建材の壁で取り囲まれた室内に、厚いブラウン管の古いテレビがぽつんと放置されてあった。トレンディー・ドラマ「101回目のプロポーズ」や、劇的なサヨナラホームランを打った長嶋茂雄の天覧試合、アポロ11号の月面着陸など、誰もが明日は今日よりも良くなると信じて暮らした昭和時代を映し出したにもかかわらず、すでにその昭和が遠く離れて、忘れ去られたかのように。

vii．五ヶ山に登ってきた人々

五ヶ山・小川内地区に行く唯一の公共交通機関はバスである。しかも福岡県側からのみ運行されている西鉄バスだけである。行き先番号は、９。一日４便（那珂川営業所→佐賀橋）、５便（佐賀橋→那珂川営業所）の９便の運行である（2006年12月現在）。そのルートは、那珂川営業所→道善→現人橋→後野→西隈・役場入り口→冠ケ丘団地→松尾→山田→共栄橋→広瀬→不入道→埋金→市の瀬→大浦→筑紫耶馬溪入口→耶馬溪→新耶馬溪橋→展望台前→ダム記念碑→網取→五ヶ山→大野橋→佐賀橋。運賃は、片道600円。所要時間38分。1965（昭和40）年開通。

なるほど五ヶ山・小川内地区でも、佐賀橋から南畑ダムまでは平坦な道のりである。しかし那珂川町南畑不入道地区から五ヶ山網取地区まで約８キロ、とりわけ筑紫耶馬溪入口からダム記念碑までの区間は、上り下りに難渋する坂道が続く。国道385号線の道路整備で作られたヘアピンカーブをあえぎながら登るバスに乗車した体験を一度でもすれば、その急峻さは実感できるはずである。

何も福岡県側だけではない。佐賀県東脊振村松隈から小川内地区までの5,300㍍区間も、その曲がり道は数限りない。しかも上り下りする車が行き交うのに難渋するほど狭く、急な坂道である（明治33年完成。明治44年県道編入。昭和49年国道385号線認定）。

そのような険しい山道を登り詰めても、五ヶ山や小川内に、世界のブランドショップが建ち並ぶ東京銀座通りや、全国の善男善女が参拝する東京浅草寺前の仲見世通り、中学生・高校生らの京都修学旅行客で賑わう新京極などの商店街があるわけではない。ましてや東京の新興住宅地二子玉川に代表される郊外型ショッピングモールなどが存在するわけでもない。今では日本全国津々浦々に約４万店にも達する日本型コンビニや、マクドナルドやスターバックスなどのグローバル企業によるファーストフードチェーンもない。

昭和20年から現在に至るまで、神武景気（昭和29年～昭和32年）・いざなぎ景気（昭和40年

～昭和45年）などの高度経済成長期に、日本の原風景は大きく変貌した。都市は膨張し、郊外の水田・畑に大規模なニュータウンが建設され、人々は往復３時間以上の通勤時間を余儀なくされた。白砂青松の海岸は埋め立てられ、工場の煙突が林立した。都市間を結ぶ国道整備から始まり、バイパス道路・環状道路などの基幹道路網整備、さらには日本中に高速道路が張り巡らされた。本州と四国に４本の巨大な橋が掛けられた。

それでは2005年まで、五ヶ山・小川内地区には、いかなる道路整備行政の手が及んだだろうか。五ヶ山ダム建設前に。那珂川町から五ヶ山までの国道385号線の拡張整備を除いては。五ヶ山から神埼町に至る国道は従来のルートに若干の舗装と拡幅整備がなされただけであった。推測するに、その理由は、敗戦直後の米軍による脊振山レーダー基地建設、自衛隊による脊振山レーダー基地整備、南畑ダム建設などの資材の効率的、大量運搬に必要であったからであろう。しかも建設資材運搬は主に福岡側からだけで十分であったせいか、前述したように五ヶ山から佐賀県側ルートの国道拡幅工事などはされないままであった。つまり佐賀県側ルート整備は、悲願の東脊振トンネル開通まで待たなくてはならなかった（2006年３月21日、2.1Km）。

なるほど今では、五ヶ山にある観光レジャー施設『グリーンピア那珂川』（那珂川町経営、1986年開園）があり、最盛期には年間約11万名の利用客があった。また小川内地区に、脊振山系名水を売り物にした「森のパン屋 せふりの」、「五ヶ山豆腐」、「森のそば屋五ヶ山」があるので、週末にはドライブ客でごったがえしている。しかしながらそれでも、五ヶ山・小川内は「陸の孤島」とも、「秘境」とも言われてきた。では、果たしていつから五ヶ山は「陸の孤島」と言われてきたのだろうか。

ふと思い出すのは、坂本峠に残る石畳の古道である。必ずしも全道が良好な状態で残っているわけではないが、佐賀県神埼町から佐賀県東脊振村に至る道、江戸時代のいわゆる「筑前街道」である。東脊振では「脊振坂道」、通称「オダテ坂道」である。肥前国と筑前国を連結する筑前街道は、現代風に言えば、両国のバイパス道路であった。江戸時代の長崎街道のように、主要な幹道ではなかったにせよ、それでも往来は絶えなかったそうである。しかしながら佐賀から博多まで人とモノの流れは、一つは1891（明治24）年８月20日開通の長崎本線（鳥栖-佐賀間）の全線開通まで、もう一つは明治18年開通の国道３号線によって、江戸時代と大きく異なった。なによりも鉄道レールや車両道路が脊振山系を迂回して、久留米-鳥栖-福岡ルートへ

Pho.Ⅲ5-5　肥前・筑前街道

Pho.Ⅲ5-6　国境石

と設定されるにつれて、筑前街道ルートが久留米-福岡間の最短距離であったにもかかわらず、筑前街道の役割は次第に薄れていった（ちなみに、博多→坂本峠→神埼は約28km。博多→田代・基山→神埼は約45km）。海抜約500メートルの坂本峠を越える道路（鉄道）建設の困難さ・建設コストの高さ、長期間の工事などを勘案すれば、多少遠回りになってもほぼ平坦な地を通る久留米-鳥栖-福岡ルートが最適であったからである。それゆえに明治20年代初めから筑前街道を利用して、久留米から福岡を往来する人々の姿が急速に消えていくにつれて、草むす山道は放置された。五ヶ山・小川内地区を通過する便利が消えた時点から、両地域は「陸の孤島」化していった。

想像するに、筑前街道を通過する人々は、武士や鳥追い女や虚無僧、飛脚、浪人、行商人などであり、筑前街道を足早に通過していったにちがいない。しかし、明治維新を境にして、五ヶ山・小川内地区の外から来訪する者の足どりは、途絶えた。その期間は、明治20年前後から昭和20年頃までであるから、約60年間。より正確に言えば、昭和32年の小川内地区佐賀橋（10.6メートル）完成までといっても過言ではないだろう。それまで、木の橋であったのだから。昭和20年頃というのは、五ヶ山の背後にある脊振山を東アジアの戦略防衛上の要所として注目し、レーダー基地とかまぼこ型兵舎を建設する進駐軍によって、那珂川町から脊振山頂までの資材運搬道路が建設されるに当たり、多くの道路工事作業員が地区外から出入りし始めたからである。外国人と言えば、朝鮮半島における内鮮一体化政策によって、朝鮮人が皇国臣民化されていたとはいえ、それでも朝鮮人はどこまでも朝鮮人であったので、初めて見た外国人ではなかったにせよ、それでもレーダー基地に勤務するアメリカ軍兵士の姿が、人々の心に刻み込まれている。昭和21年ごろにジープで脊振山を上り降りしたり、川で陽気に水浴びをするアメリカ軍兵士の姿は、五ヶ山・小川内の人々に印象的であった。平和が取り戻せたからであった。

ところで五ヶ山・小川内の人々が山から里に下りていくことはあっても、里から山へ登る人はいなかっただろうか。

「ヒラノシンキョウ」、私が聞取り調査を始めて、すぐに耳に飛び込んできた人名である。

「五ヶ山・小川内を訪ねてきた外部の人の中で、誰を思い出しますか」

という私の質問に対して、まっさきに古老の口に上ったのが、この名前であった。「福岡市西新から来た琵琶法師」とか、「四季の土用に来た座頭さん」「座頭さんの琵琶語り」とも説明し、さらには網取地区では山田善寛氏宅、大野地区では築地藏次氏宅が定宿であったという。すでにヒラノシンキョウ氏が五ヶ山に来訪しなくなってから久しくなったので、その宗教活動がどのようなものであったか、琵琶法師が語る祭文は何であったのか、あるいは問い合わせ先さえも人々の記憶から失われている。しかしながら、幸いにも永井彰子氏の教示に従って、平野師の経歴を知ることができたので、次に紹介しよう。

「平野信教師（晴眼）

天台宗玄晴法流の僧侶。非法人寺院金剛流住職。福岡市西新で玄清法流の支部長を務めた。荒神祓いなどの宗教活動に専念。くずれのような語り物は語らなかった。父は平野教正師（盲僧）。子は僧侶とならず、在家。自動車運転手であった。盲僧坊金剛院は昭和58年にすでに廃絶」

すでに昭和58年に廃絶された段階から、20年以上経過しているので、人々の記憶から平野信教師による五ヶ山の荒神祓いが急速に消滅していったようである。平野師による荒神祓いを撮影した写真の入手さえも困難な現状では、人々の記憶の断片から、以下にその片鱗を復元したい。

福岡県内にいる天台宗玄清法流の琵琶法師は、福岡市高宮の天台宗別格本山成就院（福岡市南区高宮1-21-7）に所属する。西日本全体でも、何名の伝承者がいるのか分からないほどであるが、福岡市内の生存者はごく数名であると聞く。前述したように、四季の土用に荒神祓いをすること、正月に新しい三宝荒神のお札を持って回ることから、この福岡地区の琵琶法師は「荒神琵琶」と呼ばれることが多い。彼ら「荒神琵琶」法師は、檀家を持つ。平野師の檀家がどこであったのか不明であるものの、平野師の行動範囲から考えて、那珂川町不入道、埋金など一帯であったと推定される。かつて、荒神琵琶法師の檀家回りは、通常、四季の土用、正月の他に、麦の収穫が終わった夏にも行われた。しかしながら、各檀家の主人がサラリーマン化して、ウィークデーに不在がちであること、荒神祓いに人手がいること、そしてなによりも宗教的信仰心の衰退などを理由として、敗戦後のいつの頃からか年１回の「秋上がり」（稲の収穫）後が普通となった。

五ヶ山の荒神祓いに関しては、盲僧であった平野教正師が手を引かれて五ヶ山に登ってきたこと、定宿に集まった人々に、一曲30分程度の琵琶法師の語り物、通称「くずれ」が語られたことを記憶するのみで、五ヶ山の人々はその詳細を忘れ去っている。平野教正師の語りのレパートリーが何であったか、その記録さえもないので、もはや後人は「出世影清・小栗判官」などの弾琴が奏でられたと想像するしかない。『平家物語』で有名なように、社寺の縁起や霊験譚、合戦談、その他民間伝承などの各詩章に節をつけて、盲目の琵琶法師が琵琶の弾き語りすることで、仏心を養い、各家々の無病息災と富を確約することになったはずである。子の平野信教師の代には「くずれ」が語られることは無かったようであるが、わずかに「秋上がり」（稲の収穫）後に、発願の座・中の座・結願の座の三座で構成されていたと伝えられるのみである。

諸報告書を総合すると、三時間に及ぶ荒神祓いは、

１）発願の座
　１，発願文
　２，五方の祓い
　３，九条錫杖経誦経
　４，仏説不動経誦経

２）中の座
　１，金光明最勝王経堅牢地神品誦経
　２，仏説地神陀羅尼経（地神経、琵琶を弾きながら）

３）結願の座
　１，法華経誦経
　２，仏説大荒神施与福徳円満陀羅尼経（荒神経、琵琶を弾きながら）
　３，結願文

こうした一連の仏教的儀礼に包まれているために、この荒神祓いの本質が見えにくくなっているが、本来は穀霊信仰が儀礼の根幹にあると見なすべきである。各家の祭壇に穀霊を閉じこめて、来年の種蒔きまでその穀霊を管理しつつ、その年の豊饒を保証することであったにちがいない。琵琶の他に太鼓などの打楽器、杓子木などの楽器が使われていたと推定できるものの、それさえも想像の域を超えない。

さて、この荒神琵琶法師以外に、どのような職業の人が五ヶ山・小川内を訪れたのだろうか。やはり商いを職業とする人の中で、「越中富山の薬売り」（別称、「入れ薬屋」）は記憶に新しい。というよりも、廃村になる直前まで、毎年１回、越中富山の薬売りさんは各家を廻っていたので、100年を越えた来訪者であったことは間違いない。木作りの置き薬箱に、風邪薬・下痢止め薬・傷薬などを納めるために、薬屋さんは懸場帳（得意先１軒１軒の薬の主薬、使用量、薬の消費期限などを記入）を持って廻る。長い間無医村状態が続いただけに、そのお世話になった人は多い。人々の記憶にいつまでも、「反魂丹」（越中反魂丹本舗・池田屋安兵衛商店製の腹痛止め薬）に代表される富山の置き薬は忘れられないだろう。置き薬屋さんが子供たちに風船を渡していたことも、懐かしい思い出として語る。

viii．五ヶ山の「三種の神器」

今では、当たり前の家庭電化製品であるが、「三種の神器」と呼ばれたテレビ・冷蔵庫・洗濯機が五ヶ山・小川内地区に流入したのは、1960年代のことであった。容易に戦中の「三種の神器」（鏡、剣、玉）と語呂合わせであると分かるものの、天皇家の神器が唯一絶対な品であるのに対して、戦後の神器は一般民衆に大量消費時代の幕開けを予告する家庭用品であった。周知の通り、電気製品の「三種の神器」と呼び始められた1954（昭和29）年とは、その年の２月に、マリリンモンローが来日。テレビに映し出された力道山とシャープ兄弟の日米試合でプロレス人気が沸騰し、また黒沢明監督の「七人の侍」やオードリー・ヘップバーンの「ローマの休日」が全国各都市で封切られた時期であった。いわば戦後復興時期であった。

ところで戦後の２大政策である「所得倍増計画」や「日本列島改造論」は、なるほど日本を「経済大国」への道を駆け登らせた。この高度経済成長期における日本国民の夢は、年収が右肩上がりに増加すると共に、室内にモノを溢れさせることであった。思い出して欲しい。戦後

Pho.Ⅲ5-7　五ヶ山小学校跡地

Pho.Ⅲ5-8　五ヶ山小学校の碑

まもなく、多くの家の電化製品と言えば、ラジオとアイロン程度であったことを。家具はいくつあっただろうか。「もはや戦後ではない」とは有名な言葉であるが、それを実感するように、1970年代にあって人々は争って電気こたつ・クーラー・電気掃除機・電気トースター・ビデオデッキ・電気扇風機・電気ジューサー・電気ポット・石油ストーブなどの大量の耐久消費財を買い求めた。購入者は、10年以上の「大東亜戦争」を余儀なくされた「ロストジェネレーション」であった。彼らは戦時中と敗戦直後に深刻なモノ不足と食料難を体験しただけに、その反動のように次々と新しいモノを買いあさった。まるでモノがなく不便に質素に生きることは「悪」であるかのように。あるいは時代に一人取り残されるかのように。むしろモノのみに執着することで、人々は戦時中の「暗い世相」を脳裏から消そうと考えたかのようであった。したがってアメリカのニューファミリーをモデルとした、大量エネルギー消費型のライフスタイルへの移行こそ、庶民の夢であった。全館冷暖房、大型冷蔵庫、大きなダイニングルーム、リモコン操作の駐車場のシャッターなど。

それでは五ヶ山・小川内地区では、どうであっただろうか。ある家の記録をひもとこう（小川内地区）。

昭和25年――ミシン
昭和38年――白黒テレビ
昭和40年――電気冷蔵庫
昭和48年――電気洗濯機

このリストに、ホームクーラーや電気扇風機が見あたらないのは、五ヶ山・小川内では夏でも清涼な風が吹くからであるが、電気掃除機は平成に入ってから、子供たちが買い求めてくれたという。電気トースターは、子供たちが学校給食でコッペパンなどのパン食の習慣が根付いてから購入したが、その時期は昭和40年代であったという。とはいえ、その家の老夫婦の食生活に、最後までパン食は根付かなかったが。「三種の神器」の内、小川内地区の主婦にとって、電気洗濯機の便利さに一番感激したという。それまで、身の回りの物は山水で洗うことは出来ても、おしめなどはどうしても川の水で洗濯しなくてはならず、冬の水の冷たさで手のひび割れが悩みであったという。「今の人は幸せだ」というのが口癖である。

1970年代、三種の神器に引き続き、国民は「新三種の神器（３C）」であるカー・カラーテレビ・クーラーを買い求め、全国民の９割までが中流意識をもち、社会は「昭和元禄」のムードに浸ったが、五ヶ山・小川内地区の生活感覚では、中流意識とは無関係であったと答える。そのような問いをしたこともないとにべもない。

ところで、五ヶ山・小川内地区に耐久消費財が持ち込まれると同時に、各家々で家屋の改造が始まった。まずエネルギーが、薪や木炭からプロパンガスへと転換された。このエネルギー変換によって、女性たちはプロパンガスコンロを設置するために、竈を撤去し、土間が新建材のビニールカーペットを敷いたキッチンへと改造された。窓は木製の枠から、サッシ枠に取り替えられ、それまでの悩みの種であったすきま風から解放され、完全密封の室内空間が約束された。キッチンの見た目は、改善された。松下電工などのメーカーが製作したシステムキッチンには、左側に水と瞬間湯沸かし器が付いた流し場、右には鉄で作られた一口プロパンコンロが据えられた。もっともその一口コンロは、すぐにステンレス製の二口コンロに駆逐されてし

まった。土間に板を張り、床を底上げしたので、それまで下駄や靴を履き直さなければならなかった座敷へは、そのまま連結された。上がり下りが格段に楽になり、室内の生活動線が確保された。姑や小姑に仕える嫁の労働は少しずつ省力化され、家庭内の人間関係にも微妙な変化を生じさせた。

まず、数十年前までありふれていた、各家の座敷で戸主を真ん中にして、箱膳で食べていた食事風景は完全に消滅した。ご飯を入れる保温箱「イグリ」も、姿を消した。昭和37年頃であった。しかも子供たちが座敷で座って食べることを嫌い始め、しだいに台所に食卓デスクが置かれ始めると共に、もはやデスクのどこが上手で、どこが下手か不明になり、しかも家族の食事時間はバラバラになっていった。家族一緒に食事をする習慣は、やれクラブ活動だ、早朝練習だという子供たちの時間割が優先されることで、夕食はともかくとしても、朝は皆が集まって食事をすることは困難になり始めた。お昼は主婦が残り物を食べる生活であった。

囲炉裏は電気こたつに取って代わられ、屋外にあった共同風呂は内風呂へと代わった。
そして家の改造の第２弾は、子供の勉強部屋を増築することであった。それまで養蚕を行っていた２階部分の空間が、国内産養蚕価格の下落と共に、また養蚕に従事する働き手がいなくなると共に、ぽっかりと空いたので、そこに子供部屋を作ったりした。あるいは農耕具を置いていた納屋に２階を作り、そこに子供部屋や結婚間もない長男夫婦の部屋とした。そもそも数間しか間取りのない設計で建築された家に、３世代家族がひしめき合って眠っているのが普通であったが、独立した部屋を要求する子供たちの勢いを受け入れざるをえなくなった。

「三種の神器」に代表される家庭電気製品や耐久消費財の購入代金、オートバイ・軽四輪車から自家用車・トラックの月賦、トラクターなどの農業機械の月賦、家の改造費用、毎月のプロパンガスや軽油代金、増大した子供たちの教育費、スーパーマーケットにおける「（１週間分の）買いだめ」金などなど、どれをとっても現金を必要とし始めたことが容易に理解されよう。もはや秋の収穫時の収入を待って、あるいは炭焼きの販売収入だけで、毎月の生計維持が困難に陥った。子供たちが地区外の学校へ進学した場合、その仕送りが必要となった。東脊振中学校寄宿舎であれば、その金額とて知れたものであったが、関東・関西・福岡の大学へ進学させた場合、すぐさま頭痛の種となった。

ある人はタクシー運転手に、銀行員に、南福岡の新幹線車両基地で車体清掃を、さらには大博多カントリークラブの管理部門に勤務したり、キャディーなどのさまざまな職業に就き、各自が毎月の現金収入を手にするようになった。その昔、家ごとに炭焼き小屋を所有して、炭焼きをしながら、共同出荷・価格維持のために「炭焼き組合」を作ったりして、地区内の人々の心の繋がりは強かった。また強くなければ、各自の利益が確保されないだけに、人々は「生活共同体」の結びつきを保持し、強化するための工夫をしていた。しかしながら、「下」の世界に職場を求めるようになると、次第に人々の生活のリズムが異なり始めた。それまで農業暦や林業暦などが年中行事の中軸であったのに対して、もはや各自の「サラリーマン暦」がその位置を取って代わり、小学校の「学校暦」―例えば運動会など―が地区民総出の行事へと変貌したという。

〔松原孝俊〕

報告書抄録

ふりがな	ごかやま・おがわち
書名	五ヶ山・小川内
副書名	福岡県那珂川町五ヶ山・佐賀県吉野ヶ里町小川内における文化財調査１
巻次	福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅰ
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第215集
編著者名	宮島寛・東和敬・服部英雄・吉良国光・佐々木哲哉・松村利規・佐藤正彦・山野善郎・錦織亮介・井上晋・下山正一・川野良信・柚原雅樹・永渕成樹・松原孝俊・吉田洋一・本田佳奈・寺崎直利・中西裕二・谷智子・伊﨑俊秋
編集機関	福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）
所在地	812-8575　福岡県福岡市博多区東公園７番７号
電話番号ほか	TEL. ０９２－６４３－３８７５　　FAX. ０９２－６４３－３８７８ E-mail　kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp
発行年月日	西暦　2008年３月31日

	ふりがな	コード	調査期間	調査原因
	所在地	市町村		
	福岡県筑紫郡那珂川町五ヶ山（ふくおかけんちくしぐんなかがわまちごかやま）	403059	2002.4 ～ 2007.8	福岡県営五ヶ山ダム建設
	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町松隈小川内（さがけんかんざきぐんよしのがりちょうまつくまおがわち）			

要約	福岡県営五ヶ山ダムは、昭和53～54年（1978～1979）の福岡都市圏の異常渇水を受けて、洪水調節、既得用水の安定供給、異常渇水時の緊急水補給等を担う多目的ダムとして計画された。そのダム建設に伴って影響を受ける地域は、福岡県那珂川町五ヶ山４集落と佐賀県吉野ヶ里町小川内集落の広い範囲に及び、計66世帯が移転していくこととなったため、埋蔵文化財以外の、自然・歴史・民俗・建造物・美術工芸の各部門に関する文化財調査を平成14年（2002）度から平成19年（2007）度まで実施した。本報告書はその記録である。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 7

福岡県営五ヶ山ダム関係文化財調査報告Ⅰ

五ヶ山・小川内

〔第１巻〕

福岡県文化財調査報告書　第215集

発 行 日　平成20(2008)年３月31日

発行機関　福岡県教育庁総務部文化財保護課
〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園７番７号

印　　刷　大野印刷株式会社
〒812-0004 福岡市博多区榎田２丁目２番65号